

源王は玉座を譲らない

青牛

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中学サッカー界最強のゴールキーパーと言われながら、世界へ挑むチームの選考試合にすら呼ばれなかった彼に生まれ変わった誰かが、その玉座を死守しようとする話。

書いていた前作のリメイク版です。

現在：脅威の侵略者編

柴猫侍様より頂きました、本作の表紙絵です。

目次

フットボールフロンティア編

源王は玉座を譲らない	1
源王はシュート練を拒まない	9
源王はサッカーを迷わない	17
源王はゴールを許さない	26
源王は失点を甘んじない	36
源王は炎を絶やさない	46
源王は仲間を疑わない	54
源王の守りは	65
源王は鍛練を惜しまない	73
源王は猛者達に揺るがない	80
源王は神を認めない	87
帝国は神に屈しない	95
鬼道は仲間を見捨てない	108
源王は誇りを裏切らない	119
鬼道のサッカーは終わらない	128
神は屈辱を忘れない	136
源王はボールに触れない	144
円堂は努力の否定を許さない	150
光は影を消しきれない	159
神は魔神を恐れない	166
円堂はイナズマ魂を失わない	174
神は勝負を諦めなかった	183
源王は賛辞を惜しまない	192

脅威の侵略者編

源王は北の吹雪を忘れない

199

源王は挑戦を躊躇わない

207

源王のシユートは決まらない

216

アツヤは雷門を信じない

225

敗北者は王者を忘れない

234

源王は再会を喜べない

243

源王は選択を選べない

251

源王の心は偽れない

259

吹雪士郎は雪崩を恐れない

268

源王は勝利の他に望まない

275

帝国の連携は淀みない

283

敗者は過去を越えられない

292

雷門は悪事を見逃さない

303

真・帝国は捨て身を躊躇わない

313

不動の非道は止まらない

322

狼の牙は防げない

332

手負いの獣は止まらない

340

決着は誰も喜べない

347

死闘の爪痕は浅くない

355

神は借りを残さない

364

源王は挫折に挫けない

371

少年は心を偽れない

378

エースの肩書は軽くない

386

アツヤは涙を流さない

394

焦りは成果をもたらさない	400
氷の亀裂は直らない	407
エースは窮地に遅れない	418
サッカーの熱は収まらない	431
王者は遅参を容認しない	442
源王の存在は薄らがない	454
闘志は闇で凍らない	464
氷の意地は折られない	475
新体制の先行きは暗くない	487
源王は離脱を認めない	496
雷門に頑張らない者はいない	507
帝国の威名は伊達ではない	514
鬼道のサッカーに嘘はない	522
奥義の極意は易くない	530
混沌の力は底知れない	541
王者は孤高とは限らない	551
激闘の行方はわからない	560

フットボールフロンティア編

源王は玉座を譲らない

物心が付いた頃には、世界への既視感があった。

——ボールを止める。

浮かぶのは全国最強のGKと称された男の姿^{しげん}。

——ゴールを守る。

そして、それを追い越していくイナズマのような男達。

——負けたくない。

そう思った時には、既に走り出していた。

「はあ……はあ……あんな化け物みたいな奴らと試合だなんて、もう堪えられない！ 勝てるわけがない！」

そう誰に言うでもなく叫び、ユニフォームを脱ぎ捨てて去っていく少年がいた。

彼の名は目金^{めがね} 欠流^{かける}。

フットボールフロンティア

F F 40連覇を成し遂げている王者帝国学園との部の存亡の懸かった練習試合に臨む雷門中サッカー部に、急遽加わったメンバーの一人であった。

あつたというのは、彼が今まさにその試合から逃亡したからだ。しかしそれを腰抜けと呼ぶのは些か酷だろう。

雷門中のサッカー部は元々部員が11人にも満たず、その部員達もキャプテンである円堂えんどう守まもるを除けば、皆つい最近まですっかりやる気をなくしてだらけきっていたのだ。

彼らは負ければ部が廃部になるという窮地で、燃える円堂にようやく感化されて練習に参加し始め、必死の勧誘による、円堂の昔馴染みの風丸かぜまるや少々尊大な態度であった目金等の助っ人達の加入によりなんとか試合に漕ぎ着けた。

——しかし、ようやく燃え上がってたった一週間、否、それにも満たない期間を熱心に練習したところでなんとかなるほど、帝国は甘い相手ではなかったのである。

彼らのサッカーは、洗練されていて、それでいて非道で凄惨だった。試合開始時、帝国はコイントスなしで雷門にボールを譲り、シュートを撃たせた。

帝国の選手達の程々に手加減した守りを順調に突破して、雷門の選手は「もしかしたらいけるかも」という希望を抱いていたが、それはすぐに砕け散ることになったのだ。

FWの染岡が放った会心のシュートは容易く止められ、雷門は動揺する暇もなく地獄を見ることになる。

まるで足が複数に増えたかのような勢いでボールを持つ選手に襲い掛かる「キラースライド」。

審判にわからないよう、わざと相手にトラップさせたボール越しに蹴り飛ばす「ジャツジスルー」。

そして、相手のゴールエリアを文字通りの死地と化す恐るべき必殺シュート「デスゾーン」。

最初に希望を与え、それを圧倒的な力で押し折り相手を念入りに磨り潰す。

雷門の選手達が帝国のサッカーになす術なく次々と倒れていく。そんな様をフィールドの中という至近距離で見せつけられて、元々甘い見積りで参加していた目金が逃げ出すのは無理からぬことだった

だろう。

現在はそれでも諦めず、ゴールの前に立ち続ける円堂に対して集中攻撃が行われていた。

もはやそれは点を取るためのシュートではない。

既に必殺技ですらないシュートにも反応できない円堂に、彼らは容赦なくシュートを叩きつける。

とうとう帝国の点が20に達した時、その男は現れた。

目金が脱ぎ捨てたユニフォームを纏い、フィールドに現れた男の名は豪炎寺ごうえんじ 修也しゅうや。

先年度のFFにて、帝国と決勝を争った木戸川清修中のエースストライカー。

彼こそが、帝国がわざわざ弱小であった雷門中に練習試合を申し込んだ目的である。

本来部員ですらない彼の乱入に揉めかけたが、帝国の承認により試合再開。

帝国がゴールへ襲い掛かろうとする中、豪炎寺は帝国のゴールへ真っ直ぐ向かって行った。

まだ短い時間しか見られていないが、それでもわかる円堂の熱い魂。

どんな時でも諦めなかったあの男ならば、必ず帝国のシュートを止め、自分にボールを託すと信じての行動。

「馬鹿な、必殺技だと!」

斯くして、円堂はその信頼に応え、デスゾーンを、神々しい巨大な光の手で止めて見せた。

それは紛れもなく必殺技。

つい先程まで、熱意はあれど間違いなく弱小校に相応の実力のキーパーだった男が、突如必殺技を使用し、帝国の必殺シュートを止めたのだ。

その驚愕を隠しきれない帝国の選手を置き去りに、円堂は走る豪炎寺へボールをパスする。

帝国は皆動揺から立ち直れていない。このままシュートを――否。

「ファイア——」

豪炎寺は、自分の代名詞たる必殺シュートの体勢に入りながら気づいた。

ただ一人、デスゾーンが止められたことに何ら動じていない男に。他の選手達の深緑のユニフォームとは違う、黄色のキーパーユニフォームを纏うその男は——

(源田……い。だが、撃つしかない！)

どんなに傷だらけになっても諦めず、デスゾーンからゴールを守りきった円堂アイツのためにも。

ただゴール前に立ち自分を見据えるその男へ、全霊のシュートを放つ。

「——トルネード！」

全力の回転から撃たれたそのボールは、軌道上に渦巻く炎を撒き散らしながらゴールへ向かう。

迎え撃つは、帝国が誇る正キーパー。

またの名を、キング・オブ・ゴールキーパー。

日本に数多い守護神達の中の王者と称される男、源田げんだ 幸次郎こうじろうは迫る炎のシュートを前にして、落ち着き払っていた。

しかし技を出す素振りは見せず、ただ、その場から何歩か前に出る。

「何ッ」

豪炎寺も予想外だった。あまりにも無防備だった。

だが、ファイアトルネードがゴールエリアに侵入した瞬間、彼は動いた。

ゴールへ飛び込もうとするボールに飛びかかり、素早く両手で挟み込む。試合開始直後に放たれた染岡のシュートも、その瞬発力から逃れられなかった。

しかし必殺技でもないキャッチでそれが止められるはずがない。豪炎寺はおろか帝国の者でもそんな思いが過ったが、守護神達の王の守りはまだ終わってはいない。

なんと彼は、ボールを手にしたまま、その場で足を軸に回転し始めたのである。

さながら、豪炎寺が“ファイアトルネード”を放つ回転のような勢いで。

遠心力でボールの炎が周囲に撒き散らされ、その場で炎の竜巻が巻き起こる。

皆、それを見つめるしかできず、その竜巻がゴール前から動く気配は一向になかった。

だが、やがて炎が収まり、回転も止まったその時。

完全に威力の殺されたボールは源田の両手に抱えられていた。

『信じられないことが起こりました！ 止めました！ 源田、豪炎寺の“ファイアトルネード”を、技も使わず止めましたー！ これがキング・オブ・ゴールキーパー！ 日本最強の守護神！』

「止めた……！」

「そんな、豪炎寺が……」

「——流石だな、“源王”」

帝国、雷門、観戦者達。誰もがその凄まじい攻防にざわつく中、帝国のキャプテン鬼道きどうは相も変わらぬその鉄壁の守りに称賛の言葉を呟く。

源田は、ざわめきが聞こえないかのように口を開いた。

「この程度か。炎のストライカー」

「くっ……」

「だがその目は悪くない」

挑発のような言葉に、豪炎寺が源田を見て歯噛みするが彼はそれから眼中にないように、ボールを放り投げた。

放られたボールは軽やかに飛んでいく。

——帝国のゴールの中へ。

今度は、ごく一部を除き、全ての者が声を失った。

圧倒的な守りを見せつけておいて、そのキーパーがまさかのオウンゴール。

『なっ、なんとーっ?!? 止めたボールを、源田まさかの自ゴールヘスローイン! 王、乱心か——と、ここで帝国より試合放棄の申し出! ゲームはここで終了となります!』

唯一実況がその驚愕を言語化する。流れるように鬼道が審判に棄権を宣言し、会場が落ち着くのを待たずに帝国はフィールドを去っていく。

「あれはどういうつもりだ、源田」

雷門が、帝国の試合放棄から廃部を免れたことを理解し、喜ぼうとしているなか、豪炎寺は仲間とともにバスへ戻ろうとする源田の背に声をかけた。

シュートが止められ、そのボールをわざわざ敵キーパーがゴールに放り込むことで得点となる。

ストライカーとしてこのうえない屈辱だった。

彼の守りを破れなかったのは自分の弱さ故。しかし、ここまでストライカーを馬鹿にするような行為は豪炎寺には看過できなかった。

だが、振り返った源田は豪炎寺の険しい声に眉一つ動かさずに答えた。

「餞別だ」

「なんだと?」

あのあまりにも度が過ぎた挑発にしか見えない行為が、餞別だという。

とても信じられないが、源田は豪炎寺がその言葉を呑み込むのを待たずに話し続ける。

「今まで出会ったストライカーは皆、俺がシュートを止めるとその膝を折ったが、お前には悔しがるだけの気概はあったようだから。俺から点を取ったとなれば、周りの目はいやでも雷門に向く。FFまでに練習試合も増えるだろう。だから——」

——強くなれ。そしてまた俺に挑んでこい」

「……」

源田の望みは、強くなった豪炎寺との再戦。

とある理由からサッカーをやめた豪炎寺は、何も返せなかったが、源田はそれだけ言うとは今度こそバスへ戻っていった。

「よっしゃあああ!! 豪炎寺、シユートは惜しかったけど、とにかくサッカー部は廃部にならない! お前のお蔭だ!」

取り残されていた豪炎寺を、感極まった様子の子の円堂を筆頭に雷門サッカー部が寄り集まってもみくちやにした。

バスに乗り込む源田は、最後に視線をはしゃぐ円堂にやってから、その中へ消えていった。

源田幸次郎。

小学生時代から少年サッカーでGKとしての圧倒的な実力を示す。

その力は彼がキーパーを務めた時、公式・非公式問わずそのチームは試合中無失点であったほど。

この実力が評価され、王者帝国に勧誘を受け受諾。一年でありながら正ゴールキーパーとなる。

出場した前年度のFFでも、全試合無失点という前代未聞の記録を叩き出した。

その規格外の防御力はストライカーの心を折り、キーパー達からも畏怖と羨望の眼差しを向けられている。

彼こそがゴールキーパー達の王。キング・オブ・ゴールキーパー。だが、そんな彼は、決して自惚れてなどいない。

なぜなら、彼はその玉座がいずれ奪われることを知っているから。円堂守。彼を筆頭として、綺羅星のように優れたキーパー達が現

れ、自分を押し退けて世界へ羽ばたいていくことを、彼は知っていた。
(負けられるものか)

源田幸次郎。否、源田幸次郎に生まれ変わった一人のサッカープレイヤーは、頂点に立っている今も、その足を止めることはない。
来る強敵達きたに、その玉座を易々と譲る気など、微塵もありはしないのだ。

源王はシュート練を拒まない

中学サッカー最強を決める大会フットボールフロンティア。その地区予選が、ついに始まった。

雷門中は帝国との練習試合を乗り越え、その後噂を聞きつけやって来た尾刈斗中おかるととの練習試合を制しFFへの出場を認められたのである。

最初の辛うじて廃部を免れた事実上の大敗を経た彼らは尾刈斗戦で実力をつけ、豪炎寺も正式に加入したことで本格的に始動。雷門中サッカー部は意気軒昂であった。

そんな彼らは今は一回戦の相手、去年は予選決勝まで進み帝国と争った実力者野生中戦のせに向けて特訓を重ねていた。

空中戦を得意とするという野生中に対抗するため、壁山かべやま 堀吾郎へいごろうと豪炎寺は円堂の祖父が遺した秘伝書から見つけた必殺技「イナズマ落とし」を習得しようとしていたのである。

「う、あーっ！ やっぱ怖いっス！」

……壁山の高所恐怖症が発覚し、習得は難航していたが。

豪炎寺達が新技習得に努めている頃、円堂はもう一人のFWである染岡そめおか 竜吾りゅうごにシュートを撃ってもらっていた。

「いくぞ円堂！」

「ああ！ 来い！」

「いくぜ——ドラゴンクラッシュ！」

「ゴッドハンド！」

染岡が竜の追隨する強烈なシュートを放ち、円堂がそれを迎え撃つ。

それだけならGKとFWの練習としては普通に思えるが、なんと円堂、背中にタイヤを背負っていたのである。

背負っているだけで体力が削られていくなか、さらに強力な必殺シュートを、必殺技で受け止める。

凄まじい負荷がかかっているはずだ。染岡はタイヤこそしていないが、無限にも思える回数円堂から「もう一回！」を食らっていてそ

ろそろ苦しくなってきた。

だからこそ、その自分より圧倒的にキツイはずの円堂を心配して染岡は声をかける。

「円堂……今日はこの辺にしないか。試合前に身体壊しちゃ元も子もねえって言ったのはお前だろ?」

「いや、染岡、頼む。もう一回!」

「何だってそんなに焦ってたんだ。お前にはお前のサッカーがある。そう言ってくれたのもお前だ。それを忘れちゃいねえだろうな?」

「そんなことないさ。ただ……帝国のキーパー、凄くつてな。あの日のことが頭から離れないんだよ。もつともつと頑張らなきゃ、あいつには追い付けないって思っちゃってさ」

「……」

円堂が気恥ずかしそうに鼻の頭を指で擦るのに対し、染岡もあの日のことを思い出した。

帝国との部の存続をかけた練習試合。自分達は彼らのサッカーに圧倒され、何も出来なかった。

豪炎寺が現れたことで奴らは退いていったが、その豪炎寺のシュートも帝国のGKの前には通用していなかった。

あの獅子のような男を前にすることを想像すると、豪炎寺でさえ破れなかった守りをお前が——?

と、そんなネガティブな考えが頭を過るのは否定できない。

尤も、同じポジションで実力差をより明確に感じているはずの円堂は、挫けるどころか、追い付いてやると燃えているのだが。

「お前な……仕方ねえ、あと一回だけだぞ?!」

「ありがとう染岡!」

「本当にこれで終わりだからな! ドラゴン——」

そんな円堂の姿に、なんだか心が軽くなった気がして、染岡はついもう一本を承諾してしまうのだ。

その頃帝国も練習に没頭していた。帝国学園はシード枠なので、他校が一回戦をやっている間も試合はない。

その上、2回戦で帝国と当たり得る2校は、既に情報収集も完了し、相手にならないと太鼓判を押されていた。

故に彼らが今特訓をする際の仮想敵は、専ら雷門中である。

何せ、これまで帝国を勝利に導いてきた必殺シュート「デスゾーン」が止められたのだ。

相手の反撃のシュートこそ守護神源田が難なく止めてみせたが、そもそも帝国が決めるつもりでシュートを撃って防がれることなどあつてはならない。

そんな思いもあり、鬼道は佐久間・寺門とともに円堂の「ゴッドハンド」突破のための新技の開発。

他の選手達も各々、戦術やシュートに限らない必殺技に更なる磨きをかけることに取り組んでいた。

「うおー！ー！ 百烈ショット！」

「そらっ！」

「ツインブースト！」

そしてシュート練習。帝国の面々が一齐にシュートを、それも一つのゴールに向かって放つのは、試合ではあり得ない光景ながら壮観である。

一つ一つはまだ並みのキーパーでも死力を尽くせば防ぐ可能性があるものの、そんなものが同時に襲ってくればキーパーは成す術なくボールとともにゴールに突き刺さることになるだろう。

——彼でなければ。

「パワーシールド！」

源田が拳を大地へ振り下ろせば、橙色の衝撃波の壁がゴールを囲うように吹き上がる。

その壁は、向かってきたシュートの群れを呆気なく弾き飛ばした。

「あー……やっぱ源田さんにシュート練の相手されると自信砕け散っちゃうなあ」

あらぬ方向へ跳ね返っていくボール達を見送りながら、シュートを撃った者の一人——成神なるかみ 健也けんやはため息混じりにそう呟いた。

実際、試合というこれらのシュートが一つずつしか襲ってこないシチュエーションの場合、源田が「パワーシールド」を発動するに値するのは今撃ったシュートの中では「ツインブースト」ぐらいのものだ。

「百烈ショット」程度では先の「ファイアトルネード」よりも容易く受け止められるだろう。

彼の「最強の技」は、強すぎて現状「デスゾーン」でも小揺るぎもない代物で、シュート練で使っているのはストライカーの成長がわからず練習にならない、ということと封印され、試合でも出す程の相手がいないので長らく使われていない。

彼の最下級の必殺技である「パワーシールド」でも「デスゾーン」でようやく拮抗し、10回撃って2本も入れば幸運という堅牢さだ。

そもそもこの一斉シュートは、シュート練というより源田の「パワーシールド」の強度チェックに近い。

彼が帝国に来たばかりの頃は、「デスゾーン」か「百烈ショット」を5本同時に撃ち込むかで「パワーシールド」の次を引き出せていたのだが、今ではデスゾーンでもそうそう破ることができなくなっている。

なぜここまで源田の守りが硬いのかと言えば、才能はもちろんだが、彼のたゆまぬ努力にある。

サッカーのスキルを磨いていくのは当然、そして彼は体づくりを重視していた。

必殺技は強力だ。だが、技は何度も放てば負担になるのを一例に、威力や使用可能回数は使い手の実力に左右される。

強靱な肉体を持つ者と、貧弱な肉体を持つ者。両者が同じ技を使えば差は歴然だ。

その考えの下、彼は朝のランニングは欠かさないし、筋トレも行って体を鍛え上げている。

その上、源田は小学生時代、地元サッカークラブに入っていたのだが、裕福な生まれだったのを最大限利用し、無理を言って遠征を盛んにさせてもらっていたのだ。

全国トップを誇る超名門校帝国学園に通える程の学力を身に付けられる環境と、それを作り出せる財力があつた家族への唯一の我が儘である。

あまりそういったことをしない息子の見せた凄まじいサッカーへの情熱に折れた両親は、サッカークラブ関係者等へのコネその他をふんだんに使い、全国各地への遠征を可能としてくれた。

それもこれも、強力なチームとぶつかって実力を磨くため。

東西南北、各地の強豪チームやストライカーの情報を調べ、その地方へ遠征し練習試合をしたり大会へ突撃したりと、源田は全国の幼い猛者達とぶつかる中で必殺技を習得、小学生ながらに無敵のGKへ登り詰めたのだ。

彼の全国巡りは帝国でも有名で、そのストイックさも相まって、元々和気藹々とするタイプではない帝国学園のサッカー部も二の足を踏む近寄りがたさを醸し出していた。

「気を落とすな成神。俺が強くなっていれば、お前も当然強くなっている。成長は確かだ」

「そんなこと言われても、その成長が目に見えないとキツイッスよ源田さん。曇りない目で言わないで下さい」

落ち込んだような言葉でおどけてみせた成神にまつすぐな言葉を送る源田。

先輩であろうと生意気な態度を崩さず、よく辺見を煽ったりしている成神だが、源田にはあまりそういった面を見せない。

それは彼の物腰が別段丁寧になっている、というわけでもないが。鬼道と並ぶ圧倒的な実力者、それへの敬意はあるがそれはへりくだるということではない。

あくまでも自然体で接する成神の姿勢は、それに対応する源田の姿

から彼への固い印象を解いていって、源田の今の立ち位置に繋がっている。

「ま、だから源田は源田なんだろう。お前はまだまだだだな成神」

しおらしげにする成神を辺見へんみ 渡わたるが半笑いで茶化す。

「うっさいですよデコ見先輩。自分もシユート弾かれたくせに」

「デコ見ー！」

「おいこら成神イ！ 洞面！ 少しは先輩敬え！ 鬼道や源田だけでなく！」

辺見のからかいを敏感に察知し、からかい返す成神。それに便乗する洞面どうめん 秀一郎しゅういちろう。キレる辺見。

そんな光景を周りの者はニヤニヤしながら見守る。そんな仲間達が源田の誇りだった。

本当の源田幸次郎はいない。自分は本当ならいい方がいいのかもしれない。そう考えたこともあった。

しかしそんな考えは、自分はサッカーが好きで、彼らとともにサッカーをしたいという思いの前には容易く吹き飛んでしまったものだ。

「源田、少しいいか」

物思いに耽っていると、鬼道に声をかけられた。

彼が今、源田に話しかけてくるということは、用件におおよその予想はつく。

「必殺技、もうできたのか？」

「ああ。元があった以上、習得自体はそう難しくない。だがまだ出来ただけでな。お前の胸を借りたい。頼めるか」

「ああ」

源田が拒む訳はなく、2人は残りの2人の待つ体育館に向かっていった。

「——さて、行くぞ源田」

集まった鬼道・佐久間・寺門の3人が源田の待ち構えるゴールを見据える。

「お前が相手なら加減はいらねえ。全力でぶち込むぜ！」

「ああ。たまには破らないとFW俺達の立つ瀬がないからな」

「もちろんだ。3人とも遠慮はいらないぞ」

源田を前にして息巻く、寺門と佐久間。彼らは鳴り響いた指笛を合図に走り出した。

指笛を吹いた鬼道の足下に現れる5匹のペンギン。

「皇帝ペンギン——」

蹴り上げたボールと共に飛び上がったペンギン達は、不規則な軌道を描きながら飛行する。

ゴールへ向かうそのボールに、両脇から走り込んだ寺門と佐久間がさらにキックを加えた。

「——2号!!」

ペンギンを伴ってゴールへ迫るボールを、源田が迎え撃つ。

「パワーシールド！」

右拳を打ち付けた地面から吹き出す衝撃波の壁。

それにペンギンの嘴が突き刺さった。

「むう……！」

暫しの拮抗の末、嘴の突き刺さっていた5箇所から罅ひびが広がっていき、パワーシールドは砕け散る。

源田の横をすり抜けて、ボールはネットに飛び込んでいった。

「よっしゃあー！」

「やったな寺門！」

「凄いな皆、もう新必殺技をモノにしたのか。パワーシールドが正面から破られたのは久しぶりだ」

「源田の『パワーシールド』が破れるなら、地区この段階予選でこれを止められるキーパーは他校には居まい」

会心のシュートを放った喜びを噛み締める佐久間達に、源田が称賛の言葉を掛ける。

歩み寄りながら口を開いた鬼道が彼らに続きを話す。

「源田、次の技を頼む。今日はこのまま今の限界を確認する」

「もちろんだ、何本でも付き合うぞ！」

「3本くらいだ。お前の言う『何本でも』は本当に何本でも撃たされるからな……」

「2号が負担を抑えた改良型と言っても、撃ちまくったら俺達3人も持たないぞ」

「そうか？」

『体力バカのお前と一緒にするな！』

「そうか……」

口々に言いながら、また位置に着いていく3人。

新必殺技によるシユート練習は彼らの宣言通り3本で終わることになった。

源王はサッカーを迷わない

雷門が順調にトーナメントを勝ち抜いているなか、帝国は悠々と準決勝を制していた。

「今度こそ！ ファントムシユート改！」

「無駄だ。パワーシールド！」

正確には、制そうとしている所だが。

対戦相手は以前雷門に練習試合を申し込み、敗北を喫した尾刈斗おかると中。

彼らは敗北から猛特訓を重ねてこのFFに臨み、こうして予選準決勝まで勝ち進んできていた。

しかしここで最強の敵、絶対王者帝国学園が立ちはだかる。

帝国の攻撃は止められず、反撃は帝国の守備に防がれる。

運良くゴールまで行きシユートを撃つても、待っているのは

キング・オブ・ゴールキーパー
K O G。

必殺の戦術“ゴーストロック”も、雷門戦の情報が割れていてすぐに破られてしまった。

そして今も、源田の“パワーシールド”はシユートを容赦なく弾き飛ばし、再び帝国が攻めに回る。

「うおお！ あくりよう！」

「くそが、こんな小手先の技で！」

だが、ここで尾刈斗のDFしかばね 屍ふし 藤美が意地を見せた。

咲山さきやま 修二しゅうじの足に禍々しい亡霊の手が絡み付き、身動きが取れなくなったその隙を逃さずボールを奪う。

咲山が忌々しげに声をあげるが、尾刈斗は、取ったそのボールを全力で繋いだ。

そしてボールは、一年生にしてキャプテンを努めるFWゆうこく 幽谷 博之ひろゆきの下へ。

「このまま負けてたまるか……！」

もはや試合時間は残り僅か。つけられた点差を見れば、逆転も既に機を逸しているのは誰の目からも明らかだ。

だが、それでも諦めたくない。

尾刈斗は雷門に雪辱を果たし、今年こそは王者帝国の無敗伝説も打ち破ってやると皆息巻いていた。

帝国の猛攻を受け、今にも倒れそうな者も居るが、その目の火はまだ一つも消えていない。

先輩達の、チームメイトの思いを背負うキャプテンとして、せめて王者に一矢報いて見せる。

源田を相手に得点するのは途方もない難題に思えたが、考えならある。

何度もその必殺技でシュートを防がれる内に、幽谷は「パワーシールド」の弱点に気付いていた。

「食らえ……！ 真フアントムシュートオ！」

「意気は買おう。だが、このゴールは譲らん！」

——パワーシールド

もう飽きるほど見せられた鉄壁の防御。そこへ期せずして進化した渾身のシュートが炸裂する。

激突したシュートは、壁に激しくぶつかり、拮抗していた。

しかし程なくして弾かれてしまうだろう僅かな均衡。その均衡が終わらぬうちに、なんと幽谷がゴールへ迫っていたのである。

「なんだと!？」

また源田が弾くだろうと見守っていた帝国の万丈ばんじょう 一道かずみちが声をあげる。幽谷はシュートを撃ちながら、そのままボールを追って接近していたのだ。

そして、今にも弾かれようとしていたボールに、もう一度蹴りを叩き込む。

（「パワーシールド」の弱点は、その薄さだ……！ 近くから撃った方が、拮抗する時間もほんの少し長かった。この至近距離からもう一度蹴れば、押し込める！）

幽谷のその読みは正しい。「パワーシールド」は衝撃波の壁。D

F達に見られる壁を建てる必殺技に比べ、この壁は非常に薄かった。ついにその壁がひび割れ、砕け散り、ボールがゴールへ飛び込む。ついに、帝国が誇るキング・オブ・ゴールキーパーの無失点伝説を破る。

「やった——」

「——見事だ」

それは、源田のパンチングで阻止された。

“パワーシールド”が破られこそしたが、とにかく押し込むために走ってきた幽谷の後押しはただのシュートだったので、源田の反射神経と瞬発力がボールを捉えられる範疇だったのだ。

弾かれたボールが空しく宙を舞う。力なく落ちたそれを、帝国のDF陣が拾い、前線に送り込む。

「そん、な……そんなのありかよ、源王……！」

幽谷が、必死に戻りながら、溢してしまう弱音。

あまりにも規格外だった。キーパーが必殺技を破られて、なおも動いて防いでくるなど。

「幽谷博之。お前の読みは正しかった。素晴らしいシュートだった」

源田は尾刈斗の選手達が雄叫びを上げて、迫る帝国選手を迎え撃とうとする様を眺めながら、届かない称賛を送る。

「惜しむらくは、シュートを撃てるのが一人だったことか」

尾刈斗中の主力メンバーの内、幽谷はただ一人のFWだった。

無論、MFにも必殺シュートを持つ者は居ただろう。しかし彼らはDFとともに帝国の猛攻にも対応して、さらに放たれたシュートを追いかけてもう一度撃ち込むなどという離れ業までやる体力は残っていないかったのだ。

もしこれが、必殺技を持つ二人が連携して行っていたならば、結果はわからなかった。

あるいは、あれ程の気迫を持つプレイヤーが相手ならば自分一人の

無敗伝説の返上程度惜しくはなかった。

源田がそう内心で述懐する間に、尾刈斗に文字通りの止めが刺されようとしていた。

「終わりだ。ここまで戦意が折れなかったお前達に敬意を表し、この一撃で終わらせてやる。」

——デスゾーン開始」

キャプテンにして帝国の司令塔。天才ゲームメーカーたる鬼道の無慈悲な指令で、佐久間達が飛び上がる。

三人が力場を作り上げて浮き上がり、エネルギーをボールに込め、同時に踏みつけるように蹴り飛ばす。

「デスゾーン！」

「まだまだ！ まだ終わってたまるか！ ゆがむ空間改！」

——キラーブレード13!!」

尾刈斗のGK鉈なた十三じゅうぞうが絶対の決意とともに必殺技を連続発動。帝国の攻撃を迎え撃つ。

「うおおおおおッ！ ぐ、あ——」

しかし及ばない。

雷門中でこそ不覚を取ったが、帝国伝統の必殺シユート”デスゾーン”はそう簡単に止められる技ではない。

奮起も空しくシユートを殺す13の刃は砕け散り、鉈は腹に突っ込んできたボールとともにゴールネットに突き刺さった。

同時にホイッスルが鳴り響く。

結果は10-0。王者帝国が圧倒的な力の差を見せつける形となった。

同じ頃、雷門中も奇抜な戦法を駆使して襲い掛かってきたオタク集団秋葉名戸しゅうようめいこを準決勝で下し、決勝進出。

帝国学園と雷門中は決勝戦にて激突することが決定的になった。

いよいよ雷門中との再戦が現実のものとなり、帝国学園ではいつにもまして練習に熱が入っていた。

雷門はもはや練習試合の時のような弱小ではないと彼らの実力を認め、王者として全力で叩き潰すために力を限界まで磨き上げる。

「皇帝ペンギン——」

「——2号!!」

「……? フルパワーシールド!」

放たれたペンギンを従えるシュートが、巨大な衝撃波の壁に呆気なく弾かれた。

「おー!」

「源田さんスゴい!」

「ありがたいな洞面。後で『分身フェイント』……分身のコツを教えて欲しいんだが構わないか?」

「へっ? もちろん俺で良ければお手伝いしますよー!」

「ああ、ありがとう。さて……」

駆け寄って来た洞面の対応を済ませ、源田は今のシュートを撃った面々の方へ歩いていく。

以前受けた時は『パワーシールド』を破る威力を見せた『皇帝ペンギン2号』だというのに、今放たれたそれにはキレがなかった。

「どうしたんだ? 前より威力が落ちていたが……」

「いや、俺だ」

受けたシュートの手応えに違和感を覚えた源田が、その疑問を言葉にしたのを遮るように鬼道が口を開いた。

「すまない2人共。俺の上げるボールがいつもの軌道よりズレていたんだ」

「それはいいが……鬼道、大丈夫か? 最近、気もそぞろって感じ多いしな」

「体調悪かったりするんですか、鬼道さん? 無理しちやダメですよ」

？」

「ククク…そうですね、我らが帝国のキャプテンが決勝戦を前に体調を崩しては一大事ですからねえ……」

「大丈夫だ、ちよつと集中できていなかったただけだ。少し、顔を洗ってくる」

心配する言葉にそう返しながら、鬼道は体育館の出入口に向かった。

その背を見送りながら、帝国の面々は近頃のらしくないキャプテンの姿に首を傾げた。

「どうしちまったんだろうな、鬼道さん。やっぱり女……」

「そんな浮わついた理由か？ 鬼道さんだぞ？ あんまり適当言うなよ辺見」

「だって、誰か知らないけど女子の名前を呟いてたってよ。なあ洞面？」

「うん、鬼道さん女の子の名前呟いてた！」

「そうか……いやでも……」

「お前ら下世話だぞ、さつさと練習に戻れ！」

「はーい」

「うるさいなあ寺門は」

「ククク…さあて、練習練習つと」

この場から居なくなつた鬼道を話題にして学生らしい馬鹿話で盛り上がりかけた彼らだが、寺門の怒号で渋々練習に戻っていく。

そんな中で源田は、鬼道が出ていった出入口を見つめていた。

「まったくあいつらは……しかし、俺も気にはなるな。体調が悪かったりしないといいんだが……そう思わないか源田。……源田？」

寺門が傍に立っていた筈の源田を見れば、もうそこに彼の姿はなかった。

「……」

その頃、鬼道は洗面所で何度も水を顔に浴びせ、拭っていたが一向に迷いは洗い流せていなかった。

脳裏に浮かぶのは雷門に送り込んでいたスパイ土門どもん 飛鳥あすかの報告によってもたらされた、帝国の総帥影山かげやま 零治れいじのあまりにも非道な妨害工作の内容。

唯一喜ぶべきは、影山の手先となっていた雷門の教師冬海ふゆかい 卓たくの、下手をすれば命に関わる企みが事前に阻止されたことだが、この事を知って影山に抗議した際、影山は涼しい顔で、勝つためには当然のことと言つてのけたのだ。

鬼道には鬼道で、勝たなければならない理由がある。

それは、サツカープレイヤーとしてのプライド。

それは、共に競い、高めあつてきた仲間達との絆。

それは、今は共に居られない妹への絶えない想い。

そのために雷門中を、あの熱い男達を貶める所業など、とても認められない。

だがしかし、負けるわけにもいかない。

(総帥の仰ることは、正しいのか——?)

親を失った自分を見出だし、一流の選手として鍛えてくれた、サツカーにおける父とも言うべき師の勝利への非情な執着。

無数の想いに板挟みにされ、時折彼の言葉を肯定してしまいそうになる。

鏡越しに、ゴータルの奥の自分の瞳を見つめる。

「鬼道」

「……源田か」

また思考の堂々巡りに陥ってしまいそうになった時、彼が最も信頼する守護神の声で現実を引き戻された。

「最近のお前の様子を見ると、ただの不調では片付けられないと思つてな。見に来てしまった」

「……考え事をしていただけだ」

そう言つて戻ろうとしたが、源田は洗面所の壁に寄りかかったまま

動く気配を見せない。

ただこちらを見据えていた。その曇り一つない眼差しに、どこか居心地の悪さを感じる。

「鬼道。何を悩んでいる？」

「どうやら、このまま誤魔化されてはくれないらしい。」

この男はチーム内では穏やかな気質をしている方だが、こういう隠し事には鋭い時がある。

実際、延々と一人で考え込んでいても答えは出ないと賢く判断して、鬼道はその複雑な心中をなるべく端的に話して打ち明けることにした。

「そうか。総帥が……」

源田とて帝国の一員。誰がそうだとかはともかく、情報収集のために動くスパイなどがあること自体は知っている。

しかし影山の所業には、やはり彼も言葉が詰まってしまいうらしい。「総帥の勝利への執着は度が過ぎてている。だが、俺自身負けるわけにはいかない。勝つために取れる手は全て打つというあの方の考えは、正しいんだろうか？」

いつもの確な指示でフィールドの敵味方を操る司令塔が初めて見える、弱々しい姿だった。

源田がこの世界について覚えていることはそう多くない。

この世界を描いた作品があったということ。その中でこの身体が一人の選手として存在し、そして次元が変わっていくサッカーについていくことができなかつたということの2つのみだ。

世代最強のGKと呼ばれながら、その肩書きが空虚なものに変わっていくことに感じた強い無念。

魂に焼き付いたその想いこそが、彼がサッカーをする原動力だった。

今、世代最強と持て囃されても、その想いが僅かにでも揺らいだり、変わったりしたことはない。

故に、源田が言えることは決まっていた。

「鬼道。サッカーは一つじゃあない。俺がサッカーをやっているのが

意地のようなものであるように、お前がサッカーをやっているのは、きつとまた違う理由があるんだろう？ お前が総帥のサッカーを『違う』と感じたのなら、迷う必要なんかない。皆違う理由でサッカーをやっているんだから、やり方だって同じである筈がないんだよ」

「……フツ。それで思想が違うからといって皆が我を突き通せばチームが成り立たないぞ？」

「そこを擦り合わせるのが、キャプテンと監督の仕事なんだろう。まあ、その2人の方針が違うんじゃないや仕方がない。

俺はお前についていくさ」

「……ああ、そうか。そんなに簡単なことだったか」

「簡単だとも。サッカーは簡単だ。いつだって難しくするのは俺達なんだ」

「ああ、そうだな。……源田、皆を呼んできてくれないか？」

「わかった」

「——決めたぞ。俺達は、俺達のサッカーをしよう」

帝国の司令塔には、もう迷いなどなかった。

源王はゴールを許さない

FF地区予選決勝戦。

無敗の王者帝国学園は自校を会場にして、挑戦者である雷門中を迎え入れた。

鬼道が影山の罫を探ろうとしてスタジアムを駆け回っている中、源田は雷門中の控え室に向かっていた。

「俺達が勝つたら、鬼道達は……」

その向かう道筋で、何か思い詰めた様子の円堂目当ての男に出会ったのだが。

「随分と情けない顔だな、円堂守」

「え？ お前は……源田!？」

円堂は、雷門において対帝国最大の障害と目されていた男が突然目の前にやって来たことに驚きをまるで隠せなかった。

「なんでこんなところに……」

「お前達雷門中の控え室を目指していたんだ。まあお前がいたからその必要はなくなったが」

「俺？ 何か用か？」

「別に大したことじゃない。個人的な宣戦布告だ。円堂、お前へのな」

圧倒的格上と思っている相手から、まさか名指しで宣戦布告をされることなどあるのか。

先程影山帝国の監督から鬼道兄妹の事情を聞かされてから立て続けに情報が流され混乱する円堂。

その円堂の疑問に思う様子は尤もだ。

以前の練習試合において彼らに因縁ができるようなやりとりはなかった。

どちらかと言えばそれは豪炎寺達ストライカーに向けられるものではないかとも思う。

源田もそれはわかっている。だからこれは『個人的な宣戦布告』なのだ。

自分の知っている王を玉座から引きずり下ろした挑戦者への。

「実際。今キーパーとして優れているのは、俺だろう」

「自慢しに来たのか？」

「違う」

話の腰を折るなど視線を強めて、戸惑っている円堂を黙らせ話を続ける。

「ただ、俺はお前が俺を超えうる男だと思っっている。だから、お前には負けないと宣言しに来た。それだけだ。どうもお前は別のことに意識が向いているようだが……舐めるなよ」

「べ、別に舐めてなんて——」

「試合以外のことに気を取られたまま相手ができるほど帝国俺達は甘くないぞ。もし試合中もそのままなら、俺はお前を軽蔑する。勝ち以外のことを考えていられる勝負は、勝負ではない」

「勝ちだけを、考える……」

「何に悩んでいるのか知らないが、それがサッカーに関係のないことなら置いておけ。何度でも言うぞ。お前と直接対決するわけではないが、俺はお前と戦うつもりでいる。」

——俺は、お前に負けない」

源田が円堂に向けた対抗心とその言葉は、じんわりと円堂に染み込んでいった。

鬼道兄妹のことは、試合の後に、置いておく。

これからやる試合は、鬼道兄妹だけのものではないのだ。

自分。雷門の皆。そして帝国の皆。一人一人の夢が懸かっている。

フィールドに立つ一員として勝負に全力で臨まないことは、その全員に対する非礼だ。

「わかった。なんでお前が、そんなに俺のことを警戒してるのかはわからない。でも、俺も負けない！」

——勝つのは雷門俺達だ！」

円堂は、そう啖呵を切って源田に向き直った。

源田はそれに笑って、来た道に戻っていった。

帝国VS雷門の試合は、開始直後に炸裂した必殺技がレツドカード鉄骨落としを取られて影山が退場させられるというアクシデントが起こり、帝国が責任を感じて棄権する、それを雷門が取り下げさせて試合を望むなどの紆余曲折を挟み、本来の予定からズレが出たが、改めて決勝戦の火蓋が切られようとしていた。

『FF地区予選決勝戦！ 今年も帝国が優勝か、あるいは雷門が大番狂わせを引き起こすのか！ 雷門はかつての練習試合で帝国に圧倒され、そのリベンジに燃えており気合い十分！ 今、キックオフです！』

かつての練習試合と同じく、試合は雷門ボールからスタートした。以前と違うのは、初めから帝国の守備が本気であること、そして雷門の実力が練習試合とは比べ物にならないほど高まっていることだ。

「疾風ダツシュ！ 染岡！」

風丸かぜまる 一郎太いちろうたがその風のような速さで見事帝国の守備に切り込み、ボールをFWの染岡へ渡す。

「前のようにはいかねえぞ……！ いくぜ豪炎寺！」
「ああ！」

帝国の守備が迫る前に、染岡がシュート体勢に入った。声をかけられた豪炎寺は意図を察して走り続ける。

「ドラゴンクラッシュ！」

蒼い竜がボールに宿り、咆哮しながらゴールへ向かった。豪炎寺はそのシュートにもう一度シュートを加えるべく走る。

（尾刈斗が試合で最後に教えてくれた、〃パワーシールド〃の突破法……！ 利用しない手はない）

「雷門。お前達なら尾刈斗あの試合で、〃パワーシールド〃を破られたことも知っているだろう。だから、出し惜しみはしない」

源田は、そう言いながら両手に力を込める。

「あの構えは……『パワーシールド』じゃない!？」

『パワーシールド』は気を込めた右手を地面に叩きつけることで衝撃波を発生させる必殺技だ。

源田の動きは、それと明らかに違った。

「いや、『パワーシールド』さ。ただし——」

「——通常の3倍だ」

雷門が源田の構えが『パワーシールド』と違うことに気づき、訝しむ。

その疑問に帝国の参謀役佐久間 次郎じろうが口を開き、鬼道が繋いだ。ゴルキーパーの王者は、言葉に応えるようにその腕を振り下ろした。

「トリプルパワーシールド！」

なんと、ゴールを囲う壁が3重になって現れたのである。

源田は『パワーシールド』の弱点など元々知っていた。

だが薄さが問題ならば、数を増やして重ねることで厚くすればいい。

その考えで開発した上位互換の技。

これが彼の『パワーシールド』に出した答えだった。

『なんと——！ 源田、『パワーシールド』を3枚も展開！ 我々が見ていた彼の實力はまだまだ氷山の一角に過ぎなかつたのです！

キング・オブ・ゴルキーパー、底知れません!』

実況が興奮しきった声をあげる。ただでさえKOGの絶対防御の代名詞として名高い壁が、3重にもなって立ちほだかるのだ。

だが、まだシユートが止まったわけではない。どのみち撃ち抜けば同じことだと、豪炎寺は構わず跳び上がる。

「ドラゴントルネード！」

炎の後押しで赤く染まった竜は、行く手を阻んでいた壁の1枚目を確かに粉碎した。

しかし2枚目の壁に阻まれ、シュートはその壁にひびを入れるに留まり弾かれてしまう。

「これでも通じないか……!」

「まだ終わってねえぞ豪炎寺、なんとか突破するしかねえ!」

「ああ、わかつている」

FWの2人は自分を奮い立たせるが、雷門のダブルエースの連携が止められた。その動揺は小さくない。

帝国は僅かな隙を見逃さずに攻め込んでいく。そしてボールを持った鬼道の指笛の音が、フィールドに鳴り響いた。

「早速あれを撃つのか」

その必殺技の練習に付き合った源田が呟いた。

鬼道の足下から5匹のペンギンが現れる。ペンギンは鬼道が蹴り出したボールとともに飛び上がっていく。

「皇帝ペンギン——」

「——2号!」

そのボールを両脇から佐久間と寺門が息を合わせて蹴り、さらに威力を上乗せする。

使用者への負担が大きすぎたことから禁断の技として封印されていた「皇帝ペンギン1号」を3人で放つことで負担を分散させて抑える形に改良した必殺技「皇帝ペンギン2号」。

「止めてみせる! ゴッドハンド!」

その威力のほどは推して知るべし。

「うわあ!」

『おおつと! 円堂、帝国の披露した必殺技「皇帝ペンギン2号」の前に敗れる——! 帝国先制点! 圧倒的な実力を見せつけました!』

「ごめん皆!」

「気にするな円堂。取られたなら取り返すだけだ。絶対に源田^{アイツ}を抜いてみせる」

かつて「デスゾーン」を止めた「ゴッドハンド」は、突き刺さるペ
ンギンの前に破られた。

反撃して点を取り返すべく試合再開と同時に駆ける雷門の選手達。
だが、帝国の守りは源田だけではない。

「シユートはさせねえぞ！ アースクエイク！」

「ぐああ！」

帝国でも体格のいいDF大野おおの 伝助でんすけがその巨体で大地を揺るがし、
ドリブルを止めてボールを奪う。

「よくやった。だいでん！」

「寺門！」

「任せろ。成神イ！」

「わかりましたよつと！」

大野は奪ったボールをエースストライカー寺門じもん 大貴だいきに渡す。

ボールを持った寺門は、後輩を呼びながらそれを打ち上げた。

二人が飛び上がり、空中からそのシユートを放つ。

「二百烈シヨット!!」

元々「百烈シヨット」が、ボールにも留まらぬ速さの蹴りを連
続で浴びせて、連続蹴りの威力の集約されたボールを放つシユート
だ。

それにもう一人が加われば、単純に考えて威力は2倍。その速さも
凄まじい。

「うおお！ 熱血パンチ改！」

「ゴッドハンド」では間に合わない。そう悟って技を切り替えて
迎撃する円堂。

進化したその熱いサッカー魂を体現する拳は、しばしの拮抗の後、
ボールを弾くことに成功した。

「くそつ、やるじゃねえか」

「ナイスだ円堂！」

寺門が悔しげにしながら円堂を誉めるのを他所に、弾いたボールを
風丸が拾いストライカーに届けるべく蹴り出す。

陸上部あがりの彼の俊足はサッカーでも遺憾なく発揮される。

「行かせるかよ！ サイクロン！」

「くっ……頼む、マックス！ ——うわあ！」

「風丸！ くっ、半田！」

しかし襲い掛かるDF万丈の「サイクロン」にかわしきれないと悟った風丸は、吹き飛ばされる前にマックスのあだ名で呼ぶMF松野まつの空介くうすけにボールを託し、松野もまた懸命にボールを繋ぐ。

「壁山！」

「は、はいッス！」

上がってくるボールを前線から見ながら、豪炎寺は壁山を呼び寄せた。

「ドラゴントルネード」が通じなかったからと言って万策尽きたわけではない。

「行くぞ……！ イナズマ落とし！」

豪炎寺は壁山を踏み台に「ファイアトルネード」より高く跳び上がり、ゴールの遥か上空からオーバーヘッドを撃ち込む。

落下する重力も助けとなって、まさに落雷のような高い威力を引き出す。これが円堂大介の残した必殺シュートだ。

「俺を破るには足りんぞー！ トリプルパワーシールド！」

それでも源田の守りは揺るがない。

だが、弾かれたボールは運良く染岡が確保した。

「このまま攻め続ける……！ ドラゴンクラッシュ！」

これもまた防がれる。

だが源田とて体力が無限ではない。必殺技を出せば消耗するはず。

いかに堅牢であれ、「パワーシールド」は発動の予備動作が大振り
で隙も大きい。

さらには、防いだボールを弾くため、それを確保すれば連続で攻撃
もできる。

故に今はひたすらシュートを撃ち込み、休む間を与えずに攻め立て
ることで隙を作り出すことを狙い、雷門は間髪いれない猛攻を仕掛け
ていた。

「ファイアトルネード！」

「グレネードショット！」

「ローリンググキック！」

「この程度で、このゴールを許せるものか！ トリプルパワーシールド！」

『雷門、シュートを連発——！ しかし決まらない！ 厚すぎる！ キング・オブ・ゴールキーパーの壁は、あまりにも厚すぎる——！（成程な）』

源田は、この雷門の作戦に気付いた。

これだけシュートが撃てたのは、弾かれたボールを取るため、最低限の守備を残して雷門の選手達の殆どがフィールドの帝国ゴール側まで上がってきていたからだ。

確かに何度も攻撃すれば、雷門の攻撃力ならば、源田相手でも隙を作れるかもしれない。

では、帝国も対抗して守備を増やすか？

（その必要はないな）

鬼道も雷門の動きを見抜きながら、そう冷静に判断した。

雷門は決して侮っていい相手ではないが、ここは自分達の守護神を信じるべき場面だと。

「ああ、任せろ」

仲間達の言葉のいらぬ信頼を感じて、源田はさらなる力をその身に漲らせる。

（このままだ弾き続けるのは得策ではないな。ならば……）

「ファイアトルネード！」

「……あれをやってみるか」

『おおっと、源田動かない!? 一体どういう……あ、ああ!?』

向かい来る炎のシュートに対し、源田は仁王立ちで動かない。

代わりに、残る2人の源田が動いた。

「なんだ!？」

「キーパーが増えてるツス!？」

「分身……洞面から何か教わっていたのはそういうことか」

ゴール前に立つ源田も含めて3人になった源田。

中央の両脇に動いた2人の源田が腰を落とし、両腕を上げる。

それに連動するように、ゴール前から巨大な岩の壁が無数に生え、並び立った。

「無限の壁！」

「ファイアトルネード」はその壁を破れずに力を失い、既に1人に戻った源田の掌の上に落ちたのである。

「おい源田、あれは千羽山せんばやまの……つうかあれ確か3人で……」

大野が去年全国大会で戦ったことを思い出しながら問いかける。

千羽山中。鉄壁の防御で定評のあるチームだ。

チーム一丸となった守りの堅牢さは、去年当たった帝国も破るのに少々骨を折った。

たった今披露された「無限の壁」はそんな彼らの代名詞と言うべき必殺技なのである。

「去年は苦勞させられたからな、研究も兼ねて覚えてみたんだ。手こずったが分身を教えて貰ってからは案外簡単だったぞ？」

「……全国で千羽山連中と当たらんことを祈つとくぜ」

色々言いたいことはあるが長話をしてる時間はないので、話をそう切り上げた大野がボールを受け取り走り出す。

だがそれを、誰かにパスが回る前に染岡が素早く奪い取った。

「——舐めんなよ！ GKのキングだかトングだか知らねえが、まだ俺達の攻撃は終わっちゃいねえ！」

——ドラゴンクラッシュ！」

源田の余裕の態度にいきり立った染岡が、今度こそ破ってみせると再び竜を放つ。

「雷門お前達を舐めたことなどないが……いいだろう」

それに向かい合うキング・オブ・ゴールキーパーの取った構えは、今度こそ「パワーシールド」のそれではなかった。

シュートの進路に立ち塞がり、その胸の前で両手を獣の口のように上下に構える。

それは、本来「皇帝ペンギン1号」と同じく帝国で封印されていた技。

「ならば見せてやる。これが俺の——ビーストフアングだ！」

咆哮する黒い野獣の姿が、源田に重なる。

獣の顎あぎとと化したその両手が向かい来る「ドラゴンクラッシュ」に喰らいついた。

誰もが、竜が獣に喰い殺される姿を幻視した。

そしてボールは、練習試合のあの日のように源田の両手に収まっていたのである。

同時にホイッスルが鳴る。

試合のスコアは1-0。雷門は前半中、源田の守りを突破することは叶わなかった。

源王は失点を甘んじない

「流石だ源田。だが、お前に『トリプルパワーシールド』に加え、『ビーストフアング』まで使わせるとはな。やはり雷門やっちもやる」
「ハーフタイム中の帝国ベンチで、鬼道はどこか楽しそうにそう語った。」

源田が前半最後に見せた必殺技『ビーストフアング』。

それは絶大な威力と引き換えにして、使い手の体に選手生命を脅かすほどの負担をかける禁断の技として『皇帝ペンギン1号』と並び帝国で封印されていた必殺技である。

『ビーストフアング』は円堂の『ゴッドハンド』などのようなキーパーが必殺技を使う際にその肉体から放たれる『気』を無理やり体内に留めて、強制的に活性化させた肉体でシュートを迎撃する技。

獣の姿が見えるのは、それでも体に収まりきらなかった気が現れたもの。

だが、本来放出される気を体内に留めるのは全開にした水道の蛇口を塞ぐに等しい行いだ。それが人体で起こればどうなるかは火を見るより明らか。

使い手は使った瞬間こそ絶大な力に酔いしれるが、切れた瞬間にその無茶な肉体活性の反動を味わうことになる。

源田はその強靱な肉体で、本来襲い来る反動をないことにしてしまつたまさに規格外なのであるが。

佐久間が後半の戦略を鬼道に尋ねる。

「鬼道さん、後半はどうします？…このままで行きますか？」

「後半では皆いつもより前に出てくれ。奴らが攻めあぐねている内にもう一点もぎ取る。守りはFW2人を警戒しておくが、基本的に攻めを意識しろ。ゴールは源田に預けて、このまま押し切るぞ！」

「応ッ！」

「頼めるな？ 源田」

「ああ。どんなシュートだろうと通しはしない。帝国GKの名にかけ

て！」

ベンチに腰かける守護神に確認を取れば、彼は質実剛健とした姿でその心意気を表明する。

天才ゲームメーカー鬼道 有人の目には、ただ勝利が映っていた。

「くっそオ！ どうすれば、奴の防御を突き崩せる……」

「あんなにシュートを撃ち込んだのに、びくともしませんでしたね……」

「源田幸次郎。流石に中学サッカー界最強のGKと呼ばれるだけのことはあるようですね」

雷門ベンチでは、前半中悉くシュートを止められた染岡や穴戸が共通の思いを吐き出し、目金が冷静に相手の実力を再確認していた。

だが源田がどれほど堅牢な守りでも、既に「皇帝ペンギン2号」によって得点された雷門が勝つためにはなんとしても彼から点をもぎ取らねばならない。

「初めに想定していた突破法が通用しなかった以上、奴の隙を衝くしかないな」

「なんとか点を取らないとこのままじゃ負けちゃうツスよ」

「もちろん、点を取ってもさらに取られたら同じよ。守れるの、円堂くん？」

初め、雷門は尾刈斗中が帝国戦で見せた意地から得た攻略法でまず一点を奪うつもりだった。

しかし源田が想像以上の守りを見せてその攻撃が防がれ、どころかカウンターで点を奪われてしまった。

その守りを破るには少しでも手数が欲しいが、帝国の猛攻は、円堂がゴールから離れなければならぬ。「イナズマー1号」も間接的に封じてきている。

勝利は、今からあの防御を最低でも2度突破しなければ手に入らない。もし再び点を取られればさらに遠のく。

マネージャーである雷門夏未はその現実を指摘する。

気落ちしているように見えた円堂は、そのどこか試すような言葉を受けて完全復活した。

「ああ！ 守る。これ以上やらせない。だから皆頼む、俺は絶対シュートを止めるから、あいつから点を取ってきてくれ！」

円堂がそう言うて頼み込む。サッカーに対しどこまでも直向きな彼だから、仲間達はここまでついてきたのだ。

それを拒む者などここにはいない。いる筈がない。

「言われるまでもねえ。それが俺達の仕事だ。なあ豪炎寺？」

「ああ。俺達がなんとしても源田の守りを突破してみせる」

「それに、ゴールを守るのはお前だけじゃないぞ？ 俺達だっている」

「はいッス！ キャプテンだけに背負わせたりしないッスよ！」

「おうでやんす！」

「そうだ！」

「お前がいつつも言ってるじゃないか。ここからが勝負だつて！」

染岡が。豪炎寺が。風丸が。壁山が。雷門の皆が。円堂の思いに応えるべく奮起した。

サッカー部があわや廃部という絶体絶命の危機から始まり、円堂が紡いできた絆は、強力なシュートを受けて傷ついていた身も心も癒し、体の芯から力を沸き上がらせる。

それらを見届けた監督響木 正剛は口を開く。

「帝国の守りは堅い。だが、勝つためには点を取らなければならん。臆せず挑め！」

「はい！」

雷門もまた、この決戦で栄光を勝ち取るための決意を新たにフィールドへ戻っていく。

（帝国の人達も、目が違う。信じてるんだ。こんなに綺麗なサッカーをやるなんて……お兄ちゃんは、昔のままなの？ 私達、昔に戻れるの？）

「円堂くん達、きつと勝てるよね。夏末さん」

「ええ。キング・オブ・ゴールキーパー。彼ならそれくらい、軽く超えて貰わないと雷門の名に傷がつくわ」

見送るマネージャー達も、各々の思いを抱きながら、彼らの勝利を信じていた。

どんな逆境でも諦めない、そのイナズマ魂を。

『さあ、ただ今開始されました後半戦！ 帝国、大胆に攻め込みます！
これを凌がねば後がないぞ雷門ー!?』

帝国はボールをゴールへ向かって運んでいく。

もし再び点を取られれば、2点差となる。あちらには源田の守りがあるなかで、そのようなことになれば絶望的だ。

雷門は皆必死の思いで攻撃を止めようとする。

「行かせませんよ、鬼道さん！」

「いい仲間を見つけたようだな、土門。だが勝利は俺達が貰うぞ！」

——イリユージョンボール

ボールを奪いに挑んだ土門だが、鬼道の無数に増えたボールに惑わされ、突破されてしまう。

鬼道が突破したのを見計らってペナルティエリアへ上がったきた佐久間とアイコンタクトを交わす。

「行くぞ円堂オ！」

「来い！」

「ツインブースト!!」

鬼道が起点となり打ち上げたボールを、跳び上がった佐久間がヘディングシュートで地上に戻し、それを鬼道が再び蹴り飛ばした。

2重のブーストがかかったシュートが雷門ゴールへ迫る。

「止める！ 爆裂パンチ！」

円堂はそのシュートを、怒涛のパンチングでなんとか弾き返す。

弾いたボールは、壁山が寺門との奪い合いを制しなんとか確保した。

「うおおーっ！ 少林くん！」

壁山がそれを同じ1年生の少林寺しょうりんじ 歩あゆむへ渡す。

少林は懸命にドリブルしながら、ストライカー達に託すために敵陣

に向かう。

「ククク…行かせませんよ」

「アチャー！ 竜巻旋風！」

帝国で最も謎に包まれたDF五条ごじょう 勝まいるがそれを阻まんと立ちほだかるが、少林寺は止まらない。

彼がその場で跳び上がり、空中で回転させたボールが着地すると同時に竜巻が起こり、五条に襲い掛かる。

「クツ、ヘアッ！」

「うげ、風丸先輩！」

“竜巻旋風”を受けながらも止めようと迫る五条におのの慄きながら、少林寺は風丸へパスした。

「ああ。疾風ダツシユ！」

「またか！」

「速え！」

ボールを受け取った風丸は、向かってくる帝国選手達を自慢の速さで抜き去った。

ついに帝国ゴールのペナルティエリアが近づく。

「来たぞ……ッ!？」

風丸が豪炎寺にパスをしようとした時、彼は帝国に厳しくマークされていた。

“ドラゴントルネード”や“イナズマ落とし”、あるいは“イナズマ1号”。それらの強力な必殺シュートに関わる彼を警戒してのとだ。

「くっ……」

「風丸ウー！ こっちだ！」

「染岡！」

豪炎寺はマークをすぐに振り切れそうになく、このままでは抜いた守備にも追い付かれてしまう。

その時もう一人の雷門のストライカー、染岡が、豪炎寺よりは甘かったマークを振り切つて風丸を呼んだ。

風丸も迷わずそれに応じる。

「今度こそぶち破ってやるぜ、ドラゴンクラッシュ！」

そして必殺シュートを放った。

「通さん。パワーシールド！」

「くそお……！」

だが、無情にも源田の守りに呆気なく阻まれる。

自分の不甲斐なさに歯噛みする染岡だが、試合はそれを待つてはくれない。

再び帝国の攻撃だ。

「分身フェイント！」

「増えたでやんす!？」

洞面が分身で栗松を惑わし突破する。彼が小柄ですばしこいのも相まって、栗松にも捉えられなかった。

すぐに後を追おうとするが、洞面はその前にボールを回す。

受け取ったのは、鬼道だ。

「これで2点目だ」

既に佐久間と寺門はスタンバイしている。鬼道の指笛でペンギンが姿を現した。

「またあれが来るでやんす！」

「皇帝ペンギン——」

「2号!!」

前半で円堂を相手に得点した必殺技。宙を舞うペンギンとともにシュートが円堂へ襲い掛かる。

「絶対止める……!」 ゴツドハンド！」

もう一度、神の手とペンギンが激突する。

しかしその凄まじい圧に、円堂は少しずつ押し込まれてしまう。

——このままでは破られる。

その考えが頭を過った。負ける訳にはいかない。自分を信じてくれている皆のためにも。

だが、押し勝てない。

(どうすればいいんだ——)

『俺は、お前に負けない』
守りたい。

円堂のその心がイメージさせたのは、何度もつい先程まで見せつけられた鉄壁の守護神だった。

思えば、純粹な対抗心をぶつけられたのは初めてだった。

どちらかと言えば彼は過剰なそれは宥める側であったし、これまで戦ってきた学校は一樣に雷門イレブンを見下し、対等な対戦相手とすら見なしていなかった。

試合でわかりあえたものの、御影専農等は初対面の際、害虫とまで言い切ったのだからひどいものだ。

翻って、彼はどうだったろう。

初めて帝国の面々と出会い、戦った練習試合。彼らにしてみれば、確かに自分達はどうしようもない弱者であった筈だ。

その強者が、自分を見て、叩き潰さねばならない敵だと認識して襲ってくる。

自分を圧倒的に凌ぐ王が一切目を逸らさず、自分の守りを睨むように見続けている。

それは円堂の心に、今までの燃え上がる炎とは別の、電流イナズマを走らせた。

アイツに負けたくない。一瞬だけ、その思いが心を占める。

「——うおおおお！俺だって、俺だって……！負けるもんかア——！」

彼は、強力な必殺技を両手を使って発動していた。

守ることに必死だった円堂は直感で、それを真似てみた。

「何……!?!」

シユートを見守っていた鬼道が声を洩らす。

ペンギンが押し返され始めているのだ。

円堂は突き出していた右手に加え、さらに左手を突き出して輝きを増した「ゴッドハンド」に。

「絶対に、絶対的に、止めるんだアー！」

そしてその魂の叫びとともに、円堂は「皇帝ペンギン2号」に打ち勝った。

ボールがその手の中に収まり、負けたペンギンが爆散して消えていく。

「馬鹿な……！」

彼を打ち破るために開発した必殺技が敗北したことに驚愕する鬼道達。

逆に、それを見た雷門の選手達の調子は、最高潮に上がっていた。

「行くぞ、皆……！」

「応……！」

円堂が止めたボールは、かつてない速さで繋がれて守備をもものともせず帝国ゴールへ接近した。

「止める……！」

走りながら鬼道が叫ぶ。

たちまち、ストライカーの豪炎寺にマークがついた。

そのマークはやはり厳しく、ボールを受け取れそうにない。

「くっ……頼む、染岡……！」

攻撃を決めるのは今しかない。

そんな確信を持ちながら、それに参加できない自分の不甲斐なさを感じながら叫ぶ。

豪炎寺は愛する妹の夕香ゆうかが胸を張れる兄であるためにサッカーへかける思いを、その叫びとともに、もう一人のエースストライカー染岡に託した。

「絶対に決めてやる……！」

ボールを受け取った染岡だが、豪炎寺に比べ遅れているだけで、彼にもDFが迫っていた。

彼らが来る前に、彼は一人である源田を突破するシュートを放たね

ばならない。

(これは、絶対に決めなくちゃならないシュートだ。帝国のあのシュートを防いでくれた円堂、そのボールを託してくれた皆のために——！)

だというのに、ボールが異様に重く感じた。もしこちらの最高潮に精神が高揚した状況のこれを止められれば、雷門はこの試合での得点が絶望的となるだろう。

真正正銘の一人だけで撃つシュートは、こんなにも恐ろしいのか。豪炎寺が来てから、共にシュートを撃ちながら、初めは彼に張り合つてすらいたのに、ずつと心の底では頼ってしまっていたらしい。

染岡はボールを上へ蹴り上げる。普段の彼の必殺シュート“ドラゴンクラッシュ”とは違う動きだ。

だが、これが正しいのだという不思議な確信が彼にはあった。

(逆だ。俺はずつと一人なんかじゃなかった。いつだってあいつらが背中を押してくれた！ このシュートには、皆の力がある！)

何かが変わっていく感覚がある。現れた蒼い竜も、傍目から見れば小さな翼があったり、その体が少し大きかったりと所々違和感があった。しかしそんなことはどうでもいい。このシュートがゴールに決まるのならば。

「うおおおおお！ ワイバーン——」

未熟ながら飛び立った翼竜が気を纏わせたボールへ、振りかぶった右足を振り抜く。

「——クラアアアツシュ!!」

雄叫びとともに放たれたそのシュートは、それまでとは比べものにならない速さでゴールへ向かった。

(速い……！ あれでは源田といえど、技のタメの時間がない！)

あまりにも速いそれは、源田を以てしても万全な守りを張る猶予を与えない。

「ゴールは割らせん！ この名^{KOG}にかけて！」

“ビーストフアング”は間に合わない。 “トリプルパワーシール

ド」も同じく、3枚も壁を貼る力を溜める余裕はない。

「ドラゴンクラッシュ」の速度に慣れきったこのタイミングで、完全に意表を突かれた。

それでも、迎撃が間に合う時間ギリギリまで力を溜めて、そのシュートを迎え撃つ。

「おおお！ パワーシールドオ!!」

衝撃波の壁と未熟な翼竜が激突する。

「いっけえええええええええ!!」

「うおおおおオオオオオオ!!」

雷門の選手が、監督が、マネージャーが、叫んだ。源田も負けじと叫ぶ。

永遠にも思える拮抗の中、竜が彼らの叫びに応えるように吼えたその時、全てが動いた。

壁は砕け散り、ボールがゴールネットを揺らす。

「なん……だと……」

『はっ……入りましたアー！ 染岡、得点！ ついに源田、サッカー人生初の失点！ キング・オブ・ゴールキーパーの無失点伝説が、今まさに破られましたアアア！ 同点です。雷門、帝国に並んだアー！』

誰もが言葉を失う中、実況だけが今起こった現実を説明していた。

源王は炎を絶やささない

「やったな染岡あ！」

「間違いなくヒーローでやんす！」

「凄いです染岡さん！」

「おう！ 見たかお前ら！」

試合開始からずっとシュートを鎧袖一触に蹴散らしていた源田からついに得点したとあつて、雷門は喜びに沸いていた。

円堂が自分のことのように喜び、1年生の栗松^{くりまつ}、鉄平^{てつぺい}、穴戸^{ししど}、佐吉^{さきち}がシュートを決めてみせた染岡に尊敬の眼差しを送る。

「流石だな、染岡」

「豪炎寺。どうだよ、俺のシュート。お前を超えちまったかもな？」

「フツ。そうだな、ならば追いつかなければな」

「あなたたちー！ まだ試合は終わってないわよ!? 早く戻りなさい！」

「「「「あっ」「」」」」

興奮冷めやらぬ円堂達に夏未がベンチから一喝する。

さっさと自陣に戻らないと試合が再開できずロスタイムが生まれる。審判が厳しいと、場合によってはイエローカードを取られることもあるので雷門選手達は急いで守備に向かった。

若きイナズマイレブンも、才色兼備の女子マネージャーが落とすカミナリにはたじたじである。

「ツア、ア、ア、アアア！」

雷門がまだ得点に盛り上がっていた頃。

片膝をついていた源田が、言葉にできない感情を込めた拳を、地面に叩きつけた。

衝撃波は出ない。己の中に渦巻く激情も。

無失点伝説の返上、それはいい。もともと、自分がGKとしての試

練に備えて鍛えていた結果勝手についてきた称号だ。肝心のこの戦いで失うのなら、それは自分の無力故。

だが、あのストライカー 岡のシュートの力を見誤った。

仲間達にゴールは任せろと言いながら、守り切ることができなかった。

その不甲斐なさを憎む炎に、身の内から焼き焦がされそうになる。帝国は試合を再開するためボールを取りに来たのだが、源田の鬼気迫る様子に少し躊躇う。

今まで一度も破られたことのない守りが突破されてついに得点を許してしまった彼の心情は推し測れば、かける言葉が見つからない。

「源田、ボールを渡せ」

ただ一人、歩み寄った鬼道以外は。

「……ああ。すまない」

我に返った源田は静かに、ゴールに転がっていたボールを拾って鬼道に渡した。

鬼道はそれを受け取ってセンターサークルに向かって歩き、立ち止まる。

「1点取られたなら、1点取り返せばいい。それだけの簡単なことだ。

——次は頼むぞ」

振り返らず、それだけ言って走り出す。

帝国の者達もそれに倣い反撃のため走り出す。

「ああッ！」

彼らの背に、咆哮に近い返事がぶつかってきた。

今まで、どんな時でも後ろに彼が立っているというのは、帝国の面々にいつも安心を与えてきた。

だがその分、凄まじい実力を持ちつつも共に技を開発したり、肩を並べてプレーしてきた鬼道に比べて彼との間にどこか一線を引いてしまっていたのかもしれない。

(源田も、あんなに叫んだりするんだな)

佐久間が想起したのは、先程の染岡と源田の攻防。

源田はこれまで、不動の存在感とでもいうべき雰囲気纏っていた。凧いだ水面のように、何にも揺らがない。

気のいい奴だというのは練習やそれ以外の交流でわかっていたが、しかしいつも、彼が別のどこかを見ているような気がしていたのだ。

それが今は、シュートを決められて荒れ狂い、水を消し飛ばして燃え盛る豪火が吹き出している。

まるで凍りついていた何かが溶けだしたようだった。

初めて見たそんな源田の姿に、なんだか柄にもなく体に火照ってくる。

「俺達のサッカーをしたくはないか？」

雷門中との決勝戦が決まった頃、彼らは集められて鬼道にこう言われた。

影山の、全てを操ろうとする糸を振り切って、自分達で戦おう。

普通に考えればそういう意味だろうが、佐久間は「俺達のサッカー」がなんなのか、本当にわかった気がした。

「来るぞ円堂」

「ああ。あいつら、きつと今までで一番手強いぞ！」

それからの帝国と雷門の攻防は熾烈を極めた。

円堂と豪炎寺の見立て通り、彼らはこれまでで最も激しい攻撃を仕掛けてきた。

ボールを巡って彼らの体と体、闘志と闘志がぶつかり合う。

「通さないッス！」

「ちいっ……しっこいなお前……！」

ドリブルで迫る成神に向かって壁山が猛進した。

帝国仕込みの多彩な技術と独特なリズムのステップで壁山を抜き去ろうとするが、その巨体故になかなか振りきれない。

「へっ、ジグザグスパーク！」

「うわあ!?! シビビビ……」

ジグザグとした奇妙なステップを踏んでいた成神が、軌跡に乗るような電撃を壁山へ放った。

そうして痺れて動けなくなった壁山の脇を悠々と抜いていく。

「辺見先輩！」

「おう！… いくぜ、フリーズショット！」

ボールを受け取った辺見が、冷気を纏ったシュートを繰り出す。

進路を凍らせながら迫るそれを円堂は迎え撃つ。

「ゴッドハンド……！… 何っ!?!」

自身の最大の防御を出した円堂だが、ボールと衝突しようとした瞬間、突然踏ん張りが利かなくなった。

「フリーズショット」は冷気を放ちながら進むシュート。ボールが近づいて足下が凍りつき、滑って円堂の体勢が崩れたのだ。

半端な当たり方をしてしまつて逸れたボールの軌道は、このままではゴールに入ってしまう。

マネージャー達が悲鳴を上げかけた。

「ぐうっ！」

「土門！」

そのギリギリのピンチを、咄嗟に割り込んだ土門がボールを顔で受けることで凌いだ。

跳ね上がったボールはゴールを飛び越えていき、試合が止まった。

円堂達が倒れた土門に駆け寄る。

「土門、大丈夫か!?! 血が……」

「こんなの、なんてことない。円堂、俺も雷門イレブンに、なれたかな……」

「なに言ってるんだ、お前はとっくに仲間だ！」

「……そっか……」

負傷した土門に代わり、影野かげの 仁じんがフィールドへ入る。

「キャプテン。俺、土門の分も頑張るよ……」

「おう、頼む！」

ここしばらくベンチに居た影野が、この大舞台に出られた喜びで静かに気炎を吐く。

帝国のコーナーキックで試合再開。

辺見が蹴ったボールは、両者のせめぎあいの末に咲山が確保した。

「オラア！」

「うおお！」

そのまま放ったシュートだが、これは円堂が反応した。

受け止められたボールをすぐに雷門が運んでいく。

敵陣に切り込もうとする少林寺へ、*「静かなる狂犬」*の異名を取る万丈が狙いを定めた。

「くらえ、サイクロン！」

「負けるもんか！ 竜巻旋風！」

少林寺へ万丈が風を纏った蹴りを放てば、彼も対抗して竜巻を巻き起こした。

渦巻く風が2つ。それに煽られたボールがフィールドの逆サイドへ飛んでいく。

「オラア！ 寺門！」

それを大野が、巨体を生かした体使いで半田を押し退けて奪い取り、寺門へ渡す。

「源田あんなの見て、決めずにいられるか……！ 佐久間！」

「ああ！」

寺門がボールを打ち上げると、跳び上がった佐久間がヘディングで地上に戻す。

「ツインブースト」は何も鬼道と佐久間だけの専売特許ではない。

「ツインブースト!!」

既にブーストのかかったボールへさらに、長い足をしならせた蹴りを浴びせて発射する。

「爆裂。パンチ！」

「ちくしょうが！」

だがこれは円堂が危なげなく防いでみせた。

止めたボールで今度こそ点を決めるため、雷門が走る。

「寄越せえ！ 勝つのは——」

「俺達だあ！ 染岡！」

ボールを受け取った半田^{はんだ} 真一^{しんいち}が、今度は大野とぶつかり合いながらも耐えきって、染岡へパスを回す。

「ワイバーンクラッシュ！」

先程源田から得点を奪った翼竜が再び羽ばたく。

「同じ技が2度通じると思うなア！ トリプルパワーシールド！」

今度は源田も正確にシュートを読んで対応してきた。

展開された3重の壁に突撃した翼竜は壁を2枚破るも、3枚目の突破は叶わず弾かれる。

「くそっ！ 決まらねえか！」

『染岡、ッワイバーンクラッシュ』を放つもットリプルパワーシールドに防がれるー！ 先程対処しきれなかった攻撃にもう対応した源田！ GKの王者は未だ健在！ 帝国が反撃に回るぞー！』

「俺が止めるー！」

「へっ、上等！」

カウンターに出る帝国に風丸が息巻いて立ち向かう。

それを前にする咲山が、マスクの下で凶暴に笑いながらボールを蹴った。

「ダツシユアクセル！」

「なにっ!？」

急加速した咲山が、追いきれなかった風丸を抜き去っていった。

「ハッハア！ 甘えな」

「まだ俺がいる……」

「……ん？ うおっ!？」

走る咲山の、すぐ近くに影野が現れた。思わず咲山が声をあげる。別段、影野が素早かった訳ではなく、ここまで近づいてきて初めて存在に気づいただけであるが。

自分の影の薄さに悩んでいる影野は、殊更それを意識させる咲山の反応への私怨を若干混ぜながらディフェンスを仕掛ける。

「コイルターン……!」

「なんだと!?!」

影野は咲山の周囲を高速で旋回し、発生させた突風で振り回してバランスが崩れた所を見計らいボールを奪う。

「頼む、豪炎寺……!」

奪ったそれを影野は豪炎寺へ繋げる。

「行かせねえ!」

ボールを持った彼を止めるべく大野がタックルをかける。

だがそれに止められる豪炎寺ではない。

「通してもらうぞ。ヒートタックル!」

「ぬああ!」

炎を撒き散らす突進で逆に大野を吹き飛ばしてゴールへ迫っていく。

「来るがいい! もう点は渡さんぞ!」

源田も豪炎寺のシュートに備えて力を溜める。

(染岡は、強くなったぞ。このままでいいのか? 豪炎寺修也)

豪炎寺は、自分に託されたボールを見ながら、自分自身に向けて問う。

このまま「ファイアトルネード」を撃っただけで破れる程、源田の守りは甘くない。この試合で嫌になるほど味わっていることだ。

それを相手に点を取るほどに強くなった染岡が、皆が、こんな自分をエースと呼び、シュートを決めると信じてくれている。

ならばそれに応えなければ、ストライカーも夕香のお兄ちゃんも名乗れはしない。

(夕香。お兄ちゃんは絶対に、「勝った」とお前に言いに行くぞ!)

高まる情熱が吹き出したかのように、足に留まらず、飛び上がる豪炎寺の全身が炎に包まれる。

最高点に到達して彼の周囲に散った火の粉は、人型を成しているように見えた。

「爆熱ストーム!」

何かの咆哮らしきものを響かせながら、灼熱のシュートはゴールを襲う。

しかし、思いを背負っているのは彼のみならず。

「渡さんと、言った！ フルパワー——」

源田もまた、新たに決意と共に、最も強大な衝撃波の壁を名の通りの全力全開で放つ。

掲げて力を溜めた両手を、腰まで下ろして重ね、左手の力を移した右拳を飛び上がって地面に叩きつけた。

「——シールド！」

先程使用していた「トリプルパワーシールド」でさえ及びもつかない圧迫感を伴って現れた壁は、ゴールエリアを覆うどころかペナルティエリアを半分に分断してしまうほどの規模と厚さだ。

ボールが激突し、その強大な壁に罅を入れる。

「ぬ、おおおお！」

だが源田が雄叫びを上げると、出来たその罅の奥からさらに衝撃波が吹き出した。

長かった拮抗の末にボールは弾き返される。

『豪炎寺のさらに燃え上がった炎のシユートをも止める源田！ 先の得点は幸運で終わってしまうのか雷門中!?!』

染岡がボールを確保してもう一度撃とうとしたその時、後半終了のホイッスルが鳴り響いた。

『ここで後半終了——！ 同点のため延長戦に突入します！ 既に全国大会の決勝戦かと思うほどの熱量と激しさを持った戦いとなっておりますが、勝利の女神は一体どちらに微笑むのか——!?!』

スコアが1—1の状況。帝国と雷門の激闘は、延長戦にもつれ込んだ。

源王は仲間を疑わない

延長戦が決まり、帝国と雷門は水分補給と休息を手早く行う。

「皆！ 勝つぞ、優勝するのは俺達だ！」

「応！」

「豪炎寺。次のシュートは……」

「ああ。俺もそう考えてた」

「土門くん、もう大丈夫？」

「ああ、ありがとう秋。血はもう止まったよ」

「源田。絶対に俺達が円堂から点をもぎ取ってみせる。ゴールを任せるぞ」

「俺の方こそ頼む。ゴールは、なんとしても守ってみせるからな」

「フツ。お前が『頼む』か。ああ、ゴールで見ている。お前が居るならば、俺達は決めさえすれば勝ちなのだからな」

「だが、円堂の守りも堅いぞ鬼道。皇帝ペンギン2号でも確実とは言えん」

「そこは考えがある。と言っても、ゲームメーカーとしては落第の、賭けに近いものだが」

「鬼道さんで落第なら誰も正解なんて出せませんよ！ とにかく、何をすればいいんですか？」

「なに、それ自体は単純なことだ——」

双方疲れがあれど試合への思いは冷めず、その意気は天を衝く勢いだ。

延長戦は帝国からのキックオフ。

「行くぞ雷門、決着をつけてやる！」

帝国はサイドを使い、雷門の守備陣へ深く切り込んでいく。

当然、雷門の守りも対応するが激しい攻防となった。

ボールを奪うべく向かう豪炎寺と、保持しようとする咲山が体をぶつけ合う。

洞面が小柄さを生かした素早く捉え辛いボール運びで翻弄するが、風丸も追い縋る。

帝国はその洗練されたサッカー技術を披露しながら、じわりじわりとゴールへ近づいていた。

雷門もそれを押し返そうとして簡単には攻め込ませない。

だが、ある時試合が動く。

それまで、パス回しで着実にゴールへ迫っていた帝国が、突然ボールと共に下がっていったのだ。

雷門が妙に思いながらも追おうとするが、それより速く、先程から最低限しか触らずにセンターサークルのそばに陣取っていた鬼道にボールが渡る。

ボールを受け取った鬼道が、雷門のゴールを見据える。

「行くぞ皆！」

鬼道が叫んで、指笛を鳴らす。佐久間、寺門がそれに応えて駆け出した。

『帝国、いきなり攻撃！これは皇帝ペンギン2号かア!?』

実況が叫ぶ。

ペンギンも現れた以上、これから放たれるのは、皇帝ペンギン2号

だ。間違っではないない。

だが正しくもない。

「なんだ……!?!」

「帝国が……」

「一斉に動いてるぞ！」

そう、佐久間と寺門だけではない。守備に残っているメンバー以外の、今雷門の陣地へ攻め込んでいる全ての選手がどこかを指して走っていた。

ただパスを促したり、守備を惑わすための動きではない。明確な目的地を目指して動いている。

これまでとあまりに違い過ぎる動きに、雷門の守備陣はどうすればいいのか、何が最善か判断しきれない。

「洞面！ 一歩前！ 辺見！ 二歩出過ぎだ！ 成神はそこでもいい

！」

ボールを鬼道が蹴った時、満を持してペンギンが飛び出した。

「佐久間！ 寺門！」

ペンギンを伴うシュート。それでも雷門のゴールを脅かすが、円堂相手に確実に点を取るには不足だ。

両脇から佐久間と寺門が足を合わせる。

（源田は守り続けてるぞ。俺達が今決めないで——）

（いつ決めるんだ！）

踏ん張っている仲間の、その献身に勝利を以て報いたい。

その思いで、2人はボールを思い切り上へ打ち上げた。

「どこにシュートを……」

「いや、あいつらまさか！」

影野が訝しむ中、染岡が一つの考えに思い至る。

何せ、彼はその経験が雷門でも特に豊富だ。

「——今だ！」

鬼道が喉が張り裂けんばかりに叫ぶ。

その時、先程移動していた3人が飛び上がった。

「必殺技の合体？」

「考えたこともなかったな……」

鬼道が提案したのは帝国の必殺技 “皇帝ペンギン2号” と “デスゾーン” の合体による攻撃だ。

帝国の必殺技というのは理論立てられて開発され、気の遠くなるような練習で個人が無駄を削ぎ落とし、研ぎ澄ます技術と呼ぶべきもので、一つ一つがそれ自体で完結している。

独立したそれらを組み合わせるといふ考えは、これまでの帝国ではなかっただろう。

「と言うか、聞いたいてなんですけど、どうやるんですそれ？ “皇帝ペンギン2号” と “デスゾーン” じゃ雷門あいつらがやってるものとは訳が

違いますよ」

いつもは先輩も恐れず不遜な物言いをする彼に珍しく、成神は純粹な疑問を投げ掛けた。

必殺技を合体させるということ自体は、雷門の「ドラゴントルネード」があるようにおかしな発想ではない。

だが、その組み合わせが問題だ。

あまりにも技の性質が違い過ぎる。

その手順が完全に地上で終始する「皇帝ペンギン2号」に対して、「デスゾーン」は空中から放つシュートだ。

これらを繋ぐというのはつまり、空中で行われる「デスゾーン」の下に「皇帝ペンギン2号」を正確に打ち上げなければならぬということだ。

さらに言えば「皇帝ペンギン2号」と「デスゾーン」はどちらも3人で行う必殺技であり、参加するのが1人ずつで多少乱れてようがその場で修正も可能な「ドラゴントルネード」とは訳が違う。

どこかにズレが出ればそれが失敗に直結する。

前代未聞の試み、当然そのための練習などやっている訳もなく、できぬ筈がない。

しかし鬼道は、やると言う。

「初動は俺。」「皇帝ペンギン2号」の打ち上げ役は佐久間と寺門。」「デスゾーン」は洞面、辺見、成神だ」

「き、鬼道さん、それは」

辺見が、あまりに荒唐無稽なそれに流石に意見する。

「ああ、辺見と成神は「デスゾーン」の経験があまりないからな。洞面、2人のフォローを頼むぞ」

「そうじゃないです！ そりゃ「デスゾーン」はやれますが、どうやって「皇帝ペンギン2号」の上がる場所でそのスタンバイをするんですか!?! そのタイミングは!?!」

「俺が3人の跳ぶ時の位置取りを指示する。それではダメか?」

「ダメって……」

鬼道はこれからやる必殺技の内「皇帝ペンギン2号」は威力から

始まりそのシユートの特性まで知り尽くしている。

そして「デスゾーン」も、それを行う合図はいつもやっている。経験はある。

とはいえ、つまりは全てを鬼道の経験と勘に任せてシユートをするということ。

帝国ではあり得ないそれに、すぐには踏ん切りがつかない。

「いいじゃないか」

その時、彼らを見守っていた源田がそう言った。

「源田……」

「それらが合わされば、俺でも止められないかもしれん。得点が欲しいこの場面では最強の手札だろう」

「もし、失敗したら……」

「反撃は俺が止める。もう、敗者を容赦なく裁く総帥もない。負けていいということではないが、考えすぎなくていいんだ。サッカーは、やる奴にそんな恐怖が纏わりついてくるものではないだろう？

鬼道なら完璧に指示してみせる。鬼道を信じろ」

「——今だ！」

洞面、辺見、成神はその声に従い飛び上がる。

これまで自分達を勝利に導いてきた、司令塔の言葉を信じて。

3人が回転して作り上げた力場に、ボールは寸分違わずセットされた。

ペンギンが彼らの周囲を旋回して放たれる時を待つ。

「これが、帝国の総力だ。俺達のサツカード」

鬼道が、自分の指示を全て完璧にこなしてみせた仲間達を見ながら
呟く。

——大帝ペンギン!!!

3人が渾身の力の込められたボールを、雷門のゴールへ向けて解放する。

「デスゾーン」の禍々しいエネルギーを帯びたボールとペンギンが雷門ゴールへ襲いかかる。

「なんてシュートだ!」

「行かせないッス! ——うわああああ!」

「豪炎寺!」

「染岡!」

DF陣が立ち塞がるが、一瞬で突破されてしまう。

帝国の狙いを察してゴール付近まで戻って来ていた2人のストライカーが顔を見合わせる。

「俺に合わせろ!」

「ああ!」

2人は向かい来るシュートを打ち返すべく、全力で足を振るってボールを迎え撃った。

「う、おおお……!」

しかし、当てた足を振り抜けない。

(抑え切れん!)

「ぐああ!」

僅かに拮抗したものの、彼らも止めきれずに吹き飛ばされた。

その圧倒的な力を見せつけてゴールへ迫るシュートを円堂は正面から見る。

(これが、鬼道達の全力! でも絶対に止める! 皆で勝つんだ!)

決意を漲らせる円堂から気が立ち上る。

「うおおおおお! ゴッドハンド!」

円堂は先程のように、両手を突き出して更なる力を込めた巨大な光の手でそのシュートを受け止めた。

(円堂、お前は強い。間違いなく。その仲間達との絆が、お前に力を与えているのだろう)

鬼道は、ゴールでの激突を見守りながらそう円堂を称える。

「だが、仲間が居るのは俺達も同じだ。俺達の方が——強い！」
凄まじい勢いで円堂を押し込もうとするペンギン。

「ぐ、おとおアあああ!!」
止めきれない。

「うわあああああああ！」

手が粉碎されて、円堂はボールごとシュートに押し込められた。

『入った——！ 帝国学園、必殺技を結集した凄まじいシュートを披露！ 円堂の防御を破った——！ 点差が開く！ 雷門絶体絶命——！』

帝国の文字通り全ての力が注ぎ込まれた一撃が、再び雷門を追い詰める。

「くっそ——！ ごめん皆！」

「気にすんな円堂！ 一点は取ったんだ、もう一点だって取ってやる、なあ豪炎寺！」

「ああ！ アレでいくぞ染岡！」

一歩帝国へ手繰り寄せられた勝利を引き戻すべく、雷門が反撃を仕掛ける。

「キラスライド！」

「たまのりピエロ！」

五条の仕掛けた殺人的なスライディングを栗松がボールに乗り、巧みに操ることでかわしてサイドから切り込んだ。

「マックスさん！」

「ああ。頼むぞ、染岡！」

この窮地を打開してくれることを信じて、ストライカー達にボールを託す。

染岡は翼竜を呼び出し、共に渾身の力でボールを打ち上げる。

「いけ、豪炎寺！」

（円堂、お前なら次は止めるだろう。そのために、必ずチャンスをつくってみせる！）

打ち上げられた「ワイバーンクラッシュ」の位置は高い。
もつと上へ。もつと熱く。

彼のその一念が更なる進化をもたらしたのか、その身から放たれた炎は、先程の円堂が見せたそれと同じような姿へと集束した。

現れた炎の魔神が、豪炎寺をより高みへと送り届ける。

「決めろ。ワイバーン——」

「——ストーム!!」

炎の魔神は姿を変え、翼竜へ追従する。

爆熱の豪火を纏った翼竜が咆哮した。

これで決めてみせる。2人のエースの全力を合わせた一撃だ。

「鬼道。皆。やったな」

迫るシュートを見ながら、落ち着き払った様子で彼は呟く。

「ならば、俺も応えてみせる。お前達がもぎ取った一点を、無駄にさせはしない！」

ゴールを守るのは源田幸次郎。

キング・オブ・ゴールキーパーである。

「フルパワーシールド!!」

その膨大な力を秘める壁が、爆炎の翼竜を受け止める。

だが翼竜が吼えれば、先の失点の再現のように、壁が砕け散った。

「いけるー！」

「決まれー！ー！」

襲いかかった衝撃波で炎が引き剥がされたが、翼竜は未だ健在。

誰もが決まると思った。

「ビーストフアング」

その希望ごと、獣の牙が翼竜を噛み殺した。

「そんなっ……」

「お前達なら、フルパワーシールド」も破ると思っていた。それを見越して、壁を張った瞬間から再び力を溜めて備えていたまでのこと」

源田が受け止めたボールを投げようとした時、ホイッスルが鳴った。

延長戦前半終了である。

すぐに後半も始められるが、ボールは帝国。

僅かな時間しかないなか、またゴールを決められれば雷門に勝機はない。

「終わりだ、雷門！」

最大の敵に敬意を表し、全力で止めを刺すべく帝国が動き出す。

洞面達の位置取りを妨害しようとDF陣が走るが、巧みにかわされてしまう。

「止められるものなら止めてみる。大帝ペンギン!!」

打ち上がった「皇帝ペンギン2号」を、上空から「デスゾーン」でさらに後押しして放つ。

皇帝を凌駕する大帝の一撃が、再び雷門を襲う。

「キャプテン……!! 助けるツス! ザ・ウォール!!」

「壁山!?!」

「まだそんなことができる奴が居たか……!!」

立ち塞がった壁山が、魂の叫びと共に岩壁を呼び出した。

ペンギンは殆ど時間を掛けずその壁を破るが、確実に威力は削られている。

「今度こそ止める! じいちゃん、力を貸してくれ……!!」

円堂は体を張った仲間の成長を目の当たりにして、更に気を高めた。

力強い魔神が姿を現す。それは彼の祖父のみが使いこなした幻の必殺技。

魔神は主の心に応えるべく剛腕を振りかざす。

突きだされた掌が、ボールを受け止めてみせた。

「またあの技を見られるとは……。円堂、やっぱりお前は、大介さんの孫だな」

「どこまでも、楽しませてくれる……！」

帝国がどれだけ圧倒的な力を見せつけても、雷門は追い縋ってくる。

だが鬼道は、さらに目を見張らされることになった。

『なんと円堂、自らボールを蹴って上がっていく！ いや、違う！ 円堂だけではない！ 雷門の選手全員が、攻撃に参加しております！』
時間がない以上、ゴールを空けてでも攻撃に参加すること自体は理解できる。

だが、御影専農戦みかげせんのうで見せたようなものどころではなく、代わりに守るDFすらが一斉にボールを運ぶことに参加しだした。

万が一奪われれば、そのままゴールを決められかねないというのに。

「守ってるだけじゃ負けるだけだ！ まだ勝負は終わってない！ 終わらせねえぞー！ー！」

円堂の雄叫びが力を与えたかのように、雷門の選手達はこれまでにない動きで帝国の守備を掻い潜っていく。

「なんという、サッカー馬鹿だ……。お前に託すぞ、源田」

その勢いに反応しきれず、抜かれてしまった。

追っているが、もう捉えられる気がしなかった。

鬼道はもう、すっかり円堂のサッカーに魅せられていたのだ。

残るは帝国最大にして最強の守り。

「頼むぞ、お前らー！」

幾度と無くシュートを撃ち続けた染岡が、振り絞った最後の力を

ボールに込める。

円堂は今までで最も高く打ち上がったそれを、壁山を踏み台にして豪炎寺と共に追う。

「勝負だ、源田アーーーーー！」

「イナズマワイバーン——」

「——1号落とし!!」

「——ああ、それがお前か。円堂守」

その突き抜けた熱は、こちらにまで力を与えてくる。

「直接の勝負は、ないだろうと言ったのにな」

成程、彼がサッカーの高みへ登っていくのも当然のことだ。

自分も今持てる全てを以て応えなければなるまい。

「見せてやる、最強の守りを！俺が帝国学園のゴールキーパー！」

——源田幸次郎だ！」

不敵な笑みを浮かべたキング・オブ・ゴールキーパーが、正面からそのシュートに受けて立つ。

源王の守りは――

迫り来る、電撃を纏った翼竜のシユート。

それを迎え撃つために、源田は身体に気を漲らせる。

「……！ 源田。使うのか、あの技を……！」

その動きに気づいた鬼道が、かつて彼が練習で開発・披露した「最強の技」を思い出して戦慄する。

帝国での特訓の際、「皇帝ペンギン2号」では破ることが叶わなかった源田最大の防御。

あるリスクも併せ持つその技を使うのは、この攻防が試合を決めるという確信があるからか。

彼は広げた両腕に、「ビーストフアング」の要領で気を込める。

「ビーストフアング」は通常、全身に気を行き渡らせても恐ろしい反動が来るのだ。

負担をさらに集中させるその所業は、並のキーパーならばそれだけで腕を壊すもの。

しかしまだ終わりではない。

腕の内に気を込めた次は、それぞれの腕の傍らに新しく気の塊を形成した。

「――ぬうん!!」

拳を胸の前で打ち合わせることでその2つの気を合わせて、一つの円盾まるたてを作り出した。

「ハアッ！」

まだ足りない。

最後に打ち合わせた拳を盾に向けて振るい、手を翳かきして溜めていた力を注ぎ込む。

黄金の盾に百獣の王を思わせる装飾が加わった。

「キングシールド!!!」

それは王であるが故の技ではない。

自分が、仲間が信じる王者であるために編み出した盾。

「おおおおおおおお!!」

「いつけえええええ!!」

イナズマを帯びた翼竜は、その盾に激突する。

この盾さえ破れば、ゴールは目前だ。

足が地面と擦れながら、ジリジリとゴールラインへ近づいていく。

「ぬ、おおおおおおああああ!!!」

それでも、源田が押し込まれかけた足を前に踏み出す。

大地を踏みしめ、埋まる勢いで足を押し込む。

「まだだ……! 言った筈だ、円堂!」

「——お前には、負けないと!」

思い切り突き飛ばすような姿勢になり、盾も前進した。

ついにボールを弾き飛ばし、源田はバランスを崩してそのまま前のめりに倒れたものの同時に最後のホイッスルが鳴り響いた。

『試合終了——! 予選でありながら間違いなくFF史上に刻まれるであろう白熱した名勝負、制したのは、王者帝国学園だ——!』
スコアは2-1。FF地区予選、その決勝戦の勝利は帝国学園がもぎ取ったのである。

スタジアムの観客は類い稀な死闘を演じた両者に喝采の声援を惜しみなく送る。

声援を浴びながら、立ち上がりもせず地面に這いつくばって呆然としていた源田に、鬼道達がゆっくりと歩み寄った。

「まったく、勝者がなんて姿を晒しているんだ」

そう言って、手を掴んで力づくで引っぱり起こす。

ようやく現実へ理解が追い付いてきた源田が口を開いた。

「勝った、のか」

「ああ。俺達の、帝国の勝ちだ。そして皆、俺についてきてくれてあり

がとう」

「なにこれで終わりみたいに言ってるんですか鬼道さん」

「ククク…これは私達のサッカーの産声に過ぎませんよ」

「おう。ここからが俺達の始まりだ、鬼道！」

「お前達……」

帝国イレブンの面々が口々に言葉をかける。

鬼道が彼らの思いを受けて感動にうち震えている所へ、雷門イレブンがやって来た。

「凄かったな、お前ら！」

「円堂……」

「負けちゃったのはすつげえ悔しい！ でも、お前らとあんなに熱い試合が出来て、俺嬉しいよ！」

「根性と熱血特訓が俺達雷門の真骨頂だ。そうだろ皆！」

『おーっ！』

(……すまない、夕香。お前に勝ちを報告しに行くにはまだまだ精進が足りないらしい)

雷門イレブンが円堂の声に従い叫ぶ。

負けたのは悔しかったが、互いに全力を出した結果だった。

このワールドに立つ選手達は全員、その高揚を共有していた。

「でも、また来年だな……。鬼道、全国大会、俺達の分も頑張ってくれよー！」

「……？ お前達、知らんのか？」

「知らないって？」

「お前達雷門中も、全国大会には出場できるぞ」

「ええ!？」

鬼道のカミングアウトによって雷門イレブンが驚愕に揺れる。

「特別措置、というやつだ。帝国学園と同じ予選ブロックでは準優勝校も全国大会への出場が認められる」

それは帝国学園が絶対的な王者であったが故に生まれた制度だ。

帝国学園がFFの20連覇を成し遂げた頃。

“無敵の帝国学園”の存在は日本のサッカー界に知れ渡っていた。

同時に、帝国と同じ地区の学校は絶対に地区予選を突破できず、選手達は誰一人として日の目を見ることがかたわらないという意味でもあった。

今まで、そしてこれからも現れるであろう優れた若きサッカープレイヤーが、圧倒的格上、最強の帝国学園に容赦なく道を絶たれるのは忍びない。

一部でそういった声が上がリ、全国サッカー協会もそれを認めたことによつてこのような措置が取られたのである。

「帝国の強さが故に提案された特例だ。もつとも、総帥……いや、影山の裏工作がわかつた今では、どこまでその強さとやらが本物だつたかは怪しいがな」

「でも、とにかく俺達も出られるつてことか!」

「お前達に喜ばしいことかはわからんぞ。優勝した俺達も当然出場する」

「つ、つまり、またあんたらと戦うつてことでやんすか!」

「それもお前達が決勝まで勝ち進めばの話だろうがな。全国は地区予選とはレベルが違う。精々勝ち上がつて来ることだ。俺達に再び倒されるために」

「なにを、その頃には俺達だつてもつと強くなつてやるぜ。今度こそ源田（そいつ）の守りをぶち抜いてやる! なあ豪炎寺!」

「ああ。練習試合のリベンジもまだ果たせていない。このまま終わりはしないぞ」

「やつてみる。次は1点たりとも渡さんぞ」

気炎を吐く雷門のストライカーコンビに、キング・オブ・ゴールキーパーが不敵な笑みを向けた。

そのまま選手達が各々、試合で戦つたためぼしい相手と発破をかけあつたりする短い交流の時間が生まれた。

「源田。本当に、ほんつとくに強かつたな!」

「お前も強かつたがな。とにかくここでは、俺の勝ちだ円堂」

「ああ、負けちまつた。でも次は俺が勝つぜ!」

「そう来なくては。だが俺ももつと強くなる。次も俺の勝ちだ」

「だったら俺はもつともつと強くなるぞ！」

「むっ……ならば俺はさらにもつともつと強くなるまでだ」

「じゃあ俺はもつともつともつと——」

「その辺りにしておけお前ら」

初めはお互いを称え合っていたのに途中からレベルの低い言い合
いをしているGK2名に鬼道が待ったをかけた。

ベンチへ戻って荷物の片付けに行く前に、両チームが向かい合い、
彼らは固い握手を交わす。

「またな鬼道、源田。次は絶対俺達が勝つぜ！」

「フツ。だからそれはお前達が勝ち進めばの話だというのに……」

「まあ雷門なら勝ち進んで来るだろう」

「……そうだな。ではな、雷門——」

『決勝で会おう』

そう約束して、歓声に見送られながら彼らはフィールドを去って
いった。

荷物を纏めて廊下を歩く帝国イレブンの背に、呼び止める声がか
かった。

「お兄ちゃん！」

「春奈……」

「鬼道。あの子が、お前の戦う理由か？」

「源田」

「先に行っているぞ」

鬼道を残して、帝国の面々は先へ進んでいった。

その場で彼らが何を話したのかは、兄妹だけのものである。

「それにしても、特訓か……そうだ、これまでメニューを考えていた総帥がいなくなつたし、今度から俺が練習メニューを——」

『それは待て源田』

影山の裏工作があつたとはいえ、帝国学園の強さは円堂達が身を以て知っているように本物だ。

当然その力を得る特訓も並の学校とは比較になるものではない。

その帝国学園の練習の後に、怪物的な密度の自主トレーニングをこなしている源田に普段の練習メニューを任せたりすればどうなるか。

源田が提案しかけたのをこの場にはない鬼道を除いた帝国学園サッカー部は心一つにして却下した。

試合の一部始終を映していたパトカーの小型テレビの電源が落ちた。

刑事鬼瓦 おにがわら 源五郎 げんごろう が口を開く。

「どうだ。帝国の選手はお前を見限つたからこそ、こんなに素晴らしき試合ができたんだ」

「下らん。点を取られ、土壇場で必殺技を作る賭けを行う。危うい場面がいくつもあつた泥臭い勝利だ。そんなものは私の求めるものではない」

その言葉を向けた相手は、にべもない返しをする。

同じものを見ていた筈なのに、その2人で思ったことがあまりにも違つた。

元々、これだけでこの男のどす黒い心を清められるとは思つていなかったが、それでも期待していなかつたといえば嘘になる。

どうしてこの男はサッカーをこれ程までに汚せるのか。

そんな怒りを抱きながら、激情に反して鬼瓦は静かに言葉を紡いだ。

「お前にはその泥臭さの素晴らしさがわからないんだろうな。だから

お前は選手だけでなく、サッカーにも見捨てられたんだ」

「……価値があるのは、ただただ圧倒的な、完璧な勝利だけだ。それだけだ」

鬼瓦の隣に座っていた男——影山かげやま 零治れいじはそれきり口を閉じた。

(源田幸次郎——)

思い出すのは、あの男を勧誘した時のこと。

影山にとって、全てを注ぎ込んだ最高傑作は鬼道 有人ただ一人。

他の帝国の選手など、鬼道の足を引っ張らない程度の添え物に過ぎない。

だが、その得点を許さない圧倒的な防御力は彼の信条とする完全勝利に通じるものがあるとして、鬼道程ではないが源田にだけは多少目をかけていた。

『源田よ。私の下もとに来るつもりはないかね?』

『……仰おほっている意味がよくわかりませんが』

『簡単なことだ。帝国学園の一選手ではない、影山零治の全面的なバックアップを受けた選手としてサッカーをしないか?』

私に従うのならば更なる力を、そう——

——神の如き力を与えてやろう』

そう言って、あの男に手駒に加わるよう誘いをかけた。

仮に源田が領いたのならば、当時既に秘密裏に動かしていた「プロジェクトZ」に加えてやってもいいと思っていた。

その程度の実力はあると正当に評価していた。

だが、あの男は断った。

『総帥のありがたいお言葉ですが……お断りさせて頂きます』

『……何故かね? 神の力が欲しくはないのか?』

『与えられる、ということはいつか奪われるということですよ。与えられる力に興味はありません』

『他を利用するのも勝ちの手段だ。使ってやればいい、とは考えないのかな?』

『……俺がなんと呼ばれているかご存知ですか？』

『もちろんだとも。キング・オブ・ゴールキーパー、サッカー人生において無失点、我が帝国学園の守護神たる君に相応しい呼び名だろう』
『王には2種類が居ます。周囲に据えられた都合のよい飾り物と、全ての障害を押し退けて玉座を勝ち取った者。俺は後者がいい』

『……………』

『ご心配は無用です。一度座ったこの玉座、誰にも渡すつもりはありません』

そう言つて、源田は影山の誘いをはね除けたのだ。

（貴様の王道が、神の力の前にどこまで通じるか。精々、足掻いてみるがいい——）

既に手は打っている。次なる策は、影山の瞳に映っていた。

源王は鍛練を惜しまない

影山の支配から脱した帝国学園サッカー部。

決勝戦で雷門と死闘を演じてからの彼らの練習には、非常に気合が入っていた。

「うおおおー！」

「っ！ ぐおああ!？」

「おい大野、流石に今のプレーは荒すぎるぞ！ 大丈夫か咲山？」

大野が雄叫びを上げながら行つた突進で、持っていた咲山ごとボールを吹き飛ばした。

それに佐久間が注意をしながら、吹き飛ばされた咲山に駆け寄る。

「舐めんじゃねえ。こんくらいなんともねえよ」

「咲山……」

手を伸ばそうとした佐久間を制して、咲山は自力で起き上がった。

彼は大野が上達を焦るのも理解していた。

大野だけではない。万丈や五条も、彼らDFは決勝戦の失点から猛特訓を重ねている。

帝国の守りと言えば源田が挙がるが、GKは最後の砦。そこへ易々と突破を許してしまったことへ自分達の実力不足を感じ、次はシュートすら撃たせまいと息巻いているのだ。

「悪い、咲山」

「気にすんな。こんなもんで怪我するかよ。まだまだいくぜ！」

「おうー！」

そして、もう一つのフィールドでは寺門が鞭のようなキックで鋭いシュートをゴールに向けて放つ。

「おらー！」

「——おっとー！」

殆どのキーパーは反応すらできないであろうそれを源田が横っ飛びで危うげなく捉えた。

「寺門、いいシュートだった。前までの俺だったら追いきれなかったぞ」

「いや……まだ足りねえ」

源田は本心からそう褒めている。

それは寺門にもわかってはいるが、その言葉を受け入れられるかは違う。

あの試合、勝ちこそしたが自分達が点を決めていればもつと楽な展開だった筈だという思いが捨てきれない。

たればの話に意味はない。

だが、自分のシユートは幾度も雷門に止められていたというのも事実。

源田に守りを任せてばかりで、この帝国のエースストライカーを名乗る自分は彼に誇れる結果を出せたのか。

答えは否だ。誰がなんと言おうとも寺門自身が、今のままで源田と肩を並べることを許さない。

「もつとだ。まずはノーマルシユートを磨き、十分な必殺技の土台を作る。もつと頼むぞ源田ア！」

「ああー。何本でも付き合うぞ、もつともつと撃つてこい！」
「うおおおおお!!」

燃え上がっている男達2人を他所に、洞面、成神、辺見は源田達と反対側のゴールを前にして飛び上がっていた。

腕を広げて回転し、作り上げた力場に収めたボールを、3人で息を合わせて発射する。

「デスゾーン！」

「大帝ペンギン」を得たことで、今まで「デスゾーン」のメンバーであった佐久間と寺門が抜けて参加するようになった成神と辺見だが、もつと精度を上げるため、ひたすらにシユートに身体を慣らす特訓を繰り返していた。

「ふー……源田も寺門も随分燃えてんな」

撃ち終わって着地した辺見が、反対のゴールの光景を見て言った。

「そりゃあねー。源田さんなんかあの試合で初失点！ 燃えるのも当然でしょ」

「いや、燃えるのはいいけど方向おかしいでしょ。なんであんなに

ボール持ってきてきてんだあの人達……」

洞面がそれに反応したのに対し、成神がその練習風景を見てげんなりとした声を出す。

いつの間にか大量のボールを持ってきていて、矢継ぎ早に——一本一本の精度を崩さない凄まじい集中を保ちながら——シュートを撃ちまくる寺門と、それを全力で取り続ける源田。

「ありや片付けるの大変だぞ……」

「源田も寺門も、どこかで満足するってことがねえからな。ああいう奴らは、頂点に着いても自分で階段作って上に登っていくんだらうよ」

「おー。辺見先輩が珍しくいいこと言ってる?」

「珍しくってどういうことだコラ洞面!」

「うえー先輩が後輩に圧かけてるー」

「ン成神イ!」

「お前達! もう10本 “デスゾーン” は終わったのか!」

「あつ、鬼道さん!」

「すみませーん! 辺見先輩が!」

「ン成神イ!」

また騒がしくなりかけた所でやって来た鬼道と佐久間。

ギャーギャーと辺見の怒声が鳴り響いて、源田と寺門がそちらへと視線を向けた。

「悪いな、ちやうど邪魔をしてしまったか」

「いや、そろそろ別のことをしようと思ってた所だ。構わねえよ」

「そうか、それならいいんだが……。2人とも、辺見達も加えて“大帝ペンギン”をやりたい。佐久間も呼んでくるから、少し待っていてくれ。源田は相手を頼む」

「わかった。……寺門、ボール片付けるか」

「ああ……」

「言っとくけど、それは手伝いませんからね?」

熱に浮かれたままにボールを百列並べてシュートを撃ちまくっていた寺門と、受けていた源田だが、やることが変わって現実を見ると、

ゴールの周りに大量のボールが転がっている光景が広がっていた。成神が、本気で嫌そうにしながら先んじてその意思を表明した。2人が静かにボールを片付けに走る。勢いのまま山ほどボールを出したことに同情の余地はなく自業自得であった。

雷門も全国大会に向けて、響木が集めてくれた40年前の伝説のイナズマイレブンと練習をさせてもらっていた。

彼らは初め、長い年月ですっかり腐ってしまった情けないサッカーを見せていたが、諦めの乗ったいい加減なプレーへの円堂の憤りや、見かねた響木の喝で復活した伝説の男達は遺憾なくその実力を見せつけ、雷門イレブンは彼らの必殺技を教わっていた。

「よく見てろよ小僧共……！ 炎の！」

「風見鶏！」

OBの備流田^{びるだ} 光一^{こういち}と浮島^{うきしま} 一人^{かずと}が、向かい合ってボールを蹴り、真上に打ち上げた。

それを飛び上がって追い、備流田が上、浮島が下からボールを挟んでキックを打ち込む。

2人の足に上下から挟まれ炎に包まれたボールからは燃え盛る翼が生え、ゴール目掛けて飛び立っていく。

「マジン・ザ・ハンド！」

円堂は帝国での突発的な使用から形にして見せた「マジン・ザ・ハンド」でそれを受け止める。

その光り輝く魔神を見て、備流田達が懐かしそうな視線を向ける。

「まさか、「マジン・ザ・ハンド」をまた見ることがあるとはな……流石は監督の孫ってところか」

「円堂が継いでいるのは血だけじゃない」

備流田の呟きに、響木が訂正を加える。

そう、円堂 守が祖父円堂 大介から受け継いだのはただの遺伝子

情報ではない。

目に見えないが、何よりも大切なもの。

「円堂は……いや、あの子達は、イナズマ魂を持ってる。かつて、俺達
が持っていたように」

「響木……」

「よーし、豪炎寺！ 風丸！ 今度こそ、こっちもやってやるぞ！」

「ああー！」

「『炎の風見鶏』……絶対ものにしてみせるぜ」

ボールを持った円堂の声かけに応じた豪炎寺と風丸。

彼らも『炎の風見鶏』を習得しようとして試行錯誤を重ねている。今のところその試みは失敗しているが、2人のモチベーションは高い。

「……わかった。この技の鍵は、2人の距離だよ」

「影野？」

ベンチでOBと自分達の『炎の風見鶏』を見て、その違いに気づいた影野の助言によってこの必殺技習得は大きく進展することになる。

影野の助言によって互いの距離を計り、見事成功した『炎の風見鶏』。

度重なる失敗の末の成功に、実際に技を行った豪炎寺と風丸だけでなく、雷門イレブンの皆が歓喜に湧いた。

試合終了と同時に、メンバーが2人を囲む。

「なんだか、自分まで燃えて来たツス！」

「俺もあんな凄い技、やってみたいでやんす！」

「落ち着け皆、まだ出来ただけだぞ。もっと磨かないと源田あいつには通用しないだろう」

「フツ。その通りだな」

「よくわかってるようだなによりだ。付け焼き刃では全国のGKには通じないぞ。もっと、風見鶏をお前達のものにするんだ」

「お前ら、全国では絶対帝国に勝ってくるんだぞ！」

『はいっ！ ありがとうございました!!』

OB達の激励に元気のいい返事を返す円堂達。

全国大会に向け、彼らは気合い十分といった様子だった。

とあるスタジアムで神々しい純白の光が迸り、ボールが空間を駆け抜けた。

ほぼ同時に甲高い、金属の碎ける音が鳴った。音は木霊して、スタジアム全体に何重にもなって響き渡る。

その轟音の正体は、シユートに耐えられずにひしゃげ、粉碎されたゴールによるもの。

凄まじいレベルを誇るサッカーでもそうそう見られない光景であるが、それを眺めていたプレイヤー達になんら驚いた様子はない。

彼らの態度はこれが当たり前なのだという、自分達の力への自信を物語っていた。

「ククク……また壊れたか。まったく、これではシユートの度にゴールが壊れて試合にならないかもしれないな」

その光景を眺めていた男は、笑いながらそう評した。

逮捕されながらも、証拠不十分で先日釈放された影山は現状に大層満足していた。

期待通り、否、彼らの力は期待以上。まさにサッカーの神と呼ぶに相応しい圧倒的な強さがある。

「敵が弱いのは当然としても、いちいちゴール交換で試合が途切れてはつまらん。早急にフロンティアスタジアムのゴールを技術の粋を集めた最新鋭のゴールに取り替えねばな」

「——影山総帥、お越しになっておられましたか」
壁に囲まれたスタジアムの中で突然、影山の傍で一陣の風が起こった。

だが彼は、自身の間近で起こったそれに欠片も動じず、後ろに纏めた髪を揺らしながら風の吹いた方を振り向く。

その視界には彼に忠誠を誓う、神の力を得た戦士達が跪く姿があった。

彼らこそが『プロジェクトZ』の核。完全な勝利を自分に捧げ、

サッカー界の頂点へと登り詰めさせる下僕だ。

「この時間まで、精が出るな諸君」

時間は夜、就寝の早い者なら既に眠っている時間帯だ。

いつも他者に厳しく、失態を見せた者を詰ることが日常な影山が、珍しく彼らをそう褒めた。

「影山総帥の御為、捧げる勝利をより完璧なものにするためならば、ボク達は時間など惜しみません」

跪いている少年達の代表、腰まで届く程に長く、よく手入れも行き届いた金髪と宝石のような赤い瞳をした、女神もたじろぐであろう美貌の少年が、自分達の行いを当然のものだと語る。

そのあり方に、影山は本当に満足げな表情を浮かべた。

「クッククク……本来、対戦校はまだ知らされないのだが、教えておこう。諸君の記念すべき初試合の相手は、かつて私に歯向かった、愚かなる帝国学園の面々だ」

「はっ。影山総帥に逆らった者共に、総帥が授けて下さった神の力を以てその愚かさを思い知らせて御覧に入れます」

「それでいい。私に従う者にも、究極の力を与える『神のアクア』。

……それに更なる濃縮を施した『真・神のアクア』を口にする権利がある」

その言葉に、少年達の目の色が変わる。

彼らは全能感、どころか文字通りサッカーにおいて全能に等しい力を与えるその水に骨の髄まで魅了されていた。

影山は笑う。

試合当日に、スタジアムでどのような凄惨な光景が引き起こされるのかを想像しながら。

源王は猛者達に揺るがない

雷門中、帝国学園、そしてまだ見ぬ各地の強者達。

彼らが待ち受けた全国大会の開会式は、ついにその当日を迎えた。

『全国の中学サッカーファンの皆様、ついにこの日を迎えました！』

実況の角馬^{かくま} 王将^{わおうしよう}の興奮しきった声がフットボールフロンティアスタジアムの観客席、控え室、会場全体に響き渡る。

『各地域の激戦を勝ち抜いてきた強豪達が、今日より日本一の座を賭けて、更なる激闘に臨みます！ 最強のイレブンはどのチームか！』

早速紹介しましょう、近畿ブロック代表、戦国伊賀島中学！』

話は地区予選を勝ち抜いてきた出場校達の紹介に移り、近畿ブロック代表の戦国伊賀島中を皮切りに続々と全国各地の猛者達が入場していく。

帝国学園の選手達も、呼ばれるのを待ちながら集まっていた。

「ふー、緊張するね成神」

「そうかあ？ なら呼ばれるまで曲でも聞いてみるか？ 貸すぜ」

1年生の洞面が体を強張らせる。

帝国が無敗の王者で、彼が入学後すぐにスタメン入りした実力者と言っても、初めての全国大会に冷静ではいられない。

そんな彼に、同学年でありながら対照的で落ち着き払った成神がヘッドホンを弄りながら渡す。

「洞面、緊張するか？」

「源田さん……」

「今の内に存分に緊張を吐き出しておけ。俺達は先輩だからな、お前のそれを去年経験済みだ。誰も責めやしない」

「ククク…ええ、私達は先輩ですからねえ。あなた達が緊張で何か失敗しても、フォローくらい容易いことですよ」

「五条さん、俺緊張はしても失敗まではしませんよー！ 見くびらないでください」

「そうだぞ五条。洞面も成神も凄い奴らだよ。心配はいらないさ」

2年生の主力メンバー達には、去年も通った道である。

皆涼しい顔で、自分達が呼び出される時を待っていた。

そんな中、鬼道が彼らの前に歩み出た。視線を集めた彼が口を開く。

「皆、必ず優勝しよう。影山の掌の上で踊らされていたサッカーはもうない。今回の優勝から、俺達帝国学園の本当の伝説が始まるんだ！」

『応っ！』

鬼道の言葉に、全員が揃って応じた。

『さあ、続いては関東ブロック代表！ 帝国学園の入場です！』

「フツ。さあ、行くぞ皆」

放送の声に従い、プラカードを持ったスタッフの後に並んで続く。すぐに外の光が見えてきた。

眩い陽光と、吹き上がる歓声。鬼道達にとってそれは去年も感じたものだが、先の鬼道の言葉のように、今年にはまた違う、そして大きな意味がある。

『例年通り全国大会へとやって来ました、王者帝国学園。今回も圧倒的な実力を見せつけ、4-1連覇なるか!？』

煽り立てる言葉。鳴り響く歓声。

全てが力に変わっていく感覚があった。

『さらに、関東地区予選決勝にて帝国学園と死闘を繰り広げた雷門中学の出場が認められております！ 彼らは無失点伝説を誇った帝国の守護神から初得点を奪った前代未聞の強者。今大会きつてのダークホースと言えるでしょう！ 決勝にて、伝説のイナズマイレブンの復活が期待されます！』

位置についた帝国学園の隣に、雷門中の面々が並ぶ。

「いよいよだな。お前ら、決勝まで負けるなよ？」

「それはこちらの台詞だ。自分達の心配をするんだな。全国は今までとは格が違うぞ」

「へへっ、だから燃えるんだろ」

「雷門、俺達と互角に戦ったお前達がこのスタジアムで無様を晒せば、俺達の名にも傷がつく。くれぐれもみっともない試合はするんじゃない」

ないぞ?」

並んだチームのキャプテン同士がそんなやり取りをするなかでも、チーム紹介は続いていく。

そして強豪達が出揃い、最後の一枚に差し掛かった。

『そして残る最後の一枚、推薦招待校として、世宇子^{ゼウス}中学の参戦が承認されております!』

「ぜうす?」

「推薦招待校……聞いたこともない粹だな」

完全な無名、謎の存在に、誰もが彼らのやって来るはずのグラウンド入口へ視線を向けた。

だが、そこから歩いてきたのは世宇子のプラカードを掲げる、頬を羞恥に染めた女性スタッフ一人だけ。

後ろに続いてくる筈の世宇子の選手達の姿はない。

『えー……世宇子中学は本日調整中につき、開会式欠場とのことですよ』
「世宇子……何者か知らないが、俺の速さの前にはどこの誰だろうと敵ではないな」

「都会もんは協調性がねえズラ」

「ムカつくじゃん。推薦招待校とか言ってお高くとまってる、みたいな」

「そうツスねー」

「ねー」

『ー以上の強豪達によって、中学サッカー日本一が決められるのです!』

姿を見せない世宇子中に猛者達がそれぞれ反応を見せる中、FF全国大会の開催が宣言された。

「……………」

その中でも源田は、静かに世宇子のプラカードを睨み付けていた。

開会式から数日後、雷門VS戦国伊賀島の第1回戦が行われた。

序盤、雷門は秘伝の忍術で鍛え上げられた戦国伊賀島の、素早さと多彩な必殺技による忍者サッカーに翻弄されながらも、風丸の活躍で突破口を開かれ試合を有利に進めた。

「伊賀島流忍法——土だるま！」

「くもの糸！」

「かげぬい！」

「伊賀島流蹴球戦術——えんげつ偃月の陣」

「マジン・ザ・ハンド！」

「ワイバーンクラッシュ！」

「爆熱ストーム！」

円堂は彼らのシュートを危なげなく止めきり、風丸達がボールを回せば雷門のストライカー陣がシュートを撃ち込んでいった。

「つむじ改——ぐあぁ！」

戦国伊賀島中はその素早さで雷門の回すボールをカットするなどしたもの、シュートを放たれれば止めきれず、スコアは2-0で雷門の快勝となった。

スタジアムでそれらを見届けていた鬼道は、帝国の仲間達に試合結果を伝えた。

「あいつらはもはや全国でも有数のレベルだ。きっと決勝まで来るだろう」

「やはりあいつらは勝ち上がってくるか。へへっ、腕が鳴るぜ！」

大野はその身体に力を漲らせて張り切る。

雷門が勝ったのなら、自分達も当然それに続かねばなるまい。

誰もがそんな思いを抱いていた。

「で、俺達の1回戦の相手はどこだったっけ？」

「世宇子中だ。例の推薦招待校だよ」

大野の疑問に寺門が答えた。

推薦招待校というこれまでの大会ではなかった枠で突如出場。開会式にも姿を現さず、学校や選手のこれまでの経歴も一切不明。

世宇子中は不気味なボールに包まれていた。

「まっ、ぽっと出の連中に俺達が負けるとは思えませんけどねー」

「油断はするなよ成神。彼を知り己を知られば百戦殆^{あやう}からず」という言葉がある。今回俺達は「彼」を知らん。どんな手を使ってくるか、十分に警戒するんだ」

「寺門の言う通りだぜ。何か情報はありませんかね鬼道さん？」

「いや。俺にも情報は手に入らなかつた」

「ここまで何もわからないのは、少し不安だな……」

佐久間が苦い顔で言う。

帝国のサッカーはただの力押しではない。相手の情報を十分に集め、研究することは常套手段だ。

もともと情報の守りが堅い学校はないでもないが、帝国の情報力で本当に何もわからないというのは初めての事例である。

彼らの様子を眺めていた源田が口を開いた。

「皆、少しいいか？ その世宇子のことなんだが」

「源田さん？」

「何か情報が手に入ったのか？」

「奴らのこと自体は皆と同じだ。だが、気になることがあつてな」

源田が神妙な面持ちで語り始める。

「まず初めに……影山が釈放されたらしい」

「なんだと!？」

その内容に思わず鬼道が声を荒げた。

確かに逮捕された筈なのに、何故あの男が自由になっているのか。

帝国の面々も動揺を隠せない。

「もう一つ。先日ニュースで見たが、大会の実行委員長が最近事故で大怪我を負ったそうだ」

「ああ。それは俺も聞いた。春奈によると雷門の理事長で、マネージャーの1人の父親でもあるそうだが……まさか——」

「杞憂ならそれで構わん。しかし、俺は影山が世宇子の参戦に絡んでいると見ている」

帝国イレブンがその言葉に、何も言えなかつた。

まだ影山の呪縛は、終わってはいないのだと、そう感じられたのだ。

「影山はサッカー協会副会長だった。委員長は協会会長でもある。影

山の権力を抑えられるただ一人の人物が病院送りになり、その間に前例のない特別枠で無名の学校が出場してくる……いくらなんでもできすぎだろう？」

源田が世宇子の周囲に渦巻く不自然さに気づけたのは、ろくに覚えていない世界の記憶から漠然と、この先に恐ろしいものが待っているということだけを知っていたからだ。

その一環で影山という危険な男の動向を探っていた。

お陰で一つ一つの不自然な点が線で結ばれ、こうした推測ができるまでになったのだが。

「確かにな……」

「証拠ならあったんじゃないのか……影山、どこまで……！」

万丈が源田の言葉に頷き、佐久間が憤りに震える手を膝に打ち付けた。

皆、表情は固かった。

そこで、俯いていた鬼道が顔を上げた。

「……ならば、俺達は世宇子に勝つまでだ。やることは何も変わらない。必ず、雷門と決勝に行くぞ」

勇ましいその言葉に、帝国は奮い立った。

誰もがその目に炎を宿し、口々に闘志を吐き出していく。

「鬼道さん……そうですね、何も変わっちゃいない！」

「ククク……それもそうですね。かつての総帥の息がかかったチームとなれば、私も全力を出せそうですねよ」

「どんな攻撃が来ようと、この俺がぶっ飛ばしてやるぜ！」

「いつものリズムで決めちゃえば、どんな奴らも敵じゃないでしょ」

「なんとたって、俺達や帝国だからな」

「そーだそーだ！ 俺達は帝国だー！」

「世宇子とやら、初出場で泣きべそかかせてやるぜ！」

「向こうのキーパーが、シュートから逃げ出す腑抜けじゃないことを祈っとうじやねえか。そんなことがあったらストライカーとして張り合いがないからな」

「俺の“サイクロン”でボールにも触らせやしねえぞ……！」

頼もしい仲間達の意気込みに、源田も思わず笑みが零れる。

「……不安を煽るようなことを言っておいてなんだが、俺も同意見だ。

ゴールは俺が守ってみせる」

「頼むぞ源田。お前は、俺達の最強の守護神なんだ」

「ああ、任された。明日、必ず勝とうな」

『応ッ!!』

帝国の心は一つだった。

得体の知れない相手であろうと、ただ勝つのみ。

必ず勝ち進んで、雷門との再戦の約束を果たしてみせると。

だが――

「何があった、鬼道……………!!?」

試合開始直前。

帝国キャプテンである鬼道の姿はスタジアムになかった。

源王は神を認めない

世宇子中との試合当日。

帝国学園サッカー部がスタジアム前に停まったバスに集まっていた中、キャプテンである鬼道の姿はいつまで待っても現れなかった。「時間もないし、鬼道なら最悪ここに直接来れるはずだからとバスを動かしたが……来ないな」

万丈が近くの道路を走る車を何度も見回して確認しながら言う。

本来帝国学園に全員が集合して、そこからバスでスタジアムへ向かう手筈だったが、何故か鬼道が来なかったのでギリギリまで待ったものの試合の時間が迫っているため出発したのだ。

そしてスタジアムに着いた今も、鬼道がやって来る気配はない。

「もう、行くしかないな」

「源田……」

「鬼道が来られないのは、恐らく何かがあったからだろう。相手は影山、何が起ころってもおかしくない」

「だが、鬼道さんは必ず来る!」

「落ち着け佐久間、俺達だって同じ思いだ。鬼道は必ず来る。だが、それを待ってこのまま試合に不戦敗となればあらゆる全てが水の泡だ」
「そうだ。鬼道は絶対に来る。……佐久間、鬼道が急いで来た時に、圧倒的な点差をつけて驚かせてやろうぜ? お前が居なくなったら俺達も戦えるってよ」

「……そう、だな。源田。寺門。帝国は、鬼道さんだけじゃない……!」

帝国学園の面々は、ついにスタジアムへ足を踏み入れた。

王者の試合を見ようと今も続々と入ってくる観客達からの注目を受けながら、彼らは控え室へ向かっていった。

しかし、いつも自分達を導いていた司令塔の不在には不安を隠しきれない。

皆、どこか落ち着かない様子で試合前の練習時間に入る。

帝国イレブンがグラウンドに出ていこうとすると、1人の少年の姿

があった。

古代ギリシアの衣装を思わせる独特なユニフォームを身に纏った、少女と見紛いかねない美少年。

彼は源田達を見つけると、赤い瞳を細め、薄い笑みを浮かべながら近づいてくる。

「キミ達が、帝国学園。キミは源田幸次郎くんだね？」

「……そうだ。お前は、世宇子中の選手か」

「ああ、いかにも。ボクが世宇子中サッカー部のキャプテンさ。『アフロデイ』と呼んでくれたまえ。はじめまして、キング・オブ・ゴールキーパー」

長い金髪を手でかき揚げる美しい所作を交えながら少年あふろ照美／アフロデイはそう自己紹介をした。

源田はそれに対し、ただ無表情で見つめるのみだ。帝国の選手達も皆警戒の視線を向けている。

それに気づいたアフロデイは苦笑いしながら言葉を繋ぐ。

「嫌だなあ、そんなに怖い顔をしないでほしいね。ボクはキミ達のためを想って忠告に来たのだから」

「忠告だと？」

「——キミ達、帝国学園に棄権を勧めに来た」

「——ふざけたことを言うなよ、アフロデイ」

源田が言われた瞬間に拒絶の言葉を返す。

いきなり来て、戦う前から勝ちを譲れというろくでもない物言いに帝国の面々もいきり立った。

「ふざけやがって、何様のつもりだ!?!」

大野が怒りに巨体を震わせながら怒鳴りつける。

だが、アフロデイは彼の怒りなどどこ吹く風だ。

「これはキミ達のためだ。愚かにも影山総帥に逆らった、キミ達への最大限の慈悲でもある」

「影山だと!?!」

「やはりか……」

「慈悲ってどういう意味なんですかねえ、影山の手先さん」

「だって、キミ達は負けるからね。人は神には敵わない。絶対に不可能なことを、そうと知らずに挑んでしまつて悲惨な結末を迎えてしまうのはあまりに哀れだ。だから教えてあげようと思つたのさ」

「負けるだと……！ 俺達が勝てないだと……!?!」

「てめえ、自分が神だとしても言いたいのか?」

辺見がその嫌悪感を隠しもせずと言う。

アフロディイの傲慢な態度は、目に余るところの話ではない。

「さあ、どうだろうね? 忠告はしたよ。試合では覚悟しておくことだ。神の前に平伏す覚悟を」

はぐらかすような笑みで、アフロディイは辺見の問いに答えなかった。

彼はそのまま背を向けてグラウンドへ優雅に歩いていく。

「ハン、平伏すのはお前らだ、世宇子!」

「どうどう、咲山、後は試合でだ」

アフロディイの背に罵声を浴びせる咲山を源田が諫めた。

憤懣やる方ないのは咲山だけに限らず、他のメンバーも今のやり取りだけでアフロディイ、ひいては世宇子中への印象は最悪となり敵意が剥き出しだった。

「あんな奴に、俺達帝国が負ける訳にはいかない……!」

「鬼道さんが出るまでもねえ。奴ら、試合では吠え面かかせてやるぜ」

佐久間が固い決意を表明した。それに辺見が同意する。

その後、練習時間にも世宇子は姿を現さず、ますます帝国は憤って試合時間を迎えることとなった。

「奴ら、どこまでも舐めやがつて……! 後悔させてやる!」

「落ち着け咲山……」

帝国でも不良じみでいて気性の荒い咲山が、マスクの下からでもわかるほど激しく口を動かし怒りを露にする。

先ほどから誰かが世宇子に対して爆発しそうになるのを抑えてばかりで、源田も試合前から精神的に少し疲れてきた。

「とうとう鬼道は間に合わなかったか。あいつを欠いて試合を始めるのは痛いな……後半には来てくれるといいんだが」

この中では冷静な寺門が、司令塔である鬼道不在のリスクを分析しながら語る。何せ、忌々しい相手ではあるが、先のやり取りからして世宇子の背後に影山がいることはもはや明らかだ。

地区大会では勝利のためだけに雷門の命を奪いに動いた影山が裏に居るチーム、どのような隠し珠があるかわかったものではない。

強さも戦術も未知数の相手だ。

それと戦うに当たって、こちらが最大戦力で臨めないというのは、不安要素が大きい。

だが居ないことを嘆いている暇はなく、抜けた穴は埋めなければならぬのだ。

「司令塔鬼道さんが居ないととなるとオフセンスもディフェンスも、どうしても動きが遅れそうだな」

「確かに、いつもと同じでは少し乱れが出そうだな」

普段の帝国の「デスゾーン」を主軸とした5-3-2のフォーメーションは、トップ下の鬼道が攻撃と防御を随時指示して臨機応変に敵に対応できる陣形だ。

その中央の鬼道は替えの利かない天才ゲームメーカーである以上、ただそこに人を置くだけでは意味がない。

「ここは成神と辺見を上げて、攻撃に参加する機会を増やそう。代わりにDFには——兵藤、頼めるか」
「わかった」

参謀役の佐久間の言葉を、控え選手の兵藤ひょうどう 雄介ゆうすけが了承する。

帝国においては源田に次ぐGKである彼だが、優れた身のこなしからDFとしても大野達と遜色ない能力を持つ。

普段は後衛でディフェンス中心に動くMFの成神と辺見を前に上げた代わりの守備力の補強としては十分な人材であった。

「よし、今回はこのフォーメーションで行くぞ。『デスゾーン』と『皇帝ペンギン2号』、どちらも積極的に狙っていく」

「了解！」

帝国学園が意思統一を終えたその瞬間、彼らに突風が襲い掛かった。

「なんだ!？」

髪を振り乱されながら、佐久間が風の出所に目を向けるとそこには、ベンチの前に集まっている世宇子イレブンの姿があった。

キーパーを除けば、皆先ほど出会ったアフロデイと同じ白いユニフォームに身を包んでいる。

「あいつらが世宇子中……」

「何か運んできたぞ。スポーツドリンクか？」

彼らは、学校の関係者らしいスタッフが台車で運んできた半透明のドリンクを手に取る。

台車を取り囲むように円となり、彼らは各々持ったコップを掲げた。

「——さあ、神の力の御披露目といこう。乾杯だ。ボクらの勝利に」

『勝利に!』

アフロデイが音頭を取って、チーム全員がそのドリンクを飲み干した。

一息でコップの中身が彼らの口に吸い込まれていく。

その様子に、辺見が忌々しげに吐き捨てる。

「随分とリラックスしてやがるな。余裕ぶってられるのも今の内だぜ」

「待て、奴らいつ来やがったんだ。影も形もなかったぞ?」

万丈が、先程までグラウンドにも居なかった彼らが突如現れたことへの言い知れない不自然さを口にする。

「ククク…いつ、どこから来ていようと関係ありませんよ。私達は敵同士」

「そッスよ万丈先輩。連中、時間ギリギリなんで急いで来ただけでしょ」

五条と成神がそう言うが、表情の読めない五条はともかく、成神の顔色も優れない。

他の者も、垣間見えた彼らの底知れなさをうっすらと感じ始めていた。

「皆、緊張しすぎるな。奴らも同じ人間だ。どれだけ強いかは始まる

までわからんが、絶対に敵わない相手などではない筈だ」

「源田の言う通りだ、あんなパフォーマンスに動じるなよ。俺達は王者帝国、どんな相手でも勝利あるのみだ」

源田と寺門、帝国の守護神とエースストライカーが毅然とした態度でその不安を吹き飛ばす。

やがて、試合開始時間となり、両者が整列して向かい合う。

『さあ、先日の雷門中学と戦国伊賀島中学の対戦から引き続きFF全国大会第1回戦です。絶対王者帝国学園と対するのは、ここまですべてがボールに包まれていた推薦招待校世宇子中学！ ついにボールが剥がれ、披露される彼らの実力は如何程か!? 王者の前にどのような戦いを見せるのか!? 注目の一戦です!』

「フフ……忠告した筈だよ。棄権した方がいいと。天才と名高いキミ達の司令塔もなしに戦えるとしても?」

「鬼道は必ずここに来る。二度も言わせるな、ふざけたことを言うなと」

先の言葉を繰り返すアフロデイに、源田が同じ言葉を返す。

帝国の面々も世宇子を睨み付ける中、アフロデイが妖しい笑みを浮かべて源田を見つめた。

「キミならそう言うと思っていたよ。ただ――

——慈悲というのは、誰よりもキミに向けてのものだったのだけだよね」

コイントスが行われ、キックオフは世宇子中からとなった。

世宇子イレブンが自陣のポジションに就こうとする中、アフロデイは背を向けながらそう呟いた。

『皆さんお待ちせしました! いよいよ運命の一戦の火蓋が切られます!』

帝国は鬼道不在から、多くのチームが採用する攻守共にバランスのいい4-4-2の陣形を採用した。

対する世宇子はFWの出右手^{でめて} 豊^{ゆたか}／デメテルを前面に押し出し、

中盤のMF——アフロデイを生かす4―2―3―1の陣形を取っていた。

そして審判の吹き鳴らしたホイッスルで、ついに試合が始まる。

『さあ始まりました、帝国VS世宇子！ ボールは早速キャプテン、アフロデイへ！ 優雅なドリブルで帝国ゴールを目指します！』

「さて、では教えてあげよう。キミ達の力は何一つ、ボク達に通用しないとね」

ゆつくりと歩くような速さのドリブルで帝国のゴールへ向かうアフロデイ。

それを黙って見ている帝国ではない。

成神と兵藤が素早くアフロデイへと距離を詰めていく。

「そんなとろい動きで源田さんの所まで行かせるかよ！ キラースライド改！」

「ここは通さん！ ホーントレイン！」

2人がボールを奪おうと必殺技を使ってアフロデイに襲い掛かる。

だが、彼はなんら動じることはなく、ゆつくりとその左手を天高く掲げた。

「へブンズタイム」

「——は？」

「いつの間に——」

パチンと指が乾いた音を鳴らしたかと思えば、アフロデイの姿は既に彼らの後ろにあった。

振り向いた彼らは理解が追い付くより早く、巻き起こった突風によつて吹き飛ばされる。

「うああー！」

「ぐっ……」

「成神！ 兵藤！ よくも……！」

突然の事に反応できず地面に叩きつけられた彼らに、今すぐにアフロデイを追う力はなかった。

その一連の出来事を見ていた大野が2人の仇を取ろうと駆け出した。

「行かせねえぞ！」

「神の歩みには、キミ達の通す、通さないなんて意思は関係ないんだよ。ヘブンズタイム」

「——ぬああ!？」

あつという間に守備陣が突破され、アフロデイがペナルティエリアに到達した。

向かい合うのは、帝国の守護神である源田一人。

「……来い」

「天使の羽ばたきを聞いたことがあるかい？」

そう問うたアフロデイの背からは3対の純白の翼が姿を現した。

ボールと共に、ふわりと柔らかく空へ舞い上がっていくアフロデイ。

「真——」

白く神々しい稲妻がボールを覆っていく。彼は大きく羽ばたいて、上から思い切りそれを蹴り飛ばした。

「——ゴッドノウズ！」

凄まじい力を帯びたシュートがゴールへ迫り来る。

迎え撃つ源田も、一目でその威力を悟り本気の守りを展開した。

「フルパワーシールド！」

巨大な衝撃波の壁は神のシュートの行く手を阻む。

しかし一瞬の拮抗の後に呆気なく粉碎され、脇を通り抜けたボールは余波で源田を吹き飛ばしながら、ゴールネットを限界まで千切れんばかりに引っ張った。

『なっ、なんと——！ 源田の守りが、容易く突破された——!? 決めたのは世宇子キャプテンアフロデイ！ 世宇子中はこれ程の力を秘めていたというのか!?!』

「なん……だと……」

「これが、神の力だ」

世宇子は容赦なく、その実力を見せつけ始める。

帝国は神に屈しない

早々に点が取られた異例の事態に、帝国は動揺を隠せない。
地区予選で雷門に点を奪われた時とは訳が違う。

染岡の、予想を越える成長で放たれた新必殺技には、源田も初見こそ対応しきれずに不覚を取ったが2度目はなかった。

だが今の失点は、彼が持ちえる中でも上位の必殺技を正面からぶつけて押し負けたのだ。

「源田、大丈夫か!？」

「っ……大丈夫だ、問題ない」

技を破ってきたアフロデイのシュートの余波に吹き飛ばされた源田に呼び掛けながら佐久間達が駆け寄る。

源田も、少しよろめきながら立ち上がった。

「すまない、皆……!」

「気にするな、俺達を取り返す。どっしり構えてろよ、源田」

「だが、あんな奴らに勝てるのか……」

「弱気になるな、まだ試合は始まったばかりだぞ!」

気に病む様子の源田に寺門がそう言って励ますが、あの凄まじいシュートを見せつけられた咲山が弱音を溢してしまった。

それに大野が渴を入れる。

「源田以上のキーパーなんぞ居るもんか。必ず付け入る隙はある!」

「ああ、俺達なら勝てる!」

「いくぞ!」

奮起した帝国イレブンがポジションに就いて試合を再開する。

「神の力の前には無駄だというのに、馬鹿な連中だ」

デメテルが帝国の様子を見ながら言う。仲間の失敗を補おうとする彼らの姿勢になんら感じるものはない。

人間を超越した世宇子イレブンが信奉するのは、力と勝利のみだ。
「どうやら、彼らはまだわからないらしい。もう少し見せてあげるとしようか」

アフロデイが余裕の表情で、チームメイトにそう呼び掛けた。

世宇子の面々がその言葉にニヤリと笑って頷く。

『先制点を取られた帝国、反撃で世宇子陣へと切り込んで——ああつと！ どうしたことだ!?』

佐久間と寺門を筆頭に攻め込んでいく帝国学園。

しかし、早速異常が発生した。

『世宇子動かない！ 帝国がゴールに迫るのを眺めながら、全くデイフェンスをしません!』

それは、自分達も覚えのある戦術。

以前の帝国では、弱小及び情報の少ない相手と戦う際、始めはあえてシュートを撃たせていた。

それを完璧に源田が止め、その後じつくりと圧倒的な攻撃を行い、実力差を思い知らせる。

挑む者達を徹底的にねじ伏せる王者の戦いだ。

問題は、世宇子が自分達をその戦術でどうにでもできる相手だと思っているということ。

「舐めやがって……後悔させてやる!」

「おう、あれだな!」

「行くぞ、寺門! 咲山!」

ドリブルしていた佐久間が立ち止まり、指笛を吹く。

足下から現れる5匹のペンギン。

雷門戦後、鬼道以外のメンバーも加えた特訓の末、MF陣はこの技に参加できるようになっているのだ。

「皇帝ペンギン——」

「——2号!!」

走り込んだ寺門と咲山が息を合わせて蹴り出した。

更に勢いを増したペンギン達が、ボールと共に世宇子のゴールを指す。

それを余裕の表情で眺めていた“海神”の異名を取るGK歩星^{ほせい}呑一^{どんいち}／ポセイドンが、ニヤリと笑ってその両腕を振り上げた。

シュートにタイミングを合わせ、両手の平を地面に叩きつける。

「ツナミウォールV2!」

その途端、ポセイドンの前で津波の壁が吹き上がり、飛来したペンギンを受け止める。

ペンギンは津波に呑み込まれ、勢いの死んだボールがポセイドンの手に収まった。

「馬鹿な!」

「『皇帝ペンギン2号』が……!?!」

帝国自慢のシュートがあまりにもあつさりと止められてしまったことに動揺する佐久間達。

ポセイドンは当然のことだと笑い、そしてボールを彼らの下へ転がした。

『な、なんと! 世宇子キーパーポセイドン、王者帝国へシュートを撃ってこいと挑発!?!』

「帝国は皇帝ペンギンだけじゃない……! 見せてやる、寺門!」

世宇子の守備陣は相変わらず動く気配を見せない。

ならば望み通りにしてやると、寺門にボールを渡して共に前に出る。

寺門が上げたボールを佐久間が打ち落とし、再び寺門がシュートを放つ。

「うおおおお!!」

だが、特訓を経た寺門がかけるブーストは以前のものよりボールの芯を捉えた鋭いもので、重かった。

「ツインブースト改!」

「ツナミウォールV2!」

しかしそれも、ポセイドンの起こした津波の壁に呑み込まれてしまう。

彼は受け止めたボールを再び佐久間達に渡す。

「くっ……くっ……くっ……!」

「落ち着け佐久間、2度撃って駄目なら3度目だ。来い洞面!」

荒ぶる佐久間に寺門がそう諭し、洞面と共に飛び上がる。

それは3人が回転して生み出したエネルギーをボールに込めて放つ帝国伝統の必殺シュート。

「アスゾーン！」

その必殺技を見てもなお、ポセイドンの余裕の笑みは崩れず、彼はただその身に力を込めた。

元々中学生離れしていた巨体が、さらにそのサイズを増していく。古代ギリシアの神々が戦ったという巨人のような大きさになり、その巨腕を振りかぶった。

「真ギガントウォール！」

拳で殴りつけて、ボールを地面に叩きつける。

フィールドに地割れが広がっていき、地面に埋め込まれたシュートは完全に威力を殺されていた。

『なんとということでしょう！ 帝国の誇る必殺技の数々が、悉く海神の前に止められました！』

「こんなもんじゃウォーミングアップにもならねえな……！」

「そんな、馬鹿な……」

佐久間が眼帯に隠れていない左目を動揺に震わせる。

渾身のシュートの数々が相手のゴールを揺るがせることもできなかった事実、自分達への無力感が襲い掛かった。

彼らを他所に、遊びは終わりだとばかりにポセイドンがようやく世宇子の選手へボールを渡した。

ボールを受け取ったのは平良 貞ただし／ヘラだ。

ギリシャの主神の嫉妬深い妻の名を冠する、額に傷を持ったMFはゴールを見据えてボールを宙に蹴り上げる。

「ディバインアロー改！」

「トリプルパワーシールド！」

ヘラは浮き上がったボールにすかさず連続蹴りを叩き込み、フィニッシュの回し後ろ蹴りでシュートを放った。

それを迎え撃つ源田が、3重の壁を展開。

吹き上げる橙色の衝撃波の壁が、神の矢と化したボールを防ごうとする。

「止められるものか！」

ヘラが、自分のシールドへの自信を叫ぶ。

彼の言葉通り、ボールは3枚の壁を1枚ずつ砕いて進み、程なくして突破した。

「これ以上はやらせん！」

しかし、勢いが削られたそれを源田が直接キャッチして止めてみせる。

「なんだと……!?!」

「ナイスセーブだ源田！」

防いだボールを兵藤が受け取り前線へ運ぼうとするが、彼に容赦ない世宇子のデイフェンスが襲い掛かる。

「裁きの鉄槌！」

「なん——ぐおお！」

D F 部灰 ^{へばい} 炎 ^{えん} / ヘパイスが気で上空に造りだし、振り下ろした巨大な足が兵藤を踏み潰した。

そのまま彼はボールを奪い、それをデメテルに渡す。

「させるか！」

「くっ……今度こそ！」

「ダブルサイクロン!!」

向かい来るデメテルの行く手に、万丈と成神が並んで立ち塞がる。

2人は彼に狙いをつけて風を纏わせた足を振り抜く。

対するデメテルも、走るスピードを上げて対抗した。

「無駄だ。ダッシュユストームV2！」

「おわああ!?!」

「ぐああ！」

両腕を広げて走ることによって周囲の空気を捉え、起こした強い追い風で襲い掛かった風を掻き消してしまった。

それだけに留まらず、そのまま2人を吹き飛ばした。

邪魔を排除してペナルティエリアに辿り着いたデメテルが、周囲に気を放出する。

「ハアアア…… リフレクトバスターV2！」

浮き上がらせた岩石に蹴り飛ばしたボールを反射させる。

跳弾のような現象だが、何故かぶつかる毎に勢いを増していくシュートがゴールへ迫った。

「ビーストフアング！——う、おお……！」

それを獣の牙が迎え撃つ。

僅かに押されながらも、シュートを噛み潰して止めてみせた。

絶大な力がある筈のシュートを止められ、デメテルが目を見開く。

「馬鹿な……」

源田からボールを受け取った五条がそれを辺見へ、そして辺見が佐久間へ渡した。

佐久間が、周囲とのパスを交えながら攻め上がっていく。

その前に世宇子の巨漢DF手魚でいお 激げき／＼ディオが立ち塞がった。

「どけえ！」

「神には通用しない。メガクエイクV2！」

嘲るように笑ったディオが飛び上がり、着地で思い切り地面に衝撃を走らせた。

それは大野の得意技のアースクエイクと似た動作だが、威力は桁違いだった。

この技のそれは、衝撃では収まらずに佐久間達の周囲の大地を隆起させて襲い掛かったのである。

「ぐあああ！」

「うわあー！ー！」

「ぎゃあ！」

「佐久間！ 洞面！ 辺見！」

『世宇子中ディオの強烈な必殺技が炸裂——ッ！ 帝国ボールを奪われる！ このような実力者達がなぜこれまで無名だったのか!?』

佐久間達は対応しきれずに吹き飛ばされて悲鳴を上げてしまう。

ディオは、確保したボールを迷わずアフロデイへ渡す。

「どうやら、ボク以外はキミを破るには不足らしいね。源田くん、キミはボクが直々に潰そう」

「これ以上好き勝手させるかよー！」

「ゴールへは行かせん！」

そう言つてアフロデイが再び帝国ゴールへ向けて歩き出した。当然、大野や兵藤、帝国守備陣もそれを阻止しようと動き出した。源田ならば今度は止めてみせるだろうという信頼はもちろんある。だがアフロデイのシュートはこれまでに見たことがないほど強力なのも明らかだ。それを止めるならば消耗も相当のものになるだろう。

この試合中、その負担を彼一人に押し付けるようでは、DFの存在自分達意義などない。

「アースクエイク改！」

「災害は神の領分だ。神がそれを受けるとでも？」

大野が飛び上がり、着地の衝撃で大地を揺るがすが、アフロデイはそのタイミングを完璧に読んでジャンプし、震動をかわしてしまつた。

「何!？」

「まだだ、キラーズライド改！」

「どうしてわからないのかな——へブンスタイム」

かわされながらもアフロデイの背を追う大野に続き、兵藤がスライディングしながらの機関銃のような連続蹴りを仕掛けた。

それにアフロデイは煩わし気に左手を掲げて指を鳴らした。

「——おわあー！」

「ぐおー！」

「さあ、キミも神の前に跪くがいい！」

アフロデイが羽ばたき、ボールにその力を纏わせる。

そしてゴール目掛けて、またあのシュートを放った。

「真——ゴッドノウズ！」

「ゴールは割らせん！」

対する源田も、不退転の決意と共に、リスクを承知の正真正銘の全力で神の一撃を止めにかかる。

作り出すのは最強の盾。形作られた百獣の王の装飾は吼えるような姿で勇ましい。

「キングシールド！」

ボールは開けられた獅子の大口に飛び込むようにして盾と激突し、激しい衝撃波を周囲に撒き散らす。

凄まじい圧で、ボールは源田ごとゴールへ突き進もうとする。

ズルズルとシューズが擦れてフィールドの地面を抉っていく。

「まだだ…！ 負けられるか…!!」

源田は、翳していた両手を更に盾へ近づくように突き出した。身体の中に残るエネルギーを、もつとこの盾に注ぎ込むように。

否、近づけるだけでなく、両手を盾の中へ突っ込んだ。

「ぐうううああああ!!」

圧縮されたエネルギーの中に無理に入れた手は痛みを訴えるが構わずに動かし、盾のライオンの牙と挟み込む両手の2重の守りで神の一撃の力を殺し切る。

「馬鹿な!? 神の力が、止められた…?」

目の前で起こった完全に予想外な事態に動揺し、アフロデイの動きが止まった。

世宇子の他の選手も同じく、キャプテンのシュートが止まった事実你放心してしまっている。

「源田が守ったぞ！」

「このまま反撃を…!!」

「」

このフィールドで唯一湧いた帝国だったが、彼らもすぐにその感情は消えることになる。

『おつと源田、シュートを防ぎながら試合を止めたー！ どういうつもり——』

源田が、フィールドの外へボールを投げ飛ばしたからだ。

一瞬何をしたのかわからなかったが、同時に駆け出した彼の向かう先に、その意図に気付くことになった。

「辺見、洞面！ 大丈夫か!？」

『あーつと、帝国負傷か!? 辺見、洞面、動けません!』

「ぐっ……くそ……」

先ほどデイオの必殺技を受けた3人の内、佐久間は辛うじて受け身を取れたが洞面と辺見は激しく体を打ったため痛み悶えて立てずにいたのだ。

源田に続き仲間達も彼らに駆け寄り助け起こす。

だが、試合を続行できる状態ではないと判断し、控え選手から帝国一軍の数少ない3年生の渋木翔大と、成神、洞面らと同じ1年生椋本圭が交代してフィールドに入った。

「すみません、渋木さん、お願いします……」

「任せろ。たまには先輩らしいところ見せてやらないとな……」

「椋本、成神、後をお願い……」

「任せろ洞面。無理すんなよ」

「兵藤、お前は大丈夫か？ お前も結構必殺技食らってただろう」

「大丈夫だ。まだいける……」

パーマがかかった髪にサングラスという厳つい見た目だが、彼は先達として頼もしい所を見せる所だ。この場面で奮起していた。椋本も同級生に託された試合に奮い立っている。

2人共気合いは十分。途方もない数がある帝国学園サッカー部の中でベンチに入ることが許されるというだけで実力は折り紙付きだ。

そして、世宇子のスロージンから試合が再開された。

「よし、いくぞー！」

「ああー！」

寺門と佐久間が、まだ動揺から抜けきれていない世宇子からボールを奪い、守備陣も突破した。

それでも身体能力は優れていたが、技術ならば彼ら帝国学園も負けてはない。

無事にペナルティエリアに到達し、シュート体勢に入る。

「——っ。何をしている、止めろー！」

「ツインブースト改!!」

「っ、ツナミウォールV2ー！」

我に返ったポセイドンがゴール前に津波を出現させ、それでもシュートを容易く止めてしまう。

「くそ……！」

寺門が、源田があのアフロデイのシュートを止めてみせた後でそれを勝機に繋げられない不甲斐なさに歯噛みした。

動きを取り戻した世宇子は、再び荒ぶる神々の如き圧倒的な力を振るい始める。

「ダツシユストームV2！」

世宇子は帝国のデイフェンスを前にして一歩も止まることなく、ひたすらにシュートを放つ。

「リフレクトバスターV2！」

「デイバインアロー改！」

「フルパワーシールド！」

「ビーストフアング!!」

襲い来るシュートを源田は全力で止め切るが、攻撃が通らない。

「裁きの鉄槌！」

「メガクエイクV2！」

「ヘブンズタイム」

数々の必殺技が帝国を襲い、彼らにもダメージが蓄積していった。

「ぐう……」

「兵藤！」

その猛攻に、必死に耐えていた者達の1人である兵藤が倒れた。

倒れ伏した彼に見向きもせず、アフロデイが3度羽ばたいてゴールに狙いを定める。

「あんなものはまぐれだと教えてあげよう……！」

——真ゴツドノウズ！」

「キングシールド！」

それでも、ゴールだけは源田が許さなかった。

神の一撃と王の盾の激突は、先ほどの焼き直しのような結果となった。

だが取ったボールを、仲間の負傷を理由にやはり投げってしまう源

田。

試合が止まったのはちょうど世宇子側にも都合がいいタイミングで、選手達がベンチへ呼び戻される。

しかし現状一方的な試合をしている彼らの表情は優れない。

「馬鹿な……神のシユートが止められるなんて……」

アフロデイには0ー1という今のスコアが信じられなかった。

自分達は影山に見出だされ、人間を超越する力を与えられたサツカーの神だ。

それが、影山に完璧な勝利を捧げねばならない自分達が、容易く潰す筈だった帝国学園を相手に失点は論外としてまだ一点しか取れていないのである。

なんとしても源田を突破しなければならぬ。

その一点にのみ思考を回して、アフロデイはベンチに向かう源田が歩きながら腕を擦さすっているのに気がついた。

「皆、ここからはボクにボールを集めろ」

「真・神のアクア」を補給しながら、アフロデイは酷薄な笑みを浮かべてそう言った。

「すまん、皆……」

倒れた兵藤が腕に包帯を巻かれながら謝る。

帝国ベンチでは重い空気が流れていた。

彼の代わりに、今度は2年生大楠おおくす 星士せいしが入ることが決まるが、それが試合を劇的に変えるわけではない。

むしろ、他のメンバーもいつ決定的なダメージを負ってもおかしくないのだ。

追加点こそ源田が防いでいるが、何人も仲間に負傷者が出た状況で現状世宇子のGKポセイドンの守りを抜く手立てが彼らにはなかった。

「……聞いてくれ」

源田がその中で口を開いた。何か覚悟の決まったその顔に誰もが

注目する。

「世宇子の守りを突破できるのは、今の俺達にはおそろく〴〵大帝ペンギン〴〵だけだ」

「だが源田、鬼道さんが居ないとあれは不可能だ」

源田の言葉に佐久間がそう反論する。

皇帝ペンギンとデスゾーンの合わせ技。それは天才司令塔である鬼道の指示があつて初めて成立するものなのだから。

影山の謀略なのかこの場に鬼道が不在な以上、帝国にはどうやっても不可能なのだ。

だが源田は話を続ける。

「それはわかっている。だからこそだ。これからオフENS陣は全員、奴らの攻撃に対応せずに攻撃のみを考えてくれ」

「そんなことしたら守備が……まさか」

「鬼道は必ず来る。あいつが来さえすれば点を取る目も生まれるが、この調子で奴らの攻撃に対応していたら佐久間達が持たない。それでは駄目なんだ」

源田の考えは大帝ペンギンに参加する佐久間達にかかる負担を全力で減らして鬼道が到着するまで持ちこたえるというものだった。

理解はできたものの、佐久間達もすぐに承諾はできない。

成神や咲山等の守備にも回る人員^M_Fの負担を減らすということは、その分をDF達、そして誰よりも源田が負うことになるのだ。

「大野達には負担をかけてしまおうが……勝つために、俺は他の方法が思い付かない。皆、頼む！」

「源田……」

「へっ、一番負担がかかるお前が頭下げてんじゃねえよ」

「ボールをそつちまで通しちまう不甲斐ねえDFだが、居ないよかまじだろう。最後まで付き合つてやるさ」

「ククク……その程度負担にもなりませんよ。私達も見くびられたものです」

しかし、佐久間達が躊躇う策に、誰よりも真っ先にDF達が了解の意を示した。

アフロデイを始めとした世宇子の必殺技を受けていながら皆、迷い一つもありはしなかった。

その様子に佐久間も、止めるのを諦めて頷く。

「……わかった。守りはお前らに任せる。俺達は極力ボールから距離を取る。絶対に鬼道さんが来るまで持ちこたえるぞ！」

『応ッ！』

誰もが大なり小なり傷を負った帝国だが、未だ誰一人勝利を諦めずにフィールドに足を踏み入れた。

「間に合ってくれ……！」

スタジアムへ駆ける仲間の到着を信じて。

鬼道は仲間を見捨てない

鬼道はフットボールフロンティアスタジアムへ向かって、全力で走り続けていた。

一度も休まず走っていて、息も絶え絶えといった様子だがその足は止まらない。

「ハアツ……ハア……間に合ってくれ……！」

彼は祈るようにそう呟いた。

事の始まりは、世宇子との試合を控えた今朝であった。

彼は他の仲間達と合流するため、いつものように鬼道家の車でバスの待つ帝国学園に向かおうとしていたのだ。

しかし、そこで予想だにしない事態に巻き込まれる。

突如、いざ出発しようと車が鬼道邸を出ようとしたその時に、巨大なトラックが鬼道邸へ突っ込んできたのだ。

トラックはそのスピードと質量で門を吹き飛ばし、傍にいた鬼道達の乗る車へ真っ直ぐ突進した。

鬼道は咄嗟に車を出したが、他の者は彼のような素早い反応をすることも、彼が引っぱり出す暇もなかった。

鳴り響く轟音、鉄屑と化する車。

鬼道は急いで携帯を取り出して救急を呼ぶ。

「父さんー！」

鬼道を送り、鬼道が帝国に合流した後、そのままスタジアムへ行つて息子の試合を見ようと鬼道の父も車に乗っていた。

以前、鬼道にFFの3連覇を妹である音無^{おとなし} 春奈^{はるな}を引き取る条件と

して約束していた彼であったが、今年の地区大会決勝にまつわる鬼道の変化を感じとったことで、親として失格であったと自省し、しっかりと父親らしいことをしようと考えた矢先の事故であった。

彼は逃げるのが間に合わなかったものの、急いでシートベルトを外していたので衝突の際の衝撃で車から放り出されていた。

もう一人、逃げ遅れた運転手も重傷だが息はあった。

鬼道が父に駆け寄り、腕を支えにして上体を起こす。

「父さん、今救急車を呼びました。辛抱してください」

「有人……試合は、どうする……」

鬼道は父の言葉で、外面を繕っていただけで混乱仕切っていた頭の中に試合のことを思い出した。

恐らく、今回の試合の相手は影山の息がかかっているチームだ。

もしかしたら、これも影山の仕事かもしれない。

この状況で、チームメイトが自分抜きで戦い始めれば――

だが既に救急車を呼んだとはいえ、大怪我をしている父達を置いてはいけない。

そう葛藤する鬼道だったが、鬼道の父は彼を見て痛みを堪えながら言葉を絞り出した。

「有人……行きなさい」

「父さん!?! しかし……」

「私達は大丈夫だ……」

「父さん達を置いては――」

「友達が、待っているんだろう？ 遅刻になりそうだが……それは仕方ない。それでも、行つてきなさい……」

「………ッ父さん、行ってきます」

「……ああ、いつてらっしやい」

「――俺のサッカーを、父さんに見てもらいたかったです」

そう言い残して、鬼道はひしゃげた門を越えて走り出した。

トラックの運転席をチラリと見たが、そちらには人影がなかった。

無人だったのだ。

嫌な予感が確信に変わりつつあるのを感じながら走る鬼道の前に、その確信が形を伴って現れる。

「どこへ行くこうというのかね、鬼道?」

「影山……!」

「もう総帥とは呼んでくれないのか?」

ゆらりと建物の陰から姿を現したのは、かつての自分達の指導者影山零治だった。

最後に見たときと変わらぬその姿に歯を剥き出して、低い唸るよう

な声が鬼道の口から出た。

その激情を目の当たりにしながら、何ら関心を示さずその言葉のみに反応する影山。

残念だ、とでも言いたげな様子に鬼道の神経が逆撫でされる。

「あのトラックはあんたの仕込みか……!」

「なんのことを話しているのかわからないな。ただ私は忠告をしに来ただだよ、同じサッカーをする誼^{よじ}みでな」

「帝国のサッカーは、あんたのサッカーじゃない! 俺達のサッカーだ!」

「そう噛みつくな……私が言いたいのは、神の力の前には人間があまりにも無力だということだ」

「……どういう意味だ」

「見た方が手っ取り早いだろう」

そう言って、影山は手に取った端末の画面を鬼道によく見えるように突き出した。

映っていたのは、既に始まっている帝国と世宇子の試合だ。

前半終了も間近でスコアは0-1。帝国は点を奪われ、そして奪い返すことができずにいた。

ちやうど今、倒れた選手が運ばれていく。

「……………ッ!」

「これでわかっただろう? 帝国^{やっち}は弱い。お前抜きでは強さの前に跪くほかにない愚か者共だ」

「違う! あいつらは弱くなんか無い!」

「だが、お前は違う。鬼道」

頭^{かぶり}を振る鬼道が見えないかのように、影山は言葉を続ける。

「お前は私の最高傑作だ。戻ってこい、鬼道。下らない反抗は諦め、私の下でただ勝利のみを求めろのだ」

影山はそう言って、俯いた鬼道に手を伸ばした。

それを、顔を上げた鬼道が払い飛ばす。

「鬼道——」

「もう、あんたの言いなりにはならない!」

そう言い捨てて、鬼道は影山をかわしてスタジアムへ走り出した。何故か、追いかけては来なかった。

代わりに、影山は鬼道の背に言葉を投げ掛ける。

「……お前のそれは『逃げ』だ、鬼道。」

サッカーがある限り、お前は私を切り離せなどしないのだからな――

呪いのようなその言葉に、鬼道は聞かなかつたふりをした。

鬼道が必死に走ってスタジアムへ近づいている頃、帝国は変わらぬ世宇子の激しいプレーに立ち向かっていた。

余裕のドリブルでゴールへ向かうアフロデイに、大野達が何度目になるかわからないディフェンスを仕掛ける。

「源田1人に守らせて、DF名乗れるかよお！」

(痛みも疲れも、今は忘れる。狂え、純粹に……！)

「何度やっても無駄だというのにね」

「アースクエイク改！」

大野の仕掛けた必殺技を、アフロデイは今までと同じように容易く回避した。

だが、それは大野も計算ずくだった。人間は宙へ浮き上がった状態ではろくに動けない。

その隙を五条は見逃さない。

「スピニングカット！」

五条が振り抜いた足から放たれた衝撃波がアフロデイへ迫る。

本来は相手の進路上に当てて、地面から衝撃波を噴出させることでボールを奪う技だが、今回は空中にいるアフロデイを狙うため直接彼へ衝撃波を飛ばした。

どんな強者も、空中ならば身動きが取れないという前提は変わらない。い。

「そんな小細工、神には通じないのさ」

相手が、常識の範疇に居たのならば。

アフロデイは空中に居たままボールを操っていた。反対の足で衝撃波を払い、掻き消してしまった。

「なっ……んのおー！」

「ヘアッ！」

「ヘブンスタイム」

策が通じずとも、諦めずアフロデイへ詰め寄る2人だったが、彼の力の前には無力だった。

いつの間にか後ろにいる彼。巻き起こる突風。

神の歩みは、誰にも止められない。

「そろそろ、諦めたらどうか——真ゴツドノウズ！」

「……いー オオア！ キングシールド！」

再び盾が神の一撃の前に立ち塞がり、防ぎ切る。既にこの試合で幾度も繰り返されている攻防だ。

しかし源田には着実に消耗が積み重なり始めていた。

「くっ……」

「よく耐えるね……その献身にはなんの意味もないというのに」

キングシールドは禁断の技、ビーストフアングのプロセスを応用している技で、限界出力で衝撃波を放つフルパワーシールドもそうだが彼の腕には相応の負荷がかかる。

だが、他の世宇子選手ならばまだしも、アフロデイのシュートには源田もこの必殺技を使うしかない。

そこでアフロデイは、自分が集中的にシュートを撃つことで源田を限界まで追い詰める方針に変更したのである。

故に試合が再開してから、シュートを撃っているのは彼一人。守備陣はそれを止められず、彼が最初に止めた一撃を含め、放たれたシュートは既に10本を超えようとしていた。

「好きに言っている……！ ここから先は一点も渡さん！」

「さて、いつまで持つかな」

アフロデイが、吠える源田に冷たい笑みを浮かべて試すように言う。

止めたボールはすぐに世宇子の手に渡った。

「オラア！ サイクロン！」

「ダツシユストームV2！」

駆けるデメテルを万丈が止めようとするが、2人がかりのサイクロンも効かなかつたのだ。

1人で止められる筈もなく、彼は吹き飛ばされて瞬く間にボールはアフロデイへ。

「真ゴッドノウズ！」

「キングシールド！」

『また止めたー！ 源田、アフロデイのシユートを通しません！ 激しい攻防です！』

「ハツ……ウ……まだまだ……！」

「何度でも撃とう。キミがその膝を折るまで」

痺れて震える腕を殴りつける源田に、アフロデイがそう宣告する。

あと何発、ゴッドノウズを彼が防げるのか。

それは定かではないが、確実に限界は存在していた。

「これ以上、源田に無理はさせられねえ……！」

弾かれたボールをなんとか確保した渋木だったが、前を向き直した彼を既にヘパイスが待ち構えていた。

かわそうとしたが、ヘパイスは逃がさず必殺技を発動する。

「裁きの鉄槌！」

「くそ——」

渋木が、咄嗟にボールを椋本に渡した代わりになす術なく神の裁きに踏み潰される。

ヘパイスがボールを奪ったあとには、うつぶせで倒れ伏す渋木の姿があった。

「渋木先輩！」

「いや、逃げろ成神い！」

「へっ？」

倒れる先輩を見て声を上げた成神に、寺門の怒鳴るような勢いの呼び掛けが届く。

一拍おいて、自身の足下にボールが転がってきていたのに気づく。

「神の裁きから逃れられはしない……」

帝国の前衛がこちらを避けていると気づいた世宇子が、わざとそこからへ渡るように転がしたのだ

反応は間に合わない。この場の神々に一切の容赦はなく、ディオが成神へ狙いをつけた。

「メガクエイクV2!」

「うわあああ!!」

「成神!」

ボールがフィールド外へ弾き飛ばされた。

同じく隆起した岩盤に打ち上げられ、地面に叩きつけられる成神。

『帝国また負傷か!? 圧倒的な力を見せます世宇子イレブン! その力はもはや人を超えています!』

倒れて動かない渋木がフィールドから運び出されていく。

しかし成神は、よろめきながら立ち上がった。

「成神、お前もだ。無茶するんじゃない」

「……いやつすよ。これ以上抜けたら、鬼道さんが来ても“大帝ペンギン”が覚束なくなるでしょ?」

成神はそう言って佐久間の交代の勧めをはね除けた。

結果として退場していったのは渋木1人。

彼の代わりに、同じ3年生の恵那えな 和樹かずきがその穴を埋める。

「恵那さん、本当によく注意してくれ」

「わかってる。お前らに心配かけないようにしなくちゃな」

恵那は帝国でもレギュラーに相応しい実力を持っているが、故障しがちなためにその座を得られない人間だった。

この危険な戦場に出したくはなかったが、人手を減らすわけにはいかない。

スローインで再開した試合。

やはり激しい攻防が展開された。

ボールを確保した五条がそれを前線へ運ぼうとするが、世宇子の守備陣が立ちはだかる。

「ククク…… おいたが過ぎましたねえ……!! 分身フェイント!」

仲間達を痛め付けられたことの憤りを不敵な笑みで隠しながら、増えた五条は相手を翻弄して突破しようとする。

しかし、世宇子に端から本物を捉える気はない。

「裁きの鉄槌!!」

「ク——」

2人がかりの、広範囲を覆う巨大な2本の足に五条は分身ごと踏み潰されて呆気なくボールを奪われてしまう。

そして、またボールはアフロデイへ。

「……これで10本目だ。源田くん、そろそろ現実が見えてきたかい？」

「ああ、見えているとも。お前が俺を破れんという現実がな！」

「確かにキミは強い。業腹だが神に最も近い人と呼んでいいだろう。だから、チャンスをあげよう」

彼はこれまでの発言から一転して、向かい合う源田を称えるように告げた。

だがその目は一切笑っていない。

怒りに触れた者を完膚なきまでに潰そうというような、まさしく神の如き冷たいものだった。

「今からでも遅くはない。意味のない足掻きは諦めて、そのゴールを捨てたまえ」

「なんだと……!」

「強がりには止したまえ。わかっているよ、キミももう限界だろう?」

憤る源田を、有無を言わさぬアフロデイの視線が射貫く。

「神は、認めた者には慈悲をもたらすこともある。弱い仲間達を捨ててキミが従うのならば、栄光ある一席を用意しよう」

彼の言葉は、これほどに自分達に失態を演じさせた男の矜持を折るためのもの。

ただひたすらに源田の誇りを踏みにじるだけの言葉だ。

「……………な」

「なんだい?」

「ふざけるなッ!!」

王の答えは決まっている。

「俺は、帝国のGKだ。皆がそう呼ぶ限り、俺がキング・オブ・ゴールキーパーだ！ あらゆる守護者達を差し置いてそう名乗る俺が、ゴールを捨てられるわけがないだろうが!!」

シュートが怖くてゴールを明け渡す輩に、ゴールを守る資格はないッ!!」

血走った目を見開きながら吠える。

その形相に、アフロデイのみならず眺めていた世宇子イレブンまでもが怯んだ。

「ゴールを狙うストライカーに余計な御託はいらん。さあ撃ってこい！ 必ず止めてやる！」

——たとえこの腕が壊れようとも……………!!」

「……………いいだろう。差し伸べられた神の慈悲を払い除けるといふのなら、相応の末路を覚悟することだ……………」

気迫に当てられていた状態から立ち直ったアフロデイがシュート体勢に入るのを見ながら、源田が構えを取る。

「真ゴッドノウズ！」

「キング——」

「うおおおあああ!!」

その間に、大野が雄叫びを上げて割り込んだ。

(何がDFだ)

アフロデイがシュート体勢に入るのを眺めながら、心中でそう吐き捨てる。

もう何度、あの神を名乗るプレイヤーにシュートを許した。

もう何度、共に守ると言いながら守護神に負担を押し付けた。

(源田、お前はいつも自分を勘定にいれやがらねえんだ)

並のキーパーならば一度も防げず、守りを放棄して逃げ出して当然のシュートを幾度も防ぎ、そしてもう一度立ち向かおうとしているGK。

自分の見立てでは、彼も限界が近い。

鬼道が来て点を取れるようになったとしても、その頃に源田が壊れていては意味がないのだ。

(佐久間達が無事なのはいい。でも、代わりにお前が倒れてたら意味がねえんだよ！)

源田もまた、絶対に帝国のために必要な男だ。

守らなければならぬ。

ならばどうすればいいか、それはもうわかっている。

「ぐううおおおおッ！」

「だいでん!？」

「愚かな……」

腹に全力で力を込めて、道を塞ぐ不屈き者を灼く白い稲妻を纏ったボールを受け止める。

吹き飛ばされないように思い切り大地を踏みしめるが、地からは離れずともシュートの勢いにはとても抗いきれず地面に2本の痕を残しながらゴールへと引きずられていく。

このままでは、GKの邪魔をしただけ。だから、足の向きを変えた。体とボールの進路が、ゴールのど真ん中から逸れていって、大野の背中はゴールポストに激突する。

そこでようやくボールは跳ね、高く飛び上がってゴールを越えていった。

ゴールポストに叩きつけられた大野が、仲間達に駆け寄られながらその場にどさりと倒れ込んだ。

「だいでん! お前なんてことを……!」

「大野先輩!」

「へ、へへっ……止めて、やったぜ。うっ、ゲホ! なにが神だ、ざまあみやがれ……」

「……!」

咳き込みながら彼はニヤリと笑って、シユートを止められたストライカーへ視線をやった。

そのアフロデイは、それだけで人を殺せそうな程の激情を込めて大野を睨み付けていた。

「どうだよ、源田。俺もゴール……守れたぜ？」

「だいでん……ああ、ああ！ お前は守ってくれた！ ありがとう……！！ 絶対に俺も守ってみせる……守るからな……！！」

「担架早く！」

フィールドに駆け込んで来たスタッフに担架へ乗せられ、連れ出されていく。

その時、異様な程静かだったスタジアムに、激しい足音が響いてきた。

「皆……！！ 遅れてすまない！」

「鬼道さん！」

「鬼道……」

「ぶちかましてやれ、皆……」

大野はそれを最後に、笑って目を閉じた。

源王は誇りを裏切らない

ついに姿を現した、帝国学園サッカー部のキャプテン鬼道有人。しかし、自分がいない間に戦い傷ついていた仲間達を前に、ゴールの上からでもわかる沈痛な面持ちをしていた。

「皆、遅れてすまな——」

「来てくれてよかった、鬼道」

謝ろうとした鬼道の肩に、源田が微笑みを浮かべながら優しく手を置いた。

誰も、この試合に遅れてやって来た鬼道を責める者などいない。

ただ彼が来てくれて嬉しい。無事でよかった。

「何があつたかは今は聞かない。」

——サッカー、やれるな?」

「……ああ。もちろんだ」

『帝国学園、天才ゲームメーカー鬼道をフィールドに加えました。ここから反撃なるか!』

鬼道がフィールドへ入る。

世宇子のサイドキックで試合が再開されたが、前半の時間はもう残り僅か。

ボールを奪うべく帝国は死に物狂いで世宇子にぶつかっていった。

「うおおおおー!」

鬼道は鋭いスライディングでボールを奪い取り、世宇子選手が追おうとする前に突き放す。

真・神のアクアによって絶大な身体能力を得た世宇子の選手を凌駕する力を発揮したのは、彼にとっては当然のこと。

仲間達がボロボロになりながらも、自分を信じ、勝つために戦い続けている。

遅れて来た自分が誰よりも動かなければ、キャプテンなど名乗っていいわけがない。

「通すな!」

アフロデイの鋭い指示が飛ぶ。

気合いでボールを奪ったものの、かといって自ゴール付近から世宇子ゴールまでは距離がありすぎた。

センターラインに近づいた所で、世宇子の守備陣が動き出すのが彼のゴールに映った。

「くっ……」

佐久間達が大帝ペンギンに備えて世宇子の陣地に入り込んでいく。彼らにパスを回せば、その途端に守備陣はそちらへ必殺技を差し向けるだろう。

しかし自分1人ではこの守備の突破は至難の業だ。

攻めあぐねて、止まりかけた所に後ろから仲間の声が届いた。

「鬼道！ こっちだ！」

「万丈?!」

彼はこちらへ向かいながら、ボールを渡すように促した。

DFである万丈にこの守備を破れるドリブル技はなかった筈。

しかし、覚悟の決まった彼の眼を見て、鬼道はすぐに決断した。

「頼むぞ万丈！」

「ああ。行け、鬼道！」

必ず万丈がボールを届けてくれると信じて、鬼道も前へ走った。

ボールを持った万丈へ手近な選手が迫る。

鬼道が危惧した通り、万丈はこの守りを突破できるような強力なドリブル技を持ち合わせていない。

だが、ボールを鬼道へ渡せさえすればいいのだ。

世宇子の守備を越えるのは自分ではなくボール。

「届けよ……!」

「無駄だ」

「神の力には無力！」

「裁きの——」

詰め寄って来て、頭上にエネルギーで足を形成した世宇子の選手を尻目に、万丈はいつもその必殺技を放つように足を振りかぶった。

周囲から風を集め、ギリギリまで意識を張り巡らせて指向性を与え

る。

「——鉄槌!!」

「サイクロン!」

「何っ!?!」

本来ならボールを持つ相手選手へ放つ風をボールへ向けて放ち、その暴風を受けたボールは世宇子の選手達を飛び越えていった。

万丈はいやにスローな動きで眼前に迫る、巨大な足を視界に捉えながら、飛んでいったボールを受け取った自分のキャプテンの姿を見て笑った。

「行け——お前ら」

万丈が神の足に踏み潰される震動を背中で感じながら、鬼道は口に手をやり、高らかに指笛を吹き鳴らした。

姿を現すペンギン。走り出した佐久間と寺門。

「必ず決めてやる!」

「させるものか……! 蹴り返して——」

その決意を叫び、鬼道はボールを蹴り上げた。

だがそれを黙って見ている筈もない。

アフロデイがその神速を存分に発揮して自ゴールまで戻って帝国のシュートを迎え撃とうとする。

だが走る彼の視界を突然、帝国のジャージの緑色が埋め尽くした。

「なっ!?!」

「ククク……」

(この男、ボクを一瞬止めるためだけに全力を!?)

アフロデイの進路に体を割り込ませてその走りを五条が、ほんの一瞬止めてみせる。

本来の彼ならば満身創痍の五条の妨害程度、涼しい顔でかわしてみせただろうが、今の彼はとても冷静ではなかった。

五条はすぐに力負けして撥ね飛ばされたが、アフロデイはもう間に合わない。

「大帝ペンギン!!!」

デスゾーンの死のエネルギーを纏ったペンギンがボールと共に世

宇子のゴール目掛けて飛んでいく。

所詮、先ほど簡単に止められた必殺技が合わさっただけだ。

世宇子の海神GKポセイドンは、そう自分に言い聞かせながら、全身に力を漲らせていく。

それを掲げた両手に集めて、思い切り地面へ叩きつけた。

「ツナミウォールV2!!」

現れる津波の壁を、今度こそ破らんとしてペンギンが嘴を突き立てていく。

荒々しく揺れる水越しにそれを見て、ポセイドンはそのシュートの力強さを感じ取った。

ポセイドンの感覚は正しく、程なくしてペンギン達はボールと共に、ついに津波を突き抜けた。

「なんだ、この力は……!? ——うおわあ!」

眼前にきたそれを咄嗟にポセイドンが両手で抑え込むが、とても止められるものではなかった。

すぐに彼を弾き飛ばし、この試合で初めて、ボールが世宇子のゴールネットを揺らした。

『ごっ……ゴール! ついに帝国得点! 世宇子に同点——! 王者の意地を見せつけました!』

「やった……!」

「鬼道さん!」

「馬鹿な……こんなことが、あつてなるものか……!」

ついに失点を許してしまった世宇子イレブン、アフロデイがその目を動揺に揺らす。

完璧な勝利をする筈だった。それに塗りつけられた泥。

世宇子のキックオフで試合が再開した瞬間、ボールを持ったアフロデイは、その美しい顔を激情に歪めてゴール目掛けて突撃していた。

「ボク達は、神の力を手に入れた……! その筈なんだ……!」

「行かせん、アフロデイ!」

「邪魔だあ!」

鬼道が立ちほだかるが、必殺技を使う時間も惜しかった。

一刻も早く、あのGKもろともボールをゴールへ叩き込みたい。そんな激情に駆られていながらもアフロデイのプレーは、帝国で随一のテクニシャンである鬼道に比肩するもので、身体能力の圧倒的な差からアフロデイは鬼道のディフェンスを時間をかけずに突破した。そして、鬼道以外の気力だけで立っている帝国の守備など障害にもならなかった。

「神に、勝利以外は許されていないんだよ！」

もはや一片の泥臭さもない、圧倒的で完璧な勝利などありはしない。

本当なら、とつくに潰している筈だった帝国を、心身から支えていたのはあの男だ。

「源田幸次郎……！ これで終わりだ——」

ペナルティエリアに踏み込み、翼を広げて飛び上がった。

これまでで最も、強大な力をボールに込める。

「真——ゴッドノウズウウ!!」

なんとしてもこの失態を拭うために、ゴールどころか、下手をすればその向こうの観客席も吹き飛ばしかねない渾身の一撃を、ただ一人のGKを粉砕するためだけに見舞った。

源田はそれを静かに見据え、腕を広げた。

これで、10回目のキングシールドだ。

(だいでん、お前のお陰だ)

源田は、とつくに限界に達していた。

本来ならばキングシールドは万全でも1試合に6回程度が限度だった。

それをさらに負荷がかかるやり方にして、安全圏を大きく踏み越えたのだ。

もはや痛みは感じない。

彼から腕の感覚は消えており、ただ気力だけで動かしていたのだ。それでも、鬼道が来る直前のアフロデイのシュートを止めるために

10回目のキングシールドを使っていれば完全に動かなくなっていただろう。

だが、大野がそれを代わりに止めた。

(お前のお陰で、ゴールを守れる——！)

彼らこそ、自分の誇りだ。

そして王者がその仲間を裏切ることなどあつてはいけない。

腕に力を込める。

打ち合わせ、盾を作る。

獣の力を注いで完成させる。

「キング——」

「——シールド!!」

吠える百獣の王の盾の大口に、ボールが突き刺さる。

ギャリギャリと、普通ボールから鳴る筈のない耳障りな音を奏でながらシュートと盾は拮抗していた。

源田は、躊躇わずその盾に手を入れて、必殺技と共に直接ボールを抑え込む。

「倒れる！ 屈しろ！ 神の力の前に……！」

アフロデイが、凄まじいシュートを受け止めている源田よりも切羽詰まった表情で叫ぶ。

そこに、試合前のような余裕はかけらもなかった。

なりふり構わず振るった神の力は、これまで最大のシュートを作り出していた。

長い拮抗の末に、盾が甲高い音を立てて砕け散ったのである。

「ハッ……アハハハ！ ハ……」

神はその光景を見て狂ったように笑い声を上げた。

だが程なくして止む。

盾を破ったのに、いつまで経ってもゴールネットは揺れず、審判も笛を吹かなかつたからだ。

「馬鹿な……！ どこに、そんな力を……!?!」

源田は未だ力を残すボールを、盾が砕かれながらも両手で抑え込もうとしていた。

手の内にあるボールにゴールラインを越えさせることを許さなかったのだ。

『とっ……止めました！ 源田止めました！ 今大会でも類を見ない強力なシュートを止めてみせましたー！』

「源田……い、よし、もう一点——」

鬼道が守護神の働きを見届け、反撃に回ろうとして気づいた。

帝国のオフエンス、デイフエンス問わず全ての選手がその場に倒れ伏していたことに。

「お前達……」

彼らもまた、世宇子の激しい必殺技を受けて体を傷だらけにされながら気力で立ち続けていたのだ。

限界を超えながらも走り続けた夢のような時間も終わりを告げ、彼らの体は現実を思い出しただけに過ぎない。

同時に、ポスリとボールが跳ねる軽い音が鳴った。

小さな音だったが、鬼道は聞き逃さずゴールを振り返った。

「源田……？」

源田の手から、ボールが落ちてペナルティエリアから出るように転がっていた。

彼の姿勢は先ほどから変わっていないのに。

嫌な予感を感じて駆け寄ろうとしたが遅かった。

ゆっくりと、おかしなほどにその動きは鬼道の目にはスローに映った。

ぐらりと、その男の体は揺れ、後ろへ傾いていく。

背中から地面に叩きつけられながら、広げられた彼の腕が動くことはなかった。

「源田アアアアアアアア!!!」

担架を持った救急隊員達が急いでフィールドへ駆け込んで来る。

スコアは1-1。同点だが帝国選手がサッカーをできる状態ではなくなったため、世宇子の勝利としてこの試合は決着した。

「アフロデイ……貴様らア！」

「鬼道くん。キミは運がよかった」

「なん……」

ここまで仲間達を痛めつけた張本人である世宇子イレブンへ食つてかかろうとした鬼道だったが、遮るように放たれた、アフロデイの冷えきった声に気圧された。

彼の視線は鬼道には向いておらず、同点を示す電光掲示板だけに、穴を開けそうな程注がれていた。

勝者であるというのに、全くそうは見えない張り詰めた様子で世宇子イレブンはスタジアムを去っていった。

「すまない皆……すまない………ツ!!」

誰にも届かない鬼道の慟哭だけが、フィールドに響いては消えていった。

鬼道のサッカーは終わらない

「帝国学園が……1ー1で、世宇子中に敗れました」

その知らせが届いた時、雷門の面々は誰一人それを信じられなかった。

一番初めに、彼らが雷門イレブンとして走り出す契機となった練習試合。

そこで出会い、圧倒的な力を見せつけ、出場した地区大会の決勝戦で全てをぶつけ合い、それでも敗れた相手。

そしてこの全国大会で再戦を誓った王者達が、1回戦で敗れたという事実は到底受け入れられるものではなかった。

「あいつらが……帝国が負けるわけない！」

「ガセじゃないのか？ 点数からしておかしいじゃねえか」

「そうだ！ 音無、どういうことだ？」

地区大会決勝にて、延長戦までもつれ込む死闘を演じながら、それでも敵わなかった帝国の実力を身を以て知っている円堂が頭を振って叫ぶ。

染岡は幾分か冷静に、今聞いた話から明らかかな異常を指摘した。

彼らの言葉を受けながら、音無はイナビカリ修練場に駆け込んできた時からの暗い表情を解かず、静かに疑問に答えた。

「見たこともない技が次々に使われて、帝国の選手が試合をできる状態じゃなくなっただんです。何人も負傷者が出て、皆病院に送られたそうです……」

「そんな……」

「あの帝国がそんなことになるなんて、あり得ないツス……」

壁山が思わずそう言わざるを得ない程、帝国は強かった。

円堂はそれでも声を上げる。

「そんなわけない！ 帝国の強さは、戦った俺達が一番よく知ってる！ あいつら本気で強いんだ。鬼道も、源田だっているんだぞ！ あいつらが負けるわけないじゃないか！」

「そうだ、源田はそんじょそこらの奴に点を許すタマじゃねえ！」

「……ああ。あいつの守りは間違いなく全国トップクラスだ」

円堂の叫びに同調して、源田から初得点を果たしたが故に、誰よりも実力を思い知っている点取り屋の染岡が叫び、豪炎寺も同意する。自分達が彼から点を奪えたのは、隙を突くことが出来たからだ。

あの戦いで、源田の守りを真正面から破ることは叶わなかった。

音無は、それこそ泣き出しそうな声になって彼らの言葉を否定する事実を述べていく。

「お兄ちゃん……試合に途中まで居なかったんです」

「え？」

「試合に向かおうとした所で、家に車が突っ込んでくる事故が起こって……怪我はしなかったけど、それで試合に遅刻して、参戦したのは前半終了間際だったんです。」

帝国は試合開始直後にとつてもないシュートで点を奪われてから、世宇子のプレーはただただ圧倒的な蹂躪だったと。

源田さんはそれから必死に守ってたんですけど、反撃ができなくて……お兄ちゃんが来てからようやく1点取り返した所で、皆倒れてしまったんです」

「それで、同点での敗退だったのか……」

「源田……あいつが点を取られるなんて……鬼道達が負けるなんて……そんなの、絶対ありえねえ！」

感情の収まりがつかなかった円堂は、壁山が宥めるのも聞かず、彼らに直接問い質すべく修練場を飛び出して行ってしまった。

残された者達にも、円堂程ではないが、簡単には受け入れられない結果だった。

「信じられねえよ。あの源田から開始早々に1点を取るなんて……一体どんな奴だっていうんだ」

「音無さん、その世宇子中って人達は何かないツスか？」

「それが、全く情報がないんです。今回の試合が初めての情報です。……あまりに圧倒的で、情報になりませんが」

「そんな……」

「……今は練習に戻ろう。今は円堂にはやりたいようにさせてやれば」

いい。俺達がやらなければならぬのは、まず2回戦に備えて力をつけることだ」

豪炎寺がそう纏めて、雷門イレブンは不安と戸惑いを残しながらも練習を再開した。

帝国を下した謎の強者達、世宇子中とは何者なのか、想像を巡らせながら。

円堂が駆け込んだのは、おそらく鬼道達が居るであろうと考えた帝国学園。

とにかく、サッカー部の彼らが関わりを持ち、円堂自身が思いつく唯一の場所である、地区大会決勝も行ったスタジアムへ向かった。

そこに行けば、以前駆け回り、戦った芝生の中央に立ち尽くす鬼道の姿があった。

「鬼道ー！」

彼の名を呼べば、ゆっくりと振り向いて顔を向けてきた。

そこに最後に会った開会式での覇気はなかった。

見れば見る程、彼らが負けたという事実を思い知らせてくる。

「笑いに来たのか？ 円堂。……当然だな。俺の無様は、笑われて然るべきものだ」

「笑うわけ、ないだろ……！」

競い合った相手の、今まで見たことのないその弱々しい姿を認めたくなくて、円堂はただただその言葉を否定するしか出来なかった。

見ていられなくて、思わず持ってきていたサッカーボールを鬼道へ蹴る。

だが鬼道は、本来の彼ならば見なくても取れるであろうそれに反応できずに当たってよろけ、尻餅をついた。

立ち上がった後もボールを蹴り返すことはなく、持ち上げた。

ボールを抱えた手に力が籠るが、無意味だと気づいて脱力し、出来たのは円堂へ転がるように投げることであった。

「40年間無敗、常勝の帝国……その伝説を、俺達は終わらせたんだ。これまで勝つことだけを考えて戦い続けてきた。それが……仲間達

が死に物狂いで戦った試合に遅れ、あいつらが倒れるのを見届けることしか出来なかったんだ」

「そんなことない！ お前が来たから、点を取れたんだろ!？」

「俺が来るまで源田が、仲間達が立ち続けていてくれたからだ。俺はその仲間達が倒れるまで戦ったのに、こうしてのうのと、なんの怪我也もなく立てている……!!」

円堂がああ試合での得点を話題に上げるが、鬼道には何もかもが、自分を更に惨めにするものにしただけに感じられなかった。

拳を握りしめ、口元をギリギリと震わせる。

「鬼道……」

「もう、俺にはあいつらに会わせる顔がない。……俺のサッカーは終わったんだ。こんな形、想像したことなかったがな」

「そんなことない！ お前が見捨てない限り、サッカーはお前のものだ、鬼道！」

そう言っただけで円堂が投げってきたボールに、今度は不思議と蹴り返すことができた。

返ってきたボールを受け止めて、円堂は無邪気に笑う。

「ほら。やっぱりお前、サッカーが好きじゃないか」

「……お前には、敵わんな」

その後、鬼道は円堂を家に招いた。この男になら話してもいいと、そんな気がして。

そうして自身のサッカーのルーツを語ったり、それで円堂のサッカー馬鹿は祖父譲りだとわかったり、知らなかった互いのことを知ることになった。

そんな静かな交流の翌日。

鬼道は2回戦の相手、鉄壁の防御を売りにする千羽山中との戦いに向けて特訓を開始した雷門中の様子を見にもいったが、明るくサッカーをする彼らを、すっかり折れてしまった自分と比べてしまった気が落ちしてしまう。

その時、彼の存在を気付いた音無がついてきて、夕陽が差す河川敷

で話をすることになった。

「お兄ちゃん……世宇子中戦のこと、聞いたよ。残念だったね……」

音無がそう慰めの言葉をかけるが、最愛の妹の言葉でも鬼道の心は晴れてはくれなかった。

「残念？　残念なんてものじゃない。俺は仲間があんなことになって
いる時、その場に居ることも出来なかった。守ることも、助けること
も出来ちゃいない……！　こんなに悔しいことが、自分を憎んでしま
うことがあるか……？　俺は……俺は……！」

「自分を責めちゃダメよ！　お兄ちゃんは何も悪くないじゃない！」

「だが……皆病院だ。俺以外は。俺にはもう、サッカーをやる資格は
……」

その時、炎を帯びたボールが鬼道目掛けて飛んできた。

「——ぐああ！」

「お兄ちゃん!？」

「くっ……こんなボールを蹴ることが出来る奴は……！」

反応できず、ボールを腹にまともに食らって土手を転がっていく鬼
道を見て音無が悲鳴を上げた。

感じる熱さと痛みを堪えて、ボールが飛んできた方へ顔を向けれ
ば、予想した通りの人物がこちらへ歩いてきていた。

「豪炎寺か……」

「豪炎寺先輩！」

雷門のエースストライカー豪炎寺　修也である。

音無は、突然の凶行を起こして、まだ鬼道へ歩み寄ってくる彼を止
めようとする。

「豪炎寺先輩！　違うんです、お兄ちゃんは別にスパイをしに来た訳
じゃないんです！　本当です！」

「……“お兄ちゃん”か」

豪炎寺は兄が疑われていると考えて潔白を訴える彼女の言葉に自
分の妹のことを想起しながら、立ち上がった鬼道の前までやって来
た。

彼は鬼道に一言、来いと言って下のグラウンドへ降りていく。

鬼道も、心配する音無が安心するよう肩に手を置いてから豪炎寺に続いた。

2人は河川敷のグラウンドでシュートをぶつけ合いながら叫ぶ。

「鬼道！ お前は、帝国の奴らの怪我を自分のせいだと思うのか！」

「黙れ……！ なんと言われようと、俺が試合に遅れて来た事実は覆らない！」

思い出すのは、試合終了と共に運ばれていった帝国イレブンの様子。

『放せ！ まだだ！ まだやれる！ 俺が、俺達が、点を決めなきゃならねえんだア！ 放せエエエ!!』

『やめなさい！ キーパーの彼もだが、君もひどい怪我なんだぞ?!』

『もう試合は終わった！ 落ち着くんだ!』

担架に乗せられようとした時に目を覚まし、終わってしまった試合に戻ると叫んで暴れ、取り押さえられた寺門。

完全に意識を失い、鬼道到着と同時に運ばれていた大野や、試合後に運ばれていった佐久間達。

世宇子の恐るべきシュートを受け続け、何より、誰よりも傷ついた源田。

彼らを、鬼道は見送ることしか出来なかったのだ。

『右腕は——骨折だそうだ。全治1ヶ月以上はかかるらしい。』

……鬼道、なんて顔してる。先生が言うには、後遺症が残るようなものではない。治ればまたサッカーはできるんだから、そんな顔をするな』

こちらを見て苦笑いしながら慰めようとする源田の、右腕をギプスで固定した姿は頭から離れなかった。

包帯で覆われた左腕も傷だらけなのはまるわかりで、顔などにちらほら見えるガーゼからも、世宇子を相手にして彼がどれだけ無理をしたのかは察するに余りある。

どこからともなく、お前のせいだと刻みつけるような声が聞こえた気さえしたのだ。

「お前の仲間達は、お前が来るのを信じて戦い続けたんだろう?! そ

の結果に後悔するとしても、無念に思うとしても、それは彼らだけのものだ！」

「じゃあどうすればいいんだ！ 俺は……仲間を守れなかった俺は、どうすればいい!？」

「サッカーをしろ！」

こんな心を抱えてサッカーなどできない。

それでも、この男はやれと言う。

「負けて、仲間を傷つけられ、悔しくはないのか！」

「悔しいさ！ 世宇子中を倒したい！ 仲間の仇を討ちたい！」

「だったらやればいいだろう！」

「無理だ！ 帝国は敗退した……もう、戦えない」

「自分から負けを認めるのか、鬼道！」

豪炎寺は、その弱音ごと焼き尽くすようにファイアトルネードを放つ。

激しいシュートの応酬に耐えきれなかったボールが破裂してこのやり取りは終結を迎えた。

「鬼道、1つだけ方法がある」

「――」

豪炎寺の提案に、鬼道は答えなかった。

だが、言うべきことは言った。

後は彼次第だと、豪炎寺は鬼道の背を見送った。

病院では、帝国の選手達がベッドに横たわっていた。

誰もが痛々しい傷を負い、痛みに呻く。

大野などはまだ起き上がることでもできずにいる。

「……サッカー、したいな」

源田もまた、安静にすることを言いつけられて何もすることもなく天井を見つめていると、ガラリと扉の動く音がした。

「源田」

「鬼道か。むん……」

「よせ源田。そのままでもいい」

病室に入ってきたのは、彼ら帝国学園サッカー部を束ねるキャプテンの鬼道だった。

源田は、体を起こそうとしたが鬼道に止められた。

大人しく従ってベッドに横たわった姿勢に戻る。

「お父さんはどうだった？ 大丈夫か？」

「ああ。父さん達も命に別状はないそうさ。お前こそ腕は……いきなりよくなるわけはないな。すまない、気の利いたことも言えないで」「謝るな鬼道。この怪我は俺が、そうなるかもしれないと知っていて戦った結果だ。俺以外の誰にも責任などない」

「そうか……俺も、最後の決心がついた」

源田は少し目を丸くする。

責任感の強い鬼道は、もう自分達では何を言っても自分を責めてしまいそうな気がしていた。

だが今の彼の言葉に、その暗さは既がない。

見てみれば、鬼道はゴーグル越しでもわかる程に目が違う。

もうその瞳に後悔と自責に押し潰されそうな危うさはなかった。

「源田。これは佐久間達にも後で話してくるが……俺は雷門に転入しようと思う」

「雷門に？」

「俺はこのままでは終われない。世宇子を倒し、お前達の仇を討ちたい。証明したいんだ、帝国はまだ負けていないと」

「お前が決めたのなら、俺がどうこう言うこともないだろう。サッカーをしたくないなら迷う必要はない。行ってこい、鬼道」

「……ありがとう。お前の分も戦って、俺は必ず世宇子中を倒す」

手は握れなかったが、サッカーへの情熱の籠る視線を通して、2人の心は繋がっていた。

雷門中の千羽山戦当日、青いマントをはためかせて現れた男がスタジアムを揺るがせることになる。

神は屈辱を忘れない

「ワイバーンクラッシュュー！」

「無限の壁改!!!」

現れたどこまでも連なる石壁が、雷門のシュートを受け止めた。激しく衝突するが、やがて翼竜の勢いが失われ、ボールがゴール前で落ちる。

「くそっ……」

「——ふっ、ふん。豚の鼻くそズラ……」

技の発動が間に合ったのがギリギリだったことに加え、止めたとはいえ染岡のシュートは彼らの予想以上に強かった。

千羽山GKの綾野 あやの 勇一 ゆういち が冷や汗を拭い、その動揺を隠す。

日々の修練で個々の能力が高まりすぎた結果、連携が覚束なくなつた隙を突かれて先制点を取られてしまった雷門。

新たに加わつた天才ゲームメーカー鬼道の手でそのズレは収まつたものの、未だ千羽山の防御を突破できずにいた。

一步も退かない雷門だったが、堅い千羽山の守備に攻め切れず前半終了を迎えた。

「千羽山の守備は去年よりレベルが上がっているな。前も相当だったが、さらに磨きがかかっている」

前回の大会で彼らと戦つた経験のある鬼道がそう語る。

既にそれは雷門の皆も身を以て知つた。誰も否定などしない。

「ところで、『無限の壁』って前に源田の奴が使つてなかつたか？」

染岡が、見覚えのある技の記憶を辿り地区大会の決勝戦のことを思い出して言った。

決勝で源田から点を取るべくシュートを連発した雷門だったが、悉く防がれた。

その時彼が見せた必殺技の中に、ついさつき千羽山が見せたものと同じものがあつたのだ。

鬼道は特に隠す必要もないので答える。

「『無限の壁』は元々千羽山の技だ。あいつは去年戦つた後、研究の

ため習得したに過ぎん。俺も習得していたのはあの時まで知らなかったし、合わなかったらしくあまり使っていないがな」

「つまり向こうが本家か」

「だが模倣の源田が1人でやって、本家が3人がかりじゃ立場がないな……」

風丸が源田のGKとしての実力を実感しながら、技を模倣された千羽山に敵ながら同情する。

千羽山はDFの2人とGKの連携によって“無限の壁”を形成しているというのに、源田は人数を分身で補って実質1人でそれを行ってしまっている。

「実際奴らもそう思ったんだろう。お前達との戦いで見せたから連中、尻に火がついた気分だったのかもしれない。故にこそあの鉄壁なんだろうさ」

「……なんで自分がいない所でまで俺達のシュートを止めに来るんだあいつは」

染岡は源田が間接的な原因となっている今の窮状に、額をピシヤリと叩いた。

そして、その手を下ろした後には勝ち気な笑みを見せる。

「だがまあつまり、源田をぶち抜くにはまずあいつらをぶち抜かなきゃならねえってわけだ！」

「そうだな。奴らの“無限の壁”を破らねば、源田の守りには通用しないだろう」

点取り屋の意気込みに炎のエースストライカーが同意した。

彼らが燃え上がるのに影響されて、リードされている状況に落ち込みかけたチームの雰囲気を持ち直した。

鬼道による後半からのフォーメーション変更には、半田が難色を示したりすることがあったがワントップを務める染岡が受け入れていくことで通った。

「よーし、皆ー。まだまだ勝負はこれからだ、後半も攻めていくぞー」
『おーー！』

円堂の呼び掛けに応え、気合いに満ちる雷門中。

鬼道はその中で、必ず勝ち上がり仲間達の仇を討つという決意を新たにしました。

雷門が千羽山の鉄壁を破って逆転し、準決勝進出へ駒を進めることが決まった頃。

薄暗いスタジアムで、少年達が1人の男の前に跪いていた。

皆一様に緊張と恐怖の入り交じった表情をして、下を向いている。彼らを見下ろす男、影山が静かに口を開いた。

「私はお前達に『真・神のアクア』を与えた。神の力を与えた。そうだな?。」

「……はい。仰せの通りです、影山総帥」

世宇子イレブンのキャプテンとして、アフロデイが表情を消した顔で影山の言葉を肯定した。

「お前達の使命は、私に完全なる勝利を捧げること。そうだな?。」

「……はい。仰せの通りです、影山総帥」

影山は、サングラスで瞳に映る感情を覆いながら発言を続ける。

「お前達は、私に圧倒的な勝利を捧げると誓った。そうだな?。」

「……はい。仰せの通りです、影山総帥」

「では先の戦いの醜態はなんだ?。」

それまで、全くの無だった空間を威圧感が満たし始めた。

影山は彼らへの失望と怒りを声に滲ませる。

世宇子の面々の殆どは萎縮して、頭を更に深く下げることしか出来なかった。

「お前達はただただ圧倒的に、その力で蹂躪して叩き潰す筈だった帝国学園を相手に、たった1点しか奪えず、あまつさえ失点さえした。

お前達が勝ったのは……いや、あんなもの勝利とは呼べない。負けなかったのは奴らが弱かったからであり、お前達が私の想定よりも弱かったからだ」

「……………ッ」

「何か弁明があるなら聞こう。私が与えた『真・神のアクア』は不完

全だったか？」

「い、いえ、確かに『真・神のアクア』は我々に力を与えました！」
「ではなぜ帝国を早々に潰せなかった？　いつまでも追加点を奪えず、点を奪われた？」

世宇子の1人が影山に言葉を返すが、すぐさま更なる追及に押し黙る。

実際の所、点を取られたこと自体は影山もそこまで責めていない。途中で加わった鬼道は彼の最高傑作。1点くらいは奪ってもおかしくはなく、腹立たしいが同時にむしろ誇らしくもある。

問題は、その鬼道が来るまで帝国を潰せずにだらだらと試合を続けてゴールを決められずにいたことだ。

「デメテル。ヘラ。貴様らのシュートに奴の守りは小揺るぎもしなかった」

影山の指摘に、名を呼ばれた2人は唇を噛み締めて俯くしかなかった。

「ポセイドン。貴様は『大帝ペンギン』の力を侮った。『ギガントウォール』ならば防げる可能性はあったかもしれない」

ゴールを許した海神は、屈辱に体を震わせた。

「デイフェンスはもつと奴らを潰す気でやるべきだった。あの実力で慢心し、奴らが気合いとやらを発揮するだけで耐えられる程度の攻撃しかできていなかったのだ」

デイオをはじめとしたDF達が、ある種理不尽さを感じさせる責め方をされるが、とても言い返せない。

影山が世宇子の主だった面々にダメ出しをして、最後にキャプテンであるアフロデイヘサングラス越しに視線を向けた。

「……そしてアフロデイ。貴様は、戦略を誤った。源田を潰すことに固執し、まんまと攻撃陣を温存させたのだ」

確かに佐久間や寺門達、帝国のオフENS陣が守備に関わらないようになつたのはアフロデイも気づいていたが、彼らを侮り、源田を破ることを優先してあまり攻撃しなかったのだ。

それでも、ボールを持てば必殺技が放たれていたが、その数は守備

陣に比べれば、帝国の思惑通り随分少なかった。

影山はそうして世宇子の失策と弱さを咎め立て、粗方言うことを言ったので一度息を吐いた。

「無論、仮に先に帝国を潰していても私は点を取れなかったことを責めただろうな。詰まるところ、お前達はどう足掻いても失態を曝す程に弱かったのだ」

力を与えた本人からの強さの否定に、世宇子イレブンはひたすらに惨めな気持ちで深く跪くしかなかった。

「お前達に『真・神のアクア』を与えたのは失敗だったかもしれない。計画を考え直す必要があるやも……」

「おっ、お待ちください影山総帥！ それだけは……！」

「それだけは、なにかね？」

影山の言葉に、アフロデイは思わず声を上げてしまった。

世宇子イレブンは影山が与える『真・神のアクア』の力で完全に身も心も染め上げられている。

絶大な力を自在に振るう悦楽を知ってしまった。

もうあれなしではサツカーが出来ないようにされてしまった。

その状況で梯子を外されてしまうことは死に等しい。

影山から鋭く冷たい視線を向けられるが、アフロデイは震えながらなんとか言葉を絞り出す。

「もう二度と、あのような失敗は犯しません。どのようなことでもします。どうか、『真・神のアクア』を取り上げることだけは……」

「どのようなことも何も、私が望むのは完璧な勝利だけだ。……既に
お前達には失望している。」

——私を絶望させるなよ？」

次はないと暗に告げて影山は重圧を解き、スタジアムを後にした。

薄暗い廊下を歩きながら、彼は内心でこの予想外の事態に頭を回す。

(忌々しい男だ。大人しく従っていれば栄光を掴めたというのに)

世宇子中にはああ言ったが「神のアクア」は並の人間が飲めば力を得ることもできず壊れてしまう劇薬だ。濃縮した「真・神のアクア」ならばなおのこと。

彼らはその劇薬に耐えて力を得ることができると影山が見出だした選手達。

そうそう代わりなど用意できはしない。

「……だが、これも驕りがちだった奴らにはいい薬になったかもしれないな」

事実、世宇子中は今回の試合を受けてから、激しく特訓に打ち込んでいた。

源田のような男がこの大会でまた出てくるようなこともあり得ないし、ここはプラスに考えるべきだと影山は思考を切り替える。

「……フン。円堂大介の孫、奴が源田を超えることもあるまい」

そう結論を出して、影山は執務室の中に消えていった。

そして影山の叱責から解放された世宇子の面々は練習を始めていた。

2度目の可能性を徹底的に潰すために。

「真ゴッドノウズ！」

「真ギガントウォール！」

神の一撃を巨人の拳が潰そうとするが、僅かな拮抗しかできずに吹き飛ばされボールがゴールネットを揺らした。

その後、シュートブロック等も加えてみたが一度もアフロデイのシュートを止めることはできず、あつという間に練習時間は終わりを告げた。

やはり圧倒的な力だが、あの男には通じなかった。

「源田幸次郎、キミのどこにあんな力があつたというんだ……！」

そんなものではアフロデイの気は収まらず、多くの者がスタジアムを去っても、シュートを撃ち続けていた。

シュートを放つ。

ゴールが揺れる。

もう一度放つ。

ゴールが揺れる。

もう一度放つ。

ゴールが揺れる。

「キャプテン荒れてるな……」

残っていた選手の1人が、神々を束ねる少年の鬼気迫る様子にそんな感想を洩らした。

当然のことではある。

絶対の自信を持っていた筈の力があれ程防がれ、通用しなかったなどとは、とても受け入れられない。

しかし世宇子イレブンは、圧倒的な力を持つ面々の中でも別格のキャプテンがあのような余裕のない様子でボールを蹴る所など見たことがなかった。

「真ゴッドノウズー！」

怒りが収まらない。屈辱感が拭えない。

そしてついに、かつてと同じ甲高い音がスタジアムに鳴り響いた。

「ッ!? ゴールが……」

以前散々破壊して、帝国との試合前に最新鋭のものに取り替えられたのに、それが再び粉碎されたのだ。

ゴールエリアが抉れ、ひしやげたゴールがそこに崩れ落ちていた。

その光景に誰もが息を飲むが、アフロディには気晴らしにもなりはしない。

あのGKを叩き潰さなければ、この激情が収まる筈がない。

「アアアアアア!!」

もう狙えるゴールも消え、優雅さをかなぐり捨てて吠える。

彼が吹き飛ばしたいのはゴールではなく、あの獅子の如き男ただ1人。

見下していた相手に事実上の勝ち逃げをされ、もはや再戦も叶わない。

「クソ……ッ……!!?」

「き、キャプテン? 大丈夫ですか?」

脳内を怒りが埋め尽くしそうになったその時、痺れるような痛みが足に走った。

反射的に、足へ手をやろうとする。

それを見た選手が恐る恐る、アフロデイに心配の言葉を投げかけた。

「……問題ない。少し、疲れたただけだ。またゴールを壊してしまったし、総帥にお伝えしてくる」

その言葉に答えながら、アフロデイは背を向けてスタジアムを後にした。

ほんの一瞬の痛みに大したことはなかった。

ただ先日の試合から疲労が溜まっていただけだと判断し、彼はすぐにそれを記憶から消し去る。

「——もう一片の油断もしない。誰が来ようと、神の力で振じ伏せてやる……!」

一瞬忘れた怒りが再燃したアフロデイは、そう呟きながら廊下を歩く。

その後の試合で、世宇子中は40-0という恐るべき結果を叩き出すことになる。

源王はボールに触れない

安静にすることを担当医に言いつけられ、サッカーもできず不自由な生活を強いられていた源田は、早くも不満が溜まっていた。

無論医師達の言っていることは正論であり、早くサッカーをしたいなら大人しく従うのが一番であることはわかっているが、いつもやっていることができない、してはいけないというのはどうしてもストレスを与えてくる。

その如何ともしがたい感情が胸の内に渦巻きかけたが、廊下の方から聞こえる小走りのような足音と、その後の病室の扉が開く音に掻き消された。

「源田……！ 元気かー？」

「円堂？ どうしてこんなところに……」

「俺が教えたんだ。……おい円堂、見舞いに行きたいと言うから連れてきたのに置いていくんじゃない」

病室へ入ってきたのはこちらを見て年齢以上に子供っぽく笑い小さく手を振る、オレンジのバンダナをした少年。

雷門イレブンのキャプテンにしてGK、円堂守であった。

流石に彼が病院までやって来るなど予想だにしていなかったため、源田は疑問を隠せないが、それには遅れて入ってきた鬼道が答えた。

「ごめんごめん。いても立ってもいられなくて……」

「それで、どうだった。相手は千羽山だったそうだが」

同時に、落ち着きのない円堂を咎める鬼道の言葉を受けて、円堂はバツが悪そうに頬を掻く。

そんなやり取りを見ながら、源田は彼らの試合のことを訊ねた。

彼の言葉に、円堂は勢いよく振り向き、興奮冷めやらぬ様子で答えた。

「ああ、勝ったぜ！ 鬼道は凄かったんだ！ まさに天才ゲームメーカー、大天才、大大大——」

「よせ円堂……」

「ん？ ああ、そっか、お前ら帝国はずっと鬼道とサッカーしてたもんな。当

たり前だったか」

拙いながら惜しげもなく鬼道のことを誉めようとする円堂を、仲間の前で気恥ずかしくなった鬼道が止めた。

源田はその様子に、思わず笑い出しそうになった。

体を震わせ、動かせる左手で口許を隠す彼に、2人とも顔を向ける。

「どうした源田、何か面白いことでもあったのか？」

「いや、お前が雷門でも馴染めていそうだと思っただけ。少し不安だったが、安心したよ」

円堂からしてわかるように、雷門中サッカー部は熱血と根性を全面に押し出すスタイルだ。

対して、負けず劣らずサッカーへの情熱を持っている鬼道だが、彼はあまり多くを語るタイプではないし、一応帝国という敵チームの者だったということも心の距離を作るだろう。

そういった理由で、鬼道が雷門のチームに受け入れられているか若干心配していた源田だったが、目の前のやり取りから杞憂であったと察した。

そんな彼の心中を知らない円堂は首を傾げながら、手に提げていた籠かごの存在を思い出す。

「そうだ！ お見舞いにこれ、持ってきたんだ。よかつたら食べてくれ」

「……あ、ああ……」

そう言っただけで、ベッドの側の机に籠を置く。

中身はバナナ等のありふれた果物や駄菓子が入っていた。

源田がそれらを見て固まった。彼は右腕をギプスで固定されている。

鬼道がため息を吐いて、円堂に言う。

「片手でどう食うんだ？」

「ん？ ああっ！」

悉く気遣いが裏目に出た円堂。

このままこれらを置いていくことはできず、皮を剥いたり、袋を開けたりして源田に食べさせることにした。

「……うまいな。駄菓子こういうのは久しぶりだ」

「食べたことがあるのか、源田？」

「お前らの近所には駄菓子屋とかないのか？」

今の暮らしでは縁がない素朴な甘味に懐かしさを覚えて感想を言う源田に、同じく縁がなかった鬼道は意外そうにした。

そんな2人の様子に、円堂は首を傾げる。

「俺は昔食べていたことがあるだけだな」

「孤児院ではそういうものは春奈にやっていたし、父さんに引き取られてからはそもそも見る機会もなかったな」

「そうなのか、じゃあ今度駄菓子屋行こうぜ！ 学校の近くにあるからさ」

「駄菓子か……」

「ははっ、いいんじゃないか鬼道。出来ればまた持ってきてくれ」

「いいぞ！ お前も早く元気になれよな、源田。豪炎寺達も早く治せって言ってたぞ！」

「言われる間でもない、さっさと退院して鍛え直すさ。……ところで円堂。話は変わるが、鬼道は雷門中に行って上手くやれているか？」
「なんでそんなことを聞く源田。俺が帝国で成績トップだったのを忘れたか？」

「いやそういう心配はしていないが、チームはともかくクラスで孤立していたりしないかとな……学校はサッカーだけやっていればいいものではないしな」

既に人間関係なども構築されているであろう教室、そのうえ既に入学からしばらく時間が経っている中途半端な時期にドレッドヘアにゴーグルという癖の強すぎる見た目をした帝国出身の生徒が転入してくるといふのは、至って普通のマンモス校だという雷門中の生徒には刺激が強いかもしれない。

鬼道自身が積極的に誰かに絡んでいって騒ぐというタイプでもなかったため、慣れ親しんだ仲間達も居ない中で1人寂しい思いをしていないかと、源田は友人の学校生活を心配せずにはいらなかった。

「うーん……俺、鬼道とクラス違うからな。そうだ！ 夏末が同じク

ラスだったはずだし、今度聞いてくるよ」

「やめろ円堂」

真面目に彼の質問に答えようとして、円堂がそう言い出したのを鬼道が食い気味に止める。

そんな2人を見て、源田がまた笑う。

しばらくして、他の皆の所へ行つてくると言つて鬼道が病室を出たため、円堂と源田の2人きりになった。

「——でき、千羽山の『無限の壁』は硬かったけど、俺達の新必殺技『イナズマブレイク』でズバーンとゴールを決めて勝てたんだ！」

「俺達が去年奴らと戦った時は『無限の壁』を出せないよう誘導して点を奪っていたが——ふむ、甘い——さらに強化していたらしいのに、それを正面から破るとはな。流石だ」

思い出しながら興奮して試合のことを話す円堂に、源田は皮の剥かれたバナナを頬張りながら言葉を返す。

去年、帝国でも前半終了間際に隙を突くことでようやく点を奪えた相手の守りを力で突破した雷門の実力は既に全国でも5本の指に入るだろう。

伊達に帝国と互角に、延長戦まで戦っていない。

「おう、今度やる時はお前から点を取ってみせるからな！ 早く治してまたサッカーやろうぜ！」

「そうだな……もうじき外出の許可が出る。まだサッカーはできないが、折角だ。決勝戦の少し前くらいになるが、お前達の練習でも見に行こうか」

「ほんとか！ ……というか、もう動いていいのか？ 帝国の奴ら、皆安静にしてなきやダメなんだろう？」

「右腕の怪我は重いが、俺の場合それ以外は帝国の中で一番軽傷だ。皆ももうベッドから起きるくらいはできてるしな。それにいつまでも寝ていたら体が鈍る」

「そっか。なら安心だな！ 歓迎するぞ！」

「——円堂。そろそろ帰るぞ」

2人が話の花を咲かせて居た所に、他の帝国メンバーを回ってきた

らしい鬼道が戻ってきて、円堂に帰宅を促した。

窓を見れば、すでに夕陽で空が赤く染まっていた。

すっかり話し込んでいたことに気づき、帰り支度を始める。

「またな、源田」

先に病室を出た鬼道に続こうとした円堂の背に源田が声をかけた。

「……円堂。世宇子中と戦った農山光中だが、4010で負けたそう
だ」

「40……!?!」

そのスコアに、振り返った円堂が戦慄する。

かつて帝国との練習試合で奪われた点の倍。戦った相手が弱かっただけ、などということはありません。

雷門中が既に戦った戦国伊賀島中や千羽山中は決して油断できない相手だった。

他のどの学校も彼らと同じく、各地区の激戦を勝ち抜いてきた全国の舞台に相応しい猛者達だ。

それがそんなにも一方的にやられるなどにわかには信じがたかった。

「おそらく、準決勝で当たる狩火庵かりびあん中も奴らには太刀打ちできんだろう。お前達が勝ち進めば、間違いなく世宇子中とぶつかることになる」

「世宇子中と……」

円堂は、帝国を下したまだ見ぬ世宇子イレブンに思いを馳せる。

源田は反応をみせる彼にまっすぐな眼差しを向けて言葉を続けた。

「奴らとの戦いは、きつとお前達の中でもこれまででない激しいものになるだろう。だから円堂、鬼道のことを頼む」

見つめてくる源田の思いを汲み取り、円堂は笑って答えた。

「任せろ！俺はキャプテンで、今は鬼道も雷門の一員だ。ゴールだけじゃない。皆俺が守ってみせる！」

「……ありがとう、円堂」

そのやり取りを最後に、円堂は病院を後にした。

後日、雷門中は準決勝でかつて豪炎寺が所属した木戸川清修中を倒してついに40年ぶりに決勝戦へと駒を進める。

対するは、数々の学校を一方的に蹂躪してきた世宇子中。運命の日が、近づいてきていた。

円堂は努力の否定を許さない

外出許可が出た源田は、今練習をしている筈の雷門中へ向かっていった。

稲妻町の閑静な住宅街を歩いていると、後ろからエンジンの音が聞こえてくる。

振り返って見ると、黒い車が後ろから走ってきて、スピードを落として源田の側の路肩に寄ってきた。

彼の横に止まった車の窓が開き、乗っていた者の正体が露になった。

「久しいな源田。ボールにも触れられない、惨めな姿になったものだ。自らの愚かさを痛感したかね？」

「影山……!?!」

現れたのはサングラスをした細長い横顔。

忘れもしない。かつて自分達帝国学園を指導し、地区大会決勝で帝国を去り、そして今、帝国を潰した世宇子中の背後に居る男だった。

「まったく、お前も総帥とは呼んでくれないのか。鬼道もお前達も、今まで育ててやった恩師に対して薄情なことだ」

「アンタに『恩』があればの話だ……！ その育てた教え子達をあんな目に遭わせておいてよくもそんなことが言えたな」

「クッククック……怪我をするのは弱いからだ。そして弱者に、敗者に価値はない。私はお前達に今までそう教えてきた筈だぞ」

卑怯にして卑劣、サツカーを蝕む邪悪の権化の如きこの男を相手にして、源田の態度にも棘が混じる。

しかしその言葉を受けても涼しい表情の顔を向けもせず、影山は言い返した。

勝利こそが全て。

影山が人生を通して得た持論であり真理。

敗北したならばあらゆるものは無価値であり、勝利のためならばあらゆる非道も正当化されるといふ彼の思想に、帝国イレブンは賛同できなかつたからこそ鬼道と共に反旗を翻した。

この男の謀略と工作を排して、自分達の手で勝利と栄光を掴むために。

「だがお前達は神の力の前に敗れた訳だ。どれだけ足掻いていたとしても、残るのは敗北のみ」

「……残るのは敗北だけじゃない」

「ほう……？」

源田の反論に、影山は興味深そうに顔を向ける。

「勝ちたかった奴らの思いが残る。まだ鬼道がいる。雷門中がいる。あいつらが、その思いを一緒に連れていくんだ。」

「フン、何を言うかと思えば。世宇子中に負けた帝国お前達に負けた者達に何を期待している？ 鬼道の持つ力は一人で試合そのものをどうにかするような代物ではない」

「鬼道一人で勝てるなんて思っちゃいけない。雷門中が居ると言った。あいつらは必ず、鬼道と一緒に世宇子中を倒す」

「何故雷門中にそのような期待が出来る」

影山には源田の考えが心底理解できなかった。

雷門中。彼らは帝国を相手に互角に戦った。全国大会でも決勝戦まで勝ち進んできた。

確かに強いだろう。それなりには。

だが世宇子中には勝てはしない。

絶対の自信を以て影山は告げる。

「円堂は、どんな強い相手でも絶対に諦めない。アンタのような奴が相手ならなおさらにな」

「円堂守……」

神に一矢報いたこの源田と同じポジションの少年。

自分の人生を狂わせた憎むべき男の血を受け継ぐ者の名を聞いて、影山の声から感情が抜け落ちた。

正確には、許容量を超えた感情を表現することができなくなった。もうこれ以上話す気が失せる。

もともと響木のことを煽るために稲妻町まで来たのだ。

この会話は正真正銘の寄り道に過ぎない。

そんな理屈を心の中でつけて、会話を切り上げた。

自分が多少とはいえ目をかけた男が、よりにもよってあの男の孫を認めているかのように語ることが気に入らなかったのだ。

「貴様の円堂への期待がまったくの的外れだということは、試合でわかることだろう。もつとも、既に倒されているかもしれないがな」

「なんだと？」

源田の疑問には答えず、影山は窓を閉めて停車していた車を再び走らせた。

すぐに距離が離れて小さくなっていく車を見送り、源田は雷門中の方の空を見る。

地区大会でこそ源田は円堂達に競り勝ったが、今もその実力差だとは思っていない。

何故なら、彼らはどこまでも成長するから。

円堂はどんなに強い相手が居ても腐らず、諦めず、超えようと足掻き続ける。

そういう男だから、王者を超えていけたのだと彼は知っている。

だがそれは成長してからの話。

言い様のない不安から、少し歩く足を速めることにした。

一方。準決勝を制し、FF決勝戦を目前にして練習に励んでいた雷門中では剣呑な空気が流れていた。

その空気を中心に居るのは雷門イレブンのキャプテンである円堂と、練習中に突然現れてシュートを止めた少年アフロデイ。

「自己紹介させてもらおう。ボクはアフロデイ、世宇子中のキャプテンだ。鬼道くんは知っているだろうけどね」

「アフロデイ……！」

「お前が世宇子中……！」

帝国の仲間達を痛めつけた張本人の登場にいきり立つ鬼道と、アフロデイの超然とした佇まいに呆気にとられる円堂。

そんな円堂を見つめて、アフロデイは微かに口角を上げた。

「円堂守くんだね？ キミのことは影山総帥から聞いているよ」

「鬼道から聞いちやいたが、本当に影山がお前らのバックに居やがるのか……！ 宣戦布告に来やがったな！」

「宣戦布告？」

いの一番に噛みついた染岡の言葉にアフロデイが反応する。

自分達の頭上に鉄骨を降らせて殺しにかかってきた男の下でサツカーをしている少年を前に、雷門イレブンは警戒を隠さない。

その空気をもともしないアフロデイは、警戒した彼の推測を笑わなかった。

「ああ、そう捉えてもらって構わない」

「……！」

「ただし、宣言しておこう。決勝戦でキミ達に勝ち目は無い。我々世宇子中は、キミ達雷門中を徹底的に叩き潰す」

「待てよ。勝負はやってみるまでわからないだろ！」

勝敗を既に決めつけているアフロデイの言い方に円堂が物申した。

反論してきた彼にアフロデイが目を向けて口を開く。

「そうかな？ 林檎が木から落ちるように、水が低きに流れるように、変えようのないこの世の摂理はあるものだ。それに逆らえばどうなるか……その末路は、その鬼道くんがよく知っている筈だ」

「くっ……！」

アフロデイの言葉で倒れ伏した帝国の仲間達の光景を思い出した鬼道が歯噛みする。

傲慢極まりないその物言いも、彼が言うのならば真実のように思えてしまう。

「だから、諦めるならば今の内だ。無駄な練習を続けることもないだろう？」

鬼道へ向けていた視線を円堂に戻し、アフロデイはそう決定的な言葉を告げた。

絶対に聞き流せないその言葉に円堂の表情が、仲間達が見たことがない程に険しくなる。

「練習が無駄だって……？ 取り消せよ、今の言葉……！」

「取り消す必要があるかい？ キミ達が練習する間に、ボク達も練習をしている。だが人と神の歩みの速さは比べ物にならない。追いつきようがないのだから、キミ達のそれはやるだけ無駄だ」

「誰だって皆最初は弱い。だから強くなるために練習するんじゃないか！ 無駄なんてなりはしない。そんなこと言わせないぞ！

練習はおにぎりだ。俺達の血となり、肉となるんだ！」

「フフ、練習はおにぎり……うん。うまいことを言うじゃないか」「笑うところじゃないぞ……！」

円堂の魂からの叫びも、アフロデイには響かない。

彼も、円堂達が自分の知る絶対の真理を理解してくれないことに困り顔を作った。

「どうもわかってもらえないようだね。それが無駄なことだと、証明してあげるよ！」

そう言つて、先ほどシュートを止めてから持っていたボールを高く蹴り上げた。

雷門中の「イナズマ落とし」すら上回る高さ。そこに、先ほどまで円堂達の輪の中央にいた筈のアフロデイの姿まで現れる。

「なに!? いつの間に……！」

まったく彼の動きが見えなかった染岡が、思わず先ほどまでアフロデイの位置と今の位置に何度も目を行ったり来たりさせる。

他の者達も呆気にとられていた。

ただ一人、既に身構えてシュートに備えていた円堂を除けば。

「フツ」

上空で上げたボールに追いついたアフロデイは、軽い様子でシュートを放った。

だがそのボールは回転と共に禍々しいオーラを纏っていき、蹴った瞬間からは想像もできないほど明らかに強力なシュートと化していた。

円堂はただのキャッチで止められるものではないと察知して、気を放出する。

「ゴツドハンドー！——うわあっ！」

光輝く巨大な掌がそのシュートを受け止めようとする。

しばらくの間激しく拮抗した後、神の手が砕け散ったが、ボールの軌道は逸れてゴールのクロスバーに激突して跳ね返っていった。

だが喜べることではない。

弾かれたボールは今まで見たことがない程怒っていた円堂を見守っていたマネージャー達の方へ飛んでいっていたからだ。

「っ、危ない！ 3人とも逃げろ！」

気づいた円堂が、弾き飛ばされて倒れ込みながら彼女達に叫んだ。

まだボールの勢いは死んでいない。当たれば怪我をしてしまう危険もある。

しかし3人は反応できない。周囲に居た雷門イレブンも同じく。

「春奈、避けろーっ！」

鬼道は妹の危機を察知して走り出したが、距離があり間に合いそうになかった。

彼女らは避けられないと思って、来る痛みを思い目を瞑る。

だがその痛みが来ることはなかった。

「今日は見に来ると伝えたんだが……穏やかな空気じゃないな」

「源田ー！」

「源田さん!?!」

現れた源田がマネージャー達の前に立ち、左手でボールを受け止めていた。

ボールは凄まじい回転で彼の掌と擦れながらと音を立てていたが、やがて収まり地面に落ちて、細かく弾みながら転がっていった。

「あ、ありがとう……」

「怪我がないならいい」

思わぬ人物の登場に理解が追いつかないながらも、夏未がそう礼を言った。

その言葉を受け取りつつ、源田はこの空気の元凶に目を向ける。

ちようど、そちらも彼を睨み付けていた。

「随分はしゃいでいるな、アフロディ」

「キミは痛々しい姿になったものだね、源田くん」

「おい、もう一発、来いよ！ 本気で！」

地に降り立ち、目の前まで歩み寄ってきたアフロデイと対峙する。彼の瞳には今すぐ目の前の男を打ち倒したいという昏い炎が映っていた。

そこへ、アフロデイのシュートを受けてよろめきながら円堂が加わった。

いつも明るい彼らしからぬ危機迫った様相だ。

「円堂……」

「源田、秋達をありがとう。でもちよつと退いててくれ。これはこいつと俺の問題だ。来いよ、あんなの本気じゃないんだろ！ 本気でドンと来いよ！」

「……神のシュートをカットしたのは、キミで2人目だよ」

源田、そしてその次に円堂へと、視線を送って、感情を抑えようとした冷たい声色でアフロデイが呟く。

自身のシュートは源田にもう止められている。

必殺技ですらないただのシュートとはいえ、止められて面白がれるような余裕は彼にはなかった。

「だがやはり、ただのシュートでそんな様では勝ち目はないね。源田その彼にも及ばない力で決勝戦に来るといふのなら、覚悟をしておきたまえ。

——その戦いがキミ達の最後のサッカーとなることを」

「待て！ 待てよ！」

最後にそう言い残して、アフロデイは姿を消した。

微かに髪を揺らすそよ風だけを残し、最初から居なかったかのように居なくなってしまったのだ。

嵐のように去っていった神の見せつけていった力と警告に誰もが息を呑む中、緊張が解けた円堂がその場にへたり込んだ。

「大丈夫か円堂？」

「いいよ源田、怪我してるのに」

「そうだぞ源田。あのボールを止めただろう。お前こそ左手を見せ

ろ」

「えっ……だ、大丈夫だこれくらい」

円堂は駆け寄ってきた豪炎寺と鬼道が助け起こし、そのまま先ほど跳ね返ったシュートを素手で受け止めた源田へジロリとゴースル越しに目をやる。

鬼道の指摘にたじろいで左手を背にやる源田だが、背後から突然その手を取られた。

「なんっ……キミは確か……」

「真っ赤じゃないですか！ ダメですよこのまま帰ったりしたら！ ちょっと救急箱取ってきますから、待っていてくださいね！ 帰らせちゃダメだよお兄ちゃん！」

真っ赤になった手を見た音無が、鬼道にそう言いつけて部屋へ走っていった。

鬼道も妹の言葉に従って源田を見張る。

「鬼道……もしかしなくても、お前妹さんのことが大好きだな？」

「当然だ」

「真顔で言うな、聞いたこっちが恥ずかしくなる」

「大人しく待っている源田。そもそもお前に妹を守ってもらって、その手のまま帰すのは友人としても許せん」

「源田！ お前右腕怪我してるのに左手まで怪我するんじゃないぞ！」

鬼道に言われて、さらに円堂も加わり源田は観念するしかなかった。

音無に擦り傷がいくつもできてしまった左手の平にガーゼを貼られる。

その様子を眺めながら、主要メンバーが先ほどのアフロデイの実力を思い出して語る。

「凄まじい奴だったな。アメリカでもあんなノーマルシュートは見たことがない」

「ああ……あれは必殺技ですらない。源田が止めていたシュートはあんなものとは比較にならない」

「ただのシュートであの威力か……決勝戦はとんでもないことになりそうだな」

「そうだな……源田はやっぱり凄い奴だ。俺も負けてられねえ！」

アメリカ時代の土門と秋の親友にして、フィールドの魔術師と称される天才プレイヤーいちのせ一之瀬かずや一哉や鬼道達が

アフロデイの本気を想像して、円堂は燃え上がった。

「絶対試合ではあいつのシュートを止めてやる！ きつと勝てる」

「いや、無理だ。今のお前達には絶対にな」

「響木監督……!?!」

円堂の言葉を否定したのは他でもない、彼らをここまで導いてきた響木その人だった。

光は影を消しきれない

世宇子中の圧倒的な実力を垣間見てなお奮い立っていた円堂には、響木の言葉はあまりにも無情なものに思えた。

素直な彼にしては珍しく少々むきになったようで、豪炎寺達にシユートを頼む。

「ワイバーン——」

放たれるシユートは雷門イレブンの主力2人の合体技である。

これによって、多くの試合で得点をもぎ取ってきたのだ。

「——ストーム！」

爆炎を纏って赤く染まった翼竜が円堂に襲いかかった。

その円堂は右腕を突き上げて気を立ち上らせた。

現れるのは、帝国との戦いで見せた黄金の魔神。

「マジン・ザ・ハンドー！」

その剛腕が、シユートを受け止める。

しばらくの拮抗の末にボールは彼の手に収まった。

だが、それを見ても響木の顔は優れない。

「……円堂。お前も気づいているだろう？ 今の『マジン・ザ・ハンド

』は未完成だとな。完成したそれであれば世宇子のシユートは止められん」

「……でも」

響木の見立ての通り、円堂が帝国学園との戦いで使用した『マジン・ザ・ハンド』は強力だったが、未だに祖父の領域には届かずにいた。

ノートを見るに、まだ足りない何かがあるのだがその何かがわからない。

そのため、円堂はここまで未完成のまま使い続けてきたのだ。

「なら、完成させるために特訓しなきゃ——」

「『マジン・ザ・ハンド』はただ闇雲に鍛えるだけで完成する技ではない。今までお前ができていた形だけのそれが、がむしやらの限界だ」
尚も言い継ろうとした円堂を響木が封じる。

それでようやく、先ほどの邂逅から頭が冷えた円堂は響木の言葉を受け入れた。

だがそれは状況の改善に繋がることではない。

「じゃあ、一体どうすれば……」

「——合宿だ」

「へ？」

何か更なる特訓があるのかと思っていた円堂は、その言葉に目を丸くした。

決勝戦2日前にして合宿を決めた雷門中。

皆が必要な物を取りに各々家に戻る間に、処置を終えて学校を出ようとした源田を響木が呼び止めた。

「坊主、ありがとうな。マネージャー達を守ってくれて。チームを預かっている監督として、礼を言わせてくれ」

「……いえ、俺がしたのは当然のことです。お礼を言われるようなものではありません」

「それでもだ。若いのにそう固くなるなよ？ 今度雷雷軒うちに来たらサービスしてやる」

「確か……ラーメン屋でしたか」

「おっ、知っているのか？ 自分で言うのもなんだが、寂れたうちのことをよく知ってるもんだ」

「この前見舞いに来てくれた円堂が話していましたよ。 監督のラーメンは最高にうまい」と何度も何度も聞かされました」

「フッフッフ、あいつはまったく……」

2人は随分歳の離れた組み合わせだったが不思議な空気で通じ合っている、そんな他愛のない話で笑いあっている。

半身で構えていた源田は響木を正面にして向き直った。

「俺からもあなたにお礼が言いたい。響木監督、鬼道のことを受け入れてくれて、ありがとうございました」

「それこそ礼を言われるようなことじゃねえよ。サッカーをやりたい」

「……あなたが雷門中の監督でよかった。円堂はもつと強くなりま
す。あいつが居るから、俺も負けないように強くなれる」

「強くなるには、まずさつきとその怪我を治すこつたな」

「仰る通りです。では、失礼します」

源田が校門から出ていこうとしたその時、鬼道に、叫びに近い声で
呼び止められた。

「源田！ よかった、まだ居たか。合宿前に皆の見舞いに行こうと
思つてな。お前も乗つていけ」

「いいのか？ すまないな」

「気にするな。怪我をしているのに歩いて帰らせる訳にはいかない」

話しながら並んで歩いていく2人を、響木はサングラスの下から優
しい眼差しで見送っていた。

源田は病院に戻った時、看護師に左手の怪我が見つかりこつぴどく
叱られてしまう。

解放された頃には太陽が地平線の向こうへ沈み切る寸前。

源田が佐久間達の病室に行けば、既に入っていた鬼道が佐久間の
ベッドの傍に座つて話し込んでいた。

「……さて。そういう訳で、急遽雷門中で合宿をすることになった」

「合宿かあ……鬼道さん、FFが終わったら俺達も合宿やりませんか
？」

「フツ。遊びに行くみたいに言うな、雷門の特訓はなかなかハードな
んだぞ」

「おい佐久間。合宿なんてすれば間違つても問題を起こさんように規
律正しく行わなければならん。成神や咲山辺りに手を焼きそうだと、
勘弁してくれ」

隣のベッドに寝ていた寺門が佐久間の言葉に反応する。

帝国イレブンにはサッカーの高い実力を備えた濃い面子が揃つて
いる。

時間やルールに厳格な寺門が、我が強い彼ら、とりわけルーズな面
のある成神等との共同生活を想像して澁面を作った。

「まあそう言うな寺門。いいんじゃないか？ 楽しそうだ」

「源田。お前本当に『楽しそう』しか考えてないだろ……いろいろ大変なんだからな」

そこへ源田が話に加わった。

合宿に肯定的だが、何かと後輩達に甘い彼の発言であるため寺門が突っ込む。

「おつ、源田。やっとお許しが出たか。ようやく落ち着いてきたのに、擦り傷とはいえまた怪我して帰ってきたら看護師さんも怒ってただろうなあ」

「放つといってくれ……」

源田の存在に寺門に続いて気付いた佐久間がニヤニヤとして茶化すのに源田が苦い顔で返す。

2人のやり取りを他所に、寺門が顔を鬼道に向け直して言う。

「しかしまあ実際、想像できんな。ほんの数日とはいえ、雷門あいつらと共同生活するお前ってのは」

「確かに、少し前は考えもしなかったかもな。雷門はむちやくちやだと思えることも多いが、そのがむしやらさが俺を熱くさせてくれる」

「がむしやらさ、か……帝国にはなかったものかもしれないな」

「寺門……」

鬼道の語る雷門に、寺門はそう呟いて遠い目をする。

実力主義の帝国学園サッカー部では、実力が足りないか、下からさらに実力ある者が現れるかで容赦なくレギュラーから落とされることが日常茶飯事だった。

チームメイトでさえも上を奪い合い、時に蹴落とすべき敵であることもある。

今でこそこのメンバーが他の部員とは一線を画した実力でスターティングメンバーを務めているが、多くの者はそうだった蹴落とされる恐怖と言うべきものは胸のどこかに持っていたかもしれない。

「ああ、言いたいことがズレてるな。要するに、お前のことを心配するのは源田のやつだけじゃないってことだ。雷門のチームに馴染め

てるようでよかったぜ」

「当然だろ。鬼道さんを受け入れられないチームとかあるか？」

「おい佐久間……今寺門が話してるだろ」

寺門の言葉へ目を剥いて口を挟んだ佐久間を源田が諫める。

「……まあとにかくだ。決勝戦、俺達の方まで頼んだぜ、鬼道」

「一緒に戦えないのが悔しいですけど……世宇子中、きつと倒してきてください」

「俺は試合を見に行くぞ。鬼道達が勝つところ、この目で見届けるからな」

「お前達……ああ。俺は必ず世宇子中を倒してくる」

その言葉を最後に、鬼道は3人と頷き合って病室を後にした。

源田も、自分の病室へ戻ろうとする。

「なあ、源田」

「寺門？」

彼の背に寺門が声をかけた。

その声からは帝国のエースストライカーの名を恣にする寺門らしからぬ弱々しさが感じられて、源田は彼を見つめる。

「……いや、なんでもねえ。引き止めて悪かったな」

「本当にいいのか？」

「いいんだ。何言おうとしたか忘れちゃった」

「……そうか。また今度、思い出したら聞かせてくれ」

そう言っただけ扉を開けて病室を出ていった源田を寺門は見送ることしかできなかった。

「寺門……」

「駄目だ、ベッドの上だと余計なことばかり考えちゃうな。少し寝るぜ」

佐久間の言葉から逃げるように、寺門は布団を被って横になった。彼が言いかけて、結局言い出せなかったこと。

自分達がもっと強ければ、源田があのような酷い怪我をすることはなかったのではないか。

無論、言っただけで源田は絶対にその言葉を肯定すまい。

彼自身への侮辱にもなる。

わかっている。死ぬ気でゴールを守ると決めたのは源田自身。自分が責任を感じるのはお門違いだということとは。

それでも、そんな思いが頭の隅にこびりついて離れなかった。

雷門との決勝戦も経て、自分達は練習をして強くなった。

強くなった筈だった。

それが世宇子中の前には通じず、自分は1点も彼らから奪うことが叶わなかった。

ついに一矢報いることができたのも、鬼道が来てくれたからだっ
た。

彼にも遅れざるを得ない事情があり、それでも来てくれたのは嬉しい。
い。

それは絶対に嘘ではない。

だが同時に、自分にあの試合で何ができたのかと問う声が頭の中で響く。

(……何を考えてるんだ俺は)

心に渦巻く思いを押し込めて、寺門は眠りにつく。

だが佐久間には、寺門のそんな心中が察せてしまって、未だ鬼道と共にプレーすることもできない自分を呪いながら拳を握り締めた。

後日。

源田は決勝戦を観戦しにスタジアムに来ていた。

スタジアムには彼の他にも多くの観客が来ていたが皆一様に、門にかけられた『閉鎖』のプレートに困惑していた。

そこへやって来たスタッフが呼び掛ける。

「皆さん、決勝戦の試合会場は急遽変更となりました。これよりご案内致します」

その声に従って動こうとした時、影が彼らにかかる。

近くに高いビル等もないというのに起こった奇妙な現象に誰もが上を見上げて、声を失った。

巨大なスタジアムが、飛んでいた。

神々の像と思わしき装飾を備えたスタジアムがフロンティアスタジアム上空へ向かってきていたのだ。

「ここが決勝戦の舞台、ゼウススタジアムです。皆さん、チケットを確認次第で入場頂きます」

(ここまでやるか……)

常識はずれな出来事と荘厳なスタジアムに圧倒されて、急な会場変更などへの不満も上がらず、不思議な程スムーズに入場は行われていった。

源田もスタジアムに入っていく。

(勝てよ、雷門中)

ここまで来れば、できるのは祈ることだけだった。

神は魔神を恐れぬ

雷門サッカー部が控え室で準備を終えてフィールドへ出ると、スタジアムの観客席を数え切れない人々が埋め尽くす光景が広がっていた。

『40年ぶりの出場でついにこの決勝まで辿り着いた雷門中。今日この日、彼らは新たな伝説となるのでしょうか！ 運命の決戦が、間もなく始まります！』

雷門イレブンのメンバーは、この試合に全てを懸ける決意を漲らせて引き締まった表情でベンチに集まる。

円堂は結局、合宿中に祖父の「マジン・ザ・ハンド」を完成させることは出来なかった。

だが、それでも彼らの戦意は欠片も衰えてはいない。

（源田。お前は戦い抜いたんだもんな。俺だって、「マジン・ザ・ハンド」が完成しないからってビビってなんかいられない！）

円堂が思うのは、圧倒的な力を持ちながら自分を対等な敵として相手してきた王者。

彼もこの試合も見届けに来ていると鬼道から聞いている。

源田はもちろん、誰に見られても恥ずかしくないよう全てを出し切るつもりで円堂はこの戦いに臨む。

アップを終えて雷門イレブンはベンチ前で円陣を組んだ。

「いいか皆。全力でぶつかれば、なんとかなるっ！ 勝とうぜ！」

『おおっ！』
「……」

円堂達が心を一つにする中、源田は観客席から世宇子中がベンチでドリンクを飲んでる様子を眺めていた。

そしてフィールド中央に両チームが整列。

キャプテンである円堂とアフロデイが握手を交わす。

「ここに来たということは、この試合を最後のサッカーにする覚悟はできているということだね？」

つい先日、雷門中に現れて宣戦布告をしたアフロデイが確認を取る

ように尋ねる。

彼の瞳は人の機微に鈍い円堂でも分かる程明白な意思を映していた。

それは他の世宇子中メンバーと同一のものだ。

——おまえたち雷門を潰す

だが、理解と同時にやって来た重苦しい威圧感をものともせず、円堂は言い返した。

「違う。俺達はサッカーを辞めに来たんじゃない。これからサッカーを続けるために来たんだ。そのために、お前達に勝つ！」

「……今一度、覚悟しておくことだ。戦いが始まれば、たとえ平伏ひれふそうとも荒ぶる神々が止まることはない」と

キャプテン同士のやり取りを最後に、双方が配置についていく。

雷門ボールで試合は始まることとなった。

『FF決勝、世宇子中对雷門中の試合が始まります！』

間もなくして主審がホイッスルを吹き鳴らし、ついに決勝戦の火蓋が切られた。

『さあ今キックオフ！ 豪炎寺と染岡が上がっていきます！』

ボールと共に、雷門の誇るダブルエースが世宇子のゴールを目指す。

しかしすぐさま世宇子のディフェンスが彼らに迫る。

「メガクエイクV2！」

「ぐああー！」

「うおわあああ!!」

ディオが凶悪な必殺技で2人に襲い掛かり瞬く間にボールを奪う。彼らがゴールにも辿り着けずあっさりと止められたことで壁山や栗松が動揺を見せる。

カウンターで雷門ゴールへ向かうのはアフロデイ。

帝国の仲間達の雪辱を果たすべく鬼道が彼に立ち塞がった。

「行かせんぞー！」

「通さないよー！」

「へブンスタイム」

鬼道に続き一之瀬もアフロディを止めるべくデイフェンスに入るが、彼の歩みは止まらない。

目にも留まらない動きで2人を弾き飛ばし、さらに奥へと切り込んでいく。

「——さあ。裁きの時だ」

「止めてみせる……！」

雷門のデイフェンスをなかつたかのように易々と突破してゴール前へ到着し、シュート体勢に入るアフロディ。

円堂も、それを迎え撃つべく気を高めていく。

「真——」

天使の羽ばたきが響き、スタジアムの者達はその神々しさに思わず見入った。

ボールは白い稲妻を帯びて、蹴り出される時を待つ。

「ハアアア……い！ マジン・ザ——」

同時に光輝く、逞しい肉体の魔神が円堂から姿を現した。

天に舞い上がったアフロディを見据え、構えを取る。

そして両者が激突する。

「——ゴッドノウズ！」

「——ハンド！」

魔神が思い切り右手を突き出し、神のシュートを受け止める。

だが、とてつもない威力に円堂は険しい表情だ。

その場に踏ん張ろうとするが、どんどん押されていく。

「くっ……」

「魔神ね……名前負けもいいところじゃないか」

「うわあっ！」

アフロディが嘲るのと同時に完全に魔神が吹き飛び、円堂は腹に突き刺さったボール諸ともにゴールへ押し込まれた。

電光掲示板の数字が、0から1へと無慈悲に切り替わる。

まさか自分達のキャプテンが開始早々に失点を許すなど、豪炎寺達があつさりボールを奪われたことに続いての事態に雷門イレブンは動揺を抑えられない。

「うつ……」

「円堂！」

「キャプテン！」

あの凄まじいシュートをその身で受けた円堂に仲間達が駆け寄った。

円堂はよろよろとしながら立ち上がるが、右腕の痺れが止まらない。

「円堂、お前右手が……」

「ああ、凄いシュートだった。でも今度は止めてやる！」

「そうだな。それに今度はこっちの番だ」

「点を取るぞ！」

『おー！』

失点を取り返そうと息巻く雷門イレブン。

彼らのキックオフで試合が再開するが、再び世宇子の守備陣が妨害に入る。

「裁きの鉄槌！」

「うわあー！」

「少林！」

神の足に踏み潰され、少林寺が呆気なくボールを奪われた。

駆けるデメテルを止めるべく栗松と松野が向かう。

「行かせないでやんす！」

「全員サッカー、それが雷門おれたちのサッカーだ！」

「見せてやる……！ ダッシュストームV2！」

「クイック——うわあ！」

「ぎゃああー！」

だが彼の起こした突風に2人ともなす術なく吹き飛ばされ、デメテルは悠々とペナルティエリアに侵入した。

彼は冠する神の名の通り、大地の力を利用したシュートを放つ。

「リフレクトバスターV2！」

「これ以上はやらせない！ マジン・ザ・ハンド！」

浮き上がった岩石に幾度も反射して加速したボールがゴールを狙

う。

円堂が再び魔神を顕現させて止めようと試みるが、これも止めきれずゴールネットに突き刺さった。

『世宇子追加点—— 圧倒的な力を見せつけます！』

「くっ……」

「力の差は理解できたかい？ もう、手遅れだけどね」

這いつくばる円堂に、アフロディは酷薄に笑って告げた。

彼の視線の先には先ほど世宇子の必殺技を受けてから、立ち上がれずにいる少林寺と栗松の姿があった。

「少林！ 栗松！」

プレー続行は不可能と判断され、半田と影野が2人の代わりに入る。

なんととしても点を取り返すべく、雷門の攻撃陣が駆ける。

「メガクエイクV2！」

「鬼道！」

「くっ……染岡！」

立ちはだかるディオが引き起こした地割れ。

隆起した地面に打ち上げられながら、鬼道は空中でボールを蹴りストライカーに託した。

ボールを受け取った染岡は新手が来る前に“ワイバークラッシュ”を放つ。

「オラァ！」

だがそのシュートの軌道はゴールから逸れる。

染岡は、彼ならば分かると信じて直接ゴールを狙わなかったのだ。

ボールを受け取るべく世宇子の守備陣をすり抜けて来たのは、豪炎寺。

「ワイバーン——」

「——ストーム！」

「決める！ 染岡、豪炎寺——！」

翼竜を爆炎が赤く染め上げる。

雷門の双壁を成すストライカー達の連携技に半田が叫ぶ。

世宇子中のゴールを守るのは海神。

ポセイドンが不敵な笑みを浮かべて、両手を地面に叩きつける。

「ツナミウォールV3!」

帝国戦で見せたものよりさらに勢いを増した大波がゴール前に現れ、炎の渦と翼竜を呑み込んだ。

波が引いた後には、ボールを手に持つポセイドンの姿があった。

ここまで全国大会で得点を決めてきた主力技が止められたことに、雷門イレブンに衝撃が走る。

「神の名に於いて、点はやらねえ……!」

ポセイドンがチームメイトにボールを投げ渡す。

世宇子中の反撃である。

「止める! 絶対ゴールまで行かせるな!」

「はいっ!」

風丸が叫ぶと共にの一番に走る。

彼に続き他のメンバーも、世宇子イレブンを止めるべく立ち向かうが、手も足も出せない。

「ヘブンスタイム」

「うわぁーっ!」

「おぁぁー!」

「さあ、止められるものなら止めてみるといい。真ゴッドノウズ!」

「うおおお! マジン・ザ・ハンド!」

二度目の、神と魔神の激突。円堂の奮闘も空しく、ゴールネットが揺れる。

前半開始から10分も経たない内に、世宇子中と雷門中の間に3点差が出来上がってしまった。

さらに雷門の反撃をあつさり止めて、世宇子中がまたゴール前に到達する。

「フツ。キミではやはり及ばない。何故立つのかな? 勝ち目がないことはわかったと思うけどね」

一方的な戦いにある程度精神的余裕を取り戻したアフロデイが、右腕を抑える円堂に問いかける。

だが円堂からすれば、その問いへの答えなど決まりきっていた。

「そんなの関係ない！　今まで戦ってきた奴らのために。お前らに負けた奴らのために。仲間達のために。大好きなサッカーのために！　俺は諦める訳にはいかないんだ！」

「……どこまでも、キミはボクをイライラさせる」

力を見せてつけて尚もゴール前に立ち続けた男を、アフロディはもう1人知っている。

屈辱を呼び起こす光景に体が強張ったが、ベンチで世宇子のスタツフがハンドサインを送ってきていることに気づく。

アフロディはボールを外に蹴り出した。

『真・神のアクア』補給のために、世宇子イレブンがベンチへ戻っていく。

「……ねえ、変じゃない？」

世宇子の選手達がドリンクを飲む光景を見て、夏未が呟く。

如何に明らかな実力差があるとはいえ、わざわざ試合を意図的に止めてまで全員がベンチへ戻り水分補給をするという不自然さは、円堂達を見守る彼女らを動かすには十分だった。

試合が再開し、フィールドで世宇子中と雷門中が激突している頃。雷門中のマネージャー達はベンチから出てスタジアム内を探索していた。

世宇子イレブンが飲んでいたドリンクの秘密を探るために。

「おい」

『きゃああああー！?』

恐らくここにいるスタツフは皆影山の手先。

そう注意して慎重に歩いてきた所に背後から声がかかって、3人も思わず悲鳴を上げてしまった。

見つかってしまったと背後を見たが、そこに立っていたのはスタツフや警備員ではなかった。

「ベンチを抜け出していたから何をしていたかと思えば……」

「まったく、雷門サッカー部はマネージャーまで無茶苦茶だな……ア
イツの影響なのかねえ……」

「鬼瓦刑事!? それに源田くんまで……」

「ふん。大事なダチの妹達も見つかっただ。さっさと戻れ小僧」

「いえ、このまま帰ることはできません」

意外な人物達に目を白黒させる彼女達を他所に、大人と少年が言い
合っていた。

円堂はイナズマ魂を失わない

神殿のような荘厳さに満ちたゼウススタジアムの廊下で、源田と刑事の鬼瓦、そして雷門マネージャー達が向かい合っていた。

鬼瓦がため息を吐いて、口を開く。

「大人として言いたいことはいろいろあるがな。お嬢ちゃん達、すぐにグラウンドへ戻れ。ここにマネージャーの仕事はないぞ」

「イヤよ！」

「夏未さん……！」

鬼瓦のその忠告を、夏未は頭から撥ね付けた。

彼の言う通りだということは彼女にもわかる。

影山の本拠地の中を彷徨けば危険が潜んでいるかもしれないし、刑事の鬼瓦に事を任せた方がいいのは明白だった。

だが、円堂達は今もグラウンドで戦っている。

同じフィールドには立つておらずとも、一緒に戦っている彼らを差し置いて、危険の前に二の足を踏んではいられなかった。

「私達だって、雷門中サッカー部よ。今さら怖気おしげ付いてなんていられるものですか！」

「そうですね！ お兄ちゃん達が戦ってるのに、ただ待ってるだけなんてできないです！」

「……まったく強情だな」

彼女らの固い意思は梃子でも動かないと察せてしまった鬼瓦は、やれやれと首を振る。

続いて、彼女らを呼び戻す目的で同行してきた隣の少年に目をやった。

彼は苦笑いだったが、どこか知っていたような感のあるようにも見える表情だった。

「あんまり驚いてないな、坊主」

「それは、まあ。彼女達も雷門中サッカー部の一員ですから」

「サッカー馬鹿つてのは皆アイツに似るのかねえ」

諦めの境地に至った鬼瓦は、今は亡き親友を思い天を仰ぐ。

意地でもついてくるといふマネージャー達、1人で戻るつもりのない源田。

鬼瓦が意固地な少年少女らと共にスタジアムを探っていると、話し声が聞こえてきた。

「気をつけて運べ。……控え室に準備をしてくる。お前達、誰も中に入れるなよ」

「はい」

声の主はスタジアムのスタッフと、彼らが出てきた扉の両脇に控える警備員達。

スタッフ達が台車に乗せて運んでいる容器の中の液体に、マネージャー達は見覚えがあった。

試合直前に世宇子中の選手達が飲んでいたドリンクだ。

「真・神のアクア」。羨ましいね、私も飲んでみたいものだ」

「総帥が仰っていた事を忘れたか？ 常人が飲んだらただじゃ済まないぞ」

「……冗談だ」

警備員の会話は、彼女達の疑念をさらに強める。

鬼瓦も、探していた影山逮捕の糸口が見つかり、飛び出しそうになる自分を抑える。

「真・神のアクア」……それが奴らの作った薬の名か」

「えっ……薬って、まさか……」

「ドーピングってこと？」

「恐ろくな。俺は影山が軍事用の薬を研究しているとの情報を手に入れ、証拠を掴むためにここへ来た」

「真・神のアクア」だと……？ そんな薬を使った相手に、おれたち帝国は……！」

語られた内容に、マネージャー達、そして誰よりも源田が憤りを示した。

あの圧倒的な強さを見せつけた世宇子イレブン。

彼らの力の源が、薬であったとは。

そのような卑劣なやり方に敗れた。敗北で意気消沈していた仲間

達を思い、感情を押し殺そうとして唇を噛む。

「あの扉の向こうへ行ければ、何か証拠を掴めるかもしれん。だが……」

鬼瓦はスタッフが「真・神のアクア」を運んできた奥の部屋へ行きたいが、警備員が邪魔だ。

彼が警備を掻い潜る方法を模索し、頭を悩ませる中、源田が動いた。

「お前達、真・神のアクア」と言っただな！」

「な、なんだこのガキ！」

「いやまて、何故真・神のアクア」のことを……」

飛び出して警備員達に叫ぶ源田。

彼らはこんなところに子供が居ることに厳しい目を向けたが、源田の発した言葉に狼狽えた。

「そうだ、あいつは帝国学園の……！」

「よくも真・神のアクア」なんてものを使って、俺達を病院送りにしてくれたな！ お前達は必ず警察に突き出してやるぞ！」

「なに……ま、まずいぞ、捕まえろ！」

源田の言葉に整合性はなくてもいい。

彼が知る筈のない「真・神のアクア」のことを口にした時点で、慌てきつた警備員達の頭には細かいことを考える余裕はなかった。

とにかくこの少年を捕まえようと、持ち場を離れて走り出す。

「お前達などに捕まるか！」

「は、速いぞあのガキッ」

「右腕吊ってるのになんて速さで走りやがる！」

警備員が釣れたことを確認しながら、源田も走り出す。

彼らの姿はすぐに廊下の奥へ消えて見えなくなった。

警備員達がろくに確認もせずに通り過ぎていった廊下の角で、鬼瓦が歯軋りしていた。

「あんの小僧、いっちよまえに生意気なことを……！」

鬼瓦には彼の意図など丸わかりだ。

自分が囮となって警備の目を引き、鬼瓦達はその隙に奥の部屋を調べ「真・神のアクア」の証拠を掴む。

子供がそんなことをしては、彼もお冠だ。

大人として、とても許容できることではない。

だが既に事が起こっている以上、手をこまねいて時間を無駄にもできない。

鬼瓦は少女達と共に、警備が居なくなった扉の向こうへ踏み込んだ。

鬼瓦は刑事らしく素早い手際で。

マネージャー達も手分けして手当たり次第に。

「真・神のアクア」に關係する証拠を探した。

その時、鍵がいくつもぶら下がる棚が夏末の目に留まった。

「ねえ、ここにある鍵、控え室って書いてあるわ」

「そういえば、さっきの人達、控え室へ準備を」って……」

「じゃあそこへ行けば、真・神のアクア」があるかも！ 鬼瓦さん！」

「ああ。現物が手に入れば話は早い」

そうと決まれば、4人はすぐに動いて世宇子中の控え室へ踏み込んだ。

鬼瓦がそこにあつた容器からドリンクを確保する。

これで影山は捕まえられるだろう。

だが、マネージャー達はあることに気付いて顔を曇らせる。

「鬼瓦さん、もうハーフタイムが始まります。影山はすぐに捕まえられますか？」

「……最大限急ぐが、試合時間中には間に合わないかもしれん」

「そんな……じゃあ円堂くん達は、真・神のアクア」を使った相手と後半も戦うの？」

「たとえこれを隠しても、すぐに補充されてしまうかもしれないですよ」

そんなことをさせては、もしかしたら雷門イレブンは世宇子イレブんに潰されてしまうかもしれない。

何かできることはないのかと考えた時、木野にある考えが浮かぶ。

「ねえ、じゃあこんなのはどうかな？」

彼女の発案に、異論を挟むものは居なかった。

源田は何人も警備員に追われながら、全く速度を落とさない走り
でその追跡を振り切り観客席まで戻って来ていた。

(彼女達は無事だろうか……)

あれだけ目を集めてまた戻れば無駄に大きな騒ぎを起こしかねない
ため、不安はあるが後は決着を見届けるしかない。

そうしてグラウンドを視界に収め、目を見開いた。

510。

前半終了も間際の時間で、電光掲示板は絶望的な点差を示してい
る。

加えて、眼下に広がる光景。

雷門イレブンは一人残らず、グラウンドに倒れ伏していた。

「……これでわかっただろう。神と人間では、勝負になどなりはしな
いんだ」

アフロデイは誰一人起き上がれない様子を見渡して、ゴール前で倒
れる円堂に言い聞かせるように呟いた。

もはや聞こえてはいないだろうが、いくつも必殺シュートを受けな
がら食い下がり続けたこの男に言わずにはいられなかった。

当然返事はなく、他のメンバーも動かないことを確認して、主審に
判断を促した。

「……試合続行不可能につき、この試合、世宇子中の一——」

「何をしている、円堂——ッ！ 立てッ！」

この程度で、彼が終わるわけがない。こんなところで倒れることな
ど許さない。

その一念で、思わず源田は叫んでいた。

しかし雷門の面々は反応せず、アフロデイだけが彼に目を向けてい
る。

突然の大声に宣言を遮られた主審が、もう一度言い直そうとした
時、再びそれを遮る声が出た。

「まだまだ…… まだ試合は終わってない……！」

円堂はよろめきながら立ち上がり、試合続行を主張した。彼一人で試合はできないと続行を躊躇う主審の言葉に、他の面々がさらに立ち上がる。

既にぼろぼろの身体で、未だに全員が闘志を宿していた。

「馬鹿な……い！ 何故まだ立ち上がれる!?!」

散々痛め付けているというのに戦おうとする彼らは、アフロデイには完全に理解不能だった。

ゴール前に立ち続け、こちらを睨み付ける姿。

それは、初戦での屈辱をどうしようもなく煽り立てる。

「ツいい加減にしろ！ 真——」

止めを刺すべくシュートを放とうとしたが、寸前で笛がなった。

前半が終了し、雷門イレブンは足を引き摺りながらベンチへ戻っていく。

彼らも「真・神のアクア」補給のためベンチへ戻るが、アフロデイは屈辱と怒りと、本人も無自覚な少しの恐怖が籠る視線で円堂を睨み付けていた。

その円堂は、ベンチでマネージャー達から聞かされた事実^に身体を震わせていた。

恐怖ではなく、大好きなサッカーを汚された怒りで。

「『真・神のアクア』……そんなものをサッカーに持ち込むなんて!」
「奴らの強さの秘密はそれか……そうでもなければ、^{あいつら}帝国があんなにも一方的にやられる筈がない」

「……円堂くん」

同じく聞いていた鬼道も倒れていった仲間達のことを思い返し、世子子中への怒りを強めた。

夏未は、円堂に思わず声をかける。

打てるだけの手は打った。

しかし、これほどに傷ついて、まだ戦おうとする姿は痛々しくて見ていられなかったのだ。

その心情は円堂も察するが、戦うことをやめるといふ選択肢はな

い。
自分達は、世宇子のサッカーは間違っていると示さなければなら
ない。

この試合はただの大会の決勝戦ではなく、自分の大切なサッカーが
懸かっているのだと、感じ取っていたのだ。

安全を考えれば止めるべきだったが、彼らの思いを否定できない響
木は後半戦に雷門イレブンを送り出した。

怪我でベンチへ下がったメンバー、そしてマネージャー達が、その
後ろ姿を見送る。

程なくして、世宇子中のキックオフで後半が開始された。

アフロデイが、ドリブルでゴールへ向かっていく。

「キラースライド！」

「コイルターン……！」

「ヘブンズタイム」

DF達がそれを止めようと挑みかかるが、敵わずに吹き飛ばされて
いく。

早々にゴール前に到達したアフロデイが、試合開始直後と同じよう
に円堂と対峙した。

円堂が限界を迎えているのは誰が見ても明らかだった。

その気力で作っている張りぼてを打ち崩してやろうと、シュートを
打ち込んでいく。

反応すらできない円堂に何度も何度もボールが彼の身体に命中し、
遂には顔にまで当たって、彼は前のめりに倒れた。

「サッカーを……大好きなサッカーを汚すなんて……そんなこと、許
しちゃいけない！」

しかし、倒れたというのに、円堂は何度でも立ち上がるのだ。

雷門イレブンは何度倒れても、立ち上がり続ける。

「何故立ち上がる！ 神の力を得たボク達に、勝てるわけがないだろ
う!?!」

「そんなの、神の力なんかじゃない！ お前はもう知っている筈だ！」
「黙れ！ 黙れ黙れ黙れ！」

立ち続ける姿に感じる恐れを振り払うように、アフロデイが空へ舞い上がった。

円堂は、怒れる神の一撃に立ち向かう。

「終わりだ……！」

「円堂！」

「キャプテン！」

「円堂くん！」

『守！』

その姿に豪炎寺達チームメイト、夏未達マネージャー、監督の響木、そして観戦していた彼の母。

誰もが彼の名を叫ぶ。

サッカーを愛する全ての者達の思いが、彼に集まる。

「円堂！」

その中に混じっていた声が聞こえて、思わず笑みが浮かんだ。

シュートを全霊で迎え撃とうとして、円堂は身に着けていた祖父のグローブが左手だけ黒く焦げていることに気づいた。

(そういうことが、じいちゃん！)

円堂はシュートが放たれる直前に、上半身を捻って背を向けた。

アフロデイは怖気付いたのかと思ったが、それは違う。

円堂から、今までと比較にならない気が立ち上る。

彼は右手を胸に当て、心臓から溢れる力の全てを余さず右手に移したのだ。

「これが俺の……マジン・ザ・ハンドだあ！」

雷が落ちたかのような円堂の怒号と共に、イナズマを纏った巨大な魔神が姿を現した。

完璧な力の伝導で、遂に魔神の真の力を引き出すに至ったのだ。

「終わりだア！ 真・ゴッドノウズ！」

その威容に前半との力の違いを感じ取りながらも、アフロデイは全てを込めたシュートを叩き込む。

対する円堂も、魔神と共に右手を突き出し白い稲妻を纏ったボールを受け止めにかかった。

刹那、スタジアムを閃光が覆った。

次の瞬間に皆がボールを見れば、力強く大地を踏みしめる円堂の右手に、回転が止まったボールが収まっていた。

「そんな……ばかな！」

本気のシュートが止められるという二度目の経験に、現実を受け止めきれずアフロデイが何度も首を振る。

他の世宇子中の選手もキャプテンのシュートが止められたことに完全に動きが止まっていた。

「いっけええー！」

円堂がボールが来るのを待ちわびる仲間達に思い切りボールを投げた。

雷門の反撃が、幕を開ける。

神は勝負を諦めなかった

雷門ゴールから思い切り投げられたボールは、呆けている世宇子中選手を飛び越えて雷門選手達の下へ届けられた。

ボールを受け取った豪炎寺と鬼道がイナズマのように鋭くゴールへ迫っていく。

我に返った選手が2人を止めようと立ちはだかる。

「裁きの鉄槌！」

「豪炎寺！」

「なにっ!？」

迫る巨大な足を、鬼道はボールを豪炎寺へ渡して身軽になることのでかわした。

そして受け取った豪炎寺は、ゴールに狙いを定めてシュート体勢に入る。

「ファイアトルネード——改！」

世宇子中の選手達が動揺から抜け出し切れていない今の内にまず一点を奪うため、進化させた彼の代名詞を放つ。

それに鬼道が追い付き、更なる加速をかけた。

「ツインブースト！」

「『ファイアトルネード』と『ツインブースト』の合わせ技……名付けて、^{ファイア}ツインブースト F『！』」

目金が興奮した様子で、その連携必殺技に命名した。

闇色のオーラが加わった炎のシュートがゴールへ挑む。

ポセイドンは、動揺しながらもそのシュートを止めるべく必殺技を発動した。

「ツナミウォールV3！」

大波がボールを受け止める。

彼らの放った確かに強力なシュートだったが、あと一歩足りず海神の壁の前に止められてしまうかに思えた。

そこへ、更なる後押しが加わる。

「ローリングキック改！」

「なんだとっ！」

半田が、回転してかけた勢いを乗せたキックでボールを波の内側へ力尽くで押し込んだ。

波を突き抜けたボールにポセイドンは反応できず、ゴールネットが揺れる。

『ゴォールッ！ 雷門遂に得点！ 素晴らしい連携シュートが炸裂しましたアァー！』

「馬鹿な……」

シュートを止められ、立て続けに点を奪われる。

繰り返される屈辱の再現に、アフロデイが掠れた声を洩らす。

雷門の反撃は止まらない。

世宇子中のキックオフによる試合再開と共に、すぐにボールを奪って次々とシュートを撃っていく。

「ツインブーストF!!」

間髪入れない速攻に、なす術なく追加点を奪われる。

「行くぞ染岡！」

「おう！」

「ワイバーストームV2!!」

「真ギガントウオール！——う、おおあ！」

さらに進化したダブルエースの連携必殺技に3点目を奪われ、5点も奪っていた世宇子中は瞬く間に2点差まで詰め寄せられた。

円堂がアフロデイのシュートを止めてからの怒涛の猛追に希望が見えてきて沸き立つ雷門イレブン。

その勢いのまま逆転しようと息巻いているが、アフロデイはこの流れを放置しない。

「こんなこと……認められるものか！」

素早く激しいドリブルでアフロデイは雷門ゴールへ迫っていく。

彼を止めるべく土門が向かう。

「キラースライド！」

「フン！」

だが彼のスライディングをアフロデイは歯牙にもかけない様子で

難なくかわす。

「こんなことがある筈がない、あつていい訳がないんだア！」

彼は今度こそシュートを叩き込むために羽ばたいた。

浮き上がったボールに力を纏わせ、蹴り飛ばす。

「真ゴッドノウズー！」

「マジン・ザ・ハンド！」

だが、アフロデイの叫びは魔神の雄叫びに掻き消された。

円堂の「マジン・ザ・ハンド」は再び彼のシュートを止めてみせる。

「そんな……」

完全に力への自信を喪失したアフロデイが、思わず膝から崩れ落ちそうになる。

それでも、円堂が味方へ投げたボールを追いかけようとしたその時、巨大な蛇が巻き付いてきたかのように体が重くなった。

続いて襲いかかる異様な脱力感。喉の渇き。身を震わせる寒気。

バランスを保てず、ぐらりと倒れ込んでしまう。

（これは、「真・神のアクア」の効果切れ……!? ハーフタイムに飲んで筈なのに……!）

「真・神のアクア」は元々軍用に開発されていた薬品を基に影山が研究して完成させた、服用者に常人とはかけはなれた力を与える薬物だ。

その効果は無尽蔵の体力、服用前と段違いの瞬発力、筋力等多岐に渡る。

正しく、「神」の名を冠するに相応しい代物に思えるが、当然メリットばかりではない。

一度口にしたが最後、一定時間以上「真・神のアクア」を摂取しなければ服用者は力を失い、加えて禁断症状が現れるのだ。

摂取してから次の摂取が必要になるまでの時間の長さは運動による服用者の消耗具合である程度変動するが、サッカーという激しい運動ならば基本的に15分前後で補給が必要となる。

アフロデイは、そのリスクを嫌というほど知っている。思い知らされている。

FFに向け、影山が直接自分達の上に立ったばかりの頃。

影山は「真・神のアクア」によつて手に入れた絶大な力に酔いしれていた彼らに「教育」をした。

万が一にも完全に力に溺れきつて影山自身に逆らうことがないように、忠誠を尽くすべき相手を教え込んだのだ。

『……ウ……ああ……』

『わかるな？ お前達が神であるために、従わねばならないのは誰か』
倒れて起きられず、うめき声しかあげられない世宇子中の選手達を中心に無表情で立っていた影山は、その光景が見えていないかのよう
に問いを投げた。

『……い……えや……』

『もつとはつきりと』

『かげやま……そうすい、です……』

『そうだ。今一度誓え。お前達に敗北は許されない。私に絶対の忠誠を捧げ、完全なる勝利を献上するのがお前達の使命だ』

ガンガンと内側から殴り付けられているような激しい頭痛と、何も出ない程吐き続けてなお収まらない吐き気に苛まれ、涙を目に滲ませながら、アフロデイは這いつくばって、顔だけを上げて何度も何度も影山の言葉に頷いた。

突然取り上げられた「真・神のアクア」を求める一心で。

『雷門中再びゴールー！ 遂に同点！ このまま逆転なるか!?!』

実況の声も、頭の中で反響して気持ちが悪い。

どうやら、いつの間にか追い付かれてしまったらしい。

ゴールが決まったと理解すると、何も考えていなくても、ポジションに戻るために勝手に体が動き出す。

影山に徹底的に叩き込まれたサッカー教育によつて、体を引き摺りながらも世宇子イレブンは試合再開のために配置についた。

そしてキックオフ。誰に渡すためでもなくボールが蹴られ、力なく転がっていく。

当然、逆転に燃える雷門中にあっさりと奪われた。

『世宇子中、どうしたことかー！ 前半までの気迫がまるでない、生

きながらにして屍のようになってしまっています！ これまで圧倒的な実力で勝ち上がったがゆえに、この猛反撃を受けたことへの動揺から立ち直れないのでしょうか!？」

他の者達にもアフロデイと同じく、禁断症状が出始めたらしい。

今はまだ強い倦怠感だけだが、恐らく試合終了の頃には頭痛や吐き気なども現れ始めるだろう。

もうフォーメーションも、ディフェンスもオフENSEも、全てが機能していない。

元より「真・神のアクア」で力を得てからの世宇子中は各々の個人技頼りで連携のれの字もないチームだった。

それが、絶対的な力を雷門中の猛攻で否定され、さらに体を蝕む症状のダブルパンチで彼らの戦意は粉碎されていた。

「終わりだ……」

デメテルがその場に膝をつき、俯いた状態で呟く。

それはチーム全員の絶望を代弁していた。

これだけ無様を晒せば、影山は完全に世宇子中を見限るだろう。

彼にとって自分達は駒に過ぎず、役目を果たせない駒は捨てられるだけだ。

「負けだ……」

「もう駄目だ……」

アフロデイはそんなチームメイトの絶望の呟きを聞きながらこの試合を思い返していた。

点を取ろうとすれば、まだ取れた筈だ。

当初の円堂の実力は源田にはまるで及ばなかったのだから。

ただ彼が想定より粘っただけ。それだけだったのに。

(ボクはこの大会中、ずっと彼源田に囚われていたのか)

あの試合 帝国戦から、決勝戦までの間に相手チームを次々に粉碎して自信を取り戻せたと思っていたのに。

立ち続けるキーパーに、またむきになってしまった。

トラウマを想起させる男を完膚なきまでに叩き潰して、心に残る恐怖を完全に晴らしたいと思ってしまうのだ。

敗北は避けられない。

自分達に出来ることは敗者として絶望と共に消えていくことだけだと悟る中、帝国戦の想起を切っ掛けに、立ち続けた最初の男の姿を思い起こした。

何度シュートを撃ち込んでも止めて、睨み付けてきたあの目を。

勝利を信じ、求め続けた目を。

瞬間、長らく感じたことのなかった感情が蘇る。

「……………だ」

「キャプテン……………」

「まだまだアア!!」

アフロデイは叫びながら立ち上がり、よろけて転びそうになりながらも驚異的なスピードでボールを運ぶ雷門中に追いつき、立ち塞がった。

「ボクはまだ、負けたくない!」

難しい理由は必要ない。

サッカーが競い合うスポーツである以上、誰もが持つ感情だ。

ただそれだけ。

それだけのことを、久方ぶりにアフロデイは思い出した。

「皆、立て! 負けたくないのなら! 勝ちたいのなら! 最後の一秒まで戦えーっ!!」

「……………そうだ」

「俺達は負けたくない」

「勝ちたい!」

『世宇子中立ち上がりました! 立ち上がれと叫ぶキャプテンの後に続きこれまでのものとは打って変わった泥臭いプレー。凄まじい執念を感じます!』

立ち上がれと叫ぶキャプテンの姿に、一人ずつ同調していく。

世宇子の選手達はまだ重い体を無理矢理動かし、純粋な魂の叫びと共に、がむしやらにボールを追いかけて始めた。

戦略も何もなく、ひたすらに迫る選手達に面食らった鬼道からアフロデイがボールを奪う。

「勝負だ、円堂くん。そしてイナズマイレブン！」

「——ああ、来い！ アフロディ！」

向かってくるアフロディの瞳に、先程までと違う確かな情熱を感じて円堂は自然と笑顔に変わった。

「さあ、サッカーしようぜ！」

「ああそうだ。ようやくサッカーをするんだ、ボク達は……！」

アフロディは翼を広げて舞い上がり、ボールに力を集める。

その力にうつすらと金色が混じっている。

思い切りボールを打ち下ろすために、*“ゴッドノウズ”*のようなキックにはせずに踵を振り上げる。

即興の必殺技だ。

今までの自分達という神が偽物だったのなら、このシュートはその全てを打ち壊すものだろう。

名付けるならば——

「ゴッドブレイクウウウ!!」

迫る一撃を前にしても、円堂は笑う。

高まる気が作り出した魔神は、これまでで一番巨大だった。

「マシン・ザ・ハンド！」

魔神の右手と神のシュートが激突し、強い光が辺りに撒き散らされる。

永遠に思えた数秒間。

その末に、ボールは円堂の右手の中に収まっていた。

「行くぞ皆——！」

『おーっ!!』

円堂はボールを投げ、自身も攻めるために上がっていく。

逆転のために繰り出すのは、一之瀬・土門と共に編み出した*“ザ・フェニックス”*。

体が炎でできた不死鳥が現れ、高らかに鳴く。

さらに、豪炎寺がそのボールに自身のキックで更なる火力を与える。

巨大化した炎の鳥の巨体がグラウンド上空を埋め尽くす光景にポ

セイドンは息を飲む。

だが、その炎で覆われた空に飛び立つキャプテンの姿に目を見張った。

「ハアアアアッ!!」

「アフロデイ…！ 俺は、負けるわけにはいかないんだ！」

飛び上がったアフロデイは、豪炎寺が放とうとするボールに足を伸ばし、シュートを阻止しようとしているのだ。

2人のストライカーが空中でせめぎ合う。

「アアアア！ ——ッ!？」

しかし、拮抗の最中に足に走った一瞬の痛み。

それにより、既に禁断症状でギリギリだった集中は途切れ、豪炎寺に押し込まれてしまう。

「決めてやるっ！」

——ファイナルトルネード

弾き飛ばされ、自ゴールへ向かう雷門のシュートを空中で見送りながら、アフロデイは思う。

（ああ…：ボクはもうあの日に、キミに負けていたのか。源田くん）

ゆっくりと体が地上へ向かう中、視界に観客席の男の姿を捉え、アフロデイは微笑んだ。

「まだアアア!! タイタンウォールウ！」

だがまだ世宇子中最後の砦が残っている。

ポセイドンはキャプテンの奮闘を見て恐怖を振り払い、雄叫びを上げてシュートに挑みかかる。

“ギガントウォール”の時よりもさらに巨大になり、不死鳥を睨み付けた海神が拳を振りかぶる。

激突する炎と巨人の拳。

「ウオオooooooooooッ！」

「止める——！」

「負けるなポセイドン！」

『いけえええええ!!』

両チームがキーパーに、そしてシュートに各々の思いを叫ぶ。

「ウ、ウウウ、オオオアアアアア!!!」

そして、雷門中の思いが力を与えたのか、炎の鳥の嘴はポセイドン
を拳ごと弾き飛ばし、ゴールへ飛び込んだ。

『ゴール! ミラクルシュート炸裂! 雷門勝ち越しー! そして
試合終了! F F 全国大会決勝戦、勝ったのは、雷門中だアア!』

そして決着を伝える実況の王将の声を皮切りに、スタジアムは歓声
に包まれたのだった。

源王は賛辞を惜しまない

大逆転勝利から優勝が決まり、現実には理解が追いついて来るのに10数秒後。

雷門イレブンは皆一斉に喜びに沸いた。

彼らは輪になってその歓喜を分かち合っていたが、しばらくして、円堂がその中から離れた。

そして、グラウンドに倒れ込んでいたアフロデイに歩み寄る。

彼の右足は帝国戦でのシュートの乱射から始まり、激しい練習と試合で積み重なった疲労が溜まり、先程の豪炎寺との競り合いで完全に痛めてしまっていた。

足の痛みに顔をしかめながらなんとか起き上がろうとしていたアフロデイに、円堂は手を差し伸べる。

「足、大丈夫か？」

「……どういうつもりだい？」

理解の外にある円堂の行動に、アフロデイは目を丸くして問いかけた。

そうして戸惑う彼に対し、円堂は平常運転だ。

笑顔でアフロデイの目を見つめて自身の中で決まりきった常識を教える。

「サッカーは、試合が終われば敵も味方もない。そうだろ？」

「だからって……ボク達が何をしたのか、わかっている筈だ。なぜこんなことを……」

「確かに、『真・神のアクア』に頼って戦ったことは許せない。帝国の奴らを、偽物の力であんなにひどい目に合わせたことも」

「そうだろう？　じゃあ……」

「でも、試合の最後にお前達と本当のサッカーができてよかった。楽しかったぜ。いいシュートだった」

「――」

円堂の言葉に、アフロデイは開いた口が塞がらなかった。

この男は、聖人か何かなのか。

自分や仲間達を痛め付けた相手を助け起こし、あまつさえ褒めるなんて。

あるいは彼こそがサッカーの神なのかもしれない。

そんな馬鹿げた事が頭に浮かんでしまう程度には、円堂の対応は慈愛に満ちていた。

「ん？ どうしたんだ？」

固まってしまったアフロデイに困惑する円堂。

2人にマネージャー達が近づいて来て、言葉を付け加える。

「後半前にあなた達が飲んだのは『真・神のアクア』じゃないわ」

「ただのスポーツドリンクよ」

「ハーftime前に容器の中身を入れ換えさせてもらったのです！」

3人が語る事実には、アフロデイは試合中に起こった『真・神のアクア』の効果切れの理由を理解した。

『真・神のアクア』は見た目や味、匂いなどは怪しまれないようスポーツドリンクに似せてカモフラージュされていた。

それが仇となり、世宇子中のメンバーはすり替えに気づくことができなかつたのだ。

「つまり、後半で出したのはお前ら自身の本物の力なんだよ」

「……そう、か。ボク達の、本物の……ッ」

「どうした？ アフロデイ!?!」

自分の手を見つめ、円堂の言葉を噛み締めるように復唱したアフロデイだったが、苦しげなうめきと共にその言葉が途切れた。

興奮で紛れていた『真・神のアクア』の症状がぶり返してきたのだ。

頭を抑える彼に心配する円堂達だったが、それをアフロデイ自身が制した。

「本当に大丈夫ですか？」

「……キミ達の手助けには及ばないさ。——皆、行こう」

アフロデイの呼びかけに従い、他のメンバーもグラウンドの外へ歩いていく。

皆が廊下の中へ消えていくのを見届けて、彼は円堂達を振り返っ

た。

「円堂くん。鬼道くんや源田くん達に伝えておいてくれ。すまなかったと」

「……いや。自分で謝るんだ、アフロデイ。サッカーをしてれば、またいつでも会えるんだからな」

「フフ、手厳しいなあ。でも、うん。わかった。ありがとう、イナズマイレブン」

そのやり取りを最後にアフロデイもグラウンドを去っていった。

世宇子イレブンを見送り、円堂も仲間達の輪に戻っていった。

その頃、影山は自室でグラウンドを映すモニターを前にして歯軋りしていた。

「馬鹿な、こんなことが……ッ！」

なぜ神の力を与えた世宇子中が負けたのか。

なぜ忌々しい円堂大介の孫が試合を終えてもグラウンドで笑って立っているのか。

なぜ、自分が勝てなかったのか。

どれを考えても答えは出ない。いや、受け入れられる答えが出ない。

負ける要素などなかった筈なのに。敗者に存在価値などないというのに。

そうして敗北にうちひしがれている影山の背に、低い声が投げ掛けられた。

振り向かずともわかる。

しつこく自分を追い回す刑事、鬼瓦以外にはいない。

「終わりだ、影山。世宇子中の子供たちは保護させてもらった。『真・神のアクア』から見つかった成分と服用した彼らの症状が動かぬ証拠。もう逃げられんぞ、お前には今度こそ罪を償ってもらおう！」

糾弾するその声に、影山は返事をしなかった。

代わりに、不敵な笑みを浮かべる。絶望などあり得ない。

こんなことで、自分のサッカーへの憎悪おそいを消せはしないのだから。

そして、源田はこの聖戦の決着を見届けた。

グラウンドの真ん中で、舞い落ちる紙吹雪を浴びる彼らを眺めながら一言呟く。

「流石は円堂、か」

最後にアフロデイが放ったあのシュートはどう甘く見積もっても「ゴッドノウズ」とは比較にならない威力だった。

自分はその「ゴッドノウズ」を相手に捨て身で止めるのが精一杯だったことを考えると、円堂が常にあれ程の巨大な魔神が作れるかは疑問があるものの、確かに彼は自分の先へ行っていると言える。

「……俺も強くならなければな」

早く怪我を治して鍛え直さなければならない。

その決意を新たにして、源田は観客席を後にした。

スタジアムを出て入り口を見てみれば、まだ雷門イレブンが屯していた。

我先に優勝トロフィーに触れようと取り合って騒いでいるメンバーを避け、そこから少し距離を置いている円堂達を見つけて声をかける。

「円堂。鬼道」

「源田か」

「源田あ！ 見てたか!? 俺達勝ったぞ！」

「見ていたから落ち着け。……お前達、よく勝ったな、あの世宇子中に。優勝おめでとう」

駆け寄って来た円堂を左手で受け止めながら、源田は微笑んで彼らに賛辞を送った。

「これでお前達、雷門中が日本一のチームというわけだ。……キーパーの日本一はまだ譲る気はないが」

「細けえなおいつー！」

褒め言葉で感動させてからの、微妙に器の小さい発言に聞いていた

染岡が思わず突っ込む。

同じく聞いていた風丸も苦笑いだ。

ただし、突っ込みを受けても源田は大真面目な顔で言い返す。

「何を言う、大事なことだ。ああ、世宇子中には負けたが、それに勝つたからといって俺が円堂に負けた訳ではないからな、うん。治ったらまた勝負だ」

「まったく、変な所で小さいというか、なんというか。そんなこと気にしないでもお前の座は……」

不動だ。

鬼道がそう言おうとして、円堂を見て言葉に詰まる。

源田は仲間だが、円堂も仲間だ。

彼らの優劣を自分がどうこう口にするのが憚られて、何も言えなくなってしまう。

「……まあ、また今度だな」

「ところで、土門はどうした？ あいつだけ——いや、一之瀬もだが——姿が見えんぞ」

鬼道が密やかな葛藤の末に出した言葉をスルーして、源田がこの場に不在のメンバーについて言及した。

辺りを見回しても、円堂達雷門イレブン以外に人は居ない。

2人だけ居ないというのが気にかかったが、他校にいる幼馴染みにいち早く会いに行ったと聞かされて納得する。

「そうか……俺も戻るとするか。佐久間達にも優勝を教えてこないとな。鬼道、お前の戦いぶりもしつかり話してきてやる」

「ああ。この報せが元気を与えてくれるといいんだがな……」

「心配ない。皆近い内に退院できそうだからな。だいでんももう、洞面を肩に乗せて歩けるぞ」

「フツ……なら、安心してよさそうだな」

帝国イレブンの中でも特に重い怪我をしていた男の快復の具合を語る源田。

順調に彼らも元気を取り戻していることに、鬼道も安堵の笑みを浮かべて息をついた。

「佐久間や寺門達も、早く特訓したいと言っていたからな。退院しても、病み上がりで無理をしてオーバーワークになったりしないようにしっかりと注意しておかなければ」

「お前がそ^{オーバーワーク}れを言うのか……」

「？」

「……まあ、復帰するのはお前が最後だろう。佐久間達の面倒は俺が見る」

「はは、それもそうだな」

「あーっ！ そうだ源田さん！」

いつも尋常でない自主トレーニングを行っているお前が言うのかと鬼道が口を挟んだが、首を傾げる彼の姿に諦めて話を終わらせる。

と、そこへ何か思い出したように音無が大きな声をあげて近づいて来た。

なにやら頬を膨らませて可愛らしい怒りを表現している。

「ダメじゃないですか！ 怪我してたのに凹になったりして！ 鬼瓦刑事も怒ってましたからね！」

「ちよつと待ってくれ、春奈ちゃん。あれは仕方のないことだ……」

「ほう……詳しく聞かせてくれ春奈。お前達が試合の裏で何をしていたか、俺達は要点しか聞いていないからな……」

「要点だけでいいだろう鬼道……！ 別に怪我したわけでもないんだ、わざわざ聞くことじゃ——」

「それは俺が聞いて判断することだ」

そうして、音無の源田を咎める言葉から鬼道の尋問及び説教が始まってしまふ。

解放されたのは、帰りのバスを待たせている響木が雷門イレブンを呼びに来た時だった。

バスに乗り込んで雷門中に帰ろうとする雷門イレブン。

「じゃあな、源田——」

「俺も手続きをしたら帝国に戻るからな。待っているよ」

「ああ。気をつけて帰れよ」

円堂・鬼道と別れの挨拶を済ませ、源田も病院へ向かう。

帰り道で、視線を感じて振り向くと、通りがかった黒服にスキンヘッド、ゴーグルという癖の強い格好の男の姿があった。

(……凄い肌の色だな。染めてる、のか?)

すぐに道の曲がり角で姿を消したその人影に気のせいかと警戒を捨てて病院へ戻る。

とにかく、これでまた当たり前のサッカーができると思っていた。

突如日本に宇宙人が現れたと源田が知ったのは、病院に戻ってからのことだった。

脅威の侵略者編

源王は北の吹雪を忘れない

FF全国大会の決勝戦を制し、日本一に輝いた雷門イレブン。

彼らの母校は、その日の内に瓦礫の山と化していた。

犯人は自らを宇宙人と名乗るサッカーチーム。

彼らを止めるため、雷門イレブンは戦いを挑んだ。

「イナズマブレイク！」

しかし、世宇子中との死闘を終えたばかりな上に主力が欠けていた彼らでは宇宙人——エイリア学園「ジェミニストーム」の相手は荷が重すぎた。

「ブラックホール！」

主力3人の連携シユートは、ジェミニストームのキーパーを務める大男ゴルレオが手の内に作り出した黒い渦にあっさり飲み込まれた。

「我々に必殺技を使わせるとはな……多少やるのは認めてやろう。だが足掻いても無駄だ。地球にはこんな言葉がある——

——『骨折り損の草臥れ儲け』」

「ワープドライブ！」

「フォトンフラッシュ！」

「グラビティシヨン！」

「アストロブレイク！」

世宇子中をも凌ぐ圧倒的な身体能力と見たことのない異質な必殺技に雷門イレブンは手も足も出さず、その戦いは10点もの失点と、世宇子戦で疲労の溜まった体を押し潰して戦った一部メンバーの入院という惨憺たる結果に終わってしまう。

それでも諦めなかった雷門は今、宇宙人に対抗するため地上最強イレブンを結成しようと日本各地を巡る旅に出ている。

「——そして奈良で総理の娘がチームに加わったが、再びエイリア学園に敗北。その上豪炎寺が離脱。欠けた攻撃力を補うために北海道のストライカーをこれから勧誘しに行く、か……」

病院の近くにある公園で、ベンチに腰かけた源田は携帯で鬼道から彼らの旅路の内容を聞いていた。

「それで、その北海道のストライカーの名が『吹雪』か」

『ああ。だが調べても名前と、事実かどうか疑わしい逸話ぐらいしか出てこなかった。源田、お前は中学に上がる前に全国各地を飛び回って戦っていただろう。吹雪という名前に覚えはないか？』

鬼道がキャラバンから源田に旅のことを話していたのは、謎に包まれたストライカー吹雪について手掛かりを得るため。

響木に代わって雷門イレブンの前に現れた新監督吉良きら 瞳子ひとみこが奈良の戦いを終えて豪炎寺をチームから追放したことから、彼女に反感を持っている者は染岡を筆頭に未だ多い。

離脱した豪炎寺の代わりに得体の知れないストライカーを加えるということにも、小さくない抵抗が見られる。

そして鬼道はチームの一員として、件のストライカーがどんな人物なのか予め知っておこうと考えたのだ。

「そうだな……小学生の頃は手当たり次第に名のあるチームやプレイヤーに勝負を仕掛けていたからな。今思うと、あれで折れてしまった者も居たかもしれないが、面白い奴にもたくさん出会えた。沖縄では一つ年上でそれまで素人だったのに凄い動きをした人が居てな……」

『源田。俺が聞いているのは北海道でのことだ』

「ああすまない、話が逸れたな。北海道……北海道……吹雪兄弟か？」

『兄弟？』

「ああ。FWの弟とDFの兄の2人兄弟だ。弟の方がかなり血気盛んで、強烈なシュートを撃つ奴だったからよく覚えている」

北海道に才能溢れるストライカーが居るといふ情報を聞きつけた当時小学生の源田は、戦うために試される大地に足を踏み入れた。

殆どのサッカー少年達にしてみれば、地元の友人達と共に優勝を目指す、あるいは競い合う大会にそれまでの常識を塗り替える本気ガチの男

が飛び込んで来て災害以外の何物でもなかっただろうが。

そんな理由で、決勝戦までの道のりはあまりにも簡単なものだったが、吹雪兄弟の所属するチームとの激突はその肩透かしを食らって緩んでいたチームの気分を一気に吹き飛ばす激戦となったのだ。

「懐かしいな……あの戦いで俺は——」

——数年前。北海道。

激しい雪により、1日の延期となってしまったが、なんとか行われることになった決勝戦。

『さあー、大雪に見舞われるアクシデントもありましたが、無事行われることとなりました。道産子少年サッカー大会。決勝戦！ 前年度優勝チーム“ホワイトラバース”と対するはここまで無失点で勝ち上がってきた東京の刺客！ 特別招待チーム“リトルプライド”——！』

実況の興奮を抑えきれない声が会場に響き渡る。

観客席はそれなりに埋まっており、遠い所からやって来た強い少年達の試合を見ようという人々が賑わっていた。

そんな様子に、リトルプライドのメンバーが苦笑いをする。

「いやー、また決勝戦来れちゃったな……」

「あんまり期待されてもなあ……源田が全部シュート止めるから一点だけでもとれば自動的に勝てるってだけなのに」

「源田ほんとのむぞ?! おまえが吹雪兄弟と戦いたいって言うから北海道まできたんだからな!」

「わかっているが……どうしたみんな。元気がないぞ? これから試合なのに」

『これから試合だからだよッ!』

純粋な疑問を投げかける源田を、彼を除いたチーム全員が怒鳴りつけた。

単なる一サッカークラブには似つかわしくない実力をした源田の“全国強い奴巡り”に彼らは既に数回付き合わされている。

いつも話題になっているチームのことを聞きつければ手当たり次第に試合をしたいと叫び、実際に試合に漕ぎ着けてしまう源田。

戦う相手は殆どが名の知れた強豪、明らかにチームの力と釣り合っていない格上の相手ばかりだった。

しかし、今のところは源田がどんなシユートも止めているからどんな勝負も勝利か引き分けて無敗。

明らかに次元の違う戦いを見せられても彼らが付き合うのは、一重に源田のサッカーへの熱量故。

もはや仕方ないと半ば諦めながら、それで一周回ってチームメイト達も思い切りのいいプレーができていたのだがそれはそれだ。

そんなやり取りをしている彼らに、1人の少年が駆け寄ってきていた。

橙色の髪をしたつり目の少年である。

これから戦うチーム所属の、源田が目当てにしている兄弟の片割れの突然の接近に気づいたチームメイト達が慌て出すが彼はそれを完全に無視して源田に向かって口を開いた。

「おい、お前だな！ 源田って奴は！ キーパーの！」

こちらを指差して大声で話しかけてきた少年に、源田も向き合って答える。

「そうだが、そういうお前は吹雪だな？」

「アツヤだ！ 吹雪アツヤ！ お前、今までの試合で一回も点を取られたことないんだってな。今日はオレがお前から点を取ってやるから覚悟しておけよ！」

「ほう……」

「こらアツヤ、なにしてるの！」

「いててて！」

言いたいことを言い切つてふーつ、と息を吐いている少年——吹雪アツヤを後ろから駆け寄って来た銀髪の少年が耳を引っ張りながら叱りつけた。

「また失礼なことと言って！ 喧嘩しちやダメでしょ！」

「宣戦布告だつーの！ 父さん、オレがこいつから点をとるの大変

かもって言ったんだぞ。簡単だそれくらい！」

「もう、油断はしちやダメだって話したでしょ？ ……僕は吹雪ふぶき士郎しろろう。ごめんなさい、弟が失礼なこと言っちゃって」

「かまわないさ。お前達との試合が楽しみだ」

アツヤの首根つこを引つ付かんで自チームの下へ戻っていく士郎を見送りながら、源田は気を引き締め直した。

彼らとの戦いを、必ず強さへの糧とするべく。

『両チーム整列。いよいよ試合開始です！』

リトルプライドのキックオフで火蓋が切られた決勝戦。

細かくパスを回して堅実に攻め込んでいく彼らだったが、素早いアツヤのパスカットで早々にボールを奪われてしまう。

「へへっ、遅いんだよ！」

「くそっ」

アツヤはドリブルで次々とディフェンスを抜き去ってあつという間にペナルティエリアに侵入した。

彼は、ゴール前に立ちほだかる源田を見据えて勝ち気に笑う。

「おらぁー！」

そのまま鋭いシュートを放った。

風を切って飛ぶボールはサイドを狙ったものだったが、源田は完璧にキャッチして防ぐ。

「ふう……いいシュートだ」

受け止めた後も衝撃が遅れて体に伝わってくるような、強力なノーマルシュートに源田は素直に賞賛を送る。

「へー、まあまあやるみたいだな」

今やこの北海道では負け知らずのストライカーとなった彼のシュートが止められたことに、兄である士郎以外のチームメイトが動揺を示す。

だが、アツヤは不敵な笑みを崩さない。

彼にしてみれば、この程度のシュートはまだまだ本気の欠片も出していない小手調べ。

源田というキーパーの実力の確認に過ぎない。

「よし、反撃だ！」

ボールを受け取ったりトルプライドが反撃に攻め上がる。彼らも十分、大会で通用する実力を持つ少年達だ。

順調にディフェンスを抜き去ってゴールへ近づいて行く。

だが、ボールを運ぶキャプテン獅子王ししおう 吼こゝろの前に士郎が立ち塞がった。

「通してもらおうぞー！」

「いや、行かせないよ——ホワイトアウト！」

「うおっ!？」

微笑みを浮かべて士郎が足を振るう。

すると足下から雪が舞い上がり、獅子王の眼前を真っ白に埋め尽くした。

そして視界が晴れた時には彼の足下にボールは既になく、怯んでいる間に士郎が奪い取っていた。

士郎は華麗なドリブルでボールを運び、それを弟に渡す。

「ハハッ！ 止められるかよー！」

切り込んでいくアツヤの前には、ディフェンスは全く障害とならず再びゴール前に到達した。

今度は本気だ。アツヤは加減なしでゴールを狙う。

「ぶっ飛べ……！ アイシーシュート！」

回転をかけ、浮き上がらせたボールを氷が包む。

彼自身も飛び上がり、引き絞った右足を振り抜いてそのボールを蹴り出した。

通った空間に氷の細かい結晶を散らしながらボールはゴールへ向かう。

アツヤ自慢の必殺シュートだ。

そのシュートを源田が迎え撃つ。

彼は右拳をその場で振り上げて、地面に叩きつけた。

しかし、何も起こらない。

「……うおおー！」

即座に動きを切り替えた源田。飛びかかってボールを抱え込むよ

うに両手で挟む。

「——フンッ！」

そして空中で体を思い切り捻り、ボールを真上に投げ飛ばすことでゴールを防いだ。

空へ向かって飛んでいき、力を使い果たしたボールが彼の掌の上に落ちる。

『と、止めたー！ ここまで誰も止められなかった吹雪アツヤのシュートを、源田が止めました！ 絶対防御と称される腕前は伊達じゃない！』

「……」

決勝戦まで、放てば必ず入ると言っても過言ではない程強力だったアツヤのシュートが防がれたという事実に興奮した実況が叫ぶが、源田本人は不満げな顔をしていた。

サッカーを始めた頃から飛び抜けた才能を示し、更に必殺技を習得してからは正に向かうところ敵なしだったアツヤからすれば面白い。ない。

「舐めやがって……！ 余裕でいられるのも今のうちだからな！」

「アツヤ、あんまり熱くなりすぎちゃダメだよ」

「わかってるよ！」

「わかかってないでしよもう……」

自慢のシュートを必殺技も使わずに止めておいて、物足りなそうな源田の態度にアツヤは眉間に皺を寄せる。

兄である士郎に窘められるが、今まで止められたことのない必殺シュートを止められて燃え上がった彼の負けん気は収まりそうにない。

士郎は自分の言葉でも効果がないことを察して、肩を落とした。

「オラッ！」

「むん！」

「まだまだあー！」

「やらせるかっ」

それからもアツヤはノーマル・必殺問わず数え切れない程撃ち込ん

だが、遂にリトルプライドのゴールネットを揺らすことはなかった。
「アイシーシュートオ！」

「ぬ——」

放たれた氷のシュートを相手に、源田はまた拳を地面に打ち付けた。

だがやはり何も起こらない。

「くっ……オオオ！」

『源田怒涛の連続セーブ！ 北海道が誇る若きストライカーを前に一歩も退きません！ おつと、ここで前半終了——！』

迫るボールを思い切り拳で殴り地面に叩きつけて止めた所で、ホイッスルが吹かれる。

両チームが各々自チームのベンチに戻っていく中、アツヤは齒軋りしながら源田を睨みつけていた。

「あんにやろー……！ 必殺技も使わないってどういうつもりだ……！？」

ここまで、源田は必殺技を一度も見せていない。

あれだけの實力があるのなら、当然必殺技もある筈だとアツヤは考えている。

彼は自分のシュートにそれを使う程でもないと思っっているに違いない、と信じて疑っていなかった。

（やはりできん。どうすれば“パワーシールド”が使える……）

彼が、未だ必殺技習得に四苦八苦していることなど、知る由もない。

源王は挑戦を躊躇わない

試合は双方無得点のままハーフタイムを迎えた。

ホワイトラバーズのベンチでは、アツヤを中心として空気が冷え切っていた。

本人は熱くなっているのだが、不思議と彼の放つオーラとでも言うべきものは周囲が凍えてしまうブリザードのような冷たさを孕んでいた。

「くっそー！ あいつ必殺技も使わないなんて、バカにしゃがって！」

「アツヤ、もう少し落ち着きなよ……」

「わかってるよ！」

「だからわかってないでしょ！」

経験のない大苦戦にフラストレーションが溜まるアツヤは兄にまで噛み付き出す。

士郎にもどうにもできなければ、他のチームメイトには手のつけようがなかった。

「なんか騒いでるなあいつら」

「……これなら俺達でも勝てるんじゃないか？」

「おい、油断は禁物だぞ。あの2人のプレーを見ただろう」

「だが好都合なのは事実だな」

「杉森」

その様をリトルプライドの面々が遠目に眺めている。

落花生を思わせる特徴的な髪型をした少年出前いでまえ 洋が相手チームの不和に隙を見つけているのに対し、獅子王は楽観視はできないと窘めた。

そこへ、髪を針のように纏めた刺々しい髪型をしている、獅子王と同じ6年生の杉森すぎもり 威たけしが意見した。

実力から源田に正GKの座を譲った杉森だが、腐らずに持ち前の情報収集・データ分析能力を生かして作戦などを立案することで試合に携わる、チームの頼れる先輩である。

「確かにあの兄弟は飛び抜けているが、他のメンバーの実力はこちら

と同じか、あるいはそれ以下。吹雪兄弟のコンビネーションが崩れるのなら、こちらにも付け入る隙はできる」

「なるほど……」

「吹雪アツヤはこれまでのデータからも、熱くなると身体能力に任せた雑なプレーになる傾向があるとわかっている。吹雪士郎も個人として明確な弱点はないが、1人で守るにはフィールドというのは広い。突破は可能だろう」

「杉森先輩、つまり俺達が攻める時は……」

「ああ。吹雪士郎を引き寄せてからのサイドチェンジで攻めていけ。お前達ならボールをゴールに持っていきさえすれば点を取れる」

「はいっー」

リトルプライドのメンバー達は杉森の指示に納得し、後半に備えてレギュラーが集まり細かい動きを話し合い始める。

彼はそれを見届けると、ベンチの端に座る後輩に歩み寄った。

「お前がそんな顔をしているとは珍しいな、源田」

「杉森さん……」

思い詰めた様子で拳を握り締めていた源田の隣に杉森が座る。

「お前はいつも、相手のシュートが強い程笑っていただろう？ さっきもナイスセーブだった。それなのにどうしたんだ？」

杉森が先程のアツヤとの熾烈な攻防を称えるが、彼の顔色は優れない。

「しかし……杉森さん、俺は未だに必殺技を使えません」

源田が吐露したのは、必殺技がなくとも、普段から誰よりも練習して努力を欠かさない彼らしからぬ弱音だった。

確かに、戦い始めた頃は色々なシュートを受けるごとに力の増大を感じた。

手が傷だらけになる度に、もう同じシュートではその傷がつかないと言える程の力を手に入れてきた。

だが、近頃になってその力が伸び悩んできたのだ。

このまま必殺技がないのでは、限界が来るということを感じながら、しかし必殺技は使えない。

(強者と戦い続ければ目覚めるものと思っていたが――)

依然として、地面を殴りつけても衝撃波の壁が現れることはない。ただ憧れた男の姿を借りているだけでは、辿り着ける場所ではないのかと考えながら答えは出ない。

普段は疲れ知らずでサッカーに打ち込み続ける後輩の弱々しい姿に、杉森もなんと叫んだものかと逡巡していると、背後から足音がした。

「あ、あなたは……！」

振り向いたリトルプライドの監督が上擦った声を上げた。

日本サッカー界で、ベンチに近付いてきたその男のことを知らぬ者は居ない。

細長い顔、瞳を隠すサングラス。紫を基調としたスーツ。

中学サッカー協会副会長・影山零治である。

「か、影山総帥……なぜこのような所に」

「リトルプライドをこの大会への特別出場に推薦したのはこの私だ。目をかけたチームの戦いぶりを見に来ることは、おかしなことかね？」

「い、いえっ、滅相もございませぬ……」

何でもないように語る影山の言葉に、恐縮しきりで頷く監督。

リトルプライドは、自分達と同じく東京の、影山が支援をするジュニアチーム「ジュニアエンパイア」と試合をして引き分けている。

そのチームの選手の殆どが帝国学園にスカウトされ、サッカー部で即戦力として起用されているという都内有数の強豪と彼らは互角に戦ったのだ。

そのような経緯で影山から実力を認められ、彼による関係者への紹介が今回の北海道の大会への出場の一助となっている。

大人達のやり取りはそれで終わり、影山は監督の横を通り過ぎてベンチの側に来た。

「影山総帥……」

「少し離れてくれたまえ、杉森くん。源田くんに話したいことがある」
「……はい」

外向きの顔で話し杉森をその場から遠ざけて、影山は源田を見下ろした。

「影山、総帥……」

「何を迷っているのかね？ ジュニアエンパイアの攻撃を凌ぎきった男がらしくないな」

「……俺の強さは、俺が求める領域にはまだ辿り着けていません。吹雪アツヤは強い。必殺技が使えなければ、さらに強くなったあいつ、これから出会う強者達を相手に勝ち続けることはできない。しかし、俺は必殺技を使うことができななんです」

「ふむ……確かに、これからもサッカーで勝つには必殺技は必要不可欠だろうな」

杉森に言ったことと同じ内容を告げると、影山は顎に手を添えながらその言葉に頷いた。

だが、それになんと言おうかわかりかねた杉森に対し、影山は何も迷うことなく、答えを出した。

「君が必殺技を使えないのは、自分の力を信じられていないからだ」
「はっ……っ？」

彼の鋭い刃物のような言葉に、源田が思わず目を見開いた。

だが、影山は反論など聞く気はなくそのまま畳み掛ける。

「試合中度々拳を地面に打ちつけていたのが、必殺技かね？ だとすれば思い切りが足りん。周りの者達は、不発に終わった後に対応してみせた腕前を見ているようだが私は違う。私に言わせれば、そもそも不発になることがおかしいのだ」

それは、既に30年以上フットボールフロンティアを連覇している王者帝国学園の指導者として、その覇業を成し遂げるだけの必殺技開発等にも携わってきた彼の視点からの見解だった。

「必殺技が不発になって尚も君がシュートを止められるのは、不発でもシュートに対応できるように自分で余裕を作っているからだろう。失敗を恐れ、自分で自分に枷をつけているのだよ君は」

「……」

「私が『自分を信じろ』などと言うのが意外かね？」

「面食らって黙り込んだ源田の内心をも、影山は言い当てた。実際、源田には不可思議であった。」

彼の影山への印象は、効率至上の合理主義者。信じる、などと言う所謂感情論の代表のような言葉を使うのはその印象から大きく外れる。

源田の疑念に影山は、クツクツと笑い声を零しながら答えた。

「私は、常に勝ち続ける絶対的強者であることを理想としている。そして、本当の強者が自身の強さを疑うことはあるまい？」

「……！」

圧倒的な強者であれ。絶対的な王者であれ。

それを目指し続ける男の考えは至ってシンプル。

常に勝ち続ける者は、盤上の敵・味方・己自身の力の全てを、正確に把握して的確に運用するもの。

そこに前提である力そのものへの疑念が介在する余地はないのだ。

「己の力も信じられない者が、頂点を掴むことはできん」

より正確には「信じる」というより「疑わない」と言うべきか。

とにかく、影山の語る王者のあり方に、源田は何も言えなかった。程なくしてハーフタイムが終わる。

影山はベンチから去り、源田達はグラウンドに戻っていく。

『リトルプライドとホワイトトラバース、一步も退かぬ両者、天秤はどちらに傾くのか！ いよいよ後半戦開始です！』

ホワイトトラバースのキックオフから始まった決勝戦後半。

前半と同様にアツヤは単独でリトルプライドの陣営に切り込んでいき、みるみる内にゴールへ迫っていく。

「何度も好きにさせるか！ ジャイアントスピン！」

「遅えよ！」

(さつきよりもさらに速い!? そして……冷たい！)

獅子王が独楽のように回転しながらのタックルでアツヤからボールを奪い取ろうとするが、躲かれてしまう。

すぐ横を通り抜けられた獅子王は、彼の纏う冷気が肌を刺されるように感じるほどに強く、鋭くなっていくのを感じた。

ゴールを目前に、アツヤは走るスピードを落として必殺技の体勢に入る。

「やってやらあ！ 吹き荒れる——」
前半までのアイシーシュートとは違う。

アツヤ自身でもまだ特訓中だった新必殺技だ。

だが初めての強敵を相手に、出し惜しみはできないと判断した。
両足で挟んで回転をかけ、ボールをバウンドさせる。

氷を纏っていくボールに彼も回転しながら、蹴りを叩き込む。

「——エターナルブリザードオ！」

「と、止めるぞ！ ——うわああ！」

「なんて勢い、だあああ!?!」

氷を散らしながら飛んでいくボール。

それはシュートブロックに入ろうとしたDF達も吹き飛ばしながら、ゴールへ迫ってくる。

猛烈な雪風を浴びながら、源田は腰を落として両手を構えた。

「くっ、おおお、なんとというシュートだ……！」

受け止めながら、ボールの勢いは収まる気配がない。

ずりずりと足が足下を抉りながら後ろへ押し込まれていく。

「いけええええ!!」

「ぬっ、あああ！」

アツヤの叫びと共に力の増したシュートを、源田は上に逸らすことで辛うじて防いだ。

源田が弾かれて尻餅をつくと同時に、思い切りゴールポストにぶつかって跳ね返るボール。

「なに!?!」

「よくやったぞ源田あ！」

ボールを確保して反撃に回るリトルプライド。

着実にディフェンスを躲し、左サイドを使って前に進んでいった。

「行かせないよ！」

「くっ……ボールは渡さないぞっ」

ゴールに近付けば、当然士郎が対応してくる。

詰め寄ってきた士郎に出前は臆さず挑んだ。

だが、実力差は歴然で、抜き去ることはできそうにない。

士郎が必殺技を使おうとする。

「ホワイト——」

(今だ！)

その時、出前が思い切りボールを逆サイドに蹴り出した。

ボールが向かう先に居るのは、エースストライカー下鶴しもづる改あらた。

仲間内では物静かで控えめな彼だが、試合になれば基礎能力に裏付けられた正確なプレーをする。

士郎も誘い出されたことに気付くが、全く逆サイドのディフェンスには流石に間に合わない。

「い、行かせないべよー！——あれれ！」

藁帽子を被った少女荒谷あちや紺子こんこが止めようとするが、下鶴は容易く彼女を抜き去ってゴールを狙う。

「決める、下鶴！」

「はい——サイコショット！」

ベンチからの杉森の声に応え、彼は念の力でボールを浮き上がらせた。

翳した手の動きに従い、ボールは触れられていないにも関わらず勢いよくゴールへ飛んでいった。

「おお——！」

ホワイトラバースのGK函田はこだ鉄てつが地を蹴って跳び上がり、奇怪な軌道を描くボールを受け止めようとする。

が、しかしその手は届かず、ボールはゴールネットに突き刺さった。『ゴールツ！ リトルプライド先制——！ 均衡を破ったのはリトルプライドだ——！』

「くっそお！ ぜってえ取り返してやる！」

アツヤを筆頭に、ホワイトラバースが反撃に動く。

ついに点を奪い取ったリトルプライド。

このままホワイトラバースの攻撃を止められれば、勝利は確実だ。そして勝利は、源田の働きに懸かっている。

だが――

(次にあの必殺技エターナルブリザードが来れば、止められん……！)

源田は、先程のアツヤのシユートの力に戦慄していた。

既に離れた後も、ボールを受けた両手は霜焼けしたように冷たい。

前半に受けていた「アイシーシユート」とは比べ物にならない威力だった。

後半開始早々に放たれたあれを防げたのは完全に幸運によるもの。

「覚悟しやがれ！ エターナル――」

再び回転をかけたボールを、アツヤが蹴り飛ばしにかかる。

(だが、パワーシールドは……)

確かに「パワーシールド」はただ拳を打ちつける必殺技ではない。

気を溜めた拳を、高く跳び上がった上空から、思い切り叩きつける。

純粹に強靱な肉体と、高さを合わせた力がシユートを弾き飛ばす衝撃波の壁を生み出す。

しかし練習でそれを出せたことはない。

その上、相手のシユートを前に大きく跳び上がり、万が一不発となれば流石の彼でも対応し切れない。

それ故に、その場で拳を叩きつけることで発動ができないか試行を重ねていたのだ。

――本当の強者が自分の強さを疑うことはあるまい？

(俺は、強者になれるのか?)

否。それを疑っている内は、その領域には到達できない。

「――ブリザード！」

どうやら、今まで上手くいっていたことで、成功のぬるま湯に慣れてしまっていたらしい。

(俺は――)

――王者になる!!

改めて誓う。この魂にかけて。

サッカーの、守護神達の頂点に立つ。

「オオオオオオ!!」

男は獅子のように吼える。

そしてゴール前で高く、高く飛び跳ねた。

「なにつー!」

「まさか!」

「ほう……」

アツヤや士郎、チームメイト達、観客達がざわめく中、眺めていた影山は感心した風に息を吐いた。

笑っている。男は、一度振り上げた拳を降りていく地面に向ける。

重力に任せず、自分から地面に向かっていくように。

やがて、拳が地面に到達する瞬間、高らかに叫ぶ。

その必殺技の名を。

「パワーシールド!!」

ゴールエリア前で吹き上がった衝撃波はブリザードを完全に塞ぎ止め、ボールをフィールドの外へ弾き飛ばした。

源王のシュートは決まらない

それから試合は続いたが、もはやホワイトトラバースに源田の守りを突破する術はなかった。

「負けてたまるかアーアー！ エターナルブリザード！」

「パワーシールド！」

衝撃波の壁は吹き荒れる吹雪ブリザードを前にしてもびくともせず、シュートを弾き続けた。

その一際激しかった攻防を最後に、審判が笛を鳴らす。

『ここで試合終了アー！ 必殺技を披露してからはますます強固な守護神となった源田幸次郎、ついに一点も渡すことなく勝利！ 優勝は、リトルプライドだアーっ！』

スコアは1ー0、リトルプライドが後半の得点を守り切った形となった。

チームメイト達は優勝の喜びに打ち震え、立役者である守護神の少年に駆け寄っていく。

リトルプライドの面々は、これまで全てのシュートを素の力と技術で止めてきていた彼がついに必殺技を習得したことへの祝福の思いでいっぱいだった。

「ついにやったな。あれがお前の必殺技か」

「はい」

駆け寄ってきた者達の1人、杉森が称賛を余さず示す。

周りのチームメイト達も彼と同じ気持ちだった。

「『パワーシールド』か……いい必殺技だな、源田」

「これはもういいよ源田さん、無敵じゃないっすかあ!？」

「よしてくれ2人とも……その辺で勘弁してくれ——」

「源田さん？ 後ろに誰か——ひえっ」

感慨深げに褒める下鶴、興奮気味に話しかけてきた出前、源田が流石に照れ臭そうにして、言葉が止まった。

何かと思い、源田の視線の先に出前が振り向いてみれば、そこに立っていたのは今日一番に険しい表情をしたアツヤ。

その形相に小さな悲鳴を残して出前が離れていくのと入れ替わりに、彼がずんずんと近付いてきた。

アツヤは威嚇する狼——実際の所、小学生の身長では精々が子犬だが——のように唸りながら睨み付けてくる。

「……………」

「……………」

そして、こちらを睨み付けたまま黙り込んでしまった。

時折口をもごもごとさせるが、肝心の言葉が出てくる気配はない。

明らかに無視できる様子ではなく、かといってどう対応したものか、と困惑する源田。

アツヤはというと、初めての敗北という大きすぎた屈辱とこのままではいられないという負けん気だけに突き動かされて源田の前にやって来て、それからなんと言うかを考え出しているだけで、大した意味はないのだが。

とにかく、周りの者達が固唾を飲んで見守るお見合い状態がしばらくの間続くことになった。

やがて心身に整理が着いたのか、アツヤは軽く息を吸ってから口を開いた。

「俺ともつかい勝負しろ！」

「あ、ああ」

「試合は、俺の…………ま…………ま……………」

「ま?」

「…………ッ！ 負けだッッ！ でも負けっぱなしじゃいらねえ！」

後で勝負だぞ！ 逃げんなよ！」

アツヤはそう捲し立てて、走り去って行ってしまった。

嵐のような、あるいは吹き抜ける雪風のような少年に呆気にとられる源田とリトルプライドの面々。

そこに、吹雪のもう一方の片割れが新たにやって来る。

「凄いね、君。アツヤのシュートをあんなに止めちやった人は初めてだよ」

「俺もあんなストライカーに会ったのは初めてだ。いつ破られるかひ

やひやしたぞ」

「はは、結局一点も取れなかったみたいだね。あいつ、今まで全然負けることがなかったからこの負けはいい薬になると思うよ。よければこの後も付き合っただけてね」

「もちろんだ。あいつ程のプレイヤーと戦えば、俺にも得られるものは果てしなく多い」

「ありがとう。……先に言っておくけど、アツヤは負けず嫌いだからしつこいよ?」

「生憎だな。それは俺もだ」

お互いに笑いながら、2人は固い握手を交わした。

表彰式を終え、コーチの話も終わった所で、ホテルに向かおうとするチームに事情を話して送り出された源田は走る。

そしてスタジアムの出入口まで来たところで立ち止まった。

(——どこで勝負するんだ……?)

よく考えてみれば、待ち合わせも何もしていない。

アツヤは「勝負!」とだけ言って走り去ってしまったし、源田もそこが完全に頭から抜け落ちていた。

折角の勝負がお預けになるという可能性に思い当たって、一瞬本気で落ち込みかけた源田だったが、横から飛んできた大声に喜色満面に振り向いた。

「見つけたぞ源田ア! うろろうするな……ってなに笑ってんだ気色悪い!」

「こらアツヤ。何かいいことがあったのかな、源田くん?」

「気にするな。俺が勝手に落ち込んで、勝手に喜んでるだけだ」

地元の少年2人の案内で近場のサッカーグラウンドにやって来た3人。

アツヤがシュートを打ち、源田が防ぐ。

そんなやり取りが、土郎に見物されながら延々と繰り返されられていた。

「エターナル——」

もはや何度目になるかわからないアツヤの必殺シュート。彼を中心に雪風が巻き起こり、氷がボールを覆っていく。そして、試合と遜色ない力で思い切り蹴りだした。

「——ブリザード！」

「パワーシールド！」

だが、その猛攻を源田はものともしない。

彼の放つ衝撃波の壁は、繰り出される度にその力を増しているようにさえ感じられた。

しばらくの間、ボールが壁とせめぎあったが再び弾かれた。

「ああもう！ 何で勝てねえんだよチクショー！」

「あつ、アツヤ、上！」

「うえ？ ——ぎゅえっ！」

悔しきで叫んでいたアツヤの頭上に、弾かれて打ち上がったボールが落ちてきた。

彼は潰れた蛙のような声を上げて蹲る。

「ふはっ、いや、すまない。覚えてたでな、弾き方などはよくわからないくて……」

「気にしなくていいよ源田くん。周りが見えてなさすぎるアツヤが悪いんだしね。……ふふっ」

「何笑ってんだお前らあ！ わかってんぞ!? くっそー、こうなったら……源田！ お前シュート打ってみろ！」

「俺が？」

立て続けに負けて、どうしても勝ちたくなかったアツヤが形振り構わぬ提案をしてきた。

負けず嫌いにも程がある、と流石に士郎も呆れて苦言を呈する。

「アツヤ。源田くんキーパーだよ？ 空しくないの？」

「るっせ！ キーパーだろうが一端のシュートくらいはできるだろ？ それに俺だってキーパーなんてやったことねえ！ 五分五分だ！」

「……わかった。シュートを打つのは久しぶりだが、やってみよう」

兄の視線に顔を羞恥で赤くしながら、それでも勝ちたい彼は譲らな

い。

頷いた源田がアツヤと位置を交換し、ボールを足下に置いて立つた。

それを睨み付けながら、アツヤは鼻息荒くシュートを待ち受ける。

「よし、いくぞ」

「来いやあー」

源田が、思い切りボールを蹴ろうと動いた。

助走をつけ、軽い駆け足でボールに接近し、右足を振りかぶる。

そしてボールが、源田の足下から消えた。

甲高い音が鳴り響いた。

「は?」

アツヤが、何が起こったか理解するには5秒程の時間を要した。

ゴールラインの内側にボールが無いことと、鳴った音からして、

シュートはクロスバーにぶつかって弾かれたのだろう。

それはわかる。

だが、蹴られたボールが殆ど見えなかった。

アツヤ自身がいつもシュートを放つ側で、シュートを捉えるのに慣

れていないにしても、相当な力がボールには込められていた。

「どうした、驚いたか?」

「ああん!? 別にビビってねえし、ゴール入ってねえじゃん! 次

打ってこいよ!」

「誰もビビったとは言っていないよアツヤ」

呆気にとられていたのを見た源田が、得意げになって口元に笑みを

見せる。

それに火がついたアツヤが、更なるシュートを促して怒鳴った。

源田が、再びシュート体勢に入った。

力強いシュートが次々と放たれる。

「ふんっ!」

蹴ったシュートの軌道は上に逸れてまたクロスバーに激突した。

「ぬん!」

蹴ったシュートの軌道は右に逸れてゴールポストに当たった。

「ぬああ！」

蹴ったシュートの軌道は左に逸れてゴールポストに当たった。

「うおお！」

蹴ったシュートの軌道は――

最終的に、源田のシュートは10本程放たれた。

源田は顔に汗を滲ませている。下手をすれば試合中に匹敵する量の汗が流れたのは何故か。

一部始終を眺めていた士郎が、なんとも言えない表情を浮かべた。

そして、最初に立った場所から一歩も動いていないアツヤが心底呆れた表情で口を開いた。

「お前、シュートど下手くそだな」

告げられた現実には、源田は膝から崩れ落ちた。

源田の悩みの一つである。

それを眺めながらもアツヤは追及の手を緩めない。

「まさか1本もゴールに来ないとか思わなかったぞ」

「……………」

「パワーは凄いいし、フォームも普通に見えるのに何故か逸れていったね」

「……………」

士郎にも続けてダメ出しされるが、源田は何も言い返せなかった。

「あんな腕前でなんで自信満々だったんだよ……………」

「今回は入るかと思っただ……たまには入るんだぞ。必殺技も習得出来たし、今日は運が来てると思っただ」

「完全にギャンブルとかの思考だね」

勝ちたかった筈なのに、アツヤは何故かひたすらに空しかった。

「手でシュートが出来ればいいんだが……投げたりするのは得意だぞ」

「もうそれはシュートじゃないでしょ」

「お前は何を言っているんだ」

手段を選ばずに奪い取った勝利に価値はない。

神様がそれを教えてくれようとしたのかもしれないと、アツヤは空を見上げながら思った。

そろそろ解散しようという空気になり、源田と吹雪兄弟はそれぞれチームと親の元に戻ろうとする。

「俺達は他のチームと練習試合をするからしばらくこの街のホテルにいる。気が向いたらまた来い」

「ならまた勝負だ、逃げるなよ！　なあ兄ちゃん、2人で練習しようぜ、新必殺技！」

「うん。今日はアツヤがずっと打ってたけど、僕も少しシュート打ってみたくなったよ。……またね、源田くん」

「またな源田ー！」

「ああ。またサッカーをやろう」

源田と吹雪兄弟の北海道での出会いはそうして幕を閉じる。

そんな源田の昔語りを鬼道と、吹雪に興味を持って集まった雷門イレブンが耳を澄まして聞いていた。

『俺が『吹雪』について知っていることはこんなところだな』

「ああ、十分だ。ありがとう源田。お前がそれほど評価するなら、確かに戦力としては申し分無さそうだ」

「……ふん」

鬼道の言葉に対して、豪炎寺がチームを離れたこととその穴を埋める吹雪の加入に納得しきれていない染岡が鼻を鳴らす。

「しかし、そんなに凄いならなんでフットボールフロンティアに参加しなかったんスかね？」

源田から吹雪アツヤの凄まじい実力を聞かされた1人である壁山が雷門イレブン共通の疑問を口に出した。

それほどの強さがあるならば、地区大会の突破くらい朝飯前だろう。

北海道で大人しく、ろくに公式記録もない無名の身に甘んじているとは思えない。

「別におかしな話じゃねえだろ。源田の話だって小学生の頃のことだ。当時は強くても、中学生のレベルでは通用しなかったんじゃねえのか」

「いや、あるいは通用し過ぎたからこそかもしれないな」

「どういうことだ？」

「影山だ。吹雪が強かったからこそ、そちらにも奴が何らかの妨害をした可能性がある」

「強ち、噂も間違いないかもしれないでやんすね」

「ひええ……熊より大きいんスカあ？」

『お前達がこれから会うのが俺の知る吹雪なら、1つ言えることがある』

「？」

『「熊殺し」は本当だぞ』

それではな、とその言葉への雷門の反応を待たずに電話を切った源田。

結局、まだ見ぬ北海道のストライカーへの不安と期待が入り混じったまま雷門イレブンは北へ向かうことになった。

電話を終えた源田も、ベンチから立ち上がった。

(退院したらどうするか……)

戦線復帰が視野に入ってきたがかといって手放しで喜べる状況ではない。

小学生時代に世話になった先輩、杉森が現在各所に呼び掛けて結成しようとしているというバックアップチームに顔を出してみようか。

そんなことを考え、背後から黒服の男に見つめられながら、源田は病院へ歩いていった。

鬼道達との再会は――

「――あーあ！　いきなり試合日程変更で不戦敗とか納得いかねえよ
兄貴！」

「――そうは言っても、どうにもならないよ。特訓して、来年こそ頑張
ろう」

「おーい！　吹雪くん達――！　お客さんだよー！」

「客？」

雷門イレブンに、雪原のサッカー少年達が加わってからのことにな
る。

アツヤは雷門を信じない

身震いするような冷たい風が吹き抜ける空の下、22人の少年達がサッカーグラウンドに立っている。

スカウトの目的であるストライカー、吹雪アツヤの実力を見るための練習試合が彼の所属する白恋中サッカー部と雷門イレブンの間で行われようとしていた。

「日本一の雷門中と試合できるなんて、嬉しいけど緊張するべ……」

「心配すんな」

つい先日までテレビの向こうの住人だった日本最強チームを目の前にして身を強張らせていた荒谷の肩に、歩み寄ったアツヤがそう言つてポンと手を置いた。

顔を上げた荒谷にアツヤは勝ち気な笑みを見せながら言う。

「日本一だろうがなんだろうが、この俺が今日もバンバンシュート決めてやるよ！」

「あ、アツヤくん、あんまりそういうこと言っちゃ——」

「ああん!? 舐めてんじゃねえぞ一年坊オ！」

「ほらあ〜！」

アツヤの不遜な発言に、地獄耳で聞きつけた染岡が噛みついてきた。

雷門イレブンでも強面な彼の怒号に、荒谷は試合前から涙目でびくびくとしながらアツヤの後ろに隠れてしまう。

元々アツヤ——新ストライカーの加入に乗り気でなかった染岡と、他者と衝突しやすい気の強い性格をしたアツヤの関係は、ファーストコンタクトの時点から既に険悪な状態だった。

それは数時間前に遡る。

「吹雪くん達〜! どこに行ってたの2人とも? お客さんが来てるんだよ〜」

「客?」

他の白恋中サッカー部のメンバーに遅れて部室に入ってきた2人

の少年。

兄弟らしく、よく似た顔をしている彼らだったが、雷門イレブンはまず先程荒谷の呼んだ名前が聞き捨てならなかった。

2人の方はつい先程あった者達とのあまりにも早い再開に呆気に取られている。

「あー！ お前達は！」

「あれ？ 君達……」

「ちよつと待て、吹雪ってこいつらか!？」

彼らは雷門イレブンが白恋中へ向かう道中、道端で震えていた兄弟だった。

途中までキャラバンに乗せていた間に話して、2人もサッカーをやっているということは聞いていたが、目当ての相手に既に出会っていたというのである。

「全然大男じゃないでやんす！」

「とうるか2人！」

「なんだよテメエら、人の顔見ていきなり不躰だな。そもそも何者なにもんだあ？」

自分達を見るなり口々に騒ぎだしたよそ者達に、橙色の髪をした少年がつり目をさらにつり上がらせながら詰め寄る。

非常に柄が悪い。

壁山など、自分の方が体格はずっと大きいというのに完全に怯えきってしまったている。

見かねた後ろの銀髪の少年が、橙髪の少年のしているマフラーを引っ張って自分の側に引き戻した。

ぐえつ、と掠れた声を洩らしながら引き戻された橙髪の少年は不服そうな顔で銀髪の少年に振り向く。

「何すんだよ兄貴……」

「お客さんにいきなりガンつけないの。それで、君達はどちら様かな？」

「俺達は雷門中サッカー部だ。俺、キャプテンの円堂守」

「君達が日本一の……そうだったんだ。僕は吹雪士郎。白恋中サツ

カー部のキャプテンをしてるよ。こっちは弟のアツヤ」

「じゃあ、お前らが『熊殺し』か!？」

彼らが『吹雪』だと確定したところで、今度は染岡が吹雪兄弟に詰め寄った。

少林や帝国の洞面程ではないが、小柄な彼らにそんな異名がつくような大層な事ができるとはにわかには信じられなかった。

その染岡の迫力に面食らいながらも、士郎が質問に答える。

「まあ、そう呼ばれてはいるね。白恋中うちは田舎の弱小チームであんまり注目されてないからか、出回ってる噂では僕とアツヤの事がごっちゃになってるんだ。僕はDFで、アツヤがエースストライカーさ。……噂を聞いてきた人達は、いつも僕らを見てびっくりしちゃうんだよね」

「そーそー。どいつもこいつも俺達のことを大男だとか思ってたやつて来て、いざ会ったら『弱そう』だの『チビ』だの言ってる舐めやがるんだ」

「……どうやら、源田の言っていた吹雪兄弟のようだな」

「——今、源田って言ったか?」

吹雪兄弟の語る噂の真相を聞きながら、鬼道は1人確信を固めた。

そして彼の眩きを聞き逃さなかったアツヤが、知っている名前に反応する。

「……ああ。ここに来る前に、あいつからお前達のこととは少し聞いている」

「へえ、源田くんが。懐かしいなあ……アツヤは彼にコテンパンにされてたねえ」

「もう負けねえよ兄貴! 次こそあいつに勝つために強くなったんだ俺は」

「そうそう。熊殺しと言えば、源田くんも凄かったんだよ」

「なに……? どういうことだ」

「いや無視すんなよ兄貴っ!？」

アツヤの言葉を流して鬼道と喋り続ける士郎。

彼の発言に今度は鬼道が聞き返した。

士郎は朗らかに笑い、壁際にあつた柵から一枚の写真を持つてきた。

「ほら、これ」

鬼道に手渡された写真を、円堂達も周りに集まって覗き込む。

手前には士郎らしき少年、そして奥にアツヤらしき少年と獅子を思わせる髪をした少年が並んで立っている光景が写っていた。

並んでいる2人は胸を張っていてどこか誇らしげだ。

「これは……お前達と、源田か」

「ちよつと待て。こいつらは……何の上に立ってるんだ？」

風丸が、写真の風景の異常を感じ取った。

アツヤと源田が並んで立っている場所は茶色い。

ふさふさとした巨大な毛の塊に見える。

ある可能性に行き着きながらも、明らかに常識から外れた回答故に彼は問わずにはいられなかった。

違っていてくれという、風丸の小さな願いを士郎が笑顔で粉碎して、その異常の正体を明かす。

「ああ、それはヒグマ山オヤジだよ。皆もさつき見たでしょ？」

雪原に横たわっている毛の塊は、キャラバンが白恋中に来る道中で遭遇したヒグマであった。

その時は、飛び出していったアツヤが倒したのだが。

士郎は雷門イレブンが引いているのに気付かず、懐かしげに当時の思い出を語る。

「試合をした後も源田くん達はしばらく北海道に居たからね、アツヤと一緒に勝負したりスキーしたり色々遊んだりしたんだ。その時に出会った山オヤジを源田くんが倒しちゃったからアツヤも対抗して倒そうとして……今ではいい練習相手になってるんだ」

「マジの熊殺しッス……」

「噂、本当だったでやんす……」

「何をやってるんだあいつは……いや……」

壁山と栗松が噂には真実があつたと実感している中、鬼道は呆れながらもここに来る前の源田の発言に思い当たった。

『熊殺し』は本当だぞ』

「だからか……」

実際に熊殺しを見ている、というかその一員になっている。

あんなことを言うわけだ。

『パワーシールド！』

『グオオ!』

『食らえ！ エターナルブリザード！』

『ガア……！』

雪原で出会った少年3人と熊。

常識的に考えれば絶体絶命の危機だったが、この世界に於いてサッカーに携わる者は須らく常識に囚われない。

源田は習得したての衝撃波の壁で、突っ込んできた山オヤジを怯ませる。

その隙に、アツヤがシュート体勢に入り万全の状態でボールを蹴り放った。

顔面に猛烈なシュートを食らった山オヤジは絶大なダメージを受けながら、辛うじてまだ倒れなかったが、止めの一撃が加えられる。

『フンツツツ!!』

源田の『パワーシールド』の力を溜めた拳による直接のボディブロー。

まともに食らった山オヤジは、今度こそ意識を刈り取られて雪の中に顔を埋めることとなった。

『……倒しちゃった』

『……ああ。なんか、倒せてしまったな。はしゃいでいたからつい挑んでしまった』

『くっそー、今度は一発で倒してやる！ おら起きろ熊！ もう一回だ!』

『アツヤ、アツヤ。それは無茶だよ』

それからというもの、源田が北海道を去った後、アツヤのシュートを真っ先に受ける役目を負うことになった山オヤジは、基本的にアツヤ達に絶対服従の立場となっている。

中学生になったアツヤのシュートは、本当に一撃で山オヤジを押し
てしまう威力になってるので、山オヤジには災難でしかない。

「――士郎くん。アツヤくん。少しお話いいかしら」

「僕達に？」

そこで、瞳子が口を開いた。

ここにやって来たのは、ただ有名人に会うためではない。

強力な選手をスカウトしてチームの戦力を補充するためだ。

彼女は自らの使命に従い、行動する。

「雷門中サッカー部の監督をしている吉良瞳子よ。私達は、エイリア
学園と戦う仲間を集めにやって来ました。あなた達にも、一緒にエイ
リア学園と戦って欲しいの」

「へー……」

「おいちよつと待てよ、本当にこんな奴らをチームに入れる気なのか
監督！」

単刀直入な勧誘の言葉にアツヤが興味を示したのに対し、染岡が反
発する声を上げた。

それに対して、瞳子の姿勢は揺るぎなかった。

「私達がここに来たのは白恋中のエースストライカー、吹雪アツヤの
スカウトのためよ。エイリア学園に勝つための判断です。チームで
戦う以上は従って貰います」

「くっ……でもよ」

「実力は一応後で見せて貰うけど、間違いなく本物でしょう。彼らは
エイリア学園との戦いで大きな戦力となるわ。私の使命はエイリア
学園を倒すこと。あなたの我が儘でチームの弱点をそのままにして
はおけません」

「そうだな。『こんな奴ら』なんて言ってくれたが、そんな余裕あ
んのか？ アンタら2回もエイリア学園に負けたんだろ？」

「ってめえー」

「コラ、アツヤ」

瞳子の命令に近い言葉に染岡が歯噛みしていたその時、アツヤが薄
ら笑いを浮かべながら事実を言う。

その物言いには雷門イレブンも険しい顔になり、いきり立った染岡は風丸と一之瀬に抑えられていなければ彼の胸ぐらに掴みかかっていただろう。

流石に士郎にも少し真剣な声音で注意されるが、アツヤは考えを改める気がないようだった。

「だってよ兄貴、こんな奴らと一緒に戦うまでもねーだろ。宇宙人なんて俺と兄貴の2人が揃ってれば敵じゃねえよ！ 何があつたか知らねえが源田の野郎も居ねえ、俺達も居なかつた決勝戦で日本一になつたとかいう奴ら、どれだけやれるかわかつたもんじゃねえよ。2人だけの方がマシだね」

「この野郎……！」

「やめろ染岡」

アツヤのあまりに齒に衣着せぬ言葉に、染岡が齒軋りして思わず腕を振り上げたが、その腕は円堂に押さえられて振り下ろされることはなかつた。

「円堂……」

「染岡。監督の言う通りだ。俺達は、仲間を集めるためにここに来た。エイリア学園を止めるために」

「……悪い。頭を冷やしてくる」

諭された染岡がそう言つて部屋を出ていったのを見送つてから、円堂は次にアツヤに向き直つた。

「アツヤ。確かに、エイリア学園に負けちゃつたのは本当だ。でも、俺達だつて負けた時のままじゃない。その証拠は、俺達のサッカーで示す。構いませんよね、監督？」

「ええ。元々、彼の力を計るために試合をするつもりだったもの」

「決まりだな！ お前のシュート、受けてみるのが楽しみだぜ！」

「……フン」

ニカツと笑顔を向ける円堂にそっぽを向いて、アツヤも部屋を出ていってしまった。

士郎が円堂に、申し訳なきさそうに近づいて話しかける。

「ごめんね、アツヤは気が強くて。自信家というか、すぐ突っ掛かつ

ちやうから」

「ごつちこそ、ごめん。染岡の言い方も、ちよつとよくなかったしな。あいつも本当はいいやつんだけど……」

「私、染岡くん呼んでくるわ」

木野がそう言つて出ていったのを皮切りに、雷門・白恋両チームが練習試合のためグラウンドへ動き出した。

そんな衝突もあり、染岡は非常に気が立っていた。

彼がアツヤの加入に抵抗を示す理由は1つ。

(雷門のエースストライカーは、豪炎寺なんだ！)

今は居ない自分達の仲間、豪炎寺修也。

吹雪アツヤという新たなストライカーを認めてしまえば、チームに彼の居場所がなくなってしまう。

共に戦ってきた仲間を想うが故の反発だった。

わかつてはいる。そんなことを言われても、吹雪達には知ったことではない。

自分が彼らに噛みつくのが筋違いだということとは。

だがあれだけ言われて、アツヤというストライカーをすんなりと認める訳にもいかない。

(見せてもらうぜ、吹雪アツヤ！)

「さあ、雷門中对白恋中の練習試合。いよいよキックオフです！」

新たな仲間となるかもしれない少年を見定めるべく、もはや聞き慣れた実況の声を背景にして、染岡はボールを蹴り出した。

北海道でそんな戦いが繰り広げられている頃。

源田が不自然な揺れに目を覚ました時、視界に映ったのは、見覚えのない薄暗い天井だった。

聞きなれない機械音と共に、微かに耳に届くのは、波がぶつかる音。

（海、か……？）

退院を間近にして病院で眠っていた筈の源田は、海の上に居た。

敗北者は王者を忘れない

明らかな異常にベッドから跳ね起きようとして、源田は手から鳴ったじやらりという音と共に引き戻された。

目をやれば、源田の右手には手錠がかけられており、さらにそれがベッドの近くの壁と鎖で繋がれていた。

「くっ、これではサッカーもできないじゃないか……！」

当然だが、鎖は人間の腕力で千切れるような代物ではない。

苦々しい現実に呻きながら、それでも源田は繰り返し腕を引っ張ってなんとか出来ないかと試みるが徒労に終わる。

諦めて、今居る場所は何処なのかを見渡して考えようとする。

源田が見る限り、閉じ込められているこの部屋は、寝かせられているベッドに加えて机と椅子しかない非常に簡素なものだった。

帝国学園のサッカー部で、レギュラーが秋に連れていかれる合宿所の部屋に似ている気がした。

そこまで考えたところで扉の向こうからコツコツという足音が響いてきた。

鎖を引っ張って音を立てていたので、自分が目覚めていることに連れてきた何者かが気づいたのであろう。

「お目覚めかい？ キング・オブ・ゴールキーパーさん」

「……誰だ」

開かれた扉から覗き込んで来たのは、モヒカン頭をした見覚えのない少年。

その眼は非常にギラついていて、明らかにまともな人間ではないとわかった。

本人は源田が自分に対してそんなことを考えていることなど知る由もなく、不気味な笑いを洩らしながらベッドに歩み寄ってきた。

「ハッ、まあ細かいことはどうでもいいだろう？ 俺がここで長話するより手っ取り早く状況を理解する方法がある。ついてきな」

少年はそう言うのと、源田の手錠に懐から取り出したリモコンを向けてボタンを押す。

すると、甲高い機械音と共に鎖と手錠が離れた。

右手首に手錠がついたままとはいえ一先ず手に入った自由を確認しながら、源田はモヒカンの少年に目を向ける。

「俺を自由にしていいのか？」って顔だな。問題ねえよ、どのみち逃げられやしない。それもすぐにわかる。大人しくついてこいよ」
「……いいだろう」

源田の心を見透かし、先んじて疑問に答えた少年に警戒を見せながらも、源田は彼に従って歩いていく。

廊下に窓は一つもなく息が詰まるような重苦しい空気だけが流れている。

ただ、所々に帝国学園を思わせる装飾が散見されることが、源田の嫌な予感と警戒心を最大限に刺激した。

しばらく少年の後ろを歩き続けた末に、一際大きな扉の前に辿り着いた。

足を止めた少年は、意地の悪い笑みを浮かべながら源田を振り返る。

「恩師との再会だ。感動しろよ」

源田の反応を待たず、少年は足を前に踏み入れた。

自動だったらしい扉が横に動いて開き、部屋の中が露になる。

それは、帝国学園にあった総帥室とほぼ同じ内装。

中央の豪華な椅子に腰掛ける人物が何者かなど、わかりきっていた。

「馬鹿な——なぜアンタがここに居る、影山ア！」

「久しいな、源田よ」

「あり得ん……捕まったアンタは刑務所に入った筈だ」

「あり得ぬものか。現に私は今ここにいます。そしてお前をここに連れてきた」

かつての師であり、自分達帝国学園を貶めた仇敵である影山零治。彼は相も変わらぬふてぶてしい態度で源田を出迎えた。

身構える源田を見ても、その不敵な笑ひはますます深くなるばかり。

「さて、まずは改めて自己紹介をしましょう。私は『真・帝国学園』総帥影山零治だ。ようこそ、源田幸次郎。我らが真・帝国学園へ」

「『真・帝国学園』……だと……!?!」

その異様な名に、源田は驚愕を隠せない。

同時に、ここまで彼を連れてきた少年が影山の隣に歩いていった。

「そしてお前を連れてきたその男が、真・帝国学園のキャプテンである

ふどう あきお
不動 明王だ」

「ご紹介に預かりました、不動明王です。よろしくな、源田くん。ア
ンタのことはよく聞いているぜ。無敗神話も、それが最近破れたこと
もなあ」

「そうか。こいつがキャプテンということは、サッカーチームがある
んだな?」

人を食ったような態度の不動の発言を聞き流し、源田は影山に質問
する。

「愚問だな。私が率いるものがサッカーチーム以外にあるとでも?」

「ないな」

「ククク……結構。お前の入学記念に、面白いものを見せてやろうか。

真・帝国学園の力の、ほんの一端を」

「なんだと? ——うおっ!?!」

影山は、今度は源田の疑問に答えず立ち上がった。

直後に少し大きめの揺れが源田達を襲う。

足下を見ながらバランスを保つ源田を眺めながら、影山は慣れた足
取りで窓に向かう。

そして窓辺に立って、源田にも外を見るよう顎で促した。

この男に従うのは嫌だが、この場所のことを知らない限りは何も始
まらない。

影山の隣に立ち、外の景色を見てみれば思わず声が出た。

真・帝国学園などという名を聞かされた先程の比ではない。

「なんだ、これは!?!」

眼下には、今まさに天井が開き、内のサッカーグラウンドが現れよ
うとしている所だった。

加えてその周囲に広がるのは見渡す限りの大海原。

源田達が居たのは艦橋。真・帝国学園とは、巨大な潜水艦だったのである。

「海を渡りながらサッカーが出来る船だと……！」

「ククク……これが真・帝国学園だ。気に入ったかね？」

「……………」

「では、これから共に戦うチームメイトに顔を合わせてくるといい。お前達には、ゆくゆく雷門を倒してもらおうことになる」

「ちよつと待て。なぜ俺がアンタの下で戦うと思ってるんだ。この船のことはともかく、アンタに従ってサッカーをするつもりはないぞ」

源田が、彼を既に従えたように語る影山に口を挟んだ。

勝利のために卑劣な手段を躊躇わず、仲間達をも毒牙にかけた男に進んで従う筈もない。

影山はそれに特に気を悪くした様子もなく、ただ笑い声を上げる。

「ククク……それもいいだろう。すぐにそんなことは言っていられないくなる。真・帝国学園のメンバーには会っておくといい。これから苦楽を共にする仲間だからな。どのみち、お前はここから逃げられん」

そう言い残し、影山はせせら笑いながら源田の前を後にした。

「さ、行こうじゃねえか。案内してやるよ。艦内を無用心に彷徨かれて変なことされたら、お前どころか俺達までお陀仏なんてことになりかねないからな」

「……………ああ」

不動に再びついて歩き、真・帝国学園内の大まかな構造や危険な場所等の説明を受けることになった。

今すぐにも脱出したいが、ここは影山の本拠地である上、抜け出してもそのまま海へ飛び込むしかない。

逃げ場がないこの状況では従っておく他に打てる手はなかった。

やがて食堂やトレーニングルームなどの主要な施設の案内が終わると、先程見せられたサッカーグラウンドへやって来た。

「今は練習してるところだぜ。挨拶といこうじゃねえか」

そう言つて、不動は薄笑いを浮かべながら扉を押し開けた。

開かれた扉から潮風が吹き込み、不動と源田の髪を揺らす。

波が潜水艦に打ち付けられる音に混じって聞こえてくる、サッカーボールを蹴る音のする方を向けばそこには不動と同じユニフォームに身を包んだ集団が見えた。

「あれが、真・帝国学園サッカー部だ。つて言っても、真帝国ここにはサッカー部員しか居ないがな」

真・帝国学園は、影山が雷門と戦うために創設した組織。

サッカーをする者しか集まらないのは当然ではある。

「おいお前ら、練習止める！ 新入りを紹介してやる！」

練習している真・帝国のサッカー部に、近づいていった不動がその声をかけた。

その声に反応し、皆一様に不動に振り向く。

不動はそれを確認してから、後ろに居る話題源田のことを話そうとしたが、彼が話し出すのを待たずに動き出した者がいた。

練習中に丁度ボールを持っていた少年だった。

1つに纏めた緑色の髪を振り乱しながら不動達に、否、源田目掛けて走り寄ってくる。

「——ヒャア！」

そして、その少年は奇つ怪な掛け声と共に、ボールを源田目掛けて思い切り蹴り飛ばした。

ボールの凄まじい回転は吹き寄せる潮風をも切り裂き、恐るべき速度で源田の眼前に迫る。

「っ！ くっ……！」

源田は咄嗟に両手をボールに合わせて押さえ込んだが、その威力はノーマルシュートだったにも関わらず、下手な必殺技を凌駕するものだった。

ボールは源田の両手に収まりながらしばらく回転して、ようやく動きを止めた。

「ん〜——久しぶりだネエ源田クウ〜ン！ 腕は落ちてないみたいじゃない？」

源田が受け止めた様子を見届け、少年は赤いペイントを施した口を

歪める。

加えて顔全体も真っ白に塗っている、ピエロを思わせる容貌の少年が笑いながらステップを踏んで源田に近づいてきた。

少なくとも源田からは、初対面の筈だが妙に馴れ馴れしい。

「誰だお前は。どこかで会ったか？」

いきなり顔目掛けてボールを蹴られた源田の彼への印象は既に最悪だ。

そのため、特に気遣うことなく率直に尋ねた。

対するピエロ顔の少年はその言葉に、ピタリと動きが止まった。

しかし、火が着いたようにすぐに動き出した。

ジリジリと怪しい動きで、何故動きが止まったのか理解していない源田に詰め寄っていく。

「ハア？ 覚えてない？ 俺を？ KOG様は、いちいち戦った相手を覚えやしないってか？ アア!!」

飄々とした振るまいが一瞬で消え去り、捲し立てて怒鳴りつけてくるピエロ顔の少年の異様な迫力に、源田は若干引いてしまうが、とはいえ知らないものは知らない。

「そんなことを言われてもな。お前のようなピエロ癖メイク強した奴、会っていればまず忘れんと思うんだが……」

「この野郎……!」

「やめとけよ比得、源王様はお前なんぞ覚えてないってさ。……クク」
本気で心当たりのない様子の源田に、プルプルと震えた拳を振り上げかけた所で半笑いの不動から待ったがかかった。

不動の呼んだ彼の名に、源田が目を見開く。

「比得？ お前、比得ひえ 呂介りようすけか!」

「やっと思いい出したかよ」

「思いい出したも何も、全然違うだろう……」

「こいつらは俺が集めてきた。全国各地で戦ってたっていう源田くんには、見覚えのある面子も居るんじゃないの？」

ピエロメイクの少年の正体に驚愕する源田に、不動は芝居がかった動きで腕を振って残りのメンバーを示す。

それに従って真・帝国学園の面々を見渡してみれば、確かに何人は源田にも覚えのある者達がいた。

「またアンタなんか会うことになるなんてね。不動、私達にこいつと一緒に戦えって、いくらアンタがキャプテンって言っても限度があるわよ」

言葉と表情に、隠すこともなく源田への嫌悪感を込めて鋭い眼光を不動に差し向けた、左目を眼帯のようにした髪で隠している少女は小鳥遊 忍たかなししのぶ。

「へっ、源王げんおうがなんだよ。あいつも負けたんじやねえか」
そう吐き捨てるように言ったバンダナの少年は弥谷 剣五いやたにけんご。

「……………」

無言でこちらを見つめている厳つい巨漢は郷院 猛ごういん たけし。

他に、真正正銘の初対面の者も中には居たが、殆どが源田と戦ったことのある者達だった。

吹雪達と戦った後も、源田は影山の後押しもあり各地のチームと戦ったことで彼らに出会っているが、この場に居るいずれの者との試合も、思い返す源田としてはあまり気持ちのよくない記憶だ。

なにせ——

比得 呂介：FWとしての個人技は目を見張るものがあつたが、非常にスタンドプレーを好みパスをしないどころかチームメイトからボールを奪う程の自分本位なプレーを行っていた。

小鳥遊 忍：MFとして非常に高い実力があつたが高飛車な性格で、自分とチームメイトの関係を主人と奴隷と言って憚らない独裁体制でチームを支配した。

弥谷 剣五：DFとして相手チームのエースへ執拗なマークを行い、時に悪質なラフプレーも厭わなかった。

——このように、実力こそ高かったが性格やチームワークに難のある問題児ばかりだったのだ。

「お前の——」

比得はかつてチームのエースストライカーとして負け知らずだった。

当時のチームメイトの中には始め、比得の振る舞いに対する非難の声を上げる者も居たが、一人で試合に勝てる彼の實力に黙らせられ、次第に広がった「勝てるならそれでいい」というある種の諦観と共にチームは日々を過ごしていた。

そこへ、彼の實力の噂を聞きつけた源田がやって来たのだ。

吹雪兄弟との激闘を終えていた彼の次なる相手が、比得だったのである。

今まで止められる者が居なかった彼のシュートは源田の「パワーシールド」に完封され、比得一人の個人プレーに任せ切っていたチームではリトルプライドのオフセンスにろくな抵抗もできず、彼らは完全敗北を喫した。

更に、初めての、あまりに呆気なく、圧倒的な敗北を受け入れきれていなかった比得に続けて畳み掛けるように、チーム内での比得への反発が再燃した。

敗北は比得のせいだと、彼らは激しく責め立てたのだ。

「——お前のせいだ——」

ある意味、当然のことではある。

試合の敗北は誰か一人の責任などでは決してない。

しかし今まで自身の独善的な振る舞いへの反感を實力で押さえつけていたのだから、その實力が通じないとなればもう反感が収まることはない。

そうしてチームを追放されて途方に暮れた比得の胸にあつたのは敗北の屈辱と、新たに灯った心の炎。

比得は敗者になった。そして敗者に価値はない。

自分から勝利を奪っていったのは誰か——

「——お前のせいだ、俺のサッカー人生にケチがついたんだよ！ 源田ア!!」

心に灯った憎悪の炎に従い、比得は力の限り叫んだ。

他の者達にも、概ね比得と同じ経緯で大なり小なり源田への憎悪がある。

それらに呼応するかのように、彼らの胸元からは紫色の妖しい光が

溢れ出す。

「——だからさ、勝負しようじゃないノ。ネエ？」

胸を焼き続ける炎を消すには、勝利を得るしかない。

「……いいだろう。サツカーで挑まれて、拒む理由もない」

影山は、一触即発なグラウンドの様子を見下ろしてほくそ笑んでいた。

源王は再会を喜べない

勝負の形式は単純だった。

比得がペナルティアークからシュートを放ち、源田がそれを迎え撃つというもの。

「あんまりやり過ぎんなよ、そいつは試合で『使う』んだからな」
不動が、ペナルティアークのすぐ外に立つ比得にそう念を押す。

その比得は聞いているのかいないのか、相当柔軟らしい体を伸ばしたり曲げたりと独特な体操をしている。

彼と対峙する源田は、先程比得や他の真・帝国のメンバー達の胸元から溢れた光について考えていた。

人体が発光するとしたら普通ではないし、そうでなくとも、それはそれで光るものをわざわざチームが揃って身につけていることになる。

仲のいいチームがそうするならばまだしも、真^この^の帝国^チ学園^ムにそのような雰囲気は皆無だ。

つまり、彼らが身につけている何かには明確な理由があるということ。

そこまで考えた所で比得が体操を終えたので、源田も思考を切り替えた。

(比得のシュートは確か、寺門と少し似ていたな……)

比得呂介というストライカーについて特筆すべきは、手足の柔軟さだ。

その柔らかさを生かして、彼は多少無理な体勢からでも殆ど威力を落とさずにシュートを打てるため、いくつものフェイントをかけてきたり激しく動き回ったりしてGKの隙を狙ってくるトリッキーなストライカーである。

もし吹雪兄弟と対戦の順番が逆であったなら、問答無用で広範囲をカバーできる必殺技『パワーシールド』がなければ。

源田が苦戦することもあり得ただろう。

だがその反面、比得のシュートは厄介だが威力そのものはそこまで

高くない。

無論それは小学生時代の話で、特訓を積んでいるであろう比得のシユートを侮るのは危険だが、恐らく根本的なプレースタイルは変わっていない。

その上、源田自身の世子子中との戦い以降の入院生活による肉体の衰えも考慮しなければならない。

彼は入院していた頃の、自身の担当医の言葉を思い浮かべる。

『退院しても、激しい運動はしばらく控えてくださいよ。確かに適度に動かした方が回復にはいいですが……ちよつとトレーニングメニューを教えてください——こんなダメに決まっているでしょう！ 病み上がりでこんな練習したらまた病院（こい）に逆戻りですよ！』

『しかし、早く鍛え直さなくては——』

『シャラップ！ ドクターストップですよ！ 医者（い）の命令は絶対ですよ！……あんな試合の後で怪我がそれだけで済んでいるのは本当に幸運なんです。絶対に体に負担をかけないように。完治まで、必殺技なんてものも禁止ですからね！』

医師には耳にタコができる程 “体に負担をかけるな” と言われている。

確かに彼の見立て通り、病み上がりの体で “キングシールド” や “ビーストフアング” を使うのは無理だとわかる。

もし使えば、今度こそ本当に腕が壊れてしまうだろう。

（“フルパワーシールド” 以上の技を使うにはまだ不安がある。使えるのは “トリプルパワーシールド” までだな）

しかし負担が大きく高威力な技から負担のない低威力な技まで、必殺技のレパートリーが多いのも今の彼の強み。

こうした制限もあるが、決して不利なだけではない。

比得のスタイルも、この勝負の形式とは合っているとは言えないのだ。

彼は比得のスタイルはどちらかと言えばテクニック重視で、真正面からの力のぶつけ合いは苦手な筈。

わざわざそれで力比べを挑んでくる辺り、彼の執念の深さが窺え

る。

そして源田は、1ヶ月ぶりにその腕に気を込めた。

「さあ、いつでも来い」

「余裕じゃないの。すぐに思い知らせてやるよ」

向かい合う2人の対決を、他の真・帝国学園のメンバーが観戦していた。

といっても、観戦しているほぼ全員が源田に負ける負けろとブーイングを浴びせているが。

マナーもスポーツマンシップもあつたものではない。

閑話休題。

いよいよ比得が、シュート体勢に入った。

ボールを上蹴り上げ、自身も跳び上がった後を追う。

「食らいやがれつてんだよオー……！ 百烈ショット——」

叫びながら比得は、猛烈な連続蹴りをボールに高速で浴びせる。

その動きは、源田にも見慣れた帝国伝統の必殺シュートだ。

しかしボールに打ち込まれている蹴りの一発一発は、今まで受けてきた「百烈ショット」とは比べ物にならない力が込められていた。

やがて、名の通り百回ボールを蹴り終えて、凡百の選手が使うそれとは格が違うシュートを、比得は胸元を光らせながら打ち放つ。

「——V2!!」

浴びせられたキックの力が蓄積されたボールは風を切ってゴールと、その前に立つ源田目掛けて飛んでいく。

源田も、それをただ立って見てはいない。

両の拳に気を込めて跳び上がり、ボールが迫るタイミングに合わせてをそれらを地面に叩きつける。

「トリプルパワーシールドー」

展開された3枚の衝撃波の壁が、シュートの進路上に立ち塞がる。そして次の瞬間には激突して、激しい突風を周囲に撒き散らした。

「ぬう………」

力を注ぎ続けるように、両拳を地面に突き立てた逆立ちの姿勢のままの源田が唸る。

ボールの回転は止まらず、勢いが衰える気配はなかった。ついに、1枚目の壁がシュートの力に耐えきれず砕かれる。

「おお……」

次に2枚目の壁に罅が走り、それが全体に回った瞬間に砕け散った。

「——ぐああー！」

最後の壁もガラスのように粉碎され、ボールは源田を巻き込みながらゴールに飛び込んだ。

「……ハハ、ハハハハハハハハアア！ 勝った！ 俺の、勝ちだア！」

目の前でこれ以上ない程明確に示された勝負の結果に、比得は狂ったように身を振らせながら笑い声を上げる。

笑い声は長く、そして大きく、海に響き渡っていった。

数年越しのリベンジに成功したその興奮はしばらく冷めることはないだろう。

「がはっ……ぐ……」

ボールが背中から突き刺さって吹き飛ばされた源田が空気を肺の中から絞り出し、絡まった体で身動きみじろして、ゴールネットから抜け出そうとする。

だが、源田のキーパー技を挟んで尚、先程のシュートは鈍った体で受けるには強力過ぎた。

「くっ……お……」

入院生活で鈍っていた体で凄まじい一撃をもらに食らってしまった源田は、痛みと痺れで動かない体に歯噛みしていた。

（比得のシュートは、確かに強くなっていた。それでも、「パワーシールド」ならばともかく、「トリプルパワーシールド」が破られるとは……ここまで鈍っていたか……！）

「やっぱりこの力は最高だ！」

「……？」

「あーあー、だから加減しろって言ったんだ。源田くんは病み上がりだぜ？ ったく、おらよつと」

最早源田から興味が消えて、何かに酔いしれる比得。

彼が何を言っているのかも聞き取れず、芝生を握り締めるも起き上がれず、意識も霞んでいった源田を、やれやれと言った様子で不動が手を出して立ち上がらせた。

そのまま肩で背負うように運ぼうとするが、そこで予想外な源田の重さに倒れかける。

「ちっ、結構重いなこいつ……」

不動は忌々しげに呟き、誰かに手を貸せと命じようとしたが、他のメンバーは比得の周りに集まり、大層仲がよさそうに話していた。

おおよその内容を要約すれば「源田さまあ見ろ！」である。

血も涙もないが、この真・帝国学園には勝利を至上とする影山の価値観が浸透しており、加えて源田は彼らから半ば逆恨みとはいえ恨まれている。

積年の恨みが発散されて、普段は練習中に喧嘩し出すような者同士も騒ぎあっていた。

「あいつら、いつもああならもつと楽なんだがなあ……おい郷院。手伝え」

「……おう」

集めてきたはいいものの、普段の練習から何かと反抗してくる厄介なチームメイト達に不動はそうぼやいて、集団から少し離れて突っ立っていた巨漢に気付き、これ幸いと源田を運ぶ役を押し付けた。

郷院は仏頂面で返事をして源田を肩に担ぎ、医務室を目指す不動の後を追って歩いていった。

源田が目を覚ましたのは、またベッドの上でだった。

近くには

違いを挙げるならば、今回は初めから鎖に繋がれたりしていないことか。

背中に湿布が貼られているらしいのが感覚でわかった。

「目え、覚めたかよ」

「……郷院」

丁度扉を開けてきて、ぶつきらぼうな声をかけてきたのは真・帝国学園の巨漢DFである郷院猛だった。

彼は源田と小学生時代に戦って負けた経歴を持つ比得達とは、少し事情が違う。

郷院はかつてリトルプライドに所属していた。

源田の、元チームメイトだったのだ。

郷院は源田がリトルプライドに加入したばかりの頃から居たメンバーだった。源田が彼と6年間共にプレーすることはなかった。

学校で同級生に大怪我を負わせてしまい、転校していったからだ。遠い場所に引越したので、自動的にリトルプライドからも脱退した。

源田からはおよそ6年ぶりの再会となる。

「お前……ここに居るといふことは、まだあんなプレーをしているのか？」

源田がベッドから身を起こして、郷院に厳しい視線を向ける。

彼は幼い頃から体格に恵まれていて、非常にパワフルなDFだった。

しかし、チーム内では恐れられ、遠巻きにされていた。端的に言えば、郷院は加減というものを知らなかった。

郷院は試合中に熱くなりやすく、ラフプレー染みた荒っぽい動きで強引にボールを奪うことが多かった。

小学生のレベルなら体がぶつかり合うことぐらいは比較的珍しくないアクシデントだが、彼の類い希な体格でそんなことが起こっては、大抵の相手は耐えられずに怪我をする。

そうして、練習・試合問わず彼がボールに触れば誰かが怪我をするという事案が多発し、監督が彼に加減をするよう指導することもあったが――

『手加減ってなんだあ？』

——といった具合で、いい効果が出ることはなかった。
なにも彼自身、相手を傷つけようとしてプレーしている訳ではない。

郷院からすれば自分がただ全力でボールを奪いに行くと、気付いたら相手が怪我をしていたというだけのことなのだ。

加減をしろと言われても、全力でやらねばボールは取れない。

そうしていいよいよ練習でチームメイトに避けられ始めた頃、源田がチームにやって来た。

『源田幸次郎だ、これからよろしく頼む！』

『誰かにシュートを打って欲しいんだが、あらた改達は杉森先輩の特訓に付き合っけて打ってくれる人が居ないんだ。すまないが、打ってみてくれないか？ 今度、お前の練習にも付き合うから』

『ははっ、強いな郷院は。 同い年とは思えん。 ん？ 大丈夫だこれくらい。 俺はもつと強くならなければならぬからな、こんな鼻血ぐらいじゃ泣いていられん。 ……ただ、ちり紙持つてるか？ 使い切ってしまった』

当時まだサッカーを始めたばかりで、控えキーパーとして扱われていた源田は郷院にシュートを頼み、その代わりと行って一対一の練習を申し入れた。

ボールを持った源田を郷院はあつという間に吹き飛ばしてしまうが、他の子供が泣き出したそれを、源田は鼻から血を流しながら褒めてきた。

そして、郷院との練習をやめることもなかった。

彼との日々が続いて、ようやく郷院も加減というものを意識し始めるようになった。

とは言っても、郷院はとにかく加減が下手で、小動物の相手をするかのようなおっかなびつくりなプレーのザルディフェンスになってしまい、劇的な改善とはいかなかったのだが。

『郷院。 手加減、難しいか？ でも、サッカーは誰かが泣いてるより、皆笑ってた方が楽しいぞ！ 今度、お前の学校でサッカーの授業があるんだらう？ 怪我させないで、気をつけてやるようにな。 約束だ』

数日後、郷院の通う小学校の体育の授業でサッカーが行われたのだが、そこで彼は同級生に大怪我を負わせて、チームから去ったのである。

それが、源田の郷院に関する記憶だ。

「郷院、なぜあの人に従う。サッカーは——」

「俺は、勝ちてえ。勝つことが許されるチームで、戦いてえ」

「待て——」

問い詰める源田に対して郷院はそれだけ早口で言っつて、どこか逃げようとするように、医務室を後にした。

室内が静寂で包まれる。

確かに、友人だった筈だったのに。

「なぜだ……郷院」

既に答えを返すべき者が居なくても、言葉が口から出てしまった。彼の学校での顛末を聞いても、源田は彼がサッカーを続けてまた出会えることを願っていた。

だが、このような場所での再会など望んではいなかった。

勝利のためならばあらゆる手段を是とする影山だ、強引なプレーくらい何の問題にもしないだろう。

しかし、誰かを怪我させないように頑張っていた彼が何故再びその道を踏み外してしまったのか。

「——弱いからだ」

「っ、影山……！」

打ち拉ひがれる源田にいつの間にか医務室に居た元凶が、その口を悪辣な笑みで歪めながら立っていた。

源王は選択を選べない

北海道では、寒空の下行われていた白恋中と雷門中の練習試合が1-1のまま前半を終えた所で、瞳子によって終了が宣言された。

「吹雪兄弟……噂以上ね。これ程とは思わなかったわ」

「くそっ……1点しか、取れねえなんて」

「すげーシュートだった……」

「アツヤもそうだが、彼もかなり上手かったね。1点目以降は染岡に一度もシュートを打たせなかった」

円堂と一之瀬が、冷や汗をかきながら白恋中の2人のプレーを評価した。

吹雪兄弟の力は雷門中の誰の予想も超えるものだったのである。

開始早々に攻め込んだ染岡が“ワイバークラッシュ”を決めたが、お返しとばかりにアツヤは雷門イレブンを必殺技も使わずにごぼう抜きして、一人でシュートまで持っていったのだ。

『吹き荒れる……！ エターナルブリザード！』

『くっ、速い——ゴッドハンド！』

グラウンドを凄まじい冷気が覆い、放たれたシュートを円堂が迎え撃ったが、光輝く神の手は程なくして凍りつき、砕け散った。

そうして一瞬で同点にされた雷門イレブンが再び点を奪うべく攻めるが、今度は士郎がその力を見せつけた。

『ちいっ、すぐに取り返して——』

『行かせないよ——アイスグラウンド！』

士郎は駆け出した染岡を一瞬で氷漬けにして、ボールを容易く奪い去る。

そして、再びボールを受け取ったアツヤが2発目の“エターナルブリザード”を放つが、流石にたった1人にされるがままになることなど、雷門イレブンのサッカープレイヤーとしてのプライドが許さない。

『やらせないッス！ ザ・ウォール！』

『ザ・タワー！』

壁山と塔子の2人がかりのシュートブロックで、荒れ狂う吹雪を押し留める。

それでも届かずにボールはゴールへ向かうが、その頃には雷門の守護神も迎撃態勢を整えていた。

『マジン・ザ・ハンドー！』

『へえ……』

そして円堂は今度こそアツヤのシュートをその手で受け止めてみせた。

以降はお互い一步も退かず、得点が動くことなく前半の時間が過ぎ去ることとなる。

こうして試合は同点で終わったのだが、雷門イレブンの顔色は優れない。

「あの2人……俺より速かった」

大きく呼吸をして空気を取り込みながら、風丸は俯いて呟いた。

元陸上部で、足の速さを売りにしていた彼は純粹な走力で負けた事実には衝撃を隠せない。

吹雪兄弟の動きは、まさに彼らが風になっていたかのようなのだ。だ。

「くそっ……」

染岡も、彼らの実力を直に感じていた。

認めるしかない。吹雪アツヤのストライカーとしての力を。

そのアツヤに、シュートを受け止めた、試合の興奮がまだ冷めていない円堂が駆け寄っていく。

「アツヤ、お前のシュート凄かったぜ！ 士郎のディフェンスもなー」

「うん、ありがとう」

「……ま、お前らも日本一は伊達じゃねえんだな。3人がかりとはいえ、エターナルブリザードを止める奴は久しぶりだぜ」

「これで、雷門中の力はわかってもらえたかしら？ 彼らはエイリア学園に勝つために、日々進化しているということを」

円堂の称賛に士郎が笑顔で礼を言い、アツヤも言葉を控えめにしながら、円堂のことを認めた。

そこに瞳子が歩み寄り、アツヤに試合前の発言を指して尋ねる。

「……ああ、お前らも中々強いってことはわかったよ」

「アツヤ」

「わかったよ！ わかったからその顔やめろ兄貴！ ……悪かったな、いらねえなんて言つてよ」

「いいよ、もう過ぎたことだ。それより俺、お前らと一緒に戦うのが楽しみになってきたぜ！」

「吹雪アツヤくん。そして吹雪士郎くん。あなた達に、正式にイナズマキヤラバンへの参加を要請するわ」

「ああ、乗ってやろうじゃねえか。宇宙人なんて蹴散らしてやる！」

「アツヤは一人にしておくのと危なっかしいので……皆、よろしくね」

「よろしくな、吹雪達！」

「くっ……」

「あつ、染岡！」

確かな実力を示した吹雪兄弟の加入を認める雷門イレブンだったが、染岡は悔しそうにしてその輪から飛び出してしまう。

それを追いかけて、豪炎寺を想い吹雪兄弟の加入を認められない彼に説得を終えた円堂。

彼は夕陽に染まり始めた空を見上げて思う。

（源田の奴も、もう怪我を治してサッカーやってるのかな。早くエイリア学園を倒して、皆でサッカーできるようにしなくちゃな！）

また彼と戦うためにも、この事態を早く終わらせようと改めて決意する円堂だった。

そう円堂に思われていた源田は、真・帝国学園の医務室で彼を連れてきた影山と対峙していた。

今にも飛びかかりそうな迫力で敵意を剥き出しにする源田に対し、影山は涼しい顔だ。

「……何をしに来た。アンタのことだ、比得達に俺が敗れるのを見越していたんだろうが、わざわざ笑いに来るほど暇じゃないだろう？」

さっさとここから出ていってくれ。アンタにここに居られたら治るものも治らん。随分鈍っていたからな、俺は早く鍛え直さなければならぬんだ」

「ククク……お前が怪我をする前に戻っただけでは、すぐにまた負けを味わうことになるぞ」

「どういうことだ？」

「お前も報道で名前は知っているだろう。遠き星よりこの地球にやって来た『星の使徒』……ククク。この真・帝国学園は、エイリア皇帝陛下より授かった力により打ち立てられたものだ」

「エイリア学園……！」

影山の出したその名前は、先のフットボールフロンティア決勝戦があった日から世間を騒がしている宇宙人達の名乗る組織のもの。

人間に桁外れの力を与える薬品『真・神のアクア』を開発して警察に捕まった影山が真・帝国学園を組織しているのも、彼らの支援によるものだという。

「そうだ。エイリアの力に、雷門も太刀打ちできず無様な敗北を喫したのはお前も知っているだろう。お前がいくら鍛練しようとも、彼らに惨敗するだけだ」

「……エイリア学園が強いというのは知っているが、そんなことを話してどうする。俺にこのまま負けたままでもいいぞ」

「ククク……いいや。教え子が無様に敗北するのを多少哀れむくらいの慈悲は私にもあるのでね。そんなお前に素晴らしい提案をしに来たのだよ」

つい先日、世宇子中を使つて源田を含んだ帝国学園という教え子達を鬼道以外全員病院送りにした男が随分白々しいことを言うものだ。

そんな感情の込められた源田の視線に気づきながらも無視して、影山は言葉を続ける。

「まずはエイリア学園の力の源——エイリア石について教えてやろう」

口を不気味な笑みで歪めて、影山はエイリア石という存在の正体を語りだした。

5年前に地球に落下したとある隕石から見つかった、人間の潜在能力を引き出すエネルギーを含んだ特殊な鉱物。

それを身につければ、人間は絶大な力を得ることができるといふこと。

真・帝国学園にも、エイリア石が与えられていること。

影山は紫色の石のペンダントを手に提げながら、誇らしげにそれらの情報を語った。

もちろん、そんなことを聞いて黙っていられる源田ではない。

「ちよつと待て！ 人の力を引き出すだと？ それが真・帝国学園にも与えられているということは……」

「無論。不動を始めとして、奴らは皆エイリア石による力を得ている。でなければ、病み上がりであることを差し引いても奴らがお前を下すことなどできまいよ」

「また、ドーピングという訳か。どこまでサッカーを馬鹿にしている……！」

世宇子中の「真・神のアクア」に続くチームのドーピングという、スポーツマンシップに泥を塗りたくるような所業に源田が憤りを示すが、影山は悪びれる様子もない。

「サッカーに綺麗も、汚いもありはしない。ただ勝つか、負けるかだ。勝利のためにできることを全てやるのは、誰もが、それこそお前とてやっていることだ。私はそれを私が持てる全てを以て行っているに過ぎん」

「俺達にできることはひたすら自分を高めることだけだ、相手を貶めることではないだろう！」

「フン。そのお前の言葉も、敗者のものである以上は無価値なのだ。」

——さて。余計な話を挟んだが、ここからが本題だ」

しばらくの間繰り返し返された問答をその言葉で締めた影山の雰囲気、変わった。

先程までの源田の非難への受け答えには嘲った笑いが混じっていたのに対して、今の影山の表情は圧迫感を感じさせる重苦しい仏頂面となった。

これからの自分の言葉に拒否は許さないという警告にも感じられた。

「源田よ、今一度私に従え。真・帝国学園の一員となって雷門中を叩き潰すのだ。私に従えば、エイリア石によって更なる力を与えてやろう」

「断る！」

満を持して行われた影山の言葉に源田は即答で拒否を突き付けた。それでも、影山の纏う雰囲気は変わらないままだ。

源田の答えを見越していたように。

「ククク……お前がそう言うのはわかっていた。だがわかっていたならば当然、それに対する準備もしているものだ」

そう言つて、影山は懐から小さな端末を取り出した。

画面に映る光景に源田は言葉を失った。

枠で9つに分けられている画面に映されていたのは、帝国イレブンの姿だった。

どこかの街中を駆け回る成神・洞面・辺見。

集まって話し合っている佐久間・寺門。

人に聞き込みを行っているらしい大野・万丈・五条・咲山。

その誰一人として、今彼らが撮影されていることに気づいている様子はない。

影山がどういう意図でこれを見せてきたのか、それに思い至った源田の頬を冷や汗が伝う。

「察しがいいな。もともと、帝国学園に在籍していた者がこの程度のことでも理解できなければそれはそれで問題だが」

「貴様……！」

「わざわざ、続きも言葉にせねばならんかね？」

これは勧誘や交渉ではない。影山の決定事項なのだ。

黙り込んだ源田に、彼は言葉を続ける。

「お前がエイリア石の力を拒むのはわかっていた。手に入る力を手に取らんなど心底理解できんが、下手な人間にエイリア石を与えるよりマシな強さを持つお前に免じて、それも目を瞑ってやろう。私の下で

戦い、雷門を叩き潰すのならばな」

「……………」

「沈黙は誰のためにもならんぞ。強くなる道も帝国の者共も捨てるか、私の下で更なる力を身につけるか。はつきりと言え。その自分の口でな」

「……………つ、ああ。わかった。雷門中と、戦う」

「——そうだ。それでいい」

俯いた源田の答えに、影山は満足げに笑った。

「さて。そうと決まれば、まずはお前の傷んだ体を手っ取り早く治すとしてよう。その体で鍛練をしても実になるまい」

「……………どう治すというんだ。病院では、安静にと言われたんだがな」

「エイリア石のエンジーには、単なる人間の能力の強化だけでなく、代謝の促進や肉体を活性化する効果がある。……………そう嫌そうな顔をするな。試合の頃にはもうエンジーなど消えている。半端な状態で出して中途半端な試合をされてはお前を連れてきた甲斐がないのだ。治療は受けてもらうぞ」

「……………本当に治療なんだろうな」

どのみち、今影山に逆らう術はないが源田はそう念を押す。

それに、影山は可笑しそうに笑い声を上げた。

「そう疑うな。治療を行えば、明日にでも修練場を使わせてやる。真・帝国学園の者共も使ったものだ」

「そうか。……………もう出ていけ。アンタと仲良くする気はないんだ。真・帝国学園もエイリア学園も知ったものか。俺はただサッカーをして、勝つ。それだけだ」

「結構。直ちに治療を行い、修練場も開放してやろう」

影山はその言葉を最後にして源田の睨みを背で受け流しながら医務室を後にした。

真・帝国学園の廊下を、彼はくつくつと笑い声を漏らしながら歩く。

「ククク……………確かに帝国の者共に手を出しはしない。ただ、奴らの方から力を求めて来た場合はその限りではないぞ」

勝利のためならば、手段を選ばない。

その影山の意思にいつ何時なんどきも変わりはない。

彼は当然、憎き円堂の孫と鬼道を擁する雷門中を相手に揃えるべき戦力は全て揃えるだろう。

廊下の照明を受けて、その影はゆらゆらと妖しく揺らめいていた。

源王の心は偽れない

真・帝国学園での屈辱の初日が過ぎ、影山の言うエイリア石治療を受けた源田は、世宇子戦以来の万全の肉体を、これまでの時間を取り戻すように動かしていた。

（下手な医療より進んでいる……この力、ドーピングなどではなくもつと医療方面ちからに向けられなかったのか？）

安静を言い渡され、負荷をかけるなど厳命されていた右腕が、以前通り動かすのに何の支障もない。

恐らく、骨折でもあつという間に完治してしまうだろう。

それはさておき
閑話休題。

万全の肉体となつた源田は、早速専用の修練場というのを訪れていた。

修練場へ行くために使われたワープ——エイリア学園の技術だという——に驚愕したもののだが、そんなものの印象は目の前の修練場の光景にたちまち塗りつぶされた。

広がるのは薄暗い空間。

各所に見えたのは帝国学園でも見たことのなかったトレーニング用具たち。

これらがどれだけの力を与えてくれるのか、考える間もなく源田はトレーニングを開始していた。

「ぬおっ！」

1日目。

足場を蹴って横っ飛びした源田の伸ばした手も届かず、ボールが後方のネットに突き刺さる。

彼が影山の配下に紹介され、そして真つ先に挑戦したのはいくつあつた特訓コースの内の1つ、キーパーコースだ。

巨大なゴールを背に、グラグラと不規則に揺れる足場で飛んでくるボールを止めるといふ内容のトレーニングだが、これが非常に難しい。

威力が強いシュートを受け止める練習ならば飽きる程やってきた

源田だったが、自分の立つ地面の方が障害となるのは初めての経験だ。

ボールがネットのある後方を除いた四方八方、さらに高低差もフルに使ってあらゆる場所から飛んでくるとなれば、キーパーも俊敏に動き回って対応する必要があるのだが、不安定な足場ではそれも覚束ない。

「くっ、うおお!？」

今度はぐらりと大きく傾いた足場で踏ん張れず、源田はバランスを崩して足場からゴロゴロと転がり落ちてしまう。

ここまでは揺れる足場でも難なくボールを抑えることができているが、10段階あるレベルの内の折り返しであるレベル5を超えたところで特訓の難易度は一気に跳ね上がった。

レベル6からは揺れの激しくなった足場で動くことすらままならず、源田はボールに触れることなど考える暇も与えられなかったのである。

(だが……少しずつ慣れていく。この調子なら、明日にはこの足場でもボールを捉えられる筈だ)

初挑戦の結果は芳しいものではなかったが、成果を感じて特訓を終えた源田は他のコースにも挑もうとキーパーコースの部屋を後にする。

「おおおーッ!」

次に挑戦したのはスピードコース。

巨大なランニングマシンを、備え付けられた砲身から放たれる障害物をかわしながら走り続けるというもの。

しかもこのランニングマシン、それだけでなく踏み台が坂になったり、デコボコと波打ったりと徹底的に走者の体力を奪い、振り落とすにかかっている。

「む——」

盛り上がる踏み台に躓いて体勢を崩しながらも走り続けようとした源田に、砲身から飛来したボールが迫った。

咄嗟に出た手が顔面に当たる寸前でそれをキャッチしたものの、そ

の瞬間マシンのスピードについていけなくなり振り落とされて、配置されていたマットに叩き込まれることになる。

結局、このコースもレベル5を超えたところで頭打ちとなった。

「よし……始めてくれ！」

「はっ」

次に挑んだのはスタミナコース。

スピードコースから更に幅の広がったランニングマシンを走るというもの。

その幅の広さは複数人、それこそ11人で一度に走ることさえも想定していると思われたが、生憎今の源田と一緒に走るようなチームメイトは居ないので、少しやり方を変えてみた。

控えていた影山配下の黒服の男達に頼み、シユートを蹴ってもらふことにしたのだ。

流れていく踏み台の向こうから飛んでくるボールを必ず全てキャッチしなければならぬという縛りを設けた上で、である。

「はあっ……はあ……っ！ まだだア！」

スピードコースに匹敵する速さで流れていく踏み台の上で、飛んでくるボールを受け止めるために左右にも目一杯動かなければならぬくなり、普通に走るのと比にならない勢いで体力は削られていく。

その上1つでも取り逃せばやり直しというルールでやり続けた結果、源田はレベル5にもたどり着けず、レベル4で力尽きることになった。

初日の特訓は、これで完全に体力を使い果たしてしまったため幕を閉じる。

2日目。

復活した源田がまず挑んだのは主にフィールドプレイヤーとしてのスキル向上を目的としたコースだった。

他のポジションになった時も問題なく動けるように、フィールドでのスキルを忘れないためだ。

全国トップの王者であり、完璧主義者の影山が続べていた帝国学園

は、得意ポジション以外でも一定以上のプレーが出来るように選手を育成していた。

源田もその例に漏れず、GKとして鍛える傍らでしっかりと他のスキルも身に付けさせられていたのである。

『そらっ！』

『ギャアアアア！』

『大野ーっ！』

源田は入学直後の実力テストを受けた際、GKとしてはこれまでの記録を大きく塗り替える力を示した一方、キック力テストではシュートを蹴る度にその場に居た者達の顔面にボールを命中させるという惨劇を引き起こしていた。

彼が蹴る度にボールはゴールポストに轟音を立てて跳ね返り、コーチやチームメイトに炸裂するという悪夢。

そのため、彼のスキルの習得は急務となり、最も優れたストライカーだった寺門直々に指導をさせるまでに至る。

寺門の指導の記憶を思い起こしながら、ボールを保持しようとするマシンを源田はタックルで吹き飛ばしていた。

(寺門の教え方は凄く丁寧だったなあ……本当に世話になった)

理論派のストライカーだった彼は源田の「非常にパワフルで個性的なシュート」に高度な指導を行い、なんとか最低限体裁が立つレベルにまで仕上げたのである。

根気強くシュートの極意を叩き込んでくれた寺門には感謝の念が尽きない。

そんなことを考えながら、源田は蹴り飛ばしたボールでキーパーマシンの振り回していたアームをへし折っていた。

「まだ100回も蹴っていないというのに……」

「修理の手配をしておきます」

一応狙った場所には飛ぶようになった源田のシュート。

しかし、彼の強烈なキック力によって下手な必殺技を上回る威力で放たれるシュートを相手に、健気に弾き続けたマシンは早くも限界を超えてしまう。

(まあ、比得達も使っていたのだし、ガタが来ていたんだろな)

これらのコースは強制終了となって、昨日挑戦したキーパーコースに再び挑む源田。

前回、レベル6はまともに動くこともできなかったため、レベル5から再開する。

「ふっ——」

源田はグラグラと傾く足場を思い切り踏みしめ、体幹を意識しながらボールへの反応を速めようと試みる。

注意が散っていくつかのボールを取りこぼしてやり直すことになったものの、動体視力と反射神経が研ぎ澄まされた結果、前回は動くことすらできなかつたレベル6でボールをキャッチすることに成功した。

「よし、行ける……行けるぞ……!」

程なくしてレベル6を突破した直後、レベル7で滅多打ちにされて足場から叩き落とされたが。

続いて挑んだのはスピードコース。

飛び交うボールをかわしながら、うねったり坂になったりと盛んに姿を変えるマシンの上で源田は走り続ける。

こちらレベル6、及びレベル7を突破することに成功した。

続くスタミナコースではなんとかレベル4を突破し、レベル5に挑むようになる。

だが、そこからはまた伸び悩み、3日もの日々が過ぎることになる。

(今日こそは、突破する……!)

特訓開始から数えて5日目。

「よう。精が出るねえ、源田くん」

「……不動か」

マシンを起動させようとした源田の背に、声がかかった。

声の主は、真・帝国学園キャプテンの不動である。

源田が彼の登場に冷めたように対応するのだが、不動は特に気分を害した様子はない。

「何の用だ? 俺はただ真・帝国として雷門中と戦えばいいのだろう」

「別に用事らしい用事はねえよ。ただ少し、話してみたいと思っただけさ」

「どうだかな。帰れ、気が散る。トレーニングに集中させてくれ」

「へへっ、お友達を人質に脅されて嫌々加入したって割には熱心に鍛えるんだな」

「――」

その言葉に源田の動きが止まった。

目を見開いて、その言葉に動じた自身に動じているようだった。

「やるからには全力かい？ いやあ、気持ちが入り過ぎな感じは否めないねえ」

「……何が言いたい」

「さあ？」

鋭くなった視線を受け流し、小馬鹿にしたように首を傾げて不動はとぼけた返事をした。

「――源田幸次郎。今時サッカーに関わっててお前を知らねえやつなんて居ない。負け知らず、常勝の守護神……まあ、無失点伝説は雷門中に。無敗伝説は帝国学園共々^{セウズ}世宇子に破られたけどな」

芝居がかった立ち振舞いで、語り出す不動。

彼は悪魔が人間に誘惑をかけようとしているような妖しい雰囲気
を放っていた。

「その上、真・神のアクアもエイリア石も、ドーピングは認めないと来た。俺はな、お前のことを大層なアマちゃんだと思ってたんだ。でも、どうやら違ったらしい」

ひどく落ち着き払った様子で話し続ける不動の言葉を遮ることは、源田にはできなかった。

「お前の本質は……俺や、影山総帥に近い。それこそ、総帥お気に入り
の鬼道クンよりも、な」

「なんだとっ！」

自分を仲間を傷つけた影山と同列に並べられた不動の言葉は源田
には到底受け入れられず、食って掛かった。

不動は詰め寄ろうとする源田に猛獣を宥めるような仕草をしながら

らも、口を閉じない。

「おおっと、怒るなよ。俺が言いたいのは、要するにだ。自分で気づいてるのか知らねえが、お前の『勝利への執着』は普通じゃないってことだ」

「……………」

「……………普通、世宇子中の力を見せられて戦い続けるか？ 自分の腕を壊すまでよ。鬼道クンを信じてたと言えはお綺麗だが、そもそも自分が持たないって、一瞬でも考えなかったか？」

瞳の揺れる源田を、不動は逃がさない。

口を歪な笑みで歪めたまま、まつすぐと瞬き1つせずに源田を直視している。

「ああ、考えたか、それとも考えた上で無視したんだろうなあ。それで本当に、試合に負けて勝負に勝ったんだ。大したもんだぜ。ああ、大したもんだ」

称えるような口調とは裏腹に、その目は笑っていなかった。

「ただなあ……………1つ気になったことがあるんだよ。本当に単純な疑問だ。

——なんでお前は、そこまでして勝ちたいんだ？」

「……………何を、言っている」

「もちろん勝つことはいいことだ。俺だって勝つのが好きだぜ。何せ、敗北の醜さ・惨めさってやつを存分に知り尽くしてるからなあ……………！ ……だから不思議なんだ。対象が他者か、自分か。その違いはあっても、勝利の為に躊躇わず犠牲を差し出せるのが。負けたことのないお前が、なんでそこまで『負け』にビビってるんだ？」

「なん、だと——？」

「ふん」

修練場で源田を問い詰める不動をカメラ越しに眺めながら、影山はつまらなさそうに鼻を鳴らした。

影山の知る源田の本質は、異様なまでの勝利への渴望だった。彼は如何なる状況でも勝ちを求め続ける。

『どうだね、源田くん。小学校を卒業したら、我が帝国学園の守護神となる気はないか？』

北海道にて彼を戦力として加えることを決めた勧誘。

全国大会40連覇を誇る王者の一員になれるのならばと、影山の勧誘に頷かなかった者は今までに居ない。

ただ、彼は1つ問うた。

『帝国学園なら、俺は王者に近づけますか？』

帝国学園にやって来て、キング・オブ・ゴールキーパーの異名を恣にした源田だが、彼が鍛練を止めることも、慢心を見せることもなかった。

己の実力に慢心せず常に上を目指し続けると言えば聞こえはいいが、明確な目標もなしに、競える相手も居ない状況で更に強くなるうと本気で思える者は希だ。

それも、一度も負けたことがない状態では。

そんな中で、彼は未だに目指す場所があるように、挑むべき相手がいるように己を鍛え続けていたのを、影山は知っていた。

(なぜ奴は、そこまでして勝ちを求められるのか)

世間では敗北は成長に繋がるなどという綺麗事が蔓延っているが、影山にしてみれば敗北とは即ち終わりだ。

あらゆる栄光に泥を塗り、歓声を罵声に変え、幸福を不幸に貶めるもの。

だが、綺麗事が世間に蔓延っている通り、その真実を知る者とはつまり本当の敗北を知る者しかいなかった。

敗北の先を知っているからこそ、彼らは勝利を何よりも求める。

そんな中で、勝ち続けながらも、体を壊す禁断の技から並の者が一発で選手生命を失うような必殺技まで作り、己の身も顧みずに戦ってまで勝利を求める源田は、異質だったのだ。

(源田よ。お前はなぜ戦う)

「――ここに居ましたか」

総帥室に響いた声に、影山は部屋に映していたカメラの映像を切つて入ってきた男達に顔を向ける。

青白い顔をした痩せぎすの男が、3人のエージェントを引き連れてずかずかと影山の前に現れた。

男が口を開いた。

「全く、困りますよ。例のGKには私どもも興味を持っており、引き込む準備を進めていたというのに……勝手にあなたの私兵にされては」「ククク……いや、私はエイリア皇帝陛下の御為、雷門中を潰すために集められる最大限の戦力を集めただけだとも。まさかそちらもあれに目をつけていたとは、露程も思っていなかったのでな、不幸な行き違いだ」

「……ええ、旦那様も非常にあれには興味を示しておられます。すぐに私に預からせて頂きたい」

「いやいや、今のあれは陛下の前に出すにはあまりに弱すぎる。調整を終え次第、私が直接陛下にお届けするので、お待ち頂くよう伝えてくれたまえ」

「……わかりました。あなたを信用しましょう。必ず旦那様のご期待に沿うよう、励むように」

そう言つて、要求を突っぱねられた男は引き下がったが、部屋を出ていきざまに鳴った舌打ちの音を影山は聞き逃さなかった。

「ククク……」

彼は再びカメラの映像を映し出し、眺め始める。

状況は彼の掌の上だ。

チームを揃え、最高傑作を出迎える準備を、影山は整えていく。

吹雪士郎は雪崩を恐れない

雷門中は、北海道で吹雪達直伝の特訓を体験していた。

その内容とは、スノーボードで転がり落ちてくる巨大な雪玉を避けながら斜面を滑っていくというもの。

スノーボードを乗りこなしたスピードで、彼ら曰く「風になる」ことにより、速さに慣れて周囲を把握しやすくなるのだという。

「ぬ……くっ……おわあー!」

まだ日が昇ったばかりの時間帯に、ぎこちない滑りで転けて雪山を転がっていく染岡の姿があった。

吹雪兄弟の紹介したこの特訓法に対して懐疑的な彼だったが、エリア学園に勝つために必要ならばと、この遊んでいるようにしか見えない特訓にも取り組もうとしていたのである。

最初に文句を言ってしまった手前、他の皆と並んでやるのは恥ずかしいので早朝から外に出て滑るのは、なんとも素直ではないが。

「上手いかねえもん、どわあ!」

「お? わりーわりー」

慣れないスノーボードに、起き上がるのにも難儀していた染岡に、軽快な雪を滑る音が聞こえたと共に冷たい雪がかけられた。

流石に顔面に雪を浴びて平静ではいられず、声を上げた染岡に気づいたのか、少し滑った所でそのスノーボードの主が反応し、染岡より少し下った所で止まって彼を見上げていた。

「お、お前、アツヤ! 何しやがんだ!」

「俺はここで一滑りするのが日課なんだよ。アンタこそこんな朝早くから何やってんだ、染岡サンよお?」

「ぬ……」

雪をかけられたことにいきり立った染岡だったが、逆にアツヤに聞き返されて言葉を詰まらしてしまう。

然もありなん。彼らが紹介した特訓に文句をつけた染岡が、結局その特訓をしているなどと素直に言える筈もなかった。

そして、なんと答えたものかというあからさまな逡巡に気づかない

ほどアツヤは鈍くない。

すぐに染岡の内心に当たりをつけて、いたずらっぽい笑顔に向けた。

「へー、そうかそうか。あんなに渋ってたのは、『遊び』もできねえのが恥ずかしかったからか〜！」

「ああん!？」

笑いながら煽り立てるアツヤに染岡は青筋を立て、元より厳つい顔を更に険しくして怒鳴るが、その態度でまだ起き上がれずにいる姿は滑稽で、ますます彼を笑わせる。

「皆の前でスツ転ぶのが恥ずかしいからやだったんだなく。それで朝早く一人で練習なんて、かわいいところあんじゃないの染岡サン!」

「てんめ……! いいぜ、やってやらあ! 絶対できるようになって、お前なんてすぐに越えてやる!」

「ははは! アンタは風になれるかな? まっ、精々頑張れよー」

試すような口振りの言葉を言い残し、アツヤは再び滑り出した。

染岡は歯軋りしていたが、しかし軽快に滑っていくアツヤを見て、次第に彼の動きを観察し始めた。

むすつと口を真一文字に結びながらアツヤの一挙一動に目を凝らす染岡。

そんな光景を木々の隙間から、士郎に、円堂と風丸の三人が見ていた。

円堂達は練習をしようとして朝早くから外に出てきていたのだが、士郎から静かにするよう促されながらゲレンデにやって来た彼らは、染岡とアツヤのやり取りの一部始終を目撃していたのである。

「染岡、あいつ……」

「素直じゃないよな、まったく」

円堂と風丸が顔を見合わせる。その時、野太い悲鳴が彼らの耳に届いた。

目を離れた隙に再挑戦した染岡が、また転んだらしい。

アツヤにからかわれて、顔を真っ赤にして起き上がっている。

それを眺めながら、士郎が微笑みをこぼした。

「アツヤ、楽しそう。君達が来てくれてよかったよ」

「……楽しそう、なのか？ 正直に言って、あんまり好かれてる気はしないんだが」

士郎の発言に、ここ最近のアツヤの振る舞いを思い浮かべて風丸が疑問を口にした。

先の練習試合以来この白恋中に滞在している雷門イレブンだったが、アツヤはといえば、一応円堂達の実力は認められたものの、基本的にはツンとした氷のような対応である。

だが、士郎はその言葉に頷きで返した。

「うん。2人だけの時は皆の話をよくするんだよ。『あいつら、ここではこう動けばいいの』とか、まあ大体が練習の愚痴みたいな感じだけど、アツヤがそういうことを言うこと自体が最近はなかったんだよね。……こう言ったらなんだけど、アツヤと同じレベルでプレーができる人は、白恋中には居ないからさ。『もっとこうしたらいいの』って思ってそれを口に出すくらいには、皆とのサッカーに真剣に打ち込んでると思うよ」

「確かに練習中も注文が多かったが……染岡、よく怒ってたよな。アツヤの方からよく絡んでた」

「あはは……同じポジジョンだし、あれで意外と気に入ってるのかも。アツヤには、競い合える相手が足りなかったんだと思うんだ。僕じゃあ『競争相手』にはなれないしね」

「そうだな、あいつらは強くなる。俺もこうしちゃられない！」

おーい染岡——ってうわああー！

早速滑り出そうとした円堂だったが、あっさりとバランスを崩して染岡の傍に転げ落ちていった。

この場に居るのは自分と、そしてアツヤの2人だけだと思っていた彼は円堂の突然の登場に目を白黒させ、次いで木陰からこちらを見ていた2人にも気づいた。

「んなっ、円堂!? 風丸……それに士郎！ お前らいつからそこにー！」

「悪い、お前がさつき転んでた辺りからだ」

「ほぼ最初っからじゃねえか！」

「怒るなよ、俺達も練習したくて出てきたんだ。強くなりたいうって思うのは、お前だけじゃないぞ」

「この特訓はエイリア学園の奴らと戦うのに、きつと役に立つ。そう思ったから、お前もこうして練習してるんだろ？」

「……それは……」

風丸と円堂の言葉に否定もできず、染岡は黙り込んだ。

「はは、恥ずかしいのかよ染岡サン？」

「ぬ、ぐ……アツヤてめえ！ 待ちやがれえ！」

「捕まえてみなー！」

「この、待て、おわあああ!!」

「あーあー……」

からかわれて居ても立つてもいられずに動いた染岡が、また転がり落ちていった。

それをアツヤが笑い、再起動した染岡が追う。

「へっ、まだまだだな！」

「いい加減にしやがれこの野郎……くらえ！」

「ぶえっ」

一向にアツヤを捕らえられないことに業を煮やした染岡が、その場で拵えた雪玉を投げた。

雪玉は綺麗に飛んで、アツヤの顔面に当たって砕ける。

いつも生意気なことを言う相手に叶った仕返しに、染岡も満足げに笑う。

「はっはあ！ どうだ！」

「……やりやがったなてめえ！」

「ぶほっ！」

顔や髪にへばり着いた雪を身を震わせて払ったアツヤが、足元の雪を丸めて投げ返す。

染岡も当然、再び投げ返し、そのまま2人の投げ合いが始まった。

「おいおい、何やってるんだ2人とも……うわ！」

「あっ」

「やったな！」

練習をそつちのけにし出した彼らに声をかけた風丸に、流れ弾が飛んできた。

割れた雪がさらさらと地面に落ちていくのと同時に彼も投げ返す。そこに円堂もとりあえず混ざって、なし崩しに雪合戦が幕を開けた。

「おらあ！」

「あははははー！」

「おいちよつと待て、わぶつ」

彼らの様子を見下ろして、士郎は奇妙な感傷のようなものを覚えていた。

幼い頃はここで、兄弟2人で雪合戦をしていたものだ。その懐かしさもあるだろう。

だが士郎にはそれだけでなく、本当はなかったものが手元にあるよ
うな、奇妙な感覚があった。

中学生になった辺りからうつつすらとあったものが、雷門イレブン彼らに出会っ
てから強くなった気さえする。

「うわあっ！」

その何かに思い当たりそうになったその時、顔に冷たいものがぶつかり視界が白で覆われた。

思わず顔を横に振って、顔に付いた冷たい雪を払うと、その先にはしたり顔で立つ染岡が居た。

「はは、お前もまともに驚いたりすんだな！」

「何してんだ染岡こらあ！」

染岡はそう言い切った瞬間にアツヤから投げられたボールが後頭部にヒットし、雪原に前のめりに倒れ込んだ。

「兄貴ー！ー！ 何そこで見てんだよ、兄貴もこつち来いよー！ー！」

「——うん、今行くよ！」
手を振ってこちらを誘う弟の無邪気な笑顔に、感傷は消えていった。

自然と口許が綻び、士郎は靴をスノーボードから外して駆け出して行く。

「アツヤてめえこの野郎——！」

「えいっ！」

「ぐわあぁ——！ 背中入った！」

「あははは——！」

アツヤへの報復を狙った染岡に走りながら作った雪の塊を投げつける。

騒いでいた影響か、ある木の枝に積もっていた雪がどすんと音を立って落ちたが、そんなものは気にもならなかった。

イナズマキャラバンが北海道にやって来てからの日々が過ぎていってしばらく。

染岡を始めとした、雷門イレブンを吹雪兄弟の特訓をマスターした頃。

その日、白恋中の空には不気味な暗雲が立ち込めていた。

雪国のそれとは違う、背筋を凍らせるような空気が白恋中一帯を包み込んでいる。

ただし、そんなものをもともせずグラウンドに立つ少年達が居た。

「凍てつく北の大地を、溶かすほどの熱血！ 注目の雷門中対エイリア学園ジェミニストームの、世紀の決戦が始まるうとしています！」

先の予告通りに白恋中を破壊すべく襲来した宇宙人達を迎え撃つ戦士達。

角馬の煽りがその闘志を燃え上がらせる。

「地球人とは愚かだな。2度あることは3度ある……お前達の星の言葉の意味、お前達にそのまま証明してやろう」

緊急のテレビ中継までやって来ている物々しい人々の様子を眺め、ジェミニストームを率いるレーゼが冷ややかに言う。

後ろのジェミニストームのメンバーも同じ気持ちである。

既に2度、彼らは雷門イレブンを圧倒的な力の差を見せて下している。

ましてや奈良での戦いに於いて、染岡から1点をもぎ取られたことにより、フアーストランク”に叱責を受けた彼らだ。

今度こそ加減なしで雷門イレブンを叩き潰す心積もりだった。

油断なく、一切の遊びのない本気でかかれれば、雷門イレブン程度容易く打ち負かせる。

その考えは決しておかしな話ではなかったのだが、しかし、雷門イレブンはそのような常識を悉く打ち破っていく者達だというのが、レーゼの計算には入っていなかった。

雷門イレブンは既にかつての雷門イレブンではなく、そして彼らには強力な新戦力も加わっていたのだから。

「足引っ張るなよ、染岡サン」

「はっ、お前こそな。宇宙人相手だからってビビるんじゃねえぞアツヤ」

「ビビるかよあんな奴らに！」

「皆ー！ー！生まれ変わった雷門の力、見せてやろうぜー！ー！」

『おうっ！』

斯くして、北の大地にてジェミニストームと雷門イレブンの3度目の戦いの火蓋が切られた。

「始まったか。ジェミニストームが使えんようならば、ここですぐに……」

密かにその戦いを眺める鋼鉄の男に、誰も気付くことなく。

源王は勝利の他に望まない

真・帝国学園が擁する修練場の中、向き合っていた二人の少年。不動の言葉を最後にその場に訪れた沈黙は、ほんの数秒にも、一時間経ったようにも感じられた。

「……理由など、話す必要はない。俺は負けるわけにはいかない。それだけだ」

投げられた問いに押し黙っていた源田は、辛うじてそう口を動かした。

それだけ言いきり、特訓を切り上げて修練場から立ち去ろうとする。

一刻も早くこの男の前から離れ、この話を終わらせるべきだという虫の知らせのような警告を感じていたからだ。

「そんなに急いで何処へ行くのだ、源田よ」

しかし、いつの間にかやって来ていたのか、新たにこの場に加わった影山が行く手を塞いだ。

「話せんか？ 何故お前が勝利に執着するのかを。……ククク」

「それを何がなんでも知らなければならぬ事情でもあるのか!? たかが俺一人の戦う動機がなんだというんだ!」

その声は、もはや冷静さが失われ出していることを二人に示していた。

影山にしてみれば、この程度の敵意などそよ風にもならない。

余裕たつぷりの態度で、笑う。くつくつと押し殺したような笑い声を響かせる。

「いや、そこまで拒むのなら無理には聞かない。好奇心から湧き出たちよつとした興味に過ぎんよ。少々不動の口が過ぎたかな」

「おいおい、影山総帥だつて気になってたから、俺にちよつと聞いてこないなんて言つたんだろ? 責任擦り付けるなんて大人気ねえなあ」

「クククククク……!」

白々しい言葉を言い合い、笑っていた影山と不動の二人だが、源田は笑う気分になど、とてもなれなかった。

「ククク……！ ああ、構わんよ。答えられんのならそれはそれで構わん。だが、確信したぞ」

次の瞬間、影山はサングラス越しでも感じられる鋭い視線を、揺れる源田の瞳に向けた。

見透かされるような感覚に、源田は動くことができなかつた。

「やはり、お前は私に近しい。お前のその勝利への渴望は……必ずしも、仲間を必要としていないのだ」

「ふざけるな……！」

源田は反射的に否定しようとするが、その反応は影山の言葉が効いているのだということを白状するに等しい。

彼の言葉はどんなに強力なシュートよりも強烈に源田を揺さぶり、杭のようにその心に深く、鋭く突き刺さっていた。

影山は、声色に愉悦を滲ませて言葉を継ぐ。

「ここに来てからお前がトレーニングに打ち込んでいる様は、『帝国学園一年生の源田幸次郎』を思い出したぞ。必要最低限以上の交流が端から頭に無く、勝利以外が眼中に無かつた頃をな」

源田も、その言葉は否定できなかつた。

当時、中学生になっていよいよ時期が間近に迫っていることを意識していた源田は、小学生時代にも増してトレーニングに打ち込んでいた。

元より帝国学園サッカー部自体が徹底した実力主義であり、同じ部員としてレギュラーを奪い合う油断ならないライバルでもあつたことを考えれば、彼が他の部員と険悪な仲だつたわけではない。

しかし、多くの者がしのぎを削る中ですぐにチーム内で頭角を現した一人であつた源田と、他のチームメイトとの間に距離が生まれていったことや、彼がそれを自ら埋めようとしなかつたことは事実である。

源田が人付き合いを嫌っていた訳ではなかつたが、新たにやって来た成神達一年生との関わりで、初めて彼の好きな食べ物などが判明した程、関心の大半がトレーニングに向けられていた。

そのあり方は、同様にチーム内で一線を画す実力を持ちながら、チームを率いる者として、彼らと多くの交流を結んでいた鬼道とは対

照的だったと言えるだろう。

「帝国で絆されたかと思つたが、健在だったのは嬉しい誤算だったぞ」
「この連中を、仲間と呼べると思うか？ 帝国と真・帝国ではわけが違ふだろう」

しかし、それとこれとは話が別だ。

なにせ真・帝国学園のメンバーはその殆どが源田に対して歪んだ憎悪を抱えている。

比得達とは初日の決闘で別れてそれきりだが、一度自分を下したぐらいで彼らが満足するとは到底思えない。

というより、元々振くれた人間性だからあんな逆恨みに近い感情を何年も燃やしていたのだ。

その気が晴れたとして、現在勝負という明確な形で自分の上に立つた彼らがまともなチームメイトとして接してくれるかどうかなど、円堂でも期待はしないだろう。

単純に、可能な限り関わりたくないのだという思いを顔に表しながら、源田は言い放つた。

「ククク……そうかな？」

それに対し、影山の笑みは変わらなかつた。

「仮にも学友を人質に取られているというのに、そのせいで私の要求を呑んだというのに……それ以降、お前が奴らのことを気にしていたようには見えなかつたぞ？」

影山の言葉に、今度こそ源田は凍りついたように固まった。

「要求を呑んだ以上、私も約束を守るだろうと信用したとでも言うのか？ この“私”を？」

例えば、帝国の面々の無事を尋ねていたとして、潜水艦という閉鎖された環境で外部からの情報を独占している影山からどんな答えを貰つても、信用できはしなかつただろう。

ネガティブな感情を引き起こすだけの、無意味な行動だ。

それに艦内がほぼ全員敵という状況で弱みを見せないよう、気丈に振る舞っていたとも考えられる。

影山が“源田が帝国の仲間たちを気遣っているようには見えな

かった。等と言ったところで、言い掛かりでしかない筈だった。

「そんな馬鹿な。俺が……？」

真実が、何であったにせよ。

激しい特訓で体が温まっていた筈なのに、源田は今、未だかつて感じたことのない寒気に襲われていた。

夏であり、空調設備が機能している艦内で、そのようなことはまずあり得ないというのに。

影山は、畳み掛けるように、突き立てた杭を深く打ち込んで岩を砕こうとするように次なる言葉を口にした。

「ああ……郷院猛も居たな。旧友が私の下に囚われていたというのに……確かに動じていたのに……お前は、奴と話をしようとも、しなかつたな」

異様に渴き出した喉は、呼吸さえも辛いと痛みを訴えていた。

「世宇子との戦い。始めから勝ちなどない戦いにチーム総出で挑み、満身創痍になったな。戦えば、己はもちろんチームメイトもそうなることがわからない筈がないだろうに、何故一点取られた時点で棄権を主張せず戦った？」

この世に生まれてこの方、貧血等とは縁がなかったにも関わらず目眩が起こり、顔色は蒼白になっていた。

「お前はただ勝利が欲しいだけで、本当は他人のことなどどうでもいいのではないか？」

立っていられず、床に膝を突き、倒れ込みそうになるのを咄嗟に伸ばした手で辛うじて支えた。

「俺は、本当は皆のことを……何とも……？」

サッカーは一人でできるものではない。

それが理解できているから、試合中のプレーの質に関わるチームメイトの状コンディション態等に注意する。

自分を高めることが勝利には不可欠だから、練習熱心な者、高め合える者には好意的になる。

その一方、それがサッカーと直接関わることはないものならば怒り、悲しみも容易く脇に置き、試合に臨む気持ちに切り替えられる。

勝利以外への無関心が自分の本性なら。

(そんな俺が、皆の仲間と本当に言えるのか?)

考え出せば自身の何もかもが信じられなくなり、思考の沼に沈んでいく。

体が硝子でできていたのなら、ひとりでに崩れていそうな程弱々しい姿が見えていないかのように、影山は源田を見下ろして告げた。

それはまるで、罪人へとその罪を突き付けるかのようにだった。

「そうだ。」

——勝利という一事のために、他人を容易く切り捨てられる人間。それがお前なのだ」

「——」
返ってくる言葉はなかった。

それから浅く荒い呼吸を数度繰り返した後、彼はその場に倒れ伏した。

「……ヒュー、えげつねえ」

何処に隠れていたのか、幾つもあるトレーニングマシンの陰からぬるりと現れた黒服達が、意識のない源田を何処かへ連れていく。

一部始終を見守っていた不動は飄々とした態度でそう零した。

「不動、お前も行け。二日後、指定の場所に奴らを連れてくるのだ」

「へーへー。了解しましたと……」

影山は不動にそう命令し、彼が修練場から居なくなったのを見届けると、自身も仏頂面になりながら歩いていった。

(全く、面倒なことになったものだ)

新たにやって来た命令で予定よりも動かねばならなくなった影山は、口には出さないものの、内心で独りごちる。

よくも悪くも、関心がサッカーという一つの世界のみに終始している影山には、上役の目論む世界征服などどうでもいい話だった。

とはいえ、上役がそれを目的としており、その布石の一つをここで打つと決めてしまった。

逆らえば命はないし、命を懸けて齒向かう理由もないので、命令された以上は億劫だが従うほかない。

たったそれだけのために、源田を揺さぶったのだった。

サッカーとその勝利が関わらない時、彼はあつさりとおある対象への関心を捨てる傾向がある。

笑い、怒り、悲しみもするが、それらよりサッカーを優先するのだ。本人にそう突き付けて効果があったことから、その見立ては概ね間違っていないだろうと信じている。

影山は、あの源田の分析がかなり正確だという強い自負があった。結局わからなかった、何故そのような執念を持つに至ったのかについて等の疑問はまだ残っているが。

特に――

(そんな性質でありながら、奴は円堂守だけは明らかに意識していた)それが奇妙だった。円堂守怨敵の孫の何が、源田を意識させているのか。考え出したものの不愉快だったので、影山はすぐにその思考を捨てた。

“なぜ、敗北を恐れるのか”

孤高の反逆児にそう問われた時、彼が真つ先に頭に浮かべたのは――

“勝たねばならないから”

では、なぜ勝たなければならなかったのか。

そこまで考えて源田は、その名を背負った “とあるサッカー好き” は、自分の原点はじまりへと思考を巡らせていた。

それは、源田幸次郎が小学校入学を間近に控えていた頃。

“彼”の開けた視界に最初に映ったのは、白い天井。次いで、目を開けた自身を覗き込んだ両親二人の大人の顔。

両親や医師から説明された内容によると。

自分は両親と共にサッカーの試合を観戦していた所、激しい戦いで客席に飛んで来たボールに頭をぶつけて倒れ、およそ数時間程意識を失っていたのだという。

当の彼には自分が病院に居る事情どころか、呼ばれる自分の名前にも、そもそも両親にも覚えがなかったのだが。

彼は訳のわからない状況で混乱しながらそのことを主張したが、半ばパニック状態だった彼の言葉は、彼の思う通りに周囲の人々に伝わることはない。

病院に来た原因が頭部の負傷であったこともあり、記憶喪失であると判断された彼は入院させられることとなる。

息子がそのようなことを言い出しても、両親は自分たちの動揺を見せないように努め、医師たちも不幸な患者に親身になつて気遣いを見せていたが、それらが彼の心に安らぎを与えることはなかった。

胸の底にあつたのは、名前も思い出せないがしかし、今呼ばれている名前は絶対に自分のものではないと感じるといふ、奇妙な感覚。

それが確信に変わり、状況を理解できたのは、病室のテレビに映つたサッカーの試合が切っ掛けだった。

聞いた時から、頭に当たつたとはいえ比較的軽く柔らかいサッカーボールで倒れたという話が腑に落ちていかなかった彼だったが、その時ようやく得心する。

画面の向こうで繰り広げられていたのは、ピッチで風が吹き荒れ、炎が舞い、人が常識外の速度で駆ける戦い。

それは彼の「経験しているサッカー」とは程遠いものだったが、同時にそのサッカーへの既視感も確かなものとして存在していた。

身に染み付いている経験に基づくならば「非常識」な、しかしあえて言うならば「超次元」と評すべきこの競技を、彼は知っている。

後は堰を切つたように、答え合わせをするように、次々と思考に鎮座していた疑問と混乱が氷解していき、違和感の正体が理解できた。

しかし今度は別の意味での混乱が生まれた。

何故、自分がかつて慣れ親しみ、サッカーを始める原点にもなつた

世界に居るのか。

それも最も好きになり、憧れた少年の皮と名を被って。

こうなった原因を筆頭とした殆どの事柄について、彼には答えがわからないことしかわからなかった。

ただ一つ、己が真正正銘の異分子であるということを除いて。

そんなこと、誰にも明かすことなどできなかった。

本来の少年の意識がどうなったのかもわからない。消えてしまったのか、はたまた眠っているような状態なのか。

何れのこととも現状では答えの出しようがなく、彼の意識は、これからどうするのかという一点に帰着した。

幸い、それだけは答えを出すのに然程時間を必要としなかった。

彼の知る限り、源田幸次郎はこの超次元サッカーの世界における日本一の王者の一員であったが、頂点の争いを制することは叶わなかった。

そして、円堂守率いるイナズマイレブンが世界の頂点に輝いたのだということだけが、確かな知識として彼の中に刻みついている。

——ならば、自分は勝とう。

円堂守を始めとしたあらゆる相手に打ち克ち続け、頂点を勝ち取つてみせる。

知っている物語をなぞるだけならば、自分は本来の役者を舞台から追い落とした者でしかない。

しかし、もし何かを成せたのなら。

その成果だけが、未来の王者たる少年の舞台を奪った自身の表現できる自身の価値だから。

お誂え向けなことに、やることはサッカーだ。前のことは自身の名前も何者であったかすらも彼方へ消え去り、この世界のこと虫食いだらけの中、それだけは少しの不足もないのだから。

わからないことだらけの始まりだったが、それこそが今の源田幸次郎を形作る決意であった。

故に、彼は勝つ。勝たなければならない。

勝利こそが責任であり、贖罪であり、存在証明である。

帝国の連携は淀みない

源田が行方知れずとなつてから、一週間以上もの時が経つた頃。

早朝。愛媛県のある埠頭に、三つの人影があつた。

先頭に立っていたのはユニフォーム姿の不動。彼の後ろについてきた二人の少年は、帝国学園の制服に身を包んでいた。

「おい」

海を見下ろして立つ不動の背中に、制服の少年が声をかけた。

抑えられてはいたが、声にも立ち姿にも、微かな苛立ちが現れている。

振り向いた不動に、制服の少年が言葉を続ける。

「本当に、ここで源田に会えるんだろうな？」

「ああ？ そんなにカツカするもんじゃねえぜ、佐久間くんよお」

「お前……」

「……やめとけ佐久間。本当に源田に会えるまでは、どうせ何聞いたつて信じられやしねえよ」

へらへらと神経を逆撫でする笑みを浮かべた不動に声を荒げかけたのは佐久間。それを宥めたのは、帝国イレブンの誇るエースストライカー・寺門だった。

源田搜索を続けていた帝国学園サッカー部の一員だった彼らは今、こうして不動に連れられて埠頭までやって来ていた。

この発端は、つい先日まで源田の行方について一向に手掛かりが掴めず煩悶していた二人に突如不動が接触してきたことにある。

彼の言ったことは単刀直入。

『俺について来れば、源田に会えるかもしれないぜ』

その言葉は、初めから明らかに不自然であった。

まだ世間に出ていない源田の行方不明という事件。彼の家族や自分たち帝国イレブンくらいしかまだ知らないそれを、何故この全くの初対面のこの男が知っているのか。

その上、誰かにこのことを伝えてはいけない。もし伝えれば、二度と源田とは会えないだろう。などという脅しまでしてきた時点で、彼

が源田の行方不明に関わっていることは明白だ。

それでも、何一つ手掛かりが掴めていない現状では、罨であれ何であれとにかく行くしかない、彼らは不動に従って愛媛までやって来ていたのだった。

とはいえ、それで辿り着いたのは港。ここまで連れてきた不動は埠頭に立って海を眺めているばかり。

藁にもすがる思いでやって来たというのに一体どうなっているのかと、佐久間が苛立ち始めたのも無理からぬことだった。

「安心しろよ、ちゃんんと会わせてやるからな。……そろそろだな」「なに？ どういう意味……」

「——なんだ、ありやあ……!」

不動の言葉尻の呟きを佐久間が追及しようとしたのを、寺門の叫びに遮った。

佐久間も海を見てみれば、先程まで静寂と霧に包まれていた海面に、巨大な影ができていたのである。

「おっ、来た来た」

「な、何が来るってんだ!」

影の大きさは鯨や鯨、どころではない。明らかにもっと巨大な何か、海中に潜んでいる。

こうしている間に影がみるみる大きくなっていくことから、それが今まさに急速で浮上してきていることも寺門には察知できた。

そしてそれに気づいた瞬間、影は海面から勢いよく飛び出して、その正体を現す。

「潜水艦……!?!」

激しく水飛沫を上げながら浮上したものの正体は、巨大な潜水艦である。

暗い色の装甲に包まれていたそれに付いていて揺らめいている旗の紋章に、寺門は見覚えがあった。

その疑問を口にする前に、不動は潜水艦を背後にして両腕を広げて叫んだ。

「真・帝国学園へお二人様ご案内! ようこそ、歓迎するぜ」

「真・帝国学園だど!？」

言葉通りに捉えるのならば、旗にある紋章が帝国学園の校章に酷似しているのも納得は行く。

だが、帝国学園に所属する自分を前にして「真・帝国学園」などと名乗られて、二人の心中が穏やかである筈がなかった。

「ふざけた名前しやがって、どういいうつもりだ!」

「そう怒鳴るなよ。当然のことだぜ? あのお方が居る所こそが『帝国』なんだからなあ」

「あの方……? まさか——」

不動の示唆に、かつての帝国学園の支配者にして、卑怯卑劣な悪の権化を二人が想起した瞬間、潜水艦から橋が展開され、埠頭にまで伸びてきた。

そして橋の上に姿を現したのは、彼らの思った通りの人物。

「久しぶりだな佐久間、そして寺門よ」

「影山!、なんでお前がここに居る!」

世宇子学園を使い自分達を痛めつけた元帝国学園総帥、影山零治に対し、佐久間は憤怒のこもった声を張り上げた。

寺門も同様の怒りを込めた目で影山を睨む。

「ククク……このような所で立ち話もなんだ。積もる話は中でしようではないか」

「お前とする話なんかあるか! 今度は何を企んでいやがる」

「ククク……する話はないと言いながら、私の目的を尋ねるとは、随分余裕がないのだな。望むなら語ってやってもいいが……自分達が何をしにここへ来たのか、忘れたわけではあるまい? 源田もお前達を待っているぞ。随分寂しがっていたものだ」

「くそつ。源田が消えたのは、お前の仕業ってわけかよ……!」

「そういうことだ。さあ、早く来るといい。我が真・帝国学園へ」

怪しい笑顔で手招きする影山に従う気はさらさらないが、源田の身が懸かっている以上、ここで帰るといいうわけにはいかない。

二人は忌々しげに舌打ちしながらも、この潜水艦に乗り込むしかなかった。

影山を先頭にしてその後佐久間、寺門、最後尾に不動が続いて艦内の通路を歩いていく。

会話の全くない、重苦しい空気の流れる時間が一同の関係を端的に表していた。

総帥たる影山は今も昔も、選手達を勝利のための駒としか考えておらず、そして二人も、もうそんな彼に心を許す気はない。

かつての監督と選手というには、あまりにも冷えきった関係であった。

ただ、純粹に沈黙に堪えかねてか、あるいは少しでも情報を引き出そうと思ったのか、佐久間は口を開き、沈黙を破る。

「捕まった筈のお前がここに居るのには、エイリア学園と関係があるのか？」

佐久間の問いかけを細長い背中で受け止めた影山は、歩みを止めず、振り返りもせず、ただ声だけで答えた。

「いかにも。この真・帝国学園も、エイリア皇帝陛下のお力によって建設された」

「じゃあなんで、宇宙人なんぞと手を結んだお前が、俺達にちよっかいをかけやがる。俺達はお前と決別した。お前も俺達を切り捨てた。なのになんで……」

「勘違いするな。帝国^{お前達}イレブンなど私の眼中にない」「なに——」

寺門が影山の発言に噛みつきこうとしたその時、開いていた扉から差し込む外の陽光が彼らの目に入った。

眩しさに驚いて一瞬立ち止まったのを境に、話は終わりだとばかりに影山はスタスタと扉の向こうへ歩き去る。

その背を追って佐久間達が扉をくぐった先に広がっていた光景には、思わず目を疑った。

彼らが辿り着いたのは、帝国にあったようなそれと遜色ない広さと、ゴールからベンチに至るまでに一流の備品を備えているサッカースタジアムだったのである。

奥には、真・帝国学園の選手らしい少年達が屯しているのも見えた。暇潰しにボールを弄っていた面々がやって来た影山達に気づき、顔を向ける。

「おい不動、急に俺らを集めてどういうつもりだよ？」

ピエロメイクの少年——比得の言葉は、ここに集まっていたメンバーの意見を代弁していた。

彼ら真・帝国イレブンは、早朝からスタジアムに招集されていたが、来てみても不動は居らず、指示も来ずで、少なくとも不満が溜まっていたのだ。

「……さて、役者は揃ったな」

これで理由が下らないものであれば反乱も辞さないといった雰囲気ของทีมメイトからの視線を一身に受けながらも、不動は欠片も臆することなく口を開く。

「真・帝国イレブンの諸君。こちらが追加メンバー、帝国の佐久間に寺門だ。仲良くしてやれよ」

「はあ？ なに言ってるんだ？」

「俺が真・帝国だど!？」

「ふざけたこと抜かすな!」

当然ながら真・帝国イレブンからは拒絶が、そして帝国イレブンの二人からは怒号が出た。

中学で日の目を浴びることができなかった者の多い真・帝国イレブンからすれば、今年伝説が破れたとはいえ、栄光を恣にしていた帝国学園の一員がチームに加わるなど気に入らない。

二人にしてみれば真・帝国など、源田を拐かした影山に現在進行形で従っている一味である。

その仲間になれ、などと言われて唯々諾々と従う筈もない。

影山は無言で静観している。

一瞬で四面楚歌となった状況で、不動は笑みさえ見せて舌を回す。「まあ最後まで聞けよ。これは悪い話じゃない。もちろん、お前ら帝国にとってもな」

「敵の仲間になることの何がメリットだって言うんだ」

「ああ、ちゃんとして説明してやる。……俺達真・帝国学園は近い内に、目的である雷門中との戦うことになる！」

「雷門だと……!?!」

「——だが、お前らは如何せん我が強すぎて扱いづらい。てめえら、言うこと聞かねえだろ？」

不動の言葉に、真・帝国イレブンの面々は「当然だ」と肯定を示した。

キャプテンである不動自身も野心を持ってここに居るように、真・帝国にやって来た彼らはエイリア学園直属のチームと違って、チームにやって来た経緯も思惑もバラバラなのである。

誘拐同然の手法で連れてこられ、強制されて従う者。

野心とサツカーの腕前を持ちながらも燻っていて、一旗揚げようと目論み勧誘を受けた者。

そして、純粹に影山の思想に心酔し、勝利を得るために戦う者。

个性的と言えば聞こえがいいが、殆どの者が自己中心的。不動の指示を無視したり、反抗することも少なくない。

如何に司令塔として優れた手腕を誇る不動でも駒が命令を無視して動くようでは、雷門との試合が完全勝利に程遠い見苦しいものになるだろうと考えていた。

そこで、決戦が近づいているこの機会に、

「頭ごなしに命令しても意味ねえし……どっちが上なのか、ここで改めて決めようじゃねえか」

彼はチームに「躰」を行うことに決めたのだった。

見る間に殺気立った、自分の言葉に乗ってきてくれた彼らに笑みを深めながら、後方にあったゴールを指し示す。

「やることは簡単。日暮れまでに、一本でもそのゴールにシュートを決めた奴の勝ちだ。俺はディフェンスに回るが……勝者にキャプテンの座を譲る。全員キャプテンに絶対服従だ。お前ら二人もチャレンジしていい。どうだ、悪くねえ話だろう？」

その説明に、真・帝国イレブンのみならず帝国の二人も気を引き締めて向き直る。

敗者は勝者に従うというシンプルなルールは、彼らも臨むところ。不敗伝説が破れたとはいえ、佐久間と寺門は依然として全国トップチームのレギュラーメンバーであり、それに相応しい実力を持っている。

二人で協力すれば、勝機はあるだろう。

ここでこのチームを止め、影山の陰謀を打ち砕き、雷門中の鬼道も守る。

なにより仲間として、今度こそ源田を助ける。

そう固い決意を胸に抱いて、佐久間と寺門は制服に手をかけた。

帝国のユニフォーム姿になった二人と真・帝国イレブンの内の九人。

センターサークルに置かれたボールを囲んで立つ十一人の意識は、不動とその背後にあるゴールに向いていた。

ゴールを狙う十一人もまたキャプテンの座を奪い合う敵同士であるということを加味しても、常識的に考えて、不動の持ちかけた勝負はあまりに無謀に思えた。

何かがあるだろうと真・帝国の誰もが思ったが、場所はここに来てからの練習で慣れ親しんだグラウンド。それに自分達の力があれば小細工など蹴散らせるという自信によってその疑念はあっさりと消えていく。

「……さて。用意はいいな？ 始めるぜエ！」

影山が見下ろすピッチで、不動が狂気的な笑顔を浮かべながら叫ぶ。

その声に応じて、黒服が笛ホイッスルを啜えて、甲高い音で勝負の幕が上がったことを宣言した。

「うおおお!!」

「おらああー!」

音と同時に、一斉に十一人がボールへ走り出す。

「オオオオオアアア!!」

「うっ！」

「ちいっ！」

雄叫びを上げながら小鳥遊や他のメンバーを押し退けて、佐久間が走る。

この勝負で肝心なのは、最初にボールを確保することだと佐久間は確信した。

他の方向から走ってきたFWの比得、DFの弥谷であった。郷院は単純な走力で一步遅れている。

そのまま佐久間は、勢いを乗せた足を比得・弥谷とボールを挟んでぶつけ合った。

複数の方向から強い力を加えられたボールは、唯一の逃げ場であった上へ思い切り弾け飛ぶ。

「くそが！」

比得が忌々しげに、迫る郷院を見ながら悪態をつく。

ボールが落ちてくる頃には郷院も到着する。体のぶつけ合いで郷院相手に勝ち目はないからだ。

(こうなったら、無理にぶつかるより郷院アイツに取らせてから奪うか)

そう判断して下がるうとしたその時、比得は佐久間が微かに口角を上げたのを目撃した。

「行け、寺門！」

「ああ！」

佐久間の呼び掛けに寺門が気合いの籠った返事をしながら比得の頭上を飛び越えて、空中のボールを胸で受け止めながら着地する。

そして他の者達がその現実を理解し、行動に移す前に寺門は洗練されたドリブルでゴールへ走った。

二人は、佐久間がボールを寺門に託し、寺門がシュートを決めるというそれぞれの役割を決めていたのである。

話し合っていた訳ではない。この状況で勝つ為にどうするべきなのか、二人が独自に判断したのだ。

真・帝国イレブンの実力も戦法も知らない二人の唯一のアドバンテージは、乱戦必至の勝負でお互いという仲間が居ることだった。

しかし、開幕の争奪戦に二人ともが突っ込むだけでは、その一瞬はボールを奪えても、四方八方が敵だらけでゴールまでそれを持っていくのは至難の技。

そこで、佐久間は唯一空いている空中にボールを打ち上げたのだ。彼は寺門が必ずそれを取ることを信じ、そして寺門はその信頼に応えてみせた。

巨漢選手である大野や雷門の壁山と違い、決してパワータイプではない佐久間が周りの選手を押し退けて強引にボールを狙ったことの意味図を、寺門はすぐに理解したのである。

故に、寺門はボールに群がろうとする者達から一步引いた所で状況を見て、打ち上がったボールを確保した。

ほんの数秒での高度な連携は、仲間同士の信頼関係をよく表している。

「決めさせてもらおうぞ不動！」

佐久間から託されたそのボールを確実にゴールに入れるべく、寺門は叫ぶ。

「お前にも影山にも、源田と鬼道には手出しさせねえ！」

「仲間思いだねエ……まあ、鬼道クンはともかく、源田は……」

不動が呟いたのと同時に、地響きのような轟音が響いた。

グラウンドに立っていた不動を除く全員の動きが、一瞬止まった。

そして、震動と音の発生源である、ゴールに皆が目を向ける。

そこに居たのは――

「源田……!?!」

「もう、手遅れだと思っせ？」

鉄仮面でも被ったように感情が読み取れない、無表情の源田であった。

敗者は過去を越えられない

不動によつて執り行われた真・帝国学園のキャプテン争奪戦。

佐久間との流れるような連携でボールを確保してゴールへ迫っていた寺門だが、眼前で起こった事態に、思わず足を止めてしまった。

「どうした。そりゃあお前、ゴールの前にキーパーが立ってるなんて当たり前だろ?」

「て、てめえ、源田に何しやがった!?!」

「野暮なこと聞くなよ、アイツはもう真・帝国学園のゴールキーパーなだけだぜ。遠慮なく打てよ」

余裕たっぷりで涼しい顔をする不動に齒噛みしながらも、寺門は足を踏み出せなかった。

彼の援護に動こうと走っていた佐久間も、止まったまま動けなかった。

寺門が、佐久間が、ゴールの前に立つ源田と向かい合ったのはこれが初めてではない。

初めて彼と出会った時は敵同士だった。

帝国学園で背中を任せる仲間になつてからも、シュートの相手をして貰った回数は数え切れない。

ただ、自分達が対峙している相手が源田であると、頭ではわかつているのに信じられなかったのだ。

だって、ゴールで仁王立つ彼の姿は見慣れたものである筈なのに、決定的に違っていた。

離れたこの場からでも、彼が吐かれる息は、これ以上進めば吹き飛ばされる嵐のような強風のように感じて、意識が離せない。

筋肉は、ユニフォームの上からでも感じる程に、次の瞬間には破裂するのではないかと心配になるほど緊張し、山のような揺るぎない力強さで張り詰めている。

彼の両の足が踏みしめるゴールエリアは、踏み込めば帰れない森林のような不気味な空気が漂っている。

そして寺門——正確には、彼の足が抑えるボール——を見つめる瞳には、こちらを認識しているか怪しいほど虚ろなのに、触れたものを瞬く間に焼き尽くしてしまいそうな火があった。

寺門達が源田と仲間として共に過ごすなかで、臆気ながら感じていた不安。

源田の中にあつたその根源が、剥き出しになったかのようで。

それを刺激してはならないという自分自身の無意識の警告が、寺門と佐久間の体を縛っていた。

「なにボーツとしてんだヨオ！」

「っ、おい、待てッ！」

そして、追いついた比得が、棒立ちになつてしまつていた寺門からボールを奪い、源田へ駆ける。

呼び止める寺門の声を背にしながら、彼は不動の脇を抜けてシュート体勢に入った。

「一回ぶちのめされてまだ足りねえのなら、もういつぺんぶちのめして思い知らせてやるゼエ！」

比得自身も、帝国の二人程はつきりしたそれではないが、底知れない何かを感じとつてはいた。

だがその警告以上の、心の裡うちに渦巻く強迫観念に近い衝動が、彼の体を衝き動かしたのである。

一見、先日の勝利に基づく自信に満ちた強気な姿勢に見えるが、実態は真逆だ。

源田の佇まいが、その瞳が、比得の暗い過去トラウマを刺激した。

それは、忘れようがない敗北の記憶。

栄光の終わり。屈辱の始まり。

当時のことを、比得は昨日のことのように思い出せる。

小学生時代。比得呂介のサッカー人生は絶頂にあつた。

誰も彼のシュートを止められず、誰も彼の動きについていけない。自分に向く、畏怖や嫉妬の視線も心地がよかつた。

どんなに不満があろうと、彼らは結局自分の強さに敵わないのだから。

しかしある日、あまりにも呆気なく、比得はその絶頂から突き落とされた。

完敗だった。

もともと名前は知っていたものの、自分の敵ではないと侮っていた相手に、手も足も出さず負けた。

それまで打てば打つだけ点に変わっていたボールが、その日は一度もゴールネットを揺らすことがなかった。

ゴールに立つ番人の前に、完封されたのだ。

そこまでは、まだよかった。

負けたことは全くよくない。負けた時点で、比得の没落は決定的なものだ。

どのみち源田への逆恨みは起こっていた。

だがそれでも、これ程の憎悪と執着を宿すには至らなかつただろう。

比得が源田を蛇蠍の如く忌み嫌い、憎むようになった切っ掛けは、何てことのないことだった。

試合終了のホイッスルが鳴り、ショックで膝から崩れ落ちかけた比得はせめてもの反抗として、怒りを込めて源田を睨み付けた。

そして、チームメイト達の下に歩きだした源田と、目が合った。

個人的に関わりがあつたわけでも、試合前に何か因縁を付けていたわけでもない。

二人の間に起こつたのは、たったそれだけのこと。

しかしその数秒、視線の交わつた刹那が、比得に未だ消えない影を落としていたのである。

目は口ほどに物を言う。

それが偶然であつたことも手伝つたのか、比得は交錯した視線を通して、自身を下した男の飾り気のない心を明瞭に、実にクリアに感じ取れた。

彼の瞳に映っていたのは――

話に聞いていた程ではなかつたな、という落胆。

あんなに自信満々だったのに、という失望。

こんな試合ではまだまだ足りないという不満。そして、次に戦うまだ見ぬ相手への、どれだけ自分を高めてくれるのかという期待。

既に彼の意識は敗北者から外れており、次なる戦いに向いていた。決着が着いたので、もう相手への興味を失った。

実にあつさりとした切り替えだったが、それが何よりも深く、鋭く、痛烈に比得のプライドを傷付けた。

この男は、自分を負かしたことに何の感慨も覚えていない。眼中に入れていない。

彼にとって試合とは最も実戦に近い特訓であり、備えていたのはいずれ来る「本番」だ。

余程の相手でなければ、修練でいちいち勝ち負けに一喜一憂することなど無意味である。

つまり。

あの源田幸次郎という男からしてみれば、比得呂介は比得が見下す弱者達と大差がないのだと、気づかされたのだった。

だから、比得は比類なき憎悪と執念を燃やしたのだ。

源田への雪辱を果たして、完膚なきまでに粉碎されたプライドを取り戻すため。

また自分が「楽しく」サッカーをするために。

そしてこの真・帝国学園で待ち望んだその機会を得て、遂に屈辱を晴らし、栄光を取り戻した。

取り戻した、筈なのに――

源田の瞳には、エイリア石という卑劣な力を借りて自身を下した比得を前にしていながら、比得が源田に抱いたような憎悪や執着、怒り、卑怯者と罵る軽蔑すらも、映っていなかった。

眼中にない。

あの男はまた、自分を有象無象の「相手選手」の一人として認識している。

許せない。認められない。

何よりも、アレに自分が恐怖しているという現実が。

壊さねばならない。

自分がまた敗北を思い出さないために、あの男を今度こそ徹底的に、完全に打ち破らなければならぬ。

「もう、二度と負けねエエー！ 百烈ショット——」

その一心で、比得は浮かせたボールに足を打ち込む。

比得のキツクの乱れ打ちには、一発一発に未だかつてない力が込められていると、寺門はその必殺シュートの使い手の一人として感じ取った。

佐久間は、無意識に唾を呑み込んで喉を鳴らした。

爆弾が爆発するカウントダウンが目の前で行われているような緊迫感があった。

「——V2ウウウウ!!」

そして、両足での押し込みを最後に、ボールは蓄積された力を解放しながら空を走り出した。

真っ直ぐに迷いなく、ゴールとその前に立つ源田へ向かって飛んでいく。

今の比得が出せる、掛け値なしのフルパワーが込められたボールが源田の眼前に迫り——

限界までボールに蹴りを打ち込み続けた比得が、どきりと背中から着地した。

そしてすぐ、跳ねるように勢いよく飛び起き、シュートの行方を見て固まった。

攻防が終わるその瞬間まで誰も、身動き一つできなかった。

決着までに何秒かかったのかは、よくわからない。

ただ、あまり長くはなかつただろう。

放たれたボールはこの場の全員の視線を集めながら、開かれた源田の掌で完璧に抑え込まれていた。

ギョルギョルという耳障りな摩擦音を立てながらグローブの中で

暴れているが、勝ち目はない。

暴れ狂うボールを腕一本で受け止めていながら、源田の足が僅かほどもその場から動いていないからだ。

そして、その勝負は観戦者達の予測を裏切ることなく、呆気なく決着した。

「――ハ」

比得は膝から崩れ落ちた。

一欠片に至るまでが木っ端微塵に打ち砕かれたプライドと同様に。

膝立ち顔はゴールを向いていたが、シュートが死んだ瞬間から彼は源田を視ていない。

完全に心が折れてしまっていた。

意識が現実から離れていき、全てがどうでもいいものに成り下がる。

だから、おもむろ徐に源田が投げつけてきたボールが自分の顔に激突したことにも比得は何ら関心を抱かず、意識を手放した脱け殻に成り果てた。

鳴り響く、破裂音。

次いで、重いものが地面に落ちる音。

「――え？」

そんな間の抜けた声を出したのは、誰だったか。あるいは全員だったのか。

だが、声を上げたのが誰であったとしても、不動以外がこの状況を理解できていないことに変わりはない。

比得のシュートを源田が受け止めた。

源田が、受け止めたボールを投げ返した。

投げられたボールが顔面に激突し、比得が倒れた。

この短い時間で起こったのはたった三つの事柄だったが、帝国学園も真・帝国学園も例外なく、混乱しきっていた。

その中で、不動だけが煽るように笑う。

これは猛獣ショーだ。主催者は影山。司会者は不動。そして参加者はチームの者達。

ただし、参加者達は猛獣の檻の中に閉じ込められ、喰らわれる様を眺められる、という内容の最悪の見世物だが。

「おいおいどうしたあ？ 一本止められたくらいで諦めんなよ」

「ふ、不動！ なんだありやあ!? ひえ、比得の奴が……」

今の光景を見せられて完全に闘志が消え失せた弥谷が、顔を青くして不動に詰め寄った。

あんなもの、想定していなかった。

源田の投球はボール自体が当たった途端に耐えきれず破裂する程の威力だった。それを受けた比得の体は衝撃で少し浮き上がっていた。

シュートを止めるだけならばいざ知らず、なぜ源^{ゴールキーパー}田がこちらにあんな攻撃までしてくる——!?

「源田はボールを返したただけだろ。これはシュートを決めるゲームだぜ？ キーパーがいつまでも持つてるわけにはいかねえだろう」

「か、返したただけって……！ あんな強くっ」

「あいつは随分特訓してたからなあ、まだ力加減ができてねえんじやねえかあ？ こいつは予想外だったぜ！ シュートする時は気を付けろよ！」

「ハア!? ふざけんな！ それってつまり……」

不動の返答に弥谷が半狂乱になるが、そのやり取りを聞いていた殆どの者は、少し状況を理解できた。

つまり。

シュートを源田に止められたら、自分達もあの豪速球を投げつけられるということ。

「こんなのやってられるかっ。キャプテンの座なんかいらねえ、俺は降りるぞ！」

そう叫んだ真・帝国の一人と、それに同調した数人がスタジアムから艦内に繋がる扉へ駆け寄る。

駆け寄って開けようとするものの、彼らの意思に反して、扉は開いてくれない。

いつの間にか、内側から施錠されていた。

「なんで……」

「ゲームは日が暮れるまでつて言つたろ？ 途中退席なんて冷めることすんなよな！」

不動は新たに投げ込まれたボールに駆け寄り、それを源田へ蹴り飛ばした。

必殺技でないシュートは一瞬で源田の手に収まり、源田の視線がスタジアムの扉に群がる真・帝国イレブンに向く。

狙いを察知して何人かは離れたものの、現実の理解を拒み扉に固執する者も居る。

その獲物目掛けて、猛獣が牙を振りかざした。

思い切りボールを持つ腕を振りかぶり、握力で大きなサッカーボールを留めながら、発射する。

砲弾は逃げ遅れた者の腹を正確に捉え、腹を押さえてもがく芋虫に変貌させた。

ここでようやく、彼らは状況を正しく理解した。

確かにこれはゲームだ。ただし、参加者である自分達にはなす術のないワンサイドゲームなのだ。

そこまで全員が理解して、グラウンドは騒然となる。

「おいおい、そんな簡単に諦めるなよ。そうだ、皆でシュートを打てば、どれかは決まるかもしれねえなあ！」

不動の言葉に応じてスタジアムの上階、観客席に立っていた黒服がボールを更に二個投げ込む。

もはやあの守備を破るしかない、遮二無二ボールを入れようとすて立ち向かう者。

すっかり心が折れて逃げ惑う者。源田の変貌が信じられない佐久間達。

そしてそれらを相手に蹂躪する不動と源田。

グラウンドは、彼らの思惑と三つのボールが入り乱れる戦場と化した。

「不動……！」

郷院が、この状況の中心である不動に憤怒の形相で向かう。

「どうした郷院。ボールは他所だぜ？」

「てめえ、源田あいつに何しやがった……！」

「さあな。俺は関わっちゃいねえよ。俺だって総帥の全部を知ってるわけじゃねえ」

その剣幕は、彼の寡黙な性分を知る不動には少し意外なものだったが、やることは変わらない。

「それに、総帥に従ってエイリア石に手え染めてるお前が今更源田にどうこう言えるか？ 源田の奴だって心変わりくらいするだろうよ」「確かにな。だが、どんな心変わりをしたとしても、あいつがチームメイトに手を上げるわけねえだろうがッ！」

「へえ……お前、結構引きずってんだな。初めて本音が聞けた気がするぜ」

「っ!？」

「けど無駄だ。お前には何もできやしねえよ」

不意に横合いから飛来したボールが郷院の顎を揺らす。

彼は胸にしこりを抱えたまま、過去を悔いながら倒れることしかできなかつた。

一方、帝国学園の二人はそれぞれ源田の目を覚まさんと決死のシュートを放ち、呆気なく地に伏していた。

エイリア石の力を得たストライカーの渾身のシュートを容易く止める源田に、彼らのシュートが通じる道理はなかった。

投げ返されたボールももろに受けてしまい、起き上がることもできない。

いつの間にか静かになっていたグラウンドで、肉体的な痛みと精神的なショックに揺さぶられて、佐久間の頭はぐるぐると回る。

(俺は、また何もできないのか……)

こんなにも己の無力を思い知らされたのは、二度目だった。

一度目は世宇子中との戦い。

圧倒的な力を見せつけた彼らに対し、佐久間達帝国イレブンは確かに一矢報いることができた。

しかし病院で過ごす内に、暗い思いが彼の心の中で首をもたげようになったのだ。

最後に世宇子中から点をもぎ取ることができたのは、土壇場で駆けつけてくれた鬼道のお蔭だ。

一矢報いるチャンスがもたらされたのは、それまでの猛攻を真つ向から防ぎ続けた源田のお蔭だ。

では、自分はその場で何を成せたのか。

自分は弱く、二人との距離はあまりにも遠いという劣等感が、佐久間の心に巣食っていた。

病院を出てしばらくは鳴りを潜めていたが、ここに来てそれが燃え盛り始めてしまう。

ふと意識を外に向ければ、自分を見下ろす人影が居た。誰かかには興味は湧かなかつたが。

徐にその影が翳した妖しい紫色の光がぼやけた視界を埋めつくしたのに対し、眩しいな、と場違いな感想を佐久間は抱いて、暗闇に意識を沈めた。

そんな死屍累々といった有り様のグラウンドを見下ろす者が居た。

一人は影山零治。言わずとした元凶である。

『クッククック……影山よ。貴様の手駒は、なかなか良い実験台となつたわ』

そしてもう一人は、パソコン越しに悪意の滲んだ笑い声を届けてくる卑劣漢。

『まだまだ不完全だが、制御面は概ね満足できるデータが得られた。これでプログラムの開発も進む。兼ねてより聞いていたエイリア石も、“強化人間”を作る上では実に興味深い。そちらのデータも、例の雷門中との戦いで取って送れ』

「はっ……」

影山は恭しく、声の主に礼を取る。

彼の返答に満足した相手は会話を打ち切り、パソコンの画面が暗くなつたが、立て続けに影山の下に連絡が届く。

「フン。ジエミニストームが敗れた、真・帝国を動かせ、か。言われずともそのつもりだとも。さあ、鬼道。お前も我が下に……」
その掌で少年達を弄びながら、影山は不自然な程穏やかに笑った。

雷門は悪事を見逃さない

北海道でのジエミニストームとの決戦を制し、京都では『漫遊寺中のイタズラ小僧』木暮夕弥こぐれゆうやを仲間に加えた雷門イレブンを乗せるイナズマキヤラバンは今、愛媛への道を辿って爆走していた。

その理由は一つ、雷門イレブンの下へある映像が届けられたからだ。

『久しぶりだな、イナズマイレブンの諸君。私は貴様らに復讐するため、エイリアの力を授かって舞い戻ったぞ。私を止めなければ……四国は愛媛、我が新たな牙城『真・帝国学園』へ来るがいい。鬼道、お前には特別ゲストも用意している。歓迎するぞ。クツクツクツクツク……!』

その内容は雷門イレブン因縁の相手、影山からの宣戦布告。

彼の野望を再び打ち砕くため、雷門イレブンはその本拠地だという愛媛へ向かったのだった。

やがて目的地に近づいたところで昼食を兼ねた休憩時間となり、最寄りのコンビニの駐車場に停車したキャラバンからメンバーが降りていく。

「なー染岡。帝国学園って強かったか？」

真っ先に降りて買ったおにぎりを頬張りながら、アツヤが兄の隣に座る染岡に尋ねた。

もともと年上への敬意の類いはないようなものだったが、いよいよ北海道に居た頃のような『サン』付けもなくなった呼び方に染岡がなんともいえない顔をする。

「アツヤお前、いよいよ遠慮なくなったな……まあいいけどよ。そりや強かったさ。初めて戦った時は、皆手も足も出ずにボコボコにされたぜ」

「へへ、なっさけねー!」

「うっせ! ……だが俺達は、特訓に特訓を重ねて予選決勝でもう一度戦った。それでも負けちまったが、初めての時とは比べ物にならないくらい熱い勝負だったよ。そして俺達は全国でのリベンジをあいっつらと

約束したんだ」

「でも、帝国学園は世宇子中に負けてしまった……？」

「……ああ」

士郎に、染岡は重々しく頷いた。

「結局、俺達はまだ一度も帝国学園に勝ててねえ。でも次こそは勝つし、影山なんか操る真・帝国なんかにも負けねえ！ 今は、お前らも居るしな」

「うん、そうだね」

「へっ。俺に兄貴、それに……出る幕はねえけど染岡……も居りやあ敵は居ねえな」

染岡の信頼を語る言葉に士郎は微笑み、アツヤも満更でない風に返す。

「イプシロンの奴らも今度は絶対倒してやる！ 次は負けねえ！」

アツヤは目を闘志に燃やして意気込んだ。

雷門イレブンは北海道で、吹雪兄弟という新戦力の加入とメンバーの目覚ましい成長によってジェミニストームを相手に有利に戦いを進めていた。

これまで10点以上もの大差をつけられていた相手に、こちらが3点ものリードを奪って前半を終えたという快拳に雷門イレブンは皆特訓の成果を実感していたところへ、新たな脅威が襲来したのだ。

『もうよい、ジェミニストーム。これよりは我ら“イプシロン”が、雷門イレブンを破壊する！』

全力でかかって、なお押し負けていることに打ち拉がれていたジェミニストームは、現れた男に追放を言い渡され、狼狽える暇もなく姿を消し去られた。

そして、消えた彼らに代わってその男——デザームが率いるエイリア学園ファーストランクチーム“イプシロン”が、後半から雷門イレブンの前に立ちはだかったのである。

彼らの実力は、ジェミニストームを軽くあしらっていた吹雪兄弟でも目を見張るものだった。

イプシロンの面々はアツヤのことを徹底的にマークし、後半開始か

ら終了までボールに触れさせなかった。

もう一人のストライカーである染岡も的確なディフェンスでゴールへも辿り着かせて貰えない。

更に、デザームの巧みな指揮によって雷門のディフェンスは切り崩され、勝ち取った点を取り返されてしまった。

そうしてあつという間に試合を逆転させ、目の前にまで来ていた宇宙人からの初勝利を奪い去って、イpsilonは姿を消したのである。

この卓袱台返しに等しい逆転劇は2度も苦汁を飲まされたジエミニストームに反撃を決めて喜んでいた雷門イレブンはもちろん、吹雪兄弟にも衝撃をもたらした。

次いで、破壊活動を開始したイpsilonとの漫遊寺中での再戦。

そこではアツヤも「エターナルブリザード」をデザームに見舞ったが、彼の鉄壁の守りを破ることは叶わなかった。

ここまでエイリア学園との戦いで勝ちらしい勝ちを拾えていないというのは、チームの雰囲気にも影響を及ぼしている。

アツヤの場合は、対源田以来の敗北に対し激しく闘志を燃やしているが。

「どういうことですかっー!」

鬼道の声が、外から突然響いてきた。

思わず染岡達はキャラバンを降り、外に居た円堂達も彼の大声を聞きつけて何事かと思いついてきた。

声を辿ってみれば、鬼道はコンビニの陰で瞳子と何やら言い争っているようだった。

「あなたに伝える必要はないと判断したまでよ」

「しかし! 源田達が行方不明だったなんて……」

「鬼道、どうしたんだ?」

何やら尋常でない様子に、円堂が見ていられずに声をかけた。

鬼道は声をかけられて、自分が声を荒げていたことや周りに仲間が集まっていたことに初めて気づいたらしい。

普段広い視野で仲間達をサポートしてくれる彼が、それほど感情的になっていくことに、いよいよただ事ではないと円堂は確信を強め

た。

「行方不明って、源田達に何かあったのか？」

「……………」

言うべきか迷っていた様子だったが、鬼道は観念して口を開いた。

「さつき響木監督から連絡があつたんだが……源田と佐久間と寺門の3人が行方不明になっているらしいんだ」

「なんだって!？」

円堂はその言葉に目を丸くした。

円堂と共にフットボールフロンティアを戦ったメンバーは動揺を隠せない。

「そんな、一体どうして!？」

「わからん。佐久間と寺門は、病院から消えた源田を探していたそう
だ」

「つまり、源田はそれより前に消えてたってことか？」

「ああ。あいつは俺達が北海道に行く頃に、病院から居なくなつてしまつた、と」

「そんな……………」

「源田は退院間近だったが、それで脱走なんてするよなやつじゃない。何者か…………いや、影山が関わっている可能性は高いだろう」

「影山……………」

「待てよ。さつき聞こえた感じだと、監督はそれを知ってたんじゃないのか？」

先程聞こえていた会話の断片を踏まえながら、染岡が瞳子にぎろりと目を向けた。

染岡は吹雪達とは打ち解けたが、それはそれとして彼女が豪炎寺を追放したことには納得していない。

まだ瞳子への不信感が消えたわけではないのだ。

しかし、瞳子は染岡の言葉で集まった様々な感情の視線に対して、毅然とした態度で向き直った。

「…………ええ。私も、帝国学園の行方不明者のことは聞いていたわ」

「じゃあなんで黙ってたんだよ。俺達はまだしも、鬼道はあいつらの

仲間だぜ」

「こうなることがわかってたからよ」

瞳子は、染岡の厳しい目に表情一つ変えずに答えた。

「あなた達はこのことを伝えたとして、何ができるの？ エイリア学園との戦いで、私達は未だに勝利を掴めていないのよ。その様でそんなことまで知らせても彼らが帰ってくるわけではないし、あなた達がサッカーに集中できなくなるのが関の山よ」

「ぬう……けどよ」

「いい、染岡。監督の言う通りだ」

瞳子の言葉には染岡も言い返せない。

そんな彼の肩に手を置いて鬼道が諭した。

一番の当事者である彼に言われては、染岡も矛を収めざるを得ない。

「それに……あいつらを拐ったのが恐らく影山である以上、真・帝国を追えばあいつらを連れ戻すことができるかもしれん。やることは変わらない」

「そうだな。皆、キャラバンに戻ろう！一刻も早く、真・帝国学園を見つけて出すんだ」

円堂の号令で話は締められ、雷門イレブンは複雑な心情を燻らせながらもキャラバンに乗り込んでいった。

そして、雷門イレブンはついに目的地へやって来た。

陽光が遮られて薄暗い曇天。並ぶ倉庫の屋根に留まる鳥の群れ。霧が立ち込める海。

彼らが辿り着いた埠頭は重苦しく、不気味な雰囲気にも包まれていた。

「ここに真・帝国があるでやんすかあ？」

「なんにもないツスねえ……それにちよつと怖いツス」

「影山の送りつけてきた情報では、ここだと言っていたが……」

栗松と壁山のぼやきに異存を唱えようとする鬼道だったが、それら

しいものが見当たらないのは事実で、その口調は弱々しい。

「影山が嘘吐いたんじゃねえのか？」

「でも、わざわざ嘘吐いて俺達をここに来させる意味もよくわかんねえぜ？ 大会じゃねえんだから、不戦敗も何もねえしよ」

アツヤの言葉に染岡が意見を述べた。

影山が雷門イレブンを憎んでいるのは間違いない。

意図は読めないが、彼の目的がただ自分達を埠頭に誘うだけなんてことはないだろう。

雷門イレブンはわからないながらも周囲を警戒していたが、状況が変わるのにそう時間はかからなかった。

突然、海中から巨大な影が飛び出してきた。

それは思い切り体を海面に叩きつけて水飛沫を散らす。

「なっ……」

風丸はその異様な光景に、開いた口が塞がらない。

「潜水艦——!？」

「そうか、これが真・帝国学園……!」

彼らが威容に圧倒されている間に、潜水艦から舷梯げんていが下りてきた。

その根元、艦ふねの入口に立っていたのは、彼らに挑戦状を叩きつけた張本人。

「影山……」

「久しぶりだな、円堂。それに鬼道」

「影山ア——!」

姿を現した宿敵に、鬼道が思わず叫ぶ。

教え子のその姿を見て、何が可笑しいのか、影山は愉快そうに笑みを零す。

「ククク……来てくれて嬉しいぞ。再会を祝いたいところだが……」

影山がそう言葉を途切れさせ、雷門イレブンの後方へ視線を遣った。

彼らも視線を追って振り返ると、そこにはゴーグルとスキンヘッドの怪しげな男達が何人も立っていた。

「こいつら、エイリアの手下だ!」

「うう、挟み撃ちにされたってことじゃないかー!」

塔子が皆に警戒を促し、木暮がいち早く状況を理解して叫んだ。

仲間達もそれを聞いて身構えるが、男達は20を超す大人数。

対して、こちらは大人は女性の瞳子のみ。円堂達は優れたサッカー選手ではあるものの皆子供。

彼らが襲いかかってくればひとたまりもないだろう。

「くっ、影山……!」

こうして自分達を消す罠かと、鬼道が影山を睨む。

「……………」

当の影山はまだ何かを待っているようで、現れた男達にも興味が無さそうな佇まいであったが。

「雷門イレブン……排除する」

先頭に立っていた男が、呟くように後ろの男達に告げた。

それを聞いて壁山や目金、マネージャー達は怯え、瞳子は雷門イレブンの前に出て彼らを背に庇う。

男達が距離を詰め寄ってきて、その手が届く距離にまで近づこうとしたその時――

「――ぐあっ!」

飛んできた幾つかのサッカーボールが、男達の横つ面を捉えて吹き飛ばした。

男達は堪らず倒れ込むか、よろめいてふらつき足を止める。

「くう……だ、誰だ!」

男の一人が身を起こして、ボールが飛んできた方向へ誰すいか何した。

雷門イレブンも男達と同じ方へ顔を向けたが、霧の向こうに見えるた、ボールを放ったであろう人影達はおおよそ自分達と同年代に見えた。

不意に潮風が吹いてきて、霧を晴らしていく。

「なんだあ? 宇宙人ってのは、日本にサッカーで喧嘩売つといて俺達のことを知らねえのか?」

中学生離れした巨体の大男が、心底不思議そうに言った。

「ナメられたもんだな。上等だコラア!」

「宇宙人って世間知らずだねー」

隣にいたマスクの少年が青筋を立て、大男の肩に乗る小柄な少年は齒に衣着せない言葉を口にする。

「俺達を知らねえとは、程度が知れるぜエイリア学園……!」

「まあ辺見先輩のことは知らなくても仕方ないと思うツスけどねー」

「どういう意味だ成神イ!」

紫色の髪を後ろに撫で上げた少年が両手を使い、「やれやれ」と言わんばかりの仕草をする横でヘッドホンをした少年が味方の先輩を相手に毒を吐く。

後輩のあんまりな言葉にすかさず紫髪の少年が噛みついた。

「ククク……仕方がありませんねえ。皆さん、彼らに教えて差し上げなさい」

『なんでお前が仕切るんだ!?!』
先輩

眼鏡をした少年が薄笑いを浮かべながらそう言っつて、総スカンを食らった。

「……まあ、とにかく。知らねえつてんなら、奴らに教えてやろうぜ」
おかつぱ頭の少年がため息を吐きながらも音頭を取り、彼らは胸を張って自分達の正体を明らかにした。

『俺達は帝国学園サッカー部だ!!!』

誇らしげに声を張り上げたのは、サッカー界にて知らぬ者なき王者達。

名乗りを上げた彼らは各々サッカーボールを持ちながら、雷門イレブンとエイリアの手下達の間を駆け込んだ。

「お前ら、どうしてここに……!?!」

まさかの救援だったが、鬼道は思わず疑問を口にする。

その問いに答えたのはおかつぱ頭——万丈だった。

「源田が消え、佐久間と寺門まで消え、どうすりゃいいのかと思つたら、五条が帝国のネットワークから真・帝国学園のことを掴んでな」
「それで皆でここまで来て真・帝国について探つたところ、ついさつきお前らを見かけて、他の奴も集めながら追っかけてきたつて訳よ

！」

万丈の言葉を大野が得意気な顔で継ぎ、彼らが愛媛にやって来た一部始終を説明した。

「悪かったな。源田のこと、佐久間達のことを教えねえで。こうなるなら教えるべきだった」

「……いや、大丈夫だ。お前達も気を遣ってくれていたんだろう。それよりも体はいいのか、大野？」

謝罪に言葉をかける鬼道。

それに大野は気恥ずかしげに頬をかき、体調への問いかけには逞しい両腕を持ち上げて見せることで答えた。

「本当なら影山の奴を倒して、俺達で源田達を助けてえところだったが……」

「今年のフットボールフロンティアの王者はあなた方。花を持たせてあげましょう。ククク……」

「俺達がこいつらと遊んでる間に、源田達を連れ戻して来ちゃってくださいよお〜！」

「先輩達のことをお願いします、鬼道さん！」

他の者達が、口々に言っつて、男達に向き直る。

「どうした雷門イレブン。早く来たまえ。鬼道、お前には特別ゲストを用意しているのだ」

帝国イレブンに向いていた雷門イレブンに、ここまでのやり取りが見えていないかのように声をかけてくる影山。

それで、鬼道の心は決まった。

青いマントを翻し、鬼道は舷梯の前に立つ。

「いいのか、鬼道」

「……ああ。行くぞ、円堂。何度でもお前の野望を打ち砕いてやるぞ、影山！」

鬼道の言葉に影山は愉快そうに笑いながら、背を向けて艦内に戻っていった。

それを追って、雷門イレブンも潜水艦——真・帝国学園に乗り込んでいく。

「ガキどもが、邪魔を……！」

「邪魔はてめえらだぜ！ 百烈ショットオ！」

彼らを追おうとする男達には辺見がシュートを打ち込み、行く手を遮る。

男達は帝国イレブンの前に、蹴散らされていった。

そして影山を追って廊下を走り、ついにスタジアムまでやって来た雷門イレブン。

「……佐久間。寺門……」

その先頭を歩いていた鬼道の前には、別人のような雰囲気纏う佐久間と寺門が立っていた。

真・帝国は捨て身を躊躇わない

影山を倒すため、そして囚われた仲間達を救い出すため、真・帝国学園に乗り込んだ鬼道と雷門イレブンが見たのは、別人のように変わり果て、影山の側に立つ佐久間と寺門の姿だった。

「佐久間……寺門……」

「久しぶりだな、鬼道」

鬼道が、譫言うわごとのような細く弱々しい声音で彼らの名を呼んだ。

しかしその呼び掛けに答えた寺門の目に、仲間を見る温かさは宿っていないかった。

彼は元々細身な方だったが、今は頬も随分瘦こけて、一層不健康なイメージを抱かせる。

その様はさながらゾンビの如く。

ただ、その死人のような、幽鬼のような姿でも、こちらを見る瞳だけは燃え盛る執念でギラついていたのだった。

隣に居た佐久間も、その姿は鬼道の知るものとは程遠い。

整っていた髪は無造作に伸び、ボサボサだった。

彼のトレードマークだった眼帯には破れて穴が開き、血走った右目を曝け出していた。

その姿は、帝国で共にサッカーをしていた彼とはどうしても重ならない。

「ククク……元チームメイト同士、ゆっくり話すといい」

「おいおい、黙りこくってるんじゃないやねえよ鬼道クン。感動の再会だぜエ？」

影山はそう言い残して距離を取り、不動も彼らにかける言葉を探していた鬼道を煽り立てて影山の後を追った。

雷門イレブンの誰もが、その動きに意識を割くことはできず、彼らの目は佐久間達と向かい合う鬼道に集まっていた。

鬼道は変わり果てた仲間達の瞳を見つめて、口を開く。

「なぜだ2人とも……なぜ影山なんかに従う！」

「なぜか、だと？ そんなの決まってる」

「強さだよ。勝つための……もう、負けないための強さを得るためさ」
「強さだって!? それだけを求めた結果が、あの影山のチームじゃないか!」

「俺達は奴の支配と決別し、新しいサッカーを始めた筈だろう!」
聞いていて逆に恐ろしくなるほど落ち着いた風で、なんてことないように答えた佐久間と寺門に、鬼道と円堂は揃って言い募る。

影山はサッカーを己の私欲のために汚す悪党だ。

勝利のために手段を選ばないばかりか、自分の教え子である帝国イレブンを使つて潰す非情さを持ち、加えてその世宇子イレブンさえ、〃真・神のアクア〃という薬物で苦しめていた、人を人とも思わない邪知暴虐の男である。

佐久間達とて、それを身を以て知っている筈。

そう訴える2人だったが、佐久間と寺門の心にその言葉は届かない。
い。

「……鬼道、お前にはわからねエよ」

「雷門に行つて勝利を掴んだ、お前にはな」

「そんな言い方ないだろ! 鬼道はお前達のためにも、世宇子を倒そうつて……」

「……俺はあの日、お前達と一緒に戦えなかった。仲間を守れなかった自分を許せなかった。だから——」

「綺麗事を言うな、鬼道。どんなに言い繕つても……お前が求めたものもまた、強さだ」

「だが……だからって、あの影山についてもいいのか! 奴こそが、あの日の悲劇の元凶なんだぞ!」

「鬼道。お前には、あの時の俺達の絶望などわからないだろう。お前は、あの日だって世宇子に一矢報いることができたんだからな」

「何を言うんだ佐久間!」

鬼道が叫ぶ。

フットボールフロンティア全国大会の1回戦。影山の妨害により試合に遅れた鬼道は、後半残り僅かでスタジアムにたどり着き、仲間達との連携で圧倒的な力を誇った世宇子から1点をもぎ取った。

彼にしてみれば、あの得点は仲間達が諦めずに立っていてくれたから取れた、チームの絆による得点だ。

「確かに、俺達がお前が来るより先に倒れていたら、あの得点はなかった……だが、逆に言えば。お前が来なかつたら、そもそも俺達はいくら耐えたって無駄だったんだ」

「病院のベッドに居る時頭に浮かんだのは、手も足も出せずに蹂躪された悔しさばかりだった。あの思いは、お前には絶対にわからない」
「……………っ」

彼らの言葉が、決して心にもないことを言わされているわけではないことは鬼道には誰よりもはつきりと感じられた。

確かに、自分がスタジアムに辿り着くまでの間の、彼らと世宇子の戦いがどのようなものだったのか、鬼道は人伝ひとつてにしか知らない。

自分達の攻撃は何一つ通じず、圧倒的な力によって仲間達が倒れていく。そんな極限状態で、彼らが味わった屈辱がどれ程のものだったのかは、とても計り知れなかった。

思わず口を噤んだ鬼道だったが、徐に一步前に進み出て、頭を下げた。

「……すまなかった。お前達の気も知らず、自分だけの考えで行動してしまった。何度でも謝る。だから、影山に従うのだけは、やめてくれ……！」

「……遅いんだよ！」
「鬼道——」

鬼道の誠心誠意の謝罪が、彼らの心を覆う闇を晴らすことは叶わなかった。

佐久間は怒声と共に、脇に抱えていたボールを鬼道の腹部目掛けて蹴り飛ばした。

円堂が叫ぶが、鬼道を庇うには距離が離れていて間に合わない。鬼道自身も、頭を深々と下げている体勢から、佐久間の強力になったシュートをかわすことは不可能だった。

風を切るボールが鬼道に迫ったその時——

ゴン、という鈍い音が響いた。金属を強く蹴ったような重い反響音。

それを円堂達が耳にしたのとほぼ同時に、鬼道と佐久間の間を滑るように影が走った。

影はボールを鷲掴みながら2人の間を通り抜け、足でグラウンドを重く踏みしめて、勢いを殺しきる。

「っー」

「な……」

この場の誰もが、現れた闖入者に目を向ける。

獣のような低い姿勢で、右手と地面で挟んでボールを押しさえ込んでいたのは、鬼道達が救出に來た帝国の仲間。

佐久間と寺門。残る最後の一人だった。

「源田……!?!」

しかし、源田もまた鬼道達の知る姿ではなかった。

乱れた髪。虚ろな瞳。佐久間と寺門とはまた別の方向で危うさを感ずる姿だ。

「ククク……源田も気が逸はつて仕方がないようだな」

「佐久間ア。残念だが、お前の力を見せつけるのは試合でだ」

「……フン、言われなくても。敗北の屈辱は、この勝利で晴らしてみせる」

源田が飛び出してきた通路から、先程姿を消した影山と不動が揃って現れた。

佐久間と寺門は彼らの言葉に従い、源田に目もくれずにベンチへ向かおうとする。

当然、鬼道達がそれを黙って見ていられる筈がなかった。

「源田！……源田！」

「……………」

「どうしちゃったんだよ、源田！」

こちらに一瞥もせず立ち上がり、影山達に続く源田の背へ鬼道と円堂が必死に呼び掛けるが、全く反応がない。

「やめときな鬼道クン。そいつに何言っても届きやしねエよ」

「なんだと?」

「鬼道。雷門の諸君も、御影専農のことは覚えているだろう」

不動がその様子を嘲笑い、影山が源田の身に起こったことを語る。

「あれから更に進化させた技術の力で、奴は更なる強さを手に入れたのだよ」

「ヒヤハハハ! “サッカーサイボーグ” を超える “サッカーモンスター” になったってことだ!」

「源田が、そんなことを望んだというのか」

「……無論だとも」

白々しい顔で嘘を語る影山だが、雷門イレブンにその真偽を確かめる術はない。

源田を見て鬼道らが歯噛みする中、静観していた瞳子が口を開いた。

「影山零治。響木さんの名を騙って鬼道くんに源田くん達のことを伝えたのは貴方達ね」

「ほう。その通りだ、吉良瞳子監督」

「この俺、不動明王がメールを送ってやったのさ。先に少一だけ教えてやった方が、サプライズもインパクトが強くなるだろう?」

「……影山! 不動! もうこれ以上、お前らの好きにはさせない!」
彼らの明かす、どこまでも人の心を弄ぶ所業について円堂の堪忍袋の緒が切れる。

「鬼道、皆、やろう! 俺達のサッカーを見せて、佐久間達の間を覚まさせるんだ!」

「……ああ!」

鬼道、そして仲間達も頷く。

深い闇の中に落ちた彼らにもう言葉は届かない。

サッカーによって、言葉でない心を届かせるしかないのだと、円堂は悟っていた。

決意を固め、雷門イレブンは試合の準備に取りかかった。

そして雷門、真・帝国両チームが位置に着いた。

ベンチから円堂達を見守る木暮が、彼らの相対する真・帝国イレブンを見て身震いする。

「宇宙人も怖かったけど、あいつらもおっかねえ……」

イプシロンには相手を破壊する、その圧倒的な力への恐怖があった。

だが、今回の真・帝国イレブンに木暮が感じた怯えは、それとはまた別だ。

彼らの姿は、非常に精巧に作られたが故に却って不気味さを帯びる人形に似ていた。

「源田の野郎、なさけねえザマ見せやがって……」

いつも通り染岡とツートップを務めるアツヤが、ゴールに立つ源田を見つめる。

まさか、3年ぶりの再会がこんなことになるとは思ってもいなかった。

「ライバル」と認めた男の、あのような姿は見たくなかった。

必ずシュートを決めて、あの虚ろな目を叩き起こしてやると、彼は意志を強くした。

「ふふふ……鬼道、お前に俺の力を見せてやる……!」

「勝つ……俺が、点を取る……!」

真・帝国は、佐久間と寺門が両サイド、比得が中央に立つスリートツプの攻撃的な陣形だった。

佐久間と寺門は何やらぶつぶつと呟いていて、不安定な様子が見て取れる。

源田達を引き戻そうとする雷門イレブン。

彼らを下し、勝利を目指す真・帝国イレブン

それぞれの思いは、ホイッスルが吹き鳴らされると同時に激突する。

「へっ……」

不動が不敵に口角を持ち上げながらボールを蹴り、切り込んでいく。

そして彼のドリブルに並ぶように、佐久間が走り込んできた。

「見せてやれよ、佐久間！ お前の力を！」

「まさか……」

そう叫んで、不動は佐久間にボールを渡した。

ボールを受け取った佐久間は、ドリブルもせずとその場でゴールを見据える。

彼の様子に不穏なものを感じた鬼道が駆け寄ろうとするが、佐久間の行動には間に合わない。

指笛が、高らかに響く。

その音に応えて、体が血のように赤い5匹のペンギンが現れ、飛び立つ。

「やめろ、佐久間ア！」

「ふーっ……」

「それは禁断の技だアーツ！」

叫ぶ鬼道の声に構わず、真っ赤なペンギンが振り上げられた佐久間の右足に噛みついていく。

「……ッ！ 皇帝ペンギン——1号!!」

激痛によって生まれた微かな嗚咽を掻き消そうとするように雄叫びを上げて、佐久間はそのシュートを打ち放った。

ペンギンが打ち上げられたボールと共に飛行し、円堂へ迫った。

「くっ、ゴッドハンド・改！」

円堂はこれまでの戦いで進化した「ゴッドハンド」で迎え撃ったが、かつて帝国イレブンの「皇帝ペンギン2号」の前に敗れた時の焼き直しのように、ペンギンが突き刺さった光の掌は砕け散った。

「ぐああっ！」

そして、光の掌を破ってなお勢いの衰えないボールがそのまま円堂の腹に突き刺さり、彼ごとゴールに突っ込んだ。

真・帝国による開始早々の先制点が、電光掲示板に反映される。

「こんなシュート、初めてだ。身体中が、痛い……」

「あははははは！ 素晴らしいイ！」

不動1人が、シュートの成果に狂ったように手を叩き、笑う。

円堂を見ていた仲間達がその次に気づいたのは、シユートを打った佐久間自身が、異様な程苦しんでいることだった。

「どうだ、鬼道……俺の『皇帝ペンギン1号』は……?」

「2度と使うな! あれは禁断の技だぞ!」

脂汗を浮かべながら顔を向けた佐久間に、鬼道は怒鳴った。

影山零治考案の最悪のシユート、『皇帝ペンギン1号』。

威力の代償である身体への負担の凄まじさから封印された、『ビーストフアング』と並ぶ禁断の技。

1発放つだけでも恐るべき激痛が全身を襲い、3発目を放てば、2度とサッカーができなくなる程に体が傷つけられる。

「ククク……」

鬼道の手をはね除ける佐久間。

相手の選手生命まで懸かった戦いとなって、緊張に包まれたスタジアムを眺め、影山が笑った。

潜水艦が離れた埠頭では、情報を流して呼び寄せた帝国イレブンとエイリアのエージェント達の戦いも決着している。

この愉快的時間に邪魔が入ることはない。

眼下では、更に雷門を追い詰める策が実行されようとしていた。

「郷院! 帯屋!」

とにかく点を取り返そうと走った雷門イレブンだったが、不動の指示に動いた2人のディフェンスにボールを奪われてしまう。

再び真・帝国の攻撃となるが、既に士郎と土門が佐久間をマークしている状況でどう攻めてくるのかと鬼道が見極めようとしたその時、走り込んできている寺門に嫌な予感が頭を過つた。

(まさか——)

「ヒヤハハハ! おら寺門!」

「俺は、ストライカーだ……! 皇帝ペンギン——」

「寺門、お前まで……!?!」

「1号オオオオ!!」

その命まで燃やすような絶叫と共に、寺門までもが、禁断の技を打

ち放った。

不動の非道は止まらない

佐久間に続き、寺門が打ち放った「皇帝ペンギン1号」が円堂に迫る。

もう1度まともに受ければ、円堂自身も立っていられなくなる威力を持ったシュートは生半可な必殺技では止められない。

円堂を守ろうと、壁山と塔子がシュートの前に立ちはだかった。

「ザ・ウォール！」

「ザ・タワー！」

『——うああああー！』

二重の防壁は、破られはしたものの、確実にボールの勢いを削いでいる。

「マジン・ザ・ハンド！——くう……！」

今度は円堂も万全の守りで、なんとかペンギンの突撃を防ぎきった。

しかし、そこに達成感といったものはない。

「ぐ、うおおおおお……！」

全身を走る激痛に呻き、手足を痙攣させる寺門の姿を見ながら、そんなものが湧く筈もなかった。

同じシュートを放った佐久間も、先程から運動量以上の汗を掻いており、激しい消耗を全身で物語っている。

「もうやめろ2人とも！ 禁断の技を使えばどうなるか、お前達は知っている筈だろう！」

苦しむ仲間の姿を見ていられず、鬼道が必死に呼び掛ける。

だが、2人は彼の言葉に聞く耳を持たない。

「ふふっ……禁断の技か。そうやってこの技を封印させたのはお前だったな」

「だが、源田は『ビーストフアング』を使っているだろう」

「っ！」

佐久間達の指摘に、鬼道は帝国時代のとある出来事を思い出した。

切っ掛けは1年生時。試合形式の練習が行われたある日、源田が新

しい必殺技を披露したのだ。

それこそが『ビーストフアング』。

もともと『パワーシールド』の鉄壁の守りでチームのキーパーの中で頭一つ抜ける実力を見せていた彼が、新たに見せた必殺技。

何も知らなかった鬼道達は、ぎよつとして源田を見つめる上級生達の様子にも気付かず、彼の許へ駆け寄っていった。

必殺技について尋ねられて、源田はこう答えた。

『何日前、図書室で自習をしていた所に総帥が通りがかってな。この技の秘伝書を教えて貰ったんだ』

源田が語ったのは、影山に書庫へ連れられて必殺技の秘伝書というものを見せて貰ったこと。他の必殺技もあるようだったこと。

帝国は40年無敗を誇る強豪だ。

それまでの歴史、在籍していた選手達の必殺技なのだろうと当初の鬼道は思ったが、それが誤りであることにはすぐ気づかされることになった。

数週間後の練習で、書庫から秘伝書を見つけたという佐久間がその必殺技を披露し――

『あつ、ぐ、ガアアアア!!』

『皇帝ペンギン1号』の反動に襲われた。

キーパーを吹き飛ばした程の凄まじいシュートを放ちながら、放った本人が激痛に悶え苦しんでいるという異様な光景に、一年は誰もが呆気に取られた。

思いもしない事態。佐久間は保健室に運ばれ、練習は続行されたものの、皆とても集中などできなかつた。

その日、鬼道はすぐに総帥室へ駆け込んだ。

源田が『ビーストフアング』を使った頃からどことなく落ち着きのなかつた上級生達を問い詰め、書庫の秘伝書の必殺技の反動のことを知ったからだだった。

一発放つだけで全身が悲鳴を上げ、複数回使用すれば選手生命にすら危険を及ぼす恐るべき必殺技。

それが容易く手に取れるように書庫にあったこと、さらには源田に

直接教えまでしたこと。鬼道は厳しく直談判を行い、これらの必殺技の封印という約束を影山に取り付けた。

実際に「皇帝ペンギン1号」を使用して苦痛を味わった佐久間や、その様子を見た仲間達から封印に反対の声は上がらなかったが、源田の「ビーストフアング」はその封印の対象とはならなかった。

『源田は使っても問題ないのだろうか？　なぜ封印せねばならん』
源田の場合は身体に異常もなかったため、彼に関しては放置となった。

影山のこの主張には、鬼道も強く言えなかったのだ。

このまま源田だけが「禁断の技」を使えるという構図に、言語化できない不安を抱えながらも。

その不安とは「今」を指していたのかもしれないと、そんな思いがふと鬼道の脳裏を過った。

「あいつがああの必殺技を使ったのは……強いからだ。だから、勝てる」「じゃあ俺達は、勝つための役に立つ必殺技を知っていながら手をこまねいて、「全力を出した」と言っただけを慰め合うのか？」

「お前達……」

「そんなのはゴメンだ。あの時は身体の苦痛を理由にこれを封印したが……病院のベッドで味わった苦しみに比べれば、こんな代償は安すぎる」

「もう負けないためなら。あの思いを味わわなかったためなら！　俺達は何度だって「皇帝ペンギン1号」を打つぞ、鬼道……！」

そう言っただけ、足を引きずりながら2人は走り出した。

鬼道は歯を食い縛りながら、彼らの背を追って駆けることしかできなかった。

「オラオラアー！」

一方、円堂の止めたボールは雷門イレブンに運ばれ、アツヤの下へ渡った。

彼は凄まじい、雪風のような速さでグラウンドを駆け抜け、ゴールへ向かう。

真・帝国イレブンはそれを眺めるばかりで、殆ど動かないように見

えたが――

「弥谷！ 帯屋！」

不動の命令を受け、彼らは即座にアツヤへ向かって動き出した。

2人がかりで進路を塞いでくるが、そのような取って付けたような薄っぺらの守備でアツヤは止められない。

悠々と抜き去り、彼はゴール前の源田を視界に捉えた。

「帝国の事情は知らねえが、俺がやるのはこれだけだぜ！」

3年前の戦い以来の邂逅。その上、なにやら紆余曲折があったようだが、事情はなんであれ、自分と彼はこうして向かい合っている。

リベンジを誓った男を相手に、アツヤは渾身のシュートを用意する。

「喰らえ源田。エターナル――」

ボールに集まる雪風は、かつてとは比べ物にならないほど冷たく、鋭い。

「――ブリザード！」

放たれたシュートが、猛吹雪を吹き散らしながら真・帝国ゴールを襲いかかった。

「源田ア！ シュートだ！」

不動に名を呼ばれて、立ち尽くしていた源田がゆらりと動き出す。彼は「氣」が籠った両腕を振るい、黄金の獅子の盾を作り出した。

――キングシールド

躊躇なく出された源田最強の必殺技。

それに吹雪を纏ったシュートが激突し、しばしの拮抗の後、源田の手に収まっていた。

「っ！」

アツヤがその結果に目を見開く。

彼は3年前から劇的に成長した。既に全国屈指のストライカーと称されるに相応しい程に。

だが、それでもまだ、あの男の守りを破るには足りなかった。

「『キングシールド』……あいつが編み出した最強の必殺技だ」

鬼道がアツヤの背に、そう声をかけた。

「おい、あれも『禁断の技』だつて言うんじやねえだろうな？　あれは俺達との戦いでも使つてたじやねえか」

鬼道の浮かない声に、外れていくれと思いを多分に込めた染岡が口を挟む。

佐久間達にシュートを打たせないのはまだいいが、もし源田にシュートを打てなければ、既に点を取られた自分達ではますます厳しい戦いとなる。

それを危惧しての問いだったが、鬼道はそれに頷いた。

「あれは『禁断の技』から改良された必殺技で、反動がある。あいつのことだ。1度や2度なら佐久間達ほど深刻なダメージは負わないと思うが……病み上がりだ。不安が残る」

あの源田の虚ろな佇まいが、その不安を倍増させる。

もし彼が、こちらがシュートを打つ度にひたすら負担のある『キングシールド』を出してくる状態なら、世宇子戦のようになりかねない。

「ちい……軽はずみにシュートは打てねえつてことか」

「慎重に攻略法を見つけ出すぞ。いつもと違う、あの状態の隙を探り当てる」

鬼道がそう言ったのと同時に源田が、持っていたボールを投げた。

「つと、考える暇もねえな……アツヤ戻るぞ、ディフェンスだ！」

「っああー！」

歯を食い縛っていたアツヤは、染岡の声に従う。

これは試合だ。悔しがって俯いている時間はない。

再び攻勢に回った真・帝国イレブンは、2点目をもぎ取るべく雷門の守備に切り込んでいく。

その中でもシュートチャンスを狙って盛んに動くのは、佐久間と寺門だ。

「もう1点取ってやる！」

「俺に寄越せ！　次こそ決めてやる！」

彼らには、シュートを打たせないために士郎と一之瀬を中心とした

重点的なマークが着いている。

パスが回ったとしても、まず間違いなくボールを奪えるだろう。だが、お互いにチームは1人。どこかに人手を集中させれば、必ず守備に穴ができるものである。

「ハッハアー！ ど真ん中、がら空きだぜエー！」

佐久間と寺門の両サイドに人手を集中させた隙を狙い、手薄な中央を駆けて抜けて不動が高笑いした。

壁山と塔子が対応しようとするが、軽く抜き去られてしまう。

「比得！ 小鳥遊！」

不動の声に名を呼ばれた2人が、それまで消極的に見えた動きを一変させ、不動の下へ走った。

「……………」

「ヒッヒ！ ヒッヒッヒイ！」

覇気のない瞳で走る小鳥遊。狂ったように笑い声を上げ続ける比得。

それぞれボールを蹴る不動の前に入り、ゴールを前に縦に1列になった。

その陣形が出来上がったのを見計らって、不動が足を振りかぶる。

「いくぜ…………トリプルブースト！」

不動が前に蹴り飛ばしたボールを、小鳥遊が更に蹴って前へ進める。

最後に先頭の比得が思い切り蹴り飛ばし、3人分の力の籠ったシュートが円堂に迫った。

「スピニングカット！」

すかさず土門が衝撃波を飛ばしてシュートの行く手を遮るが、ボールは容易くそれを突き破り、ゴールを目指す。

「円堂！」

既に「皇帝ペンギン1号」を受けて消耗している彼を案じて、風丸が叫ぶ。

「うおおお！ ゴッドハンド・改」

円堂は光の掌でボールを受け止めるが、暴れ狂うボールの勢いは殺

しきれず、取り落としてしまう。

飛んだボールは風丸が確保し、痛みを堪える円堂を見てラインの外へ出した。

「……全然、ダメージが抜けない……」

身に染み込んだ先程のダメージは、まだ円堂を苛さいなんでいる。

その彼の様子を見て、デイフェンス陣はもうシュートを打たせまいと気を引き締めた。

それこそが不動の策であるのだとも知らずに。

まず佐久間と寺門の「皇帝ペンギン1号」が彼らの注意を引き付ける。

2人にシュートを打たせないため、雷門イレブンはマークを着けるが、今度はこうして不動達でゴールを狙う。

決まるのならそれでいいし、決まらなくても問題はない。

開始直後に「皇帝ペンギン1号」を受けた円堂に無理はさせまいと、雷門イレブンは過剰な緊張を抱えてプレーを始めるからだ。

そもそも、相手にシュートを打たせないなど、余程実力差がなければまず不可能だ。

しかし佐久間達の選手生命が懸かっている以上、彼らはそれをやるしかない。

2人の運命を背負う緊張は、雷門イレブンの神経を磨り減らしていることだろう。

この状況で不動達もオフENSEを行えば、彼らの処理能力が限界を迎える。

円堂に無理はさせまいと不動達にも対応しようとするれば、必ず佐久間達のマークに隙ができるのだ。

佐久間達が再びシュートを放てればしめたもの。

そうなればいよいよ、雷門イレブンのプレーは穴だらけになる、というのが不動の思惑である。

「佐久間！ 寺門！ 源田！ 3人とも目を覚ませ！ こんな、自らを傷つけるサッカーの果ての勝利に、なんの意味がある!?!」

鬼道が叫ぶが、佐久間と寺門は振り向かない。源田は、そもそも聞

こえているのかも怪しい様子だ。

「無駄無駄。あいつらは本気で勝利を求めてるんだよ。綺麗事じゃどうにもならねえほどに、飢えてるのさ」

紫色の石の首飾りを揺らしながら、ボールを持った不動が歩み寄ってきた。

そして、徐にボールを鬼道の下へ転がした。

「シュートしてみろよ」

「くっ……づああっ！」

挑発に、鬼道は渾身のシュートで応えたが、不動はそれを胸で軽くトラップする。

そして2人の激しい攻防が幕を開けた。

抜き去ろうとする不動に、追い続ける鬼道。

先へ行かせまいと立ちふさがる鬼道に、弾き飛ばしてでも進もうとする不動。

「なぜだ、なぜあいつらを引き込んだ!？」

「俺も負けるわけにはいかねえんだよ！」

熾烈なぶつかり合いに決着は着かず、互いの足が激突してボールを打ち上げたのを終焉に、前半終了のホイッスルが鳴った。

「チツ……」

それを聞いて舌打ちをした不動と、真・帝国イレブンがベンチへ向かっていった。

佐久間と寺門を除いたメンバーは、ホイッスルの音への機械的な反応が否めなかったが。

「……おい、源田ア！ ハーフタイムだ！」

不動が声をかけて、棒立ちしていた源田もようやくのそのそとベンチへ歩き出す。

その様子、一部始終を鬼道はゴグル越しに余さず観察していた。

少し遅れて鬼道が戻ってきた雷門ベンチは、騒然としていた。

傷つく佐久間達を見かねた木野の、試合の中止という提案にチーム内からいくつか賛同の意見も上がったところで、瞳子がその意見を切

り捨てたからだ。

「ここからは、勝つためのプレーをしなさい」

「でも監督、それじゃあ佐久間くんたちは……」

「私の使命はエイリア学園を倒すこと。この試合も、負けるわけにはいかないの」

「だが！ あいつらを見捨てるなんて……」

「——試合を続けよう」

「鬼道、いいのかよそれで!？」

染岡が反抗を示していた所に、他ならぬ鬼道が瞳子への同意を示した。

「ここで試合を中止すれば、この試合であいつらが『禁断の技』を使うことはない。だが、このままあいつらが完全に影山の支配下に置かれてしまえば、俺達も何もできない所で、あいつらは『禁断の技』を使うだろう。あいつらの目を覚まさせるには、この試合で勝つしかないんだ」

「鬼道……」

そう言いながらも、鬼道は悩んでいた。

前半中、こちらは防戦一方だった。

不動の指揮による猛攻で反撃のタイミングが中々掴めなかった上、相手のキーパーとして立つ源田は生半可な攻撃では破れない相手。

佐久間と寺門のマークにも人手を割かされている現状では、源田の守りを破る・或いは揺さぶる程の攻撃をする余裕もない。

あまりにも大きすぎるハンデは、天才ゲームメーカーの思考を鈍らせる錆となっていたのである。

「——なあ。源田の方は1、2回なら大丈夫なんだよな？」

そこへ、アツヤが自信ありげな様子で声をかけた。

「ああ。あまり楽観視はできないが……あいつは頑丈だからな」

「俺だって知ってらア。だから、1点なら取れるシュートに心当たりがある。俺と、兄貴ならな」

「なに？ 本当か!」

「うん。僕とアツヤ、2人の必殺技があるよ。アレなら源田くんの必

殺技を破れるかもしれない」

「俺達そんなの知らねえぞ?」

「2人で対源田くんにつけた必殺技だったんだよ。イプシロンの時は、使うタイミングがなかったけどね」

「それでまず1点は取ってやる。2点目の取り方は、アンタが考えてくれ。天才ゲームメーカーさんよ?」

アツヤの挑戦的な笑みに、ここまで深刻な面持ちだった鬼道が、フツと笑う。

頭の中を覆っていた責任感と罪悪感の黒い靄が、吹き抜けた雪風で晴れたようだった。

「……ああ。1点目は任せるぞ。俺も、真・帝国の弱点を探る」

守るも攻めるも塞がれていた状況。

しかし鬼道は、反撃の光明を、この暗雲の奥に見出だそうとしていた。

狼の牙は防げない

再びホイッスルが吹き鳴らされ、幕を開けた後半戦。

既に1点奪われている雷門は開始と同時に攻めかかろうとしたが、不動が指揮を取る真・帝国イレブンの守備陣を破ることは容易ではない。

後半開始早々に、中盤でボールを巡る激しい攻防が展開された。

「風丸！」

「ああ！」

「おんりよう・改——ッ!？」

その一進一退の攻防の末、持ち前の駿足で日柄ひからの「おんりよう」を振り切った風丸が、ボールを持って抜け出た。

彼は止めようとした小鳥遊も続けざまにかわして前進するが、不動も黙って見てはいない。

「ちつ……郷院！」

「……」

不動の命令で、自身の持ち場に立っていた巨漢が動き出す。

狙いは当然風丸。そのまま体当たりでも仕掛けそうな勢いで迫ってきた。

猛進する巨体の威圧感、ベンチで見えていた目金が思わず悲鳴をあげかける程のものだったが、生憎風丸には、この大男への恐怖などなかった。

確かに、この男には帝国の大野などの名DFにも匹敵する力があるのだろう。だが、数日前に自分達を圧倒したイプシロンと比較すると、一歩及ばない。

単純な実力というよりも、今一つ覇気がないように風丸には感じられるのだ。

「ホーントレイン・V2」

そう思われているのも知らずに突っ込んでいく郷院は、距離が縮んだのを見計らって姿勢を低くする。

風丸の腹を、掬い上げるように頭突きで突き上げるために。

その突進の勢いはさながら暴走列車、或いは鋭い角を備えた猛牛。だが、頭突きは風丸を捉えられずに空振ることになった。

「疾風ダツシユ！」

風丸は、郷院の突進のもう曲がれないタイミングを見極めて急加速し、脇をすり抜けていったのだ。

「……い・ああ、俺だって、強くなってるんだ……！」

思った通りに身体が動き、見事突破できたことを噛み締めながら、彼は染岡にパスをした。

「よし——うおっ、こいつ！」

「……」

ボールを受けた染岡は走ろうとするが、ボールを受けた瞬間から弥谷にマークされてしまう。

彼は郷院や壁山のようなパワーを持たない。風丸のような俊敏さもない。

しかし、マンマークという一点においては非常に高い技術を持っていた。

やっとゴールに近づいたのに、思うように進めない状況に歯噛みする染岡に、不動はニヤリと笑みを浮かべた。

彼は風丸に中盤を抜かれた時点で、始めから郷院で相手ボールを止めるつもりはなかった。

風丸自身ではなく、彼が自陣まで切り込んできてパスを出すFWを徹底的に止めるつもりだったのである。

染岡が弥谷に手こずっている間に郷院も戻ってきて、逆サイドのアツヤへのパスコースも塞がれた。

「時間の問題だな」

あとは、染岡が後方にボールを戻そうとするタイミングでパスをカットして、カウンターを決める。

そう考えて染岡が隙を見せるのを待っていた不動。

「くっ——オラァ！」

しかし、逆に染岡は前進した。厳密には、前方へ思い切りボールを

蹴り飛ばした。

弥谷に勝るパワーを発揮して、強引に染岡はボールを前に進めたのである。

「ハッ、ヤケになったか!？」

だが、それだけではただ奇抜なことをしただけで、無意味だと不動は笑う。

シュートにしては少々速すぎる。ロングシュートで源田を抜くことなどできはしない。

もちろん、あんなところに雷門の選手も居ないので、パスにもならない。

ボールの行く手に近い選手に、拾いに行くよう不動が指示を出そうとしたその時――

「いや、ドンピシャだぜ」

不敵に笑う染岡。不動が染岡の思惑に気付いたのは、自チームの守備をすり抜けていった2つの風を見てからだった。

「行くぜ兄貴!」

「ああ!」

「パスだと!? 奴らボールに追い付きやがった!」

それはアツヤと、前半はDFだった土郎だ。

彼は佐久間のマークについていたのだが、そちらは土門に任せ、一之瀬と入れ替わりでMFの位置まで上がってきていたのである。

アツヤとの必殺シュートで、真・帝国からゴールをもぎ取るために。

彼らは染岡のパスに追い付き、源田の守るゴールを捉える。

「今度こそだ。受けてみやがれ、源田ア!」

「これが、君に勝つために作った必殺技!」

アツヤと土郎が、浮かせたボールに掠めるような連続キックを入れる。

それはまるで、狼がその爪で獲物を引っ搔くようである。

『ウルフレジエンドだあ!!』

そしていくつものキックを入れられたボールを、2人は猛々しく吠

えながらシュートした。

牙を剥く狼のオーラを帯びながら、ボールはゴールを狙う。

「チツ……源田アー！」

シュートの秘める凄まじい威力を遠目にも察した不動が、阻止できなかったことへの苛立ちを舌打ちで露あらわにしながらか、怒鳴るように守護神の名を叫ぶ。

彼の声を受け、源田は前半同様に腕を打ち合わせて、キングシールドドを発動した。

構えられた黄金の獅子の盾に、巨大な狼が喰らいつく。

「破れやしねえよ！ 全国最強GKの出す、最強の必殺技だ！」

「うおおおおお!!」

嘲るような不動の声を、吼える吹雪兄弟が掻き消す。

揺るがない盾が輝きを増すが、相対するこの必殺技はかつての戦い以来、吹雪兄弟が開発し、仕上げてきたシュートだ。

その籠った想いが鋭さを増したのか、狼の牙は打ち込まれた楔のように盾に深々と突き刺さった。

「なっ……バカなっ！」

不動が、信じられないと目を見開いた。

だが、そう言っている間にも牙は次々に刺さり、盾に罅を広げている。

程なくして、獅子の盾は黄金の破片を撒き散らして砕け散ったのである。

源田の腕を弾き飛ばしてゴールネットに突き刺さったボールは、雷門の得点をこれ以上ないほど明確に証明していた。

「よっしゃあ！ やったな兄貴！」

「うん、練習の成果だ！」

「よくやったお前ら！」

拳を合わせた2人に駆け寄ったのは、先ほどパスを出した染岡。彼もまた、今の得点の立役者である。

「染岡くんも、ナイスパスだったよ！」

「よくあんなパス出せたよな」

「へっ、お前らの走りは今日まで何度も見てたからな。あれぐらい取れるだろうって思ったのさ」

「あいつら……」

鬼道が、そして雷門イレブンが、得点を喜び合うストライカーたちに頬を綻ばせる。

この得点は、ただ真・帝国に同点で並び立ったというだけでない。間違いなく、チームの士気を上げる1点だった。

不動は忌々しげに舌打ちしながら、活気を取り戻しだした雷門イレブンを睨み付けていた。

点を奪われた真・帝国が反撃を開始する。

雷門イレブンに点を取られた彼らだが、その動きは基本的に淡々としていて、静かだった。

しかし、喜びに沸いていた雷門イレブンはその姿に言い知れない不気味さを感じて、緊張感を持ちなおして臨む。

「……取られたなら、取り返すまでだ！」

不動は盛んに指示を飛ばし、雷門の守備を掻い潜ろうとした。

雷門の守備の人員は佐久間と寺門に集中している。またその隙を突くことでゴールを狙うか、或いはそれに対応しようとしてマークの緩んだ佐久間達に2発目の“皇帝ペンギン1号”を打たせるか。

どちらでも点を取れる、ないし士気を取り戻した相手に揺さぶりをかけることができる。

「こつちに寄越せえ！」

「いや、こつちだア！」

佐久間と寺門が、額に汗を滲ませながら怒鳴る。

その主張、迫力の強さに、雷門イレブンも意識を割かないわけにはいかない。

「へっ、隙だらけ——」

「いや、そうでもないぞー！」

再び切り込もうとした不動だが、それを鬼道が止める。

しかも、かなり積極的にボールを奪おうとして、プレッシャーをか

けるデイフェンスだった。

(くそー・鬱陶しい！)

ボールを取られては元も子もない。だが、このまま自分がいつまでも持つていても仕方がない。

パスできる相手を探すが、動いているのはガツチリとマークされた佐久間と寺門。

他のメンバーは、不動の指示を待っている。

「命令などしている暇がないだろう？」

「ツー！」

見透かすような鬼道の言葉に、不動が息を呑んだ。

「ずっと見ていてわかった。お前のチームは、自主性がない！ お前の指示を待ってばかりだ。そうだろう？」

鬼道の指摘は、真・帝国イレブンの核心を突いていた。

不動は反抗的なチームメイトに調教を行うことで、チームを掌握していた。

それにより、彼らは不動の指示に必ず従い、勝手な行動をしないようになっていた。

しかし、チームのほぼ全員が不動の思うように動く駒になった代わりに、彼らの自主性は失われていたのだ。

彼らは不動の指示がなければ、最低限、本当に基本的なことしかやろうとしない。

つまり、不動に指示を出す暇がないほどの負荷を与えれば、真・帝国イレブンはチームとしての機能が停止するのである。

「お前は司令塔がチームの支配者とも思っているんだろうが、それは違う。サッカーは自分のチーム1つでも11人も人間が動くスポーツだ。お前1人の手のひらの上に収まりなどしないぞ！」

「うるせえー！」

不動は怒鳴ると共に力づくで鬼道を抜き去ろうとするが、その動きは前半から状況の変わった今では少々迂闊だった。

「アイスグラウンド！」

(くそつ、そうだ、奴はDFだ！)

横合いから襲ってきた士郎に氷漬けにされて、不動はボールを奪われる。

彼はDFとしても高い力量を持っている。そして、今はMFの位置まで上がってきている。

それにより佐久間へのマークが少し手薄になった代わりに、ボールを奪いに来るタイミングが増えているのだ。

「こういうことだ。俺たちは、試合の全てを操るなんて大層な存在じゃない」

「アツヤ！」

「おう！ なんだ、2点目もいけそうだな！」

「くそ！ お前ら止めるオ！」

「キラースライド・改！」

「スピニングカット！」

真・帝国イレブンの守備陣が不動の号令で立ち塞がるも、吹雪兄弟のコンビネーションの前には、彼らの守りなどあってないようなものだった。

「オーロラドリブル！」

士郎の独特な足さばきはあるはずのないオーロラを映し出して見せ、DFたちの目を眩ました。

2人はぐんぐんと突き進み、あつという間にペナルティエリアに接近する。

「やったー！」

「このままもう1点取れば逆転です！」

ベンチで音無と目金が喜びの声を上げる。

この得点で試合が終わるわけではない。佐久間たちのこともあるので気は緩められないが、自分たちがリードを取れるというのは、この状況では非常に大きい。

「木暮くん？ どうしたの？」

「な、なんだよ……」

ただ、音無はふと、ベンチの端に居る木暮の様子が気になった。

彼は試合開始時から様子が変わっていない。まるで、まだ何かに怯

えているかのように。

「大丈夫よ！ お兄ちゃんたちがこのまま、真・帝国なんてやつつけて、佐久間さんたちも助けちゃうんだから！」

「違うよ、別にあいつらは怖くない」

元気付けようとした音無の言葉を、木暮は弱々しく否定する。

不動、比得、郷院。正直に言えば佐久間に寺門も。彼らも確かに恐ろしくはある。

「けど、一番怖いのは……アイツだ」

音無たちは気付いているのだろうか。

ゴール前に立つあの男は先ほどの失点以降、ボールを、一度も目を離さずに凝視し続けていることに。

「いくぜ、ウルフ——」

「アツヤー！」

シュート体勢に入り、浮かせたボールにキックを入れようとしたアツヤは咄嗟に身体を止めた。

切羽詰まったような兄の制止があつたからではない。

「グウウウアアアアア!!!」

その呼び掛けを掻き消すほどの咆哮と共に、圧倒的な脅威が眼前に迫ってきていたからだ。

「げん——」

ゴールの前に立っていたはずの男が、ペナルティエリアの中央辺りに居る自分の目の前にまで来ている。

それが何故なのか。何が起こったのかを理解する暇もなく。

源田幸次郎は、シュートを打たれるより先に、浮いたボールへ渾身の拳を打ち込んだ。

手負いの獣は止まらない

パンチングらしき一撃で吹き飛ばされたボールは、雷門のゴールを大きく飛び越えて海に消えていった。

その思わぬ事態に、新しいボールの準備のため試合が一度止められたが、ピッチの選手たちは試合の中断が伝わる前から時間が止まったような感覚だった。

「は、ハンパないでやんす……!」

「前に戦った時より怖いッス……もしかして、イプシロンよりも……」

「おい、弱気になるな!」

栗松と壁山が漏らした弱音を土門が叱りつけるが、同点で俄に活気づいていた雷門イレブンの勢いは、今の一瞬で完全に死んでしまっていた。

「源田……」

返事が返ってくるはずがないとわかっているけど、鬼道は彼の名を呼ばずにはいられなかった。

その姿はもはや、仲間の背後を預かる頼もしい守護神ではない。

今の彼は、ゴール周辺を縄張りにする獣。それも、手負い^{失点}で飛び切りに気性の荒くなった猛獣だ。

「鬼道くん、ごめん。決められなかった」

「いや、あれは仕方がない。お前たちは宣言通りに1点取ったのだから、あとは俺の仕事だ」

士郎が気落ちした顔で言うのにフォローしつつ、鬼道自身も気を取り直す。

感傷に浸っている暇はない。彼らを助けるためには、自分たちが彼らに勝たなければならぬのだから。

「……」

「おいアツヤ、1回止められたくらいで落ち込んでんじゃねえぞ!」

「ツアア!? 別に落ち込んでねえよ!」

染岡の言葉に顔を真っ赤にしたアツヤが食って掛かった。

珍しく染岡がからかう側に回っているストライカー2人のやり取

りを横目に、鬼道はあのゴールを攻略するべく、思考を巡らせる。

対する真・帝国イレブンの不動も、冷静さを取り戻してこれからの作戦を考え直していた。

カウンターは源田が防いだが、不動の指示がなければチームが機能停止するという、鬼道が見抜いた弱点は変わっていない。

それが見抜かれた以上、ここから雷門のゴールを奪うのには難航するだろう。

「……だが、勝つのは俺だ」

しかし、敗北の不安はない。不動には佐久間たちという、雷門イレブンに対して戦力的・精神的な楔となる人材が居る。

その優位が揺るぐことはあり得ないし、チームが使えないのならば自分の手、いや足で壊すまで。

勝利を疑わず、不動はほくそ笑んだ。

両チームの司令塔が策を練る束の間の間断は、新たなボールが用意されてきたことで終わりを告げた。

「いくぞ、皆！」

円堂のゴールキックでボールが飛び、雷門の攻撃で戦いが再開された。

受け取ったのは一之瀬。FWに届けるべくボールを運ぶ。

「サイクロン！」

「キラースライド・改！」

しかし、真・帝国イレブンも今までにない激しきでボールを奪おうとする。

なんとしてもボールを佐久間たちに渡し、“皇帝ペンギン1号”を打たせる腹積もりなのだ。

「取られるわけにはいかない！」

それに対し、一之瀬は“フィールドの魔術師”と謳われたテクニクを遺憾なく発揮して、ディフェンスをかわす。

雷門イレブンはそのまま真・帝国の陣地に切り込んでいき、パスを回してゴールに迫っていった。

「染岡！」

「おう！——ッ」

ペナルティエリアの近くでパスを受けた染岡が、唐突に寒気を感じて足を止めた。

その原因となった視線を辿れば、そこに居るのは源田である。

試合開始から前半までの、不動の山のような佇まいとは打って代わって、牙を剥き出した獣のように殺気だった様子だ。

(踏み込めば、やられる……!?)

とはいえ、このまま躊躇っていてボールを奪われるのが最悪のパターンである。

突破口を見出だすため、染岡は虎穴に足を踏み入れた。

「飛びかかって来ねえ？……いや」

アツヤの時のように一気に詰めてきたりはしなかったが、源田はボールを凝視しながら姿勢を低くした。

思い切り地面を蹴って飛び出すための準備だろう。

おそらく、こちらがシュート体勢に入るという隙を見せた瞬間に飛んでくる。

「……くそ、アツヤ！」

無念ではあるが、単独でこの状況を打破する術が染岡には思いつかなかった。

一先ず様子を見るべく、逆サイドのアツヤにパスをする。

だが、それも甘かった。

ペナルティエリア

縄張りに踏み込んだ時点で、彼は染岡の一挙手一投足に至るまでを観察していたのだ。

「オオオアアア！」

「なっ!？」

弾かれたようにゴールエリアから飛び出した源田が、染岡から離れたボールを掴んだ。

「よおし、源田ア！」

悪辣な笑みを浮かべた不動に呼ばれ、ボールを片手で握り締めた彼が目を向けたのは——

「ッ佐久間！」

まさかという思いと、間違いないという直感がない交ぜになった声で、鬼道は佐久間に叫ぶ。

だが、その声は数秒後に起こる出来事を止められない。

「——ぐうう!?!」

鬼道が駆け寄ろうとするよりも速く、キーパーが味方に投げるものとは思えない豪速球が、佐久間の腹を捉えていたのである。

腹に突き刺さったボールの勢いだけで、佐久間はペナルティエリアの内側にまで押し込まれた。

雷門イレブンはその光景に戦慄し、思わず動きを止めてしまう。もはやラフプレーなどといった次元を越えている凶行に、彼らの理解が追いつかなかったのだ。

ゆえに、ボールを受けて蹲うずくまっていた佐久間が、よろよろと立ち上がってシュート体勢に入るという動作に、反応が遅れてしまったことは責められないだろう。

「う……はは……皇帝、ペンギン……」

「ま、ま……」

「やめる佐久間アー!」

雷門イレブンが慌てて佐久間を止めようとするものの、間に合わない。

使わせてはならない『禁断の技』が、いま再びピッチで放たれた。

「1号!!」

鮮血を浴びたような5匹の赤い悪魔ペンギンが、凶弾と化したボールと共にゴールを目指す。

唯一それを見据えていた円堂が、覚悟を決めて力を解き放つ。

「マジン・ザ・ハンド!!」

その身体から現れた魔神が、大きく厚い掌でボールとペンギンたちを受け止めた。

ペンギンたちに掌を激しく啄まれ、鋭い痛みに襲われたが、円堂は一步も退かない。

「許せない……! こんな、仲間を傷つけるやり方になんて! 負けるわけには、いかないんだアー!」

魔神の掌は、円堂の叫びに呼応するように一回り大きくなり、シュートを力強く握り潰した。

止められたボールは、円堂の掌中に収まる。

しかしこの凶悪なシュートを、既に一度喰らった身体で再び止めたことは、代償を払わざるを得ない無茶であった。

「くう……」

「円堂……」

「キャプテン……」

ボールを握りしめたまま、右腕を震わせて膝を突いた彼に、仲間たちが駆け寄った。

限界だ。一度「皇帝ペンギン1号」をその身にまともに受けた身体では、止めたとはいえ再び同じ技を受ける負荷には耐えられなかったのだ。

下ろした腕が上げられない様子では、もう普通のシュートも受け止められるか怪しい。

「くそっ……」

「円堂、これ以上無茶するな！」

「でも風丸、俺たちが勝たないと源田たちを助けられない！　ここで逃げるわけにはいかないんだ！」

しかし風丸が退がるように言っても、円堂は聞き入れなかった。

それに、交代するにもいったい誰と代わるのか。雷門イレブンは、キーパーが出来る選手が円堂の他に居ない。

「円堂くん！　試合はまだ終わってないわよ、立ちなさい！」

チームが止まりかけたその時にベンチから飛んできたのは、瞳子の凜とした声だった。

「監督…… どうしてそんなことを！」

「キャプテンはもうボロボロです！」

木野や音無から抗議が飛ぶが、彼女は意に介さずにまっすぐ円堂を見ている。傷ついた円堂の姿が見えていないかのような、冷たい聞こえる言葉だった。

「円堂……」

「皆戻れ。監督の言う通りだ。まだ試合は終わってない」

しかし、今の円堂には「戦え」という声がないによりもありがたく感じられる。なぜなら、円堂の心身には今、かつてない闘志が漲っていたからだ。たとえ監督が身を案じて下がれと言ったとしても、絶対にその命令は聞かなかつただろうと、円堂は他人事のように思っていた。

佐久間たちの選手生命を人質に取った戦法の時点で、当然円堂には許しがたいものだったが、先の凶行は円堂の堪忍袋の緒を引きちぎって余りある所業だったのだ。

よりにもよって、仲間の信頼を受けてゴールを守るキーパーに。仲間を守るため、命を削って戦った男に。その手で仲間を傷つけさせた。

それは源田にとって、どれほど辛いことなのか。彼が正気に戻ったとき、どれだけ傷つくのか。

こんなものを見せられて、我が身かわいさに逃げ出すことなど出来るはずがない。必ず勝って、あのチームから源田を助け出さなければならぬ。

そんな固い決意が、限界に達した円堂の身体を動かしていた。

「……わかった」

「鬼道、あんたまで！ わかつてるんだろ？ 円堂はもう限界だ！」

試合に戻ろうとする鬼道の背に、塔子が思わず叫ぶ。

「そんなことは俺にもわかるが、こういうときの円堂は梃子でも動かんぞ」

「だからって——」

「だから、次のシュートで決着をつける」

言い募る塔子に対し、鬼道はそう宣言した。その強い語氣に仲間たちも思わず息を呑む。

「染岡。アツヤ。お前たちが要だ」

「それはいいが……決着をつけるって、どうやってだ」

サッカーは基本的に、どれだけ点差がついたとしても、それで勝負が終わりとはならない。

実質的に勝敗が決定付けられるほどの点差があつたとしても、ホ
イツルが鳴るまではボールが奪い合われ、シュートも放たれる。

だが雷門イレブンは、真・帝国イレブンにもう一本もシュートを打
たせるわけにはいかなくなつた。

「単純なことだ。一発勝負……終了と同時にシュートを決めて、反撃
の余地を残さない。あいつらにシュートを打たせずに勝つには、これ
しかない」

「なるほど……」

「ロスタイムを加味しても、残り時間はあと僅か。その時間をフルに
使って、必ず点をもぎ取るんだ」

「つてことは、突破口は見えたんだな？」

「ああ。もちろんだ」

問いに深く頷いて答えた天才ゲームメーカーに、仲間たちも信頼を
預けて動き出す。

「いいか、時間まで絶対にボールを奪われるな。もう一発も、奴らに
シュートを打たせてはならない」

『おうっ！』

「さあ、いくぞ皆！ 絶対に勝つんだ！」

立ち上がった円堂は、思い切りボールを蹴った。

最後の攻防が、幕を開ける。

決着は誰も喜べない

円堂の身体が限界であることには、真・帝国イレブンを率いる不動も気付いていた。

雷門の守護神はもはや死に体。ノーマルシュート一発でも蹴り崩せる、倒壊寸前の防壁だと見抜いているために、真・帝国はなりふり構わない攻撃を仕掛けようとする。

「何がなんでも奪え！ シュートを打ちさえすりゃあ終わりだ!!」

「絶対に渡すな!!!」

しかし、鬼道の指揮による縦横無尽のパスワークは不動の指揮でも捉えきれない。

「キラースライド・改！」

「イリニュージョンボール！」

「スピニングカット！」

「疾風ダツシユ！」

「ホーントレイン」

「オーロラドリブル！」

この攻防が勝負の行方を決定付けると双方が理解しているボールの争奪戦は、互いに全てを出し切るような必殺技の応酬となった。紙一重、間一髪の瞬間が頻発する熾烈な戦いだったが、タイムアップが刻々と迫り来る中でも、今のところボールは一度も雷門イレブンの足から離れていない。

「よこ、せえー！」

食らいつくように飛びかかったのは佐久間だった。しかし既に「禁断の技」を二度放ち、更に源田の砲弾パズを受けている身体でのプレーには帝国の選手としての精彩など欠片もない。油断なくかわされる。彼もまた限界なのだ。

「もう少し……いー！」

しかし、そうして佐久間をかわしたアツヤも鬼気迫る雰囲気醸し出していた。今の彼は佐久間の命運だけでなく、背後の円堂の命運まで背負っているためだ。その緊張はこれまでのサッカー人生で感じ

たことがなく、とても言い表しきれないものだった。

延々とボールを狙われて追われ続ける、という構図も相当に神経を削る。ここまで激戦を繰り広げてきた末のラストスパートとしては、非常にハードな状況でありながら、ボールを守り抜いているのは両者の想いの差か。

刻一刻と、残り時間は減っていく。

「ボールを渡しやがれエ!!」

だが、想いの強さのみで言うのであれば、真・帝国イレブンにはまだそれを激しく燃やす男が居た。

「皇帝ペンギン1号」を打ったのがまだ一発だけのため、佐久間よりは消耗が少なかった寺門である。

一発だけと言っても「禁断の技」を放つ代償に味わっている苦痛と消耗は生半可なものではない筈だが、まさに執念が彼を突き動かしていた。

「うおおおお!!」

(この……振り切れねえ……!)

時間が経ってタイムリミットが迫る毎に、アツヤに食らいつく寺門の動きはだんだんとキレが上がって来ているように思えた。

それまでパフォーマンスを落としていた原因だった痛みと疲労を忘れ去ってしまう程に、寺門の勝利への執着は強いのか。佐久間と寺門を駆り立てる、もはや狂気のそれは、アツヤには理解できなかった。彼とて、勝負ごととなれば勝ちたいという想いはある。むしろ人一倍負けず嫌いな部類だ。

しかしそれにも当然、限度というものはある。

自らの選手生命を犠牲にしてまでたった一度の勝利に固執する行為など、その代表例と言えるだろう。

「なんで……なんでそんなになつてまで戦うんだよ、お前!」

いまにも倒れそうな顔色をしながら執拗に追い縋ってくる寺門を見ていられず、アツヤはずっと胸の内にあつた思いを叫んだ。

「なんだと……?」

寺門はその叫びに、意味がわからないという風に唸ったが、アツヤ

は構わず捲し立てるように言葉を重ねる。

「源田のやつに、佐久間がぶつ飛ばされたのを見たろ！ 鬼道がやめろって何度も言ってるのを聞いているだろ！ お前が仲間の声を振り切って、死ぬ目に合って、なんでまだ戦うんだよ！ 二度とサツカーができなくなるんだぞ?!」

「それがどうしたってんだ!!」

しかしそれら全てを、寺門は些事だと吠えて一蹴した。

その勢いに気圧されたアツヤの、意識の一瞬の空白を隙と見て、寺門は思い切りボールへと足を伸ばす。

「くっ、うおお……!」

いくら名門帝国学園のエースとはいえ、その細い身体からは考えられない膂力。

何かなんでもボールは奪われまいと、ボールにかかる寺門の力に対し、アツヤも全力で押し返した。

さながら、ボールを賭けたストライカー同士による鏖戦り合いだ。

「どうした、こんなもんかア?!」

「この……!」

寺門の胸元から漏れる光が強くなるにつれて、両者の力の天秤は傾いていく。

「いいか一年坊。ストライカー^{俺たち}は、どんなときでもシュートを決めなきゃならねえ！ キーパーが守りの最後の砦なら、エースこそが攻撃の要!」

加速度的に寺門の正気は失われ、代わりに剥き出しの本能の叫びが吹き出してアツヤに叩きつけられる。

それは彼の、エースストライカーとしての矜持。

「たとえ他の誰がシュートを止められたとしても、エースだけは点をもぎ取らなきゃいけねえんだ!」

「そのために、仲間の声を聞き捨てんのかよ!」

「点が取れなきゃあ……ねえんだよツ！ 俺がアイツに背中を預ける、資格がよオ!」

「寺門……!」

彼は既に目の前すらも見失っており、放つ言葉はアツヤとの問答ではなく自身の叫びへと変わっていた。

その叫びに呼応するように寺門の力がより一層増した瞬間、拮抗していた天秤が傾いた。

「スピニングカット——」

（エースの、資格——）

「——改!!」

ぶつかり合いの末に寺門は気を纏わせた足を振り抜き、アツヤごとボールを弾き飛ばした。

「スピニングカット」は本来、足の気を衝撃波にして放つことでボールを奪い取る必殺技だが、その力を直にボールに打ち込んだために、普通の使い方では起こらない破壊力を生み出したのだ。

「ガツ……!」

吹き飛ばされ、背中から地面に叩きつけられたアツヤはその衝撃で肺から空気を絞り出されながら、自身と同じく飛んでいったボールの行方を視線で追った。

「くそオ……」

そして、目に映る光景に歯噛みする。

ボールを弾いたのは、明らかに力業ちからわざだった。その、普通ならば勢いのままにタツチラインを越えていたであろうボールに、あろうことか弾き飛ばした張本人の寺門がギリギリで追い付いていたのである。

ここ一番で、彼は吹雪兄弟や風丸にも比肩し得る脚力を発揮していた。

ボールを手に入れたストライカーのやることは、決まっている。

「見せてやるよ。エースストライカーってやつをなア!」

「ツ待て!」

（まずい……!）

雷門のゴール——円堂の下へと走り出そうとする寺門。

すぐさま立ち上がるとうするアツヤだが、それでは彼の背には追い付けない。寺門は髪束を振り乱しながらコートを駆ける。

その光景を前に、鬼道のゴーグルの中の瞳に焦りが浮かぶ。

残り時間は後僅か。彼としては、このタイミングで一気に攻勢をかける想定だったのだ。だというのに寺門にシュートを打たれては、試合はもちろん、寺門の身体も円堂の身体も無事では済まなくなる。なんとしても止めねばならない。

「行かせないよー！」

無論、アツヤとボールが弾き飛ばされた時点で、雷門イレブンもそのカバーに動いていた。

いち早く駆けつけた士郎が、ゴールへ向かおうとする寺門の行く手を塞ぐ。

「寺門！」

「！」

しかし、そこで不動の声が寺門の背にかかった。同時に、彼の指示で動いていた小鳥遊が寺門の横へ駆け込んでくる。

寺門は即座に彼女へとボールを回し、それに気を取られた士郎の脇を瞬く間にすり抜けて、再び返ってきたボールをドリブルする。

(ワンツー……！)

それはオフエンスの2人によるパス交換で敵の守備を突破する技術。テクニック

優れたプレイヤーはボールに特殊な回転をかけることにより、一人でパス交換を熟す必殺技を使うが、今回は寺門と小鳥遊による、まさにお手本のようなプレーだった。

そして、これまでの均衡が嘘のように、続く栗松や土門らも抜き去られていく。

「待て、やめろオー!!!」

抜かれたDFたちと共に寺門を追うアツヤが叫ぶ。

既にゴールを射程に収めた寺門は、シュート体勢に入っていた。

「よせ寺門ー！ー！——ぐっ……!?」

寺門へと一直線に走る鬼道に、不動が身体を割り込ませて邪魔をする。

「終わらせる……！」

円堂が覚悟を決めた表情で構えを取る。

「ウオラアアアア!!」

そして、今試合の最後のシュートが、寺門から放たれた。寺門の苦痛を糧とした真紅あかいのペンギン魔が、円堂目掛けて襲いかかる。

その時、円堂の前に、庇うように人影が割り込んだ。

「オラアアア!!」

「染岡!?!」

「染岡さん!」

染岡が円堂目掛けて飛ぶボールの進路に足を割り込ませ、ペンギン諸ともシュートを受け止めたのだ。

「ぐっ、くっ……づア……!」

しかし、彼に壁山や塔子のようなシュートブロックのできる必殺技はない。

必殺技もなく、足一本で“禁断の技”に立ち向かうなど、無謀以外のなにものでもなかった。

抵抗空しく染岡は撥ね飛ばされ、結局円堂はペンギンの嘴の餌食になる。

「士郎! アツアアアア!!」

「!」

彼を、DFとしたならば。

現実には、染岡のポジションはFWである。言うまでもないが、その役割は点を取ること。

彼は円堂を庇おうという単なる自己犠牲だけのためにやって来たのではない。

この状況で点をもぎ取るために、勝つために、全力で駆け戻って来たのだ。

「来い!!」

“皇帝ペンギン1号”の圧力に片足でジリジリと押されながら、染岡は吹雪兄弟に叫ぶ。

「——ああ！ アツヤ、行こう」

その意図を汲んだ士郎が、アツヤの背を叩いてから駆け出した。アツヤも、言われて意図を理解した。

しかし、理解したからこそすぐには飲み込めない。

「あ、アニキ！ いいのかよ、染岡！」

「いいからやれ！ お前は、雷門のストライカーなんだぞ！」

「……ッ！ ……うおおオオオオ!!」

それは、先輩そめおかから後輩アツヤへの檄だったのか。

アツヤは、葛藤の全てを振り切るように叫んで駆け出した。

染岡は彼らの駆けてくるタイミングに合わせ、シュートと真つ向からぶつかり合っていた足を、僅かに逸らした。

ボールの進路が、なるべく勢いを保ったまま上に曲がるように。

そして、ボールが昇った空中で吹雪兄弟が飛び掛かった。

軌道の逸れたボールならば、真正面から正反対に力を加えるよりも楽だ。さらに、二人のシュートならばそのまま空中で放つことができる。

(悪いな、源田……我慢しろよ……)

痛みを感じるどころかもはや感覚のない右足を今は考えないようにして、染岡はどこか場違いなことを思いながら、空中で猛る狼の姿をその目に焼き付ける。

「馬鹿な！ そんなの、ありえねえ！ くそ、くそ……!!」

不動がこれから起こることを予見して、しかし認められずに頭をかきむしる。

もはや、止められない。止めようがない。

「ウルフ——」

「あ、げん……」

「——レジェンドオオオ!!」

激痛の中で倒れ伏す寺門の謔言うわごとのような呟きを掻き消して、そのシュートは放たれた。

それは、染岡の邪魔で少々削がれているとはいえ、皇帝ペンギン

1号の威力をほぼ上乘せしたような一撃だった。殆どフィールドの端から端を縦断するという無茶を、通して余りある力があつた。

ボールに追従する、ペンギンを喰らつた巨狼の咆哮は、不動の命令で立ち塞がろうとする真・帝国イレブンの面々を十把一絡げに蹴散らしていく。

「チィ、役立たずどもがア！ 源田アアアア!! 絶対に止めろオ！」
蹴散らされるチームメイトへ罵声を飛ばしながら、不動は源田にこの試合何度目かの命令をする。

源田もまた機械的にその指示に従おうとして、不意に構えを止めた。

「――」
郷院が、その余りにも強大なシュートとゴールの間に、割り込んだからだ。

とはいえ、彼はDFであつたがただ間に合っただけ。必殺技など出す暇もない。

その巨体はなす術なくシュートに巻き込まれ、ボールと共にゴールへと向かい――

動きを止めた源田と共に、ゴールの中に叩き込まれた。

雷門の点が加算され、同時に鳴り響く試合終了のホイッスル。

しかしフィールド上に、この決着を喜べるものは誰も居なかつた。

死闘の爪痕は浅くない

試合終了と同時に――鳴らずとも彼らは踏み込んだだろうが――マネージャーたちと目金、雷門ベンチに居た者たちはフィールドに駆け込んでいった。

行く先は、あの凶悪な必殺シュートを足で受けた染岡の下だ。

既に円堂たちも集まっており、仰向けに倒れている彼の顔を無事か、無事かと覗き込む。

「……はっ、なんだお前ら。揃ってこっち見んじゃねえよ、恥ずかしい」

彼らに対し染岡は素っ気ない口調で応対するが、それが強がりなのは誰の目からも明らかだった。

「染岡、やっぱりオレたちも一緒に止めてりやあ……いや、そもそもオレがボールを取られなけりや……!」

「そんなこと言うなアツヤ。皆全力だったんだ。誰かのせいなんかじゃない!」

「円堂の言う通りだ、アツヤ。……いいシュートだった、ぜ……」
「オレ……オレは……染岡……!」

アツヤへの言葉を最後に目を閉じた染岡の姿にどよめいた選手たちの輪を割って、救急箱を手に提げた木野がやって来た。彼女は急いで取り出した湿布をひどい痣ができている染岡の右足に貼り付け、応急処置を進める。

鬼道はそれで染岡は一先ず任せてよいと判断し、源田の方へ向かうとした。

「皇帝ペンギン1号」を上乗せされた「ウルフレジエンド」を受け、更に郷院の巨体とゴールネットに挟み込まれたのだ。如何にタフな源田とはいえ、流石にただでは済まないだろうと考えて心配していた鬼道だったが、それがまだ甘い考えだったと悟る。

「……! 源田……!?!」

気を失っていたと思われていた源田が、動き出したのだ。

のしかかる郷院の巨体を押し退け、ユニフォームの袖や裾の内から

フィールドで叫ぶ鬼道の姿を、影山は艦橋から仏頂面で見下ろしていた。

否、鬼道だけでなく、試合の終了と同時に倒れた佐久間と寺門、糸の切れた人形のように立ち尽くす真・帝国イレブンの面々、フィールドの全て。

それらを眺めて、この男は静かに眉をひそめていた。

「……クソツ、どいつもこいつも使えねえ奴らだ。ねえ、影山総帥？」
屈辱と怒りで心を埋め尽くされ、その様子にまだ気づいていない不動は迂闊にも影山に話しかけてしまう。

影山は自分の機嫌が悪い時に、それを察せず声をかけてくる者へ怒りをぶつけることを自制する程寛容ではない。ましてや、傍らに居る少年こそがこの醜態の一端を担っていたのならばなおのこと。

ゆえに影山は、おとなげ大人気の欠片もなく不動にその負の感情を叩きつけることに決めた。

「使えないのはお前だ」

「なっ」

「私は一流の選手を集めろと言った。だが、お前が連れてきたのは二流ばかり。お前自身を含めてな」

「なんだと……！ 黙って聞いてりやあ、この俺が二流だと!？」

「何が違う？ お前が集めたチームを、お前が指揮して戦った結果だ。与えてやった玩具も、お前が隠しているつもりになっていた野心も、お前には過ぎた代物だったということがわからんか。まさか、これだけやって負けるとはな」

「てめえ！」

そして不動は、サッカープレイヤーとしての自分への愚弄を極めた雑言を浴びせられた。サングラス越しでも、向けられた視線の冷たさが不動には鋭く感じ取れる。なにせ彼が幼い頃から味わってきたものだ。

不動が身体を怒りに震わせて拳を握り締めるが、影山は彼の反応を待たずに椅子を稼働させ、上へ上へと昇っていった。

ハッチが開き、椅子に腰掛けたままに外へと姿を現した影山を出迎

えたのは、バタバタと風を巻き起こしながら艦に近づいてくるヘリコプターだった。

「見つけたぞ影山アー！ もう逃げられんぞ！」

開いているドアから身を乗り出して影山に怒鳴るのは、刑務所への移送中に脱走した彼を追いかけていた鬼瓦だ。

響木の連絡により、影山が脱走した現場だった北海道から文字通り飛んできたのである。

ここは海のと真ん中。本来ならば海に潜って監視の目を欺く潜水艦も、海上に出て見つかってしまっただけでは逃げ場のない棺桶と変わらない。

もはや影山にはなす術なく捕まる未来しかないように思えるが、この男は余裕の態度で、歯を見せる不敵な笑みを鬼瓦に向けた。それと同時に、閃光と激しい轟音が起こる。

潜水艦の——未だ円堂たち多くの人間を乗せている艦の——爆発である。影山の落ち着きようからして事故ではない。間違いなく意図的なものだ。

「自爆!? 正気か!?! くっ……全員、脱出しろー!」

思わず鬼瓦も怯むが、彼はすぐに優先順位を定め、まだフィールドに居る子どもたちに退避を呼びかけた。

「壁山、佐久間たちを！」

「はいッス！」

「俺は源田を……う重っ!?!」

土門は痛みと疲労で歩けもしないほど消耗した佐久間と寺門の二人を壁山に預け、自身は源田を背負おうとする。

しかし、完全に意識のない人間の身体の重さは土門には予想外で、耐えきれずに一緒に倒れかけてしまう。

「……………」

それを支えたのは、自身も先程の“ウルフレジエンド”を受けていた郷院だった。

「…………た、助かった…………」

「…………急ぐぞ。溺れ死ぬなんてゴメンだ」

他の真・帝国の者たちは茫然自失としているが、夏未たちが引つ張って避難させようとしている。幸いか、爆発も最初の一度だけでそれ以降は起こっていない。

どうにか順調に脱出が進んでいくのを見届けていた円堂だったが、そこへ音無が焦った様子で駆け寄ってきた。

「キャプテン！ お兄ちゃんが居ないんです！ さっきまでそこに居たのに……」

「鬼道が？ まさか……！」

音無の言葉で円堂は鬼道の行方に当たりをつけ、視線を上げた。

見上げた先には、艦橋に立つ影山へと詰め寄っている鬼道の姿があった。

「あいつらをあんな目に遭わせて満足か!？」

潮風に髪を靡かせる影山を、鬼道はゴーグル越しに睨み付けながら問い質す。

この試合、否、悲劇の一連の黒幕である影山に、怒りをぶつけずにはいられなかったのだ。

対する影山は鬼道の憤りに満ちた声にまるで怯まず、心外だとも言いたげに答えた。

「満足？ この私が、こんな出来損ないのチームでか？ 悪い冗談だ、鬼道！」

「貴様……」

「常に、どんな相手も完膚なきまでに叩き潰して勝利する最高のチーム！ その完璧な作品で以て、この世のサッカーを支配する！ それだけが私の理想、私の人生だ！ この、玉を石塊いしくれの山に無造作に放り込んだようなチームなど、作品と呼ぶのも憚はばかられる」

こともなげに言い放った言葉は、各々の動機がなんであれ曲がりなりに影山の下で戦った選手たちへの、許しがたい侮辱だ。

そう受け取って歯噛みした鬼道に向けて、影山は不意に腕を掲げ、指を指す。

「……これまでに私が手掛けた最高の作品を教えてやろう」

それは――

――鬼道、お前だ!!

その言葉は鬼道にはまるで、聞かないようにしていたことを宣告されたように感じられた。

だが、それを考える暇もなく彼の身体は影山から強制的に引き離された。

今にも沈みそうな艦に残る鬼道を、ヘリの梯子にぶら下がった鬼瓦が抱えたのである。

「影山ア――!」

再びハッチを開き、海中へ姿を消そうとする潜水艦に戻る影山に、鬼道の叫びはもう届かない。

真・帝国学園は鬼道と、既に脱出していた円堂たちの見ている前で、巨大な水柱を残して海に消えた。

埠頭では、鬼道たちの帰還を心待ちにしていた帝国イレブンや、瞳子の呼んでいた救急車、鬼瓦の引き連れてきた警察などが集まっていた。

「……すまない、鬼道、皆……俺たちの勇み足でこんなことになってしまった……」

目を覚ました佐久間は担架に寝かされながら、仲間たちを見つめて力ない声で謝った。

しかし、傷ついた身体で謝る彼を責める者などここにはいない。

「バカ野郎、悪いのは影山のやつだ! だから、そんなことも言うんじゃないやねえ……!」

「いいや、辺見。俺は、俺の行いを影山だけのせいにはできない!」

辺見が言葉をかけるが、それに佐久間はゆっくりと首を横に振って、鬼道を見た。

「鬼道。俺は、お前が羨ましかったんだ。もしかしたら、お前に背中を預けられる源田のことも。……だから、お前と同じ景色をこの目で見たかった。先へ行くお前に追いつこうと必死になって、そのために仲間を言い訳にして、結局傷つけたんだ。この身体じゃあ頭も下げられやしないが、本当にすまない」

「佐久間……」

「だがな。こんな形でも、ほんの一瞬でも、お前と同じ景色に手が届いたことが嬉しくもあるんだ。こんなどうしようもない俺を笑うか、鬼道」

「笑わないさ。身体を治したらまたサッカーしよう。今度は、肩を並べてな」

鬼道の言葉に佐久間は安らかに笑って頷き、眠るように目を閉じた。

「鬼道……」

「寺門、目が覚めたか」

そこで、隣の担架に乗っていた寺門が鬼道呼んだ。

真・帝国学園では普段よりも痩せ細っており、土気色をしていた寺門だったが、僅かに顔を動かす彼の顔色には幾分か血色が戻っていた。

「俺は……源田が心配だ」

「！」

寺門が言及したのは、未だ目を覚ましていない源田のことだった。

「あいつには、俺と佐久間とはまた違うことがされたようだ。それに……お前も見ただろう？」

寺門の言わんとするところは、鬼道もわかる。不動に命じられた源田の行ったあの暴挙のことだろう。

「ただの無茶なら、あいつはもう何度もやってきたが……」

そこまで言って寺門は言葉を濁した。

佐久間と寺門は真・帝国学園に居たこと、試合のことをおおよそ覚えていて。源田がその例に漏れないのならば、彼もまた自責の念に囚われてしまうのではないか、というのが寺門の懸念なのだろう。

「……確かにな。だが、俺はあいつを信じようと思う」

「鬼道」

「源田は必ず立ち上がる。俺たちが背を預ける守護神は、いつだってそうだったろう？ お前も信じる。帝国のエースとしてな」

「……そう、だな」

そのやり取りを最後に、佐久間と寺門は救急車の中へと運び込まれていく。

やっと一区切りかと思つた瞬間、埠頭に怒鳴り声が響いた。

「ふざけんじゃねエ！」

それは、怒りというよりも、怒るしかない現実への逃避のような声色だった。

鬼道が声の方を見ると、真・帝国イレブンの比得が、彼らを連れていこうとする警察を相手に暴れていた。

試合中も、終わった後も、先程まで魂の抜けた人形のようになっていた者たちだが、比得は今ようやく意識が現実を追いついてきたらしい。

「不動オ！ どこ行きやがった！ もう一回、もう一回だア！」

壊れたように“もう一回”と喚き立て、汗と湿気でピエロメイクが崩れた顔を振り乱す比得。

「こんな、こんなの認められるか！ てめえは勝つて言つたじゃねエか!? あんな思いままでして結局負けだなんて、認められるかよオ！」

その血走つた目が今度は、異様な姿に面食らっている雷門イレブンに向けられる。

「まだオレは負けてねエ！ 勝負しやがれエー！ー！」

比得は激情に身を任せ、足下に転がっていた空き缶を彼らに向けて蹴り飛ばした。

それを察知して動こうとする円堂だが、彼も佐久間たちに劣らず満身創痍だ。緊張が解けた今、満足に動ける身体ではなかった。

鬼道もまた走り出すが、距離からして間に合わない。

蹴られたのがボールではないために、軌道が集団からは逸れたもの

の、その先には一人海を向いて立ち尽くしていたアツヤが居た。

「アツヤ、危ない！」

士郎が叫ぶが、心ここにあらずといった風で反応が鈍い。顔を目掛けて飛んでくる空き缶を避けることはできなかった。

しかし、アツヤにそれが届くこともなかった。

「ッ!？」

「お前……」

郷院が、その巨体で空き缶を弾いたからだ。シユートならばいざ知らず、衝動的に蹴り飛ばされたガラクタでは彼の恵体には傷一つつかない。

「郷院、てめエ……っ!？」

「これ以上、みつともねえ真似すんな。……俺たちは負けたんだ」

郷院は、最後の抵抗を仮にも味方だった者に邪魔されて震える比得に語りかけながら近づいていき、腹部への一撃でその意識を刈り取った。

彼は倒れかかる比得を腕で受け止めながら、源田の乗る救急車の方を一度振り返る。

それから、他の真・帝国イレブンを引き連れて警察の下へと歩いていった。

こうして雷門中と真・帝国学園の戦いは、多数の怪我人と深い傷を生み出しながら終焉を迎えた。

神は借りを残さない

彼は、夢を見ていた。

『俺たちも鬼道と同じ意見です!』

『パワーシールドは衝撃波でできた壁、弱点は薄さだ!』

『たとえこの腕が壊れようとも……!』

『頼んだぞ』

『お前には勝利の喜びがあつたろうが、俺たちには敗北の屈辱しかなかったんだよ!』

『敗北は醜いぞ』

『俺たちは勝つ。どんな犠牲を払ってでもなア!』

『みんな、サッカーやろうぜー!』

何か違うような、見覚えがあるような。

出会ってからずっと己の底にあつた、長らく見失っていた、懐かしいもの。

熱狂。郷愁。憧憬。

それについて考えると、様々なものが交ざり合う。
何かを思い出しそうになつた時――

肩に手がかけられ、引き戻されるような感覚。

水底から急激に浮き上がるように、離れていく不思議な光景。

自分を引き戻した誰かの背中を最後に、なにもわからなくなった。

源田が目を覚まして最初に見たのは、見覚えのない天井だった。

ただし今回の場合、直近の類似例と違って身体の拘束はなく、天井も清潔感と安心感に満ち溢れたものであったが。

「おお、起きたか」

目を開けた彼に気づいて声をかけたのは響木だった。

丁度部屋に入ろうとしていたのだろう、半開きにした扉に手を掛けたままこちらを覗き込んでいる。

「響木監督……!?!」

「おいおい、無理に動こうとするな。他の奴らほどの傷はないが、体はかなり衰弱してるって話だぞ……」

源田の最後の記憶は真・帝国学園で終わっている。

彼に何があつたのか訊ねようとベッドから身を起こそうとする源田だったが、それには予想外の労力を必要とした。

原因は、身体に纏わりついていた異様な倦怠感である。

あるいは、休みなくハードなトレーニングを熟したかのような強烈な疲労感。全身の筋肉が、上体を持ち上げるといふ単純な動作にすら激しい拒否反応を示していたのだ。

そんな身体でも、小刻みに震えながら徐々に起き上がり始めている様には、響木も流石に言葉を詰まらせた。

「他の……?」

響木の困惑に気づかない源田は、たったいま聞いた言葉の気になった箇所に応答する。

その問いに対し、響木は深刻な面持ちを取り戻して問い返した。

「……お前の最後の記憶はどこだ?」

「それは真・帝国学園、で……!?!」

真・帝国学園というキーワードで、眠っていた脳が覚醒したのか。自分で思っている「最後の記憶」を口にした瞬間、源田の脳裏には

途切れていた先の記憶が断片的に駆け巡った。

覚えはない。しかし、これが実際にあった真実なのだと言わなければならない。しかし、これが実際にあった真実なのだと言わなければならない。しかし、これが実際にあった真実なのだと言わなければならない。

自らの手で仲間にボールを投げつけた光景も例外なく――

「……ッ！……ハアッ……ハアッ……」

「落ち着け、ゆっくり息をしろ」

乱れた呼吸で激しく上下する源田の胸に、響木は手を置いてそう言いかせる。

源田が、言う通りに何度も深呼吸を繰り返すこと数十秒。

呼吸は穏やかになったが、響木には目の前の少年が以前とは比べ物にならないほどに弱々しく映った。

俯いたままの源田が、響木へ問いかける。

「……あの試合から、どれくらい経ちましたか？」

「三日ってところだな」

「寺門と佐久間は？」

「無事だ、安心しろ。あいつらの方が、お前が目を覚まさないのを心配していたぞ。残念ながら、いますぐに会わせてやることはできませんが」

「そう、ですか……」

「ごつちも聞きたいことがあるが、まずは何か口に入れ……動けんか。いや、動くなよ。なにか消化にいいものを貰ってきてやる。お前が目を覚ましたことも、知らせなきゃあならんしな」

大人しく寝ているように念を押して、響木は部屋を出ていった。

そして戻ってきたとき。

ベッドからは、源田の姿が消えていた。

窓を開けられた窓辺は、外で降る雨が入って濡れている。

「あんの小僧……」

診察してもらうために連れてきた医師が青ざめ、その更に後ろにくっついて来ていた鬼瓦が即座に部下たちを呼び集める。

俄に騒然とし始める大人たちをよそに、雨で濡れたカーテンからは水滴がポタポタと滴したたっていた。

建物を出た源田は既に、大人たちの——鬼瓦の怒号の混じった——喧騒など聞こえないほどの距離を走っていた。

自分がどこに居るのか、どこへ向かおうとしているのか。

そんなことを思考から追い出し、雨の降り頻る森の中を、草と土を踏み締めて無我夢中で駆け抜けていた。

有り体に言えば、それは逃亡だ。

走る彼の頭の中では影山の言葉が、何度も何度も反響していた。

『勝利という一事のために、他人を容易く切り捨てられる人間。それがお前なのだ』

心に刺さって残り続けるその呪詛を振りほどこうと、源田は必死に足を動かしているのだ。

響木や鬼瓦たちは必ず、源田に真・帝国学園のこと、影山のことを尋ねようとするだろう。影山やエイリアを追わねばという心情は勿論のこと、源田という拐かされた被害者から事情を聞かないなどあり得まい。

彼らに、当人の話したくないことを根掘り葉掘り聞き出そうとする無神経さはない。

しかし真・帝国学園のことを話そうとすれば、否応なくあの影山の宣告にも触れなければならなくなるのは自明だ。

試合での凶行の記憶がフラッシュバックする今の己は、傷口に塩を塗り込むよりも痛烈であろうそれには、耐えられない。

記憶自体は臍気なものだというのに、そんな奇妙な確信が、石のように固く重い彼の身体を突き動かしたのである。

とにかく、一人になりたかった。

「——ハーツ、ハーツ……ゼエ……」

つい先ほどまで眠っていた身体はすぐに、苦しい呼吸、棒に変わった足で限界を主張した。

雨水で泥濘に変わっている地面。乱暴な足取りによってそこから飛び散る泥が、清潔感溢れる病人服を汚していく。

それにも構わず走ろうとして、突き出していた木の根に躓いてしま

う。

勢いよくつんのめって、当然受け身も取れず、ベシヤリと勢いよく泥水の海にダイブする形となった。

跳ねてきた泥の飛沫を浴びるのはわけが違う。

一発でほぼ全身が泥塗れまみになったのだが、彼はそんなことになど気づいてもいなかった。

体を地面に打った痛みも、泥と雨の汚れも気にならない。

再び走り出すために起き上がりとして、這いつくばった姿勢で動きが止まる。

前方の大きな樹木の根元に鎮座する、古びたボロボロのサッカーボールが目に留まったからだだった。

自分たち中学生の使うようなものより小さな、幼い子ども用のボールだ。

なぜそんなものが、建物が近いとはいえこんなところにあつたのか。

子どもが森の中にこれを持って入って、そのまま失くした、というのがすぐに思いつくありきたりな理由だろう。

だが、源田の脳内にあつたのはここにボールがある理由などではない。

『源田さん、シュート練の相手してくださいよ！』

『俺も俺も！ お願ひします！』

向こう見ず、周りも見ずで1人で居た自らに歩み寄った後輩たち。

『ククク……本当に精が出ますねえ、流星は帝国の誇るNo.1キーパー』

『むしろ、お前いつ休んでんだ？ ……いや、別に心配してるんじゃないぞ。キーパーがオーバーワークでぶっ倒れたなんて帝国の恥もないところ——おい五条なにニヤついてんだコラ』

『よう源田！ お前いつもこんな朝早くからトレーニングしてんだな。帝国守備の一員なんだ、俺も付き合うぜ』

当然のように共に歩いてくれた仲間たち。

『俺が大胆にチームを動かせるのは……後ろにお前が居るからだ、源田』

『見てろよ源田。俺は、お前に背中を預けるのに相応しいストライカーになつてやるぜ』

自分を信じ、託してくれた同志たち。

「くっ……………」

思わず彼らの姿が脳裏に浮かんで、歯を食い縛った。

歯そのものを噛み砕かんとばかりの圧力で、それを受け止めている奥歯が軋みを上げる。

なんて不様。

自分は影山の言葉に容易く揺さぶられて、彼らに裏切り同然のことを仕出かした。

よりにもよつて、己の手で、仲間を傷つけた。

「ウ…………ウオオオオオオオオオ…………！！」

空を覆う雲を引き裂かんとばかりに、獣のように天へ吠える。しかしそれは、常のような戦意を昂らせる咆哮ではない。

目の前のボールに懺悔するようなその慟哭は、全身を襲う風雨をものともせず、何度も何度も空へと放たれ続けた。

叫び続けて喉が哽れた頃。

降り注いでいた雨粒は示し合わせたように打ち止めとなり、その代わりとばかりに眩い陽光が地上へ向かつて差し込み始めた。

辺りが照らされて俄に明るくなるが、源田はただ一人、先の時間の中に置き去りにされたような姿で、呆然と空を見上げるばかり。

空とは違い、心は未だ晴れない。しかし不思議と、このボールの顔を離れる気も起きない。

煮え切らない淀んだ心境で、俯きそうになったそのとき。バサツ、という微かな音が耳に届いた。

雨が止んだのを見た小鳥が羽ばたいて飛び立ったのかと、源田は無感動に考えていたが、繰り返すその音はだんだん大きくなってくる。

小鳥が出せる羽音ではなかった。

彼の前に生まれた影もまた、小鳥とは違う。鷺や鷹でもない。否、そもそも羽音の主は鳥ではない。

地面に映るそのシルエツトは、翼を生やした人だった。

「——おまえは」

純白の翼を羽ばたかせながらゆっくりと、その少年は優雅に源田の前へと降り立った。

先ほどの雨に当たったのだろう。身に纏う装束ユニフォームは濡れ、揺れる長い金髪からは、水滴が滴り落ちている。

「——そんなに体を濡らして。風邪をひいてしまうよ」

自分自身も濡れているのがなんでもないように、少年は言った。

そして微笑んで、地べたに膝をついたままの源田へ手を伸ばした。

「アフロディ……!?!」

「また会えたね、源田くん」

微笑みは神々しく、晴れた青空のように輝いて。

差し伸べられた手は、女神のような慈愛に満ちて。

亜風炉照美は、かつて戦った男と再会した。

自らの罪と、恩義を精算するために。

源王は挫折に挫けない

雨上がりの空の下での、思いがけない再会。

突如目の前に現れたアフロデイ。

しかし源田は、彼から差し伸べられた手を取ろうとすることができないでいた。

手が伸ばせない。腕が上がらない。

それは警戒か。

アフロデイ率いる世宇子イレブンは源田自身を含めた帝国イレブンを蹂躪し、痛めつけた。

黒幕は彼らに『真・神のアクア』を与えた影山だが、実際に仲間たちを傷つけた張本人であるのは間違いないのだ。

源田が知っているのは、彼らが円堂たち雷門イレブんに敗北したところまで。

突然現れた仇敵に、身構えているのか。

「……ボクが、許せないかい？」

自分を見つめる源田の様子をそう捉えたアフロデイは、穏やかな声音を崩さないまま問いかけた。それに対する答えはない。

ただ静かにこちらを見つめる瞳へ、彼も真つ直ぐに視線を交わらせる。

「当然だね。ボクたちの行いは謝っても謝りきれない」

「違うー！」

しかし、否である。

源田がアフロデイを前にして抱いていたのは、警戒でも、憎しみや怒りなどという感情でもなかった。

それは、強い光が差したときに光を受けたものが生み出す濃い影のような、神聖なものを前にしたような後ろめたさ。

以前の試合では強大な力を振りかざしていた彼の、力への驕りと刺すような敵意とが混在した瞳に真つ向から向かい合えたのに、いまはそれらの消えた澄んだ瞳を直視することができなかった。

心身の健全さが、美しさに現れている。

あの戦いから心を入れ替え、真摯にサッカーと向き合い直してきたのだろう。

——それに比べ、己の体たらくは——

「俺は、お前に謝られるような男じゃない……」

逃げるように、視線をアフロデイの瞳から下げて弱々しく呟く源田。

自分もまた、まんまと影山の口車に乗せられ、過ちを犯した身。かつての彼らと同じ穴の貉むじなだった。

仲間たちならともかく、自らに謝罪を受け取る資格はないと。

アフロデイも、源田がここにいる経緯いきさつは知っている。

言わんとしていることは確かに伝わった。

「いいや。それは違うよ」

それでもアフロデイは、源田の手を取った。

まだ泥の乾ききつていない汚れた手を、躊躇なく掴んで引つ張り上げる。

そして、手を引かれた拍子に顔の上がった源田の、揺れる瞳と視線を交わらせて言う。

「人は変わることができる。もちろん、それは犯した過ちがなかったことになるわけではないけれど」

「逆もまた然りだ。キミが一度躓いてしまったからって、いままでの全てが消えるわけじゃない」

その姿はさながら、迷える人間を導く神のようだった。

「キミだって、もう一度立ち上げられる。だからいま、キミにこそ。ボクたちの生まれ変わった姿を見て欲しいんだ」

整った顔に浮かぶ微笑みと優しく握られた手。

かつての傲慢さと冷酷さではなく、人間らしい温かさのあるそれらをはね除けることはできなかった。

「さあ、戻ろう。皆、キミを心配してる」

アフロデイと、彼に連れられて戻った源田の2人をまず出迎えたのは、

「お前らすっかりずぶ濡れになりやがって！ 風邪引くぞ、2人ともまず身体洗ってこい!!」

という、鬼瓦の出会い頭の怒声だった。

謝罪を口にしようとした源田にも、アフロデイにも、有無を言わせない気迫であった。

源田は犬か何かのような勢いで洗われて泥汚れを落とされ、次いで雨で冷えた身体を温めると浴場へと突っ込まれた。

その浴場は、溝彫りの施された荘重な柱が並んでいて、どこかの神殿を思わせる構造だった。

「……そういえば、ここはどこなんだ？」

シャワーを浴びている最中、目覚めたときに抱き、混乱ですっかり失念していた疑問が思考の奥底から浮上した。

あまり意識していなかったが、これらの建物の装飾には確かな統一性がある。

とはいえ、こうしたデザインの病院に心当たりはない。

口について出た問いかけは、特段誰に向けたでもない小さな呟きだったが、それを拾う者がこの場には1人だけいた。

「ここがどこなのか、わかってなかったのかい？」

彼より先に浴場に居たアフロデイだ。

美しい長髪を纏めて優雅に湯船に浸かっている姿は、〃サッカー少年〃という概念の印象とは些か結び付け難い。

そんなアフロデイだが、源田の呟きに振り返って驚く姿には、以前とは違う人間らしさが垣間見える。

「いや、無理もないか。だけど、キミも知っている場所だよ。来るのは初めてだろうけどね」

アフロデイに言われて見て記憶を辿れば、戻ってくるときに見た外観、廊下、この浴場、それらとよく似た建物の姿が浮かび上がってくる。

それは、今年のフットボールフロンティア、その決勝戦の舞台と

なったスタジオム——

「もしや、ここは——」

「そう。ようこそ、世宇子^{ゼウス}中へ」

ここは、大会中は謎に包まれていたアフロデイたちの学校であった。

雷門イレブンと世宇子イレブンの決戦の後。

アフロデイたちは「真・神のアクア」の禁断症状で苦しんでいるところを鬼瓦たち警察に保護され、それ以降は治療に努めていた。

治療は順調に進み、アフロデイなど一部の者は早くも再びサッカーができるまでに回復していたものの、そこである一報が入る。

それは退院間近だった源田が病院から消えたという事件であった。次いで帝国イレブンのメンバーの2人も消えたことで、影山の暗躍を察知した鬼瓦はその魔の手が世宇子イレブンにも伸びる可能性を考慮し、彼らを1ヶ所に纏めるといふ保護と治療を兼ねた処置を執った。

そこで使われたのが、選手たちの「真・神のアクア」によるドーピングというスキヤンダルと、経営・運営に携わっていた人間たちの影山との後ろ暗い関係が明らかになったことで体制が崩壊し、事実上の機能停止に陥っていた世宇子中だった。

扱いとしては休校中で、他の生徒や職員も居らず人の出入りが少なく済むため警備が容易で、子どもたちには合宿のような感覚で過ごさせることができるだろうという判断である。

問題は、なぜそこに真・帝国で倒れた源田まで運ばれてきたのかだが——

「包み隠さずに言えば、人手不足だ」

身体を洗い終え、新しい病衣に身を包んだ源田の問いに、響木はそう答えた。

それというのも、エイリア学園の起こした問題はあまりにも多すぎるのだ。

各地での学校の破壊活動はもちろん、一時は総理が誘拐される事態。そのうえ、真・帝国の一件では影山という犯罪者との繋がりが発覚した。

彼らのもたらした被害への対応、再発防止のための総理の嚴重な護衛、そしてエイリアの黒幕の捜査、いずれにしても大規模な人員を投じなければならぬものだ。

「だが、鬼瓦の親父としてはお前にも警護の人員を付けておきたいとなつてな。病院で治療中の佐久間帝國のふたりと寺門の保護で一ヶ所。世宇子中の警備で一ヶ所。大人の都合としては、ここでさらに人を割く場所を増やすのは避けたかった」

そして、守る場所を増やせないならば、守るべきものを纏めておけばいい。

「なるほど、それで……」

「お前には世宇子こで療養してもらうことになつたわけだ。影山の誘拐せんれいがある以上、病院に戻すのも危ないだろうってな」

そこで響木は一度言葉を切り、源田に向き直つて言った。

「ここまででは大人の都合なわけだが……お前は大丈夫か？　一時とはいえここで、彼らと過ごすことに」

サングラス越しでも感じられる視線に籠っているものは明白だった。

アフロディたちと源田の関係は、言つてしまえば加害者と被害者である。

響木としては彼らがかつての行いを悔い改めていることに疑いはないが、そんなことは彼らに傷つけられた者にはなんの関係もないことだ。

「彼らを受け入れられんのなら、俺から話をつけて別の方法を——」
その響木の申し出に対して源田は、静かに首を横に振つた。

「……いいのか？」

「お心遣いありがとうございます。しかし俺は、彼らを許す、許さないと偉そうに決められる人間じゃありません」

「真・帝国は影山が裏で糸を引いていたんだ。全ての罪はやつにあ

る。お前が責任を背負い込むことじゃないだろう」

真・帝国学園で起こった悲劇の原因は、それらを仕組んだ影山の悪意にある。

元凶たるあの男に拐かされ、誑かされ、利用された立場である源田になんの責任もないと、響木は言葉を尽くそうとする。

それに、源田は再び首を横に振った。

なにもそうした罪の意識で、彼らに腫れ物のように関わるつもりではないと。

「ただ。アフロデイの、彼らのサッカーへの向き合い方を、俺も見たいんです。俺の原点を見つけるために。もう一度立ち上がるために」

響木の目の前の少年には、まだ弱々しさがあるものの、確かな意志が見て取れた。

「……そうか。目覚めてすぐにお前とアフロデイが対面したのには、俺たちとしては不安があった。が、却ってよかったのかもしれない」
自罰的になって塞ぎ込んだりしないのならばいい。

当人に強い意志があるのならば、何度だってサッカーは応えてくれる。

師の教えと、それを体現しているその孫である教え子を思いながら、響木は胸にあつた懸念を拭い去る。

くれぐれも無茶はせず、当分は安静にするように、という忠告を残して世宇子中を後にした。

それから数日後。

「さあ、みんな！　しっかり声を出して！」

「はいっ！」

「おうー！」

夕陽に照らされるグラウンドには、回復したメンバーがアフロデイに率いられ、特訓する世宇子イレブンの姿があった。

過ちを乗り越え、再起しようとするキャプテンのアフロデイを、ポセイドンやヘラといった3年生、デメテルなどの2年生の主力メンバーが盛り立てようとしていて、絶大な力を失ったものの、チームの

雰囲気は悪くない。

メニューの分の特訓を熟し、解散したメンバーが各々校舎に戻っていくのを、アフロディはグラウンド端のベンチに腰掛けて見届ける。

少しして、ベンチに人が歩いてくる。

アフロディは近づいてきたその人物に振り返ると、既に特訓をした疲れを見せない、やる気に満ちた凛々しい表情を向ける。

先の特訓は治療生活で落ちた体力を取り戻すための特訓。

ここからは、もつと強くなるための個人練習なのだ。

「今日も、よろしく頼むよ。源田くん」

「……ああ。任せておけ」

少年は心を偽れない

帝国学園のユニフォームに身を包んでゴールに立つ源田と、世宇子のユニフォームを纏ってペナルティアークに立つアフロディ。

両者の立ち姿はまさに、全国大会一回戦で衝撃を巻き起こした凄惨な試合の幕開けの再現だった。

ただし、その場で向かい合う選手たちの佇まいは、当時とは大きく違う。

「さあ、いくよ。ゴッド——」

ストライカーは、その背から広げた黄金の翼で空へと舞い上がった。

ともに浮かび上がったボールを中心に巻き起こる力で風が吹き荒れ、強まっていく光。

決勝戦の最後で見せた新たな必殺技、不完全だったそれは、以前より研ぎ澄まされていた。

ボールへ向けて足を振り上げるアフロディは、身体に満ち満ちる充足感で口角を上げる。

「来い——」

迎え撃つゴールキーパーは、上空からいまにも打ち下ろされそうなシュートを見上げながら、眉一つ動かさずに両腕を構える。

左右に生み出した気の塊。

それらは、拳を打ち合わせるのに連動して一つに合わさり、腕から注がれる更なる気によって獅子の盾へと成形される。

かつての戦いでは世宇子の猛攻に一步も引かなかった、帝国の絶対防壁だ。

「キングシールド！」

翳した両手を照準のようにしてその大盾を操り、天から迫ろうとする一撃に真っ向から向かい合う。

「——ブレイク!!」

そして大盾が構えられたのとほぼ同時に、アフロディの足がボールに振り下ろされた。

放たれたシュートは天から地に向けて、大気を滑るようになめらかに高度を下げて、ゴール、その前にある盾へと向かっていく。程なくして両者は激しく激突した。

その余波は、夕陽にも負けない眩い光となって2人を照らす。

「ぬっ」

だが、激突は長くは続かなかった。

盾に備わった獅子の装飾が欠け、そこから溢れた衝撃波が辺りを震わせる。

これを受けたボールは纏っていた光を失い、進路をゴールからコーナーエリアの方へと弾け飛んでいった。

「うーん……いけると思ったのだけど、まだ完成と呼べる出来にはならないね」

ゆつくりと地上へ降り立ちながら、アフロデイは憂いを帯びた表情で自らのシュートへの評価を口にする。

彼らの特訓というのは至ってシンプル。

アフロデイは決勝戦で見出した新たな必殺技「ゴッドブレイク」の完成、源田は「キングシールド」の進化を目指し、互いにそれらをぶつけ合うというものだった。

「だが、ボールへの力が安定して、確実に威力は増しているぞ」

顎に手を添えて改善点を思案するアフロデイに、飛んでいったボールを拾ってきながら源田は進歩は確かだと言う。

実際、彼のシュートを受けている源田からすれば、「ゴッドブレイク」の力は既に以前の試合のシュートに迫るものだと感じていた。

「うん。練習はおにぎり」……もう、一步一步の歩みを軽んずるつもりはないさ」

焦りを窘めるような言葉に、かつての自分が笑ったフレーズを用いながらアフロデイは余裕ある態度で応える。

「とはいえ、ボクは円堂くんたちの力になりに行くつもりだからね。テレビから見ただけでも、彼らの戦いは予断を許さない。どうしても気が急いでしまうよ」

先日も、雷門中とイプシロンの戦いが全国に放送されていた。

テレビに映されたイプシロン、そのチームを率いる男、デザームの力はサッカーをしている者ならば画面越しでも感じられる強さだった。

雷門イレブンは前半、吹雪兄弟、そして染岡の3人の連携によってついにデザームから得点し、他のメンバーもイプシロンに一進一退、互角の戦いを繰り広げていた。

しかし後半、染岡が不調により離脱。

染岡がいなくなったことによる手数減少、土郎の攻撃参加が生むカウンターのリスクの増大、それらが雷門の攻撃力を半減させてしまう。

土郎は迂闊に動けず、アツヤ1人ではデザームの守りを崩しきれず、その試合は引き分けという結果で幕を閉じた。

いまの雷門のオフセンスは染岡とアツヤの二枚看板だったのが、今回その片割れが欠けてしまった。

あくまでも土郎はDFである以上、これは変えようがない。

これは仲間である円堂たちの心情はもちろんのこと、チームの戦力としても大きな損失だ。

アフロデイはこの半減した雷門イレブンの攻撃力を補うべく、力を磨いているわけだ。

目覚めた直後からの3日間程はアフロデイたちの特訓を見ながら、ドリンクを用意するなどのサポートをしていた源田が、自身も特訓を始め、『ゴッドブレイク』の練習相手も務めるようになったのは彼にとって幸運だった。

源田という明確な壁への試行錯誤は、ただ1人でシユートを打ち続けるよりも得るものが多く、技の開発は加速度的に進んでいる。

「焦ることはない。円堂や鬼道、あいつらは勝ちを諦めたりしない」
「……そうだね」

だが、そのやり取りで感じられることがもう一つあった。

「キミも、そうだ」
「なに？」

「キミも、このまま燻っているような男じゃない。そうだろう？」

目の前の少年。

打つたびに力を増していく実感のあった自らの必殺技に対して、彼の必殺技には殆ど変化が起こっていないかった。

現在進行形で完成させようとしている技と、一度出来上がったいて、更なる進化を目指す技とでは単純な比較はできないだろうが、いまは技の使い手にこそその停滞の根幹が根差しているのだとアフロデイの直感は囁いていた。

はじめから、アフロデイには違和感があった。

源田はサポートから特訓に混じってきたころ、もう運動して大丈夫なのかと問われるのに、こう言っていた。

『身体を動かさねば、余計なことを考えてしまう』

サッカーを前にしては居ても立ってももられない、というのが彼や田堂のような人間なのだろう、とアフロデイは考えていた。

しかし、あの源田の言葉はその印象に対して大人しすぎる、やや消極的なように感じた。

それだけならば違和感はただの違和感で片付けられたかもしれないが、こうしてともに必殺技をぶつけ合う中で、違和感は確信へと変わっていった。

彼はサッカーに力を入れきれていない。

手を抜いているのではない。しかし、本気で臨むことへの踏ん切りがついていないような迷いだ。

その原因は身体ではない。

怪我がないのは確かで、はじめは体力を取り戻す基礎トレーニングに終了していたところからも、故障の線はない。

ならば、問題は肉そ体ではなく心の内にあるのだろう。

「……こんなことを言うのは凶々しいと思うけど。ボクはキミと、もう一度戦いたい」

源田の目に、アフロデイはサッカーへの真摯な光を宿した瞳を重ねる。

「『真・神のアクア』ではないボク自身の力で、キミと競い合いたい。ボクだけじゃダメだ。キミにも共にフィールドに来てくれなければ」

「アフロデイ……」

「だからどうか、キミの迷いを教えて欲しい。一体なにが、キミを以前のようにサッカーへ打ち込むのに躊躇わせる？」

その問いに源田は少しの逡巡の後、自嘲気味な苦笑を見せた。

「……つくづく自分が情けない。自ら言い出すこともできず、お前に問い質されてようやく腹が据わるとは」

抱えていたボールを置いて、源田はアフロデイは見つめ返す。

「少し長くなるが……聞いてくれるか？」

「ああ、もちろん」

夕陽に横顔を照らされながら、アフロデイは笑って頷いた。

ベンチに隣り合って腰かけて、源田はゆっくりと語り出した。

その内容は、響木たちにはさわりを話したただけだった真・帝国での影山との対話である。

「あの日、世宇子中おまえたちとこのまま戦えばタダじゃ済まないのはわかっていた」

警鐘を鳴らしていたのは、この世界で培つちかってきた選手としての直感か、或いはこれが運命だと告げる自らの魂に根付く錆びついた記憶か。

それでも自分は、既に怪我人も出ていた中で徹底抗戦を選択した。

「それを影山やっに、『勝利のために仲間を切り捨てた』と言われて俺は、その言葉を否定できなかつた」

鬼道が来る。

そのたった一点に賭けて、それまでに生まれるであろう——事実生まれた——傷つく仲間たちの可能性に見ないふりをした、と言つても過言ではない。

否、わかっていたはずだ。

鬼道が来るまでに何人も倒れることになる、可能性などという生易しい表現では済まない確定的な未来を。

「影山のやり方を肯定することはできん。だが俺は、やつをとやかく

「言えないくらい、勝利」に拘り、囚われていたように思える」

「……キミが？」

アフロデイは源田の述懐に、信じがたいという風に目を丸くした。かつて、正真正銘単なる無名校だった頃の世宇子にいたアフロデイにとつて、力と名声を恣にする帝国学園、とりわけその中でも個人としても不敗神話で名を売っていた源田は、まさしく全能の神のような男だった。

そして実際に関わりを持つても、周囲の期待、帝国の常勝の伝統、いずれにも潰されるような人間には思えない。

「……無失点神話だとか、帝国の伝統だとか、そんな外付けの名声なんかよりもっと根本的なものだ」

アフロデイに、源田は俯き加減で言う。

それは彼の語る通り、経歴や肩書の問題ではない。アフロデイはもちろん他の誰も知る由のない、彼が彼であるという魂の根源。

ずっとその胸の内に秘めてきた思いを、初めて言葉に変えて口に出す。

「俺は本来、ここにいるはずのなかった者だ」

それがどういう意味なのか、アフロデイにはさっぱりわからなかった。しかし、ぽつりぽつりと語り出した源田の声音の真剣さを感じ取り、問いを口の中で留める。

語られるそれはさながら独白、あるいは告解のようだった。

「それがどういうわけかここにいます。本来居るべき者を押し退けて」「俺はそれに意味が欲しくて、ここにいていい理由が欲しくて、最もわかりやすい成果、勝利を目指し始めたんだ」

「どんな強い敵も、絶対の運命もなにもかも跳ね退けた頂点。それを俺が掴めたのなら、出した結果こそが俺の証明になる。……許されるはずだと信じて」

「だが、いつしかそれは敗北への怖れになり、勝利への執着に転じていった」

「影山の言葉に俺は、そんな根源を突きつけられた」

「そして、まんまと俺はその望みのまま、仲間の手を上げる真似をした。それは許されざることだ。ここにはいられない。だから……」

「——サッカーをやる資格はないと?」

そこで、アフロディは少年の言葉を断ち切った。

「……先日キミに言ったことを、もう一度言おう。それは違うよ」

あの雨上がりの森での言葉を繰り返したアフロディは、ここまで聞いていた代わりとばかりに口を開く。

「キミはただ勝つことでしか自分を肯定できなかったのかい? そんなはずはない」

「なんだと?」

アフロディはベンチから立ち上がり、前屈みになって、目線を合わせて彼と向かい合う。

覗き込む瞳は夕陽のように赤く、そして心の奥まで照らし出そうとするような眼力を孕んでいた。

「あの日、力に溺れていたボクでも覚えているよ。ゴールを守り続けるキミの言葉、それに宿っていたプレッシャーを」

何度も何度も打ち込まれたシュートを止めていたボロボロの身体で、目の前の少年はそれでも、ゴールキーパーとしての矜持を以て立ち続けた。

甘言を一も二もなく払いのけ、叫んで見せた姿。

『俺は、帝国のGKだ。皆がそう呼ぶ限り、俺がキング・オブ・ゴールキーパーだ! あらゆる守護者達を差し置いてそう名乗る俺が、ゴールを捨てられるわけがないだろうが!!』

それは自分だけのための、独り善がりなものではなかったはずだ。「キミは確かに背負っていたよ。それがなんだったのか、まではボクが言うものじゃないと思うけどね」

「……………」

「それに、だけどね」

その言葉をアフロディは、答えのわかりきった問いを投げかけるような気恥ずかしさを帯びて、はにかむように微笑んで告げた。

「キミ、サッカー好きだろう?」

目を見開く少年に、アフロデイは笑みを深める。

「好きなんだ。どうしようもなく。だからやめられない。ボクだつて、あんなことをしたけれど、それでも戻ってきてしまった」

——キミもそうだろう?」

その言葉は、否定のしようがなかった。

否定してしまつては、かつてあつた想いを、感じた熱を、全てを否定することになる。

「だから、サッカーやろうよ」

「——ああ。そうだな。お前の言う通りだ」

逆らいようなない誘いである。

彼は差しのべられた手に手を重ね、強く握つて立ち上がった。

傍らのボールを拾い上げ、アフロデイと肩を並べてゴールへ向かつて歩いていく。

ややあつて。

鳥が翼で羽ばたくような音。

夕焼け空を塗りつぶすような黄金の光が、グラウンドから放たれた。

エースの肩書は軽くない

世宇子中で2人の少年が特訓を進めている頃。

大阪の遊園地、ナニワランド地下の修練場。

もう殆どの者が眠ろうという夜更けに、士郎はトレーニングルームを回っていた。

それというの、弟を探してのことだ。

「うおおー、ラア!!」

「アツヤ!」

そして幾つかの部屋を通りすぎた先で、丁度キーパーマシンへ向かってシュートを打ち込んでいるアツヤの姿を見つけたのである。

「っ! ……んだ、兄貴かよ」

アツヤはバツが悪そうに、ふて腐れたように、自分を呼ぶ声におぎなりに応えた。

士郎はそんな彼に、眉を寄せた顔で詰め寄っていく。

「こんな時間までなにやってるのさ。明日は出発で朝が早いんだから、もう戻って寝るよ」

彼ら雷門イレブンは、理事長から送られた、円堂の祖父大介のノートが見つかつたという情報により、福岡の陽花^{よかと}戸^と中学へ向かうことになつていた。

明日の朝には出発となる。

今夜はもう寝ようという仲間たちが集まっている中で姿のなかつたアツヤを、こうして呼びに来たというわけだ。

「嫌^やだ。まだ戻らねえ」

しかし、普段ならば素直に従っていたアツヤが、今回は首を横に振った。

「なに言ってるの。はやく——」

「戻らねえって言ってるんだ! 兄貴は先寝てろよ!」

言い募ろうとした士郎へ、アツヤは声を荒げた。

アツヤは、情熱はあるものの短気でがさつで、それでも兄の士郎が真剣に言うことは素直に聞いていた。

そんな弟の荒ぶる姿に士郎は思わず目を見開いた。

言葉を失う兄に構わず、アツヤは捲し立てる。

「またイプシロンを倒せなかった！ 染岡もいなくなっちゃった！

もう俺がシュートを決めなきゃならねえんだ、呑気に寝てられねえよ！！」

彼の叫びで思い起こされるのは、先日この地下修練場で行われた彼ら雷門イレブンとイプシロンとの試合だ。

真・帝国学園との試合を経た彼らはエイリアのアジトの情報から大阪へやって来て、地元的女子サッカーチーム「大阪ギャルズCCC」との一之瀬を巡った一悶着の末、ここにたどり着いた。

雷門中のイナビカリ修練場とさえ比べ物にならない性能のトレーニングマシンが揃ったこの修練場で、彼らはデザームの言い残した再戦の期日までの残り時間を過ごしたのである。

そしてやって来た、運命の日。

デザームは10日前に漫遊寺中で宣言した通り、10日後のまったく同じ時間に、イプシロンを率いて雷門イレブンの前に現れた。

対する雷門イレブンも、トレーニングを経て体力・気力共に十分。

否やはなく、すぐに試合の火蓋が切られた。

試合開始直後から、10日前と現在の雷門イレブンの差、成長の程は歴然に現れていた。

『ガニメデプロトン・改！』

『マジン・ザ・ハンド！』

彼らは、早々に放たれたゼルのシュートを円堂が止めてみせたのを皮切りに、以前の戦いでは文字通り圧倒されていたイプシロンを相手に渡り合っていく。

少なくとも、ただの身体能力とチーム戦術だけで蹴散らされた漫遊寺中での試合とは別物だった。

『……クク、なるほど。10日も与えた甲斐があつたというもの』

『澄まし顔も今のうちだぜ！』

『おいアツヤ！……もういいよな監督?! 俺もいくぜ！』

不敵に笑うデザームに戦意を旺盛にするアツヤ。

互いに様子見、小手調べとなった試合序盤を過ぎて。

リベンジに燃えていた雷門のストライカー陣と、イプシロンのリーダー・デザームとの激しい攻防が幕を開けた。

『エターナルブリザード・V2!』

『そうだ、このときを待っていたぞ……! ワームホール・V2!』
以前は身一つで止めたアツヤのシュートを、必殺技を使って止めたデザーム。

『ワイバーンクラッシュ・V2!』

『ハハハハ! 今日はお前たちでフルコースを味わわせてもらうとしよう!』

さらに染岡も参戦し、修練場での日々で進化したシュートが幾度もイプシロンのゴール目掛けて飛んだ。

デザームはそれらを高笑いを上げながら迎え撃つ。

その守りは鉄壁に思われたが、猛攻の末、ついに綻びを見せた。

『いくぜ! ワイバーン——』

『——ブリザード!!』

『ワームホール・V2! ——むう?!』

特訓中に2人の編み出した合体技“ワイバーンブリザード”が、デザームの必殺技を打ち破ったのだ。

初めてイプシロンのゴールネットが揺れ、雷門の得点となる。

それによって雷門イレブンは大いに士気を上げたが、その勢いはデザームに更なる力を見せつけられて止まることになった。

『ここまで強くなるとはな……ならば、私も応えよう……!』

——ドリルスマッシャー!!

それは、これまで見せていた必殺技さえ比較にならない、圧倒的な力の塊だった。

『なん……だと……』

大きな壁を越えたと思ったところに、すぐまた立ちはだかる新たな壁。

アツヤの自信、これまでのアイデンティティが揺らいでいく。

だが、本当の絶望はその後だった。

『ぐっ……うう……！』

『染岡!?!』

『監督、染岡くんが!』

それまで果敢にシュートを放っていた染岡が突然崩れ落ち、足を抑えて倒れ込んだのだ。

瞳子が試合を止めて確認すれば、彼の右足——真・帝国との試合の最後で「皇帝ペンギン1号」を受けた足が、真っ赤に腫れ上がっていた。

彼は木野の手当てを受けた後、それで大丈夫だと言って本格的な治療を拒んでいた。

なまじその後の練習・試合でもその負傷をおくびにも出さなかったものだから、皆気づいていなかったが、ダメージは深く、容態は静かに、静かに悪化の一途を辿っていたのである。

そしてイプシロンとの激しい試合の中で、ついに決壊してしまった。

『……あなたはもう試合には出せません』

『そんな、待ってくれ監督! 俺は大丈夫だ、まだ試合はこれからじゃねえか!』

『できるわけがないでしょう! その怪我……数日休んだくらいで治るものじゃない。そんな状態で、エイリア学園との戦いに出すことなんてできないわ』

瞳子の判断で染岡は交代させられ、後半からはこの土地で加わった浦部リカが彼の抜けたポジションについたが、アツヤとの連携を熟せるFWが抜けたという穴は大きかった。

『どうした、動揺しているぞ? もっと、魂を滾らせて打ってこい!』
『くっそオ……!』

「ワイバーンブリザード」を失い、アツヤの「エターナルブリザード」ではデザームの「ドリルスマッシュャー」の突破は叶わない。

他に望みがあるとすれば士郎との「ウルフレジエンド」だったが、イプシロンとの拮抗は薄氷のような危ういバランスで成り立っている。

る。

風丸と並んでDF陣の主力となっている彼を、迂闊に動かすことはできなかった。

互いに行き詰まったまま、ずるずると時間だけが過ぎていく。

『……終盤は些か消化不良だったが、なかなか楽しんでさせてもらったぞ。吹雪アツヤ、次は貴様があの男の分まで魅せることだ』

——さもなくば、貴様の後ろにいる仲間を破壊し尽くすことになる。

試合終了とともに、デザームはそう言い放って姿を消した。

残された結果は1ー1の同点、引き分けである。

確かな特訓の成果が発揮された試合ではあったが、彼らにそれを喜ぶことはできなかった。

「俺が点を取れねえと『完璧』じゃねえ……！ 点を取れなくちやデザームには勝てねえ……！」

とりわけアツヤは、真・帝国学園で聞いた寺門の叫びが脳裏に浮かび、頭から離れなくなった。

『俺ストライカーは、どんなときでもシュートを決めなきゃならねえ！』
『たとえ他の誰がシュートを止められたとしても、エースだけは点をもぎ取らなきゃいけないんだ！』

そうして積み重なった焦燥感に突き動かされ、アツヤは寝る間も惜しんで特訓をしようとしていたのである。

「気負い過ぎちやダメだよアツヤ。焦っても簡単に強くなれたりしない。皆で、一緒に強くなるんだ」

「でも！ 俺、託されたんだよ！」
諫める士郎の言葉に、アツヤは頭を振る。

涙を湛える瞳を揺らしながら兄を見つめるその姿は、彼がまだ中学生になって半年も経たない、壁山や栗松らと同じ1年生なのだという事実を思い起こさせた。

「染岡に、雷門のストライカーを頼むって」

試合後、染岡は正式にチームを外れることになった。

長く雷門の主力を担ってきたストライカーの離脱にはチームの仲

間たちも抵抗があり、風丸などは強く反発したが、彼の怪我という現実には変わらない。

最後には自ら離脱を受け入れた彼は、別れ際にアツヤへこう言い残したのである。

『雷門のストライカー、任せませ』

笑って、すぐに戻ってみせるという言葉添えて去っていった染岡だったが、それが叶わないのは明らかだった。

「……俺。試合で初めて、シユートを外すのが怖えって思ったんだ」それは、アツヤが今まで感じたことのなかったものだった。

エイリア学園の事件が起こるまで、彼に源ただ一人の宿敵田以外の敗北を知らなかった。

チームのエースとしてフィールドに立つということの本当の意味を知らなかった。

人類の命運を背負うという、あまりにも巨大な責任の重圧を知らなかった。

事件以前ならば、背中を預ける兄士郎こそが唯一無二の拠り所だった。そして、先日までは共にエイリアに立ち向かう染岡がいた。

しかし染岡はいなくなった。

兄も、自分が勝てない相手にすぐ助けに来られるような状況ではない。いい。

「でも、俺がやらなきゃ。いまは俺が、雷門のストライカーだから……！」

自分で、やらなければならぬのだ。

そんな悲壮な決意を固める弟に対し、士郎はなんと言葉をかけたらしいのかわからなかった。

「……じゃあ、僕も練習に付き合うよ。あと10分だけね。そしたらちゃんと寝ること」

「わかったよ……」

せめて、練習で無茶をしたりしないように目を光らせておくことくらいしか思いつかなかった。

エイリア学園に纏わる世間の喧騒から縁遠い屋敷の一室。

そこに、敷かれた座布団に座る大仏のような風貌の男と、その人物にひれ伏す瘦躯の男がいた。

「源田幸次郎の行方は掴めませんか」

「はっ、申し訳ございません。影山の手による誘拐からか、警察も警戒を強めているようで」

「……致し方ないでしょう。例の『神のアクア』に対抗した身体能力、データが取れば『ハイソルジャー』にも活かせたかもしれませんが……所詮、計画としては横道です」

「……かしこまりました、旦那様」

瘦躯の男は、旦那様と呼んだ男に恭しく礼をして部屋を後にする。振る舞いは洗練されており、まさしく忠臣といった風情があつたが、それは襖を完全に閉じ切るまでだった。

（……クソッ！ あつさり諦めるとは、節穴め！）

舌打ちは抑えたものの、男——研崎竜一けんざきりゅういちは躊躇なく、まだ襖の向こうにいる主人への悪態を頭の中で吐き捨てる。

そもそもやり方が非効率的なのだ。

エイリア石を身につけた人間との特訓で鍛え上げた人間を兵士にするなど。

そんな手間と時間ばかりかかることをせずとも、エイリア石のエナジーを高めて与えれば、それだけであつという間に超人の兵士が出来る上がるというのに。

無論、もともと強い人間を操り人形にしてエイリア石を与えたならば、なおのこと。

（だがまあ、そもそもあの男とは目的が違うのだ。それに、もとを正せば……影山！ あの男のせいだ！）

自分が手を回して病院からあの子どもを拐うことができなければ、それで終わりだったのだ。

それを影山が横から搔つ攫ったうえ、奪い取ろうと送った人員も影山が意図的に洩らしたとしか思えない情報で誘き寄せた帝国学園に

邪魔され、まんまと取り逃がした。

失敗を悟つてももはや後の祭り。

魚が大きいことなどわかっていたのに、手の届かない水底へと逃げられてしまった。

まるで自分の心を見透かしていたかのように、的確に邪魔だけしていったのは許しがたいが当人は既に海に消えた。

もういない者への恨み言を吐いても仕方がない。

それに遠回りになるが、“ハイソルジャー”を仕上げてからでも手に入れるのは遅くないし、その方が邪魔者も排除済みでどうとでもなる。

自分の計画にはなにも問題はない。

そう自らに言い聞かせ、沸き上がる怒りを静めた研崎は不敵な笑みを取り戻す。

（雷門中もエイリア学園も、勝手に遊んでいるがいい。エイリア石は私のものだ。この力で世界を手にするのはこの私だ！）

エイリア石の力で全てを操ることを目論む研崎だったが、その彼自身がエイリア石の虜になっているかのようにだった。

アツヤは涙を流さない

円堂大介の遺したという「究極奥義」を求め、雷門中が訪れたのは福岡の陽花戸中。

そこでは目的だった円堂大介の「裏ノート」を首尾よく入手できたのに続き、全国大会の決勝戦を見て円堂に憧れてGKにポジション転向したうえに、見よう見まねの特訓から習得した「ゴツドハンド」を披露した少年立向居たちむかいゆうき勇氣との出会いもあり、雷門中の面々はエイリア学園との戦いを一時忘れさせる暖かなひとときを過ごしていた。

ただ、それは必ずしも全員がそうではない。

キャラバンの屋根の上で星空を見上げるアツヤも、その1人だった。

陽花戸中サッカー部と行った合同練習。

大介の遺した究極奥義「正義の鉄拳」を習得すべく試行錯誤する円堂と、「ゴツドハンド」の力を見せつける立向居の2人を中心として、充実した時間となった。

しかし、アツヤとしては振るわない結果だったのである。

それというのも、シュートを打つ機会は度々あったが、彼が今回打ったのは「エターナルブリザード」ではなかった。

目指したのは士郎との協力を必要としない、自分1人で放つ「ウルフレジエンド」。

当然だが、それまで2人でやっていたことを1人でやるのは容易ではない。

そのため実際に放たれたシュートは、2人で打っていたときには到底及ばない、それこそ必殺技の完成度、威力では「エターナルブリザード」にも及ばないものであった。

士郎はその挑戦を無理に止めることはせず皆と共にフオローに回ったが、結局練習の最後まで、アツヤがその「ウルフレジエンド」を完成させることは叶わなかった。

目に見える成果が出てこない現状もあり、この夜も日課になった練習を一通り熟したが、まだ寝る気にはなれなかった。そして寝袋を抜

け出したが、流石に『練習はここまで』だという土郎の言いつけは破れない。そんな煩悶の間を取り、外に出て夜風を浴びることにしたのだった。

広がる星空は、北海道で見慣れたそれとは随分違う。星の散りばめられた黒いキャンバスが、いまはもつと近くに見えた。

観測者の立つ位置によって、空の星の見え方もまた変わる。

それが、これまで自分は本当になにも知らずにサッカーをしていたのだと突きつけているようで、遙か遠くの星の放つ光さえ、アツヤには目を背けたくなるほど眩く思えた。

「あれ？　ここにいたのか」

そんなとき、すっかり聞き慣れた声が背中にかかる。

首だけで振り向いて見れば、梯子から円堂が顔を覗かせていた。

「キャプテン……」

アツヤは正直、彼をそう呼ぶのに未だ慣れない。

長い間、彼は土郎の率いるチームでサッカーをしていて、キャプテンⅡ土郎という図式が染み付いている。

その兄以外をキャプテンと呼ぶなど、エイリア学園を倒すまでの一時とはいえ雷門中の一員としてサッカーをするまで考えたこともなかった。

「なあ、キャプテン。俺、ちゃんと雷門のストライカー、できてるかな？」

1人で物思いに耽^{ふけ}って感傷的になっていたのか。

当人に自覚はないが、兄である土郎ぐらいにしか聞かせたことのない弱々しさを抱いた調子になって、アツヤは隣で横になる円堂に尋ねていた。

試合での荒々しい姿、試合以外でも、染岡をからかったりする年上にも自重しない生意気さ、そして活発さを見せていた印象とはそぐわない雰囲気だったので円堂は少し目を丸くしたが、間を置かずその問いに答える。

「ああ！　この前のイプシロンとの試合だって、お前が居たから染岡

が抜けちゃった後もあいつらと戦えたんじゃないか」

「そうか？」

「そうだよ。流石、伝説のストライカーだ。お前はその実力を完璧に証明したよ」

「……そうか」

アツヤは、円堂のかけた言葉を反芻するように相槌を繰り返す。

同じ言葉であるが、そこに籠った感情は少し違っていた。

「キャプテン。豪炎寺って、どんなやつなんだ？」

「ん、染岡から聞いてないか？」

「そりゃあ、うるさいくらい聞いたけどよ。アンタからも聞いてみてえ。エースストライカーってやつをよ」

「そつか！……豪炎寺は、普段はクールって感じなんだけど、胸にはサッカーへのすごい情熱が燃えてるって感じた。あいつとの出会いが、俺たち雷門イレブンのサッカーの始まりで……」

その声音にいつもの調子が戻ってきたと感じた円堂は笑って後輩の質問に答え、いまはここにいない仲間のことを語り出す。

話が出会いから、フットボールフロンティアでの快進撃、そして地区大会決勝にまで差し掛かる頃には、すっかり円堂の方が興奮していて、涼やかな夜風も熱風に変えてしまいそうな彼の話ぶりは、寝つけなかった立向居がやってきて「究極奥義」に話題が移るまで続いた。エースストライカー。

これまでただ強さでそう呼ばれてきた少年がその称号のなんたるかを考え出したのは、それまでの彼の世界が根本的に自分と兄だけだったことを鑑みれば、チームというものを明確に意識し始めた成長の始まりと言えるだろう。

しかし、世界のもたらす苦難と試練はまだまだ幼い少年の成長を待ってはくれなかった。

この夜の2日後、エイリア学園のマスターランク「ザ・ジエネシス」を名乗るチームが彼らを襲ったのだ。

チームを率いていたのが旅の節々で円堂の前に姿を見せていたヒロトという少年——ジエネシスのキャプテンとしてはグランと名乗った——であったことには円堂も動揺を見せ、風丸などは未だイプシロンとの決着もついていない中で現れた新たなチームに、絶望に近い衝撃を受けていた。

とはいえ彼らが雷門イレブンで相手がエイリア学園である以上、戦うしかない。

だが、ジエネシスの強さはイプシロンと渡り合った雷門イレブンをもってしても異次元の領域にあった。

そのパスワークで回されるボールは流星のように雷門の選手たちの隙間を縫って瞬く間にゴールへ迫り、フィールドを走る彼らには吹雪兄弟や風丸などのスピード自慢のメンバーでも追いつけない。

そしてシュートは、必殺技でもないありふれたもので円堂の“マジン・ザ・ハンド”を容易く破ってしまう。

試合展開を一言で表すならば、まさしく蹂躪だった。

円堂がシュートを受ける度傷ついていくこと以外には、ジエネシスのサッカーにラフプレーと呼ばれるような要素はない。ただ彼らが、彼らのペースでプレーすることに、雷門イレブンがまるでついていけないのだ。

ひたすらに速さで、技術で、力で、強さで圧倒される。

「うおおおっ！ エターナルブリザード・V2!!」

「フン」

アツヤもまた、渾身の一撃をジエネシスのGKネロに必殺技も使わず受け止められた。

ネロは小柄な体格にもかかわらず、その場から微動だにせずに防いでみせる。

デザーム相手でさえ、遠距離からの“エターナルブリザード”でもその場から動かすことはできたというのにだ。

それを皮切りに、過去の叫びが再び脳内に木霊する。

『エースこそが攻撃の要!』

『エースだけは点をもぎ取らなきゃいけねえんだ!』

それだけではない。言葉はやがて彼の中で呪いのように変わっていく。

『点が取れなきやエースの資格はない』

『お前にエースの資格はない』

「アツヤ！」

「……あ」

心の内に響く囁きに気を取られ、いままで手足同然に操れていたボールを取り落とすという素人のようなミスさえしてしまう。

足が震える。

もう一度止められてしまったら。

おまえ自分のせいで。

極度の緊張は身体と感覚を鈍らせる。不安は怯え、恐怖に変わって肉体を支配する。

その後もミスはなくならず、チーム全体のリズムが乱れ、オフエンスは機能を停止した。

相手にボールを与えれば与えるだけ、円堂が受けるシュートが増えていく。

もはや試合の体を成していない惨状は終了のホイッスルが鳴り響くまで延々と続いた。

『雷門のストライカー、任せたぜ』

「つ……！ おれは、なにをしてんだよ……」

敵を止められず、シュートも決められない。

無念ながらもチームを去った染岡に託され、誓ったことが、まるで守れていないではないか。

試合終了直後、グラウンドから必殺技を受けて倒れた円堂へ駆け寄る雷門中の面々の後方。

フィールドに点々と残る、雨が降ったような水滴の跡に気づく者は、誰一人としていなかった。

ジエネシスとの邂逅の後。

見せつけられた力の差と終わりの見えない戦いに心が限界を迎えた風丸、栗松の立て続けの離脱、キャプテンである円堂までもが塞ぎ込んでしまい、チームの空気は底まで落ち込んでいた。

「おらっ、お前ら！ 気合いねーぞお!?!」

皆、練習にも身が入らない中、1人威勢のいい声をあげるのはアツヤだった。

「……1年がああしてるのに、先輩おれたちがいつまでも凹んでられないな」

「あの生意気さも、いまはありがたいな。みんな、声出していこう!」

土門と一之瀬が彼の声に応じて気合いを入れ直す。

ジエネシスの底知れない恐ろしさを味わったのは全員同じだ。

離脱した者、戦いの爪痕で立ち上がれない者もいるなかで闘志を燃やし、円堂にも匹敵する熱量で練習な打ち込む彼の姿は、チームの活気をギリギリのところまで繋ぎ止めていた。

「アツヤ……」

そんな彼の姿に不安を覚えるのは、弟の気質を知る土郎と、ゴークル越しに彼の背を見詰める鬼道からげんきの2人のみ。

鬼道には彼の活力が空元気からげんきに思えてならなかった。

あと、ちよつとした一押しで、あの勝ち気な笑みが薄氷のように砕け散ってしまうのではないかと。

その懸念は、立向居のひたむきさに心打たれた円堂が復帰してからも消えることはなかった。

いまのアツヤの心は、チームにいながらにして1人だ。

彼にボールを託すのではなく、後ろから見守るのでもなく、肩を並べてプレーする人間が必要なのだと。

いまそれができるのは、鬼道の知る限りで最も炎の似合う男しかない。

沖縄で目撃されたという「炎のストライカー」。

それが彼であると信じて、雷門イレブンは海に行く。

焦りは成果をもたらささない

船旅を終えて沖縄に到着した雷門イレブン。

「あつちー……あつちつちつちー……」

「アツヤくん、船からずつとそんな調子ね。ちゃんどこまめに水分取らなくちやダメよ?」

船に乗るまで沖縄に興味津々だったアツヤは活発さが見る影もなく、南国の暑さですつかりグロッキーになっていた。

滝のような汗を流しながら力なく歩く彼に、音無が冷えたドリンクを渡しながら言う。

何度叱つても懲りずにイタズラを繰り返す木暮との攻防戦から、彼女も親のような振る舞いが板についてきている風だった。

「あはは、北海道じゃこんな暑さはまずないからね」

「雪国育ちじゃなくても十分暑いっすよ……あつ、士郎さんの近く涼しいっすね」

そう言つて笑う、同じ雪国育ちの筈の士郎は弟と違つて暑さが堪^{こた}えているようには見えない。1歳の差とはそこまで大きいものなのか。

アツヤに次ぐ勢いで汗を流して暑がる壁山は、士郎から微かに漂う冷気を感じて引つ付いたが、暑苦しいとニツコリ断られた。

そんな和気藹々としたやり取りを繰り返すのもそこそこに、彼らはここへやつて来た本題に入る。

彼らが探しに来たのは、豪炎寺と目される「炎のストライカー」。本当に豪炎寺その人かはまだ不明だが、円堂をはじめとした仲間たちはそう信じている。

とはいえ有力な情報はなく、足を使った聞き込みしかないという円堂の号令の下、雷門イレブンは数人で分かれて情報収集へと回った。

「行こっダーリン! ウチ、着くまでにいろいろチエツクしとつてん!」

「ええっ、ちよ、土門!」

「行つてこい、ダーリン」

「どもオー……ん!」

「アホらし」

完全に観光気分ではしゃいでいる者も見られたが。

リカに引きずられていく一之瀬を潔く見捨てた土門と吹雪兄弟の3人は、燦々と降り注ぐ陽の下で「炎のストライカー」の搜索を進めていく。

「豪炎寺くんだといいいね、噂の『炎のストライカー』」

「ああ。俺も久しぶりに会いたいぜ」

彼がチームを去ったのも、いまでは随分昔に思えた。

それだけに、ここで戻ってきてくれるかもしれないという期待は膨らんでいく。

「豪炎寺……」

染岡もよく豪炎寺の話をしていたと、アツヤは彼のありし日を思い起こした。

雷門のピンチを救ったエースストライカー。

いまもまた、チームに駆けつけてくれたのならばさぞ頼もしいことだろう。

以前の自分ならば、戻ってきててもエースの座は渡さない、とでも息巻いていたかもしれない。

染岡が、彼の居場所を守ろうと出会ったばかりの自分たちに噛みついたように。

しかしいまのアツヤにはどこかで、この重荷を渡せるのなら、と思う自分の存在が否めなかった。

(……くそつ、弱気になるな!)

それを恥じ、誤魔化すようにタオルで汗を拭う。

「あんたらそのジャージ、雷門中だよな?」

その背中に声がかかった。

アツヤ、そして土門と土門も振り返る。

自信に満ちた声の主は、サッカーボールを小脇に抱えて佇む、燃え盛る炎のような赤髪の少年であった。

「なんだア? お前……」

「アツヤ。いきなり失礼でしょ。……それで、僕たちになにか用かな

？」

「おう。あの雷門中が俺を探してるって聞いてな」

「なに言ってるんだ？」

すっかり「炎のストライカー」を豪炎寺と思っていた土門が首を傾げるが、少年の自信に満ちた表情は変わらない。

「俺、南雲晴矢。なぐもはるやあんたらの探してる「炎のストライカー」ってのは多分、俺のことだぜ」

「なんだって!？」

少年——南雲の明かした衝撃の真実に、土門が思わず声を上げた。その反応に満足げな笑みを見せた南雲は続けて言う。

「証拠代わりを見せてやるよ。俺のシュートをー」

瞬間、沖繩の暑さをも塗りつぶす紅蓮がその場を包んだ。

「アトミックフレア!!」

南雲が放ったのは、高く飛び上がったのオーバーヘッドシュート。彼のキックを受けたボールは小さな太陽のようになって、紅蓮の炎の尾を引きながら飛んでいった。

「炎のストライカー」と呼ばれるのも得心がいくというもの。

「すげえじゃねえか!」

それを見て土門は惜しめない賛辞を贈る。

街中だったこともあり加減していたのか、飛距離はそこまで延びずに火が消えたボールは地上へ落下したが、秘められた威力の程を感じられないほど彼らの眼も節穴ではなかった。

噂のストライカーが豪炎寺でなかったことは残念であるが、どうあれそれに勝るとも劣らない収穫だ。

「どうだ？」

「ああー。早速皆に紹介するよ。ついてきてくれ」

「おうよ、願ったり叶ったりだ」

こんなにも早く目的の人物が見つかり、しかも凄まじい実力の持ち主だとわかって興奮気味の土門が、集合場所の方向を指しながら言う。

そんな土門を先頭に歩き出した一行だが、一瞬南雲は足を止めてア

ツヤに目を向けた。

「お前も知ってるぜ、吹雪アツヤ。宇宙人相手によく頑張ってるってな」

「……なんだよ」

「いやあ、これからよろしく頼むぜ。現・エースくんよ」

その観察するような目付きにアツヤはやや眉を寄せて応対したが、それに南雲ははぐらかすように笑ってまた土門の後を追う。

(……エースか)

現状の雷門の一番強力なストライカーといえば、まず自分だろうというのは、自惚れでもなくチームの誰もが認識している事実だ。

だが、南雲は明らかにその自分よりも強い。

彼の最後の呼び方も、そういう意味なのだろう。

戦力の強化は間違いなく喜ばしいものである。しかし、チームを去る仲間を見てしまった自分では、それを手放しに喜べない。

如何ともしがたい矛盾だ。

重みを感じ出したその座を渡してしまえば、いよいよ自分がここにいる意味を失われてしまうのだから。

「アツヤ」

「兄貴……」

「アツヤはアツヤだ。自分のサッカーをしなよ。……行こう」

士郎に促されて土門と南雲の後を追う。

しかしアツヤには、自分のサッカーがなんなのかも、もうよくわからなかった。

その後の展開は衝撃の連続だった。

集合した雷門イレブンの前に連れられて来た南雲が、自分の実力テストと題して雷門イレブンに1人で挑み、自信があると豪語した通りに全員を突破してしまったことなど序の口。

彼が正式にチームに加わるかと思われたが、瞳子の質問と、そこに現れた新たな人物の言葉で空気が変わる。

現れたグランが南雲をエイリア学園と呼び、彼もその正体を明かし

ただ。

燃えるような赤を基調としたユニフォームに身を包んだ姿。

自らを、『プロミネンス』のキャプテンを務めるバーンであると。

結局、グランとバーンは雷門イレブンを他所に、真つ向からいがみ合うようなやり取りを繰り返しながら姿を消したのだった。

ジェネシスに続き、彼らと同格のチームの存在が明らかになって、更なる動揺が雷門イレブンに走ったのは言うまでもない。

当然、アツヤもその例に漏れず。

それから、彼は特訓に次ぐ特訓に明け暮れた。

沖繩への途上で出会ったサーファーの綱海条介つなみじょうすけと再会し、実は現地の学校大海原中おおみはらのメンバーだったという彼の頼みで行った大海原中サツカー部との練習試合。

何度か点を取ったものの、その程度で満足できはしない。今度こそ必殺技の完成を。

その一心で、彼はもてる時間の全てを特訓に注ぎ込む。

浜で。森で。駆け回り、汗をだくだくと流しながら。

「うおおー…… ウルフレジェンド！」

ボールへの、狼の爪のような鋭いキック。

それを瞬時に幾つも叩き込むことがこの必殺技の極意だったが、やはり足りない。

「……くそっ」

全身から吹き出す汗を拭くのも忘れてぼやく。

もともとは士郎との二人がかりの工程。これを一人で熟そうとすれば、士郎の分までキックを、それだけ素早く叩き込まなければならぬ。それはスピードに優れるアツヤであっても困難なことだった。

「アツヤー！ 休憩はちゃんとしたの!？」

「……………」

うちひしがれる背中に、兄からの声がかかる。

アツヤは振り返ったが言葉の意味を理解してから黙り込み、ばつが悪そうに目を逸らす。

そんな様子を見て、士郎は厳しい表情になって詰め寄る。

「焦りすぎだよ。……やっぱり2人でやろう。『ウルフレジエンド』なら、きつとデザームも倒せる」

無理に1人でやろうとせず、いままで通りにやろうと説く士郎。それにアツヤは頑として頷かない。

「兄貴だつて見ただろ？ バーンのやつシユート」

「それは……」

確かに、2人で放つ『ウルフレジエンド』ならばデザームを打ち破る可能性はある。

むしろ彼からゴールを奪うということだけを求めるならばそちらの方が確実かもしれない。

しかしそれでは駄目だとアツヤは語るのだ。

「ジェネシスにプロミネンス、この2つだけでもとんでもなく強いやつらだ。デザームに勝つのに兄貴の力借りてたら、あいつらには勝ち目がねえ！」

ジェネシスとプロミネンスに加え、まだいるかもしれないエイリア学園のチーム。彼らを倒すのなど、イプシロン相手にこの『ウルフレジエンド』を完成させるぐらいしなければ夢のまた夢だと。

言い分は一応わからないでもない。

しかし士郎には、彼を突き動かしているのはそんな理屈だけではないだろうことの察しがついていた。

このままではアツヤにかかる負担が多すぎる。もうこれ以上見ていられない。

そうして滅多にない、兄弟の激しい口論になったが、どちらも退かず話は平行線で終わってしまう。

彼が思い詰めてしまっているのは明白だ。

この調子では遠からず心身に限界が訪れてしまう。そんな予感がしてならないが、どうすればいいのかわからなかった。

「……染岡くん」

彼がまだここにいてくれたなら、アツヤに自分とは違う言葉をかけられたのだろうか。

考えても詮ないことばかりが頭の中を廻る。

その間にもアツヤは特訓を続け、時間は過ぎていった。

ついに根本的な解決策が浮かぶことのないまま、運命の日は訪れる。

「時は来た！ パワーアップした我々 “イプシロン・改” が、貴様ら雷門に勝負を挑む！」

円堂が綱海との特訓を経て “正義の鉄拳” を完成させたその矢先、鮮血の如き禍々しい眼光を放つデザームたち、イプシロン・改が現れたのだ。

「デザーム……！」

「ククク……吹雪アツヤ、どれほどレベルアップしたか見せてもらおうぞ」

「……お望み通り、やってやるよ」

向かい合った宿敵から逃げる選択肢などアツヤにはなかった。

緊張も不安も闘志の吹雪で凍りつかせて、彼は役目^{エース}を全うしようとフィールドに立つ。

氷の亀裂は直らない

沖縄にて雷門イレブンの前に現れ、勝負を仕掛けてきたイプシロン・改。

勝負を受けなければこの一帯の学校を破壊して回るといふ宣言もあつては引き下がれない。

北海道から始まり、京都、大阪、そしてこの沖縄まで続いた彼らとの戦い。

今回こそ決着を着けるといふ意気込みで、雷門イレブンは試合に臨んだ。

雷門中と宇宙人^{エイリア学園}の勝負を聞きつけて観戦に集まってきた多くの近隣住民、そしてそれらに紛れるフードの少年が見守る中、イプシロン・改との試合が幕を開けた。

「通さへんー！」

イプシロン・改のキックオフで始まった試合。

攻め上がる彼らを止めようと先陣を切ったのはリカだったが、素早いワンツーパスで^{たちま}怒ちのうちに抜き去られてしまう。

僅かなその一連の動きだけで、雷門イレブんに彼らのパワーアップしたという言葉が虚仮威^{こけおど}しなどではないということ悟らせる。

「させねエよー！」

しかし無論、パワーアップしてきたのはイプシロン・改だけではなかった。

横合いから現れたアツヤが、迅速なドリブルで駆けるメトロンから一瞬でボールを奪ったのだ。

「なっー！」

「やるじゃねえかアイツー！」

この試合で加わった綱海がその鮮やかな手際に感嘆の声をあげた。

開始早々に攻守が交代し、他のメンバーもイプシロンサイドへ攻め上がる。

デザームは、そうでなくては面白くないとばかりに口元を愉悦に歪め、恋人との待ち合わせのように、迫るストライカーをウズウズとし

ながら待ち受ける。

「アステロイドベルト・改！——なにつ」

「遅^{おそ}エよー」

立ち塞がった、否、立ち塞がろうとしたイプシロン・改の面々ももの数ではないようにかわして、アツヤはあつという間にペナルティエリアに侵入した。

「調子に乗りやがって……！」

「いや、打たせる。さあ、あれからどれ程成長したのか味見といこうか……！」

それに対して動こうとしたDF陣もデザームが制し、彼は赤く爛々と輝く両の瞳でアツヤを見据えて静かに気を高める。

これまで数え切れないほど繰り返し広げられた一騎打ちの形だった。

「来るがいい。魅せてみるー！」

「喰らいやがれ、エターナルブリザード・V3!!」

結局「ウルフレジエンド」は、実戦投入できる段階には至らなかった。

しかし、代わりに常夏の熱気を打ち払うような冷気を纏って打ち出したそのシュートは、沖縄での特訓の日々で確かに進化していた。

「やつのシュート、さらに強くなっている!!」

「フッフ、フハハハハ！ いいぞ、吹雪アツヤ!! この瞬間^{とき}を私は待ち望んでいたのだ!!!」

——ドリルスマツシャー!!!」

デザームはけだもののような笑みと共に、掲げた右手に巨大な鋼鉄の螺旋^{ドリル}錐を現した。

ナニワ地下修練場の試合で見せた、「ワームホール」を上回る彼の奥の手である。

高速回転する鋭い槍のような先端が冷気の渦を帯びたボールを真正面から捉えて激突し、激しく火花を散らす。

「ヌウウ、オオオオオオ……ふ、ハハハハ!!」

「いつけエエエ!!」

せめぎ合うボールとドリル。

だが、長い拮抗の末、ボールが弾かれる決着となった。

「なに……!?!」

「クク、期待通りだ。実に滾ったぞ。……さあ、試合は始まったばかりだ。まだまだ打ってこい。次は決まるかもしれんぞ!」

歯噛みするアツヤをそう煽り立てながら、デザームは手にしたボールをチームメイトへ投げ渡す。

開始早々の激しい一騎打ちから一拍置いて、改めてイプシロン・改の攻撃が始まった。

「お前遅い! マキュア止められない!」

「あつ……待て!」

マキュアが嘲笑いながら立向居を突破する。

追いかけてようとするが、マキュアは彼を知ったことかと無視してパスを回した。

それを受け取ったメトロンは、フォローに回る塔子や土門を前に飛び上がり、必殺技を浴びせかける。

「メテオシャワー・V2!」

降り注ぐ隕石が塔子らを行動不能にして、その間にメトロンは更に攻め上がった。

そして彼の他の二人のFWであるマキュア、ゼルも合流し、三人がかりで円堂の守るゴールを狙う。

放つのは、以前の試合でも彼から点を奪った必殺技。

『ガイアブレイク・改!!』

三人の気で現れた岩石がボールを包み、パワーの込められたそれを放つシュート。

岩石が砕け散った中から飛び出したボールは、凝縮された力をそのままに円堂へ迫る。

迎え撃つ円堂が見せるのは、この数日の特訓で習得した究極奥義だ。

サーフィン仕込みの、腰が入った力強い構え。

捻りながら突き出された拳は、そのまま回転して飛び出す拳を具現

化させた。

「正義の鉄拳!!」

究極奥義はその名に恥じぬ威力で、危うげなく「ガイアブレイク」を吹き飛ばす。

「なに?」

以前は点を奪えた必殺技があっけなく防がれたことにゼルが思わず声をあげるが、後方で眺めているデザームの笑みは崩れない。

彼のポジションはGKであるにもかかわらず、まるで自分が挑むのが楽しみだとも言うように。

「円堂に負けちゃいられねえぞ!」

「ああ!」

それからイプシロン・改は攻撃を仕掛けたが、円堂の活躍に士気を上げた雷門イレブンによって悉く阻まれる結果に終わった。

ボールを奪い取り、雷門イレブンが敵陣に切り込んでシュートを放つ。

「ローズスプラッシュ・V2!」

リカの蹴ったボールが、薔薇の花びらを噴水のように撒き散らしながらゴールへ向かった。

しかし、彼らの勢いはそこで止まることになる。

「ワームホール・V2」

幾度となく雷門の勝利の最後の壁となったデザームは、今度もリカのシュートを容易く止めてしまった。

彼女のシュートは物足りなかったと言いたげな様子を隠そうとせず、デザームは拾ったボールを持ったままアツヤに目を向ける。

「……やはりお前だ。お前が打ってこい! もう一度だ!」

そう叫ぶとデザームは、アツヤ目掛けてボールを蹴り飛ばした。

風を切りながら転がってきたその挑戦状をアツヤは見もせず足で受け止め、力で地面に押しさえつける。視線は、デザームと交わらせたままで。

「アツヤ、奴のペースに呑まれるな。お前はお前のプレーをするんだ!」

「ああ、わかってるさ」

危うさを感じる佇まいの彼に、冷静さを失うなど鬼道が声をかける。

だが、返事とは裏腹に、その言葉は届いているのかいないのか。

「いつも通り、点を取る！　それがエース権の仕事だろ!？」

アツヤはそう言い残して駆け出してしまった。

そのまま彼は止めようとするファドラ、ケイソン、イプシロン・改のデイフェンスを次々にドリブルで抜き去り、瞬く間にデザームの前に立つ。

「エターナルブリザード・V3イ!!」

そして再び自慢のシュートを打ち放った。

今度こそは、デザームの必殺技を破って点を奪ってみせようと。

肌を刺す冷たい風を心地よさげに味わいながら、デザームは再び右手を高く掲げた。

「ドリルスマッシュャー!!!」

渦の回転に真っ向から反する回転で、ドリルが冷気の嵐の中心へ突き出される。

凍えるような暴風が手足を蝕み、しかしドリルの高速回転の生み出す熱でそれに持ち堪える。

僅かにでも気を抜けば、すぐにでもドリル諸共に氷に包まれて砕け散るであろう絶体絶命の瀬戸際。その緊張感から伝わってくる悦楽にデザームは口の端を吊り上げ、高らかに笑う。

「フハハハハハハハ!!」

(なんで、笑ってられる……!)

その様に、アツヤはそう思わずにはいられなかった。

彼はこの戦いに身を投じてから、サッカーをしていて屈託なく笑えた覚えがない。

反対に、デザームは常に笑っている。一步間違えれば確実に失点に繋がる駆け引きの中で彼は、荒々しくも純粹な情熱を見せつけている。

そんな心の内の惑いがシュートにも影響を及ぼしたのか。

拮抗の時間は先ほどよりも短く、ボールは再びデザームの手に収まった。

「フム……」

「くそつ、俺にボールを回せ！ 次こそ決めてやる！」

アツヤの意識が試合に戻ったのは、デザームがボールをスオームに投げた瞬間だった。

心の中の負の感情が溶け出しそうになるのを抑えて叫び、イプシロン・改の運ぶボールを追って駆け戻る。

そこから試合はヒートアップしていき、絶え間なくボールが行き交うようになっていく。

「フレイムダンス・改！」

「ぐあつ！」

一之瀬が炎を操る舞いでゼルからボールを奪えば、

「アステロイドベルト・改！」

「くっ……うわあ！」

ケイソンが展開した小惑星帯の如き岩石群が、立向居の行く手を阻む。

取っては奪い、奪っては取られの繰り返し。

そのなかでフィールドを縦横無尽に駆け回り、最もボールに触れたのはアツヤだった。

（アツヤ……）

彼の様子は、士郎に幼少期を思い出させた。

現在のような二人のコンビ戦術が固まるより前。アツヤはFWでありながら、ポジションに囚われずディフェンスにも思い切り参加していたのだ。

その結果、却って士郎やチームのディフェンスの邪魔になることもしばしばだったので、当人はサッカーは自由に、楽しくやればいい”と言っていたものの、成長してチームの形が確立したこと、オフエンス・ディフェンスの全てで働くのは難しいという現実から、鳴りを潜めていったプレースタイルだった。

彼はいま、その頃に戻ったかのようなプレーを見せているが、その

心の内は当時とはまるで違う。

ボールを持つその度に、一人ゴールへ駆け込んでデザームへぶつかっていく。

「エターナルブリザード・V3イイ！」

「ドリルスマッシュヤーアア!!」

繰り返される激突。

普通の試合でもそう見られないシュート回数、しかしそれを防ぎ続けているデザームにはまるで疲れが見えない。

事実、ここまでの攻防でも彼は一切ゴールを許していないのだ。

「悪くはないが、これだけ食らい続ければ食傷してしまうというものだ。……味付けを変えてみようか」

七度目のシュートを止めたところで、デザームはそう呟きながらボールを投げる。

それを受け止めたのは、アツヤではなく、士郎であった。

「知っているぞ。お前たち兄弟が真・帝国学園で放った必殺技を！」

「！」

「かのキング・オブ・ゴールキーパーから点を奪ったシュート。出し惜しみなどするな」

私が止めてやるのだから。

そう言外に笑うデザームを睨みつけるアツヤの傍に、士郎がボールと共に歩み寄った。

互いに点を取れていない以上、先制点は重要だ。

ここまで来て、打てる手を打たないわけにはいかない。

「いくよ、アツヤ。いいね？」

「……ああ」

兄の言葉に、今度はアツヤも重々しく、無念さを滲ませて俯き加減になりながらも頷いた。

それを確認してから、二人は息を合わせて駆け出した。

徐々にスピードを上げていき、気を高めていく。

「うおオーー！」

「つらァー！」

『ウルフ——』

狼の爪のような鋭いキックを、ボールを切り裂かんばかりに打ち込む二人。

ボールの限界寸前まで打ち込んだ末に、遠吠えのように吠えてそれを放った。

『——レジエンドオオ——!!』

シュートの距離に過不足はなく、威力のほぼ100%を保ったままゴールへ到達するだろう。

これこそが、現在の雷門イレブンの最大火力。
まさに待ち望んでいた勝負に、デザームは凶悪な笑みを深めて気を放つ。

「ドリルスマッシュアアア!!」

吠え猛る狼の牙を微塵に粉碎せんと、高速回転するドリルが突き出された。

その余波は、誰もが固唾を飲んで見守ることしかできないほどに激しい。

「いけエエエ——!!」

喉が張り裂けんばかりの音量で、アツヤが叫ぶ。

これが通じなければ、もう後がない。

必ずこれで突破してみせようとその一心で、少しでもその声がボールに力を与えてくれないかという思いで声を張り上げる。

「ムウウオオオオオ!!」

その思いが通じたのか。

デザームの操るドリルの回転がだんだんと鈍っていき、ぎりぎりという擦れ合うような耳障りな金属音を鳴らしながら、やがて完全に動きを停止する。

「なに……!?!」

そこからは一瞬だった。

回転を止めた鉄の塊はあっさりと狼の牙に噛み砕かれて、ボールが
ゴールネットへ突き刺さったのだった。

「よ——」

後方から見守っていた円堂が、ガッツポーズを決める。
他の皆も、彼と同じ気持ちだった。

この緊迫した試合における先制点、それを自分たちが勝ち取ったのだから。

「デザーム様!？」

イプシロン・改では、奥の手を破られたチームのリーダーの姿にゼ
ルや他のチームメイトたちが、その名を呼び掛けながら彼の下へ駆け
寄っていく。

しかし、微かに敗北のイメージが脳裏に現れ出したのが表情に滲み
出ている彼らに比べ、デザームは未だに不敵な笑みが崩れていない。

「……狼狽えるな。取られた分は取り返す」

それだけ言って、デザームは彼らに持ち場ホジションへ戻れと指示をする。

イプシロン・改の面々は困惑を抱えながらも命令に従って配置に着
くが、再開のキックオフを経ても動揺は鎮まらなかった。

無論、雷門イレブンはその反対だ。

このまま追加点を取り、勝負の天秤をさらにこちらへ傾けるつもり
で猛攻を仕掛けたのである。

その中心になったのもアツヤだった。

「オラア！」

体格で上回られているファドラなどにも億さず体をぶつけて迫り、
ボールを奪い取る。

照りつける日差しが、そんな彼から飛び散る汗の雫をキラキラと眩
しく見せていた。

(このまま勝負を決めてやる!)

自力のみで破ることができていれば最良だったが、それに拘って試
合に負けてしまえば元も子もない。

兄の言葉に素直に頷いたのは、そんな彼なりの責任感によるもの。
しかし、土郎と走って再びゴールを狙うアツヤは気づいていない。
兄との協力を拒んでいたのは、そうして勝っても自分の力とは言え
ないから。

それは、兄と二人ならば必ず勝てるという前提に基づいている。

もし二人の必殺技も通じなかったら。
そんな可能性を、意識から排除していたことに。

『ウルフレジエンド!!』

遠吠えとともにゴールへ向かう巨狼。

それを待ち受けるデザームの口は、禍々しく弧を描く。

「そうだ……更なる成長に必要なのは、今のままでは打ち勝てぬ逆境
……!」

デザームが、研ぎ澄ました気を放って顕現させたのは、いままでよりもサイズを増した鋼鉄^{ドリル}だった。

「ドリルスマッシャー——」

回転はより速く、鋭く。

そして自壊して砕け散らんとばかりに激しく。

「——V2ウ!!」

大気を巻き込んで渦巻く気流を生み出しながら、その先端がボールと激突した。

「なっ……」

アツヤが目を見開くが、不思議なことではない。

雷門イレブン^{カレ}が戦いで何度も見せてきた、逆境での進化。

しかしそれは、彼らだけの特権というわけでもないのだから。

「……ハ、ハハハハハハ! 私のっ、勝ちだ……!」

ボールがデザームの手に収まるという決着が、そのことを雄弁に物語っていた。

「うそ……だろ……」

呆然として、立ち尽くすアツヤ。

その身体からは先ほどまで味わっていた暑さが嘘のように消えていき、背筋に氷が入ったかのような寒気に反転する。

「感謝するぞ、雷門イレブン。お前たちのお蔭で、私は更なる成長を遂げた」

「アツヤ——」

得意げに語るデザームを他所に、だらりと腕を下げて動かないアツヤへ土郎が声をかけるが反応はない。

いまのアツヤの耳には兄の声も届いていない。

彼の視線が向いているのは、デザームが握るボールのみ。

「さあ、もつと強く打ってこい！　それが更なる成長を生み、更なる熱き勝負の糧となる！」

「……上等だ……！」

纏わりつく“もうダメだ”という諦めを振り払い、アツヤはデザームの投げようとするボールを受け止めるべく足を動かそうとした。

「——え」

そのとき、間の抜けた声を出したのは、アツヤ自身だった。

雷門イレブンの誰もが、目の前で起こった出来事で、思考に一瞬の空白を生む。

見守る全ての人間が、言葉を失って静寂を作る。

彼らの視線の先では、踏み出した足の膝がガクリと折れたアツヤが、前のめりに倒れ込んでいたのだった。

エースは窮地に遅れない

「アツヤ!?!」

アツヤは最初、自分が倒れたのだということすら認識できていなかった。

突然低くなった目線。霞む視界。自分の名を呼ぶ声は、頭蓋で反響して何重にもなって聞こえてくる。

明らかかな身体の異常だが、彼は精一杯に強がってみせる。

「……大丈夫、だ。汗でちよつと滑っただけ……」

そう言っただけながら立ち上がろうとするが、その意思に反して身体は一向に動かない。

支えにしようとして地面へ突き立てた腕にいざ起き上がろうと力を入れれば、足と同じようにあつさりとは折れてしまい、支えの役目を果たさなかった。

その動作を、何度も何度も繰り返す。

もそもそとして、端から見れば滑稽にも映る光景だったが、本人は至って真面目に試合を再開させようとしていた。

(……くそ、動けよ、俺の身体！　なんでだ！　なんで立ち上がれねえ!?)

アツヤは強がる笑みの下で、いつまで経っても思い通りに動かない身体へ焦りを募らせる。

そして、彼の異変に焦ったのは彼自身だけではない。

「アツヤくん!」

事態を見た瞳子が、マネージャーたちと共に彼の下へやって来たのだ。

彼女はすぐにアツヤの体調を診ようとして、真っ先に額へ手を当てた。掌が彼の額に触れた瞬間、彼女は苦々しげな表情に変わる。

「……!　アツヤくん、あなた凄く熱があるわよ。それに汗も、その量は尋常じゃないわ」

言われて、他の者たちも彼の全体から見た異常に気付く。

激しい運動をしていたから、では片付けられない量の汗を彼は今も

滝のように流していた。

その様子は真・帝国学園で倒れた源田が見せた姿に瓜二つ。

「監督！ アツヤは、どこか怪我を!」

「いいえ、おそらくは怪我じゃなくて……そう、言ってしまうえば体力切れ」

「ええ!？」

「バテちまったのか?」

瞳子の見立てを聞いた雷門イレブンには、そんなことで、と驚くメンバーも少なくない。

しかし、人間の身体は適切な休息を取らなければ、それが原因で命を落とす可能性も冗談ではなくなるほどにデリケートなもの。

ましてや、未成熟な子ども身体ならば尚更に。

アツヤはこの、沖縄という故郷とはあまりにもかけ離れた常夏の環境で、この地にやって来る以前と同じペースで自主練習を行っていた。

チームで熟す普通の特訓とてハードなものを、それに続けての慣れない暑さ、慣れない気候の中での激しい運動。それらは彼から着実に体力を奪っていたのである。

その状態でイプシロン・改との全力の激闘を繰り広げたために、残り僅かな体力もあつという間に使い切ってしまったのだろう。

「デザーム相手のシユートの連発。加えて、さっきまでの大立ち回りも余計に体力を削ったんでしよう」

そんな無茶の末に、先ほどのデザームとの戦いの決定的な決着が、アツヤの心身への止めとどめとなった。

もはやデザームを倒すことはおろか、フィールドに立っていることすらできない。しない。

「……交代よ。あなたはこれ以上戦わせられません」

彼女の言葉に従い、円堂と鬼道がアツヤを助け起こしてベンチの方へ連れていこうとする。

しかし瞳子の宣告は、いまのアツヤにとっては死刑宣告にも等しい。もうプレーできる状態ではないと現実を突きつけられても受け

入れられなかった。

「さて、放せよ……！」

二人の手を振り解いたアツヤはいまにも再び倒れそうな足取りで、イプシロン・改のゴールを、デザームを睨んで叫ぶ。

「まだ前半だぞ！俺がこんなことで下がるかよ！」

「アツヤッ!!」

そのアツヤの叫びさえ掻き消して、士郎の一喝が響く。

アツヤは今度ばかりは従えないと言おうと兄の方を振り向き、彼の顔を見て言葉を失う。

「お願いだから、言うことを聞いて」

その兄の言葉は、アツヤもはね除けられなかった。

立ち尽くすアツヤに向けて、鬼道が重々しく口を開く。

「……アツヤ。俺たちは、お前を頼り過ぎていた」

「鬼道？」

「お前がエースの在り方について思い悩んでいることに、俺は薄々だが気付いていた。気付いていながら、なにもできずにずるずるとここまで来てしまった」

「ううん、鬼道くんのせいじゃないよ。僕のせいだ。僕が一番、近くに居たのに……」

「いいや。これは誰のせいでもない、チームの問題だ。アツヤにさえ繋げば、点を入れてくれる……そんな思いは、かなりの重圧だったはずだ」

「そんな……」

殆どの者にとって、鬼道の語った内容は青天の霹靂だった。

しかし、反論はできない。

染岡が居なくなつてから、ますますボールはアツヤに集中することになった。

アツヤ
エースにボールを託しさえすればなんとかなる。

そんな期待を、この勝ち気だった少年の背に乘せていなかったと言えば嘘になる。

彼もまた、自分たちと同じ子どもだったというのに。

「すまなかつた、アツヤ。だが、仲間としてこれ以上の無茶はさせられない。いまはとにかく休んでいてくれ」

俯くアツヤの表情は見えない。

しかし、今度は円堂たちの手を拒むことはなかった。

ベンチに座らせた彼に、円堂が語りかける。

「……アツヤ。ごめんな。陽花戸中での夜の話、お前にとっては精一杯のSOSだったのかもしれないのに。俺、自分のことばかりで全然気付いてやれなかった。こんなに無茶するまで、なんにも知らないままだった」

そこで言葉を区切り、円堂はその瞳に強い光を宿して、弱々しいアツヤの瞳を見つめる。

「ここで見ていてくれ。お前の分まで、俺たちが戦い抜くから」

その宣言の後、円堂は自陣のゴールへ戻っていく。

「……惜しむらくは、身体がまだ出来上がっていないなかったことか。せめて、やつがもう一年早く生まれていればな。なんともつまらん決着だ……」

一連のやり取りを遠目に眺めていたデザームは、誰にともなく呟く。

「さて、他に私を楽しませてくれるやつが居るかどうか」

居ないのならば、楽しみを守りから攻めへと切り替えるまで。

サッカーへの熱さを抱きながらも、彼は鋼のように冷たく、雷門イレブンを見定めていた。

程なくして再開した試合。

彼らの戦う様を前に、アツヤは彼らの言葉と表情の映像を脳裡で反芻していた。

(兄貴の方が、泣きそうな顔してた)

ずっと一緒だった兄。

その兄のそんな顔を、アツヤはいままで見たことがなかった。

自分は彼らに心配をかけたくなって、染岡あいはらに託されたチームを守りたくて、強いエースストライカーでいたかった筈だ。

だというのに、結果はこの有り様だ。

大きな攻め手を欠いた雷門イレブンはイプシロン・改相手に防戦一方となり、デザームの前に辿り着くことすらできずにいる。

「今度こそ取らな―！」

「アツヤくんの分まで――うわあー!!」

時折上がるパスも、それを受け取るべきFWである浦部と目金がいプシロン・改のDFたちに太刀打ちできず、悉く奪われてしまう。

「アイスグランド―！」

「チツ……」

「はあ……はあ……通さないよ……!」

攻め上がるゼルを凍りつかせた士郎だが、その息は上がってきている。

否、彼だけではない。雷門の守備陣全体が、著しい消耗を見せていた。

延々と続く防衛は、守る側には多大なプレッシャーとなる。そして緊張は動きの無駄を増やし、動きの無駄は余計な疲れを招くのだ。

「ガニメデプロトン 改!」

「正義の鉄拳!」

堰を切ったように、守備を突破して雷門ゴールへ流れ込むイプシロン・改。

ゴールに立つ円堂が、そんなギリギリの守備の最後の砦だった。究極奥義を以て、イプシロン・改の猛攻を防ぎ切る。

前半の終了が迫る中、幾度も攻防を繰り返した末に、ようやく浦部と塔子がイプシロン・改のゴールを捉えた。

『バタフライドリーム!』

二人の放ったシュートは、ふわふわと飛び回る蝶のような不可思議な軌道でゴールへ向かう。

大阪での試合では、その動きで円堂の放った“爆裂パンチ”をかわして点を奪った必殺技でもある。

「子ども騙しだ!」

しかしデザームには通じず、握り潰さんばかりにボールを鷲掴みさ

れて止められてしまう。

大海原中GKの必殺技を打ち破るだけの威力があつたにもかかわらず、デザームは必殺技も使わずに防いでみせる。

彼はそのまま、そのボールを鬼道へ向けて投げつけた。

「いつまで経つても来ないものだから待ちくたびれたぞ。打つてこい！ 全て受けてやる！」

「……………一之瀬！」

「ああ！」

『ツインブースト 改!!』

今度は鬼道と一之瀬の連携シュートがデザームへ迫る。

「……………ワームホール V2」

しかしそれも、デザームの開く異空間に捕らわれて彼の足下へ収まってしまった。

さらにデザームはボールを雷門へ投げる。

『ザ・フェニックス!!!』

三度目の正直。

そう言わんばかりに、円堂、一之瀬、土門の必殺技が放たれた。

凄まじいシュートの数々だが、デザームの眉間にできた皺はだんだんと深くなつていく。

「ワームホール V2」

先ほどまでの高笑いが嘘のような冷たい声音で、不死鳥もあつさりと落としてしまった。

彼は眉間に深い皺を刻む程に顔をしかめ、ベンチで虚ろに腰掛けたままの少年を一瞥して吐き捨てるように呟く。

「やはり、やつが居らねばこの程度か……………」

そして掴んだボールを、フィールドの外へと投げ捨てた。

最後のチャンス雷門は不意にした。

故にここからは、自分がシュートを楽しむ番だ。

デザームが、そう決めた。

「聞けえい、雷門イレブン！ もはやお前たちのシュートに興味は失せた！ よつて、ここからは……………円堂に楽しませてもらうぞ！ ——

審判」

——私とFWのゼルとで、ポジションオンチエンジだ。

その宣言は、雷門イレブンに衝撃を与えた。

彼がしたのはルール上なんら問題のない行為だ。

しかしこれは大抵の場合、先発も控えも、^{スタメン}全てのGKがプレー不能になってしまった際に適用されるもの。

当然だが、ゴールに立つのはただユニフォームを着せただけの急造GKなどより、本職のGKの方が望ましいのだから。

そのため本来は滅多に起こらない出来事の筈だった。

「宣言しよう、円堂守。お前の『正義の鉄拳』を、希望を、闘志を、全てこの私が破壊し尽くすと！」

そんなイレギュラーを起こしたデザームは、ユニフォームの姿を他の者と同じ真紅の装束へと変えて告げた。

傍目からも感じられるのは、彼の心身に満ち満ちている自信。

雷門イレブンは、すぐにそれがハツタリや酔狂でないと思いつくことになる。

「……くっ!?!」

「とはいえ前半は残り18, 5秒。手始めに先の失点を取り返そうか！」

雷門のコーナーキックから再開された試合。

鬼道からボールを瞬時に奪ったデザームが、燃え上がる爆炎の如き荒々しきでゴールへ駆け出したのだ。

「私の望みは円堂守だ！ 楽に終わりたいくば道を開けるがいい！」

「誰が……おわ！」

「ううっ！」

立ちほだかる雷門イレブンのディフェンスをもともせず、ただドリブルのパワーとスピードで圧倒して一直線に円堂の下へ走るデザーム。

あつという間にペナルティエリアまで侵入した彼は、そこでボールを踏みつけながら停止した。

「さあ、覚悟はいいか！」

「来い！ アツヤたちの取った一点、絶対守ってやる！」

円堂の決意に満ちた言葉に、デザームはそうでなくてはと笑って――
――足下に開いた異空間へ、ボールと共にその姿勢のまま落ちるよう
うにして消えた。

姿のなくなったデザームに動じず、円堂は構える。

あの男がここまでして小手先の技で来るわけがないと確信して。

「受けてみる！ 我が最強の必殺シュート、最強の槍の一刺しを！」
どこからか響くデザームの声。

それに続くように、空中に先ほど彼が消えたものと同じ穴が開いた。

しかし、そこから出てきたのはデザームではない。

「――グングニル!!」

禍々しい紫色の光でできた巨大な槍が、流星のように飛び出してきたのだ。

「ハアアア！ 正義の……」

凄まじい速さで迫るシュートを、円堂は最大限に力を込めて迎え撃った。

「……鉄拳!!」

巨大な黄金の拳が、槍の穂先を受け止める。

一歩も引くまいと地面を踏み締める円堂だが、その意志とは裏腹に、足はずりずりと押されて身体が後方へと下がっていった。

（なんてパワーだ……！ けど、じいちゃんの究極奥義が負けるわけ
ない！）

それでも祖父の遺した究極奥義を信じて、負けじと拳を突き出した
円堂だったが、その思いは儚く打ち砕かれた。

ここまで雷門のゴールを守り続けた鉄拳がついに貫かれ、霧散して
しまう。

「なに!? ぐあぁっー!」

風を切って進む槍は、円堂も邪魔だとばかりに弾き飛ばして、ゴール
ネットに突き刺さった。

同時に、前半終了のホイッスルが鳴る。

スコアとしてはまだ同点だ。しかし、ここまでイプシロン・改の猛攻を防ぎ続けた究極奥義の敗北は、雷門イレブンへ点以上のダメージを与えた。

「そんな……」

「『正義の鉄拳』が、破られるなんて……」

「言い忘れていたが、私の本来のポジションはGKではない。FWフォワードだ」

満足げにデザームは笑って、ベンチへと戻っていった。

ハーフタイムを挟んで始まった後半は、デザームの独壇場だった。

彼がボールを持つだけで、そのままシュートへ直結する。

誰も彼を止められなかった。

ただドリブルをしているだけの彼にフィールドプレイヤーたちは撥ね飛ばされ、GKである円堂は、シュートを受けて傷ついていく。

「地球では、獅子は兎を全力で倒すという。……手加減するなどとは期待するな。私もお前たちを、全力で叩き潰すぞ！」

「当たり前だ……！ 俺は、諦めない。絶対にお前を止めてやる……！」

そして再び、紫色の閃光が走る。

ボロボロの身体で円堂はそれを、鉄拳が砕けても尚全身で止めようとして、ゴールネットへ張り付けにされてしまった。

「くっ……円堂……」

「キャプテン……」

それを鬼道たちは、倒れ伏しながら見ていることしかできない。

彼らもまた、進撃するデザームを相手に幾度も身体を張って立ち向かい、限界に達している。

誰もが満身創痍。

円堂がまた倒れるのをベンチから見ていたアツヤは、己の不甲斐なさに身体を震わせる。

「……っ……う……ちくしょう……！」

その姿が、誰にも見えないように。

頭から被ったタオルで顔を隠し、俯きながら、静かに彼は涙を流した。

このままではチームが本当に壊されてしまう。

しかし、いまの自分には何もできない。

肝心なときに何の役にも立てないやるせなさ。情けなさ。悔しさ。無力感。

これまでずっと、自信という氷に包んで騙し騙しに耐えてきた思いが、雪解け水のように眼から溢れていく。

そんなアツヤへ、不意に上から何かが覆い被さった。

「……………」

その正体は、橙色を基調にしたフード付きのパーカーだった。

デザームたちの纏う何もかもを焼き尽くすような危うさを秘めた真紅ではない。その色合いは、凍えた身体を癒す暖かい炎のようだった。

ベンチを通り過ぎてフィールドへ歩いてくるパークアの持ち主の顔を、全国大会を戦った面々は穴が開く程に凝視する。

逆立った白髪。稲妻を思わせる眉毛。切れ長の鋭い目付き。

瞳に宿る、炎のようなサッカーへの情熱。

アツヤの目に映るのは、逞しく、頼もしい力強い背中。

彼らは、その男を知っている。

「お前は……………」

忘れるはずもない、雷門の誇る炎のエースストライカー。

『豪炎寺!!』

彼の登場は、絶体絶命だった雷門イレブンの心を蘇らせた。

「……………待たせたな」

「くっつ！ いつもお前は遅いんだよ！」

豪炎寺の言葉を噛み締めて、円堂は軽口を返す。

すぐに交代した彼は、10の数字を背負ってフィールドに力強く立ったのだった。

「豪炎寺修也……！」

デザームはその登場を歓迎する。

ジェミニストームに手も足も出ずにチームを去った彼が、力も付けずに戻ってくるはずがないと。

「見せてみる、お前の実力を！」

試合再開直後。

豪炎寺は、暴走機関車のような進撃を開始したデザームの、横を通り過ぎていった。

「……なにい!？」

ゴールへ向かう前に力比べをするつもりだったデザームが、完全な肩透かしを食らって思わず声をあげる。

ボールも持たないまま敵陣へ駆け込んでどうするとかいうのか。

「いいだろう……！ ならばお前がシュートを打つ暇も与えず、私が円堂守を破壊してやろう！」

デザームはそれを挑発と受け取ったが、円堂はこの光景に覚えがあった。

それは彼らの原点。

当時は敵として相対していた鬼道も、豪炎寺の狙いに当たりをつけて笑う。

「止めだ、円堂守ウー！」

放たれた神槍が、今度こそ円堂を完膚なきまでに打ち倒さんと迫る。

それを迎え撃つ円堂の心はこの空のように晴れ渡っていた。エースの信頼ならば、何度だって応えてみせようと。

目の前のシュートを防ぐ手立ても、いまようやく理解できた。

「これ以上、点は渡さない！ 正義の鉄拳——」

ハーftime中、立向居は円堂の「正義の鉄拳」を獅子の子のようだと評した。

その言葉通りに捉えるならば、究極奥義もまた、子どもが大人になるように成長する筈。

「G2!!!」

進化し続ける必殺技。故にこそ円堂大介は、これを究極奥義と呼んだのだと。

「こういうことなんだな、じいちゃん!」 究極奥義に完成なし!」

「なんだと……!?! この短時間で、やつ技までもがパワーアップを……!」

その攻防はこれまでとは真逆の決着となった。

光の槍が、幾度も貫いた黄金の拳を前に、粉碎されたのだ。

吹き飛ばされたボールが、相手ゴールの方向へ飛んでいく。

「いけ、豪炎寺!」

かつて、帝国学園の「デスゾーン」を初めて防いだときのよう。

円堂が守り抜くと信じた豪炎寺が、そのボールを受け取った。

その練習試合の結末を覚えている鬼道は、しかしそれだけはかつてと違うものになるだろうと見越していた。

(これは、決まるな)

この一瞬だけ、豪炎寺の意識は勝負の次元からなくなっている。

彼にとってこれは、チームへの誓いであり、ある意味では儀式に近いのだろう。

そして鬼道から見て、今の彼を止められる可能性があるGKは、この場に居ない一人だけだった。

「真……」

「ワームホール V2!」

「ファイアトルネード!!!」

以前とは桁違いの量の炎を纏ったボールがゴールへ迫り、ゼルの開いた異空間の穴へ吸い込まれて姿を消す。

「ふん、この程度か?」

あっさりと防げたことに拍子抜けしたゼルが笑う。

しかし豪炎寺は涼しい顔をして、彼に背を向けながら言った。

「おい、お前。そこに居ると危ないぞ」

ゼルは豪炎寺の言葉の意味が理解できなかった。
もうこの男の放ったシュートは“ワームホール”の向こうに消えた。一体何が危ないというのかと。

問い質そうとしたとき、視界で火の粉が舞った。

シュートの残滓ざんしかと思われたそれは、しかしどんどん量を増やしていく。

まるで、次元の壁を越えて、抑えきれない熱が漏れ出してきているかのように。

「まさか」

その言葉と、“ワームホール”の異空間を突き破った炎の渦が姿を現すのは同時だった。

「なっ、ば、あッガアッ、アッ、アッ、アッ、アッ、アッ!!!」

断末魔の絶叫を残し、ゼルの姿が炎に巻かれて消える。

ゴールの一带を覆った炎のボールが晴れた先にあったのは、ネットに身を委ねる焼け焦げたボール、そして全身と口からプスプスと黒煙を立ち上らせて膝から崩れ落ちていくゼルの姿だった。

「あれが、豪炎寺くん……!」

「破壊力は相変わらず……いや、大きくパワーアップしたな」

「なんかカッコいいやん!」

「かあーっ、痺れるぜ!」

以前の彼を知る者も、知らない者も、等しく彼に目を奪われる。

1点。このシュートで生み出されるのはたったの1得点だ。

しかし、この得点もまた、数字以上の力を持っていた。

炎のエネルギーライカー
豪炎寺修也は健在であると、この場の誰にもそう知らしめる力を。

サッカーの熱は収まらない

帰還した豪炎寺の放ったシュートによる得点。

これによりスコアは2―2、同点である。

「うそ……」

しかし、微かな怯えを零すマキュアのように、イプシロン・改は動揺を抑えられない。

確かにゼルはGKとしてデザームに及ばない。

だがそれでも、デザームに代わってエイリアのゴールを守るのに不足ない力があつた筈だ。

その彼があんなにも容易く、必殺技ごと焼き払われて敗れるなど、俄には信じがたい異常事態だった。

「メラメラさせてくれるじゃないか……!」

それほどの力を見せつけた豪炎寺に燃え上がったのはデザームだ。

己の必殺技を止めてみせた田堂といい、つくづく楽しませてくれるものだと、笑って猛る。

「で、デザーム様、ゼルが!」

そんなデザームに対して、メトロンが慌てふためいた様子で倒れ伏したGK姿のゼルを指し、GKへ戻るよう訴えかける。

イプシロンにおいてGKをできるメンバーは、ゼルと、そして他ならぬデザームしかない。

ゼルが焼却された以上、必然的にゴールに立たねばならないのはデザームだ。

しかし、デザームにはまだその気はなかった。

無論、ゼルから一撃の下にゴールを奪った豪炎寺のシュートを己の手で迎え撃つのは望むところだが、それで防いでも引き分けにしかない。

しかしデザームには、また同点引き分けなどという中途半端な結果にするつもりなど毛頭ない。

彼らか、自分たちか。勝負はどちらかが敗れるまでと、そう決めて挑んだ以上は必ず天秤を傾けてみせる。

得点で並ばれたのならば、もう一度突き放すまでだ。

今度こそ円堂の究極奥義を打ち砕くことで。

そのためには、デザームがFWとして再びシュートを放つ必要があった。

「フム……ケイソン、ゴールに——」

「お……お待ち、ください……!」

とはいえ、GKが不在というわけにもいかない。

一先ず自分がシュートを打つまで、適当な者をゴールに立たせておこうとデザームが指示を飛ばしかけた間際、後方からの声がかき消された。

「ゼル……!」

「かあつ……かは……俺は、まだやれます。お気になさらず……!」

全身にこびりついた煤を払う手間も惜しいとばかりに、力を振り絞って立ち上がったゼル。

彼は明らかに無理をした笑みで、まだ戦意までは焼き尽くされてはいないと主張する。

それを受けてデザームは、やはり笑った。

「それでこそだ……!」

そうしてイプシロン・改は、デザームをFWに据えたまままで試合を再開した。

キックオフと同時に、デザームはゴール目掛けて爆走する。

もはや余興は不要。血と汗を煮えたぎらせて円堂を睨む。

「いくぞ円堂。今度こそ、終わりだ!」

「来い! もう、絶対にゴールは割らせない!」

「お前を倒す! お前らの全てを打ち壊す!」

互いの闘志を叩き付け合う、チームのキャプテンたち。

そしてペナルティエリアを前にして、デザームはまた異空間へと飛び込み、シュート体勢に入った。

もう一度、進化したあの鉄拳を穿ち貫くべく、足へ力を漲らせる。

「グングニル——」

その足を打ち込んだ瞬間、ボールは光の槍へと姿を変える。

輝きはより強く、威力はさらに跳ね上がって、異空間の出口へと走っていく。

「――V2!!」

デザームの熱狂的な情熱、執念が見せた更なる進化。

その結晶である神槍を、固い決意を全身に漲らせた円堂が堂々たる姿で迎え撃つ。

「正義の鉄拳 G2!!」

進化した究極奥義。輝く拳が風を切り、真っ向から槍を受け止める。

しかし、確かに進化した「正義の鉄拳」が「グングニル」を打ち破ったが、今度は「グングニル」も進化していた。

「ぬっ……ぐぐ……!!」

再び押され始めた円堂。

全力で踏ん張るが「正義の鉄拳」が打ち砕かれるのは時間の問題だった。

飛び出した拳が、受け止めているシュートに徐々に押し返されていく。

「勝つのは私だ！ 勝利は我々のものだ！」

「くうっ……」

「正義の鉄拳」は、生身の拳の寸前まで押しやられた末、ついに粉砕されてしまう。

もはや防ぐ手立てはなく、またゴールを奪われるしかない。

それでも円堂は食い下がり、手だけと言わず頭も使い、足は地面にめり込まんばかりに踏み締め、文字通り全身全霊を懸けてボールを抑え込もうとした。

今度こそゴールを、エースの勝ち取った一点を、守ってみせるという一心で。

その一念が円堂に更なる力を与えたのか。

「だああああー……!!」

「!？」

円堂に額へ思い切り激突したシュートは、彼の頭から新たに飛び出

した拳によって弾き飛ばされたのだった。

その光景に瞳子と鬼道が目を見張る。

他の者たちも、円堂の見せた新たな技の片鱗おほと思しき現象に目を奪われる。

「新たな必殺技……なぜお前はこれ程までに……っ!？」

さしものデザームも、更なる進化を遂げた渾身のシユートさえ防がれたことには動じずにいらなかった。

円堂に満ちる力の源とはなんなのか。

そんなことを考えて、彼はすぐ近くを通り過ぎたボールを取り損ねてしまう。

すぐにイプシロン・改と雷門イレブンが殺到するも、激しい取り合いの末にボールはラインを割って試合が止まる結果となった。

(……いや、やつの力がなんなのかなどどうでもいい。重要なのは、やつらの力の全てを打ち砕くこと!)

眼前で行われた競り合いなど意識の外にしてそう思い直したデザームは、雑念を散らすように吠えた。

攻撃が防がれたのなら、次は防御だ。

間違いなく、あの男は再びシユートを放つ。

ならば次にそのシユートを受けるのは、己をおいて他にいない。

「審判、ポジションチェンジだ! 私がキーパーに戻る! そして――」

額に青筋を立てた凶悪な形相で豪炎寺に指を向けて告げる。

「お前を止める! お前らの全てを叩き壊す!」

そうして再びゴール前にデザームの姿が戻り、試合が再開する。

イプシロン・改のスローインから始まり、ボールを取ったイプシロン・改の攻撃が再び行われようとしたが、そこに立ち塞がったのはあらゆる意味でこの試合の中心となった男だ。

「……!」

「うっ……くっ……」

ボールを取った勢いそのままに攻め上がろうとしたゼルは、豪炎寺の眼差しを前に、彼を避けた進路を取ってボールを回す。

うねる炎は一塊のようになって、筋骨逞しい巨漢——魔神のように姿を変える。

「あれは……」

彼もまた、以前は未完成だった必殺技を完成させていたのである。炎の魔神は掌の上に主を乗せて、高く高く投げ上げた。

燃え盛る炎を帯びて高度を上げる豪炎寺は、身に纏う爆炎の全てをボールに込めるように蹴り抜いた。

「爆熱ストーム G2!!」

ボールは火球になって、ゴール目掛けて降ってくる。

それを前にデザームは欠片も臆することなく、右手を掲げた。

「必ず止めてみせる……! ドリルスマツシャー V2ウウウ!!!」

そして現れた巨大ドリルを、アツヤとの戦いのように炎の渦へと差し向けた。

激突は、まるで地上にもう一つの太陽が現れたようだった。

フィールド、観客席、一帯を炎が明るく照らす。

「オオオオ……!」

デザームはドリルを支える腕を力強く突き出し、シユート弾き返そうとする。

しかし、シユートの力は彼の予想を超えていた。

「ツ、なんだ、このパワーは!?!」

この試合で初めて、彼の足が後ろへ動く。

力で、彼が押し負けているのだ。

ドリルの回転が鈍るのに反比例するように、爆炎は勢いを増してきている。

「くっ……負けるものかアア!!」

回転の止まったドリルが砕かれ、無手になっても、デザームは押え込もうとする。

「ムウウウ……オオオオアアア!」

襲い来る炎を吹き散らさんとばかりに轟くデザームの雄叫び。

いま身体を満たす熱はこの炎か、それとも内側から込み上げているものなのか。

どちらでも構わない。

いま自分は、使命ではなく、一人の選手としての意地のために眼前のシュートへ挑んでいたのだから。

踵がゴールラインの、最後の一線まで押し込まれる。

やがて抑えきれなくなったボールが手から外れたその瞬間、デザームは悟った。

円堂の、そして豪炎寺の力の源を。

(これが、エースか)

期待は時に、受ける者の心を押し潰す重圧となる。

しかし彼らにある繋がり——信頼は、時として能力以上の力を引き出させるのだ。

炎が周囲へ燃え広がって勢いを増すように、信じられているという意識が豪炎寺に力を与え、彼が信じて背中を預ける姿が円堂に力を与えたということだろう。

(全く。やつらの方が楽しそうだ、などと思うとはな)

溢れ出した炎を前に、少年は笑った。

次の瞬間に、ゴールネットが内側から突き伸ばされた。

雷門イレブンの三点目、逆転である。

同時に鳴る、試合終了のホイッスル。

それは雷門イレブンの勝利を称えるように、高らかに大海原へ響き渡った。

「やったアア——！」

感極まった円堂たちが、この大逆転の立役者である豪炎寺の元へ集まっていく。

あつという間に、彼を中心とした輪が出来上がった。

向き合う円堂と豪炎寺は、静かに見つめ合い、固い握手を交わす。

雷門の炎のストライカー、その完全復活だった。

友との再会を喜ぶ彼を、それまでの苦悩を知る土方が涙ながらに祝福する。

その光景を、煤を払って立ち上がったデザームは、凧いだ海のように

に落ち着いた雰囲気で見渡していた。

「デザーム様……」

彼らを見つめる彼の心中を計り兼ねたゼルが、その名を呼ぶ。

その声に振り向いたデザームは、自分を見るイプシロンに問いかけた。

「お前たち。サッカーは、楽しかったか？」

「はっ？」

「我々はこれまで、使命のためにサッカーをしてきた。それが今日、使命を果たせずに敗れた。それでも、楽しかったか？」

穏やかな声音と瞳。

イプシロンたちはその表情が、エイリア学園のデザームではなく、ただの■■■■しょうねんに戻っていることに気付く。

皆、ふつと笑顔になりながら、問いに答えた。

「ええ、もちろんです」

「……そうか」

デザームが彼らの言葉を噛み締めるようにしていると、そこへやって来た円堂が手を伸ばした。

握手を求めるように開かれた掌に、デザームがきよんとする。

「地球では、試合が終われば敵も味方もない」

そして円堂の言葉に、目を見開いた。

「お前たちのしていることは許せない。けど、サッカーが楽しいってことは、俺たちもわかり合えるはずだって思うんだ」

「……フツ。そうだな。サッカーとは、そういうものだな……」

長らく忘れていたことを思い出したように、デザームは清々しい表情で空を仰ぎ、そして円堂の手に自らの手を伸ばす。

「次は、必ず勝つ」

「ああ。何度だってやろう」

相容れない者同士でも、サッカーを通じれば、一瞬でもこうして手を取り合える。

そう思える光景が生まれる、その寸前。

青白い光が、彼らを照らした。

「ムツ……」

「なんだ?！」

光の中から姿を現したのは、雪の如く白い髪を風に靡くように流した少年だった。

腕を組んで立つ彼はゆっくりと目を開け、冷たい闇を孕んだ眼光を露にする。

「私はガゼル。マスターランクチーム『ダイヤモンドダスト』を率いる者」

「ガゼル様……」

「今回の負けで、イプシロン君たちは完全に用済みだ」

彼もまた、グランやバーンと並ぶ実力者。

それがやって来たのは、敗北者の処分と、次いでイプシロンを下した雷門イレブンの観察のためだ。

まずは前者を手早く済ませようと、腕を振り上げてデザームたちに冷たい視線を向ける。

「……………」

デザームは静かに円堂の側から後退あとすきり、チームメイトの元へと身を引いた。

それに気付いて見つめる円堂の目に、デザームは穏やかな微笑みを見せる。

最後にベンチに座るままの少年を一瞥すると、彼は遊び疲れて眠る子どものように満足げに目を閉じた。

「…………… 待つ」

これから何が起こるのか察した円堂が声を上げかけるが、それより早くガゼルが腕を振り下ろした。

すると、宙に浮かぶ青白い球がイプシロンへと向かい、彼らを光で包み込む。

それが晴れたときには、イプシロンの姿は跡形もなく消え去ってしまっていたのである。

「そんな……………」

ようやくわかり合えると思った彼らの結末に、円堂が下手人たるガ

ゼルの姿を探すが、彼もまた姿を消していた。

氷のように透き通った声だけが、彼らの耳に届いてくる。

「円堂守。君と戦える日を楽しみにしているよ」

そんな嘲笑うような言葉を最後に、ガゼルの声も聞こえなくなつた。

雷門中とイプシロンとの決着の報せは瞬く間に日本中を駆け巡つた。

吉報を受けた世間では、エイリア学園の破壊活動が鳴りを潜めたのも相まって、このまま宇宙人の侵略も終わるのではないかという噂も広まり出している。

しかし、そんな期待とは反対に、彼らの戦いはここからが本番だ。三つのマスターランクチームとの戦いは、イプシロン戦をも凌ぐ激しいものになるだろう。

だからこそ、彼らは行く。

「行くんですか、キャプテン」

「ああ。ボクは雷門の皆に、返すべき恩がある。それに、彼らの戦いを見ていて湧き上がったこの闘志は、抑えられそうもない」

両脇に女神の彫刻が施された門の前で、少年たちが言葉を交わしている。

これから出発しようとする少年を、仲間たちで見送りに出ているのだ。

「俺たち、絶対見えますから！ キャプテンの、俺たちの生まれ変わったサッカー！」

仲間たちの健気な言葉に、少年は深く頷いた。

必ず、自分たちの新たなサッカーを証明してみせると誓うように。

「準備はいいか？」

その背が、門の外側から話しかけられる。

声の主は自身と同じくここを出発する、もう一人の同志たる少年の

声。

呼ばれた少年は笑って振り返り、ついに外へと足を踏み出した。

門という境界を跨ぐ一歩は、その胸に秘めた情熱のように力強い。

「もちろん。さあ、行こうか、源田くん」

「ああ。行くぞ、アフロデー」

『イナズマイレブンの下へ』

二人の少年が歩き出す。

サッカーを守るこの戦いを未だに続ける戦士たちの、新たな力となるために。

王者は遅参を容認しない

関係はどうあれ長い付き合いだったイプシロンとの壮絶な別れと、三人目のマスターランクの登場により、静寂と共に重苦しい空気が場を包んだ。

しかし、落ち込んでばかりもいられない。

彼らは様々なことを知った。

エイリア学園との戦いが始まった当初から、豪炎寺は彼らに妹の夕香を人質に取られ、仲間に加わるよう揺さぶりをかけられていたこと。

瞳子の計らいでチームを離れた彼は、鬼瓦に紹介された土方の元で身を隠したこと。

そして鬼瓦らの水面下の活動により彼女の安全が確保され、ようやくチームの元へ帰ることができたこと。

事情を知った彼らは、改めて豪炎寺の復帰を歓迎した。

豪炎寺の存在は雷門イレブンには百人力だ。

まずは長い間チームを離れていた彼の帰還を祝い、皆でサッカーをすることにした。

イプシロンとの死闘を終えたばかりだというのに元気に走り回る彼らは、疲れ知らずなのか。

否、久方ぶりに会えた仲間と、なんでもないサッカーをする時間が、楽しすぎるだけなのだろう。

「……………」

そんなのどかな光景を、アツヤは柵に背を預けながら眺めていた。普段ならば混ざっていたかもしれないが、いまはその気にはなれない。

「アツヤ。身体はもう大丈夫？」

「…………おうよ。怪我でもねえんだから、ちよつと休めばすぐだったの」
士郎の声掛けに対しアツヤは気丈に返したが、彼はどう感じたのか。

そのまま歩み寄って、ぽすんと弟の隣に座り込んだ。

「あれが、染岡くんの話してた豪炎寺くんなんだね」

「ああ。うるせーくらい聞いたさ、雷門のエースストライカーのことはよ」

浦部とFW同士でボールを取り合い——奪いにかかる浦部からボールを保持し続けている——を演じる豪炎寺を二人で見ろ。

あのようにしていると、違うのは言葉数くらいで、自分とそう大差ないように見えるが、試合での彼の姿はまさしく炎の如し。

彼のプレーを見て、アツヤは心の底から痛感した。

自分は、彼には絶対になれない。

完璧じゃないのは、自分だけ。

目に見えない、しかし明確に感じられる彼^{ひが}の差が、臍まで染み込んでくる心地だったアツヤの方へ、ボールが転がってくる。

反射的に目を向けると、ボールを中心にした視界へ、続いてシューズが入り込む。

やって来たのは、件の炎のストライカーだ。

「豪炎寺くん？」

彼はボールを拾うと、側にいたアツヤへ目を向けた。

自分の不在の間雷門のストライカーを務めていた者を見極めている、といったところか。

実際はどうであれ、アツヤはそう解釈して静かに見つめ返す。

「……なんだよ」

二人のエースの沈黙が10秒ほど続いたところで、それに堪えきれなくなったアツヤが口を開いた。

言葉の意味は、それ以上でも以下でもないシンプルなもの。

それに対し、豪炎寺もシンプルに答える。

「いや、お前には礼を言っておかなければと思っただけ。雷門で円堂たちと一緒に戦ってくれて、ありがとう」

「馬鹿にしてんのかよ。あんたが来なけりや、イプシロンに俺たちは負けてたんだぜ」

「そんなつもりは欠片もない。だが、聞きたいことはあるな。」

——ボールが怖くなったか？」

「……！ そんなわけ——」

「俺も怖い」

「なっ……」

豪炎寺にいきり立ちかけたアツヤが、続いた言葉に言葉を失った。どういふことだと言おうとしたところで、豪炎寺の背後から円堂の呼ぶ声が響く。

「おい、豪炎寺——！ 立向居の相手をしてやってくれないか？」

「……ああ、わかった。俺も円堂が認めたキーパーの力を見てみたい」「アツヤ、お前もどうだ？ 身体はもう大丈夫か？」

「……さっきデザームのシュート喰らってたやつ、セリフじゃねえだろキャプテン。大丈夫に決まってるあ！」

彼の頼みにあつさりと豪炎寺が応じ、毒気を抜かれてしまったアツヤもフィールドへ歩いていく。

まずシュートを打つのは豪炎寺だ。

立向居は、円堂の相棒とも言うべきエースを前に気合い十分。

そしてアツヤは、ペナルティアークに立つ炎のエースストライカーの姿を誰よりも強く見据えていた。

「真 ファイアトルネード！」

「ゴッドハンド！ ——うわあ！」

放たれた炎の竜巻を前にしても臆さず、彼は青い光の掌を顕現させる。

油断も慢心もなかったが、それでもボールは行く手を阻む巨大な手を呆気なく砕き、ゴールへと飛び込んだのだった。

弾かれて尻餅をつかされた立向居だったが、直に感じた豪炎寺の力に興奮しきりである。

続いて、ボールはアツヤに渡った。

豪炎寺の見定めるような視線を受けながら、彼はシュート体勢に入る。

ふわりと回転をかけてバウンドさせたボールを氷で包み込み、冷気が辺りを覆い尽くしていく。

「エターナルブリザード……ッ」

そして冷気の塊となったボールを蹴り放つ、その寸前。

『私のっ、勝ちだ……！』

最強の必殺技を破られた光景が彼の脳裏を過り、総毛立つような感覚は氷のような集中に亀裂を走らせる。

「V3！」

アツヤはそれに構わずキックを打ち込んだが――

「ゴッド……あれ？」

「……………」

これまで雷門の主力を担ってきた強力な必殺シュートは、途中でゴールから逸れて明後日の方向へ飛んでいく結果となった。

シュートを放つ瞬間の、ボールへの足のかかり具合にズレが生じてしまったのだろう。

単純なミスだがそれゆえに、普段の彼を知っている雷門イレブンの面々の意識にはより鮮烈に刻み込まれた。

そして誰よりも、信じられないとばかりに目を見開くアツヤ。

「……悪い。俺、もうちょっと休んどくわ」

「あつ、アツヤ」

彼はやがて見開いていた目を悔しげに元の形へ戻し、そんな言葉を残して去ってしまった。

フィールドの外へ向かう力ない彼の背で、風に乗って舞う氷の結晶が音もなく砕け、空に溶けて消え去った。

豪炎寺はその小さな背中が消えるまで、彼の方を見つめていた。

「……サッカーはただ楽しいだけじゃない。だが、それでも俺たちは……」

その先は、次の機会に直接言うべきだろう。

自分よりも一つ年下で同じ肩書を持つストライカー。そんな彼を思い一度目を伏せ、豪炎寺はフィールドの方へ戻っていった。

そんなサッカーを迷うストライカーの時間を過ぎて。

綱海と、復帰した豪炎寺を迎え入れた雷門イレブンは、稲妻町へと戻ってきていた。

イプシロン戦の勝利以来エイリア学園の襲撃が止み、残るマスターランクチームの動向については新しい情報も出てこない。

闇雲に動いても仕方がないため、円堂ら主要メンバーの故郷であるここへ戻ってきたというわけだ。

休む間もない激戦に次ぐ激戦を経た彼らには、帰ってくるのも随分久しぶりに感じられる。

「ようやく戻ってきたな……」

特に豪炎寺は、車窓から見える鉄塔を感慨深そうに眺めていた。

奈良での離脱以降は沖繩で雌伏の時を過ごしていた彼は、本当に戦いが始まってから初めての帰還だ。

見慣れた景色に、それまで抑えていた望郷の念が溢れるのも無理からぬことだった。

ここは英気を養っておくのも悪くないと、監督である瞳子の許しもあったところで、皆思い思いに貴重な休息日の過ごし方を考え出した。

鬼道や木野などは、長らく留守にしていた家へ帰り、家族との時間を過ごそうかと思案するが、いまの雷門イレブンは皆が皆、稲妻町在住ではない。

「おいおい、俺たちはどうすんだよ?」

特に綱海は、共に戦おうと一緒に来たというのに早々に慣れない土地で自由に過ごせと言われても、どうしていいかわからない。

「じゃあ皆うちに来いよ。母ちゃんの肉じゃが、最高にうまいんだぜ!」

「俺、肉じゃが大好きです!」

そこで出た、稲妻町に家を持たないメンバーへの円堂の誘いに立向居が目を輝かせ、他の面々も、木暮が嫌いな料理に渋い顔をしたくらいで、概ね乗り気だった。

「染岡くんのお見舞いも行きたいよね。ね、アツヤ?」

「あー……まあな」

俄に賑やかになったところへ、新たな人影が現れる。

「円堂！ 戻ってきていたか」

「ん？ 杉森じゃないか！」

その人物は、バックアップチームを結成していた杉森であった。

橋の上にいた彼は丁度探していたというように、息急き切つて雷門イレブンの集まる河川敷へと駆け下りてくる。

「どうしたんだ？」

「お前たちに会いたいという者たちが居てな。もうじきこちらに着くと連絡があつたんだが……お前たちも驚くぞ」

「俺たちが驚く？」

「ああ、間違いない」

その人物について語る杉森は、奇妙なほど自信で満ちていた。

「——上だ」

「ん？ どうしたアツヤ——うおっ!」

彼がそこまで言う人物とは誰なのだろう。

そう思つた雷門イレブンが詳しく聞き出そうとしたそのとき、後ろの方にいたアツヤが空を見上げる。

土門がそれに問いかけようとした瞬間、彼らのすぐ背後で地響きと、鈍い振動が起こつた。

「あれは……!」

皆が振り返つて見てみると、芝生も捲り上がらせて地面にめり込んでいる、エイリア学園の黒いボールがそこにはあつた。

雷門イレブンの視線を一身に集めたそのボールは、青白い光とともに、最近聞いたばかりの声を発し出した。

『雷門イレブンの諸君。我々、ダイヤモンドダストはフロンティアスタジアムにて君たちを待つ。……来なければ、この黒いボールを東京へ無作為に打ち込む』

「なんだって!」

「無作為にだと……!」

ボールは円堂らの反応を待たずにそれだけの、一方的なガゼルの言葉を届けてボロボロとひとりで崩れ去ってしまった。

「無作為……って、なにっすかね?」

「データラメについてことですよ!」

「こんな地面にめり込むようなボールを東京中に打ち込まれてみる。町がめちやくちやになるぜ」

「えエー!?! 大変っす!」

いまいち状況を理解しきれていなかった壁山が、目金とアツヤの補足説明で動転した声をあげる。

鬼道などは、既にガゼルの宣言が実行された場合の未来まで鮮明に想像できているらしく、ゴーグルで目の隠れた状態でもわかる深刻な面持ちだった。

戦い通しだった中、久しぶりの休息と思った矢先のことだが、とても放っておくことはできない。

「……仕方ないわ。直ちにスタジアムに向かいます」

『はい!』

その瞳子の決定に対し、チームから反対など出なかった。

「悪い、杉森。会いたって奴らのことは……」

「気にするな。あいつらには俺から伝えておく。……円堂、負けるなよ」

「ああ!」

再会したばかりで名残惜しいが、行かなければならない。

そんな円堂に杉森は激励の言葉を送る。

それを受け取ると、彼らはキャラバンに乗り込んでスタジアムへ向かっていった。

以前は全国大会の舞台となったフロンティアスタジアム。

大会中はスタジアム中に充満していた熱気もいまはなく、観客席にも人影一つない、冷たい静けさに包まれたそこに、雷門イレブンはやって来ていた。

「相手チームの戦術、攻撃がどんなものかは全く謎よ。最初は充分に警戒して。早速だけど豪炎寺くんには、アツヤくん、浦部さんとFW

を任せるわ」

「はい」

「スリートップか」

「アツヤくんも、もう身体は大丈夫なのね？」

「おうよ」

「ならいいのだけど。もし私が危険だと判断したら交代するから、そのつもりで」

「アツヤ、もう無理はさせないからね」

「……わかつてるよ」

「FW陣、特に豪炎寺くんは間違いなくマークされるはず。彼らにボールを渡すのも大事だけど、チャンスがあればゴールを狙いなさい」

「はいー」

豪炎寺を加えたチームで試合メンバーと陣フォーメーション形、基本方針を決めていく雷門イレブン。

だが、彼らをここに呼び寄せたガゼルたち「ダイヤモンドダスト」はどこにもいない。

それに一部が気を抜きかけた瞬間、彼らが居たのとは反対のベンチで光が起こり、影も形もなかったガゼルたちの姿が現れたのだった。

彼らはGKのベルガを除き、皆ガゼルと同じ青を基調としたユニフォームに身を包み、冷気を漂わせながら佇んでいた。

その中央に立つガゼルが一步進み出て、円堂らに向けて手を伸ばして言う。

「来たようだね、雷門イレブン。君たちに凍てつく闇の冷たさを教えてあげるよ」

「熱いとか冷たいとかどうでもいい！ サッカーで町や学校を壊そうなんて奴ら、俺は絶対許さない！」

不敵な言葉とガゼルに、円堂が真っ向から言い返す。

両チームが揃い、すぐにでも試合が始まるとういう空気が両者の間に流れ出した。

「——その試合の開始、少し待つて欲しい」

そこへ新たな人物が現れるまでは。

「なに？」

「その声は……」

予定にない乱入者にガゼルは怪訝な顔をし、円堂は覚えのある声に、その主を思い浮かべる。

その答え合わせはすぐに行われた。

観客席の方から人影が鳥のように素早く飛び出し、そのままフィールドの端、両チームのベンチの中間へ降り立つ。

彼の着地に遅れて、浮き上がっていた長い髪がゆらゆらと揺れながら重力に従って下りていく。

そして顔を上げたその姿は、見間違えようもない。

『アフロディ!?!』

フットボールフロンティア決勝戦を戦った者たちが、驚愕のままにその名を叫んだ。

彼はそんな雷門イレブンの方へ向き直り、近づいてきた円堂らを見る。

「……誰だあいつ？」

「俺たちがフットボールフロンティア決勝で戦った、世宇子中のキャプテンだ」

「あいつが……!」

アツヤにとって、世宇子の名前はどちらかと言えば、曲がりなりにも帝国学園を——即ち、源田を——圧倒した存在という形で刻まれている。

土門の言葉にアツヤも目付きを厳しくしてアフロディを見つめた。

両チームから様々な思いの乗る視線を集めながら、彼は対面する円堂たちと話し出す。

「久しぶりだね、円堂くん」

「……アフロディ。杉森の話してた会いたい奴って、もしかしてお前なのか？」

円堂の問いに、一之瀬らは目を見開いた。

アフロディはそれに、微かに口角を上げて頷く。

「そうさ。彼から、キミたちがここでエイリア学園と試合をすると聞いて飛んで来たんだ」

「ど、どうして、世宇子中のキャプテンが俺たちに会いに来たんスカ？」

「もちろん、キミたちと共にエイリア学園を倒すためさ」

「ええー!?!」

「なんだって!」

アフロデイの、チームへの加入を望むその言葉に、壁山や一之瀬などが衝撃の声を上げる。

いまは雰囲気が違うが、影山に従う彼に決勝で痛めつけられた思い出は記憶に新しい。

すんなりとは受け入れられず、かといって真摯な情熱を宿した彼の瞳にはなんとも言えず、沈黙が起こった。

「……疑うのも無理はない。でも、信じて欲しい」

「勝手に話を進めないでもらおう」

そこで、それまで傍観していたガゼルが背後から口を挟む。

「世宇子の結末を我々が知らないとしても？　『真・神のアクア』のな

い君にはなにもできない。墮落した神などに用はないんだよ」

「それは違うよ。円堂くんのサッカーへの熱い思いが、ボクを悪意から目覚めさせた。彼らのお蔭で、ボクは新たな力を手に入れたんだ」

「御託はいい。早く試合を始めたいからね、邪魔者にはご退場、願おうかっ!」

ガゼルはそのまま、いつの間にか足元に持ってきていたボールをアフロデイ目掛けて蹴り放った。

「アフロデイ!」

「大丈夫だよ」

風を切って迫るボール。

当たれば危険だとアフロデイを庇って前に出ようとする円堂を、何故か彼は手で制した。

ボールは依然として威力を保ったまま。アフロデイへ命中するまでも秒読みだ。

しかし、彼はそんなボールを見もせず、円堂たちへ話し続ける。「言い忘れていたけど、キミたちの力になりに来たのはボクだけじゃない。実を言うと、話をつけてくれたのも彼だしね」

「……そういえば」

『お前たちに会いたいという者たちが居てな』

アフロデイの言及に、杉森との会話を思い出す円堂。

確かに杉森は、複数人いるような話し方をしていたはずだ。

その一人はアフロデイだった。では、もう一人は。

「これは、彼の仕事だよ。奪っちゃいけない」

「危ない！」

後方から木野の悲鳴のような声上がる。

彼女には、ボールを受けて倒れるアフロデイの姿が想像できたのだろう。

しかし、現実にはそうはならなかった。

「――」

ずん、という鈍い音。

叩きつけられたような衝撃が、大気を揺らす。

しかし、その衝撃を受けたはずのアフロデイは無傷で、実際のボールは地面に落ち、否、潰されそうな力で押しつけられて抑え込まれていた。

「なにっ」

ガゼルがその光景に眼を剥いた。

確かに本気のシュートではなかったが、とはいえあのように易々と抑え込まれるものでもなかったはず。

にも拘らずボールを止めた男を見る。

彼はアフロデイと同様にスタジアムの屋内から現れ、跳躍で観客席からフィールドまで飛び降り、その勢いと体重によってボールを地面へ縫い付けるように止めていた。

凄まじいパワーとスピード、そしてボールを察知するGKの本能の成せる技だ。

このような芸当ができる者など、全国を探してもそう見つからない

い。

「……………」

だが、彼はそれができると納得させる存在であった。

身に纏うのは、伝統ある『王者』のキーパーユニフォーム。

鬼道はそれをこの場の誰よりも長い間見てきた。それを纏う男のことも。

「悪いな。邪魔者を一人追加させてもらうぞ」

「君は……………」

「あの人は……………」

「……………あいつ」

「お前は……………」

「お前は！」

誰もが、掌で押さえつけたボールを見て顔を伏せた彼に眼を奪われる。

やがて示し合わせたように、顔を上げた彼の名を揃って呼ぶ。

『源田!!』

片膝を突いていた姿勢から立ち上がった源田は、円堂たちの方へ顔を向けて笑った。

「間に合ってなによりだ。また会えたな、円堂」

かつて彼らと鎬しのぎを削った王者はついに、サッカーを守る戦いへ参戦する。

源王の存在は薄らがない

アフロデイに続いて現れた源田。

その登場には誰もが、一時衝撃で言葉を失った。

そして、それから立ち直った円堂は浮かべたのは、満面の笑顔だった。

「源田!!」

「久しぶりだな、円堂」

駆け寄る円堂のいまにも飛びかかりそうな勢いを受け止めながら、源田は続けて、鬼道や士郎らへ目を向ける。

「源田」

「源田くん……」

「久しぶりだな、鬼道。それに士郎も。お前たちの戦いは特訓の最中も見ていたぞ。真・帝国では世話をかけたな」

「……大丈夫なんだな?」

自ら以前の悲劇のことを口に出した源田へ、鬼道が問う。

それが指しているのが、身体だけのことではないのを理解した上で、彼は頷いた。

「ああ。アフロデイのお蔭もあって、なんとかな」

「アフロデイの……」

源田の言葉で再び視線が集まるのに対して、アフロデイは控えめになつて首を横に振った。

「ボクはそんな大したことはしていないさ。源田くんの、サッカーへの情熱の賜物だよ」

「んー? んー……ああーっ!」

「綱海?」

そこで突然、集団の後ろの方で唸っていた綱海が、電撃が走ったようにびくりとしながら声を上げた。

彼は怪訝な顔をする周囲を他所に、そのまま源田へ一直線に駆け寄る。

「ゲンダってお前か、源田!」

「綱海さんか！ 懐かしいな、あれからサッカーを!？」

「綱海でいいって言ったろ！ やっぱり源田だな！」

「知り合いだったのか？ 二人とも」

「おう！ 昔な！」

円堂の言葉に快活に答える綱海と頷く源田。

綱海が雷門イレブンと出会ったとき、彼がサーフィンを趣味とする大海原中サッカー部員だったのには源田との関わりがあったのだが、それは雷門イレブンには知る由のないことであった。

そのまま綱海が昔話に興じたところで、瞳子が話に割って入る。

「旧交を温めるのは結構だけど、それは試合を終えてからにきなさい」
彼女に言われて、彼らはこれからダイヤモンドダストと試合を行うのだと思い出した。

こちらへ向けられているガゼルの視線には感情の色がなく、まさしく絶対零度と評すべき冷たさであった。

源田はそれに悪いことをしたか、と呟きながら気合いを入れ直すのと、改めて雷門イレブンを向く。

「とにかく。俺たちはお前たちに力を貸しに来た。過去は変わらないが……いまのアフロデイが以前と違うことは俺が保証する。信じてやってくれないか」

困惑はあるが、決勝で世宇子中の力を味わったメンバーもそれを撥ねつけることはできなかった。

なにせ、一度はアフロデイによって大怪我を負わされた彼の言葉だ。相応の重みがある。

「本気なんだな」

「ああ」

「……わかった。一緒に戦おう！ よろしくな」

「ありがとう。君の信頼には必ず応えてみせる」

「いいですよね、監督！」

「認めましょう。試す価値は大いにあるわ。ただ、作戦に変更があります」

アフロデイと源田をチームに加えることを認めた瞳子だが、その物言いには含みがあった。

「変更？」

「ええ。円堂くん、あなたにはキーパーをやめてもらいます」

『えっ!?!』

続く彼女の言葉は、雷門イレブンにそれまで以上の衝撃を与えた。

これまで雷門の守護神としてチームを支えてきた彼の根幹に関わる爆弾発言。再びチームメンバーに激震が走る。

「ちよ、待てよ監督！ そりゃ源田は強いが、だからって円堂をやめさせることはないだろ!?!」

「キャプテンがキーパーじゃなくなっちゃうんすか……?」

「俺はありだと思っ」

『鬼道?!』

「鬼道くんも、同じことを考えていたみたいね」

瞳子の言葉に鬼道は頷いて、彼女の考えを代弁する。

「円堂。お前の、キーパーでありながらシユートにも参加するスタイルは雷門の攻撃力に大きく貢献している。だが、お前が必殺シユートのためにゴールを空けるのは、大きな隙でもある」

彼の語ったことには、誰も反論できなかつた。

いままでの円堂は仲間との連携技で、キーパーを務めながら幾度も点を挙げてきた。

彼の参加する必殺シユートは“ザ・フェニックス”、“イナズマー号”、“イナズマブレイク”など数多く、これだけのシユートを持つキーパーは彼だけだろう。

しかし最後の砦であるキーパーが攻撃に参加すれば当然、守るべきゴールががら空きとなる。

例えば、シユートのために円堂が上がったところでボールを奪われてカウンターをされてしまったら。そんな失点に直結しかねないリスクが常に付きまとうのだ。

「弱点は克服しなければならぬ。そしてそのためには、ときに大胆に変わることもしなければならぬ。そのチームの変革の鍵になる

のが、円堂なんだと俺は思う」

「俺が……鍵……」

「つまり、円堂にはフィールドプレイヤーになってもらうのか」

「理屈はわかったけどよ、具体的に円堂はなにするんだ？」

一口にフィールドプレイヤーと言うが、サッカーのポジションはGKを除いても大別して三つ、細かい分け方をすればもつと多い。

土門の尤もな疑問に、鬼道は間を置かず答えた。

「円堂には、リベロになってもらう」

聞き慣れない単語に、一部のメンバーは目を点にする。

リベロ——イタリア語で自由を意味する言葉。転じて、サッカーに於いては主にDFをしながらオフセンスにも参加する、単一のポジションに囚われないまさに自由なプレーをする選手のことを指す。

円堂にはフィールドプレイヤーになって、後顧の憂いなくその力を発揮してもらおうというわけだ。

「その肝は、お前がデザームとの戦いで見せたあのプレーだ」

「ええ。あのヘディングを必殺技としてマスターできれば、あなたは攻守に優れたリベロになれる。それが、このチームに集まった戦力を最大限に発揮する方法よ」

「円堂がリベロか……」

円堂が、キーパーユニフォームではなく自分たちと同じユニフォームを着てフィールドに立つ。

長らく彼に背を預けてプレーしてきた面々には、なかなかその光景はイメージし難い。

しかしそれこそが、まさしくこれまでの雷門に革命を起こす一手なのだ。

「わかった。俺、リベロやるよ。勝つために、強くなるために、変わってみせる！」

「それで、キャプテンに代わってゴールを守るのは……」

「源田くん。早速だけど、あなたの力を見せてもらおうわ。任せていいわよね？」

「望むところだ、監督」

円堂がリベロとしてゴールを離れる。

そうと決まって、彼に代わるゴールの守護者として白羽の矢が立った人物は、やはり源田だった。

彼は瞳子の指名に力強く頷いた。

「話は終わりかい？ 待たせてくれたものだ……」

そこで、再びガゼルの声が届く。

「神。王。それで安心したかい、雷門イレブン？ その肩書など、凍てつく闇の前には無意味だと思いい知らせてあげよう……！」

ガゼルの、闇を孕んだ瞳の放つ視線。

それが雷門イレブンを睥睨するが、源田は真っ向から向かい合った。

背筋も凍るような眼光に睨み返し、跳ね返して言う。

「そうだな、肩書で勝てれば苦労はしない」

当然のことだ。

最強の名は、勝つことで後から付いてくるもの。

それを頼みにするなどあり得ない。

「故に、お前たちを打ち砕くのは、最強と呼ばれるだけのプレーだ」

「源王……君は念入りに凍てつかせ、砕くことに決めている。覚悟をしておきたまえ」

そして、いよいよ試合開始となった。

「源田……雷門のゴールを、頼む」

「任せろ、円堂」

雷門のキーパーユニフォームが今日、初めて円堂以外の者の手に渡る。

それを見届けて雷門イレブンがフィールドへと歩いていった。

編成としては、アフロデイが浦部と交代したスリートップ。

リベロになるとはいつても、いま円堂がいきなりフィールドプレイヤーとしてダイヤモンドダストと戦うのは無謀だということで、彼はベンチから見守る形となった。

「さて……」

彼に代わってゴールに立った源田は、雷門イレブンの背中を観察す

る。

自身に背を預けて立つ彼らには、アフロデイ、豪炎寺や鬼道に土門、その他加入して日の浅いメンバーを除き、緊張があるのがちらほらと見て取れた。

壁山などは頻りに背後をチラチラと振り向いていて丸わかりだ。

(まあ、仕方がないな)

雷門イレブンとしては、蹂躪とメンバーの離脱を伴ったジエネシス戦は未だ記憶に新しい。

それと同格のチームが相手となれば、不安はあつて然るべし。

加えて、以前の敵だったアフロデイや源田の加入、円堂のポジション転向までもがたつたいま怒涛の如き勢いで押し寄せてきたのだ。

強いことは身に染みてわかっているといえども、ついさつきまでの、後ろに居るのは円堂だという常識が覆されたのは、彼らには心の柱が取り払われてしまったような心地だろう。

(あの監督……)

そんなことなどわかっていて、彼女はこの場でいきなり源田しげんをGKに据えた。

チームを変化させる方針が決まった以上、遅かれ早かれ円堂はキーパーでなくなる。ならば早くに新しいチームの形を確立させ、選手たちに慣れさせるべきという判断か。

無論、急激な変化はチームのリズムを崩しかねないが――

「やってやろうじゃないか」

源田はこの試合最初の仕事を、チームでの自分の立場を築くことだと決めた。

代理ではなく、在り方がどうあれ雷門のキーパーなのだと、認識をはっきりさせるのだ。

方法は、もちろんプレーで。

源田がそう決意を固めたところで、雷門のキックオフのホイッスルが鳴り響いた。

「!？」

キックオフがされた瞬間、豪炎寺は眼前の光景に眉根を寄せる。

それまで普通に陣形を取っていたダイヤモンドダストが、開始と同時に割れた海のように左右へ別れ、ゴールまでの道を開いたためだ。もはやゴールへの障害は、ダイヤモンドダストのキーパーであるベルガただ一人。

しかし彼らは皆、余裕^{よゆう}綽々^{しゃくしゃく}といった様子で、元に戻ってデイフェンスをしようという気配もない。

「小手調べだ、デザームを破った炎のストライカー」

ガゼルが、ボールを持った豪炎寺へ煽るような調子で語りかける。打ってこいと誘っているのは明白だった。

「……！」

豪炎寺はその侮りに怒りを込めて、センターサークルの中からボールを蹴り放った。

荒々しい回転のかかったボールは空気の膜を引き裂きながらゴールへとあつという間に迫り、やがてゴールの角に向けて軌道を変える。

ゴール前中央に立つベルガを避けてゴールの中へ飛び込む形だ。

「なに」

だが、それが得点になることはなかった。

横へ跳び上がったベルガが、片手でボールを軽々と受け止めて見せたのだ。

進路を遮られたボールはそれ以上進めず、彼の手の中に収まってしまふ。ノーマルシュートとはいえ、エースの放ったそれを容易く止めたことに雷門イレブンへ緊張が走る。

しかも彼らの行為は、これだけでは終わらなかった。

「フッ——！」

ボールを握ったベルガは、そのままそれを雷門のゴール目掛けて投げつけたのだ。

振りかぶった腕から放たれたボールは、一直線にフィールドを縦断して源田目掛けて飛んでくる。

「……」

源田は右手を突き出し、バシンという音を立てながらボールをその

場で難なく受け止めたが、ゴールからゴールへボールを投げるというサッカーの常識では考えられない所業に、雷門イレブンは衝撃を抑えられなかった。

無論、この行為に試合の勝敗に繋がる要素はない。

味方選手へのパスならばともかく、ゴールからゴールへ直接投げれば相手にもキーパーが居る。現に源田が受け止めたように、ボールがゴールラインを割ることなどあり得ないのだから。

しかし彼らが常識では捉えられない力を持つことを示すには十分。

「なんてやつだ……！」

ベンチから一部始終を見ていた立向居が戦慄する。

少なくとも自分には、あの長距離でボールを直線軌道に飛ばす腕力はない。

フィールドに立つ殆どの者たちにも、少なからず立向居と同じ心情が窺えた。

この示威行為は、ダイヤモンドダストの思惑通りの結果を出していたのである。

「大丈夫だ、立向居」

「円堂さん？」

「狼狽えるな、お前たち」

「鬼道……？」

雷門のゴールに立つのが、彼でなかったのならば。

彼は丁度いい、と一人呟いてボールを握った腕を振りかぶる。

「遠投が自慢か？」

その声にはそこまでの音量はなかったが、不思議とダイヤモンドダストの陣地までよく届いた。

次の瞬間、源田は投石機カタパルトのようにボールを投げ飛ばす。

「——っ!? アイスブロック——V2！」

空気の層を突き破るスピードで眼前まで迫ってきたそれを、ベルガは咄嗟に必殺技で凍りつかせる。

「なにっ」

このまま雷門イレブンが衝撃を受けている間に雷門サイドへ入り

込むつもりでいたガゼルが、自分の横を突き抜けた風に勢いよく振り返った。

ベルガもちろん、ボールは完璧に受け止めた。しかし、傷のようない白い模様の入ったバンドナで覆った表情は読めないものの、そこから先ほどまでの余裕が消えているのは明らかだった。

「……！」

衝撃はビリビリとした痺れとなって未だにベルガの右腕を走り回っている。

もし、必殺技を使っていなければ、ボールを取り損ねたかもしれない。

そんな想像が脳を過り、ベルガは思わずその張本人を見遣って、息を呑んだ。

自分の正面に立つ男から、先ほどまではなかった威圧感が強く感じられたのである。

ガゼルのそれとは違う野獣の如き眼光、あるいは燃え盛る炎。それに圧倒されたのだ。

そして仁王立ちする彼の姿は、味方にも影響を与える。

「これが……俺たちの味方つか……！」

「心強いじゃねえの、源田」

円堂が、彼らを後ろから支える雄大な山のようなものとするならば。

対する源田は、彼らの背後で燃え上がり、その前方まで照らすほどの強烈な炎だった。

たった一プレーで、源田は雷門のゴールキーパーとしての存在感を示したのである。

「やってくれるね、源王……！」

ガゼルが忌々しげに源田を睨む。

彼のプレーで先ほどの衝撃が完全に雷門イレブンから掻き消されたところか、ダイヤモンドダストの方に若干の動揺が起こってしまったのだから。

所詮、これは試合開始早々の小競り合い。

しかしそれでも、王者はここに在りと、しか確と知らしめるには充分過ぎる時間だった。

闘志は闇で凍らない

開幕の、互いにサッカーの常識からはかけはなれたやり取りから一転、試合はベルガのスローで静かに動き出した。

動揺から立ち直った彼らはイプシロンをも凌ぐ素早さ、否、ただのスピードだけでなく、チームとしての連携の素早さを見せながら攻め上がっていく。

だがそれが試合開始早々、自陣のゴール付近から展開されることなど誰が想像しただろうか。

「いかせない！ フレイムダンス 改！」

「チッ！」

一之瀬が炎を操って行く手を阻むのに対し、MFのバレンは舌打ちを鳴らしながらボールと共にバックステップをしてかわすと、彼を避けて同じMFのリオーネへパスを回す。

なにせ、まだ自分たちのゴールが近い。

万が一にも奪われるわけにはいかないので、慎重な動きだ。

「ドロル！」

そして彼女からドロルへ渡り、ようやくボールがセンターラインを越えた。

前線へ向かいドリブルする彼を土門が狙う。

放つのは、イプシロン戦以降開花した新たな必殺技。

「ボルケイノカット！」

「ウォーターベール！」

対するドロルも、これを必殺技で迎え撃つ。

回転しながらの跳躍、そしてボールを着地で思い切り踏みつけて埋めると、地面から勢いよく水が吹き出した。

滝を逆さまにしたような激しい水流は、ドロルを守る城壁のような形となって土門の放った赤い衝撃波を受け止め、呑み込んで使い手の身を守った。

「くそー！」

土門のディフェンスを凌いだ彼は、そのまま更に雷門サイドの深く

へ切り込んでいく。

キーパー同士の力比べでは源田がベルガを圧倒したが、ダイヤモンドダストは歴としたマスターランクチーム。ジェネシスと競合する実力のチームだという事実は変わらない。

出鼻こそ挫かれたものの、彼らは雷門イレブンへその肩書に見合う強さを見せつけていた。

「ザ・ウォール！」

しかし、雷門イレブンもかつてジェネシスに蹂躪された彼らではない。

土門を抜き去ったドロルへ壁山がすかさずカバーに入り、FW陣へのボールの到達は防いでみせた。

間髪入れずに雷門の反撃が始まり、反対に攻め込んでいく。

「こつちだ！」

ドリブルする壁山の横合いから、走り込んできたアフロデイの呼び掛けが来る。

前方を見れば、豪炎寺とアツヤは既にデイフェンスに厳しくマークされてしまっている。これではパスできない。

彼らに比べてマークの緩いアフロデイへパスを回して切り込むのが、この場での最適解だ。

それでも壁山は、走る彼を見て一瞬迷いを見せたが――

「アフロデイにボールを回すんだ！」

後方からの源田の声が背中に響いた。

言葉に力を与えるのは、それを言う人物だ。

そしていまこの瞬間での源田は、先の1プレーで彼らの信頼を預けられるに足る存在となっていた。そんな彼と共にやって来た少年を、源田もキャプテンたちも認めている。

だからこそ、壁山も踏ん切りを着けることができた。

「……信じるっスー！」

そのパスは練習を重ねた相手同士ではなかったため、ボールの遠すぎる拙いものだった。

しかしそれにアフロデイは追い付き、全身全霊で受け止める。

「——ありがとう」

壁山への微笑と、小さな眩きを残して駆け出したアフロディ。そして狙うべきゴールへと振り向いた時には、たおやかな印象のあった女神のような顔が闘志の漲る勇ましい戦士の顔へと変わっていた。

整ったリズム、安定した美しいフォームで走る彼にダイヤモンドダストのディフェンスが向かうが、そんなものではない。いまの彼は止められない。

「さあ、いくよ」

「ゼアツ！」

「いかせない！」

「ヘブンスタイム！」

迫り来る彼らを前に足を止めたアフロディ。

パチンという指の鳴らした音が、彼だけの時間の合図となる。

その身から放つ凄まじい“気”による、瞬間的な一帯の時空の支配。ドロルもアイシーもその支配からは逃れられず、アフロディが彼らの間を悠々と抜けていったことに、事が済んでから初めて気付く。

「うああー！」

そして気付いたと同時に巻き起こった突風が、アフロディを追う暇も与えず二人を吹き飛ばした。

再び歩みを進めた彼の前に、戻ってきたガゼルが立ち塞がる。

「ふん、このまま行かせるとでも？」

「いいや、通してもらおうよ。仲間たちとの約束があるからね」

「仲間、約束、下らないね。『真 神のアクア』もない君に何ができる」

「そんなものいらなかったんだ。本当の力は心にあつたんだから」
「戯れ言を！」

短い問答の後、ガゼルはアフロディの言葉を一笑に付して襲い掛かる。

アフロディはそんな彼を見据えたままで、ボールを前ではなく真横

へ向けて蹴った。

そのボールを受けたのは、豪炎寺だ。

「なっ!？」

「見せよう。生まれ変わったボクの力を！」

豪炎寺にガゼルの意識が向いた瞬間、アフロデイも逆サイドから抜き去っていく。

そして豪炎寺から再びボールを受ける。初めての連携にも拘わらず息の合った、鮮やかなワンツーパスだった。

後は、ゴールへシュートを打つだけである。

アフロデイは誇らしげに金色の翼こんしきを広げ、空へと高く舞い上がった。

「くっ……」

シュートを察知したベルガが右の拳を握って構えるが、その表情は固い。

なにせ、アフロデイの放とうとしているボールからは神々しい力が弾けんばかりに迸っていたのだから。その威力は傍目からでも察して余りある。

まして誰よりもシュートを見るキーパーというポジションならば、いっ弥が上にも感じ取るだろう。

「ゴッド——」

だがキーパーが態勢を整えるのを悠長に待つストライカーは居ない。

源田との特訓の末、完成した必殺技。アフロデイはその力を惜しみなく解き放った。

「——ブレイク！」

「あ、アイスブロッグはッ」

ベルガは空から急降下してゴールへ向かってくるボールを、凍結させた拳で殴り付けた。

しかし拳がボールと接触した瞬間、ボールを凍らせるどころか一瞬で拳に纏っていた氷が引き剥がされ、弾き飛ばされてゴールへの道を抉じ開けられてしまう。

同時に、ゴールネットが千切れてしまいそうなほどに引き伸ばされる。

復活した神の、新たな産声うぶごえとなる一撃。

それが、雷門イレブンによる先取点となった。

「あれほどのシュートを放つとは、アフロデイ君は『真 神のアクア』を捨てていて尚、力を増していますね！」

「あんな強烈なシュート、見たことないぞ……」

ベンチでは目金が、いまのアフロデイの力が決勝戦での姿と遜色ない、否、それすら上回っているやもと興奮気味に語る横で、木暮は開いた口が塞がらないでいる。

そんな彼らの横で円堂は、彼を優しい眼差しで見つめていた。

連携を取った豪炎寺とのハイタッチを交わすアフロデイの顔には、人間味が宿っている。

以前の『真 神のアクア』に溺れていた、力を振りかざす冷酷な神としてではない。

人と共に歩む。

そんな温かい心の熱が、その光景にはあったのだ。

「いいぞ、みんな！ ユニフォームを着れば気持ち是一つ！ みんなで同じゴールを目指すんだ！」

『おうー！』

ベンチからの円堂の言葉に、フィールドに立つ者たちは揃って応えた。

「やはり物を語るならプレーに限る。流石だな、アフロデイ」

「キミこそ、さつきはいきなり飛ばしていたじゃないか、源田くん」

「あれは、チームの意識を変えるプレーをしたかったのに丁度よかったのと……少し対抗心が出ただけだ」

「『少し』であれとはな。相変わらず負けず嫌いというか、張り合いたがるやつだ、お前は」

「こんな強かったんだな、源田って」

まだ序盤ではあるが、試合の流れは明らかにこちらに来ていた。

その立役者となった二人を中心に語りう雷門イレブン。

「やるじゃないか……これが雷門との、円堂との戦いで得た力というわけかい」

彼らの後ろでガゼルは、噛み締めるように呟いた。

確かに侮っていた。点を奪われた事実は認めねばなるまい。

だが、それがどうした。髪に遣っていた手を、クシヤリと握りしめる。

取られたのなら、倍にして取り返せばいい。

それができるだけの自負が、彼にはあるのだから。

「叩き潰してやるよ……！」

キャプテンの剥き出しになった敵意は、チームの者たちにも伝わる。

ダイヤモンドダストはもはや雷門イレブンを格下とは見なさない。

徹底的に撃滅すべき敵であると、静かに意識を切り替えた。

「おいおい、先に失点とかあり得ねーだろ。ダイヤモンドダストにあるんな無様晒されちゃ、俺らまで弱く見えちまうぜ」

そんなグラウンドを見下ろす無人のはずだった観客席で、苛立たしげな呟きが響く。

声の主は、プロミネンスのバーンだ。隣にはグランも居る。

二人ともユニフォーム姿でない、地球人のラフな姿でこの戦いを観戦していた。

三つのマスターランクチームは互いにエイリア学園最強チーム“ジエネシス”の称号を賭けて競い合っている。その様を彼らの“父

さん”は蠱毒に例えたが、まさに彼らは相争あいにあそって更なる力を得ようとしているというわけだ。

競い合うというからには、ある程度実力は拮抗しているもの。

最終的に勝つのは自分たちだという自負はあれど、そこに疑いを持つ者はいない。

それなのにダイヤモンドダストに不甲斐ない戦いをされては、同格に扱われている自分たちの沽券にも関わる。

「格好つけて遊んでるからそうなるんだ、ガゼルのやつ……」

「でも、ガゼルは感じたみたいだよ。雷門の、円堂守の力をさ」

「はあ？ その円堂守、いまベンチじゃねえかよ」

「言っただろう、戦えばわかるって」

「なんだよ、まったく……円堂円堂と言う癖に、アンタは肝心なところをいつも勿体ぶりがやる」

グランの要領を得ない言葉にバーンはすっかり不機嫌になり、むすつとしてそっぽを向いてしまった。

それに対しグランは、そんなつもりはないんだけどね、と弁解しながら言う。

「それに、円堂の力を受けたのはもう一人だ。今回の俺の興味は彼の方だね」

「ん？ ああ、あのキーパーか。さっきのは笑わせてもらったぜ。面白そうなやつじゃねえの」

「そうだね。キング・オブ・ゴールキーパー……父さんも興味を持ってた」

話し込んでいるうちに、下ではもう試合が再開していた。

それに気づいた二人は品定めをするように、また眼下の人間たちへと意識を戻していく。

「見せてやろう……絶対零度の、闇をー」

フィールドではダイヤモンドダストが本領を發揮していた。

ガゼルの号令の下、彼らは一糸乱れぬ動きで雷門イレブンへ襲い掛かる。

「フロストミストー」

ドリブルをしていた鬼道の横合いから現れたクララ。

彼女は口許に手の平を添えると、彼目掛けて思い切り息を吹きつけた。

その息吹は、彼女の口から離れた瞬間白い煙のようになって爆発的に広がり、鬼道を呑み込んだ。

しかも、ただ視界を塞いだだけではない。

「これは……」

鬼道を襲う凄まじい寒さ。

さらに降りて来る霜が体からは体温を奪い、ボールには纏わりつい

て動きを鈍らせていく。

なんとかそこから脱出した鬼道の眼前を、ゴツカの巨体が塞ぐ。

「フローズンステイル！」

（避けきれん……！）

そのまま、まだ体の動きの戻り切らない鬼道への間髪入れない必殺技。

フィールドを凍らせながら迫るゴツカのスライディングに対し、鬼道は辛うじて直撃は避けたものの、ボールを奪われてしまう。

ダイヤモンドダストのカウンターだ。

彼らの素早いパス回しと身のこなしで、ボールは見る見る雷門ゴールへ迫っていく。

「やらせない！ ザ・タワー！」

「ウォーターボール！」

「ううー！」

迎え撃った塔子も、ドロルの起こした水流で塔を打ち崩されて突破され、攻撃はより深くへ。

雷門イレブンも応戦したが、ついにボールがガゼルの下へ渡ってしまふ。

ボールを持った彼の行く先は一つ。

「凍てつくがいい、源王。その玉座諸共に！」

「来い！」

ゴール前に立つ源田との一対一だ。

油断のない佇まいで構えている源田に、ガゼルは自信に満ちた笑みを向けて力を解放した。

瞬間、一帯の空が、オーロラ揺らめく雪国の夜空のような光景に塗り変わる。

まやかしではなく、実際に北極にでも居るかのように思わせる凄まじい冷気が辺りを包む。

ボールはその寒さで凍結したまま空中で静止させられ、弓に番えられた矢のように放たれる時を待つ。

時間が止まったかのような、静けさ。

その凍りついた時間が、ガゼルによって薄氷のように砕け散る。

「ノーザンインパクト!!」

ボールは白い流星のようになってゴールへと放たれた。

その威力は雷門イレブンの目から見ても、グランの見せた『流星ブレード』に勝るとも劣らない。

マスターランクチームとして、同格の相手だと頷ける力だった。

事実、ガゼルには自分のシュートが得点に変わる確信があった。

たとえ、立ちはだかるのがあの男であったとしても。

その確信は、彼の力が以前のままだったのなら正しかっただろう。

「キングシールド……」

源田の両の拳に、飛び散る火花が見えるほどに力が迸る。

その圧力は真・帝国での彼が見せたそれとは明確に違っていた。

いままでの強さとは違う、強化ではなく進化。

フットボールフロンティア以前はそもそも使う機会すらなかった必殺技は、アフロディイというかつてない強者との特訓で幾度も繰り返し使ったことで、彼の奥義としてついに新たな段階へ至ったのだ。ステージ

「G2!!」

拳を打ち合わせて生じた衝撃波が混じり合い、形成したのは王者の誇る獅子の大盾。

それは凍てつく力の奔流を、ゴールの手前で完全に塞き止めてみせる。

やがて、盾の獅子の顔の意匠がガコンと口を閉じると、その中にあったボールは力を噛み殺されて源田の手の中に収まったのだった。

「なに……!?!」

予想もしていなかった結果に、ガゼルが眼を剥いた。

同時にホイッスルが鳴り響く。

1―0という、ダイヤモンドダストからすれば思いもしない形で前半が終わったのだ。

「……なるほど、肩書に負けない力のようだね」

ベンチへ行こうとする源田の背を、ガゼルが呼び止める。

「だが、いい気にならないことだ。その技が無限に打てるものじゃないのは知っている。君の腕が凍てつき、上がらなくなるまでシユートをつだけたこと。後半は雷門イレブン共々覚悟をしておくとい……！」

彼の見立ては、世宇子戦にて源田がこの必殺技の限界を超えた連発によって右腕を折った事実に基づく。

強力な力の行使には大抵、相応の代償があるのは当然と言えよう。ならば、彼が音を上げるまで繰り返すまで。実際、世宇子中が同じことをして彼を追い込んだのだから、ガゼルにもできない道理はない。「俺の腕が上がらなくなる？」

見透かすような彼の言葉に、源田は澄ました顔で振り返って答えた。

「悪いが、それは無理だ」

「なに？」

「世宇子中と戦った頃の俺の『キングシールド』の使用限界は6回だった」

『キングシールド』は源田が編み出した技だが、他の技に比べて消耗が激しく、負担も大きい。

アフロディを相手にそれを限界を超えて発動した結果、腕を折った。

しかし源田がアフロディとの特訓で得たのは、必殺技の進化だけではない。

体をガゼルに向き直して、区切った言葉を続けて言い放った。

「そして俺は、『キングシールド』を以前の倍はリスクなしで打てるように特訓してきた。逆に言わせてもらおうが、お前の足が上がらなくなるまで、俺はゴールを渡さんぞ」

「……！ 上等だ……！」

その源田の宣言に、ガゼルは真っ向から受けて立った。

周りから見れば一触即発の空気だったが、そこで二人はあっさりど

それぞれ再びベンチへと向かっていく。

これは気を収めたのではない。

むしろ、続く後半戦にこの闘志を余さず持ち越すための温存だ。

彼らのやり取りは、後半戦が激闘となることをなによりも物語っていた。

氷の意地は折られない

ハーフタイム。

ダイヤモンドダストとの激戦の最中の束の間の休息だが、集まっている雷門イレブンには活気が満ちていた。

なにせ、一度は蹂躪されたジエネシスと同格のチームを相手に一点リードの状態前半を終えるという快挙だ。

「とはいえ、喜んでばかりもいられん」

そこで鬼道が、緩みかけた空気を引き締めるように話を切り出す。

サッカーの試合は一点を取って終わりではない。試合終了時点で得点の多い方の勝ちなのだから。

この優勢はあちらにたった一点取り返されるだけで引き戻されるギリギリのものだ。ともすれば、失点がそのまま試合の流れを奪われる起点にもされかねない。

ゆえに勝利を磐石なものとするために必要なのは、追加点である。

「だがアフロデイは間違いなくマークされるだろう。奴らも、もう易々とシュートを打たせはしないはずだ」

「そ、そうっすよね……」

わかりきった脅威を放置しておく程ダイヤモンドダストは甘くないだろう。

それに、源田とアフロデイの二人の働きで流れは雷門にあるが、チームとしての強さはあちらの方が上。

前半を通じた印象では、特にデイフェンスが非常に強固だ。

ダイヤモンドダストはこの固い守備でボールを奪い、ガゼルのスピードで速攻のカウンターを決める防御型チームということなのだろう。

あの守備が相手では、ただアフロデイにボールを繋いでも得点になるとは限らないのである。

その指摘を受けて熱が冷め、チームの雰囲気沈みかけるが、鬼道はそのフオローも欠かさない。

「もちろん、アフロデイに奴らの目が向くのはつまり、豪炎寺たちへの

注意が逸れるということだ」

「そうだね。彼らがボクに集中すれば、その隙をキミたちが突けばいい」

「フツ、任せておけ」

「当然、俺たちも積極的に攻めるぞ。奴らのシュートチャンスを潰すことが、最大の防御に繋がるからな」

鬼道には、リードを取ったからといって、守りに入るつもりはない。まだ後半を丸々残して逃げ切りを狙うのはリスクが大きいのもあるが、雷門にそんな消極的なサッカーは似合わないからだ。

攻めの姿勢は崩さない。

「もし抜けられても、源田がいるってわけだな！」

綱海の言葉に源田はこくりと頷き、胸を張って答える。

「ああ、ゴールは俺に任せてもらおう。どんどん攻めていけ」

「よしみんな、このまま攻め切るんだ！ 勝つぞ！」

締めめの円堂の号令で、雷門イレブンは士気を高めて後半に臨む。

そんな彼らの様子が豆粒のように見える薄暗いスタジアムの廊下に、三つの人影があった。

「1点ビハインドで前半終了……ヤバイんじゃないか？ え？」

壁にもたれ掛かりながら、煽るように問いかけるのはバーン。

セカンドランクチームのジェミニストームは、北海道の戦いで雷門イレブんに3点ビハインドで前半を終えたことによって見限られ、イレブンの追放された。

それを思えば、いまの状況は追放一歩手前。エイリア学園マスターランクチームの一角として有り得べからざる醜態と言えるだろう。

「勝てるよね？ ガゼル」

ガゼルの背に問いかけるグランの口調はバーンよりも柔らかいが、やはり隠れ切っていない圧がある。

エイリア学園に敗北が許されないことなど、彼らが知らない筈がないのだから。

「……我々は負けない。ダイヤモンドダストの名にかけて……！」

力で震える程に拳を強く握り締めながらガゼルは呟く。
自分たちはジェネシスの称号を掴むのだ。

こんなところで負けてなどいられないのだと、今一度心に刻むように。

程なくしてハーフタイムが終わり、それぞれが勝利への意志を胸に秘めた後半戦が幕を開けた。

「いけー」

キックオフをしたダイヤモンドダストの速攻が雷門サイドを襲う。
後半開始早々にこの点差を埋めてやろうと言わんばかりだ。

雷門も当然ただでは抜かせない。

ガゼルは厳しくチェックし、シュートを打たせないように立ち回る。

「ヘイルストーム！」

その、ガゼルを封じる分生まれた守備の隙間を的確に狙ってブロウがシュートを放った。

ループシュートで冷気を纏ったまま高く打ち上がったボール。

やがてそれが、無数の氷の礫つぶてを霰あられのように伴って落ちてきてゴールを襲う。

「トリプルパワーシールド！」

しかし、源田はそれに眉一つ動かさず対応する。

三重の防壁が、降り注ぐ氷塊もボールも全てを弾き返してゴールへの道筋を完全に遮断してしまったのだった。

その一方的な結果が、たとえエイリア学園といえどもエース級クラスの力でなければ太刀打ちできないと如実に物語る。

こうして速攻が防がれ、雷門にボールが渡った。

「ツナミブースト V2！」

速攻を防いだこの勢い、そして文字通りの波に乗って綱海がカウンターのロングシュートを放った。

逆巻く大波の威力を乗せたボールが、戻りきれていないダイヤモンドダストの中盤を抜けてゴールへ走る。

「フロストミスト！」

しかし、ペナルティエリアの間近へ迫ったシュートをクララが阻んだ。

通常、白い息は呼吸で体内から出る水蒸気が冷たい外気によって水滴となることで現れるものだが、この場合は全くの逆。

彼女の吹きつけた冷気が、白く見える程に大気の水分を冷やしているのである。

その白い霧の中へ飛び込んだボールは瞬く間に霜に塗^{まみ}れて失速し、それが暗れる頃には地に落ちていた。

「ちくしょう！」

「ふふ……こんなもの？ 弱すぎるわね」

シュートを止められて悔しがる綱海に、クララは儂げな印象とは裏腹な氷のように冷たい言葉を向けた。

開幕からの必殺技の応酬。

しかしこれは序の口だとばかりに、試合は激しさを増していく。

「ザ・タワーー！」

「ウォーターボール！」

「キヤー！」

クララから始まった高速パスワークで再び雷門サイドへ攻め込むダイヤモンドダスト。

ボールを持ったりオーネが立ち塞がった塔子を吹き飛ばして、道を切り開いた。

陣形の崩れた雷門はその穴をカバーしようとするが、彼らのスピードに翻弄されて傷口を抉るように入り込まれてしまう。

「くっ、ガゼルだ！」

鬼道が叫ぶが、もう遅い。

既にガゼルはトップ下からペナルティエリアへ接近して、ボールを受けていた。

「ノーザンインパクト！」

そして放たれた二発目のシュート。

氷の矢のような一撃が、ゴールへと飛んでいく。

「ボルケイノカット！」

土門がただではやらせまいとシュートブロックをかけるが、ボールは地面から吹き出す炎の壁をもともせず突き抜けられる。

間違いない威力は削がれている筈だが、見た目にはまるで衰えが見られなかった。

マスターランクチームのキャプテンにしてエースストライカーという肩書は、決して伊達ではない。

「キングシールド G2!!」

だが、それはこちらも同じこと。

源田もまた、キング・オブ・ゴールキーパーと呼ばれる所以を遺憾なく見せつけ、シュートを止める。

「ふん、まだまだ打つぞー!」

「何度でも止めてやる!」

二人の眼光がぶつかり合い、激しく散る火花が見えそうな光景。

彼らの一騎打ちの行方がこの試合の鍵を握っていることを、敵味方問わず誰もが理解していた。

「フローズンスティール!」

「ぐあっ!」

「一之瀬!」

そして雷門が反撃に移ろうとしたところを、巨体に見合わぬスピードで一気に守備ラインを上げてきたゴツカが襲う。

ダイヤモンドダストによる立て続けの連続攻撃だ。

「ザ・ウォール! —— あっ!」

「やっ!」

壁山が前に出て文字通り壁になろうとしたが、重要なのは点を取ること。

なにも毎回、守備を真っ向から相手にする義理もない。

アイシーは壁山を相手にせず、スピードを生かして回り込むようにサイドに位置するフロストへとパスをした。

「やらせねえ!」

サイドから、源田の脇を狙い打つつもりか。

そう考えた綱海がフロストのシュートコースを塞ごうとしたが、彼

は綱海の目前にまで迫ってからパスをした。

「なにっ!？」

ボールの行く先は、ペナルティエリアの正面へ走り込んできたガゼル。

守備を誘い出した上でのセンタリングだったのである。

ダイヤモンドダストの、寄せては返す波のように緩急をつけた動きで翻弄され、またもやガゼルのシュートが放たれる。

「ノーザンインパクトオ!!」

これも源田が危うげなく防いでみせる。

「フロースンステイル!」

「フロストミスト!」

「ノーザンインパクト!」

しかしこの後、似た形でさらにもう二発ものシュートが放たれることになった。

そうなった要因はダイヤモンドダストが守備のラインを上げてきて、オフエンスへすぐさま襲いかかってきていることだ。

ならば、今度はそのラインを下げさせる。

「いけお前たち!」

「っ、下がれ!」

五発目のシュートを止めた源田が、最前線のFWたちへ叫びながら思い切りボールを投げた。

ボールの落下地点は、源田の狙いを察知したガゼルの号令で後退し始めたDFたちの僅かに手前、かつその内の誰からも程々に離れた位置。

オフサイドにならないギリギリを攻めた絶妙なスローだ。

アフロデイがそれを受け、速さを保ったまま守備ラインとゴールの間にできていた空白地帯を駆け抜けていく。

「くっ、いかせるか! フロースン——」

「豪炎寺!」

「ああ!」

急いで戻ってきて行く手を阻んだゴツカが必殺技の体勢に入った

と同時に、アフロディは豪炎寺へパスを回した。

ボールを持った豪炎寺はそのまま、炎の魔神を顕現させてシュートへ移る。

「爆熱ストーム G2!!」

ボールを中心に渦巻く爆炎が、魔神の咆哮と共に放たれた。

そのシュートは何の障害もなくゴールへ辿り着くかと思われたが、追加点が雷門にとって試合を決める一撃ならば、ダイヤモンドダストには致命傷だ。

彼らの意地が、これをただでは通さない。

「フロストミスト!」

クララが、綱海のシュートにやったように火球へ向けて冷気を吹きつける。

纏う炎が冷気を押し退け、ボールは地吹雪のような白煙の中を突き抜けていったが、確実にその勢いは落ちていた。

「これ以上の失態は晒さん……! アイスブロック V2!」

そのシュートへ、続けてベルガが必殺技を打ち込んだ。

炎をもともせずに凍結させた拳を叩きつける。

「くっ……!」

ボールを包もうとした氷は炎に解かされかけたが、シュートブロックの存在もあって、なんとか熱に冷気が打ち克ちボールが止まる。

それを見たガゼルが、駆け戻ってきていた足を止める。

「ガゼル様!」

「FWたちへの警戒を怠るな。これ以上の失点は命取りだ!」

ベルガはそう語るガゼルの肩が、僅かに上下していることに気づいた。

考えてみれば当然のことだ。

一試合の中でのこれほどのシュートの連発は、他のマスターランクチームとの試合でもまずない。

それらの試合ならばチーム同士でのボールの競り合いも激しく、シュートの機会自体が少ないのである。しかし今は、なまじシュートまで持っていくこと自体は比較的容易なばかりに、彼はこの短時間で

必殺技を幾度も放っている。

加えて、雷門にリードを許している状況。そのプレッシャーも消耗を激しくさせていた。

「ガゼル様……やはり作戦を変更しては……」

「いや、このまま私にボールを集め続ける。生半可なシユートでは奴をろくに消耗させることもできない」

同じようにガゼルの疲労に気づいたららしいアイキユーの具申を、ガゼルは却下する。

「わかっている筈だ。我々に敗北は許されない」

「……はっ」

「いくぞー！」

試合終了も刻一刻と迫る中、ここから試合の緊張感は頂点に達していく。

引き続き、猛攻を仕掛けるダイヤモンドダスト。

いままでのエイリア学園との戦いは、いつもリードされた状態から逆転を目指す試合内容だった。それに対して今回は、リードを守り続ける形。

強大な力を持つ彼らが死に物狂いで挑みかかってくるのは、それに追われる立場の雷門イレブンにも大きなプレッシャーであった。

「アイスグラウンド！」

「ザ・ウォール！」

とはいえ、いまの雷門イレブンはなす術なく蹴散らされる弱者ではない。

翻弄され気味だったダイヤモンドダストのオフENSにも対応し始めて、押し返そうと動き出す。

ここにきて、一進一退の展開となったのだった。

当然、それに焦りを覚えるのはダイヤモンドダスト。

時間は雷門の味方だ。このままでは試合は自分たちの敗北に終わってしまう。

「ウォーターボール！」

「ザ・ウォール——うわあ！」

膠着状態を破るべく、ドロルが切り込もうと試みる。

立ち塞がる壁山をこの試合で何度もそうしたように吹き飛ばし、前進しようとした。

「オラアアー！」

「なっ!?」

だが、自らの起こした水流の障壁が開けた瞬間、その向こうから現れた綱海のスライディングにボールを弾き飛ばされてしまった。

焦りのせいで、周囲への注意が散漫になっていたので。

こぼれ球は塔子の元へ渡り、素早く前線へ運ばれ始める。

「止めろ！」

振り返り、全力で駆け戻るガゼルの指示が飛ぶまでもなく、デイフェンスは雷門のFWたちを警戒していた。

点を決めたアフロデイ、守りを抜きかけた豪炎寺。

彼らを特に警戒し、常に必殺技の間合いに入れたポジションを保っている。

ゴツカとクララを主軸にした、死力を尽くしたデイフェンスだった。

雷門もパスワークでこの守備を崩そうとするが、容易に突破はできそうにない。

しかしこのままでは、ダイヤモンドダストの選手たちが皆戻ってきってしまう。

「くっ……」

アフロデイにパスが回ったが、デイフェンスの位置取りは彼の「ヘブンズタイム」を意識しているのが見て取れた。

一発で抜けるには困難な距離、しかし迂闊に踏み込めば即座に必殺技でボールを奪いに来るだろう。

そこで彼はこの守備の、いま自分に注意が向いて生まれた隙間にいる選手を見つけ、ボールを託した。

「アツヤくん！」

アフロデイに守備の意識が寄ったことで、豪炎寺へのマークは依然として厳しかったが、アツヤの位置取りが絶妙なものになっていたの

である。

そのパスに、DFたちの反応は間に合わない。

追加点をもぎ取り、試合を決めるにはこれ以上ない好機だ。

だが、だからこそゴールを見据えるアツヤの瞳は揺らぐ。

(やれるか？ 俺が？)

新たに加わったアフロデイのシュートは、一発でわかるほど、文句のつけようがないほどに強力だった。

では、自分は？

果たしてあのキーパーから、ゴールを奪い取れるのか？

ここでやれなければ、自分は本当にチームの足手まといだ。

「……エターナルブリザード V3イイ!!」

そんな強迫観念の吹き荒れる心を表したような凍える嵐が放たれた。

彼の心の内はどうあれ、今度のシュートはゴール目掛けて真っ直ぐに飛んでいく。

それにベルガが、絶対に点を渡せない背水の陣で気を高めたが、彼が必殺技を放つ機会が来ることはなかった。

「あゝあゝあゝあゝあゝ!!」

ガゼルが、ペナルティエリアの半ばまで到達したボールの正面に立ち、思い切りその足を叩きつけたからだ。

「我々に敗北は、許されない……! ノーザンインパクト——」

思い切り蹴りつける足の裏越しに荒れ狂う吹雪を感じながら、それを自分の冷気で呑み込んで、打ち返す。

「——V2ウゝ!!」

「なっ、があ!？」

「アツヤー!」

目の前で起こったことに呆気にとられたアツヤを弾き飛ばして尚、ボールは凄まじい速さで一直線にゴールへ飛んでいく。

迫り来るシュートの力は、"エターナルブリザード"のそれも乗った、先ほども受け止めていたシュートよりも強力なもの。

源田は油断なく必殺技の構えをとる。

「キングシールド G2!」

そして、凍てつく流星を迎え撃った。

盾は荒れ狂う風を塞ぎ止めているが、その圧力で足が少しずつ、ずりずりと押し込まれていく。

「ぬう……オオ!」

それでもゴールを渡すまいと踏ん張り、思い切りボールを握り潰さんばかりに手で挟み込んで、獅子の顎が威力を殺し切った。

盾が薄らいで消失し、突き出された彼の手にボールが収まっている。

もはや時間も無い。勝利かと思われたが、源田の顔は浮かないものだった。

「チィ……」

不甲斐なさげに歯噛みして、彼は足下——ゴールラインを見つめている。

次いで、審判をしていた古株の得点を示すホイッスルの音が響いた。

「へっ? なんでっスか古株さん!」

「……ワシも残念だが……」

思わず抗議してしまった壁山に、古株も無念そうに首を横に振る。

源田が古株に頷き、その場にボールを落とす。

止まっていた位置から垂直落下したボールは——

「ゴールラインを、割ってしまった」

得点か否かの判断を分ける白線を、完全に越えてしまっていた。

「ハア……ハア……」

肩で息をしてゴールを見つめるガゼル。

その顔は浮かないが、彼の、マスターランクチームとしての意地を見せる得点だった。

これにより得点は1—1。

試合時間もなくなっており、改めて試合終了のホイッスルが吹き鳴らされる。

こうして激しい戦いの末、ダイヤモンドダストと雷門イレブンの試

合は引き分けに終わったのだった。

皆の戦意が鎮まってく中、不意に赤毛の少年がフィールドに姿を現す。

源田に向ける顔、その口は妖しい弧を描いていた。

新体制の先行きは暗くない

試合終了のホイッスルが鳴ったと同時に、対峙する両チームの間に現れた赤毛の少年。

フィールドの空気がなんでもないように自然体で歩いてきた彼は、にこりと源田に微笑みかける。

「凄いね、君」

友好的な態度だが、それが向けられた源田の表情は固かった。

「お前がグランか」

「俺のこと、知ってるんだ。……なんだか恥ずかしいね」

赤毛の少年——グランが頬をかくのに対し、源田は警戒心を隠しもしない。

全国のテレビがジャックされ、陽花戸中でのジエネシスの試合は中継されていた。そこではジエネシスの者たちが人間離れした力を見せつけていたが、その中でも際立った力を見せたのがこの男。中継されていた試合中の姿とは違う地球人らしいものであるが、その身に漲る力は誤魔化せない。

「それはともかく、本当に凄いよ。あんなにガゼルのシュートを止められるキーパーなんて初めて見たな。俺も油断していられないって思っちゃったよ」

「……よく言う」

一見しおらしげに思えるが、仮にも同格の筈のガゼルが全力を尽くしてようやく一点をもぎ取った試合を見ても、「油断できない」程度の言葉であることに、グランの自信が見て取れた。

楽勝とは間違っても考えていないのだろうが、逆に、負ける可能性もまた微塵も感じていないのだ。

そしてグランは、源田が自分の内心に気づいていることに気づいて、笑みを深める。

「嫌いじゃないよ、源田くん。君のその目」

「ピロトー」

そこでベンチから、円堂がグランの地球人の姿での名前を呼びなが

らやって来た。

呼ばれたのに対し、グランは以前散々に蹂躪した相手へにこやかに振り向いた。

「やあ円堂くん。キーパーの君が見れなかったのは残念だったけど、代わりに良いものが見られたよ。チームの力が随分上がってる。短い間によくここまで強くなったね」

「エイリア学園を倒すためなら、俺たちはどこまでだって強くなってみせるさ」

「いいね。戦うのが楽しみだ。……それじゃあ、またね」

グランがそう言うと、ダイヤモンドダストが現れた時と同じ青白い光が、置いてあった黒いボールから溢れ出した。

ダイヤモンドダストと一緒に沖縄で出会ったバーンも居る。彼も試合を見ていたらしい。

彼らが集まっているのは、引き揚げるということなのだろう。

ガゼルは眩い光に顔を照らされながら瞬き一つせずに源田を睨みつけて、告げる。

「源田幸次郎……次は必ず、君たちを倒す！」

冷たさの中に、煮えたぎる雪辱の念を滲ませたその言葉には、彼らの姿が消えた後も残雪のように染み付くものがあった。

「……次、か」

自分たちは彼らエイリア学園を完全に止めなければならない。

そのためには、次に引き分けではなく勝利を掴むには、新たな体制、生まれ変わったチームを完成させるしかないのだろう。

円堂はその決意を新たにした。

静けさを取り戻したスタジアム。

激戦を演じて一息ついた雷門イレブンは、その外のキャラバンに集まっていた。

「それじゃあ、一緒に戦ってくれるんだな！」

「ああ。よろしく」

「歓迎するわ。アフロデイくん、源田くん」

「感謝します、監督」

「……そういえば、自己紹介をしていなかったな。帝国学園サッカー部の源田幸次郎だ。知らない者もいると思うが、よろしく頼む」

「ボクも改めて名乗っておこうか。世宇子中サッカー部のキャプテン、亜風炉照美だよ。アフロデイと呼んでほしい。みんなよろしく」その最中、大事なことをすっかり忘れていたと目を丸くした源田、そしてアフロデイが雷門イレブンにそれぞれ名乗る。

とはいえ、いまさら彼らのことをなにも知らない者などこのチームにはいない。

少なくとも実力に関しては、もういやというほどに見せてもらったところなのだから。

「ウチは浦部リカや。アフロデイ、クイーンの座は渡さへんで！ そのつもりでよろしゅうな」

「俺、木暮」

「私は塔子。よろしく！」

こうして正式に、アフロデイと源田のチームへの加入が認められる。

今日が初対面のメンバーが各々簡単に自己紹介をするが、最後になった人物の名乗りで源田の魂に衝撃が走る。

「立向居です！ よろしくお願いします！」

つい最近キーパーに転向した彼からすれば、源田はまさしく大先輩である。

そんな有名人との対面による緊張で微かに頬を染めながら、若干裏返った声で挨拶した立向居に、源田の視線は釘付けだった。

その名と顔が彼の記憶の断片を呼び覚ます。

この少年もまた、円堂と同じく玉座を争うことになる男なのだ。

「……そうか……お前だったな……」

「源田さん？」

「いや、なんでもない。よろしくな」

見つめられて怪訝な顔をした立向居。彼には眩きまでは聞こえて

おらず、源田は首を振って流す。

こうして二人の加入という話題を終えて、いよいよ新体制のチームの話だ。

「試合前にも言ったように、円堂くんにはキーパーをやめてリベロになってもらうわ」

「キャプテンに代わってキーパーをするのが……」

「キーパーは源田くん。そして……立向居くん。あなたたちにしてもらうわ」

「……………へっ？ 俺もですか!？」

まさかの指名に、呼ばれた立向居本人が素っ頓狂な声を上げた。

彼にとつては完全に不意打ちだったのだから無理もないが、瞳子もこの場面で冗談を言うタイプではない。

彼女は立向居を見据えたまま話を続ける。

「これからの戦いはもつと激しくなるわ。マスターランクチームと戦えるほどのメンバーの補充はまずできないでしょう。そこでもし源田くんが試合に出れないことがあったら、どうするの?」

「そうか、円堂さんがキーパーに戻ったら折角のリベロが……」

「チームの攻撃力と防御力の両立体制を磐石にするためよ。あなたにはこれから本格的にキーパーをしてもらうわ」

「俺が……」

「大丈夫だ、立向居!」

自信がなく、まだ迷いの見えた彼に円堂が朗らかな声をかける。

「うまく言えないけど俺、お前には可能性を感じるんだ。きつと凄いやつになるって」

「『ゴッドハンド』も『マジックザ・ハンド』も覚えることができたお前だ。円堂の後継者に最も相応しいと言えるだろう」

円堂に続き、陽花戸中での彼のひたむきさを見ていた鬼道も言葉をかけた。

「なにより……いまこのチームには全国トップクラスのキーパーが二人も居る。またとないチャンスだぞ?」

「……………」

鬼道の言葉に、今のこのチームがどれ程の奇跡なのかを立向居が実感する。

なにせこのチームのメンバーの殆どは、本来別のチームの選手。エイリア学園を倒すという一つの目的で集まった仲間たち。

何事もなかったら、そもそも出会うことさえなかったかも知れない数奇な運命だ。

それを、成長の糧にしていけない理由などないのである。

「やってみろよ立向居！ 源田の代わりなんて小さなこと言わずに、超えちまうつもりで強くなろうぜ！」

数々の激励を受けた立向居は不意に、また視線を感じて源田を振り向いた。

目と目が合う。瞬間、身震いが彼の体に現れる。

その震えの源は恐怖ではない。

立向居は、源田の瞳に炎を見た。煌々と燃える闘志が、彼の心まで照らし出す。

——負けるつもりはない。

単純とさえ言える飾り気のない対抗心。

それが彼の闘志にまで燃え移る。

自分を、対等な競走相手と見ているのだ。

こんなに真っ直ぐな強い心をぶつけられてすべきことは、ぐずぐず遠慮することではないだろう。

全力でその思いに、応えるしかない。

彼の憧れた円堂もきつと、そうしたのだろうか。

「……はい！ 俺、頑張ります!!」

ピシッと、固すぎるくらいに背筋を伸ばした立向居の元気のいい宣誓に、源田は満足げに頷いた。

「これは、まさに革命ですー！」

チームの新体制の話も纏まったところで、目金が眼鏡を光らせながら興奮気味に語り出す。

アフロデイのフオワード。

円堂のリベロ。

源田と立向居のゴールキーパーの双壁。

「このチームが完成すれば攻守において磐石な、まさに地上最強イレブンの誕生です！」

彼の言う通り、ここに集まった選手たちがチームとして纏まれば、地上最強という枕詞もけてして過大ではないだろう。

敵は強大であるが、こちらもまだまだ強くなる余地があるとなれば俄然やる気が湧いてくるというものだ。

「……………」

アツヤ一人を、除いては。

ダイヤモンドダストの襲来を凌いだ雷門イレブンは稲妻町へ帰ってきた。

思わぬ激戦を繰り広げたこともあり、新体制での練習は明日からと決まっている。

つまり今日は身と心を休める自由時間というわけで、円堂らは久しぶりの故郷で過ごす時間にリラックスし、そうでない者たちは円堂らの故郷ということで興味津々だ。

「よしそれじゃあ、みんな家うちに來い！ みんなまとめて泊うちまっくれ！」

「おお太っ腹！ 世話んなるぜー！」

円堂を皮切りに続々とキャラバンを雷門イレブンが降りていく。

長い間留守にしていた家へ向かう鬼道や壁山、夏未などの雷門生。そして円堂の先導で彼の家へ向かう塔子や綱海ら新加入組。

彼ら皆が降りたのを確認した瞳子が、最後にキャラバンを降りる。

「アツヤくん？」

「……………監督」

するとそこには、アツヤが彼女を待ち受けていたように佇んでいた。

夕陽に照らされる稲妻総合病院の屋上では、染岡の見舞いに来た士郎が彼と話し込んでいた。

士郎はこれまでの旅の様々な思い出を染岡に語っていくが、やがてその顔が浮かないものになっていく。

「……最近、アツヤの考えていることがわからなくなってきたんだ。悩んでるのなんて、見ればわかる。けどなんて言ってやればいいのか。どうしたら、昔みたいに楽しくサッカーができるのかわからないんだ」

今回のダイヤモンドダストとの試合でも、アツヤには焦りが見えた。

そして彼の打ったシュートをガゼルに打ち返されて、それが得点となって同点に終わったのだ。

責任を感じてもおかしくない。

しかし打ち返されたシュートに撥ね飛ばされた彼は、心配する誰に対しても気丈に振る舞うばかり。

北海道でサッカーをしていた頃は、弟の考えることなんて手に取るようにわかった。

単純で、すぐに熱くなって、自分は時々その手綱を引きながら、二人でプレーする。

それがいままでの兄弟のサッカーだった。

だが、長く険しい戦いはそんな在り方を打ち砕いたのだ。

「僕……兄失格なのかな」

「んなことねえよー」

それまで静かに話に耳を傾けていた染岡が、士郎の零した言葉に口を挟んだ。

「兄弟だからって、何もかもわかったりしてたまるかよ。結局二人は違うんだよ。歳も、性格も、ポジションもな」

「……」

「でも、そんな違う奴らがみんなで作るのがサッカーなんだぜ」

だからいいんだと、染岡はベンチから松葉杖を支えに立ち上がって笑う。

「言葉じゃ伝えられねえことがあっても、サッカーで伝えられることだってあるはずだ。アツヤにそれを見せてやるのが、一番兄貴らしいんじゃないか？」

「……染岡くん」

「アイツとの出会いは……正直言つて最悪だったけどよ。アツヤもお前も、もう立派な雷門イレブンだ。俺たちの仲間だ」

染岡の語る言葉に、俯き加減だった土郎の顔が上がった。

「アツヤはきつと立ち上がれる。お前は、立ち上がろうとするアイツを全力で支えてやってくれ。俺の分まで……ぐうっ！」

そこまで言つて、染岡の顔が苦痛に歪む。

転げ落ちるような勢いで元のベンチへ座り込んだ彼へ、慌てた土郎が駆け寄った。

「染岡くん！ 大丈夫……？」

「……なんてことねえさ。お前らに比べればな」

脂汗を滲ませた顔で、染岡はそれでも笑ってみせる。

そんな彼の男気が土郎の心に染み入り、温かくしたのだった。

「……ありがとう、染岡くん」

「でも、ここでのことをアツヤには言うなよ。小っ恥ずかしいからよ」

「そう言うと思つたよ。もちろん言わないさ」

「それで、これは伝えてくれ」

その時、屋上で風が流れ始めた。

横から吹き抜ける柔らかな風が土郎の髪と、染岡の患者衣の襟を揺らす。

「また一緒に、風になろうぜ」

「……うん。絶対だよ、染岡くん」

染岡の言伝てを、必ず弟にも届けると頷く土郎。

差し込む夕陽は彼らの友情を照らしているようだった。

染岡と別れて病院を後にした土郎が、泊まらせてもらおう田堂の家へと歩いていく頃。

日が暮れ始めた河川敷で怒鳴り声が響く。

「お前に、何がわかんだよ……！」

ただ、その声は感情が爆発していると同時に、ひどく弱々しい。

そこには震える唇を噛み締めたアツヤと、胸ぐらを掴まれながら静かに彼を見る源田の姿があったのだった。

源王は離脱を認めない

他のメンバーが町へと繰り出していった中、瞳子を待ち受けていたアツヤ。

彼は染岡の見舞いに行くと言う兄には円堂の家へ荷物を置いていくと言って先に行かせ、円堂らにはキャラバンへ忘れ物をしたと言ってここまで戻ってきていた。

「……どうしたの、アツヤくん。練習は明日からだと言ったはずよ」「そうじゃねえんだ!」

瞳子の前に立つアツヤの顔は、やや俯き気味で見辛い。

だが彼の纏う、雪の結晶のような脆い危うさは彼女にも感じ取れた。

彼は悲壮な声音で振り絞るように告げる。

「……俺を、チームから外してくれ」

アツヤは瞳子の返事を待たずして、そのまま言葉を継ぐ。

「わかってるだろ? ジェネシスには手も足も出なくて、イプシロンのときはへばってぶっ倒れて、さっきのダイヤモンドダストとの試合じゃあ、点を取れねえどころか俺のせいで点を取られた。俺はもうずっと、チームの役に立ててねえ」

「アツヤくん……」

「豪炎寺とアフロディ。あいつらは俺なんかより、ずっと強いストライカーだ。それに比べて俺は、強いストライカーとしてチームに誘われたのに、すっかり足手まといになっちゃったんだ……!」

不甲斐なさを噛み潰すように歯を食い縛りながらアツヤが語ったのは、彼がずっと抱えていた自己嫌悪、嫉み、劣等感、そんな負の感情だった。

震える拳を握り締め、彼は瞳子を見上げて改めて言う。

「俺にはこれ以上チームにいる資格がねえんだ。だから、外してくれ……」

半ば懇願のような声音、いまにも泣き出しそうな顔でそう希^{こいねが}うアツヤに、瞳子はすぐには答えなかった。

確かに、近頃のアツヤのプレーが精彩を欠いていたのは否めない。彼自身が語ったように、続く戦いのいずれでも振るわない結果だったことで思い詰めてしまうのも、風丸や栗松の離脱を考えれば当然、むしろ今日までよく持ったとさえ言えるだろう。

しばしの、彼には永遠にも感じられた数秒の沈黙を経て、彼女はアツヤに向き直る。

「わかりました。あなたを外します」

その言葉は望んでいたものだ。

彼らは帰ってきた仲間、新しい仲間と強くなり、自分は去る。それだけのことだ。

（——これでいい。これでいいんだ）

そう自分へ言い聞かせて、胸に残る未練に知らぬふりをして、瞳子にアツヤは頷こうとした。

しかし瞳子は、ただし、と言葉を付け加える。

「ただし、スターティングメンバーからよ。私が必要だと判断したら試合に出てもらいます」

それは当然、アツヤには青天の霹靂であった。

「なっ——うお!？」

「監督、俺もそれがいいと思う!」

彼女の言葉に食って掛かろうとしたアツヤの頭が、突然上から加えられた力で下を向く。

頭に乗せられたのは分厚い手の平だ。何年も何年もそれでボールを受け止めてきた、逞しい手の平。

その主は、ハキハキとした声で話に割り込んできた源田であった。

「源田!? てめえなにを——」

アツヤが抗議をする前に、源田は彼の頭に手を乗せていた状態から一瞬で腕を回し、脇に抱えるようにして抑え込んでしまう。俗にいうヘッドロックのような形だ。

「放せよ、おいつ。コラッ、この、馬鹿力あ……!」

「少し話してきます、監督」

「え、ええ……」

「はなせ、はなせよ、おいこら！ はなせつてば……！」

拘束を外そうと腕に手をかけ、頭を引き抜こうとじたばたするアツヤだが、源田の圧倒的パワーの前には微動だにさせることもできない。彼の頭をホルルドする腕はさながら、鍵のついた首枷である。

源田はそのままの姿勢でずんずんと歩きだし、有無を言わさずアツヤを何処かへと連れ去ってしまってしまった。

「……」

「……よかつたんでしようか」

流れるような人拐いの手際。それを見送った瞳子の背に、古株から声がかかる。

それは、苦しむアツヤを案じるものだ。

「天才ストライカー……彼がそう言われていたのも、それに見合う実力があるのも、チームにその力が必要だったのもわかっとなります。……しかし、彼はこの戦いで傷付き過ぎました。解放してやる手も、あつたんじやないでしょうか」

北海道で出会った頃のアツヤは、実力に裏打ちされた勢いと自信に満ちていた。

しかし、エイリア学園との戦いによる自分の力が通用しない挫折、染岡たち仲間との離別。それらが彼の精神を磨り減らしていったのは間違いない。

もはや限界ではないか。これ以上チームに引き留めていても、アツヤが苦しむだけなのではないか。

旅の始まりからずっと彼らを見てきた一人である古株は、そんな思いを口にする。

「確かに、そうかもしれません」

一人の大人の意見として、それは間違っていないだろう。

「……それでも、彼にはここに居てもらいます」

アツヤが連れ去られていった先を見つめながら、瞳子は言葉を紡ぐ。

「彼は辛いでしよう。しかし同時に、それを乗り越えるために必要なものもここにあります」

「必要なもの……仲間、ですか」

サッカーで負った傷は、サッカーと向き合うことでしか癒せない。今はそんなアツヤを支える仲間たちがいる。

ここに居てこそ、彼の更なる成長があるはずだというのが彼女の結論だった。

「すみませんでした、監督。チームの運営に口を挟んでしまつて」
「構いません。最終的に決めるのは、私自身ですから」

古株の謝罪に瞳子は、責任を負うのは自分であると返す中で。

もしもこれが、チームへやってきたばかりの瞳子しゅんであつたのならば、アツヤの離脱を認めていたのだろうか。

「そんな自問が頭を過よまる。」

妹を人質にされていた豪炎寺とは訳が違う。

今の彼は戦意が折れかかってしまつてしまつているのだ。チームに置いていても、士気を下げるだけだと見ることもできる。

しかし現実には、自らチームを外すよう求めたのを引き留めてままで、瞳子は彼の成長を祈っている。

それが言葉通りの戦力としての期待なのか、それとも彼らの監督ほごしやとしての願いののか。

彼女もまた、選ばなければならない時が近づいている。

円堂たちも度々練習に使っていた、グラウンドのある河川敷。

「いいっ、加減に、はなっ、せやア!!」

「ああ」

「うおあああ!?!」

源田の拘束に激しい抵抗を見せながらも、アツヤは彼の剛力によつてずると橋の陰まで連れてこられてきていた。

声に出すのも何度目かになる。放せ。という主張が突然聞き入れられた結果、彼は前のめりにゴロゴロと数メートルを転がる羽目になる。

思い切り転がり、大の字の形で手足を投げ出して地面に背中を預け

た彼は即座に飛び上がったって源田を睨みつけた。

「てめえなにしゃがる！」

突然やって来て誘拐同然にここまで連れてきた下手人に対しては妥当な言葉だが、それが向けられた源田は真顔で答えた。

「お前がくだらないことを言っているのを聞いていられなくてな」

彼の言葉に、怒りで湯だっていた頭が冷まされたアツヤは、ばつが悪そうに顔を背ける。

そもそも周囲に嘘を吐いてまで瞳子と一対一で自身のチーム離脱の直談判を行ったのは、チームメイトたちの前でそんなことを言えば兄を筆頭に誰もが自分を引き留めようとするのが目に見えていたからだ。

眼前に源田が居る時点で、その思惑が水泡に帰したことを意味している。

「なんでお前、居たんだよ」

「別に確信があったわけじゃないが……昔はあれだけ威勢よく食いついてきたお前が、俺に話しかけても来ずに大人しいことが不自然だった。そのお前がさらに不自然な姿を見せたから、こつそり様子を見ていた。理由はこれでいいか？」

「いいもなにもねえよ、くそっ……」

再会は数年ぶりだというのに、かつてのライバルが発揮してきた予想外の目敏さに対し、アツヤは憎まれ口を叩くことしかできなかつた。

しかし、それならば。

立ち去ることさえ許さないのなら。

お前がこの行き場のない思いを受け止めろ。

それが八つ当たり以外のなものでもないと自覚しながら、アツヤは目の前の男に凍てつかせんばかりの眼光を叩きつけた。

源田はアツヤの、荒れ狂う吹雪のような圧を受け、もとよりそのつもりだったようにボールを彼へ転がした。

「来い。三年ぶりの勝負だ」

彼はそう言って、ゴール前に仁王立つ。

それから、どれ程の時間が経ったのか。

「アアアアーっ！」

「ぬん！」

力一杯、否、力任せに放たれたシュートを、源田が防ぐ。

風を切る鋭いシュートが、彼の全身で抑え込まれる。

既に河川敷に差し込む陽光が赤く染まるまで続いたやり取りだ。

アツヤのシュートは、ゴールを決めるといふより、源田へ叩き込むような一撃だったが、源田はそれら全てを余さず受けきってみせたのだった。

「……………ほんつと、強ええな、お前は……………」

最後の一撃を放ったアツヤは、それが受け止められたことを見届けるとその場にへたり込んだ。

乱れ切った呼吸。喘ぐような息を深呼吸して整えながら、歩み寄ってくる源田を見遣る。

「気が済んだのか？」

「……………ああ」

「……………これで終わりか？」

「……………」

項垂れたまま相槌を打つアツヤ。それに対し、源田は納得しない。アツヤのすぐ傍までやって来た彼は告げる。

「三年前のお前は、こんなものではなかったぞ」

「……………」
眩きのようなその一言は、刃よりも鋭くアツヤの心に突き刺さった。

次の瞬間、彼は反射的に源田の胸ぐらに掴みかかっていたのである。

「お前に、何がわかんたよ……………」

散々にシュートを打って疲れ果てているアツヤの力は弱々しく、解こうと思えば簡単に解けるものだ。

だが源田はそれに何ら動じることなく、勢いで半ばのし掛かるようになった彼を倒れ込まないよう強い体幹で支えさえしてのけた。

それら全てが、アツヤの劣等感を刺激する。

彼が思い詰めるに至った要因を推し量ることは、これまでの雷門イレブンの戦いを振り返れば容易だろうが、知ることと理解わかることはまた別のことだ。

「……」

ゆえにわかるとは言わない。だが、見過ごすわけにはいかない。

このままチームを去れば、戦うことから逃げ出せば、アツヤは二度と心の底からサッカーを楽しむことができなくなってしまおうだろう。

そう切実に訴えかけ、突き刺し続ける源田の眼差しを浴びて、アツヤの心は決壊した。

「っ……わかってんだよ……!」

彼とて、これが正しいことなどわかっていない。

足手まといになる、チームの荷物になりたくない、そんな建前を並べても。

この行いはどう言い繕ったところで、目の前の戦いから仲間を置いて逃げるのと変わらないのだと。

だが、理屈でわかっているとしても心がついていけないのだ。

「なんでだ。なんで俺は、あいつらみたいに立ち向かえねえ……」

いまの彼は、心だけが置き去りにされてしまった。

掴みかかっていた手はひとりでに解け、すがり付くように胸板へ押し付けられる。

両の瞳から涙を流したアツヤは、源田を見上げて問う。

「なんでお前は、ずっと、そんなに強いんだよ……!」

アツヤのサッカーに初めて現れた敵。越えるべき壁。ストライカー 彼にとつ

ての強者の象徴。彼の強さ、戦う姿は初めて戦ったあの日から少しも陰りがなく、記憶よりも鮮烈なものだった。

それに比べて自分は、なぜこんなにも弱い。

三年前よりも余程強くなっているのに、ずっと弱くなってしまうた。

このままではいけないのはわかっている。しかしいったいどうすればいいのかもわからない。

源田になら、その答えがあると信じて。

「そうか。お前には、そう見えるか」

アツヤの叫びを受けた源田は目を伏せて膝を折り、神妙になった顔を彼と付き合わせる。

「……俺もいまの力は初めからあったものじゃない。間違いや失敗だって、ついこの前に犯したばかりだ」

真・帝国学園の戦い。

それは源田の苦い記憶であることはもちろん、アツヤにとっても心の闇の発端とも言える。

「そのうえで言おう。ただ間違わないということとは強さを意味しないと。……といっても、いまお前に重要なのは強さではないだろう？」

そのままでは、また同じ壁にぶつかることになる」

「……どうということだよ」

「お前にとって仲間はなんだ？」

その問いはアツヤの核心へ指を掛ける言葉だった。

答えられずにいるアツヤに対して、源田の言葉は続く。

「アツヤ。昔のお前のサッカーでは、その場に居たのが士郎だけだったんじゃないか？」

次なる源田の問いにも、アツヤは答えられなかった。

幼い頃から突出した才能を示したアツヤは、一人で、もしくは兄と二人で。普通11人でやるサッカーというスポーツを、それだけでこなしてきていた。

なにせ彼についてこられるのは兄だけ。

兄以外は敵も味方も、自分の勝負の土俵にいない。

やがて、挑むべき強敵は源田が現れた。

しかし問題は、もう一つの足りないものはそのままになっていたということだ。

兄である士郎は近すぎる。

チームメイトは遠すぎる。

そのため、アツヤの世界にはときに競い、ときに支え合う仲間という概念が存在しなかったのであった。

「それがいま。円堂たちはお前とプレーをして、一人じゃ敵わないような相手に一緒に挑んでいる」

つまり、このチームこそが彼にとって初めての、仲間と呼べる存在。「お前はこの戦いに身を投じたからこそ、仲間というものを知ったはずだ」

真つ向からライバルとして対抗し、やがて相棒として強い信頼を築いた染岡。

どんなときでもチームを支え、またチームに支えられる円堂。

豊かな個性で鮮やかな色彩を織り成す雷門イレブン。

彼らのような相手と出会える機会は二度とないだろう。

「……ああ、好きだよ。みんな」

その照れ臭くなるような言葉は、アツヤ自身でも不思議なほど素直に口から出た。

彼らとの縁が何物にも代えがたいものであるのは疑いない。

だからこそ、これ以上迷惑をかけたくないと感じてしまうのだから。

「バカが」

「ああん!?!」

「雷門のサッカーは仲間同士支え合う。お前はそこが一方通行だと言うんだ」

エースとして、チームを勝利に導く。エースとして、チームを支える。

いままでのサッカーではそれしかやってこなかったアツヤは、いまのチームでもそれをやらなければと思いつめていたが、雷門イレブンはアツヤ一人へのおんぶに抱っこに甘んじるチームではない。

“風になる”特訓は、雷門というチームが吹雪兄弟のペースに合わせた結果であったように。

今度はアツヤが、雷門のやり方を味わってみる番だということだ。

「いまは大人しく支えられてみる。エースというものだって、チーム

によってその在り方は違う。このチームでのお前の在り方があるはずだ」

「それじゃ、完璧じゃねえ」

「どのみちこのままぐずぐずしていても完璧などとは程遠いんだ。やるだけやってみる」

そう言い切って立ち上がった源田はアツヤの頭に掌をポンと置いて笑う。

アツヤもまた勢いよく立ち上がり、手を払い除けるが、源田は微笑みを崩さない。

「ガキ扱いすんなよ、一年しか違わないくせに」

「その一年が案外大きいものだぞ。……いかな、もう日が暮れる。

お前、円堂の家に泊まるんだろう？」

「ああ」

住宅街と随分近づいてきた太陽を見た源田が確認する。

それへのアツヤの返答を聞いた源田はしばらく夕陽を見ていたが、やがてなにかを思いついたように一人頷いた。

「――よし、走るぞ」

「はあ？」

脈絡のない唐突な提案に、アツヤが目丸くする。

「お前、他の奴らに嘘をついて監督の所にいただろう。知られちゃまずいんじゃないか？」

「うっ……」

源田の指摘にアツヤは、盲点だったと苦い顔を作る。

なにせ本来はあそこでチームを去る腹積もりだったのだ。不審に思われようがどうなるうが関係なかったが、こうなっては非常にまずい。

特に兄に、染岡への見舞いをすっぱかしてこんなことをしていたと知られれば――

ぞわり。

背筋に北海道の寒さとは違う寒気が走った。

「適当に、俺と特訓していたとでも言え。話は合わせてやる。それに

ほどほどに汗をかいておけば、少なくともそこは本当だと信じられるだろう」

「そもそも瞳子が真相を明かすことがあればこの裏工作など無意味だが、彼女とて徒に子どもいたずらのデリケートな問題を口走りはしないだろう。」

「ふっ……チームの特訓は明日だが、今日も走り込みぐらいしたって構わんだらう？ 競争ということにしようか」

「そもそもお前キャプテンの家知ってるのかよ」

「まあな。じゃあスタートだ！」

「!? てめえ待てコラッ！」

別に競争などに付き合う気などありはしない。しないが。

自信満々、得意気に走り出したこの、当人曰くの大きな一年の差を持ちながらに大人気なさを見せた先輩バカに、円堂家でにやけ面で待ち構えられるのは、アツヤはなにか無性にムカついた。

そんな心の変遷を経た彼もまた、土手を駆け上る源田の背を追って走り出す。

まさに子どもっぽい対抗心。

しかしなんだか久方ぶりのそれが、随分肩を軽くしたように感じた。

そして日が暮れて暗くなった頃。

息も絶え絶えといった様子のアツヤを担いだ源田が円堂家を訪ねる姿があった。

「……すまん。こんなつもりじゃなかったんだが」

源田は気まずげにその一言を残して円堂らにアツヤを託し、家路につく。

次の日の練習の際、アツヤが源田をかつてない恨みの籠った眼差しで睨みつけたのはいうまでもない。

雷門に頑張らない者はいない

ダイヤモンドダストの急襲を乗り越え、一夜を明かした雷門イレブン。

彼らの姿は、新校舎の建設が続く雷門中のグラウンドにあった。やることは当然、新体制での練習である。

その目玉はやはり、円堂が黄色のユニフォームを身に纏って練習している姿だろう。

雷門の黄色とは即ち、フィールドプレイヤーだ。

キーパーとしての円堂を長らく見ていたチームメイトには、その姿は新鮮に映る。

そして肝心な、リベロとしての特訓はというと。

「手を出すなど言っているだろう円堂！」

「だーっ！ 仕方ないだろ!？」

難航していた。

なにせ彼はずっとキーパーをしていたのだ。ユニフォームを変えたところで、その身体に染み付いた感覚を切り替えるのは容易ではない。

実際、今もアフロデイから放たれたシユートに対し、頭ではなく手を出してしまっていた。

「特訓のやり方、考え直した方がよくないか？」

そう提案するのは、先ほどから豪炎寺とアフロデイにボールを上げている土門だ。

現在行っているのは豪炎寺とアフロデイのシユートを円堂がヘディングで迎え撃つという、新たな必殺技のための特訓のだが、今のところは必殺技以前の地点で躓いてしまっている状態である。

このまま続けても、彼からして不毛と言わざるを得ない。

「大介さんのノートを読み解き、必殺技をモノにしてきた円堂のアイデアなんだ。俺は円堂を信じる」

「…………… ありがとう、鬼道！」

「とはいえ、土門の言うことも尤もだ」

「鬼道！」

鬼道が土門の主張にも理解を示したそのとき、源田の元気よく呼ぶ声が聞こえてきた。

次いで響くのは、ずん、という鈍い音。練習中だった面々の視線が何事かとグラウンドの外を向く。

音のした方から歩いてきていたのは、これまでグラウンドに居なかつた源田である。

雷門イレブンは彼を、そして彼が背負っていた物を見て言葉を失つた。

「源田くん……それ、は、いったい？」

アフロデイが間近に迫った。それ〃を前に漂うゴムの臭いで呆然としながらも細かい問いを投げ掛ける。

なんとというかそれは、アフロデイの常識を真つ向から粉碎する概念の結晶だった。

「これか？ すまないがこれは円堂用だ」

(俺?)

源田は絞り出した彼の問いにさりと答えると、そのままずっと地響きすら起こす重量感たっぷりの歩みを進め、同様に固まっている円堂の傍までやって来て〃それ〃を一度地面に下ろした。

瞬間、グラウンドに起こる一際大きな地響き。

置かれた黒いそれは大きく、ぶ厚く、何より人間が持つには重過ぎた。

とうか見紛うことなきタイヤそのものだった。

それも、一般に見る自動車に付いているものではない、間違いなく大型車両に使われるような特大サイズの代物。

円堂や彼の特訓を知る者には見慣れた特訓アイテムだが、源田が持ってきたのは、それを三つ重ねた状態で、崩れないようにロープで固定されたもの二つだ。

それぞれから一本、太く固そうなロープが伸びている。

源田はそのロープを掴み、円堂に差し出した。

「さあ円堂、こいつを使うといい。これを持っていればボールに手を

出す余地はないぞ」

「お、おお……どうしたんだ？　これ……」

流石の円堂も、目の前で地響きを立てて着地した重量物を言われるがまま受け取るほど鈍くはなかった。

ここで選択肢を誤れば、命ゲームオーバーに関わる。

そんな直感に従い、話を逸らして時間を稼ぐ。

「さつき鬼道から、お前の腕を封じられるものを用意してくれと頼まれてな。作った」

（鬼道くん???)

（鬼道……）

（俺はあんなもの作れとは言っていない）

彼らのやり取りを聞いていたアフロデイと豪炎寺からなんとも言えない目を向けられた鬼道は毅然とした佇まいで、自らの無罪セーフを主張する。

——ああ。そういえば源田こいつはこんなやつだった。

鬼道はいままさに思い出していた。

雷門での濃い日々のせいですっかり失念していた、帝国の守護神の有り様ようを。

まだ鬼道たちが帝国学園に入学し、サッカー部員となってもまもない頃のことだ。

『源田か。精が出る——なんで……寺門が……倒れてる……』

『ああ、鬼道か。お前も早いな。朝練前にトレーニングしていたらさつき寺門も来て、俺もやると……』

『……それで？』

『寺門が寝てしまった』

『……そうか』

その日の午前中、寺門は使い物にならなかった。

午後にはなんとか復活したのは、彼の帝国選手としての意地がなした業であろう。

『……？　源田、なんだそれは？』

『これか？　特訓場のボール発射装置の威力がどうにも物足りなくて

な。この前総帥に相談したところ……今日こいつが届いた』

『(……従来のものが鉄砲なら、これは大砲だな)』

後日、試しにその発射装置を使った三年のキーパーが背後のゴールに叩き込まれた。

帝国の特訓場には、導入したものの彼以外にまともに使える者がいないという理由で源田専用となっている特訓マシーンが数多い。

このように、帝国サッカー部では度々源田が中心となった騒ぎが起こっていた。

“禁断の技”に纏わる騒動もその一つ。

——帝国学園には……こういう男がいたのだったな。

そんな帝国での日々を思い出して遠い目をする鬼道に、アフロデイと豪炎寺も大体の事情を察せてしまった。

彼らがそんな視線だけで通じ合える信頼関係の無駄遣いをしている最中も、源田から詰め寄られる円堂はいまにも、問題のタイヤの塊を手に取らされそうだ。

「俺も持ってみて感じ、なかなかいい負荷だと思うぞ。こいつを使えば必殺技と一緒に身体も鍛えられて一石二鳥だ！」

「あ、ああ……」

源田の屈託のない笑顔とサムズアップに、円堂は曖昧な笑みしか返せなかった。

イメージとしては、両手にバケツを持って廊下に立たされる感じが近いだろうが、いま持たされそうなのは水入りバケツの比ではない。

源田がここまでこの拷問具を持ってくる様を見ていた円堂の脳裏には、これを持ち上げようとした己の腕が比喻でなく引っこ抜ける光景が浮かんでいた。

「キープテンがキーパーに戻れなくなっちゃうっス……！ め、目金さん……」

「君が言ってきたらいいじゃないですか壁山くんっ」

様子を見ていた者たちの一員である壁山と目金が源田^{アレ}を止めろとお互い小突き合うが、二人はもちろん、なぜか皆が動けなかった。

形容し難いが、円堂へ拷問具を勧める源田のにこやかな姿には“そ

これはムリだ”と割って入るのを躊躇わせるオーラがあったのだ。しかし円堂も、源田の100%善意の行いにいつまでも抵抗することはできない。

誰かが止めなければ、間違いなく円堂は新必殺技どころでなくなってしまうだろう。

エイリア学園と戦う前に味方にキャプテンが殺されるなど笑えない。というかなぜ特訓で命の危険を感じなければならぬのか。

そんな不条理への反感さえ覚え始めた雷門イレブンだったが、この奇妙な時間はあっさり終わることになる。

「なにやってるのあなたたち？」

救世主は、作ったスポーツドリンクを持ってきた夏末であった。

彼女は異様な状況にひきつった顔を、学生でありながら雷門中運営に携わる才女としての凜とした表情に変え、その空気の元凶へと突き進んだ。

そこからは早かった。

「その危険物は没収します」

「えっ」

「これは理事長の言葉と思いなさい」

「俺は別に雷門中の生徒では……」

「黙りなさい」

「はい」

斯くして、雷門夏末の活躍によって源王の野望は阻止された。

帝国はもちろん、雷門でも自分の感覚が受け入れられないらしいと知った源田は肩を落として自分のトレーニングに戻っていく。

その背中には、彼の異名が嘘のような哀愁に満ちていた。

ハプニングがありながらも順調に進み出した円堂の特訓。

一方の立向居の特訓であるが、彼が習得を目指す、裏ノートに記されていた究極奥義の一つの”ムゲン・ザ・ハンド”がまた難解だった。

唯一大介の字を解読できる円堂の言葉でも、その極意は擬音のみで

全く要領が掴めない。円堂の推測では全身を目と耳のようにしてシュートを見切る、ということだそうだが――

「シユタタタタン、ドバババ――へぶっ」

「立向居！」

現状、習得へは遠いようだ。

目を閉ざし、音だけでシュートを見切ってみようとしている立向居だが、今のところまともにボールを取れていない。

言うまでもないが、視覚は人間の知覚の殆どを占める。

普段頼り切っている感覚を封じれば、大抵の者は真っ直ぐに歩くのも覚束なくなるだろう。

ましてや飛んでくるボールを受け止めることなど夢のまた夢。

「大丈夫か？」

「まだまだ……次、お願いします！」

「いいガッツだな。こっちも遠慮なく行くぜ！」

しかし、雲を掴もうとしているような心地でも、立向居はその目標にめげずに挑み続ける。

その姿には、鬼道が評した通り円堂の後継者と呼ぶのに相応しい魂が宿っていた。

究極奥義をモノにするまでは道のりは長そうだが、彼は大丈夫だろう。

そうなると、残るは――

「――アツヤ！ お前本当に一緒にやらなくていいのか？」

昨日あの源田と特訓をして満身創痍だという、ベンチに腰掛ける彼へ綱海が声をかけた。

「ああ……いまはな。足棒みたいだよ」

「そうか！ 蹴りたくなったらいつでも言えよな！」

綱海はその返事に朗らかに笑いかけて、立向居のゴールへ向き直った。

彼らの姿を、アツヤは目に焼き付けるように見る。

(いまは……見ていたい)

これまで自分がちゃんと見れていなかったチーム、共にサッカーを

する仲間たちを。

それが、ただ漫然とボールを蹴っているだけでは駄目だと考えたアツヤなりの向き合い方である。

アツヤの目に映る彼らは皆、これがエイリア学園との戦いのための特訓であつても、楽しそうだった。

緊張感がないのではない。

自分たちが、何のためにこの戦いを続けているのか。それが、彼らにはわかっているのだろう。

『アツヤ。染岡くんが、 “また風になろう” だつて』

大好きなサッカーを取り戻す。

いまは会えない仲間たちと、あの日と変わらず笑い合うために。

もしあのまま逃げ出していたら自分はそれを忘れたままではいたかもしれない。

大切なものを拾い直すように、アツヤは彼らとボールの一挙手一投足を見つめていた。

(立向居……アツヤ……皆、頑張ってる)

そして、仲間たちの懸命な姿に力をより一層漲らせていたのは円堂だ。

彼らの努力に応えようと、自らもまたキャプテンとしての姿を見せ、それが仲間たちの力となる好循環。

新たなチームの形を得た雷門イレブンは、着実に出来上がっている。

数日後に円堂がモノにした必殺技は、そのチームの新しい力の象徴のようだった。

彼らの進化は、帝国学園にて加速する。

帝国の威名は伊達ではない

新しい必殺技——「メガトンヘッド」を習得した円堂。

しかし、それだけでリベロとして完成したわけではない。

更なる必殺技が必要だという鬼道の言葉に従い雷門イレブンがやって来たのは——

「これが……」

「帝国学園か！」

都会のど真ん中を占有し、余人を寄せ付けない威容を誇る巨大な黒鉄くろがねの要塞——帝国学園だった。

全国最強と名高い超名門校の鋼のように硬く冷たい佇まいは、かつての雷門イレブンが地区大会決勝戦で訪れた時から少しも変わっていない。

今回はここへ練習に来たのだが、壁山や木暮は校舎を見上げて思わず息を呑む。

「よし、行くこうか。話はもう着いている」

「……ああ、そうだな」

帝国を学び舎とする源田は自然体そのもので、気楽に校門を越えて歩いていったが。

その背を見つめた鬼道は、彼に続いて敷地内へ踏み込んだ。

帝国学園は外から見てもわかる通り、非常に巨大かつ広大だ。

校内の施設も、他の学校とは比べ物にならないほど充実している。

加えて要塞のような校舎が非日常感をこれでもかというほどに溢れさせているからか、FFでやって来たことのあるメンバーもこの旅で加わったメンバーも、源田と鬼道を先頭に校内を歩きながら興味津々にあちらこちらへ視線を向けていた。

「凄いな、フィールドが一杯ある！」

「あれらは練習用のフィールドだな。練習試合も普段はあそこのどれかでやっていたが……俺たちが向かっているのは、地区大会の決勝でも使ったスタジアムだ」

渡り廊下から眼下に広がる芝生を見下ろしてはしゃぐ塔子に、鬼道が説明する。

全国の覇者、40年無敗だった帝国サッカー部は学校からも力が入れられており、部員数も他のスポーツとは段違いである。

フィールド一つではサッカー部総員の内の三分の一も収まり切らない。

「スタジアムのフィールドは試合の他に、昇格試験や練習にも使ったりするんだが、基本的に一軍しか使えないんだぜ。なんとかサブメンバーに入つてあそこに立つたときは感慨深かったなあ」

鬼道と同様に帝国在籍歴を持つ土門が、懐かしそうに語る。

それは帝国学園の伝統の一つ。

資格のない者はスタジアムのフィールドに立つことすら許されず、小学生時代に名の知れたプレイヤーが一度もその芝生を踏むことなく卒業していくなんてことも珍しくない。

二軍以下のサッカー部員たちは、一軍の精鋭にのみ許された聖域を見上げ、自らもそこに立つことを夢見て厳しい練習に励むのだ。

「二軍かあ……」

「こればかりはな。どうしたって試合に出られるのは11人……それに対して帝国の部員数は100を軽く超えるんだ。こうした区別は必要になる」

「確かにな」

雷門中のサッカー部は、そもそもつい最近まで部員が11人も居ない弱小だった。

そのためあまりにも縁遠い帝国サッカー部の話に円堂がなんともいえずにいたが、雷門中に来る以前は名門である木戸川清修に籍を置いていた豪炎寺は理解を示す。

規模が違うだけで、雷門で起こったレギュラーからのベンチ入りとて本質は変わらない。やるならば皆勝ちを目指す。そして勝ちを目指せば、強いメンバーを試合に出そうとする。

“強い”の基準はチームによって異なるだろうが、それはサッカーが勝負の世界である以上は偽れない真実だ。

ただ、そこまで考えて。

沖繩で豪炎寺と過ごした夜の話を、円堂は思い出していた。

エイリア学園との戦いの中で仲間が去り、新たな仲間を加えるいまの自分たち。

彼らに勝つには力が必要だった。

しかしこの旅では、得たものと同時に失ったものもあるのではないかと語った話を。

「こつちの部屋はトレーニングルームだ。帝国の誇る特訓マシンがたくさんある。お前たちなら使いこなせるだろう。自由に使ってくれ」

「なんかごちゃごちゃしてんな！」

「イナビカリ修練場みたいっスね〜」

「ナニワの特訓場とも見劣りせえへんわ！」

「——凄いな、これが帝国の特訓場か！」

物思いに耽りかけた円堂だったが、源田の紹介に気を取り直して、彼が指し示した広い部屋を入口から見渡してみる。

中には見たことのないようなマシンがところ狭しと並んでいた。

これこそが、歴代の帝国イレブンを全国トップに相應しいプレイヤーに育て上げてきた、帝国学園の技術の粋の結晶なのだ。

「必殺技の特訓も大事だが、基礎も欠かさずにな」

にこやかに言う源田の姿は、いつそ暴力的なほどの説得力に満ちており、雷門イレブンは先日的一件を思い出しながら揃って神妙に頷いた。

そんな調子で道中の使いそうな施設を紹介して進みながら、彼らは学園の中心に聳えるスタジアムへ辿り着いたのだった。

フィールドでいよいよ特訓を始めるわけだが、ここへ来て行う必殺技とは一体なんなのか。

彼は円堂と土門を呼び集めると、ついにその答えを明かす。

「『デスゾーン』をやるぞ」

「『デスゾーン』を？」

それは円堂も土門もよく知る帝国の必殺技である。

鬼道の構想は正確に言うとその進化型なのだが、どうあれ基となる
「デスゾーン」が使えねばならないのでやることは同じだ。

「鬼道が「デスゾーン」をやるのか？」

彼らの話を聞きつけた源田が、珍しいものを見た目をする。

「帝国では、お前がするのはあくまでタイミングの指示だったが」

「雷門はそういうチームじゃないだろう。俺だってシユートを打ちも
するさ」

「それもそうだな……ああ、成程。皆を呼んだのはそういうわけか」
「皆？」

「後でのお楽しみだ」

そして雷門イレブンは鬼道たちデスゾーン組、立向居と彼に協力す
る綱海のムゲン・ザ・ハンド組、各々のメニューを持つメンバーらに
別れて特訓を開始した。

「3……2……1……ストップ！」

「うーん……また失敗か」

「さつきよりは合ってきてるんじゃないか？」

「まあボールを後ろにするよりはな」

「うう〜」

三人がやっている特訓は、ボールを中心に三角形の陣を組んでそれ
ぞれ回転し、ボールを正面にして止まるというもの。

回転とその息を合わせるのが、ボールにエネルギーを注ぎ込む「デ
スゾーン」の肝と言える部分だ。

精密機械のような緻密な連携を持ち味とする帝国の特色が最も表
れている技だろう。

しかし、その帝国の選手でも完成するのに一ヶ月かかったシユート
の習得は一筋縄ではないかない。

「こればかりは数をこなしてタイミングを掴むしかないな。もう一度
だ！」

『おうー！』

そうして彼らの回転が繰り返される背後のゴールでは、立向居が依
然として「ムゲン・ザ・ハンド」の特訓を続けている。

「やったな立向居、目を閉じたままキャッチできたじゃねえか。〃ムゲン・ザ・ハンド〃、完成だな！」

「……いえ、いまのは目を閉じてただけで見切れていませんでした。必殺技じゃありません」

「んー？ まあ確かに、必殺技って感じじゃなかったか」

「こちらも進展はあるものの未だ習得には至らない。

各々が四苦八苦しなながら、時間が過ぎていく。

「やってるな、鬼道」

そしてしばらくして、鬼道に新たな声がかかる。

声の方に目を向ければ、そこには歩いてくる帝国イレブンの面々の姿があった。

「佐久間、寺門！ それに皆、来てくれたか」

「ああ。久しぶりだな」

彼らの先頭に並ぶ佐久間と寺門の姿に、鬼道は喜色を滲ませて駆け寄った。

真・帝国で〃禁断の技〃を放って身体を壊し、救急車で運ばれた二人だったが、いまは心身ともに完全回復といった様子だ。

その証拠に、寺門は顔の血色と瘦けていた身体の肉が戻り、佐久間も破れていた眼帯が元通りになっている。

源田もまた、彼らの許へ駆け寄って来て回復を言祝ことほぐ。

「電話で聞いてはいたが、二人とも元気になってよかった！」

「雷門の監督が紹介してくれた最新医療のお陰だな」

「お前の方はボケツプuriが健在で一周回って安心したぜ、源田。鬼道さんから聞いたぞ」

「辺見……俺も、お前の憎まれ口が聞けてなんだか安心したよ」

「なっつっつんだよ気持ち悪いな！」

源田は影山に誘拐され、真・帝国では倒れ、仲間たちとこうして面と向かい合うのも久しぶりになる。

湧き出した気持ちを素直に口に出したが、それを受けた辺見には早口で叫んで顔を逸らされた。

そんな二人のやり取りを余所に、佐久間が雷門イレブンの中にいる

アフロデイを見遣る。

「アフロデイ。鬼道と源田から話は聞いている。お前もまた、影山に利用されていただけだ」と

世宇子中を率いたアフロデイには帝国学園も浅からぬ因縁があったはずだが、事前に鬼道と源田の口利きがあったとはいえ、意外なほどに彼らは冷静だった。

内心罵られることも覚悟していたアフロデイが逆に少し面食らってしまうほどに。

「アン？　なんだよ、鳩が豆鉄砲喰らったみたいな顔しやがって。俺らに恨み言でも言われたかったのかよ。」

——上等だコラー！」

「何も上等じゃねーよ咲山バカヤロー」

目をぱちくりさせていたアフロデイに噛み付いた咲山は呆れた顔をした万丈にどうどうと宥められ、二人の様子を尻目に一歩進み出てきた寺門が語る。

「そりゃあ俺たちも、お前らのことを許した、綺麗さっぱり水に流したとは、正直まだ言えねえよ」

だがな、と寺門は言葉を区切り、洞面と成神にじやれつかれている源田を横目に見た。

「帝国でも色々あったし、源田あいつが、電話越しにもうるさいくらい、お前には助けられたって言ったんだよ。その上、そんな神妙な顔をしたやつ相手にグチグチ言うほど帝国俺たちは落ちぶれちゃいねえ」

「そういうことだな！」

かつてはアフロデイのシュートを身体を張って止めた大野が、ニカツと歯を見せて笑いながら寺門の言葉に同意する。

「鬼道、源田、そして円堂たちのこと、よろしく頼む」

佐久間の言葉にアフロデイは力強く頷いて応えた。

帝国の絆の強さ、そして彼らから仲間を託されることの意味を、深く噛み締めて。

「さっ、積もる話は一先ずこの辺にして、練習始めようぜ！　そのために呼んだんだろ」

それまでの固い空気を打ち壊すような大きな声で大野が言う。

「お前らと一緒に練習するのさ！」

「„デスゾーン” だろ？　自慢じゃねえが、俺たちも何度も打ってるんだ。力になるぜ」

思ってもみなかった展開に目を丸くした円堂に寺門が返す。

帝国での „デスゾーン” 主要メンバーである彼と佐久間、洞面が円堂と土門の許へ。

「私たちは腐っても全国トップのサッカー部。胸を借りるつもりで来るといいでしょう」

「腐つてるとか言うんじゃねえよ五条！」

「ククク……言葉の綾」

そして他の者たちも雷門イレブンの練習の相手をするべくフィールドに散る。

「よし皆、ここからはフォーメーションの実践だ！　辺見たちを止めるぞー！」

「マジっスかあ!？」

「へっ、加減はしねえぞ」

「望むところだね！」

ゴールに構える源田の号令に壁山が悲鳴を上げたものの、残念ながら他の者たちは相手にとって不足なしとばかりにノリノリだ。

そうして、雷門・帝国の合同練習が幕を開けた。

「ククク……分身フェイント！」

「増えたぞ!!　気味悪い！」

「……ククク」

「動じるな木暮！　肝心なのはボールを奪うことだ、お前ならそれができるはずだぞ」

「わ、わかってるよ！　旋風陣」

ある時は、五条の切り込んでくるオフセンスに木暮が動揺するのに源田が叱咤激励を飛ばし。

「おらおら、もつとしつかりコース塞ごうとしろ！ 俺らみてえなで
けえのは、立ってる位置取りだけでオフエンスの邪魔ができるんだぜ
！」

「は、はいっす！」

ある時は、大野が自らと負けず劣らずの体軀を誇る壁山に助言を行
い。

「行かせへんで！」

「スピードはスゲーけど……大切なのは相手のリズムだぜ！ イ
リュージョンボール！」

ある時は、迫った浦部を、成神が翻弄して抜き去る。

長いエイリア学園との戦いの中で、確かに雷門イレブンは強くなっ
た。

だが帝国学園にも、40年連続大会優勝を果たすだけの蓄積があ
る。

栄光の裏には影山の暗躍があったにせよ、彼らの培ってきたサツ
カーの実力が全国トップクラスであることには疑いようがない。

その技術は、ここまでエイリア学園との戦いを進めてきた雷門イレ
ブンをして目を見張るものだった。

汗水流す練習は夕方まで続き、概ねタイミングが合うようになって
きた鬼道たちの“デスゾーン”実践も兼ねた練習試合を明日に行う、
と決まって一区切りとなった。

鬼道のサッカーに嘘はない

俄に暗くなり始めた、スタジアムから見える空。

合同練習でたつぷりと汗を流した雷門・帝国両メンバーが身体を洗うべくスタジアムのすぐ下に備え付けられたシャワールームへ向かい、ひとけ人気のなくなったフィールド。

「……シユタタタタタン。ドバババ、バーン……」

そこに居残った立向居は、飛んでくるボールへ目を閉じたまま手を突き出し、ムゲン・ザ・ハンド〃の特訓を続けていた。

「ふうっ……ウルフー——レジェンド!」

彼と共に残ってシユートの特訓をしていたアツヤだった。

鋭い蹴りがボールに突き刺さる鈍い音は、まさに狼の遠吠えの如く。

しかし、シユートに追隨した狼の幻影はゴールへ届く前に消え去ってしまふ。

「クソツ、またダメか」

「シユタタタタタン、ドババババーン!」

シユートの様子を見て悔しげにするアツヤに対し、立向居はというと。

閉ざした瞼の裏に浮かぶボールへ伸ばした腕から現れた〃ゴツドハンド〃のような青い掌で、ボールが受け止められたものの、彼はその成果に納得できていない。

必殺技の影も形もなく顔面でボールを受けていた頃に比べれば着実に進歩している筈だが、半端な地点まで来てしまった勢いで暗礁に乗り上げてしまっているような、そんな心地さえ感じている。

これではエイリア学園には通用しない。そんな思いが募っていく。

「ムゲン・ザ・ハンド〃……一体何が足りな——ぶえっ」

雑念が集中を乱したのか、またボールを顔面で受けてしまった。

「おい大丈夫かよ!」

「ご、ごめん……ん?」

堪らず尻餅を突いて転んでしまい、駆け寄ったアツヤに謝りながら

立ち上がるうとしたた彼は、そこで自分の立っていた所の足下にできていた不自然な窪みに気づく。

「なんだろう、これ」

ある一点の芝草が上から思い切り押し潰されたようにクシヤリと折れていて、若干だが周囲よりはつきりと凹んでいたのだ。なにか、太い棒のようなもので何度も何度も突くなどして陥没させたのかと思えるものの、そうした道具が使われたにしては窪みの底が妙に波打っている。

その形はまるで、握り拳を叩きつけたような――

「そうか。これ、源田さんの……」

脳裏に浮かんだのは、キーパーに転向すると決めた立向居が見漁った、強豪キーパーたちの映像。

同年代で最も多く記録が残り、雷門イレブンの奇跡の優勝があつて尚も円堂と並んで最強の呼び声が高かった男だ。

様々な大会の試合映像で見た彼の代名詞の必殺技は、拳を地面に叩きつけて生み出す衝撃波の壁である。これはまさに、その特訓の跡なのだろう。フィールドにこんな跡が残るほどに、彼が特訓を重ねたという証。

「おい、ほんとに大丈夫か？」

「大丈夫。もう少し頼むよ」

「まあお前がいいならいいんだけどよ……」

先人たちの強さは、ひたむきな特訓の末に身に付いたものだ。

ならば、そんな彼に真つ向から競い合う相手と認められた自分だつて、へこたれてはいられない。

奮起した立向居に、アツヤは再びシュートを放つ。

「……兄貴と一緒にやってることをただ一人でやろうとしてるんじゃないやダメなことか？」

ただ、先ほどの焼き直しの結果にアツヤは険しい顔で独り言ちる。ずつと「ウルフレジエンド」を一人で放つ練習をしているのだが、兄弟二人でやっていた工程を一人で素早くやる、ということしかやろうとしてこなかった。

しかしどうやっても純粹な力は、一人より二人の方が強い。

それならば、一人で熟^{こな}せて二人分に匹敵する力を生み出せるような、別のやり方を模索するべきかもしれないと思いついた。

(この際だ。思い付いたことはどんどん試す！)

今までのようにやらなければダメだと自分で自分を追い詰めるような思考から、かつて兄と源田を超えるためにこの「ウルフレジエンド」を開発していたときのような思考へと心を切り替えていきながら。

「いくぜ立向居！」

「さあ来い！」

未だにシユートは独自の進化には至らないが、試行錯誤してがむしやらにボールを蹴る彼の顔には笑みがあった。

そうしてまたしばらくシユートを繰り返した頃合いに、スタジアムの出入口から二人を呼ぶ声がした。

「お前ら、そろそろシャワーを済ませておけよ！」

声の主は、一番にシャワーを済ませてきた寺門である。

「あつ、寺門さん、ありがとうございます」

「雷門は飯の準備を始めてる。早くしねえと晩飯食いっぱぐれるぜ」

「おうわかった！　いくぜ立向居！」

「う、うん」

寺門の言葉に頷いて駆け出したアツヤと、彼の後を追っていく立向居。

前を横切って行ったアツヤの背を、寺門は息を吐いて見守る。

(……思ったより、大丈夫そうだな)

かつて真・帝国学園で戦った際に寺門がアツヤへ叩きつけた叫び。

あの言葉に、寺門は後悔がない。

確かに彼はあの時、理性^{しやうき}がなかったが、さりとて心にもないことを言ったわけでもなかったからだ。

しかしそれを受け止めてしまった少年がどうなったかを、中継されていた沖繩の戦いで見ていたのだ。

もしまだ深刻そうなら、借りを返しがてら手助けするつもりだった

のであるが――

(必要ねえか)

今の彼ならば、わざわざ自分がどうこうするまでもなく立ち上がるだろう。

或いは先日から加入した、彼と付き合いがあるという源田が何かしたか。

「つたく、あいつには借りを返す機会ってもんがねえな」

しかし、雷門にはその機会がまだ残っている。

明日の練習試合は帝国の誇りにかけて、己が役目を務め切ろう。

そう静かに誓って、寺門は一人シュートを打ち出した。

翌日。

いよいよ雷門イレブンと帝国イレブンで練習試合を行うところだが、フィールドへ出ていく選手たちをベンチから見るマネージャーたちの目は不思議そうだった。

なぜなら、源田はともかく円堂たちまでもが帝国側に立っていたからだ。

帝国の必殺技の習得には、帝国の者たちと一緒にプレーするのが一番だという鬼道の言葉によるものだが、深緑のユニフォームに身を包む円堂の姿は彼女たちからしても違和感が拭えない。

それはさておいて。

帝国のキックオフで、試合開始となった。

辺見のパスを受けて攻め上がる鬼道の行く手に、一之瀬が向かう。

「鬼道！ 君とは、やり合ってみたいと思っていたんだ！ フレイムダンス 改！」

彼の操る炎を前にして、鬼道は涼しい表情だった。

スピードはまるで緩めず。ただ自らの背後に走り込んできていた洞面へパスをして、一之瀬の必殺技を掻い潜ったのである。

「!? 後ろも見ずにパスなんて……」

それどころか、一之瀬の目には鬼道がアイコンタクトやハンドサインのような指示の類いもしていないことがよくわかっていた。

「凄い……！ 鬼道には、帝国の選手の動きが全部わかってるんだ」
彼らの動きの真髓を理解して感嘆の声を洩らす円堂。

帝国のサッカーは組織のサッカー。選手一人一人が全体のプレーを織り成す歯車となる、精密な連携こそが彼らの強さだ。

今もまた見せている、雷門の守備に切り込むオフエンスも、帝国の面々には呼吸のように染み付いた動きに過ぎない。

“こういうときは、こうパスする”

“こう来たら、こう突破する”

言ってしまうえばそれだけの戦術パターン。だが、帝国の歴史が培ったそれらの数は百にも届く。

彼らはそれを膨大な回数練習で肉体に叩き込み、選手としての頭脳に刻み込んでいる。

故に、後は自分の役目を完遂するのみ。

自分がボールを運ぶ先には必ず仲間が居るという、確定した事実に近い信頼が、誰一人として足を止めない淀みないプレーを作っているのだ。

それは、鬼道が一度帝国を離れて暫く経った今も尚、健在である。

「よし。行くぞ、円堂！ 土門！」

「ああ！」

「三人の息を合わせるぞ！」

あつという間に立向居の立つ雷門ゴールへ接近したところで、彼らはボールと共に飛び上がった。

帝国イレブンには見慣れた光景。いよいよデスゾーンの実践だ。

三人が綺麗に三角形でボールを囲み、回転してエネルギーを注いでいく。

そして、力の籠ったそれを放つ。

『デスゾーン!!!』

満を持して放たれた必殺技は、帝国の面々が放つものと寸分違わぬ姿でゴールへ向かう。

そう思われたが――

「……？」

途中で唐突にボールから力が消えていき、ただのシュートと変わらな
ないものになってしまった。

立向居はこれを受け止めるが、彼も「ムゲン・ザ・ハンド」は未だ
成らず。

一連の流れを見ていた者たちはみな困惑したが、誰より釈然としな
かったのは「デスゾーン」を打った三人だ。

彼らの回転は過不足がなく、タイミングも特訓では寺門や佐久間た
ちのお墨付きがあった。

それにもかかわらず失敗したのは一体何故なのか。

鬼道も自身が放つのは初めてであるこの必殺技。予想だにしない
暗礁に乗り上げて、その表情は険しい。

この失敗にへこたれずに気炎を揚げた円堂に他の二人も気を取り
直し、その後も何度も試行錯誤を重ねながら「デスゾーン」に挑んだ
が、前半の殆どの時間を使っても、それがついに成功することはな
かった。

そうして試合は、ハーフタイムに移る。

前半を終えた鬼道は、ベンチに腰掛けながら物思いに耽っていた。

「デスゾーン」の特訓を行う場に帝国を選んだ理由は、円堂たちに
語ったものだけではない。

彼が帝国へやって来たもう一つの理由。

それは、果たして自身の選択が正しかったのか。その確認である。

「雷門の鬼道」は本来、FFで世宇子を倒した時点で終わりの筈
だった。

現実には大会終了から間髪を入れないエイリア学園の襲来によつ
てなし崩しに雷門での生活が続いたのだが、その中で雷門のサッカー
に惹かれていく内に、ある思いが彼に芽生えることになる。

——俺は本当に、仲間たちを見捨てたのではないのか？

真・帝国で突き付けられた仲間たちの言葉で、その思いは明確な形
を得たのだった。

雷門のサッカーに馴染む度、帝国への後ろめたさが澱おりのように心に
溜まっていく。

そのような迷いを抱えたままでは、ジエネシスとは到底戦えない。ゆえにもう一度帝国なかもたちとプレーすることで、この迷いに答えを出したかったのだ。

「相変わらずのいい動きだったぞ、鬼道」

「！ 二人とも……」

悶々としていた鬼道の傍に、二人が座る。

寺門の手渡すドリリンクを受け取った鬼道に、佐久間が語りかけた。

「久しぶりに帝国の鬼道が見れて嬉しかったよ。でもやっぱり、雷門に居る方がお前は自分が出せてると思う」

「佐久間……」

「見ているとわかる。雷門の奴らは、常にお前を刺激し、引っ張ってくれる」

「源田の奴は帝国に戻るって言うてるが、だからってお前が気に病む必要はねえ。帝国にとってお前は最高の選手だった。だが、それに縛られるな」

「寺門……」

気づけば帝国の仲間たち皆が、優しい笑みと共に鬼道を見つめていた。

「俺も寺門も源田も、他の皆だって、お前が裏切ったなんて思っちゃいない」

「俺たちは、ずっとお前を応援してる」

彼らの言葉に、鬼道は塞がっていた視界が開けたような心地になった。

後は、背中を押ししてくれた彼らに応えるのみ。

一方の立向居。

帝国イレブンの絆によって迷いを晴らした鬼道とは対照的に、彼は沈痛な面持ちだった。

実践形式でも、やはり究極奥義に進展がなかったのだ。

このままではダメだ、ならばどうする。堂々巡りの心境に陥っていた立向居に、見かねた綱海の声がかかる。

「あんまり一人で悩むなよ、立向居。話してみな！」

「綱海さん……えつと、裏ノートの言葉なんですけど、〃シユタタタタタン、ドババババーン〃。これがどういうことなのか未だにわからなくて」

「ふーん。シユタタタタ、タンときてドババババーン、ね……」

「わかるんですか？」

「——まあとにかくだ！ 俺は悩んだら海に行くんだ」

「は？」

しかし案の定、綱海にも〃シユタタタタタン、ドババババーン〃の意味はわからない。

そのまま彼が愛する海の話が変わったが、フィーリングで語られるそれも立向居にはピンと来ない。

「はあ……」

「なくんか納得してねえなあ。うーん……折角だからあいつにも聞いてみようぜ。おーい、源田あ！」

疑問の晴れた様子のない立向居に、綱海は更なる意見を求めてその名を呼んだ。

振り向いた、守護神の王と称される男が、若き守護神の許へやって来る。

奥義の極意は易くない

綱海に呼ばれてやって来た源田が、立向居と顔を突き合わせている。

「この経緯を聞いた彼は、得心して頷いた。

「なるほどな。確かに、究極奥義となれば一筋縄ではいかないだろう」
「でも、お前ならなんかヒントとかわかんねーか？ 同じキーパーだしよ」

綱海に軽く言われた源田だが、その表情は渋い。

「とは言ってもな、綱海さん。俺にも『シユタタタタン、ドババババーン』はわからん。本当に」

「そ、そうですね……」

心底切実そうに告げられ、やり取りを聞いていた立向居も苦笑いするしかなかった。

現代最強との呼び声高いキーパーにすら匙を投げられる、一時代を築いた伝説の選手の遺した技の極意。

円堂大介はあまりに感覚派過ぎる。今更で、そして何よりも深刻な問題であった。

「だからどんなものか推測するしかないんだが……改めて、どんなものか確認しておこうか」

「は、はいっ！」

とはいえ、源田も必殺技を『開発』した人間だ。

祖父の遺したノートを解読して必殺技を『習得』してきた円堂とは別種の経験がある。

その点では綱海の行動も間違いではなかっただろう。

『ムゲン・ザ・ハンド』の手掛かりは以下の通り。

- 一。全てのシユートを見切る必殺技であること。
- 二。その極意はシユタタタタン、ドババババーン。
- 三。ポイントは目と耳。

源田はこれらを脳内で反芻しながら唸る。

「とりあえず、円堂の言っていた全身でシユートの情報を捉える、とい

うのは間違いないだろうな」

問題は、実際にどうやってそれを成し遂げるのか。

「立向居はどんな風に特訓していたんだ？」

「ええつと……綱海さんたちにシュートを打ってもらって、それを目を瞑って受け止めようとしてました」

「ふむ……」

立向居の返答を聞き、考え込む源田。

(……なんだろうな。シユタタタタタン、ドババババーン)

シユタタタタタン、ドババババーン。

シユタタタタタン、ドババババーン。

シユタタタタタン、ドババババーン。

繰り返しても繰り返しても何も意味が伝わって来ない。

それどころか繰り返すほどに、怪しげな魔術の儀式の呪文か何かに思えてくる。

(見切る。目と耳。シユタタタタタン、ドババババーン)

キーパーの必殺技には、ゴールすらし例外はあれど、ボールを受け止めるという大前提が共通して存在する。

技の目的もそれを行使する者が人間であるというのも同じならば、やることも、例えば空を飛んだりするような、そわな突飛なことは求められない筈だ。

「つまりは……」

「あのう……源田さん？」

黙り込んでしまった源田の姿に、自分の答えが何かおかしかっただろうか。立向居が怪訝そうに顔を覗き込んだ。

それと同時に、源田の目がカツと見開かれる。

源田は、覗き込んだ目と目がかち合ってしまった立向居がビクリと身体を跳ねさせたのにも気付かず、勢いよく振り向いて言う。

「わかったぞ立向居！ シユタタタタタン、ドババババーンが！」

「ほ、本当ですか!？」

「マジか源田！」

「この極意が示すのはおそらく、静と動だ」

「と、言いますと……」

なにやら確信があるらしい彼に、立向居がその自信の源を問うた。源田はそれに、快く答える。

「まず『シユタタタタン』は、ボールを見切るための情報の取捨選択。耳や目から取り入れる情報、それらから『止めるために必要な』ものを仕分ける作業だろう。こう、シユババツと素早く手を伸ばして色んな場所から必要なものを取り出したりするような。そして後半の『ドババババーン』は、仕分けた情報から、一気に力を解放して見切ったボールを捕らえる爆発力を表すのだと思う」

「な、なるほど……！」

当代で守護神たちの王と呼ばれる男による、『シユババツ』という両手を素早く動かすジェスチャー混じりの解説に、立向居は目から鱗が落ちるような心地になった。

擬音のみだったのに比べれば、こうして言葉になると随分イメージしやすい。

全身を目と耳にするように、あらゆる感覚で情報を集める。

それはこの究極奥義に挑むと決まった段階でわかっていたことだった。

しかし情報は、集め、精査し、活用するもの。

例えば豪炎寺の放つてくるような炎のシユートを止めるに当たって、立向居が観るべきは炎ではなく、それに包まれた奥に存在するボール本体である。

炎はただの力の現れ。キーパーは本質^{ボール}を捉えねばならないのだから。

そしてボールの姿を捉えたのならば、後はこの手で掴むのみ。

単純明快。言葉にされて、立向居の思い煩いは氷解する。

「……どうだろうか？ 結局俺の所感でしかないわけだが」

「いえ、凄く参考になりました！ ありがとうございます！ 源田さん！」

「助けになれたのならなによりだ。……じゃあ、頑張れよ」

「よかったな、立向居。俺からもありがとよ、源田！」

話が終わると共にちょうどハーフタイムが終わって、試合が再開する。

エールの言葉を残し帝国のゴールへ向かって歩いていった源田の背が、立向居にはとても大きく見えたのだった。

始まった試合後半。

その展開は、前半と概ね変わっていない。

「鬼道さん！」

帝国イレブンからボールを受け、
「デスゾーン」を試みる鬼道・円堂・土門の三人。

「集中……取捨選択……爆発……」

そして、源田のアドバイスを胸に
「ムゲン・ザ・ハンド」に挑む立向居。

この二つが、現在の主たる要素である。

「デスゾーン！」

再び放たれ、しかし前半同様に途中で力が逃げてしまう
「デスゾーン」。

対する立向居は、今度こそ奥義の核心を掴むべく腕を振るった。

「……違う。こうじゃない……！」

ボールを捕らえることはできたものの、彼も苦心している。

「立向居！」

「はいっ——？」

綱海からパスを呼び掛けられ、ボールを投げようとした立向居は、そこで異変に気付いた。

自らの視界で、前方の綱海の姿が蜃気楼のように、何重にも重なるように揺らいでいることに。

(……!? ボールも、幾つにも見える……!)

思わず手元のボールを見て、それも同じ風に見えることに立向居は困惑する。

「立向居？」

「あ、はい！」

再度の綱海の呼び掛けで我を取り戻した立向居だったが、異様な視界は戻らなかつた。

(どうなってるんだ……!? いや、もしかして、これが……)

試合が続ぎ、眼前で帝国と雷門の攻防が繰り広げられる中、立向居はこの異変を考察する。

——弱い波でも、何度も打ち寄せる内に、岩を削って砕いちゃうのさ！

ふと思い浮かんだのは、源田を呼ぶ前に綱海が口にした言葉。

まるで複数に増えたようなボールに、これが現実ならどう対処する。そう思ったとき、彼の言葉を連想したのだ。

それに源田の助言を付け加えれば、何を目指すべきなのか。

(ひよつとして、これが……)

考える間に、ボールは横を過ぎてネットに突き刺さる。

「おい、立向居?」

「いいんです。このまま、練習を続けさせてください」

曲がりなりにボールを取っていた先程までと打って変わった様子に綱海が訝しげに声をかけたが、立向居はやる気に満ちた顔で大丈夫だと答える。

目指すべき究極奥義のビジョンが見えた彼は今、暗闇が晴れたような心地であつた。

対する鬼道たちは、手順は完璧なはずなのに必殺技が成功しないという謎を、未だ解けずにいた。

タイミングは合っている。

帝国の選手がやるように、スピードと回転、息を合わせてボールを蹴り出している。

それにもかかわらず、ボールから力が逃げてしまう。

(いったいなぜだ?)

立向居とは別種の難問。

これだけ試行を重ねても上手くいかないことからして、問題は鬼道たちのミスなどではなく、必殺技の根本にあるのだろう。

とはいえ、その根本の問題とはなんなのか。

「アースクエイク 改！」

「フツ、通してもらうぞー！」

考えている間にも、試合は進んでいく。ここにいるのは鬼道たちだけではないのだから。

大野の必殺技をかわした豪炎寺が、源田の立つゴールを狙う。

かつて激突した地区大会の決勝戦の時のように、視線をぶつけ合う。

「練習とはいえこれも試合だ。本気でいくぞ、源田！」

「来い、豪炎寺！」

豪炎寺にとつての源田は、好敵手であり越えるべき壁であった。

今はエイリア学園との戦いにあたり仲間として背中を預ける関係だが、そこは変わらない。

挑む機会があるのなら、エースストライカーとして全力で臨む以外にないのだ。

「爆熱ストーム G2！」

そして魔神の雄叫びがフィールドに響き渡り。

ボールは渦巻く豪火と共に、帝国ゴールへと向かっていく。

対する源田も油断なく、両拳に気を漲らせて跳んだ。

「フルパワーシールド V2！」

(これも進化しているか！)

間欠泉の如き凄まじい勢いで吹き上がる衝撃波の巨大な壁にぶつかったボールは、しばらくせめぎ合った後、弾き返された。

「わかってはいたが……あれから更に腕を上げているな。流石だ、源田」

「それはこちらの台詞だ。他人のゴールへ打っているのを見るのと、自分で受けるのではまるで違うぞ」

ダイヤモンドダストの攻撃の殆どを凌いだその力。

目の前の男は相も変わらず、ゴールキーパーの「王者」と呼ばれるのに相応しい実力者だというのを再確認した豪炎寺が、笑みを浮かべて源田と顔を見合わせる。

その二人の姿は、なんとも楽しそうだ。

「さあ皆、鬼道にボールを集めるんだ！」

「大声出さねえでも、わかっただよ源田！」

源田の声掛けにそう雑に答えながら、ボールの弾かれる先に居た咲山が続けてパスを回す。

「鬼道、何度でも付き合うぜ。思い切りやってこい！」

そう言いながらボールを渡す寺門。

協力してくれる帝国の仲間たちの姿に、鬼道は必ず「デスゾーン」を完成させなければならぬと、決意を新たにす。

そこで、ふと佐久間の言葉が彼の脳裏に浮かび上がった。

『雷門に居る方がお前は自分が出せてると思う』

「……そうか。そういうことか」

鬼道は、雷門の自分を表した言葉から答えを見つけて呟いた。

「どうした、鬼道？」

「二人とも。次の「デスゾーン」は……」

訝しんだ田堂と土門にも、鬼道は自身の考えを告げる。

ここまでとは打って変わったその内容に二人は少々面食らい、そして鬼道を信頼して頷いた。

「何か見つけたか、鬼道」

自信ありげな背中。それらがこれまでで一番、勢いよく飛び上がった。

源田の見守る三人の回転は、これまでタイミングを合わせるのに苦心してきた経験をかなぐり捨てたように、バラバラだった。

三者三様。思い思い、全力の回転。

散々言ってきた「デスゾーン」の極意である、三人の息を合わせることを無視した行為だったが、滅茶苦茶に見えて、どこか安定感さえ見える。

「オオオオooooooooooooッ！」

「うooooooooooooッ！」

「まだだ。まだ——今だ！」

そして、別々に回っている歯車がふとしたときにカチリと噛み合っ

たようなその瞬間、彼らは飛び上がり、ボールを蹴り出した。

『デスゾーン!!!』

正しい行程とは正反対のそれで放たれたボールは、しかし力を保つたままでゴールへと向かっていく。

まさに、必殺技と呼ぶに相応しい威力。

これこそが帝国の誇る伝統の必殺技、そのあるべき姿だと語るような威容である。

試行錯誤と鬼道の閃きによって、ついに「デスゾーン」が完成したのだ。

そしていまにも眼前へと迫ろうとしているそれを、立向居は落ち着き払って観察していた。

必殺技について未だに迷走していたなら、「デスゾーン」の思わぬ完成に呆気にと取られていたかもしれない。

しかし今の彼は、全身でシュートを捉える、ただそれだけに集中していた。

力が安定したシュートは、動きと音も一定で感じ取りやすく。

ボールのことが、手に取っているようにわかる。

(見えた！ 聞こえた！)

シユタタタタタン。

ボールから迸るエネルギーも、放たれる暴風も捨て置き、動きを讀み取る。

シュートへ向かって手を伸ばすのではなく、シュートのやって来る場所を見切り、手を置いておくのだ。

立向居は全力で、見切ったその空間そのものへ目掛けて力を解き放つ。

ドババババーン。

後光と共にその背より伸びたのは、無限にも思える幾本もの黄金の腕。

「ムゲン・ザ・ハンド!!!」

それは、ぴつたりとシュートにタイミングを合わせ、ただ一点に集束して潰してしまうほどに折り重なって抑え込む。

そしてついに、《デスゾーン》は立向居の両手に煙を立てながら収まったのだった。

「なっ……」

立て続けの事態に、見ていた全員が言葉を失う。

彼らは数秒かけて目の前で起こったことを理解し、次に歓声を上げた。

「立向居、今のがもしかして、《ムゲン・ザ・ハンド》か!? すごいじゃないか!」

「円堂さんたちも《デスゾーン》がついに完成しましたね!」

「す、すごいです! みんなすごいです!!」

鼻息荒く、全身で喜びを表現する壁山の叫びが、この場の皆の総意を端的に表していた。

そして一頻り讃え合い、喜びをわかち合ったところで、冷静になると疑問が出てくる。

「でも、どうしてあれで完成したんだ?」

「タイミングだ」

《デスゾーン》の肝だというタイミングが、それまでの練習とは違ったにも拘わらず、失敗するどころか初めての成功を生み出した。

その答えを鬼道が明かす。

「帝国と雷門は違うチーム。帝国には帝国の、雷門には雷門のタイミングがあったんだ」

「俺たち三人のタイミングだからできたってことか!」

「なるほどな。流石だ、鬼道」

佐久間は鬼道の説明に得心する。

帝国の《デスゾーン》は針の穴に糸を通すような繊細な連携を重視するが、雷門は無理に息を合わせるより、全力の衝突こそが力を生み出す。

三人が一定の回転に合わせるのではなく、思い思いに全力で回転し、その呼吸が合うタイミングを利用する。個性のぶつかり合いこそがこの成功へと導いたのだということ。

「立向居! やったじゃねえか!」

一方の綱海と源田は、しみじみと究極奥義の感覚を反芻している立向居に声をかけていた。

「綱海さん、それに源田さん！ お二人のアドバイスのお蔭です、ありがとうございました！」

「いや、これもお前の努力の賜物だ。立向居、よくやったな」

頭を下げる立向居に源田は笑みを向け、称賛を惜しまず送る。

新生雷門の守護神、その二枚看板。

完成した究極奥義は、立向居もまた雷門のゴールに立つに相応しい男であるというこれ以上ない証だった。

「……さて。ここからが本番だ」

「鬼道？」

「『デスゾーン』は強力だが、エイリア学園に通用するかは疑問が残る。俺たちが目指すのは、『デスゾーン』を超える必殺技だ」

「『デスゾーン』を超える……！」

鬼道が語ったのは、たった今完成させた必殺技の進化。

更なる特訓に円堂は目を輝かせ、

「俺も、『ムゲン・ザ・ハンド』を進化させてみせます！」

立向居も、『究極奥義に完成なし』との言葉を胸に誓うように言い、円堂はそれに頷く。

そのやり取りを皮切りに練習が再開されようとして――

スタジアムが、轟音に揺れた。

「なんだ!？」

衝撃波と共にフィールドへ怪しい煙が広がり、円堂たちの視界を塞いだ。

その中から、彼らに見覚えのある二つの人影が姿を現す。

「お前たちは……！」

「ガゼルに……バーン、だったか？」

名を呼ばれた二人は、雷門イレブンを見据えて名乗りを上げた。

『我らは『カオス』』

「猛き炎『プロミネンス』」

「深遠なる冷気 “ダイヤモンドダスト” が融合した、最強のチーム」
『我らの挑戦を受けろ、雷門イレブン！』

キャプテン二人に続くように現れる、赤と青、両者のイメージカラーを織り混ぜられたユニフォームに身を包むメンバーたち。

彼らの瞳は一樣に、危険な程の闘志が漲っていた。

混沌の力は底知れない

エイリア学園のマスターランクチームであるダイヤモンドダストとプロミネンスの混成チーム・カオス。

それを率いるガゼルとバーンが行ったのは宣戦布告。

二日後にこの場所、帝国スタジアムで試合をすると一方的に告げ、彼らは姿を消したのだった。

そしてその翌日、明日の試合に備えた練習も終わり、解散となった夕方。

「三つのマスターランクチームとやら、そのうち二つが手を組むとはな」

坂道を歩く源田が、夕陽に横顔を照らされながらそう呟いた。

先日のダイヤモンドダストとの試合の結果は引き分け。

しかし、チームとしての力はあちらが一枚上手だった。そこに同格のチームとされるプロミネンスが加わるのだ。

油断などできるはずもない。

ガゼルとしのぎを削った源田とて例外ではなく、その声には緊張感がある。

「奴らは、互いに対立しているような様子だった。その両者が手を組んだということは、エイリア学園でも何かが起こっているのかもしれない」

源田の隣を歩く鬼道は、彼らの内情について考えを巡らせる。

本来は相容れない相手のはずのガゼルとバーン。その二人が率いるチームが、合併までして試合を挑んでくるほどの事態。

恐らくその原因には、三つ目のチームが関係しているのだろう。

「プロミネンスは沖縄でのバーン以外に情報がない。そちらの不安要素は少々大きいな」

「順当に考えればダイヤモンドダストと同等か、或いはそれ以上。俺は沖縄で現れたというあの男のシユート^{シュート}を直で見えていないから、なんとも言えんが」

「バーンは間違いなく次の試合でも脅威となるだろう。ガゼルと併せ

て、注意してくれ」

「ああ。任せてくれ」

鬼道の言葉に、源田は拳を力強く握って答える。

たとえマスターランクチーム二つが束になってかかつて来ようとも、彼ならば一步も退かないと、よく知っている鬼道は満足げに頷いた。

「フットボールフロンティアであんなに険しい壁だった源田おまえに今背中を預けているというのは、不思議な気分だな。今更だが」

二人のやり取りを聞いてしみじみと呟くのは、彼らの前を歩いていた豪炎寺だ。

彼の言葉に、鬼道もまた懐かしそうに笑んで言う。

「フツ……あの日は、逆になったな
「！」

かつて、帝国学園が世宇子に敗れてうちひしがれていた鬼道に豪炎寺は言った。

『あいつ円堂に、背中を任せる気はないか？』

雷門の司令塔としていまやチームに欠かせない天才ゲームメイカーである鬼道有人がいるのは、彼の言葉があったからだ。

その豪炎寺が、今度は以前正面から向かい合っていた帝国の守護神に背中を預けている。

数奇な運命だと言えるだろう。

「おお、ここが鉄塔広場か！」

感慨に浸る二人を追い抜いて坂を登り終えた源田が、弾んだ声を上げた。

三人の目的地は、この鉄塔広場だったのだ。

稲妻町のシンボルである鉄塔の麓。彼の姿は、今日もここにある。

「やはりここに来てたか」

「源田、それに豪炎寺、鬼道も！」

「おつ、さらにダチ登場！」

円堂と綱海が彼らの存在に気付いた。

「おー、ビクともしねえな源田。流石キーパー」

円堂と鬼道が階段のそばで話し出したのを他所に、タイヤと触れ合う源田。

太い木の枝にぶら下がるタイヤが、押された分振り子のように戻ってくる、その勢いを難なく止めた源田へ、綱海が感嘆する。

それを受ける源田は、タイヤを受け止めて起こる、身体の芯まで響くような振動を心地よさげに味わっていた。

これは以前から、一度直に体験してみたいと思っていたものだった。

円堂を、彼のサッカーを育み、見守り続けてきた、謂わば聖地。

心なしか、練習で消耗していた自分の身体にも、力が満ちてくる気がした。

「いい場所だな。試合の前に来られてよかった」

「なんだよ、もう二度と来られないみたいに言つて。好きだけ来ればいいだろう?」

「……ああ。その通りだな、綱海さん」

敵は、凄まじく強さを増していく。

それでも、王者の名にかけて戦い抜いてみせようと、彼は固い決意を抱いたのだった。

そしてやってきた試合当日。

再び帝国スタジアムを訪れた雷門イレブンの前に、彼らは宣言通りに現れた。

「逃げずに来たか」

「負けるとわかっていながら、のこのこ現れるとはね」

カオス。彼らを率いる二人、バーンとガゼルが挑発的に言う。

「どうせ受けなければ、また東京を破壊するとしても言い出すだろうに、随分な物言いだな」

それに対し、雷門側から言い返す源田。

前回の試合では彼に苦汁を飲まされたガゼルが、その言葉に強く睨みつけた。

「源王、君もすぐにそんな口は利けなくしてやるさ。深遠なる冷気と……」

「灼熱の炎でな！ お前らを完膚なきまでに叩きのめし、証明してやる」

『宇宙最強のチームは、俺／私たちだと！』

これまで見せたプレーだけでも、圧倒的な力を見せつけていた二人が叫ぶ。

彼らに雷門イレブンへの慢心はない。それどころか、何がなんでも勝利をもしぎ取ってやるというプレッシャーを滲ませる、鬼気迫る様相であった。

宣言は驕りでもなんでもなく、必ず果たしてやろうという決意に満ちている。

今回の試合は両チームが全力をぶつけ合う、完全に弄ばれたジエネシス戦とも、見下されていたダイヤモンドダスト戦とも全く違うものになることを予感させた。

「負けるもんか！ 俺たちは、お前らに勝つ！」

それにも臆さず啖呵を切った円堂の姿は、チームの総意だった。

これ以上言葉はいらない。

「鬼道……源田……」

「負けるんじゃねえぞ……！」

佐久間や寺門たち帝国イレブンがスタジアムの観客席から見守る中、試合が始まろうとしていた。

雷門イレブンの陣形は、豪炎寺とアフロデイのツートップ。普段D Fの土門はMFの位置まで上がって来ていて、『デスゾーン2』も狙う形だ。

そして円堂はリベロとして初の実戦となるわけだが、彼に不安はない。

これまで積み重ねてきた特訓の自負と、地上最強と言える仲間たちへの信頼があるからだ。

対するカオスの陣形は、こちらにもまたバーンとガゼルによるツートップを主軸にしたものだった。

キーパーはプロミネンスのグレント。彼の守るゴールの手前は、両チームのDF陣が左右に分かれて守っている。

中盤は中央をプロミネンスのネットパーとヒート、その両脇をダイヤモンドダストのドロルとリオーネが固め、ダブルエースへとボールを繋ぐ。

戦意は旺盛。彼らにも負けられない理由がある。

ここまでエイリア学園最強の称号であるジェネシスの座を賭けて争っていたマスターランクの三チームだったが、その座がグラン率いるガイアに決まってしまったからだ。

故に、自分たちこそが最強の座に相応しいと示すべく、二つのチームは手を結んだのである。

カオスの面々にも、勝利以外に道はない。

そしてついに、運命の試合が幕を開ける。

「いくぞ、アフロディ」

「ああー」

豪炎寺のキックオフから、細かくパスを回して攻め上がっていく雷門。

それを迎え撃つべく、早速カオスが動いた。

ドリブルする塔子へドロルが迫る。

「！」

かわそうと考えていた塔子だったが、その思いとは裏腹に、あっさりとボールを掠め取られてしまう。

(うそ、速すぎる！ 前はかわせたのに、なんでこんなに?!)

塔子が振り返りながら内心で驚愕を叫んだように、ダイヤモンドダストの面々の速さは以前の試合からさらに上がっていた。

試合からまだ、そう何日も経っていない。特訓をしたとしても、あまりにも上がり幅が大き過ぎる、不自然な程のレベルアップだ。

「うおっ！」

「ああっー」

ドロルの凄まじい移動速度。

止めようとした土門や壁山も動揺から反応できず、雷門ゴールへの

接近を許してしまう。

「行かせるかよー！」

「綱海さん、ガゼルだ！」

ドロルに駆け出した綱海は、ゴールで構える源田から飛んだ指示で、初めて彼の横合いに滑り込むように走ってきたガゼルを認識した。

前回の試合でも、このように守備を釣り出してガゼルにシュートを打たせる戦法を受けたことを思い出した綱海は、ガゼルへ注意を向けた。

「くっ、同じ手にはかかんねえぞー！」

先んじて気付くことができたお陰で完全には引き離されず、綱海はドリブルするガゼルに追い続ける。

これで、フリーでのシュートは防げる。今のうちに他のDFも戻れば、ガゼルのシュートは封じられるだろう。

しかし今回のチーム、カオスのエースストライカーは一人ではない。

「バーン！」

雷門の注意が自分へ向いたのを見たガゼルは、さらに自分を囮にして、バーンへとセンチタリングを上げたのである。

受け取ったバーンが、笑みに苛烈な闘志を滲ませながら跳んだ。

追随するように噴き上がる炎は、まさに太陽から立ち昇る紅炎プロミネンス。

彼は、その破壊力を存分にボールへ込めて解き放つ。

「アトミックフレア V2!!」

沖縄で雷門イレブンに見せたものから進化したシュート。

芝生を焼き払わんばかりの赤がフィールドを照らし、ゴールへ突き進む。

しかしこうなることまで見切っていた源田は、既に迎撃体勢だった。

ガゼルと肩を並べるに相応しい必殺技。直に目で見てそう確信した彼は、出し惜しみしない。

「キングシールド G2!!」

小さな太陽を受け止める王者の盾。

眩い激突の末、勝利したのは源田であったが、

「ハッ！ マジで半端じゃあねえな。だからこそ、てめえを破って最強を証明する！ まだまだいくぜオイ！」

バーンは驚きこそすれ、戦意の炎を弱めることはなかった。

それどころか、むしろますます猛り、燃え盛らせる。

「上がれ、お前たち！」

闘志には闘志で真っ向から返す他ない。

動じた方が、この最序盤から試合の主導権を奪われることになるだろう。

やられるままでは不味いと悟った雷門イレブンが反撃に移る。

「アフロデイ！」

その主力となったのはアフロデイだ。

鬼道に勝るとも劣らない優美なテクニク。ここ数日の特訓で雷門に馴染ませたプレー。

襲いかかるカオスの選手たちを前にしても彼は一步も退かない。

「さあ、ついてこられるかな？ ヘブンスタイム！」

そして出る、アフロデイの必殺技。

誰にも邪魔できない歩み。彼だけの時間。

後は止まった守備の間を抜けてしまう、それだけのこと。

しかし、その絶対の理に異変が起こる。

アフロデイに襲いかかっていた一人、ネッパー。

他の者と同様に動けないはずの彼が動き、アフロデイからボールを奪ったのだ。

「——な、こっ！」

予想外の出来事に咄嗟に反応できなかったアフロデイを置き去りにして、ネッパーは走る。

「『ヘブンスタイム』が破られた!？」

驚愕の声を上げる土門。アフロデイと敵として相対したとき、同じ技にまるで手も足も出なかった。

それが通じなかった事実を目の当たりにして、とても冷静さを保て

なかったのである。

鬼道がその後パスをカットし、即座にカオスの連続攻撃となるのは免れたものの、ダイヤモンドダストとの戦いで凄まじい力を見せたアフロデイの雄姿の揺らぎは、チーム全体に波及していた。

「ノーザンインパクト V2!」

結局、雷門イレブンの攻撃はカオスのゴールまで届かず、逆にガゼルにシュートを放たれることになる。

「キングシールド G2!!」

再び迎え撃つ源田。今度も防ぎはしたが、前回より一段と強力になったシュートに、受け止めた表情は固い。

その足は芝生を踏み潰しながら、はじめに立っていた地点より後退していた。

「くっ……」

「私が以前と同じとは思わないことだ……!」

わざわざ言われるまでもないと、源田はガゼルの言葉に内心で悪態をつく。

腕にかかるボールを受け止めた負荷は、確かに前回とは比べ物にならないものだ。

バーン共々、このペースでまともに付き合い続けているのは、試合終了まで保つかどうかとも怪しくなってくる。

「フローズンステイル 改!」

「ぐああっ!」

そしてゴツカの進化した技で、再びカオスにボールが渡ってしま

う。

「バーン」

「おう。実際に戦^やってみてわかったが、確かに源田^{あいつ}は相当タフだな。お前が攻めあぐねたわけだぜ」

「このまま私たちが打ち続けければ削り倒せるだろうが……」

「チマチマ向こうの体力切れを狙うってのは……最強を名乗る上じやあ、ちよいと味気ねえよなあ?」

並んで走りながら話す、ガゼルとバーン。

彼らのやり取りはそこで終わったが、その先は二人とも言わずとも知れていた。

雷門のディフェンスの隙を突いた二人が飛び上がったのだ。

「!?」

「奴ら、何をするつもりだ……?」

その姿を困惑と共に見上げる雷門イレブン。

彼らは、当然の常識を思い出す。

協力して新たな必殺技を編み出すのは、決して自分たちだけの特権ではないことを。

「しくじるなよバーン!」

「誰に言ってやがるガゼル!」

「来るか……!」

荒れ狂う熱風と、肌を刺す寒風。

温と冷で激しくフィールドを染め上げる二人に、奥の手を悟った源田が全力の防御を展開する。

「キングシールド G2!!」

『——ファイアブリザード!!!』

相反するような力が混ざり合い、更なる力の奔流と化したシュート。

争い合う敵同士だった彼らが一つの目的のために結集したことの、象徴的な必殺技だった。

「ぐ、ぬうう……」

嵐のようなそれを受け止める黄金の盾。しかし、盾を支える源田の手は伝わってくる圧力に震え、足は後方へと押し込まれていく。

「負けるもの、か……!」

「いいや、勝つね!」

「これが我らカオスの力!」

『宇宙最強のチームの、力だア——!』

「ぐ——ガアアツ!!」

二人の叫びと同時。砕かれる王者の絶対防御。

主たる源田はボールから弾かれ、ついに正面突破によるゴールを許

してしまう。

カオスの得点を示すホイッスルが、無慈悲に、高らかに、フィールドに吹き鳴らされたのだった。

王者は孤高とは限らない

幕を開けたカオスとの試合。

前半も未だ半ばというところで、雷門イレブンは一様に言葉を失っていた。

「源田……！」

ベンチで見守っていたアツヤは、信じがたい光景に開いた口が塞がらない。

決して砕けない最強の壁。キング・オブ・ゴールキーパーと謳われた源田幸次郎の帯びてきたイメージであり、積み上げてきた実績だった。

それが砕かれた。如何なるボールも一度捕らえれば逃さない、大きく厚い掌が弾かれ、ゴールへの道を抉じ開けられた。

究極奥義として進化までした彼の最高の技が、正面から破られたのだ。

真・帝国では正気がなかった彼としては、〃キングシールド〃を使って真っ向から負けたのはこれが初めてになるだろう。

王座を死守するために編み出した究極奥義を以てして敗れた。その衝撃は如何程か。

「源田、大丈夫か？」

ゴールネットに突き刺さったボールを見つめたままにいる源田の背に、円堂が声をかける。

「円堂……すまない、しくじった」

「心配するな！ 勝負はまだまだこれからだ！ みんなで攻めて、みんなで守るぜ、源田」

「円堂くんの言う通りだ。ボクたちが、必ず追いついてみせるよ」

「円堂……アフロデイ……ああ。俺も、次は止めてみせる」

二人の言葉に頷いた源田が、拳を握って力強く立ち上がる。

動揺は決して小さくなかったが、チームのゴールを背負う責務を思い起こし、持ち直したのだ。

(対立関係を乗り越えて新たな必殺技を編み出すほどに、彼らはこの

試合に全てをかけている。前回の試合を踏まえれば、源田くん相手に無策で挑んでくるはずがないと予想はしていたけれど……想像以上に苦しい戦いになりそうね)

彼らの温かいやり取りを見守りながら、しかし瞳子は冷静に状況を分析する。

これからもカオスは「ファイアブリザード」を狙ってくるはずだ。防げないならば打たせなければよいと言っても、完全にゼロにすることはできまい。追加点を取られる可能性は残り続ける。

対するこちらは反撃して点を取り返すしかないが、オフエンス時の強力な手札となっていたアフロデイが、ダブル技を破られしまっている。

雷門イレブンの攻撃力は低下した状態にあると言えるだろう。

その中で前半の内に反撃を決め、^{イレブン}同点に持ち込めるかで後半の流れが決まるだろうというのが彼女の見解だった。

「みんな、点を取っていくぞー！」

『おおっ！』

瞳子とほぼ同じことを考えながら、鬼道はそう言ってチームの氣勢を高め、反撃を試みる。

だが、戦いは司令塔たちの見立て通りに厳しいものとなった。

「フロストミスト V2！」

「うわっ！」

クララの凍える息吹を受けて一之瀬の足が止まる。

「フローズンステイル 改！」

「くっ……」

ゴツカの氷のスライディングで豪炎寺が足諸共に凍りかける。

「イグナイトステイル 改！」

「ぐあっ！」

ボンバの燃えるスライディングで、土門が弾き飛ばされる。

雷門の攻撃は、カオスのデイフェンスに悉く阻まれ、ゴールに辿り着けずにいた。

そして守備も一切気が抜けない。

「ウォーターボール V2!」

「ザ・ウォール——うああ!」

「フレームボール V2!」

「ザ・タワー——キャッツ!」

オフエンスが防がれるということは、それだけ敵のオフエンスに移るということ。

雷門のディフェンスは、カオスのまさしく混沌のように凄まじい猛攻に耐えることになった。

士郎と綱海が、ガゼルとバーン、最低でもどちらか片方を常にマークするようにして二度目の「ファイアブリザード」を未然に防いでいるが、彼らは単独のシュートも決して「打たせていい相手」ではない。

「アトミックフレア V2!!」

「キングシールド G2!!」

再び紅蓮の炎がゴールを守る源田を襲う。

これもまた、着実に消耗として彼の身に蓄積していくのだ。

「このままじゃ、源田のやつでも身が持たねーよ……」

「まさか、あの「キングシールド」を正面から破るシュートが出てくるとはな」

観客席では、帝国イレブンが芳しくない戦況を見守って固唾を呑む。

「編み出した「デスゾーン2」も、円堂さんが上がる余裕がなくなっちゃー!」

「ククク……万事休す、ですかね?」

「いや。鬼道なら、必ず突破口を見つけられるはずだ」

多くの声に心配や不安の混じる中、佐久間は毅然とした態度で、新しい一步を踏み出した友を見守っている。

(なにかないのか、突破への糸口は……あいつらに付け入る隙は!)

彼らに見守られる鬼道はいままさに、思考をフル回転させていた。

なんとかかしてシュートにさえ漕ぎ着けられれば望みはあるが、それが非常に困難なのが現状である。

ガゼルとバーンを抑えるためにディフェンスラインが下がっていて、ボールをストライカーまで繋ぐ中盤が手薄なのだ。

折角の円堂リベロも予断を許さない戦況では下手に動かせず、《デスゾーン2》は狙えない。

アフロディは無敵に思われた《ヘブンズタイム》を破られ、中盤での圧倒的な突破力が失われた。

ゴーグルで隠れた目にも焦燥が浮かび出してきた中、眩しい陽光が雲の隙間から差し込んだ。

鬼道は思い出す。同じ日射しの下で、大海原中のキャプテン——音村と戦術について語り合ったことを。

『なるほど。そこに2ビートが加われば、8ビートになる。面白い考え方だ』

『でしよ？ でもそこに16ビートが加われば？』

『……！ 右の守りが甘くなる』

『ビンゴー！』

——簡単なことなのさ。この世はみんな、リズムの調和でできている。

彼は言った。寄せては返す波の音。渡りを謳う鳥の声も、騒がしい人の声にも、それぞれのリズムがあると。

(リズム……！)

一分の隙もないように見えるカオスとて、決して例外ではない。

無敵のように思えるのは、今の自分たちのやり方リズムが彼らのそれに噛み合っていないというだけだ。

いますべきは、彼らのリズムを理解し、それを狂わせる休止符じゃくてんを見出だすこと。

「ウオーターベール V2！」

「ボルケイノカット！ くっ……」

「ドロル！」

サイドから切り込んだドロルと迎え撃つ土門。

必殺技の打ち合いとなって膠着しかけたところで、ネッパ―が走り込んでくる。

彼にパスが回って土門が突破され、カオスの攻撃は途切れない。ネットパーからヒート。ヒートからリオーネ。パスが淀みなく繋がれていく勢いに圧倒されそうになるが、鬼道はその様をゴーグルでつぶさに観察した。

ほんの僅かの違和感さえ見逃すことがないように。

「ガゼル様っ！」

「ノーザンインパクト V2！」

「まだまだッ……！」

そして、次なるシユートと引き換えに、鬼道は光明を見出だした。

「鬼道くん、このままじゃ源田くんが……っ」

「わかっている。みんな、次は——」

「ファイアブリザード」も含めて、もう5発目になるシユート。

ガゼルとバーン、エースが二人に増えたという単純ながらも強烈な変化による前回とは比べ物にならないハイペースの攻撃に、源田の限界を懸念した士郎が鬼道へ駆け寄ったが、彼はそれに落ち着き払って返すのだった。

依然として続くカオスの攻撃。

ゴツカがボールを運んでいくが、今度の雷門のディフェンスは動きが早かった。

「！」

アフロデイと一之瀬が一気に距離を詰め、彼の進路を塞ぐ。

「ゴツカ、こつちよ！」

「やらせないよ！」

その勢いに足が止まりかけるゴツカにクララがパスを呼ぶが、彼女へのパスコースは二人が徹底的に塞いでいた。

空いているのはネットパーの方だ。

「くっ、ネットパー！」

「ああー！」

続いてボールを受けたネットパーの前には鬼道が立つ。

先の二人と同様、凄まじいプレッシャーのディフェンスだった。彼

を相手にしては容易く抜けないどころか、奪われかねない圧がある。
「くっ、リオーネ！」

焦ったネツパーが、コースの空いていたリオーネへ向けてパスをす
ると、

「うおおおりやあーっ！」

彼女が受け取ったのと殆ど同時に、円堂のスライディングが雄叫び
と共に炸裂して、ついにカオスのオフエンスが断ち切られたのであ
る。

「なっ!？」

「鬼道！」

これまでと同じ流れの筈なのにボールが奪われたことに驚くカオ
スの面々を置き去りに、雷門のボールは今試合で初めて、カオスの
ゴールへの接近を成し遂げる。

「いくぞ円堂！ 土門！」

「ああ！」

「見せてやろうぜ！」

ボールと共に向かっていくのが、FWたちではなく鬼道や土門、そ
して円堂であるという不可解さのインパクトも、それを手伝っただろ
う。

彼ら三人でのシュートはこれまでの試合でも全く記録にない。カ
オスが妨害に動くより早く飛び上がった三人が、編み出した必殺技を
放つ。

『デスゾーン——』

それは、帝国の意思統一とは打って代わった、雷門の
個性のぶつかり合いの必殺技。

『2!!』

基となった必殺技である「デスゾーン」と比較しても凄まじいエ
ネルギーは、ボールを核にした巨大な砲弾のようになって、カオスの
ゴールへと降って来る。

「バーンアウト V2!!」

グレントは向かってくるシュートを灰塵に変えてやろうと、猛火の

灯った両の掌、その最大火力を突き出すが、

「オオオ、オオアアーっ!？」

思惑は叶わず。

炎は闇色の砲弾に突き破られ、掻き消され、ゴールを許すことになったのだった。

前半の終了も迫る中で雷門の得点。これで先程の『ファイアブリザード』の失点を取り戻し、両者の状況は振り出しに戻る。

「よっしやあー!」

「決まったな、『デスゾーン2』!」

新兵器が実戦で成果を挙げたことで、俄に活気づく雷門イレブン。

「へっ……一点くらい、また取り返すまでだ!」

これを危険と判断したのか。

キックオフから、バーンは火が着いたような勢いで速攻をかけた。

時間的からして、このシュートが前半最後の一撃になるだろう。雷門のこの活気の火をここで消し止め、後半に持ち込ませまいとして駆ける。

「ガゼル!」

「ああ!」

『ファイアブリザード!!!』

間髪入れずに放ったのは、やはり彼らの最強のシュート。

追加点を狙う混沌の一撃がゴールへ迫る。

「二度はやらせるものか……!」

既に何本もシュートを受けている身体の負担は決して軽くない。しかしゴールを預かる者として、退く選択肢も毛頭ない。

そう決意を漲らせる源田が、シュートを睨みながら腕に力を込めたその時。

「ザ・ウォール 改!」

「ザ・タワー V2!」

抜き去ったバーンたちに追い縋った壁山と塔子の二人が、シュートを前に壁となった。

必殺技は進化し、激しい炎と冷気の渦を塞ぎ止める。

「おおーっ!!」

それでも障壁を破って進むシュートに、さらに立ち塞がったのは円堂だ。

「デスゾーン2」と並ぶ、リベロとなった彼の新たな必殺技。

「メガトンヘッドオー!!!」

巨大な拳が彼の頭から繰り出され、先の二人に代わってシュートを止める。

「ファイアブリザード」はこれまでの戦いの中でも比類なく強力な必殺技であったが、三回に渡るシュートブロックの前には折れることになった。

ボールが弾け飛ぶ。反動で円堂もその場から後ろへ転がり、倒れる。

それらを見届けるような数秒の後、前半終了のホイッスルが鳴り響いた。

「円堂!」

「大丈夫だ。これくらい、なんでもない」

駆け寄った源田に、円堂は立ち上がりとしながら笑いかける。

「それに、言っただろ?」 「みんなで守る」 って」

その言葉に、源田は目を見開いた。

彼の中では「自らが」守るのが主だった。仲間と連携するが、最終的には自分で止めるものだという意識。それぞれの役割に徹して、ある意味では過干渉をしない帝国のチーム思想だ。

対する雷門というチームには、各々がポジションだけに囚われない、自由さがある。

(……なるほどな)

彼らの姿を見てきた数は知れない。

しかしそれでも、内側に加わってみて初めてわかることもある。

「これが雷門か」

「なにか言ったか?」 源田、っと……」

ぼそりとした源田の呟きに、円堂が反応した瞬間。その足がよろめき、姿勢が崩れた。

流石にダメージがあつたのだろう。

そのままでは再び倒れ込むところだったが、力強い手が、彼の手を握る。

「円堂―」

「キャプテン！」

「た、助かった。ありがとな、源田」

「……いや。俺からもありがとう。円堂、財前、壁山」

鬼道や豪炎寺が、その姿に顔を見合せ、頷き合う。

集まってきた雷門イレブンに源田が見せたのは、これまでで一番、温かな微笑み。

（これが、チーム。これが、雷門か……）

前半は同点に終わり、戦況は油断ならない。

それにも拘わらず、アツヤはその光景を見ていて、不思議と口元が緩んでしまったのだった。

激闘の行方はわからない

前半を戦い抜いた雷門のベンチにて、鬼道が仲間たちに注目されながら話を始める。

その内容は後半の動き、特にカオスの攻撃への対処についてである。

「休止符？」

「ああ。とても小さなものだがな」

鬼道は、前半中のカオスのプレーの観察を踏まえた推理を語り出した。

「まず奴らは、ダイヤモンドダストとプロミネンスの混成チームだ。結成から今日までにそう長い時間は経っていない」

「ダイヤモンドダストとの試合だって、少し前のことですよものね」

「ああ。つまり、奴らの連携は急拵えのものだということだ」

夏末の相槌に首肯しながら、彼は続ける。

「そして前半中、奴らのプレーを観ていたが、プロミネンスはプロミネンス同士、ダイヤモンドダストはダイヤモンドダスト同士の連携こそハイレベルだったが、やはりプロミネンスとダイヤモンドダストの組み合わせの連携はやや拙い」

「そうなのか？ 俺には両方スゲーようにしか見えねーけど」

「もちろん同じチームだった仲間同士の連携に比べればの話で、こちらも短い間で相当の特訓をしたのだろう。だが……」

彼らが行ったのは二つのチームの合併。

雷門イレブンのような、一つのチームに仲間を加えていくやり方は規模からして違う。攻防共に戦術は全く違うものになるし、チームメイトのほぼ半分が、お互いに初めて組む相手になるのだ。

精々一週間程度の短い時間で、その連携を元々のチームメイトと同等にまで仕上げるのは不可能だったということである。

「前半で円堂がボールを奪えたのもそのためだ。付き合いの長い仲間へのパスを封じた上で、プレッシャーをかけて新しい仲間へ咄嗟のパスを出させれば、奴らは少しだけ相手への気遣いを忘れる」

パスという行為一つ取っても、送り手と受けとり手の理解が必要だ。

ボールを蹴り出す強さ。狙う位置。タイミング。

慣れ親しんだチームメイトとのものならともかく、最近組んだばかりの相手のそれは、まだ彼らも身体では覚え切れていない。

余裕を奪えばそれらがズレて、彼らのリズムには雑音ノイズが混じり始める。

「パスが乱れば、それを受け取ってから次の行動までのリズムも乱れる。今の俺たちならば、そのズレた動きには対処できるというわけだ」

隙というには些か弱いのが、突けば彼らのリズムを崩す切っ掛けになり得るこれが、鬼道の見出だしたカオスの休止符じやくてんだった。

「つまり後半は、プロミネンスにはダイヤモンドダストへパスを出させて、ダイヤモンドダストにはその逆を仕向けるということだね？」
「その通りだ、アフロディ。そしてボールを奪ったら、間髪入れずに切り込んでいく。円堂、お前も後半は積極的上がってくれ」

「おう、わかった！ 源田、ゴールは頼んだぜ」

「任せてくれ。これ以上点はやらん。壁山、士郎、綱海さん。三人にも、頑張ってもらおうことになるが……」

「はいっすー！」

「うん、大丈夫だよ」

「言われるまでもねえ。大船に乗ったつもりで、どんどん任せろよな！」

「よーし！ 後半、気合い入れるぞ！」

『おうー！』

斯くして、後半戦の方針は定まった。

後は力と気合いのぶつけ合い。激闘の後半戦が、幕を開ける。

カオスはキックオフから、一気に攻め込んできた。

燃え広がる燎原の火、あるいは叩きつける吹雪のような凄まじい勢

いだ。

一步間違えれば勢いに吞まれかねないその状況で、鬼道が走る。向かう先は、ドリブルで上がってきたネツパー。

「……ドロール！」

行く手に現れた鬼道を見た彼は周囲に目を遣る。

相変わらず塞がれている、ヒートプロミネンスやバーンへのパスコース。

「おオーっ！」

その僅かな思考の間にも鬼道の猛スピードのスライディングが来る。

ネツパーは咄嗟の判断で、プロミネンスに比べてマークに隙のあるダイヤモンドダストのメンバーへ、前半同様にパスを出した。

ボールがドロールの下へ届いた直後。

「アイスグラウンド！」

「なっ!？」

狙い澄ました士郎の必殺技で、ドロールは忽ちの内にボールを奪われたのだった。

開幕早々の攻守逆転。カオスの面々が動揺から立ち直る前に、彼らの合間をすり抜けて雷門のFWたちが走り込む。

デイフェンスがアフロディと豪炎寺の二人の対応に回ったところで、ゴールの正面へ円堂が飛び込んだ。

彼へのクロスはパズルのピースが嵌まるように鮮やかに通り、雷門の見事な速攻が叩き込まれた。

「メガトンヘッド!!」

円堂の強烈なヘディングに弾かれたボールがカオスのゴールへと突っ込む。

「やらせねえ……! バーンアウト V2!」

しかし、流石にこの状況で早々に追加点は渡すまいと、グレントがその意地のように燃え上がる炎で、今度はボールを黒炭に変えてみせた。

「くっそー!」

「気を落とすな。まだまだいくぞー!」

確かにこの一撃は決まらなかったが。

鬼道の言葉通り、ここからしばらくは雷門の連続攻撃となった。

「ツナミブースト!」

「ツインブースト!!」

「バーンアウト V2! オオアアーツ!」

前半の仕返しのような怒涛の猛攻。

次々とカオスのボールがカットされ、流れるままにシュートが放たれるためだ。

必死に耐えるグレントだったが、乱され切ったディフェンスはどうとう本命へのパスを許してしまう。

「爆熱ストーム G2!!」

「バーンアウト V2! ……ウグアア!」

ボールを焼き尽くそうと突き出された炎を纏う彼の両手が、それを上回る豪火に焼かれて弾かれた。雷門の2点目である。

「くっ……」

「ガゼル様、バーン様……」

もう後がない。ジエネシスの称号を奪取するという宿願のために、勝つ以外の道がないカオスの面々の表情に不安が走る。

彼らの視線は自然と、チームのエース二人に集まっていた。

「情けねえ面してんじやねえぞ、お前ら!」

「まだ勝負は終わっていない。勝つのは、我々カオスだ……!」

バーンとガゼルは、背に受けるそれらを跳ね返すような、決して諦めない姿を見せる。

そう。ここで勝負を諦めるくらいなら、最初からカオスの結成などしていない。最強の座を諦められないから、こうして彼らは戦っているのだ。

二人の姿に、失点を取り返して逆転しようとカオスが奮い立つ。

最後まで戦い抜こうという彼らの姿に、相對する雷門も手を緩めずに挑む。

このまま追加点で突き放そうと、アフロデイが空へ舞い上がった。
「ゴッドブレイク!!」

そして放たれた、神の必殺技。

金色こんじきの輝きが目前のカオスゴールへ向かう。

「フロストミスト 改！」

クララが凍てつく息吹を浴びせるものの、それでもシユートは凄まじい威力を保って進んでいく。

「くっ……い！」

迫るそれを目の当たりにし、マスクの下で歯噛みするグレント。

また「バーンアウト」を放ったところで、恐らく通用しないだろう。また点を奪われる。

これ以上の失点は、いよいよ敗北が決定的になる。

それは、個々のプライドを捨ててまで勝ちを目指したキャプテンたちの思いが絶たれるということだ。

『おいネツパー、さっきのはどういうつもりだ？ マークが厳しかったヒートに強引にパスするより、リオーネに出して抜ける方が安全に突破できたらう！』

『雷門らいもんごときに負ける寸前だったダイヤモンドダストが、偉そうに指図するんじゃない。バーン様の命令だから「混成カオスチーム」を組んでただけだ。同格なんて思うなよ』

『なに……!?!』

『あの化け物キーパーも知らないで、暢気なものね。試合ほんほん無様を晒すのはあなたの勝手だけれど……私たちがそんなプロミネンスの自滅に巻き込まないでくれるかしら?』

『なんだと?』

『言い過ぎだクララ……』

『あらゴツカ。私間違ってること言ったかしら?』

『やめろみんな！ 俺たちはガイアからジェネシスの座を勝ち取るために手を組んだんだろう、仲間割れをしてる暇なんてない!』

『仲間に見えるかしら、ヒート?』

キャプテン二人はともかくとして、チームメイトたちはまだわだかまりを抱えていたカオス。

燻っていた不満の火が、ある日の練習を切っ掛けに燃え上がり、い

よいよチームが割れそうになったその時。

『てめえらなにやってやがる!』

『お前たち、次の試合の意味を、まだわかっていないのか?!』

カオス結成から数日間、チームを離れて特訓をしていたバーンとガゼルが現れたのだ。

彼らからすればここに至っていがみ合いを起こしているのなど愚の骨頂だった。

もはや言葉だけでは伝わるまい。そうして二人は、源田を打ち破るために編み出した新たな必殺技を見せた。

『ファイアブリザード!!』

二人が組んだ理由はジェネシス、即ち最強の名を自分たちのものにするため。そのために作ったのが、プロミネンスでもダイヤモンドダストでもない新たな一つのチーム。

今すべきことは、プロミネンスだのダイヤモンドダストだのという過去のしがらみで仲間割れを起こすことでは断じてないのだと、プレーを以て示したのだった。

彼らの雄姿に感じ入り、ようやく纏まったカオスというチーム。

確執を乗り越えて力を合わせ、共に勝利を目指す意思の統一。

それは、グレントも例外ではなかった。

『……グレント。次の試合で重要になるのは、我々キーパーだ』
何を当たり前のことを。

カオスのキーパーにはなれなかったベルガの言葉に、そう思うだけだったグレントは今、その言葉の意味を実感している。

向かうところ敵なしと思っていたエースたちのシユートでも、未だに一点しか奪えていない雷門というチーム。

この状況での一点の重み。奪われれば、勝利がその分だけ遠のいていく。

絶対に譲ってはならない一線が、ここなのだ、心を燃やす。

「ハアッ……!」

否。荒々しく燃やすだけではない。燃え上がる一方でボールを前に逸らぬよう、氷のようなクールさを保つ。

二つの思いは、そのまま彼の両手に現れていた。相反する力。それらは綺麗には混ざり合わない。しかし、反発した末にも、強大な力が生まれるのだ。

「カオス……」

弾ける力を受ける腕の負荷は決して軽くない。

それでもグレントは、両腕の力を緩めなかった。

「バーストオ!!」

「なっ——」

「オオオオオオーツ!!」

冷気と炎をぶつけ合うことによる、急激な空気の膨張。

合わせられた腕を中心にした衝撃波によって、アフロデイのシュートは弾き返されたのだった。

この防衛は、先ほどまでの連続攻撃で防いでいたのとは違う、流れを変える契機となる。

「行けエー」

グレントからのボールで、カオスが反撃に転じた。

ボールを持って上がっていくのはドロル。

(……リズムが変わったか!)

鬼道は彼らの変化を悟るが、他の者たちはまだだった。

先ほどまでと同様に止めようとするが、

「行かせない! フレイム——」

「ウォーターボール V2!!」

彼はパスではなく、必殺技による力での正面突破を選択した。

改めてパスを出したのは、一之瀬を抜き去って距離を置いてからのこと。

「くっ……」

カオスは戦術を、パスではなく必殺技、個人技主体に切り替えてきた。

必殺技を積極的に狙ってくるようになれば、先ほどまでのようには行かなくなる。互いに一步も退かない、激しい攻防になった。

「フレイムボール V2!」

「アイスグラウンド！」

「フロストミスト 改！」

「ザ・ウォール 改！」

とりわけ厄介なのが、ボンバとゴツカ、二人の巨漢DFだ。

雷門のボールカットがうまく行かなくなり、正面からディフェンスに挑まなければならなくなると、彼らもその力を遺憾なく見せつけてきた。

「イグナイトステール 改!!」

火炎迸るボンバのスライディングをかわせば、

「フローズンステール 改!!」

軌跡が氷河を描くゴツカのスライディングをかわせない。逆もまた然り。

このコンビネーションは、シンプルながら非常に凶悪だった。

「ノーザンインパクト V2!!」

攻めあぐねる雷門に対し、カオスは再びゴールに手を掛けた。

「キングシールド G2!!」

源田が止めるが、ここに来てガゼルたちも勢いが乗ってきている。

「ざっさとゴールを渡してもらうぞ、源王」

「俺たちは、お前らに勝ってグランの奴も倒さなきゃならないんだ」「……それなら実力でどかしてみせろ。俺はテコでもここを動かんからな……!」

場の空気も熱を持ってきた中で、混沌とした試合はいよいよ、最終局面を迎えようとしていた。